久米島総合調査報告書

— 自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築 —

1994年

沖 縄 県 立 博 物 館

ま　え　が　き

本県は多くの島々からなり、それぞれの島には独自の自然・風土に根ざした個性的な社会・文化が息づいています。

久米島は観光リゾート地として知られていますが、島の自然・風土がまだよく残されている島です。これまで出版された久米島に関するまとまった調査報告としては、法政大学が昭和54年度から３年間にわたって行った「久米島における言語・文化・社会の総合的な研究調査」等があり、いくつかの分野では調査資料の蓄積がかなり進展しています。

しかし、美術工芸や自然、考古分野などでは若干の調査報告があるのみで、基礎的な調査資料は極めて少ないというのが現状です。

折しも、平成５年、久米島具志川村にある重要文化財の上江洲家住宅の修理工事が始まり、考古や建築の分野から大きな関心がもたれました。また、幸いにも同家に伝来する美術工芸品や古文書類が多数当博物館へ寄託されることになりましたが、これらの資料はまだ全貌が明かにされない状態にありました。

このような背景を踏まえて平成５～６年度の２年をかけて、この久米島総合調査が実施されました。

平成７年３月、各調査員から、それぞれ貴重な報告が寄せられ、ここにこの報告書が完成いたしました。大変喜びにたえません。この報告書が久米島研究の書として県民のお役に立てれば幸いです。また、この成果を基に近い将来、博物館で久米島に関する特別展を開催する計画もありますのでご期待下さい。

最後になりましたが、この総合調査に全面的にご協力下さいました具志川、仲里両村の教育委員会並びに、貴重なご指導、ご助言を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成７年３月

沖縄県立博物館

館長　糸　数　兼　治

久米島総合調査論文目次

まえがき ……館長　糸　数　兼　治

久米島総合調査にあたって ……上江洲　　均　1

1　自　然

・久米島地質巡検案内 ……瀬名波　　任　5

・久米島のシダ植物 ……豊見山　　元　12

・久米島の小動物 ……佐　藤　文　保　26

・久米島の鳥類について ……嵩原建二・久貝勝盛・瀬名波　任　65

2　歴　史

・久米島の家譜・位牌にみる系譜観 ……萩　尾　俊　章　96

—上江洲家史料を中心にして—

・「上江洲家文書」について……豊見山　和　行　111

・久米島の沖縄角力 ……前　田　真　之　122

3　民　俗

・久米島の建築儀礼と家・屋敷空間についての覚書 ……赤　嶺　政　信　136

・久米島の塩について ……金　城　　透　145

・民俗社会の基盤－字山里を中心にして－ ……仲　村　昌　尚　154

4　考　古

・久米島の風葬墓人骨 ……土　肥　直　美　169

・久米島後期貝塚の立地状況 ……久手堅　　稔　177

・久米島の国・県指定史跡のグスク ……當　眞　嗣　一　187

—縄張りを中心に—

5　美術工芸

・久米島の染織資料概観 ……柳　悦州・與那嶺一子　205

・上江洲家の書軸 ……池　宮　正　治　216

・久米島の絵画と漆器 ……津波古　　聡　221

・久米島の陶磁器 ……瑞慶山　昇　227

6　建　築

・重要文化財上江洲家住宅の建築と風水 ……屋　部　憲　右　232

久米島総合調査資料編目次

1　歴　史

1）久米島文書資料目録 ……364(1)

・図版 ……363(2)

・上江洲家文書 ……358(7)

・吉浜家文書 ……337(28)

・山里家文書 ……336(29)

・与世永家文書 ……336(29)

2　考　古

・調査資料目録（遺跡分布図、グスク分布図） ……333(32)

3　美術工芸

・資料目録 ……295(70)

・図版 ……267(98)

沖縄県立博物館久米島総合調査　委嘱調査員

自　然：	豊見山　元	沖縄県立北中城高等学校教諭
	佐藤文保	Zero の森の友の会
	嵩原建二	県立博物館
	瀬名波任	県立博物館
	久貝勝盛	県立博物館
歴　史：	池宮正治	琉球大学法文学部教授
	豊見山和行	琉球大学教育学部助教授
	大城将保	県立博物館
	萩尾俊章	県立博物館
	前田真之	県立博物館
民　俗：	赤嶺政信	琉球大学教養部助教授
	上江洲均	文化庁文化財保護部伝統文化課 主任文化財調査官
	仲村昌尚	安岡中学校教諭
	金城透	県立博物館
考　古：	土肥直美	琉球大学医学部助教授
	久手堅稔	久米島コンクリート技師
	當眞嗣一	県立博物館
美術工芸：	柳悦州	沖縄県立芸術大学助教授
	津波古聰	海洋博覧会記念公園管理財団 首里管理センター調査展示係長
	與那嶺一子	県立博物館
	瑞慶山昇	県立博物館
建　築：	屋部憲右	(財)文化財建造物保存技術協会所長

久米島総合調査にあたって

上江洲　　均

位置：　久米島は那覇市の西方98キロメートルの東支那海に浮かぶ周囲53.31キロメートル、面積55.69平方キロメートルの島である。周囲は珊瑚礁が発達し、東方に長さ11キロメートルのウガン崎が伸び、また、西のハンニ崎からは阿良岳に向けて堡礁があり、礁湖は古くから天然の良港となっている。

島は第３期火山帯に属し、北西部には、標高310メートルの宇江城岳を主峰とする山なみがあり、古くは西岳とも呼ばれた。対する東岳は287メートルの阿良岳である。

海上から遠望する久米島は双子山の観を呈する。かって、中国人が亀の姿に見立てたことは故なしとしない。『随書』流求国伝で「龜鼈（くへき）」を久米島とする伊波普猷説はこのことを指している。それは、おもろ詩人が「ふたまた」と呼んだことからも想像できる。中国との往来では、琉球の玄関口の島であったのである。

島の行政：　島の東に仲里村、西に具志川村がある。古くから「久米の二間切」と呼ばれたように、二つの間切からなる。仲里の名称は、古くは中城間切といったが、王子領との関係で使用制限を受け、現在の名称になったといわれている。仲里間切の蔵元は真謝に、具志川間切の蔵元は兼城にそれぞれあったが、いずれも大正時代に比嘉と仲泊に移転して現在に至っている。現在仲里村に17集落、人口5,283人、具志川村に14集落、人口4,555人が生活する（平成７年３月現在）。

歴史：　久米島にいつごろから人が住んだか。西北部の下地原洞穴からは、鹿化石と共におよそ１万8000年前の幼児骨化石が発見されている。貝塚時代は3,500年前の大原貝塚をはじめとして、清水、北原などの貝塚や遺跡が、主として島の西部の砂丘地帯に形成されている。これらの貝塚からは、中国の五珠銭などの古銭が出土するところから、しばしば航海者の来訪を受けていたことが想像できる。

久米島が日本の史書に登場するのは、『続日本紀』の元明天皇の和銅７年（714）の記事である。すなわち太朝臣遠建治等が、奄美・信覚・球美（くみ）等人52人を率いて南島から至った、というものである。球美は久米島のことであるといわれている。

久米島がクミと呼ばれ、「米」のイメージと結びついたのはかなり古いと思われる。史書を見ると、『李朝実録』（1462年）に「仇弥島」、『海東諸国記』（1471年）に「九米島」、『陳侃史録』（1534年）に「古米島」、『夏子陽使録』（1606年）に「粘米山」、『張学礼使録』（1663年）に「弧米」、徐保光の『中山伝信録』（1720年）に「姑米山」となっている。また、『お

もろさうし』に「久米」「くめのしま」とあり、内外ともに一貫して「クミ」または「クメ」と呼んでいたことが分かる。

稲作： 近世の久米島の石高は『琉球国高究帳』によると、仲里間切1,931石（田1,581石、畑349石）、具志川間切1,746石（田1,262石、畑483石）であった。水田の石高の比率は大きく、仲里側で4.5倍、具志川側で2.6倍もあった。そのころまでには山地の各所に、湧水をたよって水田が開かれていた。

特筆すべきことは、当時の為政者が、水利事業に心を砕いたことである。両間切とも17世紀初めには、遠くの川から水を引くための工事を行っている。1609年、具志川間切の西銘新溝は5,220間（9,396メートル）の用水を引いている。それを最長として1608年には仲地溝2,170間、1611年に太田大溝2,220間、1613年、兼城大溝3,240間、1615年、上江洲溝2,170間などはその一例である。溝を引く事業は溜池の建設へと進む。およそ20ケ所ほどの溜池は、18～19世紀にその多くが建設されたもので、現在もそれを補強して利用している。これらの水利事業により、久米島の水田面積は一段と拡大した。

稲作については、良種の稲を発見して普及させた『遺老説伝』記載の儀間村の戸留長武（とるながたき）の記事のように、栽培についても努力が払われている。比屋定に太陽石というのがあり、比屋定の住人が、そこで太陽観測をしたという。その真偽は別としても、稲作につての気象の研究は、特に意を尽くしたようである。稲の播種日の「種子取」について、島の地形や土質・風向などから、４～５通りの播種日が実施されていた。

干拓と集落移動： もう一つの大事業は、湿地の干拓である。17世紀に始まり18世紀に大半が完了し、山地の集落が平地へ下っている。現在の仲里村真謝・宇根・及び泊・謝名堂（じゃなどう）から比嘉・銭田（せんだ）・真我里（まがり）に至る平野部であり、南に面した儀間と具志川村の嘉手苅もそうである。18世紀ごろから集落が移動開始し、完了するのは20世紀に入ってからである。

稲の祭り： ５・６月の稲穂祭・稲大祭は、近年まで行われている。久米島には君南風（チンベー）アムシレラを最高神職として、その下に10人のノロがいた。かつて６月21日は、すべてのノロが君南風殿内に召集され、君真物神の神迎えが行なわれた。隔年で宇江城（うえぐしく）・具志川両城跡詣でも行なわれている。君南風といえば、1500年、八重山のオヤケ・アカハチの乱に首里軍に従い、呪咀合戦により首里軍を勝利に導いた話は有名である。

グスク時代： 話は前後するが、久米島が慶良間・伊平屋と共に中山に入貢したのは、英祖王５年（1264）である。すでに支配者がいたことを窺わせる。しかし、伝承によるグスクの築城は、14～５世紀といわれている。マダフツ按司が築城した具志川城であるが、次の真金声按司の時代に本島系の伊敷索（いしきなは）按司一族に追放される。しかし、伊敷索一族も『球陽』によると、1506年の首里軍の討伐を受けて亡びる。これについて『球陽』の編者は「久米島は古い時代から中山の領地であり、今更討伐は考えられない。按司が善政を布かず、

また謀叛の心があり、貢納を怠ったのではないか」と推測している。租税の未納もさることながら、尚真王の中央集権に従わず、しかも私貿易により利益をあげていたのではないか、と想像する。

具志川の城に、中国や大和の文物が入った様子、および久米のこいしの、しのくりやなどの神女が、真鉄（まがね）や玉類を求めて大和旅をしたことが「おもろ」には謡われている。

久米島紬： 17世紀に坂元宗味と友寄景友が相次いで渡島し、桑の栽培から養蚕、真綿の作り方、紬の染め方や織り方などを指導し、貢納布に仕立てあげた。以来、米の6割以上を代納しているが、貧農の女正頭ほど重い負担を負わされたという不平等の歴史も内包する。明治36年になり旧慣による織物税が撤廃され、その呪縛から解放されるが、逆に技術的に低下する時期があり、明治の末ごろ紬織物を指導する女子工業徒弟学校が創設された。これにより、島の新しい特産品として脚光を浴びるようになる。しかし大正12年に最盛期を迎えたものの、世界恐慌のあおりを受けて減少し、戦時中は一時途絶えることになる。戦後になって、ようやく復活し、県の無形文化財（工芸技術）に指定されて現在に至っている。

入植： 久米島は本島中南部に比べて農地が広いことから、廃藩置県後無禄になった首里那覇の士族の一団が、明治18年に渡島し、開墾を始めたのが具志川村西部の大原・北原である。カイクンという俗称はそのことを物語る。仲里村でも銭田・真我里に那覇から移住があり、真泊（まどまり）・両奥武（おう）島には糸満や渡名喜島などから漁業従事者が移住し、それぞれ新しい村落を作った

開墾入植とは違う事例が、具志川村の鳥島である。元は奄美の徳之島の西に浮かぶ硫黄鳥島の住民であり、旧王国時代、島において硫黄採掘で生計を立てた人々である。それが明治36年、火山の爆発を契機として、農地に余裕のある久米島に移住したのである。同じ琉球文化圏にある島であるが、言語や風俗の違いが見られる。

今後の展望： 従来稲作一辺倒であった農業は、とくに戦後換金作物を求めて、徐々に砂糖きび作になる。さらに1963年の大旱魃が追い打ちをかける形で、稲作の島を砂糖きびの島に変えていった。

また、国の補助による農業基盤整備事業の推進により、耕地が拡大し生産が増大した。一方、豊かな自然は、県立自然公園に指定された。しかし、その後も農業開発が進み、山の樹木の減少と赤土流失による自然破壊も進みつつある。景観の消失ばかりでなく、小動物の絶滅にもつながりかねない、いと危惧するむきもある。

明るい話題としては、両村立の博物館の建設が実現に向けて始動していることである。今後は、自然との調和の下で、新たな文化の創造を心掛ける努力が望まれる。

久米島地質巡検案内

A Guide of Geological Excursion in Kume Island, the Ryukyu archipelago

瀬名波　任

1．はじめに

これは、中学生や高校生がこの報文を片手に久米島を巡りながら、久米島にはどのような地層や岩体があるのか、久米島の成り立ちはどうなっているかを知る事ができるようにとの考えでつくられたものです。

この報文を書くにあたり、中根聰氏及び具志川村教育委員会、野村洋教頭を初めとする久米島高校の皆様、浦添高校の神谷厚昭先生にはたいへんお世話になりました。紙面を借りて御礼申し上げます。

2．島の概況

久米島は那覇の西約100kmにある面積55.69km²・周囲53.31kmの島で、蝶が羽を閉じているようなほぼ三角形の形をした島で、沖縄本島に比べ火山性の岩石が目につく島です。

島の地質図（地表に現れている地層や火山岩体）は図１のようになります。また、地質層序（地層や火山岩体の重なり方）は表１のようになっています。

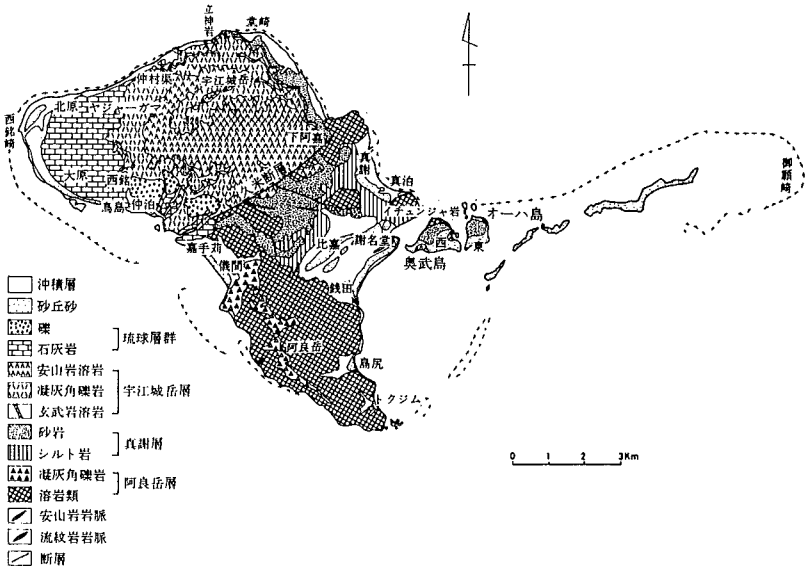


図１　久米島の地質図（1985　木崎　琉球弧の地質誌より）

表１　久米島の地質層序（木崎　琉球弧の地質誌加筆）

地質時代		地層または堆積物		層厚	構成物	絶対年代 ×100万年
第四紀	完新世	海浜低地堆積物 1640-1890,4160,2100,3600			石灰岩・砂・ビーチロック	0.01
	更新世	琉球層群	低位段丘および崖錐堆積物	1～20	砂層・礫層	
			北　原　層	40＋	石灰岩・砂礫	
			オーハ石灰岩	10＋	石灰岩	2.0
第三紀	鮮新世初期	島尻層群	宇江城岳層 4.6，5.5	300＋	溶岩・擬灰角礫岩（玄武岩・安山岩）	
			真　謝　層	90－220	砂質シルト岩・砂岩・礫岩・擬灰岩	12
	中新世	阿良岳層 (6.5)，12.6，17.7		300＋	“グリーンタフ”溶岩・擬灰角礫岩(安山岩・テイサイト)	
先第三紀？		儀　間　層		？	輝緑擬灰岩(擬灰岩質千枚岩)	65？

中川・村上（1975）を一部修正、数字は放射年代（単位は第四紀は年、他はMa）

３．巡検案内

那覇からの飛行機が久米島空港に近づくと、眼下に離水したサンゴ礁が長く続くのが見えてきます。これは、イリビシ石灰岩とよばれ、いまから約6000年前、海水面が全国的に上昇した縄文海進の時にできたものと考えられています。オーハ島の沖合いから御神崎を通る約11kmの御神干もみごとです。これらのリーフは沖縄一（もちろん日本一）の長さです。

空港を出ると近くにはいくつかの採石場があります。こちらの岩石は、大量のサンゴや有孔虫（アメーバー等の原生動物の仲間で、殻に孔があいています…星砂等）等の化石を含んだ、琉球石灰岩(第四紀更新世に堆積した石灰岩で、イリビシ石灰岩のような離水サンゴ礁は琉球石灰岩とはいいません。オーハ島に分布する地層の厚さ10m以上のオーハ石灰岩は含まれます。汚れなどで他の岩石と区別しにくい時は塩酸をかけて泡が出るかどうかをためしてみましょう。琉球石灰岩は鹿児島県トカラ列島の小宝島より南に分布し、沖縄県の約30％はこの岩石といわれています。石灰岩は、久米島のヤジャーガマのような洞穴や玉城村の港川のような割れ目をよくつくり、それを埋める二次堆積物からはゾウやシカ、イノシシ等の化石が出てきます、下地原洞からは、人骨…赤ちゃん、リュウキュウジカ、リュウキュウムカシキョン、ガンカモ類等が知られています）で北原層と呼ばれています（地層の厚さは40m以上あり、ヤジャーガマ石灰岩と大原石灰岩に細分する人もいます)。

近くの畑の中の土を、作物を荒らさないようにのぞいてみましょう。直径数mmから２cm位の丸い粒が見られます。これはマンガン団球といって、土の中のマンガンや鉄・銅・鉛・亜鉛・ニッケル・コバルト等が、雨によっていったん溶けだして再び沈澱したもので、ま

わりにどんどんくっつきながら成長していきます。石灰岩の風化した赤褐色～暗褐色の土壌中によく見られます(オキシフルをかけた時泡がでる事で、マンガンノジュールである事が確認できます)。沖縄本島では親慶原や残波岬等で見つける事ができます。

海岸に出て東に進み具志川城跡の下を通り抜けるとミーフガーに着きます。遠くから見ると、割れ目をはさんだ岩石は同じように見えますが、近寄ってみると海側は石灰岩、陸側は凝灰角礫岩（直径32mm以上の火山岩と大量の火山灰が海底に堆積してできた岩石）である事が分かります。この岩石は宇江城岳層（厚さ300m以上）とよばれ沖縄本島の島尻層群にあたり、鮮新世初期にできた岩石です。（久米島の島尻層群が堆積する様子は図２）

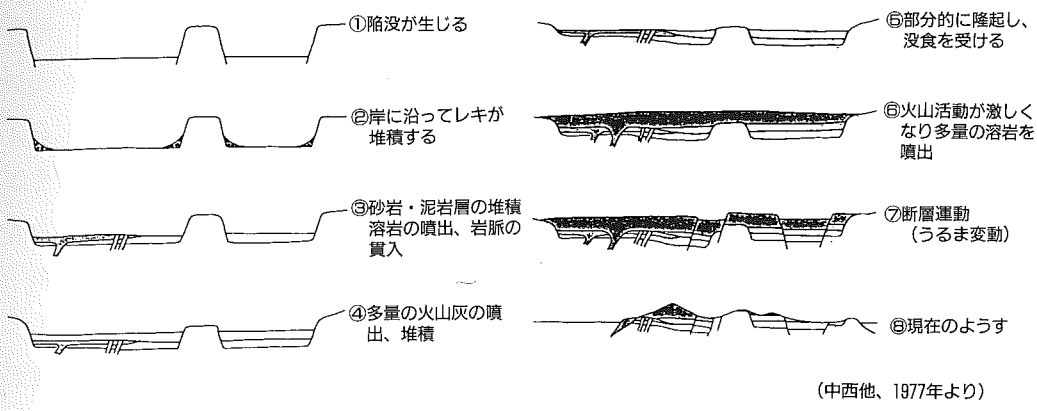
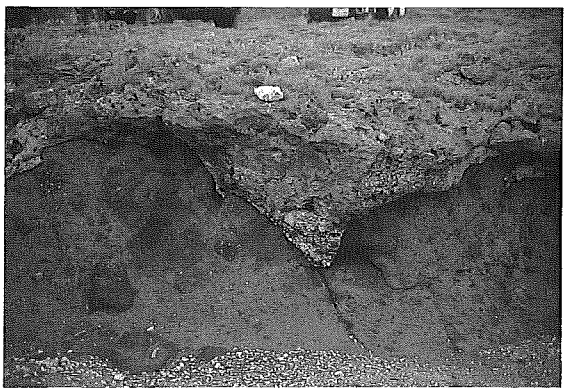


図２　久米島の島尻層群が堆積する様子（神谷　琉球列島の生いたちより）

ミーフガー手前の海岸では凝灰角礫岩の上に不整合（ある地層が堆積してから次の地層が堆積するまでに時間の経過がみられる堆積の仕方）に石灰岩が乗っているのが観察できます。この事から凝灰角礫岩が先にできた（古い）事が分かります。また、この凝灰角礫岩の中には黒緑色の鉱物が入っています。これは輝石です。付近の砂の中からも風化して洗い出された輝石が採集できます。

具志川城跡に上っていく途中の左手の安山岩の崖には、玉ねぎ状構造とよばれる風化の様子が見られます。これは表面の風化がだんだん内側に進み玉ねぎの横断面のような構造になったものです。

市街地に戻る途中、シンリ浜にあるサンリーフリゾートホテルの芝地の下の海岸では、二ヶ所で湧き水が湧いていて、



凝灰角礫岩と石灰岩の不整合

蛇行しながら流れています。しかし、満潮時には海面下に隠れて見えません。

市街地に戻って清水小学校の裏の海岸にある岩を見てみましょう。大きなくびれ（ノッチ）が見えます。二重ノッチといわれていますが、よく見るともっとたくさんのノッチがある事が分かります。ノッチは平均海面にあたるところが最も削られてできるので、昔の海水面の高さが何回か変化した事が分る大切な証人です。



清水小学校裏の二重ノッチ

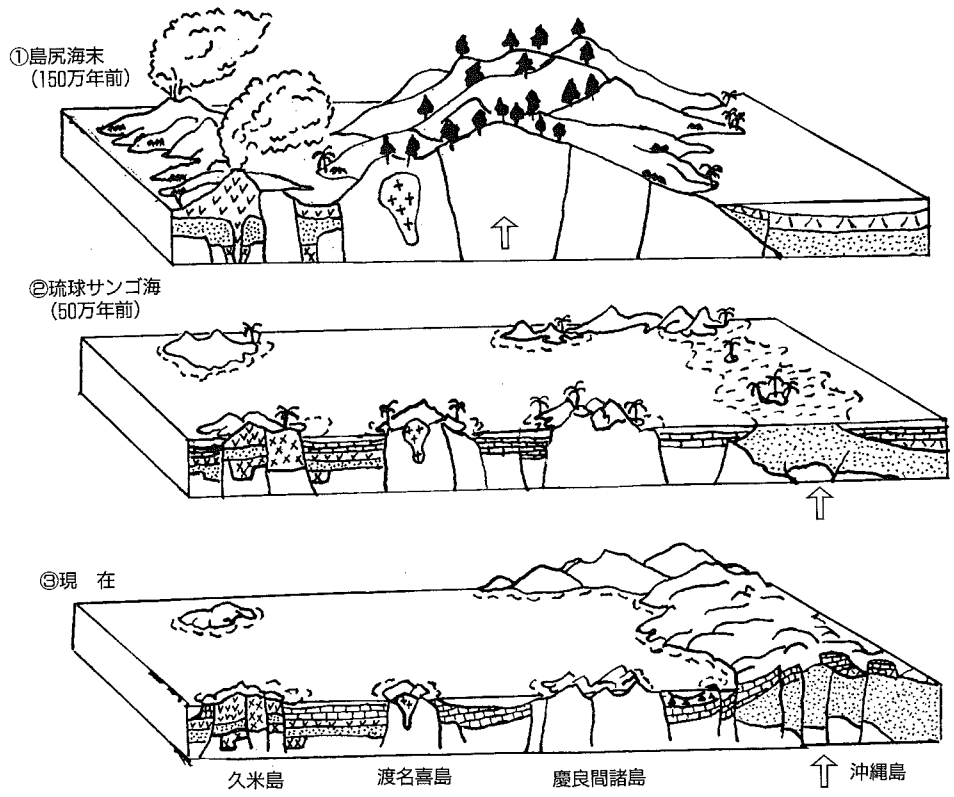


図2　久米島の島尻層群が堆積する様子（神谷　琉球列島の生いたちより）

一周道路で具志川村を抜け仲里村に入り、山城の少し手前の右側の法面を見てみましょう。ここは真謝層と呼ばれる地層（地層の厚さ90～220m）で、宇江城岳層と同じく沖縄本島の島尻層群にあたり、鮮新世初期に堆積した砂質のシルト岩・石灰質砂岩・砂岩とシル

ト岩の互層などからできています。この地層の中には貝類や有孔虫・花粉・炭化木等の化石が見られますが、ここでは黒っぽい部分に炭化木がすぐ見つかります。近くの露頭からはカキの化石、山城・真我里裏の畑の中の崖からは二枚貝が見つかっています。これらの化石等から海の生き物は現在の亜熱帯に近い気候帯、陸の生き物（スギやヒノキ）からは温帯の気候帯が考えられます。この事から、まわりを現在のような暖かい海に囲まれた高い山のある島を考えなければいけなくなります。当時は沖縄本島近くから久米島にかけて、2000m以上あった慶良間諸島をピークとした広い陸地があったと考えられています。(図３)

進路を南にとり島尻に向かうと、部落手前にあるトクジムの石墓の隣に緑色をした岩石が目につきます。これはグリーンタフ変動で中新世に形成された阿良岳層(厚さ300m以上)です。このグリーンタフ変動を受けた岩石は、金や銅を含む事があり、銭田の金山等がその例です。

島尻の部落の西方500m付近からは、変成の後風化によってもろくなった千枚岩が見られ、場所によっては黄鉄鉱も見つかります。これは、久米島で最も古い岩石で儀間層と呼ばれるものです（できた時代ははっきりとは分かっていません)。



奥武島の石畳

再び北に向かい奥武島に行きましょう。ここには昭和42年４月11日に県によって天然記念物に指定された石畳があります。これは、宇江城岳層の安山岩の溶岩が冷えて固まる時、縮んでできたひび割れです。このように火山岩ができる時にできるひび割れを節理と言いますが、この節理は地下数十ｍまでそのままの形で続いていて、引き抜くと鉛筆のような柱の形をしているので柱状節理といいます。これだけの広がりを持った柱状節理は日本でも珍しいものです。残念な事に、海中道路建設の後、海水の流れの方向等が変わり、柱状節理は砂で埋もれ始めています。今後何らかの対策が必要になってくるでしょう。

西に進路をとり阿嘉の髭水の見える展望台に行きましょう。冬の北風が強い日に水量が豊かならきれいな髭ができます。その右手を見ると地層に対して斜めに模様のできた所が目立ちます。これはクロスラミナ（斜交葉理）とよばれ、流れのある所で堆積した時にできる模様です。このクロスラミナは当時の流れの方向を知るための大切な証人です。また、クロスラミナが別のクロスラミナを切っている場合、できた順序や流れの向きの変化を知る大きな手がかりとなります。この地層は真謝層のものです。宇江城岳層との接触面も見られますが、遠いので裏側からみた方がよいでしょう。展望台からもう少し下に降りると、

穿孔貝（石や他の貝に孔をあけてそこに住む貝）によって孔をあけられた岩石も見られます。展望台を出て髭水の裏あたりでは真謝層と宇江城岳層の接触面が観察されます。

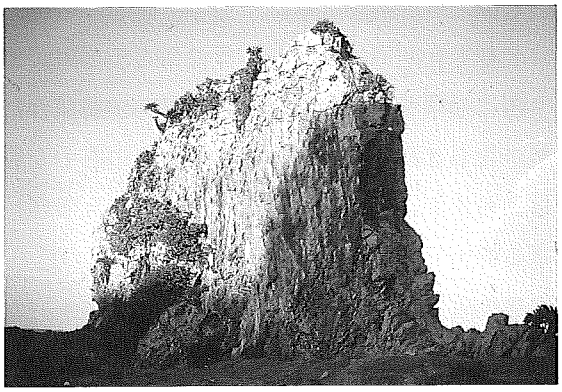
比屋定バンタの少し手前の法面には、具志川城跡付近で見たのと同じ玉ねぎ状構造が見られますが、現在工事中ですのでコンクリートでおおわれてしまうかも知れません。

太陽石（ティーダイシ）は、八重山の星見石と同様に農耕の季節を知るための天体観測の場所ですが、強い磁力を持っています。クリノメーターや羅針盤を近づけてみましょう、針が大きく動くのが観察できます。


クロスラミナ

太陽石から海岸沿いの道に降りて、エビの養殖場の方向に進むとやがて風葬跡が見えてきます。この崖にも阿嘉の髭水と同じくクロスラミナが見られます。少し先の「いっかち」でも見られます、ここは目の前で見えるのでよく見てみましょう。飛び出している層と引っ込んでいる層が見られますね？　これは浸食に強いか弱いかの差です。どちらが強くてどちらが弱いのでしょう？　さらに少し進むと海岸にでます。海岸に下りて転がっている岩を見てみましょう。ホタテガイの仲間がびっしりくっついています。これは真謝層の砂岩の中に含まれた化石が、浸食された岩ごと転げ落ちてきたものです。

道を海岸沿いに引き返しずっと進み堤防の切れるところで海岸に下りてさらに西に進みましょう（牛のフンと足のめり込む湿地に注意しましょう）。きれいな滝が見えてきますが、その次の岬をまわると城の石垣のような岩が目に飛び込んで来ます。これは安山岩の岩脈（マグマが地下の割れ目などに入り込んで冷えて固まったもの）です。よく見ると、その岩脈までの間にも陸から海岸に向かって規模は小さいけど何本かの岩脈があるのが分かります（これは安山岩や玄武岩等の岩脈です）。いくつあるか数えてみましょう。もう一つ岬をまわると壁のような石が二つ並んで見えてきます。これは立神岩と呼ばれ、流紋岩の岩脈ですがまわりの岩石が浸食されて無くなったため屏風のように見えています。二枚の間も浸食で無くなっています。現在でも時々くずれ落ちてきますので注意して観察しましょう。


立神岩

また、まわりの海岸には色々な物が漂着しています。日本製の物が最も多いのですが、外国製のビン・箱等やオオムガイの殻等もたまにみられます。これらを見ながら想いを外国に馳せるのも楽しいものです。

主に一周道路や海岸線に沿って巡検ポイントの案内をしてきましたが、その他の地域もハブに注意しながらまわってみると新しい発見ができると思います。

4．参考文献

沖縄大百科事典刊行事務局（1983），沖縄大百科事典，沖縄タイムス

沖縄県教育委員会（1994）沖縄の文化財Ⅰ

小野・大城・長谷川（1982）沖縄県久米島の下地原洞産ガンカモ類化石，琉球列島の地質学研究第6巻 pp103-105

神谷厚昭（1984），琉球列島の生いたち，新星図書

木崎甲子郎編著（1985），琉球弧の地質誌，沖縄タイムス

久米島高等学校（1993･1994）地学野外巡検案内

久米島のシダ植物

豊見山　元

1．はじめに

沖縄県立博物館の久米島総合調査の一環として、1993年９月10日から12日までと1994年９月15日から17日の日程で２回、久米島のシダ植物相についての調査を行った。

久米島は面積が55.75㎢周囲48kmと沖縄島附属島嶼の中では最も大きく、310mの宇江城岳と離れて287mの阿良岳の２つの大きな山があり、地質や地形も変化に富んでいる。このことは久米島のシダ植物の種類数が増える要因となっている。一方では久米島は人口が多く、過疎化の進む現在でも約3100世帯10000余りの人々が住み、古くから土地の高度な利用がなされ農業や林業が営まれてきた。そのため自然植生も厳しい環境に限定され残されており、森林もほとんどが二次林となっている。特に近年土地改良事業が進められ、部落周辺に残された小規模な林も消えつつある。そのため著者が過去に記録したシダ植物で今回確認できなかったものもいくつかあった。

日本のシダ植物については、倉田悟・中池敏之が（日本のシダ植物図鑑１～７④）のなかでメッシュ状の分布図でシダ植物の分布を点でプロットして表示いるが、メッシュが大きすぎて小地域の細かいデータは充分に反映できていない。琉球列島の植物相の研究史については、初島住彦氏が（琉球植物誌　追加・訂正①）の総論のなかで植物文献目録を含めて詳しく述べていて、この中で久米島の植物の研究史も詳しく述べられている。近年の久米島のシダ植物相の調査研究報告としては、初島住彦、天野鉄夫の両氏による（久米島の植物②）があり、その中に88種１変種のシダ植物が記録されている。この報告書では標本を引用しての植物目録作成がなされているが、他の文献からの引用で標本の有無が明らかでない種もかなり含まれている。詳細な産地を記し標本を引用しての確実な報告としては、芹沢俊介氏の（Pteridophytes of the Ryukyu Islands １～３⑤）と島袋敬一氏の（琉球列島シダ植物分布図集Ⅰ～Ⅲ⑧）があり、久米島のシダ植物の採集記録についても、この中に含まれている。今回の調査はこれらの研究をふまえ新たな情報を加え久米島のシダ植物相の情報の確度をより高くするためと、開発が進行するなかで、本来の植物相を早急に調べておく必要があるために行われた。

2．調査の方法

調査地域は森林、畑地、部落内、海岸断崖など様々な環境を含むように考慮して、選定した。しかし短期間の調査では点と線の調査に終わってしまい、全域をくまなく踏査する

ことはできなかった。

調査は久米島総合調査の自然分野の下記の委員と同行して行った。

久貝　勝盛	県立博物館	1993年	1994年
嵩原　建二	県立博物館	1993年	

(1) 調査地域

a．1993年

宇江城岳と阿良岳の山地森林地帯を中心に採集が行われた。

b．1994年

具志川村のヤジャアガマおよび周辺の石灰岩地帯、仲地部落の林と畑地周辺、仲里村のトクジムの鳥の口周辺、登武那覇城跡周辺、比屋定バンタ下の海岸の断崖、儀間部落の林さらに自動車を用いて島内を周回し調査を行った。

c．1975年から1992年

この間に著者は久米島各地を数回調査を行った。この時の標本は標本番号を付けたのもあるが、付けずにおかれたものもあり、ほとんどの標本は琉球大学に保管されている。標本の一部は島袋（⑧）に引用されている。

(2) 方法

a．生育状況

各調査地で、シダ植物を採集しながら、生育環境や個体密度などを記録した。しかし、複数回出現する種類については2回目以降は記録だけにとどめ採集は行わなかった。

b．目録作成

この報告書のシダ植物目録は、今回の2回の調査と1975年以降の著者の数回の採集記録に、初島、天野（②）の中で標本の引用があるものおよび、芹沢（⑤）、島袋（⑧）の報告を加え作成した。

過去の調査で記録されたが今回同じ場所で確認することができず久米島での消滅が考えられる種類についてものせてある。

採集が困難で証拠標本をつくることができなかったり、調査中記録はしたが採集漏れの植物は産地を記してのせた。

自生は確認することができなかったが栽培品に基ずき産地と採集者がはっきりしている植物はのせた。

目録の中でコメントや番号のあるものは著者の記録でそれ以外は上記（②⑤⑧）の

引用である。

3．調査の結果と考察

著者の調査で久米島から24科41属62種１変種２雑種のシダ植物を確認した。これに初島、天野（②）の中で標本の引用があるもの、芹沢（⑤）および、島袋（⑧）の報告を加えると24科47属81種１変種３雑種になる。（目録は別表）

(1) 今回の調査で久米島で新たに分布が確認されたシダ植物。

Microlepia speluncae (L.) Moore, オオイシカグマ

白瀬ダム上流（5585,10 Sep. 1993),儀間（5700,17 Sep. 1994）

ダムの上流の水田跡と思われる湿地と、畑のそばの小川に生育していた。汎熱帯性のシダで分布の北限は沖縄本島である。沖縄島及び周辺離島ではかなり希なシダ植物である。形態やサイズは変化に富むが久米島の個体は１ m50cm位であった。最近ランや園芸植物などを栽培している大きな温室で鉢に混じって生えているのを見かけることが多く、植木鉢と共に移動している可能性がある。

Thelypteris acuminata X T.parasitica アイノコホシダ

白瀬ダム上流（5608,11 Sep. 1993),儀間（5705,17 Sep. 1994）

２カ所とも林内の川沿いに生育していた。本種はホシダとケホシダの雑種と考えられており葉質や葉身に軟毛が密布している様子はケホシダに似るが、根茎が長く這いはっきりした頂羽片もつことなどはホシダに似る。沖縄島では両種の混生している場所では希ではない。

(2) 久米島から標本の引用を伴わない報告はあるが今回新たに標本を得ることができたシダ植物。

Cyathea lepifera (J.Sm.) Copel. ヒカゲヘゴ

比屋定（5698,17 Sep. 1994）

宇江城岳山麓の斜面に生育。久米島で自生を見かけることはきわめて少ない。しかし庭に植栽している家もあり、地もとで聞くと昔は大きな株があったとのことである。

Lepisorus thunbergianus (Kaulf.) Ching ノキシノブ

仲地（5685,16 Sep. 1994）

仲地や山里部落ではリュウキュウマツや庭のイヌマキやフクギに普通に着生しており珍しいものではない。

Microsorium dilatatum (Bedd.)Sledge　ホコザキウラボシ

白瀬ダム上流（s.n.,11 Sep. 1993）

川沿いの岩の上に着生。この個体は小型で胞子も付いていないが、ホコザキウラボシと同定される。久米島ではきわめて希である。

(3)　分布上注目されるシダ植物

久米島で記録されたシダ植物のうち個体数の少ないものや県内では限られた地域にしか分布していないものに次のような植物がある。

Selaginella tamariscina　イワヒバ

沖縄諸島では海岸近くの断崖など限られた場所に生育。個体数もきわめて少ない。

Helminthostachys zeylanica　ミヤコシマハナワラビ

沖縄諸島では沖縄島と久米島だけに分布する。林内に生育し個体数はきわめて少ない。久米島ではムカジグサ（根茎がむかでに似ているからか）と称し解毒作用があるということで薬草として利用されていた。

Angiopteris palmiformis　ナンヨウリュウビンタイ

八重山諸島ではよく見かけるが沖縄諸島では少ない。久米島では白瀬ダム周辺で見られた。リュウビンタイを大型にしたようなシダであるが区別の難しい個体もある。ホソバリュウビンタイの別名がある。

Osmunda japonica　ゼンマイ

久米島からの玉木拡氏の採集が沖縄県内からの唯一の記録である。

Schizaea dichotoma　カンザシワラビ

久米島で最初の採集は久米島出身の植物研究家喜久里教達氏によるものである。この久米島での標本はSchizaea kikuzatoi Ogataのタイプ標本となっている。

Nephrolepis auriculata X N.biserrata　ヒメホウビカンジュ

タマシダとホウビカンジュの雑種であるが、両種の混在する場所でも出現することは希である。久米島では1976年にセンダンの木に着生しているものと道路沿いの土手に生育しているものと、2カ所で記録したが、今回の調査では2カ所とも開発により変化しており確認できなかった。

Asplenium nidus L.　シマオオタニワタリ

初島、天野（②）で標本を引用しての報告があるがそれ以後の報告がない。このシダは沖縄ではかなり希なシダである。よく似た種類に沖縄に広く分布しているA.australasicum (J.Sm.)Hook.ゴウシュウタニワタリ（リュウキュウトリノスシダ・ミナミタニワタリ）があるが、その当時は未だ一般に認識されておらずA.nidusシマオオタニワタリとして扱われることが多く、この報告もA.australasicumの可能性がある。

Dryopteris varia　ナンカイイタチシダ

酸性土壌の林縁部に生育するが、不思議なことに沖縄島では森林の発達した本島北部では見られず中部や那覇に希に分布する。久米島では多い。

Tectaria simonsii　カレンコウアミシダ

鍾乳洞の屋根が落ちてできたドリーネ状の窪地に20株くらいが生育。県内での自生地はほとんどが石灰岩地である。

Thelypteris dentata　イヌケホシダ

1976年には仲地、具志川の部落内や周辺の林でかなり見ることができた。今回の調査では、同じ場所から観察することができなかった。イヌケホシダもオオイシカグマと同じように鉢とともに移動し各地の温室や園芸場でよく見られる。久米島では移入種が一時的に広がり、消えた可能性がある。

Lepisorus uchiyamae　コウラボシ

沖縄県では沖縄諸島にのみ分布しているが、不思議なことに沖縄島には記録がなく周辺離島の伊平屋、慶良間諸島と久米島からしか知られていない。

初島・天野（③）では琉球列島から257種21変種18雑種のシダ植物をのせているこれを基にすると、久米島には琉球列島に産するシダの約3分の1が産することになる。

他の地域と比較すると（表1）のようになる。久米島より広大な沖縄本島島尻地方と比

較すると、ほぼ同数で種類構成も似ているが、島尻の記録は戦前の記録を含んでおり、現在確認できるのは約60種である。

表1　科ごとの久米島での出現数と他の地域との比較

シダ植物の科	久米島	沖縄島尻⑩	恩納岳⑪	宮古諸島⑥
マツバラン科	1	1	1	1
ヒカゲノカズラ科	1	1	2	1
イワヒバ科	4	2	4	
トクサ科		1		
ハナヤスリ科	3	2	1	2
リュウビンタイ科	2		2	
ゼンマイ科	2	1	1	
ウラジロ科	1	1	1	1
フサシダ科	2	1	1	1
コケシノブ科	3	2	6	
ヘゴ科	3	3	3	
タカワラビ科			1	
コバノイシカグマ科	3	4	4	4
ホングウシダ科	5＋1変種	5＋1変種	6	2
ツルシダ科	5＋1雑種	3＋1雑種	3	3＋2雑種
ホウライシダ科	3	5	3	2
イノモトソウ科	7	8＋1雑種	5	7
チャセンシダ科	2	5	4	2
シシガシラ科	2	1	2	
ツルキジノオ科	1	1	2	
オシダ科	9	11	10	3
ヒメシダ科	9＋1雑種	7＋1雑種	10	2
メシダ科	3	5	12	
スジヒトツバ科	1	1	1	
ウラボシ科	9＋1雑種	8＋1雑種	9＋1雑種	2
デンジソウ科	1	1	1	1
アカウキクサ科		1	1	
	81種	80種 (戦後は60種記録)	92種	34種

久米島の宇江城岳（範囲の取り方にもよるが今回の調査で42種記録）と恩納岳はほぼ同

じ標高であるが、恩納岳は山地と水田周辺だけの調査だけで92種記録されている。これに部落周辺や海岸、石灰岩地のシダをを加えるとさらに種数は多くなる。恩納岳と比較して目立つのは久米島は山地性のシダや河川や渓流のシダの種類数がかなり少なく貧弱である点である。これは宇江城岳が岩石が多く乾燥しているためであると思われる。しかし森林や大きな河川の少ない宮古諸島に比べると、種類数ははるかに多い。以上3地域との比較は、シダ植物の分布は地史的要因にもよるがそれ以上に生育地の地質を含む現在の環境要因を反映しているとの考えとよく符合している。

4．おわりに

今回の調査の際に地図を準備してくださったり、様々な便宜を取り計らってくださいました具志川村教育委員会の山里昌村教育長をはじめとする皆さま、地図をいただきました仲里村の職員に感謝申し上げます。

参考文献

①初島住彦，1975.琉球植物誌（追加・訂正），那覇.
②初島住彦・天野鉄夫，1974.久米島の植物．久米島県立自然公園候補地学術調査報告.
③初島住彦・天野鉄夫，1994.琉球植物目録．沖縄生物学会，沖縄・西原.
④倉田悟・中池敏之，1979～1994．日本のシダ植物図鑑．１～７．東京大学出版会,東京.
⑤ Serizawa, S., 1975. 1977. 1978. Pteridophytes of the Ryukyu Island (1-3). Sci.Rep.Takao Mus. 7:1-53. 8:1-30. 9:1-24, Tokyo.
⑥島袋敬一，1976.琉球列島付属島嶼のシダ植物相 2.宮古諸島．琉球大学理学部紀要. 22：63-78
⑦島袋敬一，1981.琉球シダ植物目録，那覇.
⑧島袋敬一，1984.1984.1985.琉球列島シダ植物分布図集．琉球大学理学部紀要. 38：131-168．39：101-169．40：53-126,沖縄・西原
⑨島袋敬一，1990.琉球列島維管束植物目録．ひるぎ社，那覇.
⑩豊見山元，1979.沖縄島島尻地方のシダ植物相．琉球大学生物学科課題研究.
⑪豊見山元，1986.恩納岳と周辺地域のシダ植物．沖縄生物教育研究会誌19号.

注：本文中では特に留意すべき文献については初回は省略せずに記したが2回目以降およびその他の文献については番号で省略した。

久米島シダ植物目録

Fern flora of Island Kumejima the Ryukyus

PSILOTACEAE　マツバラン科

Psilotum nudum (L.) Beauv.　マツバラン(白瀬ダム付近でイタジイに着生)

LYCOPODIACEAE　ヒカゲノカズラ科

Lycopodium cernuum L.　ミズスギ 5590,5590,5678

SELAGINELLACEAE　イワヒバ科

Selaginella doederleinii Hieron.　オニクラマゴケ 5599

Selaginella involvens (Sw.) Spring　カタヒバ

Selaginella lutchuensis Koidz.　ヒメムカデクラマゴケ 412,972

Selaginella tamariscina (Beauv.) Spring　イワヒバ 5691(鳥の口、神里秀市採栽培品)

OPHIOGLOSSACEAE　ハナヤスリ科

Helminthostachys zeylanica (L.) Hook.
(仲地の上溝の池での採集の栽培品を見る)　ミヤコジマハナワラビ

Ophioglossum petiolatum Hook.　コヒロハハナヤスリ 971

Ophioglossum thermale Komaarov　ハマハナヤスリ 5597

MARATTIACEAE　リュウビンタイ科

Angiopteris lygodiifolia Rosenst.　リュウビンタイ 445,5699

Angiopteris palmiformis palmiformis　ナンヨウリュウビンタイ 974,5586,5618

OSMUNDACEAE　ゼンマイ科

Osmunda japonica Thumb.　ゼンマイ

Plenasium banksiifolium (Pr.) Presl　シロヤマゼンマイ 405

GLEICHENIACEAE　　ウラジロ科

Dicranopteris linearis (Burm.f.) Underw.	コシダ 425

SCHIZAEACEAE　　フサシダ科

Lygodium japonicum (Thunb.) Sw.	カニクサ 438
Schizaea dichotoma (L.) Sm.	カンザシワラビ

HYMENOPHYLLACEAE　　コケシノブ科

Crepidomanes insigne (v.d.Bosch) Fu	アオホラゴケ
Gonocormus minutus (Bl.) v.d.Bosch	ウチワゴケ
Microgonium tahitense (Nadeaud) Tindale	ゼニゴケシダ

CYATHEACEAE　　ヘゴ科

Alsophila denticulata Bak.	クサマルハチ
Alsophila spinulosa (Wall.ex Hook.) Tryon	ヘゴ 5581
Sphaaeropteris lepifera (J.Sm.ex Hook.) Tryon	ヒカゲヘゴ 5698

DENNSTAEDTIACEAE　　コバノイシカグマ科

Hypolepis punctata (Thunb.) Mett.ex Kuhn	イワヒメワラビ 439,981
Microlepia marginata (Panzer) C.Chr.	フモトシダ 5601
Microlepia speluncae (L.) Moore	オオイシカグマ 5585,5700
Microlepia strigosa (Thunb.) Presl	イシカグマ 5697
Pteridium aquilinum (L.) Kuhn	ワラビ（各地）

LINDSAEACEAE　　ホングウシダ科

Lindsaea chienii Ching	エダウチホングウシダ
Lindsaea japonica (Bak.) Diels	サイゴクホングウシダ
Lindsaea orbiculata (Lam.) Mett.ex Kuhn	マルバホングウシダ 414,4
Lindsaea orbiculata	シンエダウチホングウシダ
var commixta (Tagawa) Kramer	410,413,424,430,435,5598,5612
Sphenomeris biflora (Kaulf.) Tagawa	ハマホラシノブ 417,5679
Sphenomeris chinensis (L.) Maxon	ホラシノブ 416,426,5603,5677

OLEANDRACEAE　ツルシダ科	
Nephrolepis auriculata (L.) Trimen	タマシダ（各地）
Nephrolepis biserrata (Sw.) Schott	ホウビカンジュ（各地）
N. auriculata x N. biserrata	ヒメホウビカンジュ 431,446
PARKERIACEAE　ミズワラビ科	
Adiantum capillus-veneris L.	ホウライシダ 5676
Adiantum flabellulatum L.	オキナワクジャクシダ 5681
Ceratopteris thalictroides (L.) Brongn.	ミスワラビ 5680
PTERIDACEAE　イノモトソウ科	
Pteris cadieri Christ	カワリバアマクシダ 5596
Pteris disper Kunze	アマクサシダ 973,5605
Pteris ensiformis Burm.	ホコシダ 5686
Pteris fauriei Hieron.	ハチジョウシダ 428,5602
Pteris multifida Poir.	イノモトソウ 4470
Pteris ryukyuensis Tagawa	タュウキュウイノモトソウ 404,979
Pteris semipinnata L.	オオアマクサシダ 441,5607,5704
ASPLENIACEAE　チャセンシダ科	
Asplenium australasicum (J.Sm.) Hook.	リュウキュウトリノスシダ 444,5613
Asplenium nidus L.	シマオオタニワタリ
BLECHNACEAE　シシガシラ科	
Blechnum orientale L.	ヒリュウシダ 5701
Woodwardia orientalis Swartz var.formosana Rosenst.	ハチジョウカグマ 406,5604
LOMARIOPSIDACEAE　ツルキジノオシダ科	
Bolbitis subcordata (Copel.) Ching	ヘツカシダ 5593
DRYOPTERIDACEAE　オシダ科	
Arachniodes aristata (Forst.)Tindale	ホソバカナワラビ

Arachniodes sporadosora (Kunze)Nakaike	コバノカナワラビ 442,5589,5609
Cyrtomium falcatum (L.f.)Presl	オニヤブソテツ （各地）
Dryopteris sordidipes Tagawa	ヨゴレイタチシダ 401,415,5594,5614,5690
Dryopteris varia (L.)O.K.	ナンカイイタチシダ 409,5684
Ctenitis subglandulosa (Hance)Ching	カツモウイノデ 433,443,5617
Tectaria decurrens (Pr.)Copel.	ナナバケシダ
Tectaria devexa (Kunze)Copel.	ウスバシダ 5693
Tectaria simonsii (Bedd.)Ching	カレンコウアミシダ 980,5692

THELYPTERIDACEAE　ヒメシダ科

Pronephrium simplex (Hook.) Holtt.	ヒトツバコウモリシダ 5689
Pronephrium triphylla (Sw.) Holtt.	コウモリシダ 418,5582,5703
Stegnogramma posoi ssp.mollissima(Fischer ex Kunze)K.Iwats	ミゾシダ
Thelypteris acuminata (Houtt.)Morton (T.truncata)	ホシダ（各地）
	オニホシダタイプ 434
Thelypteris angustifrons (Miq.) Ching	コハシゴシダ 419,440
Thelypteris dentata (Forsk.) St.John	イヌケホシダ 420,437
Thelypteris interrupta (Willd.) K.Iwats.	テツホシダ 403,5584,5687
Thelypteris parasitica (L.) Fosberg	ケホシダ 423,5702
Thelypteris torresiana (Gaud.) Alston	アラゲヒメワラビ 982,5696
T. acuminata x T. parasitica	アイノコホシダ 5608,5705

ATHYRIACEAE　メシダ科

Deparia petersenii (Kunze) M.Kato	ナチシケシダ 411,5587
Diplazium pullingeri (Baker) J.Smith	ハンコクシダ
Diplazium subsinuatum (Wall.)Tagawa	ヘラシダ 407,5616

CHEIROPLEURIACEAE　スジヒトツバ科

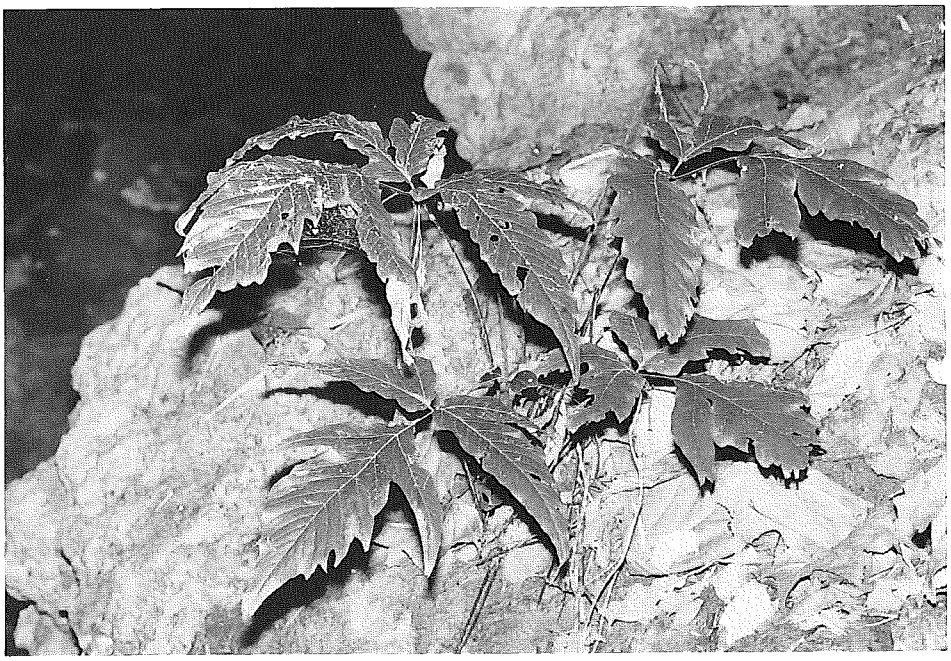
Cheiropleuria bicuspis (Blume)Presl	スジヒトツバ 5600

POLYPODIACEAE　　ウラボシ科

Colysis pothifolia (Don)Presl	オオイワヒトデ 402,5694
Colysis wrightii (Hook.)Ching	ヤリノホクリハラン 427,5583,5688
Colysis megalolepis Tagawa	ヒトツバイワヒトデ
Lemmaphyllum microphyllum Presl var.obovatum (Harr.)C.Christensen	リュウキュウマメズタ 429,5611,5682
Microsorium hancockii (Baker)Ching	ホコザキウラボシ(s.n. 11 Sep. 1993)
Microsorium rubidum (Kunze)Copeland	タカウラボシ
Microsorium scolopendria (Burm.)Copeland	オキナワウラボシ（比屋定海岸）
Pleopeltis thunbergianus Kaulfuss	ノキシノブ 5685
Pleopeltis uchiyamae (Makino)Ohwi	コウラボシ 983
Pyrrosia lingua (Thunb.)Farwell	ヒトツバ

MARSILEACEAE　　デンジソウ科

Marsilea crenata Presl	ナンゴクデンジソウ 5695



1. Tectaria simonsii カレンコウアミシダ (Dryopteridaceae)
具志川村仲地の鍾乳洞



2. Ceratopteris thalictroides ミズワラビ (Parkeriaceae)
具志川村西銘のミズイモ田



3．Dryopteris varia ナンカイイタチシダ（Dryopteridaceae）
具志川村仲地の川沿い



4．Microlepia speluncae オオイシカグマ（Dennstaedtiaceae）
仲里村儀間の山地

久米島の小動物

佐藤　文保

自然の概況

久米島は、沖縄島（那覇）より西北西方向におよそ100km離れた島で水深200m線で沖縄島と連なる島である。高島、低島混在帯に属し、309.5mの宇江城岳、287mのアーラ岳を中心とする新第三紀系の火山性起源の地層や真謝や阿嘉周辺の島尻層、さらに空港から北原、大原を経て五枝松近くまで広がる琉球石灰岩の地層が見られる。植生も地層にほぼ対応し石灰岩地の植生と非石灰岩地の植生に二大別され、海岸には海浜植生も見られ、儀間川河口には、マングローブ林が発達している（図１）。

しかし、石灰岩地域の大部分は土地改良事業によって畑地となり、森はほとんど残されていない。非石灰岩地の火山性起源の地層や島尻層でも畑地化が進み、宇江城岳やアーラ岳周辺でまとまったイタジイ林が見られるだけである。他は、リュウキュウマツ林に変わっており、徐々に遷移は進んでいるものの、下草刈りや低木等の間伐も激しく林床は乾燥し、イタジイ林も含めて人為的影響は大きいと思われる。

河川（図２）は、白瀬川（長さ5.3km，流域面積7.0km²）、銭田川（長さ4.7km、流域面積8.0km²）、儀間川(長さ4.2km、流域面積6.5km²)、浦地川、スハラ川などの小河川が多く、沖縄島の比謝川（長さ13.4km、流域面積50.2km²）よりはるかに規模が小さく、奥間川（長さ5.2km、流域面積6.6km²）や牧港川（長さ5.3km，流域面積7.3km²）にほぼ匹敵する大きさである。これらの河川は、不透水性基盤となっている非石灰岩地の地層に発達しており、石灰岩地には河川の発達は見られない。そのため、非石灰岩地と石灰岩地との境で表流水の消失する場所も見られる。上記代表的河川のすべてに、ダムや堰（池となっている）がつくられ、ダムは、貯水池の水量変動が激しく水辺植物は単純である。池には、ダンチク、セイコノヨシ、ヒメガマ、パラグラス、タイワンアシカキ、タヌキアヤメ、チゴザサなどの湿地性植物、イヌクログワイ、ミズオオバコ、コナギ、ホッスモなどの水生植物などの群落の発達が見られる。

また、近年の土地改良事業や道路工事等による河川への赤土や土砂の流入は激しく、ダムや池、あるいは、河川下流域や干潟はその影響を強く受けつつある。

調査方法

調査は、次のように５回おこなった。(1994年３月28日～31日、７月12日～15日、９月23日～25日、11月４日～８日、12月28日～31日)。採集用具が多く車を搬入したため、前後の



図1　久米島の自然の概況

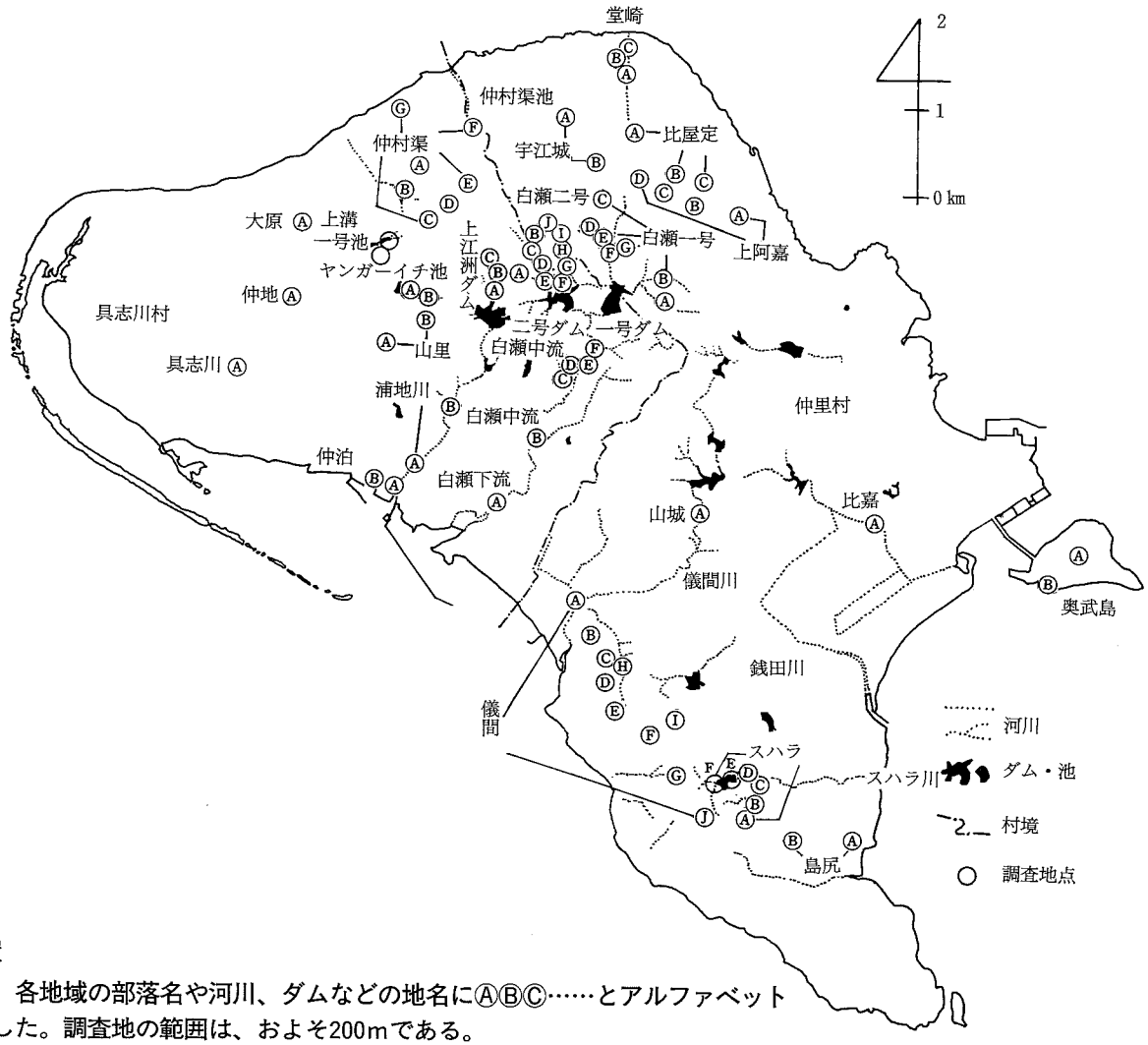


図2　調査地の位置

調査地点名は、各地域の部落名や河川、ダムなどの地名にⒶⒷⒸ……とアルファベットを付けて区別した。調査地の範囲は、およそ200mである。

2日間は、移動のために費やされた。

調査は、島内80ヶ所を各河川、道路、草地、森など定められた範囲を隈無く歩き、出現する動植物を野帳に記入して行った。必要な範囲でビーティング（たたき網）やスィーピング（捕虫網ですくう）も行い、水辺では、たも網（0.15㎜）やネット（定量採集用）も用いた。夜間、懐中電灯を利用しての調査やブラックライト(40w、1本)、蛍光灯(40w、1本）を利用して夜間採集も行った。天然記念物や鳥類、ホ乳類以外の全ての出現種についての最小限の標本、あるいは定量採集時の標本、同定等のために必要な標本を保持するよう努めた。

今回は、これらの調査をもとに、種についての分布表を作成した(表1～表23)。表に記されている種および亜種についての詳細なデータは、後日、琉球の昆虫等に掲載する予定である。

尚、1995年4月29日～5月3日までの調査の記録も一部含まれている。

久米島の小動物

今回記録された種類数と調査の目的

今回の調査で、鳥類10目21科35種、爬虫類2目9科13種、両生類1目3科6種、魚類5目10科21種、腹足類4目14科18種、甲殻類2目8科29種、多足類1目1科1種、クモ類1目12科46種、昆虫類17目142科505種の計43目220科674種類を記録した。

今回行った久米島総合調査の目的は、1996年の大久米島展に向けての資料集収とデータの集積および久米島の小動物が島のどの様な環境で生息しているかを知るために行った。島は、海によって隔てられているとは言っても、人や物資の移動が容易で、各種の開発も沖縄島と同様に激しく行われている。島の面積が小さいだけに、沖縄島以上に自然環境が変貌しやすく、在来種が激減あるいは全滅したり、新たな移入種の増加によって島の生物相が変化してしまう危険度が高い。これらの島の生物相の変化を追う上でも、現状の把握は必要である。今回は、少ない調査日数ではあるが、数多くの小動物を対象に島の様々な環境の生息の状況を調べた。以下その結果を報告する。

久米島のゴキブリとシロアリ（表1）

久米島のトンボ（表2）

久米島は、水田が見られないために島内に広く分散した池や河川のゆるやかな流れや砂防ダム等にトンボが生息している。草地や湿地、池、ゆるやかな流れの河川などで生活するトンボは、平地および疎林的環境に生息するものを合わせて25種類に達する。久米島で記録のない種類は、飛来種（迷トンボ）の3種（1亜種）と飛来定着種の3種だけである。これらの多くは、今後、久米島にも飛来する可能性も高く、発見の機会さえあれば記録さ

表1　久米島のゴキブリとシロアリ、その生息環境

森のゴキブリとシロアリは、立枯木や朽木、落葉落枝を粉砕し、分解する重要な役割をはたしている自然環境指標種である。

見つかった種類 ＼ 調査地	二次林												自然林				今回確認された生息場所
	石灰岩地林	リュウキュウマツ林			リュウキュウマツ－イタジイ林								イタジイ林				
	大原A	浦地川A	浦地川B	白瀬中流D	白瀬中流F	ヤンガーイチA	上滝一号A	上滝一号B	白瀬二号CDE	白瀬二号HI	白瀬一号E	宇江城B	スハラA	上江洲ダムA	スハラC	スハラE	スハラF	
ゴキブリ目																	
安定した森－林縁－畑地 リュウキュウクチキゴキブリ								●		●				●		●		イタジイ、リュウキュウマツの倒朽木内
安定した森－林縁－畑地 マダラゴキブリ			●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●		●	成虫は、枯枝葉内や樹皮下、若虫は河川の転石落葉下
安定した森－林縁－畑地 オキナワオオモリゴキブリ									●					●				朽木上、枯枝葉内
安定した森－林縁－畑地 チビゴキブリ															●			落葉下
安定した森－林縁－畑地 ウルシゴキブリ					●	●		●			●			●			●	樹皮下、析幹のすき間など
安定した森－林縁－畑地 サツマゴキブリ	●	●					●	●								●		成虫は石灰岩、立朽木等のすき間、樹皮下、若虫は落葉下
安定した森－林縁－畑地 リュウキュウモリゴキブリ									●									枯枝葉内
安定した森－林縁－畑地 アミメヒラタゴキブリ			●			●												枯枝葉内や葉の裏面
安定した森－林縁－畑地 ウスヒラタゴキブリ	●					●	●		●		●	●		●		●		枯枝葉内や葉の裏面
安定した森－林縁－畑地 オガサワラゴキブリ									●								●	落葉下、うろ内の土壌中
シロアリ目																		
林内 カタンシロアリ								●										生木内、倒木
林内 ヤマトシロアリ								●					●			●		倒朽木など
林内 イエシロアリ					●			●	●							●	●	立朽木、朽木など

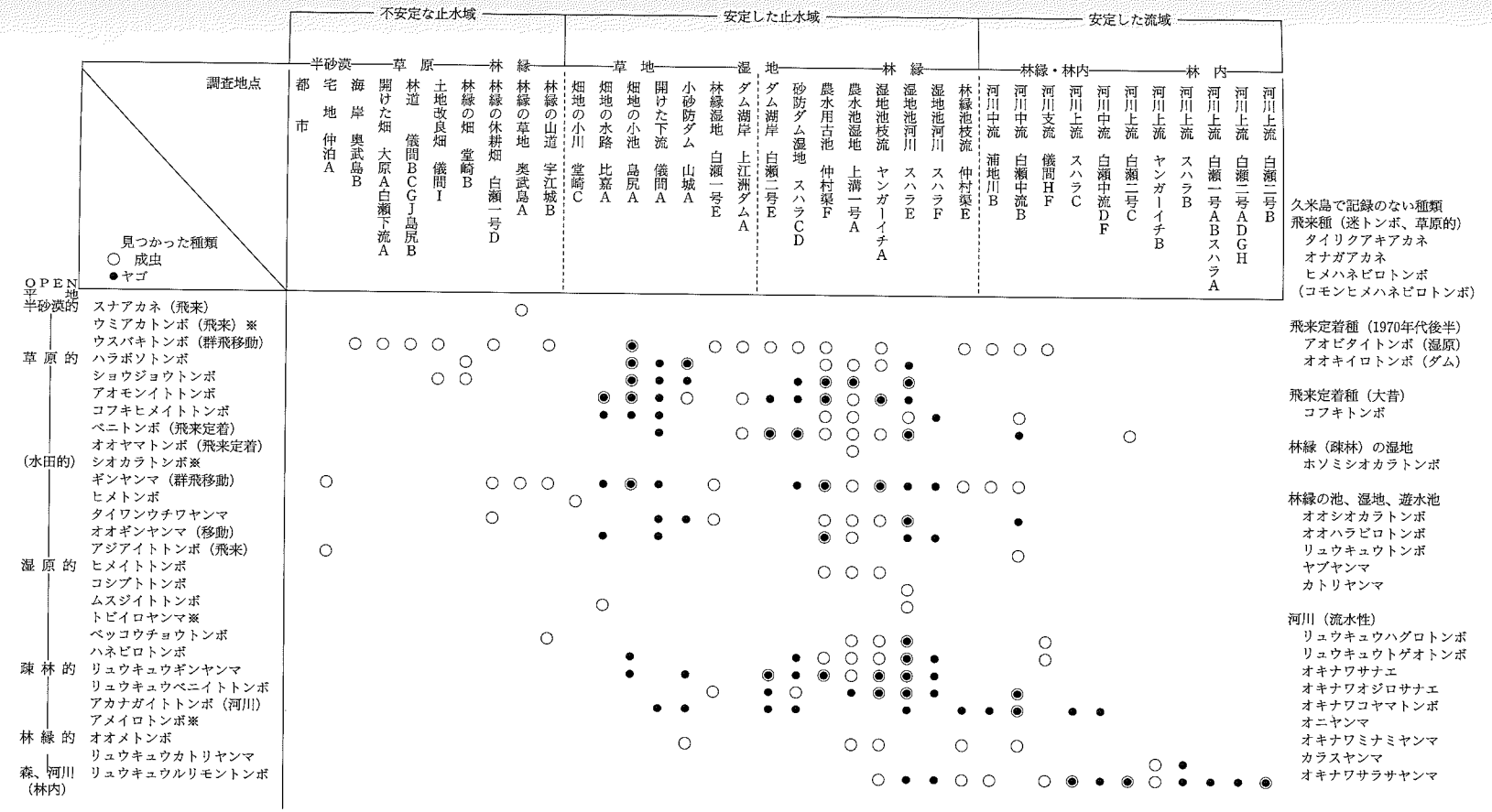
◎　ミナミヒラタゴキブリが朝比奈（1991）に、ワモンゴキブリ、ヒメチャバネゴキブリが高良・東（1974）にそれぞれリストされている。ダイコクシロアリが高良・東（1974）にリストされている。

◎　ゴキブリは、今回新たに9種類確認した。これまでの記録と合わせると久米島には13種類が生息する。

◎　シロアリは、今回カタンシロアリを確認した。これまでの記録と合わせると計4種類が生息する。

◎　沖縄島には、ゴキブリが22種、シロアリが6種類生息している。久米島にはまだ未確認の種類が多く生息すると思われる。

表2　久米島のトンボと生息環境



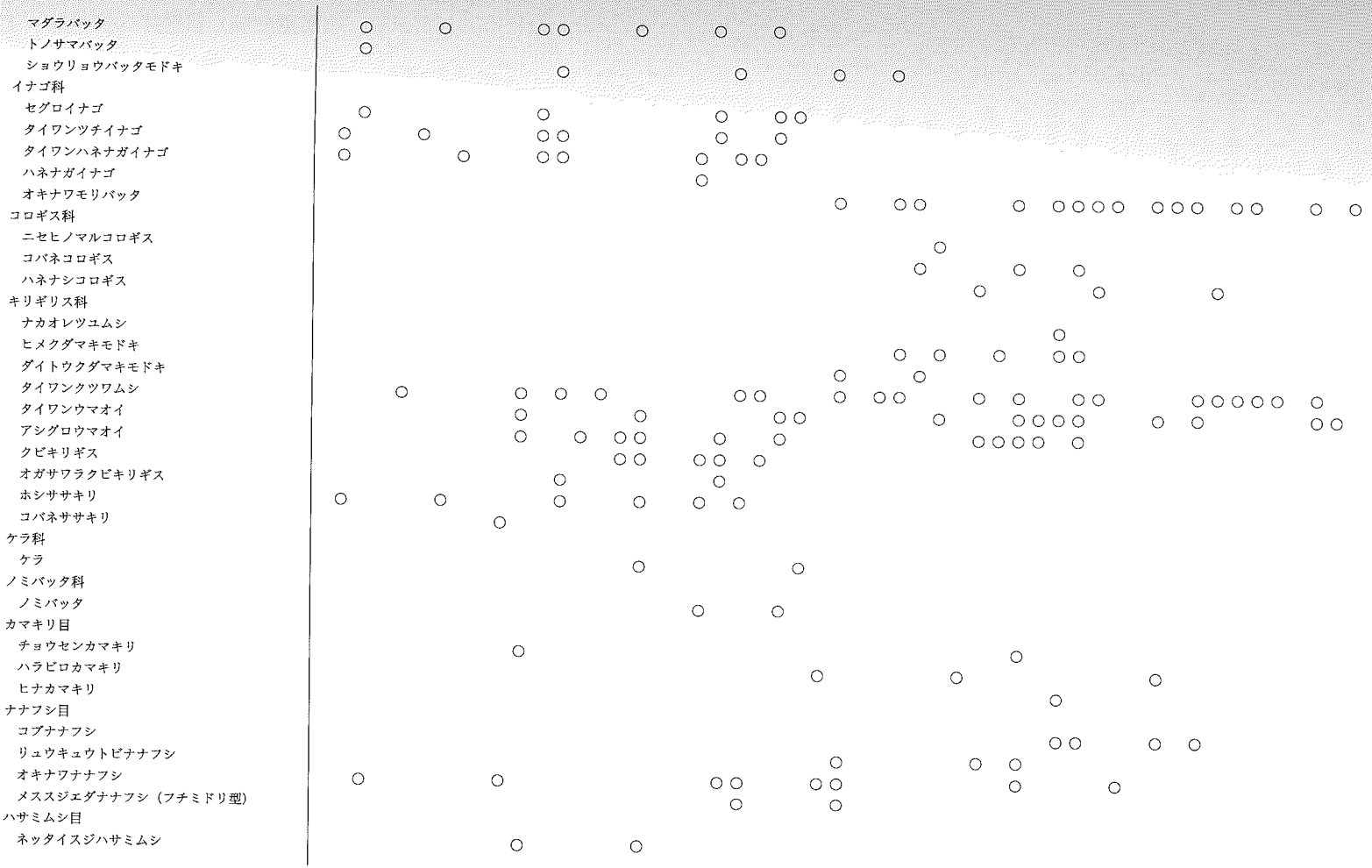
※　ウミアカトンボ、シオカシトンボは小浜（1978）が記録している。トビイロヤンマ、アメイロトンボは、沖縄県のトンボ<安里進トンボコレクション寄贈目録>（1985）に記録が出されている。

◎　リュウキュウルリモントンボは他の島々のものとは違って、体長が大きく、♂の尾部付属器や♀の後背片が異なっているように思え（安里、1985）、他にも未成熟時に沖縄島のものは、胸部は黄色で、翅胸前面の長い二条の筋が赤褐色であるのに対し、久米島のものはその筋が帯状となり、側面まで赤褐色味が強い。

◎　1995年5月1日に久米島で記録のなかったコフキトンボが見つかった。久米島のトンボは29種類となった。詳細な報告は次の機会におこなう。

表3　久米島の直翅類、ナナフシ、カマキリ、ハサミムシ

調査地 ＼ 見つかった種類	宅地	周辺が農地 畑地、草地、農道								周辺が森、林道、農道ぞい 畑地、草地、湿地													林縁－林冠－林間（ギャップ）、マントーソデ群落															林内 林床、川ぞい、樹幹										
	仲泊A	白瀬下流A	大原A	山城A	島尻A	堂崎B	浦地川A	仲村渠F	白瀬中流B	上阿嘉ABCD	浦地川B	宇江城B	儀間IF	白瀬中流B	白瀬中流C	白瀬一号AC	白瀬一号DE	島尻B	白瀬二号A	白瀬二号EIJ	中村渠GF	スハラACE	上江洲ダムAB	上溝一号AB	ヤンガーイチA	大原A	スハラABCDE	山城A	堂崎A	儀間GHF	宇江城B	山里B	白瀬下流A	白瀬中流BCD	仲村渠AEG	浦地川AB	上溝一号A	ヤンガーイチAB	白瀬一号DEF	上江洲ダムABC	白瀬二号ABCD	上溝一号B	ヤンガーイチAB	白瀬二号ADEJ	白瀬一号DEFG	白瀬中流BCD	上江洲ダムABC	スハラCE	堂崎A	仲村渠E	浦地川B	山里B	儀間H
直翅類																																																			
コオロギ科																																																			
イエコオロギ	○																																																		
リュウキュウオカメコオロギ				○			○				○		○	○	○		○		○				○					○		○				○	○															
タイワンエンマコオロギ													○			○				○		○																												
リュウキュウシバスズ													○			○						○																												
マツムシ					○					○	○			○				○	○			○																												
クサヒバリ																								○																											
ネッタイヤチスズ																								○																											
クロヒバリモドキ																								○																											
カネタタキ																										○	○	○		○	○			○	○	○	○	○		○	○			○		○	○	○		○			
ウスグロカネタタキ																											○							○							○			○		○		○					
マダラコオロギ																										○	○	○	○	○			○	○	○	○		○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○		○
リュウキュウツヅレサセコオロギ																												○						○		○										○					○		
クマスズムシ																																												○	○							
アシマダラマツムシ																																											○	○	○	○	○			○		
ネッタイクチキコオロギ																																										○	○	○	○	○	○	○				○	
カマドウマ科																																																			
クメカマドウマ																																												○	○			○				
オキナワカマドウマ																																													○							
ヒシバッタ科																																																			
ヒラタヒシバッタ																																															○					
ヒメヒシバッタ														○							○			○																												
ミナミハネナガヒシバッタ								○						○							○		○		○																											
ホソハネナガヒシバッタ								○						○																																						
オンブバッタ科																																																			
アカハネオンブバッタ				○				○	○		○			○							○			○																												
オンブバッタ																		○																						○												
バッタ科																																																			
ショウリョウバッタ		○	○	○				○	○		○	○	○	○		○	○			○		○		○																												
アカアシバッタ		○	○	○				○	○			○	○			○	○			○		○		○	○																											
クルマバッタ		○	○					○	○			○	○				○								○																											



◎ 直翅類は、高良・東（1974）は18種類（クルマバッタモドキのように県内には生息しない種名も含まれている）、琉球列島の鳴く虫たち（鳴き虫会）には17種類の記録を上げている。今回、直翅類は49種類、ナナフシは4種類カマキリは3種類、ハサミムシは1種類採集。

◎ クメカマドウマが、鐘乳洞内だけでなく広く森林内の生息することがわかった。また、オキナワモリバッタの雌は、沖縄島のものよりもはるかに大きい。

表4　久米島の半翅目（異翅亜目）

←畑地・草地優占　　森林環境優占→

森の周辺	畑地・草地			放キ畑	林道、農道芝地、草地		荒地・湿地					林間(ギャップ)		
調査地 / 見つかった種類	儀間川A	浦地川A	大原A	儀間I	山里B	スハラC	仲村渠F	ヤンガーイチA	上江洲ダムA	白瀬一号E	白瀬二号E	白瀬二号BCD	白瀬中流F	上江洲ダムC
ツチカメムシ科														
ツチカメムシ										○				
ミナミマルツチカメムシ					○									
ヒメツチカメムシ										○				
マルカメムシ科														
タイワンマルカメムシ			○											
カメムシ科														
チャバネアオカメムシ					○					○				
マルシラホシカメムシ				○		○				○				
シラホシカメムシ		○	○	○		○								
ウシカメムシ			○											
ツノカメムシ科														
アオモンツノカメムシ						○								
ミナミツノカメムシ					○									
ヘリカメムシ科														
クモヘリカメムシ		○	○	○					○	○	○	○	○	
ホソハリカメムシ			○	○		○				○				
ホウズキカメムシ			○											○
ホソヘリカメムシ			○											
シロヘリクチブトカメムシ				○										
ナガカメムシ科														
オオシロヘリナガカメムシ						○								
オオモンシロナガカメムシ					○									
モンクロナガカメムシ					○									
コマダラナガカメムシ			○		○						○			
クロスジヒゲナガカメムシ					○					○				
ルイスナガカメムシ					○									
ヨツボシヒョウタンナガカメムシ		○		○						○	○			
カンシャコバネナガカメムシ			○											
アカアシホソナガカメムシ	○													
ウスチャヒョウタンナガカメムシ				○										
オキナワシロヘリナガカメムシ								○						
ミナミヒゲナガカメムシ								○						
ヒョウタンナガカメムシの一種								○						
オオホシカメムシ科														
オオホシカメムシ					○					○				
ヒメホシカメムシ					○			○		○				
マキバサシガメ科														
アシブトマキバサシガメの一種					○									
ネッタイマキバサシガメ				○		○								
サシガメ科														
トビイロサシガメ										○				
ウスイロトゲサシガメ							○							
ヒメトビサシガメ							○							
キベリヒゲナガサシガメ						○					○			
サシガメ科の一種						○								
メクラカメムシ科														
アカホシメクラガメ		○		○		○								
ウスモンミドリメクラガメ		○		○		○								
メクラガメ科の一種			○											

◎　水生カメムシ類は除いた。
◎　高良・東（1974）には25種のリストが載せられている。

表5　久米島の半翅目（同翅亜目）

調査地 / 見つかった種類	草地畑地		放キ畑	林道・草地			荒地・湿地				石灰岩地林	リュウキュウマツ疎林						リュウキュウマツ林（イタジイを含む）								イタジイ－リュウキュウマツ林								イタジイ林（リュウキュウマツを含む）					
	浦地川A	大原A	儀間I	宇江城B	山里B	スハラC	上溝一号A	上江洲ダムA	スハラE	白瀬一号E	大原A	仲村渠G	上阿嘉ABC	儀間B	島尻A	奥武島A	白瀬下流A	上阿嘉D	島尻B	儀間CDE	浦添川A	浦地中流B	仲村渠AF	白瀬中流C	白瀬二号A	比屋定BC	儀間F	宇江城B	仲村渠CDE	上江洲ダムABC	スハラA	ヤンガーイチA	上溝一号A	白瀬二号CDE	儀間GHIJ	ヤンガーイチB	上溝一号B	スハラCDE	白瀬一号CDE
セミ科																																							
クマゼミ											○			○						○		○	○				○					○	○		○			○	○
クロイワニイニイ												○	○	○				○		○			○			○	○	○	○			○	○		○		○	○	○
クロイワツクツク											○			○	○	○	○		○	○		○						○			○				○				○
リュウキュウアブラゼミ												○		○						○		○	○				○	○	○			○	○		○	○	○	○	○
オオシマゼミ																			○	○		○		○	○		○			○	○			○	○			○	○
オキナワヒメハルゼミ																							○			○	○	○	○			○	○		○	○	○	○	○
クロイワゼミ																																							○
ツノゼミ科																																							
マルツノゼミ																																						○	
ミミズク科																																							
ヒラタミミズク																									○										○				○
ビワハゴロモ科																																							
タイワンウチワウンカ																												○											
オオヨコバイ科																																							
シロオオヨコバイ						○		○																															
ホソサジヨコバイ科																																							
クロスジホソサジヨコバイ						○																																	
アワフキムシ科																																							
アワフキムシ科の一種										○																													
ウンカ科																																							
シダスケバモドキ											○										○																		
クロフツノウンカ						○			○																														
アオバハゴロモ科																																							
アオバハゴロモ							○																										○						
マルウンカ科																																							
オキナワマルウンカ				○																																			
オサヨコバイ科																																							
オサヨコバイ					○																																		
テングスケバ科																																							○
オキナワテングスケバ		○			○																																		
ハゴロモ科																																							
フタホシハゴロモ	○	○	○																																				

◎　高良・東（1974）には、69種のリストが載せられている。

れると思われる（その後、未記録の飛来定着種である、コフキトンボが見つかった)。

森の林縁の池や湿地を主な生活の場とするトンボは2種類だけであった。沖縄島に生息する6種類は、久米島では確認できなかった。また森の河川で生活するトンボも1種類だけであり、沖縄島の流水性トンボ9種類は見つけることができなかった。しかし、久米島にはこれらのトンボ類の生息できる環境は、少なからずあり、15種類もの森の周辺の池や湿地、川のトンボが欠けることは、平地および疎林的環境のトンボの多くが久米島に分布していることと合わせて非常に興味深い。

これまで久米島には、26種のトンボが記録されていたが、今回新たに3種類が加わった。ひとつは、県内2個体目の9月24日採集のスナアカネの♀。「スナアカネは、アフガニスタン、インドから中央アジア、小アジアをへてアフリカおよびヨーロッパにかけて広く分布しており、中国でも採集されている。わが国では1977年10月16日に沖縄県の宮古島で、1♂が採集されただけで(小浜、1978)、大陸からの飛来種と考えられている。インドでは年中みられるといい、ヨーロッパでは長距離移動をすることが知られている。」（日本産トンボ幼虫・成虫検索図説、および沖縄のトンボによる）もうひとつは、9月23日採集のアジアイトトンボ2♀。「県内では、沖縄島、石垣島、西表島で春期と秋期に採集されている。1960年代には比較的多数の記録があるが、1970年代以降は、ごく少数しか記録がない。」(沖縄のトンボによる)。この2種類とも、ミーニンおよび台風の大まわりの風によってもたらされたのではないかと考えられる。さらに、1種（コフキトンボ）が加わり、29種となった。

久米島の直翅類、ナナフシ、カマキリ、ハサミムシ（表3）

久米島の半翅類（表4、5）

異翅亜目は41種類、同翅亜目は、20種類記録した。セミ類は、7種類記録し(表5)、クマゼミ、クロイワニイニイ、クロイワツクツク、リュウキュウアブラゼミは分布が広く、オオシマゼミは、リュウキュウマツ林からイタジイ林に生息し、オキナワヒメハルゼミは、イタジイの優占する森に多く、クロイワゼミは、イタジイ林の最も安定した森の樹冠に生息している。

久米島の水生カメムシ・水生甲虫①②（表6、7）

水生カメムシを12種類、水生甲虫を31種類記録した。水生カメムシでは、アマミアメンボが開けた止水域やゆるやかな流れに、コセアカアメンボが林縁から林内の止水域やゆるやかな流れに生息し、両者はすみ分けている。トンボ同様沖縄島の林内河川に生息するタイワンシマアメンボや林縁の池に生息するオキナワマツモムシは確認できなかった。1979年8月19日採集のアシブトメミズムシ（県立博物館収蔵）は、久米島の儀間（海岸）産である。ヒメミズカマキリは水辺植物の豊かな池に生息している。

表6　久米島の水生カメムシ、水生甲虫①

調査地点	開けた水域					やや開けた水域					開けた水域				一部開けた水域				林内を流れる河川								
	ため池ダム湖 湿地					小さな池砂防ダム 草地					下流（止水的）ゆるやかな流れ				中流 A a型				上流（源流） Aa型、Aa－Aao型								
見つかった種類	上江洲ダムA	ヤンガーイチA	上溝一号池A	仲村渠F	スハラEF	島尻A	山城A	スハラC	スハラD	儀間I	白瀬二号B	白瀬下流A	儀間A	比嘉A	浦地川A	堂崎C	山城A（やや止水）	浦地川B	白瀬中流B	白瀬中流D	白瀬中流F	スハラAB	スハラCD	スハラF	堂崎A	上江洲ダムA	白瀬一号AB	白瀬一号E	白瀬二号BC	白瀬二号DE	白瀬二号GHI
止水性 水生カメムシ																													
ミズカメムシ科																													
ミズカメムシ						●	●	●					●					●											
ミズカメムシの一種						●																							
イトアメンボ科																													
ヒメイトアメンボ					●																								
アメンボ科																													
アマミアメンボ	●	●	●	●	●		●	●	●		●	●	●	●		●			●										
（湿やたまり）コセアカアメンボ																				●		●	●	●		●	●	●	●	●
止水性 セスジアメンボ							●																							
ヒメセスジアメンボ					●		●	●											●										
タイコウチ科																													
ヒメミズカマキリ		●		●		●																							
マツモムシ科																													
オキナワコマツモムシ					●	●	●																						
クロイワコマツモムシ		●		●	●	●	●	●		●			●						●										
ミズムシ科																													
コミズムシ					●	●																●							
チビミズムシの一種														●															
水生甲虫①																													
ガムシ科																													
ヒメガムシ	●	●	●	●		●	●							●													●		（夜間ライトトラップ）
ミナミヒメガムシ			●	●																									
チビヒラタガムシ	●		●				●																						
セマルガムシ			●				●																						
アカヒラタガムシ						●																							
チビマルガムシ	●						●						●		●														
コクロヒラタガムシ													●																
ミズスマシ科																												（夜間ライトトラップ）	
オオミズスマシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●		●												●	●	●
ヒメミズスマシ		●	●		●	●			●																					

◎　水辺の草地に生息するウスイロトゲサシガメ（サシガメ科）が仲村渠Fで見つかっている。
◎　1995年5月1日にコガタガムシを再確認した。また、マルミズムシ科マルミズムシも採集した。

表7　久米島の水生甲虫②

調査地点	開けた水域					やや開けた水域					開けた水域				一部開けた水域				林内を流れる河川									
	ため池ダム湖 湿地					小さな池砂防ダム 草地					下流（止水的）ゆるやかな流れ				中流 Aa型				上流（源流） Aa型、Aa－Aao型									
見つかった種類	上江洲ダムA	ヤンガーイチA	上満一号池A	仲村渠F	スハラEF	島尻A	山城A	スハラC	スハラD	儀間I	白瀬二号B	白瀬下流A	儀間A	比嘉A	浦地川A	堂崎C	山城A（やや止水）	浦地川B	白瀬中流B	白瀬中流D	白瀬中流F	スハラAB	スハラCD	スハラF	堂崎A	上江洲ダムA	白瀬一号AB	白瀬一号E	白瀬二号BC	白瀬二号DE	白瀬二号GHI
止水性 ゴミムシ科																														
ブロンズクビナガゴミムシ				●				●																						
アトモンミズギワゴミムシ	●																													
コガシラミズムシ科																														
シナコガシラミズムシ						●		●					●																	
コツブゲンゴロウ科																														
ツヤコツブゲンゴロウ		●			●																									
ゲンゴロウ科																														
ウスイロシマゲンゴロウ			●	●	●	●		●	●																					
コガタノゲンゴロウ		●		●		●		●	●																					
トビイロゲンゴロウ		●						●																						
ヒメフチトリゲンゴロウ		●		●	●			●																						
ヒメゲンゴロウ		●			●	●																								
コケシゲンゴロウ		●						●																			●			
コマルケシゲンゴロウ		●																												
タイワンセスジゲンゴロウ		●			●																									
ウスチャツブゲンゴロウ						●																								
ササナミツブゲンゴロウ						●																								
流水性 マルハナノミ科																														
マルハナノミ科の一種					●					●					●		●	●			●					●					
ヒラタドロムシ科																														
オキナワマルヒラタドロムシ																							●						●	●	●
ドロムシ科																														
ムナビロツヤドロムシ															●		●	●		●	●		●	●					●	●	
ヒメドロムシ科																														
アカハラアシナガミゾドロムシ																				●				●						
マルナガアシドロムシ																									●					
ナガツヤドロムシ																					●		●		●				●	
ウエノツヤドロムシ																									●					
ホタル科																														
クメジマボタル																		●		●	●		●							

◎　高良・東（1974）には水生カメムシ3種、水生甲虫2種のリストを載せている。

◎　1995年5月には、タマケシゲンゴロウ、チンメルマンセスジゲンゴロウ、リュウキュウセスジゲンゴロウなど多数のゲンゴロウを採集した。詳細は次回に報告する。

水生甲虫では、1979年8月19日採集のコガタガムシ（県立博物館収蔵）をあわせてガムシ類は8種類が生息している。ミズスマシは2種類を記録した。沖縄島河川に生息するオキナワオオミズスマシは確認できなかった。ゲンゴロウの仲間は、13種類を確認。コガタノゲンゴロウ(希少種)、ヒメフチトリゲンゴロウ、トビイロゲンゴロウの3種の大型種が水辺植物の繁茂した池などに生息している。沖縄島のシイ林の源流の池に生息するリュウキュウオオイチモンジシマゲンゴロウは確認できなかった。ドロムシの仲間は、沖縄島に生息する7種類の内5種類までを確認した。クメジマボタルの幼虫は、中流から上流にかけての3河川で見つかった。また、成虫は1995年4月29日～5月2日までの調査で島内の各河川域に広く生息しているのを確認した。

久米島の水生昆虫（カゲロウ、カワゲラ、トビケラ、脈翅目、双翅目（図3、表8）

白瀬川4ヶ所、浦地川3ヶ所、スハラ川2ヶ所、堂崎川1ヶ所の計10ヶ所で調べた。カゲロウは5種類、カワゲラは6種類、トビケラは8種類、脈翅目は2種類、双翅目は3種類確認した。白瀬川が最も水生昆虫が多かった。浦地川は、下流から上流へと確認種類数が増えていった。白瀬川が最も多様性に富み、次いで浦地川上流、スハラ川の順であった。

水生昆虫の中で数の多かった種類は、コタニガワトビケラ属の一種、コガタシマトビケラ属の一種、ナガレアブ科の一種の3種であった。これらは、他の水生昆虫とともに、キクザトサワヘビの有力なエサ資源になると思われる。また、沖縄島の河川で見つかるシロタニガワカゲロウやヒメヒラタカゲロウ属の一種、タイワンモンカゲロウ、オキナワヒゲナガカワトビケラなどの流水性水生昆虫の多くが確認できなかった。

久米島の鱗翅目－蝶－（表9、10）

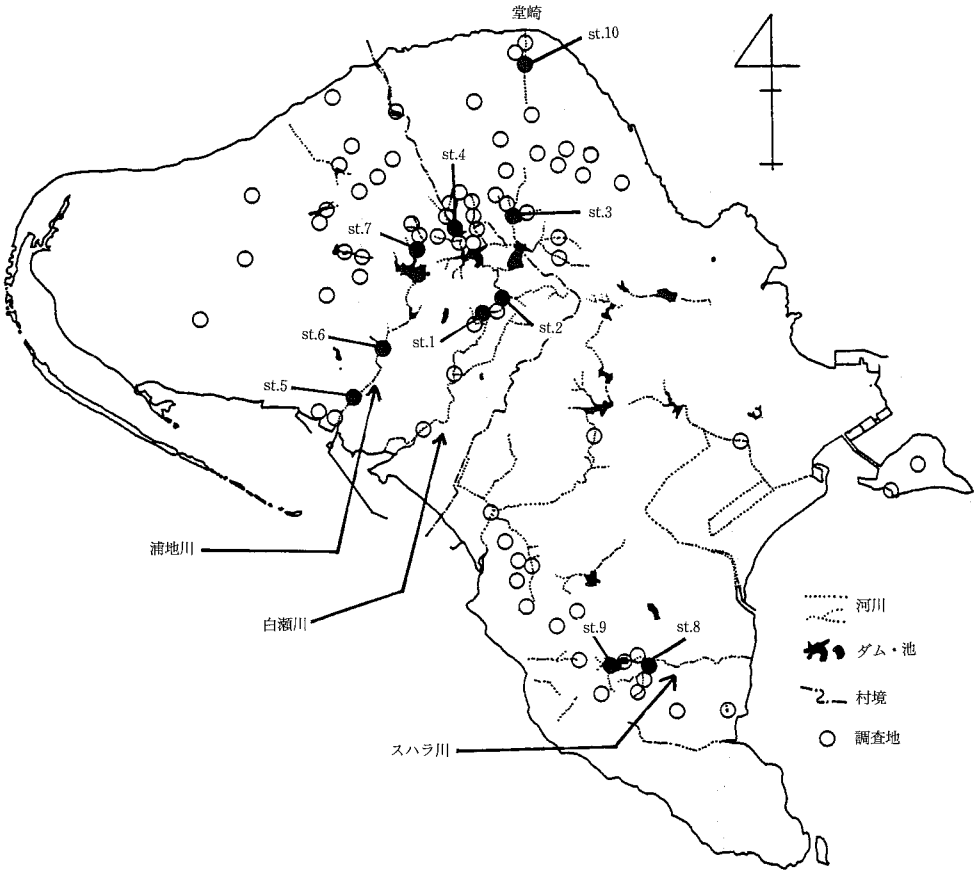
今回36種類の蝶を記録した。これまでの記録をあわせると久米島には46種類の蝶が記録されたことになる。飛来種を除くと40種類が久米島に生息している。今日、新たに加わった種類はツマムラサキマダラである。沖縄島では、1992年頃より定着した。今年で4年目に入るが、このまま定着するのかどうか興味深い。また、食草のオキナワスズムシソウの群落が、白瀬川源流で見つかったが、コノハチョウは食痕も確認できなかった。

蝶は森林性のものと草原性のものに大きく二大別できる。森林性のものは、疎林への適応力の違いから都市的環境へ進出できるもの、農村的環境へ進出できるものなどの様々な適応段階が認められる。また、草原性のものには、湿性草原を好むもの、乾性草原を好むものなどに分けられる。

久米島の鱗翅目－蛾－（表11）

高良・東（1974）によって86種類報告されている。今回2ヶ所の定点ライトトラップを中心とした調査で、97種類採集することができた。この中には、オキナワルリチラシ、アマミシロテンエダシャク、ヤママユ、クニガミキヨトウ、ヤエナミクチバなどの種類が含

図３　流水環境に生息する水生昆虫の調査地点の位置
（カゲロウ、カワゲラ、脈翅、トビケラ、双翅）



調査方法
瀬は50×50cmのコドラート法による定量採集
淵はたも網による任意採集。

表の調査地点以外での採集記録（調査地点図２を参照）

カゲロウ目	
コカゲロウ属の一種（sp.3）	11．５比嘉Ａ〔採５〕
トゲエラカゲロウ属の一種	７．14スハラＥ〔採１〕９．23白瀬中流Ｂ〔採１〕
	11．６白瀬二号Ｂ〔採１〕
ヒメカゲロウ科の一種	３．30白瀬二号Ａ－Ｊ〔採１〕
カワゲラ目	
フタツメカワゲラ属の一種	12．29スハラＦ〔採２〕
ヒロムネカワゲラ属の一種	３．28白瀬一号上流〔採１〕
脈翅目	
クメセンブリ	３．29スハラＥ〔採１♂３♀〕３．30白瀬二号Ｃ－Ｅ〔採集１♀〕
トビケラ目	
コカクツツトビケラ属の一種	３．29スハラＡ－Ｃ〔採１〕Ｅ〔採１〕
双翅目	
ユスリカ科の一種	11．５儀間Ａ〔採３〕11．７山城Ａ〔採１〕

表8　久米島の水生昆虫（カゲロウ、カワゲラ、トビケラ、脈翅目、双翅目）

出現種類（すべて幼虫） ＼ 調査地点st.	白瀬川 1	白瀬川 2	白瀬川 3	白瀬川 4	浦地川 5	浦地川 6	浦地川 7	スハラ川 8	スハラ川 9	堂崎 10	総数	採集法
カゲロウ目												
コカゲロウ属の一種（SP.1）	1	9	1	11			1	1			24	定量
コカゲロウ属の一種（SP.2）	12		1	1			2				16	〃
コカゲロウ属の一種（SP.3）										3	3	〃
トゲエラカゲロウ属の一種	4	7	1	1		7					20	たも網
ヒメカゲロウ科の一種	1			1		1					3	定量
カワゲラ目												
フタツメカワゲラ属の一種									2		2	たも網
フタツメカワゲラモドキ属の一種				1							1	〃
ヒロムネカワゲラ属の一種	1	2		9			1				14	定量
フサオナシカワゲラ属の一種（SP.1）		1	6	1							8	〃
フサオナシカワゲラ属の一種（SP.2）	18	20		19			3	2			62	〃
ホソカワゲラ属の一種		9		2			1		22		34	〃
脈翅目												
ヘビトンボ科の一種	3	5									8	定量
クメセンブリ				1							1	たも網
トビケラ目												
コタニガワトビケラ属の一種	16	35	36	50	15	66	11	8	4	45	286	定量
コガタシマトビケラ属の一種	45	1	14	7	64	58		12		2	203	〃
ウルマーシマトビケラ								2		11	13	〃
ミヤマシマトビケラ属の一種		11	4	2			7		1		25	〃
シマトビケラ属の一種				2			1			1	4	〃
コカクツツトビケラ属の一種	4			1		5				3	13	たも網
グマガトビケラ	4			2			10	7			23	〃
クサツミトビケラ属の一種	1	2				1					4	〃
双翅目												
ユスリカ科の一種（SP.1）		9	2	4	10	3	5	1	8		42	定量
ユスリカ科の一種（SP.2）			2								2	〃
ナガレアブ科の一種	16	28	6	20	2	34		26	5	2	139	〃
各調査地点の確認総種類数	13	13	10	18	4	8	10	8	6	7		

	調査番号	調査日	調査地点	河川形態	周辺環境
白瀬川	st. 1	1994.11. 6	白瀬川中流D	Aa型	リュウキュウマツ－イタジイ林内
	st. 2	1994.12.30	白瀬川中流F	Aa型	イタジイ林内
	st. 3	1994. 9.24	白瀬一号ダムF	Aa型	イタジイ林内
	st. 4	1994.11. 6	白瀬二号ダムD	Aa型	イタジイ林内
浦地川	st. 5	1994.11. 5	浦地川A	Aa－Bb移行型	リュウキュウマツ林、畑地、セイコノヨシーダンチク草地内
	st. 6	1994. 9.23	浦地川B	Aa型	リュウキュウマツ－イタジイ林内
	st. 7	1994.11. 7	上江洲ダムA	Aa型	イタジイ林内
スハラC	st. 8	1994.11. 4	スハラC	Aa型	イタジイ林縁、道路ぞい、アカメガシワ－ススキ草地
	st. 9	1994.12.29	スハラF	Aao型－Aa移行型	イタジイ林内
堂崎	st.10	1994. 9.24	堂崎A	Aa型	リュウキュウマツ林縁、畑地、アカメガシワ－ススキ草地

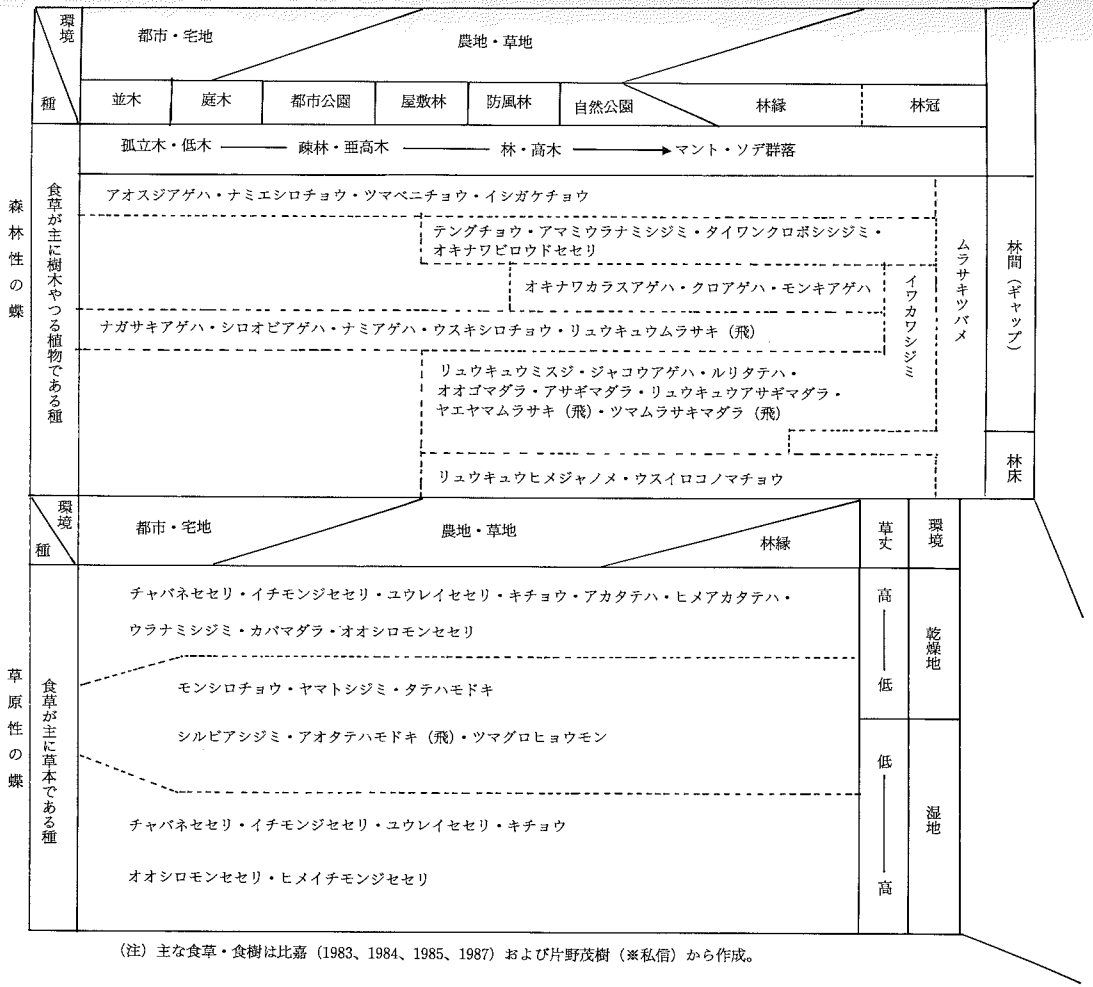
表9　久米島の鱗翅目（蝶）

| 見つかった種類 ＼ 調査地 | 宅地 | 周辺が農地 畑地・草地 農道 | | | | | | 周辺が森、林道、農道ぞい 畑地、草地、湿地 | | | | | | | | | マントーソデ群落ー林冠ー林間（ギャップ）（一部草地、畑地を含む林縁） 疎林的——リュウキュウマツ—イタジイ林——イタジイ林 | | | | | | | | |

◎ 久米島産のリュウキュウヒメジャノメは、基本的に林縁性の蝶

表10　久米島で記録された蝶（46種）とその生息環境

（飛来）は他より飛来した迷蝶・偶産種　　☆他にスジグロカバマダラ（飛来）の記録がある。



（注）主な食草・食樹は比嘉（1983、1984、1985、1987）および片野茂樹（※私信）から作成。

これまでに記録された種類	主な食草、食樹
アオスジアゲハ	タブノキ、ヤブニッケイなど
ナミエシロチョウ	ツゲモドキ
ツマベニチョウ	ギョボク
イシガケチョウ	ガジュマル、アコウなど
テングチョウ	クワノハエノキ
アマミウラナミシジミ	モクタチバナ、シマイズセンリョウなど
タイワンクロボシシジミ	アカメガシワ、クスノハガシワ
オキナワビロウドセセリ	クロヨナ
オキナワカラスアゲハ	ハマセンダン、カラスザンショウ
クロアゲハ	シークァサー、サルカケミカンなど
モンキアゲハ	ハマセンダン、シークァサーなど
ナガサキアゲハ	シークァサー
シロオビアゲハ	サルカケミカン、シークァサーなど
ナミアゲハ	シークァサー、ヒレザンショウなど
ウスキシロチョウ	ナンバンサイカチ、ハネセンナなど
リュウキュウムラサキ（飛来）	キダチハマグルマ、サツマイモなど
リュウキュウミスジ	クワノハエノキ、イルカンダなど
ジャコウアゲハ	リュウキュウウマノスズクサ
ルリタテハ	オキナワサルトリイバラなど
オオゴマダラ	ホウライカガミ
アサギマダラ	サクララン、ソメモノカズラ
リュウキュウアサギマダラ	ツルモウリンカ
ヤエヤマムラサキ（飛来）	オオイワガネ
ツマムラサキマダラ（飛来）	リュウキュウテイカカズラ※など
ムラサキツバメ	マテバシイ
イワカワシジミ	クチナシ
リュウキュウヒメジャノメ	ススキ、エダウチチヂミザサなど
ウスイロコノマチョウ	ススキ、メイシバなど
タイワンアオバセセリ（飛来）	コウシュンカズラ、モモタマナ
チャバネセセリ	チガヤ、ススキ、イネなど
イチモンジセセリ	ススキ、イネ、チガヤなど
ユウレイセセリ	オガサワラスズメノヒエ、メイシバなど
キチョウ	ハマセンナ、ツノクサネムなど
アカタテハ	カラムシ、ノカラムシなど
ヒメアカタテハ	ヨモギ、ゴボウなど
ウラナミシジミ	ハマササゲ、エンドウなど
カバマダラ	トウワタ
オオシロモンセセリ	ゲットウ、アオノクマタケランなど
モンシロチョウ	カラシナ、キャベツ、イヌガラシなど
ヤマトシジミ	カタバミ
タテハモドキ	イワダレソウ、スズメノトウガラシなど
シルビアシジミ	ヤハズソウ、コメツブウマゴヤシなど
アオタテハモドキ（飛）	ムシクサ、イワダレソウなど
ツマグロヒョウモン	リュウキュウコスミレなど
ヒメイチモンジセセリ	イネ、ススキ

表11　久米島の鱗翅目（蛾）

白瀬一号ダム上流E地点の蛾類（種名、採集日、数）
A（7月14日採集）B（9月24日採集）C（11月5、6日採集）D（12月30日採集）

マダラガイ科

オキナワルリチラシC1

メイガ科

ムツテンノメイガA1、シロモンノメイガA1、ミナミウコンノメイガA1、モンキシロノメイガC1、コウセンポシロノメイガD1、トサカフトメイガA3C1、ワタノメイガA2、シロオビノメイガA1C1、モンキクロノメイガA1、ウスイロキンノメイガA1

カギバガ科

アカウラカギバA3

トガリバ科

モントガリバD1

シャクガ科

オオトビスジエダシャクD2、ヤクシマフトスジエダシャクD4、スカシエダシャクA3D2、クロハグルマエダシャクA1、ヘリグロヒメアオシャクA1、サザナミシロアオシャクA2、リュウキュウナカジロナミシャクC1、リュウキュウフトスジエダシャクD1、アマミシロテンエダシャクD4、ミドリヒメシャクD1、ホソバヒメシャクD1、ウスアカモンナミシャクD3、トビモンオオエダシャクD2、ホシミスジエダシャクD1、

ヤママユガ科

ヤママユB1

スズメガ科

シタベニスズメA1、キイロスズメA1、コスズメA1

ヒトリガ科

モンシロモドキA1D1、ハイイロヒトリA2、アマミキホソバD1

ヒトリモドキガ科

シロスジヒトリモドキA1、キイロヒトリモドキA1D1

ヤガ科

ナタモンアシブトクチバA1D1、ヒメネジロコヤガA2、ツキワクチバA1、ムクゲコノハB1、イチジクキンウワバC1、ソトウスグロアツバD2、メスカバフアツバD1、ヒメサビスジヨトウD1、リュウキュウコリンガC2D2、オオトモエA2、シラホシモクメクチバA6D2、ニセアカマエアツバA5、フタクロオビクチバA1、ハスモンヨトウA1、ヒロオビキシタクチバA2、オキナワオオアカキリバA2、オキナワマエモンヒメクチバA2

スハラ川上流（スハラE）地点の蛾類（種名、採集日、数）
A（3月29日採集）B（11月4日採集）C（12月30日採集）

ハマキガ科

ヒロバクロヒメハマキB1、アシブトヒメハマキB1

ヒゲナガキバガ科

キベリハイイロヒゲナガキバガA1

マダラガ科

オキナワルリチラシＢ１

メイガ科

ミツシロモンノメイガＢ１、マメノメイガＢ１、モモノゴマダラノメイガＢ２、キンスジノメイガＢ１、モンウスグロノメイガＢ１、ムラサキマダラメイガＢ１、クロスジキシマメイガＡ２Ｂ５、フタスジシマメイガＡ３、コヨツメノメイガＡ１、キベリトガリメイガＡ１、カバイロマダラメイガＡ１、トサカフトメイガＢ１、ワタノメイガＢ１、シロオビノメイガＢ１

ギバガ科

アカウラカギバＢ４

トガリバ科

モントガリバＣ１

シャクガ科

キオビエダシャクＡ１、アサヒナオオエダシャクＡ３、オオトビスジエダシャクＡ１、ヤクシマフトスジエダシャクＡ１Ｂ２Ｃ２、ミカンコエダシャクＣ２、スカシエダシャクＢ４Ｃ１、ヨツモンマエジロアオシャクＣ２、ヒメサザナミアオシャクＣ６、アマミアオナミシャクＣ１、アマミシロテンエダシャクＣ９、ウスアカモンナミシャクＣ１、トビモンオオエダシャクＣ２

カレハガ科

クヌギカレハＣ３、マツカレハＡ３Ｃ１

ヒトリガ科

ヒメホシキコケガＡ３、ハガタベニコケガＡ２、ヒトテンアカスジコケガＢ３

ヤガ科

ヤエナミクチバＢ１、ウスオビクチバＢ１、キスジコヤガＢ１、ナカウスツマキリヨトウＢ１、ナカジロシタバＢ１、チャマダラキリガＣ１、クニガミキヨトウＡ１、ヒメサビスジヨトウＡ１Ｂ１、リュウキュウコリンガＡ３Ｃ３、フサハラアツバＡ１、ヒメヒゲブトアツバＡ２、ヤクシマコブヒゲアツバＡ２Ｂ２、タケアツバＡ１、ニセアカマエアツバＣ１、ヒロオビキシタクチバＢ１

以記以下の蛾類の記録

マダラガ科オキナワルリチラシ11．４儀間Ｄ１Ｅ２

シャクガ科カギバアオシャク11．７上江洲ダムＡ〔採１〕

スズメガ科オオスカシバ９．24宇江城Ｂ１、オキナワクロホウジャク11．４儀間Ｆ１１１、ホシホウジャク11．４儀間Ｉ１、11．７大原Ａ１

シャチホコガ科ホソバネグロシャチホコ３．30白瀬二号Ａ〔採１〕

ヒトリガ科モンシロモドキ３．28白瀬一号Ａ１　３．30白瀬二号Ａ－Ｊ〔採１〕

ヒトリモドキガ科キイロヒトリモドキ11．６白瀬二号Ｂ１　11．７大原Ａ１

ヤガ科オオトモエ　３．30白瀬二号ＣＤＥＩＧ羽Ｂ２　７．13ヤンガーイチＢ２、７．14儀間ＨＩ11．６白瀬中流Ｄ１　11．７大原Ａ１

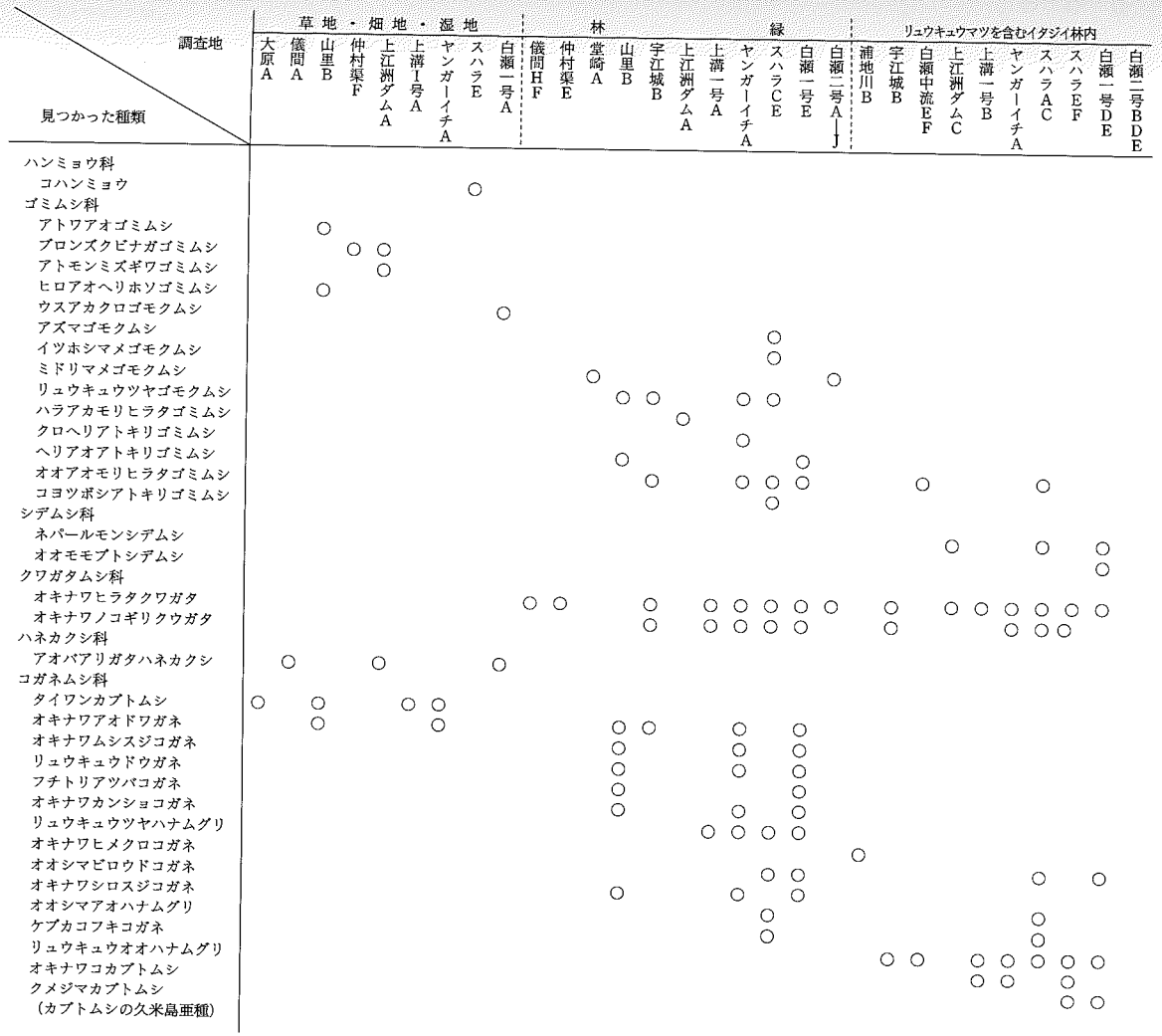
オオルリビクチバ　７．13ヤンガーイチＢ１

表12　久米島の脈翅目（水生昆虫は除く）、双翅目（水生昆虫は除く）、膜翅目

見つかった種類＼調査地	草地											林縁（一部は林内）										
	白瀬下流A	浦地川A	大原A	島尻A	宇江城B	仲村渠E	上溝一号A	ヤンガーイチA	儀間I	スハラC	白瀬一号DE	浦地川B	島尻A	山里B	宇江城B	白瀬中流B	上江洲ダムAC	上溝一号AB	ヤンガーイチB	白瀬一号CDE	スハラCE	白瀬二号DE	白瀬二号B
脈翅目																							
オキナワツノトンボ					○			○			○												
カオマダラクサカゲロウ																	○						
ヒメウスバカゲロウ																				○			
双翅目																							
ミナミオオハナアブ	○				○	○		○															
アオメアブ							○	○			○									○			
クロバネツリアブ																		○					
メスアカオオムシヒキアブ															○							○	
オキナワナガハナアブ																							
膜翅目																							
セイヨウミツバチ			○							○													
チビアシナガバチ		○							○														
クロアナバチ							○				○												
オキナワセグロアシナガバチ																		○	○			○	
オキナワクマバチ													○				○				○	○	
ベッコウバチ															○								
ホソウメマツオオアリ																					○		
アメイロアリの一種																						○	
ユミセアリの一種																	○						○
オオズアカアリ（オオズアリ）				○	○					○		○	○		○			○			○		
アシジロヒラフシアリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

高良・東（1974）には、脈翅目３種、双翅目35種、膜翅目28種の記録がある。

表13　久米島の鞘翅目①



今回の記録になく、東・金城（1987）の目録に載っている種類
コガネムシ科
ヒメツヤエンマコガネ
スジアシビロウドコガネ
オキナワマメコガネ
オオシマオオトラフコガネ
オキナワコアオハナムグリ

東・金城（1987）による種および亜種の分布域

〔種の分布〕沖縄諸島以南～太平洋地域
〔亜種の分布〕沖縄諸島～与論、沖永良部島
〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、慶留間島
〔種の分布〕沖縄諸島、奄美大島、石垣島、西表島、台湾
〔種の分布〕九州以南、琉球列島、台湾、東南アジアなど
〔亜種の分布〕沖縄島、阿嘉島、慶留間島
〔亜種の分布〕沖永良部、与論、沖縄諸島、石垣島
〔亜種の分布〕沖縄島、奄美大島
〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、石垣島、西表島
〔種の分布〕久米島、沖縄島～奄美大島、トカラ列島
〔亜種の分布〕沖縄島、渡名喜島、石垣島、西表島、小浜島
〔種の分布〕沖縄島、徳之島
〔亜種の分布〕沖縄島、宮古島、石垣島、西表島
〔亜種の分布〕沖縄島、西表島
〔亜種の分布〕久米島

表14　久米島の鞘翅目②

見つかった種類 ＼ 調査地	草地・畑地					林縁									リュウキュウマツを含むイタジイ林内					
	大原A	浦地川A	儀間I	スハラC	白瀬一号E	浦地川B	堂崎A	宇江城B	白瀬中流D	山里B	上江洲ダムA	ヤンガーイチA	スハラCE	白瀬一号E	白瀬二号A—J	山里B	スハラE	白瀬一号E	白瀬二号C	ヤンガーイチA	上溝一号B
テントウムシ科																					
ニジュウヤホシテントウ	○			○																	
コモンナナホシテントウ		○	○																		
ヒメカメノコテントウ		○	○	○	○																
チャイロテントウ			○																		
ダンダラテントウ			○																		
リュウキュウヒメテントウ			○																		
ジュニマダラテントウ				○									○								
タイワンヒメテントウ				○									○								
キイロテントウ													○								
リュウキュウツヤテントウ									○												
コメツキモドキ科																					
アシグロヒメコメツキモドキ			○																		
タイワンツヤコメツキモドキ								○				○		○							
ケシキスイ科																					
アカマダラケシキスイ										○				○							
カタベニデオキスイ								○					○								
クロハナケシキスイ													○								
モンチビヒラタケシキスイ													○								
カッコウムシ科																					
リュウキュウダンダラカッコウムシ											○										
タマムシ科																					
アヤムネスジタマムシ						○	○														
ジョウカイボン科																					
クメジマツマキジョウカイ															○						
コメツキムシ科																					
オキナワクチブトコメツキ												○									
オオクシヒゲコメツキ										○											
アマミヒゲコメツキ																			○		
オオフタモンウバタマコメツキ																○		○		○	○
ホソクシヒゲムシ科																					
ナガクシヒゲムシ																○		○			
ナガシンクイ科																					
オオナガシンクイ																		○			
ホソカタムシ科																					
クロサワオオホソカタムシ																○	○	○			

今回の記録になく、東・金城（1987）の目録に載っている種類

テントウムシ科
- リュウキュウナガヒメテントウ
- ヒメフタモンクロテントウ
- オオテントウ

コクヌスト科
- コクヌスト

ベニボタル科
- オキナワクシヒゲベニボタル

ホタル科
- オキナワマドボタル（久米島亜種）

コメツキムシ科
- タンチャメクシコメツキ
- スジマダラチビコメツキ

タマムシ科
- エサキクロコメツキ
- アオウバタマムシ（久米島亜種）

◎　1955年5月にはホタル科の
- クロイワボタル
- オキナワスジボタル
- オキナワマドボタル

を採集した。

表15　久米島の鞘翅目

見つかった種類 ＼ 調査地	草地	林　縁（一部林冠または村内）										
	浦地川A	大原A	山城A	宇江城B	山里B	上溝一号B	ヤンガーイチA	スハラC	スハラE	白瀬一号C	白瀬一号E	白瀬二号A—J	白瀬二号E
アリモドキ科													
ムネアカアリモドキ	○												
オキナワホソクビアリモドキ		○											
クチキムシ科													
ウスイロクキチムシ							○						
オオクチキムシの一種						○					○		
ハナノミ科													
ナミアカヒメハナノミ			○										
カミキリモドキ科													
タテスジフトカミキリモドキ												○	
ハラグロランプカミキリモドキ												○	
ハイイロカミキリモドキ							○						
ハムシ科													
キイロクロハムシ										○			
キボシツツハムシ					○								
オキナワイチモンジハムシ							○						
タイワンツブノミハムシ		○											○
キイチゴトビハムシ										○			
ヒゲナガゾウムシ科													
イシガキヒゲナガゾウムシ		○											
ゾウムシ科													
サカグチクチブトゾウムシ												○	
ハイイロクチブトゾウムシ				○									
オオカシワクチブトゾウムシ									○				
シイシギゾウムシ								○			○		○
コゲチャツツゾウムシの一種								○			○		

今回の記録になく、東・金城（1987）の目録に載っている種類

ハムシ科

リュウキュウツツハムシ

ニセウスイロサルハムシ

オキナワイモサルハムシ

ヨモギハムシ

ウリハムシ

カミナリハムシ

キスジノミハムシ

キイロミゾアシノミハムシ

ヨツモンタマハムシ

コガタジンガサハムシ

オサゾウムシ科

コクゾウムシ

表16　久米島の鞘翅目④

調査地 / 見つかった種類		リュウキュウマツを含むイタジイ林縁～林内										東・金城（1987）の目録に記されている種および亜種の分布
		浦地川B	宇江城B	上滝一号B	山里B	白瀬二号A—J	ヤンガーイチA	白瀬中流F	スハラE	スハラC	上江洲ダムA	白瀬一号E	
	ゴミムシダマシ科												
分布域が狭い	クメジマキマワリ											○	〔種の分布〕久米島
	オキナワユミアシゴミムシダマシ									○	○	○	〔種の分布〕沖縄島
	オキナワクロツヤキマワリ											○	〔亜種の分布〕沖縄島
	ルリムネオオニジゴミムシダマシ							○	○				〔種の分布〕沖縄島、奄美大島
固有種 固有亜種	ハラアカチビキマワリモドキ				○								〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、石垣島
	ヒメクロルリゴミムシダマシ						○					○	〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、石垣島
	アマミオオニジゴミムシダマシ											○	〔種の分布〕沖縄島、徳之島、奄美大島、トカラ列島
	ニジコマルキマワリ									○			〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、宮古島、石垣島、西表島
	セスジナガキマワリ	○	○								○		〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、奄美大島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島
分布域が広い	アカモンキゴミムシダマシ				○								〔亜種の分布〕沖縄島、徳之島、トカラ列島、中国
	オオツヤホソゴミムシダマシ								○				〔種の分布〕沖縄島、徳之島、奄美大島、トカラ列島、九州～本州、石垣島、西表島
	ベニモンキノコゴミムシダマシ			○				○			○		〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、奄美大島、トカラ列島、対馬、九州～本州、宮古島
	カラカネチビキマワリモドキ						○						〔種の分布〕久米島、沖縄島、南北大東島、奄美大島、トカラ列島、屋久島、九州、宮古島、来間島、多良間島、石垣島、西表島、与那国島
	オオクビカクシゴミムシダマシ				○				○				〔種の分布〕奄美諸島、宮古島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島、台湾（目録にはないが沖縄島も含まれる）
	ミナミエグリゴミムシダマシ			○		○			○				〔種の分布〕沖縄島、徳之島、奄美大島、トカラ列島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島、台湾、中国、インドシナ
	ナガニジゴミムシダマシ										○		〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、トカラ列島、屋久島、種子島、九州～本州、石垣島、西表島、台湾、中国、東南アジア
広域分布種	アオツヤキノコゴミムシダマシ			○							○		〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、トカラ列島、九州～本州、宮古島、来間島、石垣島、西表島、与那国島、台湾、インドシナ、フィリピン
	ハムシダマシ科												
	ヒゲブトハムシダマシ		○				○		○				〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、トカラ列島、九州～北海道、八重山諸島、台湾、中国、インドシナ、ネパール

◎　東・金城（1987）の目録には、コクヌストモドキ、リュウキュウスナゴミムシダマシが久米島が分布地として記されている。

表17　久米島の鞘翅目⑤

	見つかった種類 ＼ 調査地	リュウキュウマツを含むイタジイ林縁～林内 大原A	浦地川B	宇江城B	ヤンガーイチA	スハラC	スハラE	上溝一号A	白瀬二号A—J	白瀬二号C	白瀬一号E	東・金城（1987）の目録に記されている種および亜種の分布
	カミキリムシ科											
	コウノゴマフカミキリ		○	○			○					〔亜種の分布〕久米島
分布域が狭い	カスリドウボソカミキリ				○			○				〔亜種の分布〕久米島、沖縄島
	コブバネサビカミキリ				○		○					〔亜種の分布〕沖縄島
	クロオビトゲムネカミキリ				○		○					〔亜種の分布〕沖縄島
	アトモンチビカミキリ				○	○		○	○			〔亜種の分布〕沖縄島
	アヤモンチビカミキリ				○	○		○	○		○	〔亜種の分布〕沖縄島
固有種固有亜種	オキナワウスアヤカミキリ				○							〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、慶留間島
	オキナワキボシカミキリ	○										〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、南大東島
	ノブオケシカミキリ						○					〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、南大東島
	オキナワクワカミキリ				○							〔種の分布〕沖縄島、奄美大島
	オオシマヤハズカミキリ				○	○						〔種の分布〕久米島、沖縄島、沖永良部島、徳之島、奄美大島
	オキナワゴマフカミキリ				○							〔亜種の分布〕沖縄島、　徳之島、奄美大島、トカラ列島
	シロスジドウボソカミキリ							○				〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、池間島、宮古島、与那国島
分布域が広い	ホソガタヒメカミキリ								○			〔種の分布〕久米島、沖縄島、南大東島、徳之島、奄美大島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島
	リュウキュウヒメカミキリ				○	○						〔亜種の分布〕久米島、沖縄島、久場島、奄美諸島、トカラ列島、屋久島、九州～本州
	ヨコヤマヒメカミキリ				○							〔亜種の分布〕沖縄島、沖永良部島、徳之島、奄美大島、トカラ列島、屋久島、対馬、伊豆諸島、大州～本州、石垣島、西表島
	ヤノヤハズカミキリ				○							〔種の分布〕久米島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島、台湾
	フタモンサビカミキリ				○	○		○				〔種の分布〕沖縄島、阿嘉島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島、台湾
	ヒゲナガヒメカミキリ				○	○	○					〔種の分布〕久米島、沖縄島、南大東島、徳之島、奄美大島、トカラ列島、屋久島、対馬、九州～本州、八重山諸島、台湾
	ベーツヒラタカミキリ				○						○	〔種の分布〕沖縄島、徳之島、奄美大島、トカラ列島、屋久島、伊豆諸島、九州～本州、中国、インドシナ
広域分布種	ヨツスジトラカミキリ				○		○					〔種の分布〕沖縄島、奄美大島、沖永良部島、屋久島、種子島、九州～本州、宮古島、石垣島、西表島、与那国、朝鮮
	ワモンサビカミキリ				○	○	○					〔種の分布〕久米島、沖縄島、慶留間島、南北大東島、奄美諸島、トカラ列島、屋久、種子、九州～本州、八重山諸島、台湾、朝鮮

◎東・金城（1987）の目録には下記の種も久米島に分布する種として上げられている。

ケブトハナカミキリ、ヤエヤマトラカミキリ、ウスイロカノコサビカミキリ、タテスジドウボソカミキリ、ムモンアラゲサビカミキリ、オオキハネナシサビカミキリ、オキナワコブヒゲカミキリ、コゲチャサビカミキリ、モモブトトゲバカミキリ、スジシロカミキリ、堤（1978）には、オキナワハネナシサビカミキリが記録されている。

◎1995年5月にアマミリンゴカミキリ、スジシロカミキリ、オキナワコブヒゲカミキリ、ケブトハナカミキリ、ツシマムナクボカミキリ、アメイロカミキリ、タイワンシラホシサビカミキリなどを採集した。

以上、久米島には37種類のカミキリムシが記録されている。

まれている。

久米島の脈翅目、双翅目、膜翅目（表12）

久米島の鞘翅目①～⑤（表13～17）

高良・東（1974）によって53種類報告されている。今回150種類記録できた。各表を見てどの様な種類が、久米島で記録されたか確認してほしい。

カミキリムシとゴミムシダマシ・ハムシダマシおよびコガネムシの記録を東・金城(1987)の目録を使って分布地と併せた表をつくってみた(表13、16、17)。その結果、久米島だけに生息する種や亜種が見いだされた。他にも、クメジマツマキジョウカイ(固有種)、クメジマボタル（固有種)、オキナワマドボタル（固有亜種)、アオウバタマムシ（固有亜種)などが上げられる。これは、キクザトサワヘビやクメトカゲモドキ、リュウキュウヒダリマキマイマイなどと同様に、久米島で種分化した種類と考えられる。

久米島のクモ類、ゲジ類（表18）

今回採集したものの内、種類の分かったものは、現在46種類である。しかし、扱いの難しい種も多い。久米島のアオグロハシリグモは、沖縄島のものと異なり前肢の先がそれほど白くなく、川から離れた岩や崖、倒木上にいる個体がいた。川の中のヌマエビやサワガニ類以外に、陸上をはい廻するクメジマミナミサワガニや昆虫などを捕食するための適応なのであろうか。

久米島の腹足類（表19）

陸産貝類は、東正雄・東良雄・平田義浩（1992）によってまとめられ、1新亜種の記載を含めて55種類を記録している。久米島の固有種は4種類、固有亜種は1種類存在する。今回陸産貝類は10種類、水産貝類は8種類見つかった。

久米島の甲殻類（表20）

諸喜田・笠井（1984）のリストと今回新たに確認したコテラヒメヌマエビとコツノテナガエビを合わせると、ヌマエビ科は9種類、テナガエビ科は8種類になる。この内、ダム湖上流にまで分布を広げている種類は、トゲナシヌマエビ、オニヌマエビ、コンジンテナガエビの3種であった。これらはいずれも大型の個体であり、集中豪雨時にダムからあふれる水量の増した日などに稀に進入することができた個体の生き残りなのだろう。

コンジンテナガエビとミナミテナガエビが優占しているのは久米島の河川が比較的ゆるやかで、淵や小型の堰が多いためではないだろうか。

サワガニ類の中でクメジマミナミサワガニは様々な水辺環境に進出しており、♀は、流水域だけでなく、ダムや池などの止水域にも稚ガニを放出している。また、若い大型の個体や成体が森の林床をはい廻していることが多く、水辺を離れた陸上での適応が進んでいるように思われた。オキナワコカブトムシやイタジイの実を食べているのを確認した。沖

表18　久米島のクモ類、ゲジ類

見つかった種類 ＼ 調査地	畑地・草地・湿地												林縁－林内（林間ギャップ）											
	下流域					池・ダム等							河川（中流→上流）											
	大原A	宇江城B	白瀬下流A	儀間A	浦地川A	比嘉A	島尻A	山城A	スハラC	スハラEF	上江洲ダムA	上溝一号A	白瀬一号E	白瀬二号E	ヤンガーイチA	大原A	仲村渠E	奥武島A	上溝一号A	白瀬中流CDF	浦地川B	儀間HI	上江洲ダムAC	スハラABC	スハラEF	ヤンガーイチB	白瀬一号EFG	白瀬二号ABC	白瀬二号DEF
クモ目																												
キムラグモ科																												
キムラグモの一種																							○					
トタテグモ科																												
オキナワトタテグモ																							○		○			
ウズグモ科																												
マネキグモ																								○				
ヒメグモ科																												
ギボシヒメグモ																								○			○	○
イソウロウグモの一種※																				○			○	○	○		○	○
シロカネイソウロウグモ																								○				
チリイソウロウグモ																									○		○	
ヤリグモの一種※																									○			
オナガグモ																○												
オニグモ科																					○					○		
コゲチャオニグモ																					○				○			
ヤマシロオニグモ																						○		○			○	○
ホシスジオニグモ	○		○	○			○				○			○														
ヘリジロオニグモ					○																							
オオトリノフンダマシ																												○
チブサトゲグモ															○					○				○	○			
ナガマルコガネグモ		○																										
キジロオヒキグモ																										○		
スズミグモ															○		○					○					○	
ツツゲホウグモ																										○		
ミナミノシマゴミグモ※																○				○			○	○	○	○	○	○
オオジョロウグモ															○		○	○	○	○		○				○		○
ジョロウグモ																				○		○	○		○	○	○	○
タニマノドヨウグモ																					○							
オニグモ																					○					○	○	

| | | |

表19　久米島の腹足類

見つかった種類 ＼ 調査地	草地・畑地・湿地								林縁一林内											
	下流域、池、ダムなど								河川ぞい、林床											
	大原A（石灰岩地）	白瀬下流A	儀間A	浦地川A	比嘉A	島尻A	山城A	ヤンガーイチA	スハラC	ロハラEF	大原A（石灰岩地）	堂崎A	白瀬中流B	白瀬中流D	白瀬中流F	上江洲ダムA	スハラABC	スハラE	スハラF	白瀬一号ABC	白瀬一号DE	白瀬一号FG	白瀬二号AB	白瀬二号CD	白瀬二号EF
腹足類																									
原始腹足目																									
ヤマキサゴ科																									
陸産　ヤセオキナワヤマキサゴ											○														
アマオブネ科																									
水産　イシマキガイ			○																						
〃　フネアマガイ			○																						
中腹足目																									
ヤマタニシ科																									
陸産　アオミオカタニシ														○											
ミズゴマツボ科																									
水産　オキナワミズゴマツボ		○							○			○	○				○								
カワザンショウガイ科																									
ウスイロオカチグサ（陸産）										○			○						○						
トゲカワニナ科																									
トウガタカワニナ	○	○	○		○	○		○	○				○	○			○	○							
カワニナ科																									
カワニナ							○		○	○					○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
有肺目																									
サカマキガイ科																									
サカマキガイ			○		○		○					○													
モノアラガイ科																									
タイワンモノアラガイ			○		○		○	○																	
ヒラマキガイ科																									
ヒラマキモドキ						○				○			○												
柄眼目																									
キセルガイ科																									
陸産　ノミギセル															○					○					
ツヤギセル																○									
カサマイマイ科																									
オオカサマイマイ															○			○		○	○				
ナンバンマイマイ科																									
オモロヤマタカマイマイ（固有種）											○														
シュリマイマイ																			○						
リュウキュウヒダリマキマイマイ（固有種）																		○		○		○	○	○	
オナジマイマイ科																									
パンダナマイマイ	○		○							○															
オキナワウスカワマイマイ	○									○															

◎　東正雄・東良雄・平田義浩（1992）による上記以外の久米島の陸産貝類

フクダゴマオカタニシ、ケハダヤマトガイ、ヒラセアツブタガイ、ミジンヤマタニシ、クメジマゴマガイ（固有種）、リュウキュウゴマガイ、シリコケゴマガイ（固有種）、クビキレガイ、ウスイロヘソカドガイ、ホラアナゴマオカチグサ、ナガケシガイ、ノミガイ、シモチキバサナギガイ、スナガイ、マルナタネガイ、リュウキュウキセルガイモドキ、ニセノミギセル、サカヅキノミギセル、オカチョウジガイ、シリブトオカチョウジガイ、オオオカチョウジガイ、ナメクジの１種、ヤマナメクジ、キイロナメクジ、ナハキビ、コスジキビ、ヒメベッコウガイの１種、ヒラシタラガイ、マルシタラガイ、リュウキュウカドベッコウ、タネガシマヒメベッコウ、オキナワベッコウ、ベッコウマイマイ、ハクサンベッコウ属の１種、クメジママイマイ（固有亜種）、カドマルウロコケマイマイ、イトマンケマイマイ、トウガタホソマイマイ、オナジマイマイ、タママイマイ、ソメワケタワラ、アシヒダナメクジ。久米島には55種類が記録されている。

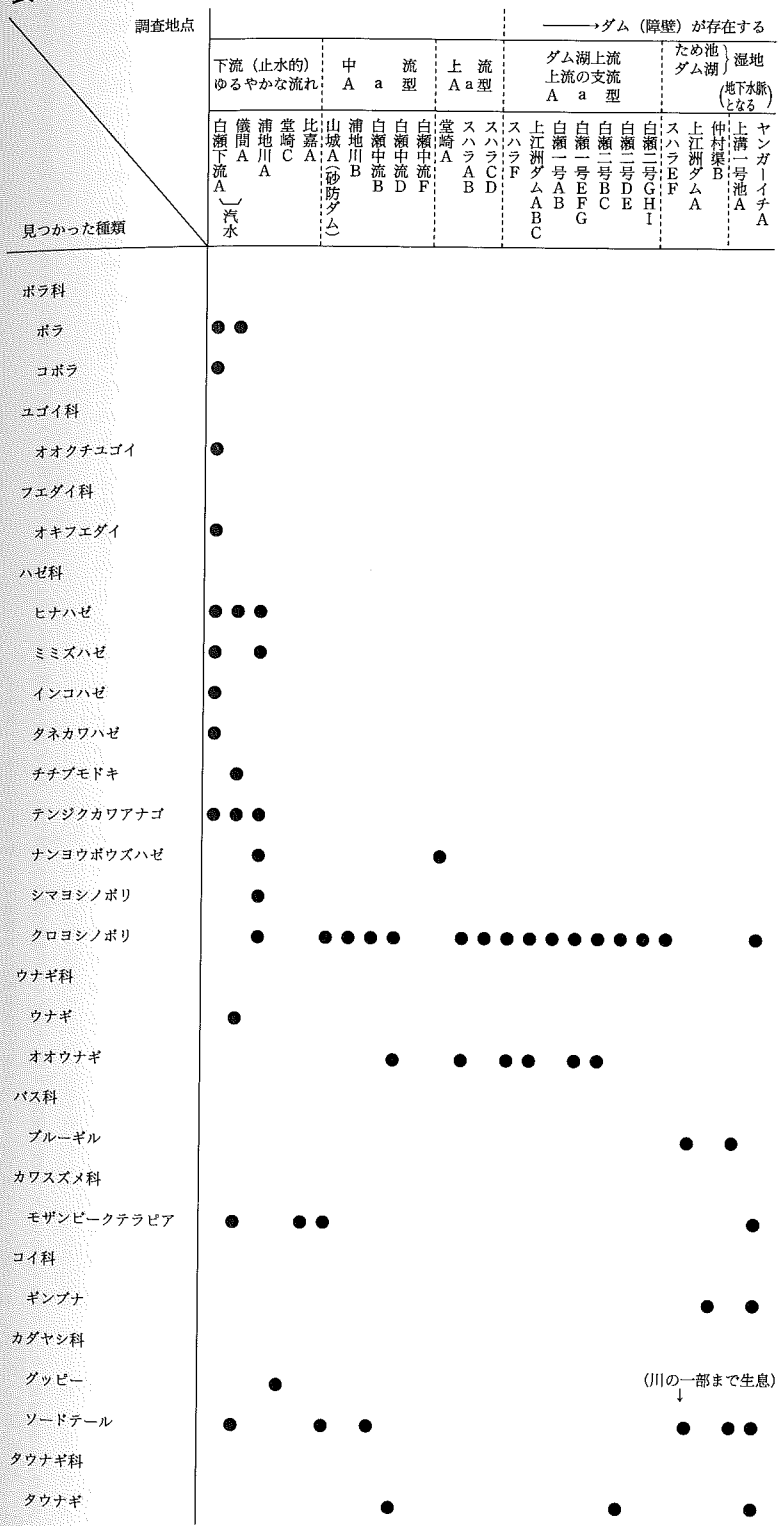
表20　久米島の甲殻類

諸喜田・笠井(1984)による流程分布の分けかた	種名＼調査地名	汽水 Cc 白瀬下流A	汽水 Cc 儀間A	下流 AaBb 浦地川A	下流 AaBb 白瀬中流B	→上流 Aa 浦地川B	→上流 Aa 山城A	→上流 Aa 白瀬中流D	→上流 Aa スハラC	→上流 Aa 白瀬中流F	→上流 Aa 堂崎A	ダム湖上流 支流 Aa スハラF	ダム湖上流 支流 Aa 上江洲ダムA	ダム湖上流 支流 Aa 白瀬二号CDE	ダム湖上流 支流 Aa 白瀬一号EF	川↓水路↓池 島尻A	ため池ダム湖 ヤンガーイチA	ため池ダム湖 上溝一号A	ため池ダム湖 スハラE	海との連絡のない支流域 ヤンガーイチB	海との連絡のない支流域 宇江城B	海との連絡のない支流域 儀間F	海との連絡のない支流域 儀間I
	ヌマエビ科																						
中流部群	ナガツノヌマエビ	●	●	●																			
中流部群	ツノナガヌマエビ			●																			
中流部群	ヒメヌマエビ			●																			
中流部群	コテラヒメヌマエビ			●																			
中流部群	ミゾレヌマエビ		●	●	●	●		●	●														
上流部群	オニヌマエビ							●		●	●				●								
上流部群	ヤマトヌマエビ			●				●															
全流域群	サキシマヌマエビ※																						
全流域群	トゲナシヌマエビ			●			●	●	●			●	●	●	●	●			●				
	テナガエビ科																						
感潮域群	フトユビスジエビ※																						
感潮域群	オオテナガエビ	●																					
中流部群	スベスベテナガエビ	●	●	●	●			●			●												
上流部群	コツノテナガエビ								●														
全流域群	ヒラテテナガエビ			●							●												
全流域群	コンジンテナガエビ			●	●	●	●		●					●	●								
全流域群	ミナミテナガエビ		●	●	●	●	●	●		●													
	イワガニ科																						
感潮域群	タイワンヒライソモドキのspA	●																					
感潮域群	ニセモクズガニ	●																					
感潮域群	和名なし (Varuna tomentosa)	●																					
感潮域群	ミナミアシハラガニ	●																					
感潮域群	ヒライソモドキ	●																					
感潮域群	オオベンケイガニ	●																					
感潮－中流域群	ベンケイガニ	●																					
感潮－中流域群	オオヒライソガニ	●	●																				
全流域群	モクズガニ					●		●	●														
	ミナミサワガニ科																						
上流域群	クメジマミナミサワガニ				●		●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
	サワガニ科																						
上流域群	オオサワガニ											●	●	●	●					●			
上流域群	アラモトサワガニ							●	●	●		●	●	●	●								

調査地名	調査日
白瀬下流A	1995.11. 5
儀間A	1995.11. 5
浦地川A	1995.11. 5
白瀬中流B	1995. 9.23
浦地川B	1995. 9.23
山城A	1995.11. 7
白瀬中流D	1995.11. 6
スハラC	1995. 3.29
	1995.11. 4
	1995.11. 5
白瀬中流F	1995.12.30
堂崎A	1995. 9.24
スハラF	1995.12.29
上江洲ダムA	1995.11. 7
白瀬二号CDE	1995. 3.30
	1995.11. 6
	1995.11. 7
白瀬一号EF	1995.11. 5
	1995.12.28
島尻A	1995.12. 4
ヤンガーイチA	1995. 7.13
上溝一号A	1995. 7.12
スハラE	1995. 7.14
ヤンガーイチB	1995. 7.13
宇江城B	1995. 7.13
儀間F	1995. 7.14
儀間I	1995.11. 4

※　諸喜田・笠井（1984）による記録。他にザラテナガエビを記録している。
◎　白瀬下流Aでは他にテッポウエビ科イソテッポウエビとスナガニ科ベニシオマネキ、儀間Aではカイミジンコ科の一種を記録している。
◎　クメジマミナミサワガニは、9月24日採集の♀は、113卵を抱卵、11月7日採集の♀は121稚ガニを抱えていた。
◎　オオサワガニは11月7日採集の♀は98卵を抱卵していた。

表21　久米島の魚類



◎　幸地（1984）によると淡水魚の中には他にメダカ、タイワンキンギョ、コイの記録がある。

久米島の魚数の特徴

◎クロヨシノボリとオオウナギの2種類がダム湖上流にまで進入している。

◎1960年代に逸出したとされるソードテールは4河川1ダム2池で確認され、広域に分布している。

◎ヤンガーイチAのクロヨシノボリは、現在この池に生息しているモザンビークテラピアを移入する際に進入したのではないかと思われる。

◎ブルーギルが上江洲ダムAと上溝一号池Aで確認された。これらの水域では、ソードテール以外の魚類（フナやテラピアなど）は未確認に終わった。ブルーギルによる捕食圧がソードテール以外の魚類に及ぼす影響が非常に大きいことが予想される。

◎タウナギの生息が確認できた。池の湿地だけでなく、河川の中流や上流域の淵でも見つかった。「関東地方以南の本州と沖縄県が自然分布の範囲とされるが、生息の確認は少ない。」（日本の淡水魚）とされ、メダカとともに、沖縄のものは、希少個体群としてレッドデータブックに載せられている。また、本種の生息の確認は、沖縄島とのつながりを考える上で重要である。

表22　久米島の両生・ハ虫類

見つかった種類 ○若および成体 ●卵と幼生 ＼ 調査地点		周辺がリュウキュウマツ林およびリュウキュウマツ－イタジイ林、イタジイ林																		周辺がリュウキュウマツ－イタジイ林およびイタジイ林											
		開けた水域					やや開けた水域							林縁 林内				一部開けた水域 中流		林内を流れる河川 上流（源流） Aa型、Aa－Aao型										
		白瀬下流A	上江洲ダムA	ヤンガーイチA	上溝一号池A	仲村渠A	スハラEF	スハラC（砂防ダム）	スハラD（砂防ダム）	儀間I	白瀬二号B	山城A（砂防ダム）	島尻A	仲村渠E	上溝一号B	宇江城B	儀間F	儀間H	浦地川B	白瀬中流E	堂崎A	上江洲ダムAC	白瀬一号AB	白瀬一号E	スハラCD	スハラF	スハラAB	白瀬二号DE	白瀬二号GHI	白瀬二号F	ヤンガーイチB
両生類																														
平地の水田池	ヌマガエル											○							○											
大きな池・ダム	ウシガエル		◉	●	◉	◉	◉	●	●					○					○			○								
	ニホンカジカガエル							○		○		○	◉								○	○	○	○							
林縁・池・湿地	ヒメアマガエル						○																								◉
	オキナワアオガエル						◉			○												○		○	○		○				
河川、源流、湿地	リュウキュウアカガエル						◉	◉		○												○	◉	○	◉		◉	○			○
爬虫類																														
平地の河川、池	スッポン				○																									
林縁草地	アオカナヘビ							○	○												○									
	ミナミヤモリ														○		○	○				○	○	○	○		○	○		
林縁－林内	オキナワキノボリトカゲ	○		○			○	○		○				○	○	○				○				○	○			○		
	ヘリグロヒメトカゲ			○										○	○	○		○												
	ガラスヒバァ			○													○													
林縁－林内 河川、湿地	ハブ						○																							
	ヒメハブ						○															○								
林内	クメトカゲモドキ																											○		○
	リュウキュウヤマガメ																											○	○	

◎　爬虫類では、ホウグロヤモリ、バーバートカゲ、オキナワトカゲ、メクラヘビ、アカマタ、リュウキュウアオヘビ、キクザトサワヘビ、ハイの記録が当山（1984）によって報告されている。

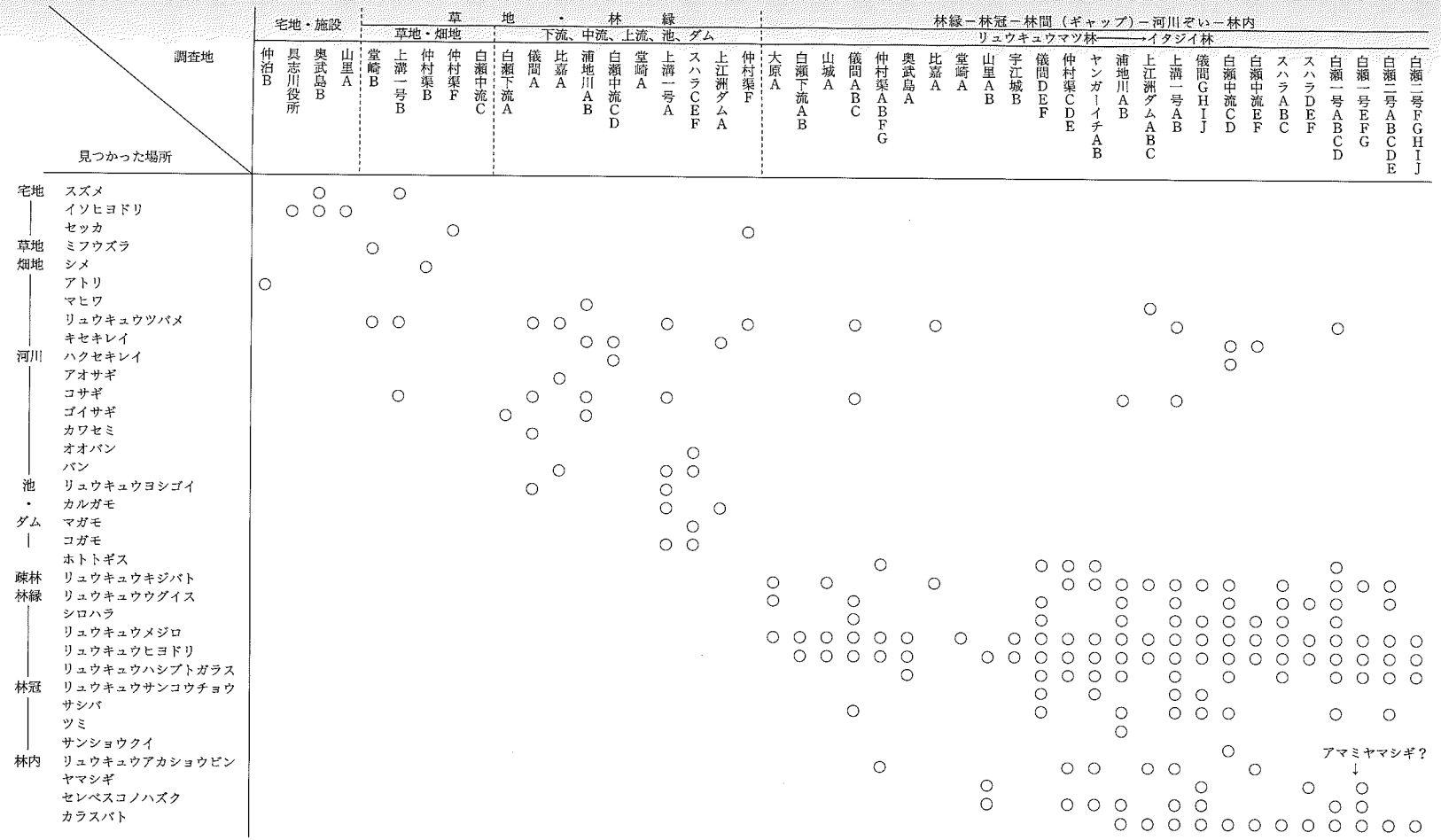
◎　スッポンが新たに見つかった。大型の個体であったために標本にできずそのまま放流した。

◎　両生類は6種類確認した。ヌマガエル以外はすべて幼生も確認できた。ウシガエルが多数生息する水域では、ヌマガエルの発見はなかった。ウシガエルの捕食圧がヌマガエルに顕著にあらわれていると思われた。河川性カエルのリュウキュウアカガエルの幼生が、池や砂防ダムでも見つかった。止水域での産卵適応も沖縄島以上に進んでいるのかもしれない。

◎　1995年5月2日にキクザトサワヘビを白瀬川中流の支流域で発見した。また、リュウキュウアオヘビやアカマタなども捕獲した。詳細は次回に報告する。

◎ 1995年5月2日にキクザトサワヘビを白瀬川中流の支流域で発見した。また、クエラエコアヘ

表23　久米島の鳥類



◎ 鳥類は、35種類を確認した。沖縄島で見い出されるシジュウカラ、ヤマガラ、サンコウチョウ、ズアカアオバトなどは確認できなかった。また、留鳥の中、久米島で年間見い出されるのは例えば森の中ではキジバト、ウグイス、メジロ、ハシブトガラス、ツミ、セレベスコノハズクの6種にすぎず、夏鳥としてサンコウチョウ、ホトトギス、アカショウビンが、秋から春にかけてサシバやサンショウクイ、ヤマシギ（アマミヤマシギ）、カラスバト、シロハラなどが渡って来るのだろう。水辺の鳥も一部が留鳥であり、多くは冬鳥として渡ってくる可能性が高い。

表24　久米島に欠けている小動物

	イタジイ林内、林間（ギャップ）―― 林縁			
	源流	上流	中流	
河川形態	干上り ―― Aao型 しみ出し状	AaoAa移行型 瀬がはっきりしない ―― Aa型 瀬と淵が明瞭	AaBb移行型 1蛇行区に2回以上瀬と淵をくりかえす	開けた場所（平地）の草地、畑地、湿地での小動物の生息の状況
（止水域）	（一次的たまり）　（たまり）	（たまり状淵）　（崩壊等でせきとめられてできた池）	（増水時にできる遊水池、湿地）	
流水環境で生息する小動物	リュウキュウアカガエル →	ナミエガエル　イシカワガエル ホルストガエル　ハナサキガエル　⇨ 幼生が台地部中流域まで生息する		止水性カエルはシロアゴガエル以外すべて生息する
	リュウキュウルリモントンボ →	オニヤンマ　リュウキュウトゲオトンボ　リュウキュウハグロトンボ　オキナワコヤマトンボ カラスヤンマ　オキナワミナミヤンマ　オキナワオジロサナエ　オキナワサナエ		止水性のトンボは飛来種以外すべて生息する。
	トゲエラカゲロウ属の一種 グマガトビケラ、クメセンブリなど →	タイワンシマアメンボ、シロタニガワカゲロウ、ヒメヒラタカゲロウ属の一種 タイワンモンカゲロウ　オキナワヒゲナガカワトビケラなど		
	クメジマミナミサワガニ オオサワガニ、アラモトサワガニ →	サカモトサワガニ →		
林内および林縁の止水環境に生息する小動物	リュウキュウカトリヤンマ オオメトンボ →	ヤブヤンマ　オオシオカラトンボ　リュウキュウトンボ オオハラビロトンボ ―― （湿地）ホソミシオカラトンボ		止水性カメムシ類、止水性甲虫もほぼすべて生息する
	コセアカアメンボ →	オキナワマツモムシ →		
	オキナワアオガエル	リュウキュウオオイチモンジシマゲンゴロウ イボイモリ・シリケンイモリ → ハロウェルアマガエル		淡水魚はギンブナ、メダカ、タウナギなどが生息する。
河川の周辺で生活する昆虫		オキナワハンミョウ →		
大径木や広い森が必要と思われる小動物また、テリトリー分割のために広い森が必要と思われる小動物	カラスバト セレベスコノハズクなど	ケナガネズミ、オキナワトゲネズミ、リュウキュウイノシシ、オリイオオコウモリ、ヤンバルテナガコガネ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、ホントウアカヒゲなど		草地のバッタ類もほぼすべて生息する。
	リュウキュウアカショウビン ツミなど	オキナワシジュウカラ、リュウキュウサンショウクイ ズアカアオバトなど		草地、湿地の鳥たちもほとんど生息している。
	久米島に生息している小動物	久米島に生息していない小動物		

縄島中上流域に生息するサカモトサワガニは確認できなかった。

久米島の魚類（表21）

久米島の両性ハ虫類（表22）

久米島の鳥類（表23）

久米島に欠けている小動物（表24）

これまでに見てきたように、久米島は河川環境が存在し、森の周辺には湿地や池が見られるにもかかわらず、そこで生息する小動物の多くが欠けている。これらは、沖縄島では、河川の中上流域に生息する河川性小動物であり、源流や林縁の池や遊水地、湿地で生活する林縁の止水性小動物である。おそらく、久米島は、これらの環境と小動物を一度に失ってしまうという大海進を過去に経験し、その後、再び今日のような流水環境や林縁の池、湿地を取り戻した後もここで生活できる小動物の多くが進入できなかったのではないだろうか。その結果、生き残った少数の小動物が、久米島固有の種や亜種、その他特有の変異をもつに至る種へと変化したのではないだろうか。

源流域と小さな森を残すだけの島が再び、沖縄島とつながり、開けた環境の湿地や草地のほぼ全ての種類と石灰岩地の森や疎林で生活する一部の種類が久米島にたどりついた。久米島は沖縄諸島の他の島々の中で、最も離れた島であったがために、森や河川形態の形成とつながりは、再び陸橋の失われる日まで脆弱であったと思われる。このことが原因で、流水環境と林縁の池、湿地の小動物が欠けてしまったのであろう。稀に進入できた小動物、例えば、ハブでは、久米島特有の模様をもつものがいる一方で、沖縄島のものとほとんど変わらない模様をもつものが同じ久米島にいるように……。クメジママイマイに対し、シュリマイマイが同じ島に生息するように……。前者は交雑し、後者は交雑しなかったとはいえ、同じ種群が二度にわたって久米島に進入したことは否定できないことの様に思える。

また、開けた環境の維持には、今は絶滅していないリュウキュウジカやリュウキュウムカシキョン（失われた生物－沖縄の化石－による）が貢献していたのではないかとも想像している。

報告を終えて

久米島での調査は、これから始まるような気がする。おそらく何度訪れても、興味のつきない島である。しかし、島の自然の改変と変貌はあまりに激しく将来が憂慮される。

最後に、調査、報告書作成にあたって沖縄県立博物館の久貝勝盛さん、嵩原建二さん、西村亜希子さん、沖縄市郷土博物館の比屋根満さん、琉球大学風樹館の佐々木健志さん、ＧＡ・ＳＨＯＷの木村正明さん、植物分類学研究者の中島邦雄さん、千葉県立中央博物館の倉西良一さん、黒住耐二さん、駒井智幸さん、沖縄昆虫同好会の長嶺邦雄さんには、貴重な助言や協力をしていただいた。厚くお礼申し上げる。

また、地図の入手では、仲里村企画開発課の太田喜功さん、具志川村教育委員会の中根聰さんにお世話になった。さらに、沖縄県立教育センターの上門清春さんには、調査、資料作成等で、大変お世話になった。厚くお礼申し上げる。

参考文献

安里進・渡辺賢一　1985　沖縄県のトンボ＜安里進トンボコレクション寄贈目録＞　名護博物館

朝比奈正二郎　1991　日本産ゴキブリ類　中山書店

東清二・金城政勝　1987　沖縄産昆虫目録　新星図書

石田昇三・石田勝義・小島圭三　杉村光俊　1989　日本産トンボ幼虫・成虫検索図説　東海大学出版会

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝　1985　原色日本甲虫図鑑（II）　保育社

上野益三編　1986　川村日本淡水生物学　北隆館

大城逸郎　1987　失われた生物―沖縄の化石―　新星図書

大城安弘　1986　琉球列島の鳴き虫類　新報出版

奥谷禎一・伊藤修四郎・日浦勇　1987　原色日本昆虫図鑑（下）　保育社

沖縄県天然記念物調査シリーズ第33集　キクザトサワヘビ生息実態調査報告書［諸喜田茂充、VI白瀬川上流部の底生動物相と現存量］　1993　沖縄県教育委員会

尾本和義　1979　1977年7月上旬の久米島の蝶　琉球の昆虫　No.3

神谷厚昭　1984　琉球列島の生いたち　新星図書

川谷禎次編　1992　日本産水生昆虫検索図説　東海大学出版会

環境庁編　1993　日本の絶滅のおそれのある野性生物―レッドデータブック(脊椎動物編　・　無脊椎動物編)　財団法人自然環境研究センター

川那部浩哉・水野信彦　1989　日本の淡水魚　山と渓谷社

木崎甲子郎　1985　琉球弧の地質誌　沖縄タイムス社

吉良哲明　1985　原色日本貝類図鑑　保育社

黒沢良彦・久松定成・佐々冶寛之　1985　原色日本甲虫図鑑（III）　保育社

小浜継雄　1978　久米島のトンボ類　琉球の昆虫　No.2

小林桂助　1985　原色日本鳥類図鑑　保育社

佐藤文保　1993　本部町の自然の状況とシイ林に生息する小動物について（本部町動植物総合調査）　本部町教育委員会

佐藤文保　1991　企画展「沖縄のトンボ～その将来」　沖縄市郷土博物館

佐藤文保　1994　沖縄市緑地帯の小動物　沖縄市立郷土博物館

白水隆・川副昭人・若林守男　1976　原色日本蝶類図鑑　保育社
高野伸二　1992　フィールドガイド日本の野鳥　財団法人日本野鳥の会
高橋真弓　1980　久米島産リュウキュウヒメジャノメについて琉球の昆虫　No.4
高良鉄夫・東清二　1974　久米島の昆虫相（久米島県立自然公園候補地学調査報告）　沖縄県
田中洋　1977　久米島の蝶類　採集・観察報告（1975年7月）　琉球の昆虫　No.1
田中洋　1977　久米島で採集したトンボ類　琉球の昆虫　No.1
千木良芳範　1992　ワクドツキジグモ　Pasilobus bufoninus (SIMON) の久米島から記録　沖縄生物学会誌
堤隆史　1978　久米島のカミキリムシ科　琉球の昆虫　No.2
当山昌直　1984　沖縄群島の両性爬虫類相（III）―渡嘉敷島・久米島―　沖縄県立博物館紀要第10号
当山昌直・太田英利　1986　リュウキュウアカガエルの久米島からの記録　AKAMATA
当山昌直・戸田守　1993　オキナワアオガエルの久米島からの記録　ＡＫＡＭＡＴＡ
友国雅章　1993　日本原色カメムシ図鑑　全国農村教育協会
仲宗根幸男・伊礼美和子　イワガニ科、スナガニ科の特徴と各属及び種の分類検索表（河川域）
長嶺邦雄　1987　久米島の5月の採集報告（1986年）　琉球の昆虫　No.11
日本野鳥研究会　1993　改訂沖縄県の野鳥―写真で見る野鳥図鑑　沖縄出版
日本鞘翅目学会編　1984　日本産カミキリ大図鑑　講談社
日本生物教育会沖縄大会「沖縄の生物」編集委員会編　1984　全国大会記念誌「沖縄の生物」沖縄生物教育研究会［諸喜田茂充・笠井英美　甲殻類、黒住耐二　沖縄の淡水貝類、西島信昇　陸水環境の特徴、幸地良仁　沖縄の淡水魚類、佐久本敏　沖縄島周辺離島の植物など　久米島に関するものあり］
渡部忠重　1984　続原色日本貝類図鑑　保育社
渡部忠重・小管貞男　1982　標準原色図鑑全集３　貝　保育社
日高敏隆他編　1984　蝶分布と系統―日浦勇選集―　蒼樹書房
比嘉正一　1982　久米島の蝶類（1977）　琉球の昆虫　No.6
比嘉正一　1983　沖縄県の蝶類（Ｉ）　アゲハチョウ科　琉球の昆虫　No.7
比嘉正一　1983　沖縄県の蝶類（II）　シロチョウ科　琉球の昆虫　No.8
比嘉正一　1984　沖縄県の蝶類（III）　マダラチョウ科　琉球の昆虫　No.9
比嘉正一　1985　沖縄県の蝶類(IV)　タテハチョウ科・テングチョウ科　琉球の昆虫　No.10
比嘉正一　1987　沖縄県の蝶類（V）　シジミチョウ科（VI）　ジャノメチョウ科（VII）

セセリチョウ科　琉球の昆虫　№11
東正雄　1982　原色日本陸産貝類図鑑　保育社
東正雄・東良雄・平田義浩　1992　久米島の陸産貝類相　日本貝類学雑誌
藤野隆博　1972　日本淡水エビ類の分類と見分け方　Nature Study　18巻
前田憲男・松井正文　1989　日本カエル図鑑　文一総合出版
Masataka SATŌ and Masaaki KIMURA, 1994 Discovery of a New Firefly of the Genus Luciola(Coleoptera Lampyridae) from Kume-jima of the Ryukyu Islands, Elytra.
宮武頼夫・加納康嗣　1992　検索入門　セミ　バッタ　保育社
三宅貞祥　1991　原色日本大型甲殻類図鑑Ⅰ,Ⅱ　保育社
森正人・北山昭　1993　図説日本のゲンゴロウ　文一総合出版
八木沼健夫　1986　原色日本クモ類図鑑　保育社
安松京三・朝比奈正二郎・石原保　1988　原色日本昆虫大図鑑（第三巻）　北隆館
L.LEE GRISMER,HIDETOSHI OTA and SATOSHI TANAKA, 1994 Phylogeny,Classification, and Biogeography of Goniurosaurus Kuroiwae (Squamata:Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with Description of a New Subspecies, ZOOLOGICAL SCIENCE
渡辺賢一・小浜継雄　1986　沖縄のトンボ　沖縄県立博物館

久米島の鳥類について

The Birds of Kume Island, the Ryukyu archipelago.

嵩原建二・久貝勝盛・瀬名波任

はじめに

沖縄本島南部の西方、約100km洋上に久米島がある。これまで久米島における鳥類の記録については、古くはKuroda (1925) の研究があり、また岡田ら (1959) によってまとめられた沖縄産動物目録の中でエゾヒヨドリやルリビタキなど10種が報告されている。その後は1973年に本格的な生物調査が実地され、池原 (1974) によって42種の鳥類が記録され、この記録が鳥類についてのまとまった報告となっている。しかしながら、鳥類相についての検討はなされず、今後確認種数が増える可能性を指摘するにとどまっている。

筆者らは1991年2月から1994年12月までに延べ10回にわたり、久米島を訪れる機会に恵まれ、また久米島総合調査の一環として、久米島の鳥類相を明らかにするため島内各地で鳥類調査を行った。その結果、これまでの鳥類記録を整理して、暫定的に鳥類目録を作成した。また、新たに生息分布が確認された種を含む若干の知見を得たので報告する。

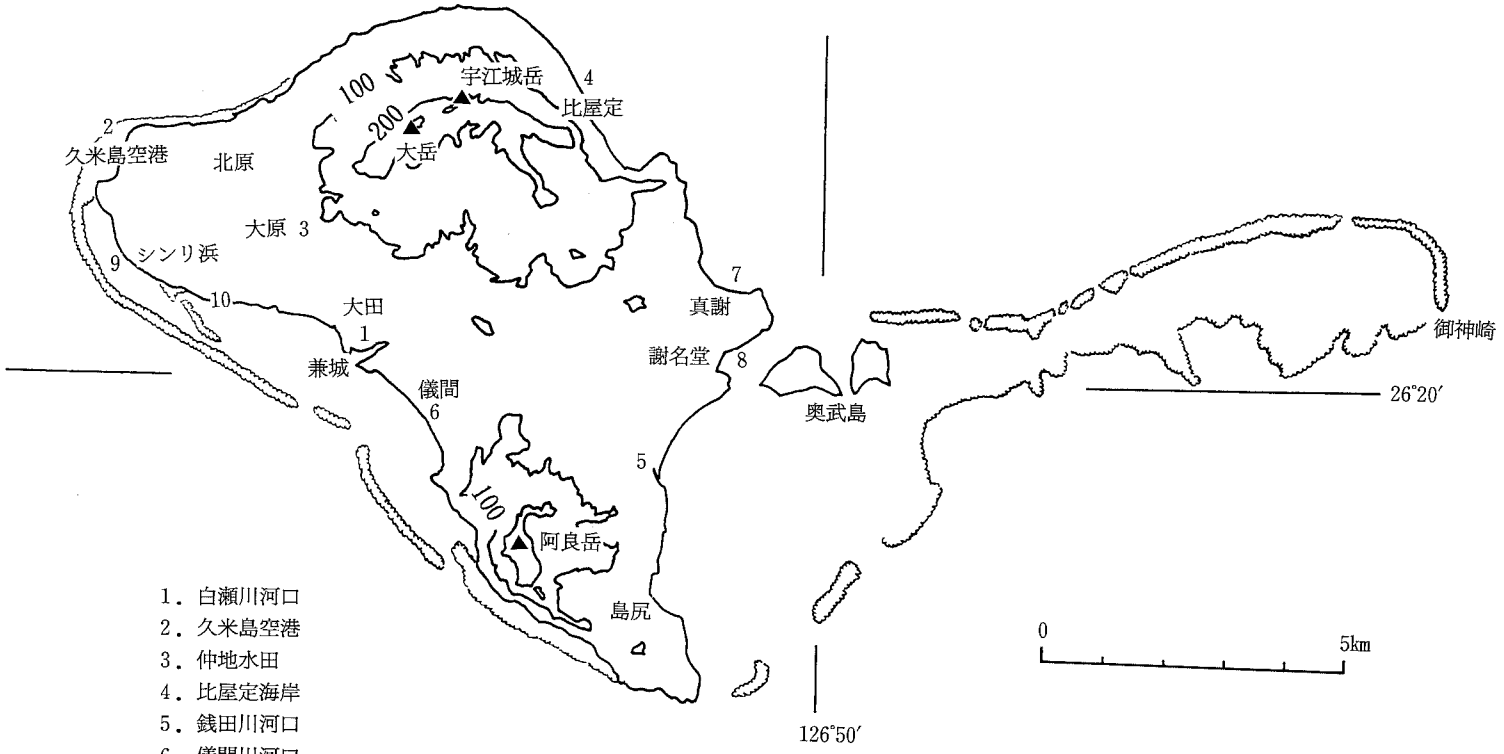
本報告をまとめるにあたり、調査に便宜を図って戴いた仲里村教育委員会及び同教育委員会の大田喜功氏 (現村企画課)、具志川村教育委員会及び同委員会の山城英明氏 (現消防組合) と中根聰氏に厚く御礼申し上げる。また貴重な鳥類情報をよせて下さった仲里村儀間の故仲吉列雄氏、沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏と大城亀信氏の両氏、久米島総合調査自然担当調査員の方々に厚く感謝申し上げる。さらに原稿の整理を手伝って頂いた宮平真由美嬢にもお礼申し上げる。

調査地概要

[地理的位置と気象]

久米島は沖縄本島南部、那覇市の西方洋上に所在し、位置は東経126°42′～126°50′、北緯26°17′～26°24′の範囲にある (図1)。周囲は約48kmで、島の東西は約11km、南北は約12kmあり、島面積は約59㎢である。人口は具志川村と仲里村の両村合わせて約11,000人である。

久米島測候所 (1961年から1990年の統計) によると、年平均気温は22.4℃で、平均降水量は約2300㎜である。このことから久米島は多雨な亜熱帯気候とされる。



1．白瀬川河口
2．久米島空港
3．仲地水田
4．比屋定海岸
5．銭田川河口
6．儀間川河口
7．真謝海岸
8．泊海岸
9．シンリ浜
10．清水小学校前海岸

図1　久米島の位置と地形概観図（中村ら、1981を改変）

[地形と地質]

地形的には島の北西部に宇江城岳（標高309m）がそびえ、南西方向に連なって島最高峰の大岳（標高326m）などの山塊が見られる。宇江城岳南側は海岸に向かって次第に低くなる台地が連続し、北側は階段状の狭い台地をなしている（西島，1975）。一方、島南部の島尻地域には独立的に阿良岳（287m）がそびえ、ここを中心とする丘陵地域が広がっている。

河川は宇江城岳を源流域とする長さ5.3kmの白瀬川が久米島における最長の河川で、他には宇江城岳や阿良岳に隣接する丘陵地域に源流部をもつ儀間川（4.2km）や銭田川（4.7km）がある。また阿良岳を源流域とする島尻川が島の東方に流れ出る。

地質は島の大部分が古期琉球火山岩区に属する第三紀中新統から鮮新統の安山岩質火山岩からなる（中村・木庭，1981）。しかし、島南西部の北原や大原などには第四紀更新統の琉球石灰岩地域が広がり、ヤジャーガマなどの鍾乳洞の発達も見られる。また、海岸低地（特に島の北側から西側）には「イリビシ石灰岩」とよばれる第四紀完新統の離水した礁原がみられる。

[植生]

久米島の植物については、初島・天野（1974）によって、帰化種も含め148科749種12変種が確認されている。この中で琉球列島では久米島だけに分布する種や久米島と他のわずかな島にしか分布しないような注目すべき植物として、リュウキュウヒメハギやカワラナデシコなど10種が上げられている。

植生については、新納ら（1974）によって、現存植生図が作成され、久米島の自然植生として山地森林地域ではスダシイ群落を認め、また、石灰岩を母岩とする大原や北原およびその海岸線の低地部からオオバギークロツグ群落等が識別されている。

さらに、海岸植生としては、イソフサギ群落、イソマツ群落、ミズガンビ群落など11群落を識別し、風衝群落としてはガジマル群落とオキナワシャリンバイーバケイスゲ群落の2群落が認めている。さらに河川河口部にはマングローブ群落の1群落を認めている。

鳥類調査の概要

調査概要については、表1および表2に分けて示したように、1993年4月から1994年12月までの2年間にわたって行われた県立博物館総合調査の一環として鳥類調査が実地された。また、調査資料の一部については、過去に調査した未発表の資料も活用した。したがって、調査期間は1991年2月から1994年12月までの3年10ヶ月におよび、調査日は延べ28日であった。

調査方法は、島内の県道や農道および林道をくまなく車で走り、車上からのロードセンサス法と、時速10km以下のスピードで夜間車上ロードセンサス法による鳥類調査を実地し

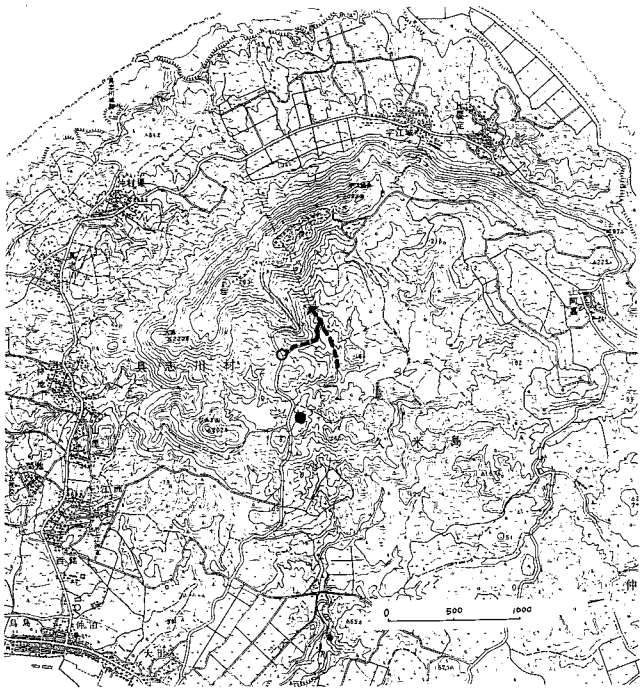


図２　宇江城岳周辺における調査地

●：定点調査地（ダルマ山園地）

○：ラインのはじまり　➡：ラインの終わり

（国土地理院発行、1/25000地形図、久米島を改変）

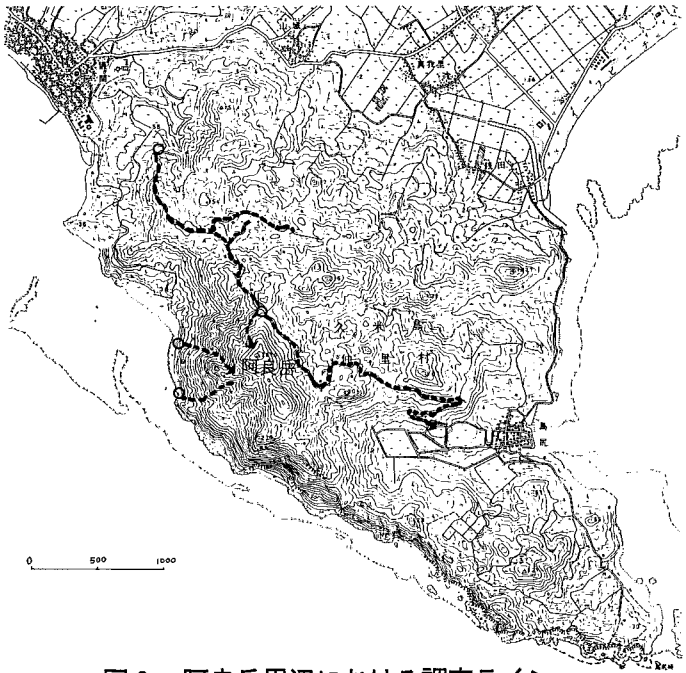


図３　阿良岳周辺における調査ライン

○：ラインのはじまり　➡：ラインの終わり

（国土地理院発行、1/25000地形図、久米島南部を改変）

た。特に宇江城岳、阿良岳などの森林地域においては林内での歩行によるロードセンサス及び夜間車上ロードセンサスにより、ライン幅100m（片側50m）の範囲で目撃及び鳴き声で確認される鳥類を記録した。

ワシタカ類のアカハラダカについては、９月初旬に南下する個体数のカウントを行うため、宇江城岳近くのダルマ山園地（公園）で早朝30分から２時間程度の定点調査を行った（図２）。また、白瀬川河口や仲地、泊干潟などでも30分の定点調査を行った。

調査地の範囲としては、久米島及び久米島に橋梁でつながり隣接した奥武島の両島全体及びその周辺海域をその調査範囲とした。また島内における河川や森林地域などの各環境ごとの鳥類の出現状況をみるため、重点的に調査する地域を設定した。

その調査地域としては、低地部では白瀬川河口、久米島空港周辺及び隣接する海岸道路、銭田川河口、泊海岸、真謝海岸、比屋定海岸、シンリ浜、清水小学校前の海岸、儀間川河口、奥武島などであった（図１）。

山地森林地域としては、宇江城岳周辺及び白瀬川上流部、阿良岳及びその周辺（阿良岳林道）、ダルマ山園地公園、上江洲１号・２号ダム周辺などであった（図２、図３）。

表１　鳥類調査概要

調査期日	天気	調査時間	主な調査地	主な調査方法(調査距離)
1991年２月１日	晴	11：00－12：00	白瀬川上流・山里	林内ラインセンサス
1991年８月29日	晴	11：20－12：00	白瀬川上流	林内ラインセンサス
1991年８月29日	晴	14：20－14：50	奥武島周辺・泊海岸	定点調査
1991年８月30日	晴	９：50－10：18	白瀬川上流・阿良浜	林内ラインセンサス
1991年９月１日	晴	５：00－７：00	白瀬川上流・上江洲ダム	林内ラインセンサス
1991年９月１日	晴	７：30－９：40	白瀬川河口・具志川城跡	定点調査
1991年11月26日	晴	11：20－12：30	白瀬川河口・仲地	定点調査
1991年11月27日	晴	８：50－17：40	仲地・タチジャミ・銭田川	海岸ラインセンサス
1992年７月22日	晴	14：10－17：00	宇江城岳・大田周辺	林内ラインセンサス
1992年７月23日	晴	５：02－７：30	阿良岳	林内ラインセンサス調査
1992年７月23日	晴	10：00－12：20	宇江城岳・白瀬川上流	林内ラインセンサス調査
1992年７月24日	晴	８：25－10：20	阿良岳（南斜面）	林内ラインセンサス調査
1992年７月24日	晴	15：17－18：40	阿良岳（南斜面）	林内ラインセンサス調査
1992年７月25日	晴	８：57－10：53	阿良岳（東斜面）	林内ラインセンサス調査
1992年７月25日	晴	15：56－16：20	謝名堂・泊海岸干潟	定点調査
1992年７月26日	晴	８：30－16：40	宇江城岳・白瀬川上流	林内ラインセンサス調査
1992年７月27日	晴	８：30－16：56	宇江城岳・白瀬川上流	林内ラインセンサス調査
1992年７月28日	晴	８：30－10：00	宇江城岳・白瀬川上流	林内ラインセンサス調査
1992年７月28日	晴	15：17－15：40	謝名堂海岸干潟	定点調査
1992年７月28日	晴	16：00－17：00	宇江城岳・白瀬川上流	林内ラインセンサス調査
1992年７月28日	晴	20：20－21：00	宇江城岳・白瀬川上流	夜間調査
1993年３月24日	曇	終　日	全　島	車上ラインセンサス調査
1993年３月25日	曇	終　日	全　島	車上ラインセンサス調査
1993年３月26日	曇	終　日	全　島	車上ラインセンサス調査

表1　続き

調査期日	天気	調査時間	主な調査地	主な調査方法(調査距離)
1993年3月27日	曇	終　日	全　島	車上ラインセンサス調査
1993年9月10日	晴	13：52－15：20	〃	〃
1993年9月11日	晴	9：23－14：30	〃	〃
1993年9月12日	晴	7：32－11：35	〃　(ダルマ山園地)	〃
1994年3月16日	曇	終　日	〃	〃
1994年3月17日	大雨	終　日	〃	〃
1994年3月18日	曇	終　日	〃	〃
1994年9月15日	晴	〃	〃	〃
1994年9月16日	晴	〃	〃　(ダルマ山園地)	〃
1994年9月17日	晴	〃	〃　(　〃　)	〃
1994年12月26日	晴	11：30－22：00	〃	〃
1994年12月27日	小雨	7：30－22：00	〃	〃

表2　夜間鳥類調査概要

調査期日	天気	調査時間	主な調査地	主な調査方法（距離km）
1991年11月26日	小雨	19：45－21：00	宇江城岳・阿良岳林道	車上ラインセンサス(7.4)
1992年7月22日	晴	20：00－22：30	宇江城岳周辺林道	車上ラインセンサス
1992年7月25日	晴	20：00－24：00	宇江城岳・阿良岳林道	車上及び林内ラインセンサス
1992年7月28日	晴	20：20－21：00	宇江城岳・白瀬川上流	車上及び林内ラインセンサス
1993年3月24日	晴	20：55－21：27	阿良岳林道	車上ラインセンサス(6.0)
1993年9月10日	晴	20：25－21：47	宇江城岳・阿良林道	車上ラインセンサス(6.0)
1993年9月11日	晴	21：00－23：16	宇江城岳・阿良林道	車上及び林内ラインセンサス(6.0)
1994年12月26日	晴	20：00－22：30	阿良岳林道・儀間川	車上ラインセンサス(6.5)
1994年12月27日	晴	19：30－23：30	阿良岳林道・宇江城岳	車上ラインセンサス(6.5)

調査結果と考察

1．久米島の鳥類相について

今回の鳥類調査の結果、久米島及び奥武島から約80種の鳥類が記録され、その中にはこれまでに報告にない68種の野鳥が新たに記録された。したがって、今回の調査記録とこれまでに記録のある種を総合して「久米島の鳥類目録」に示したように、14目36科115種（亜種及び帰化鳥を含む）の鳥類が記録されたことになる。その内訳は留鳥20種、渡り鳥94種（夏鳥7種、旅鳥及び冬鳥83種、迷鳥4種)、帰化鳥1種となった。このことから留鳥の種数は全体比で約17%（帰化種を除く）とわずかで、渡り鳥が主体の鳥相である。こうした傾向は県内における一般的な傾向であり、久米島でも同様な状況であるものと考えられた。

以下留鳥及び渡り鳥の出現状況などについて述べる。

1）留鳥の生息状況について

確認された20種の留鳥の出現状況を見ると、県内でごく普通種であるメジロ、ヒヨドリ、キジバト、ウグイス、リュウキュウツバメ、セッカ、スズメ、ハシブトガラスなどは島内のいたるところで目撃された。また水田や河川、河口部などの水辺の環境ではカイツブリ、バン、リュウキュウヨシゴイ、カワセミなどが目撃されたが、確認できなかった種はシロハラクイナやヒクイナなどのクイナ科の鳥であった。

カワセミについては、池原（1976）によって白瀬川河口での記録がみられるが、今度の調査では銭田川と儀間川（佐藤文保，私信）の2カ所で目撃された。したがって、久米島ではこれらの河川にわずかな個体群が生息しているものと思われる。

リュウキュウヨシゴイは仲地の水田で目撃され、それ以外の場所では目撃することができなかったので、個体数はそう多くないであろう。

島の西側や北側に広がる海岸低地の離水した礁原では、シロチドリやイソヒヨドリ、ウグイスなど、農耕地ではミフウズラ、セッカ、メジロ、キジバトなどが確認された。また宇江城岳や阿良岳のような森林環境ではカラスバト、キジバト、メジロ、ヒヨドリ、ハシブトガラスなどが目撃されたが、沖縄島などで普通に見られるズアカアオバト、シジュウカラ、リュウキュウサンショウクイ、コゲラ、ヤマガラなどの5種は確認することができなかった。

夜行性の留鳥としては、後述するように夜間調査において、フクロウ科のコノハズクとアオバズクが阿良岳林道や宇江城岳周辺で確認されたが、オオコノハズクは確認されなかった。これら以外に夜行性のヤマシギ類として、琉球列島の固有種であるアマミヤマシギが久米島から初めて確認された。本種については、分布や出現率等について、検討を加えまとめて後述する。

池原（1974）は、久米島からメジロ、ヒヨドリなど7種の留鳥を報告し、また比嘉ら（1994）は13種を記録している。今度の調査で確認された留鳥は20種であったので、留鳥の確認種数は増加している。しかしながら、表4に示したように、島の成り立ちが古くイタジイ林を主体とした森林植生を有する沖縄島（34種）や八重山諸島（35種）に比べると少く、宮古諸島の21種に近い留鳥数である。このことは前述したように森林地域に生息するシジュウカラ、ヤマガラ、ズアカアオバト、リュウキュウサンショウクイ、コゲラと低地に生息するシロハラクイナ、ヒクイナなどの確認ができなかったことによる。したがって、久米島ではシジュウカラ科、キツツキ科、サンショウクイ科などに属する県内では留鳥とされる種を欠いている鳥類相であると思われる。しかしながら、これら森林性の未確認鳥類については、これらの種が久米島にもともと分布していなかったのか、あるいは分布していたが森林の改変等によりすでに激減してしまったのかを確認することには資料が乏しく、詳細に言及できない。

これら未確認種の中で、低地の水辺などに生息するヒクイナについては本種が警戒心が強いため、開けた場所にでてくることは少ないので、生息してはいるが目撃されなかった可能性がある。しかしながら、シロハラクイナについては、確認することができなかったので久米島には生息分布を広げていないものと考えられる。

なお、ここで扱う留鳥の中にはアマミヤマシギ、シロチドリなどのように繁殖の確認をしてはいないが、留鳥として扱った種も含まれている。また、ツミとカルガモについては、冬季だけの確認であるため冬鳥としての渡来であることが考えられ、留鳥から除外した種もある。さらに県内では留鳥に扱われているが、久米島で繁殖の可能性は低いと考えられるムラサキサギはまれな冬鳥として扱った。したがって、今後留鳥の種数は若干変動するものと思われる。

表3　各島地域別の留鳥種数の比較

調査地域	留鳥種数	全体比(%)	総確認種数	備考・引用文献
沖　縄　島	34	14.0	242	与那城他（1984）
宮古諸島	21	9.3	226	久貝・山本（1981）
八重山諸島	35	11.9	294	八重山野鳥の会（1983）
久　米　島	20	17.5	114	帰化種1種をのぞく

2）渡来種の生息状況について

(1)　低地部河川や海岸環境等における生息状況

イ．サギ類

白瀬川や銭田川、儀間川などの河川沿いではコサギ、チュウサギ、ダイサギ、アオサギ、アマサギ、ゴイサギなど9種が確認されたが、これらの種はほとんどが旅鳥および冬鳥として、河川や海岸、干潟などに渡来してくる鳥類である。これらの種の中には八重山地方では留鳥として生息するムラサキサギが確認（銭田川、1994年12月26日、亜成鳥1羽）された。本種はおそらく久米島に冬鳥として小数が渡来してくるものと考えられる。また、他にはまれな渡り鳥であるアカガシラサギの儀間川における確認（大城亀信私信）もあり興味深い。

ロ．ガンカモ類

仲地の水田、銭田川、儀間川、島尻ダムなどでコガモ、カルガモ、マガモ、オナガガモ、スズガモ、キンクロハジロの6種が確認された。これらの種は冬季に県内各地の河川や海岸、干潟、湖沼などにふつうに渡来するカモ類である。この中でカルガモについては、県内では留鳥とされているが、久米島では冬季に確認されてい

るので、おそらく冬鳥としての渡来であろう。

興味深い記録としては過去に、コハクチョウ（仲吉列雄私信）が確認されている。したがって、ガンカモ類は7種確認されたことになる。

ハ．シギ・チドリ類

チドリ科ではコチドリ、ムナグロ、メダイチドリ、タゲリなど9種、シギ科ではクサシギ、キアシシギ、ダイシャクシギ、キョウジョシギなど16種が仲地水田、謝名堂海岸、真謝海岸、久米島空港周辺、儀間川、泊海岸などの地域で目撃された。

これらのほとんどは渡来してきて生息するが、渡来地となる真謝海岸や泊海岸は年々埋立てが進行し、生息地の減少傾向がみられる。

ニ．クイナ類

渡来種としてはオオバン1種のみが銭田川で目撃された。本種は数少ない冬鳥として県内各地の湖沼・河川に渡来する。県内ではヒメクイナ、ツルクイナなど5種のクイナ類が渡来するとされているので(沖縄野鳥研究会，1993)、今後これらのクイナ類の渡来する可能性もあろう。

(2) 低地部の海岸林や農耕地・草原、山地森林環境等における出現状況

農耕地や山地森林地域とその林縁に渡来する渡り鳥としては、夏鳥としてサンコウチョウ、アカショウビン、ホトトギスの3種が渡来し、秋季から冬季にはヒタキ科、ツグミ亜科のシロハラ、アカハラ、ジョウビタキ、エゾビタキ、アカヒゲの一種、オジロビタキなど6種、ホオジロ科ではアオジ、クロジ、ミヤマホオジロ、カシラダカなど4種が確認されている。この中で秋季に天然記念物のアカヒゲの一種が初確認されたことには興味深いものがある。なお、本種については渡りの問題も含めて後述する。

海岸近くの林縁やモクマオウ林、草原などでは、セキレイ科のハクセキレイとキセキレイ、ホオジロハクセキレイ、マミジロタヒバリ、ムネアカタヒバリの5種（1亜種含む)、ツグミ亜科ではツグミ、ハチジョウツグミの2種（1亜種含む)、ムクドリ科ではムクドリ、ホシムクドリの2種、アトリ科のマヒワ、アトリ、シメの3種、そしてヤツガシラ科のヤツガシラなどが確認された。この中でアトリとホシムクドリについては県内でも記録が少なく、特筆すべき記録であろう。

ワシタカ類ではチゴハヤブサ、ミサゴ、アカハラダカ、チョウゲンボウ、ハヤブサ、サシバ、ノスリの7種が確認され、このうちサシバを除く6種については久米島から初確認であった。なお、これらのワシタカ類については渡りの状況も含めて、別の報文とする。

(3) 周辺海域及び海岸における生息状況

県内には夏季にアジサシ類の渡来がみられるが、久米島周辺の近海ではベニアジサシ、オオミズナギドリなどがトンバーラ付近で目撃され、エリグロアジサシとコアジサシが奥武島近くの干潟で目撃された。したがって、これらの種は久米島周辺の離島や岩礁、埋め立て地等で繁殖している可能性がある。

また、冬季にはウミウが南海岸の波間に漂っていたり、ノッチの見られる離れ岩に40から50羽集まって越冬しているのが目撃された。さらに真謝海岸ではまれに渡来するウミネコが目撃された。従って、これらの種は県内では冬鳥とされるので同地域で越冬しているものと思われる。

(4) 夜間調査で出現した鳥類

夜行性の鳥類を確認するため、宇江城岳や阿良岳などの森林地域を中心に夜間調査を実地し、表4のように留鳥のコノハズクや渡り鳥のアカショウビン、ヤマシギ、シロハラなど12種を確認した。しかしながら、県内で留鳥とされるオオコハズクは確認できなかった。夜間調査で出現した昼行性の鳥類については、そのねぐらを観察した結果である。したがって、夜行性の鳥類確認についてはおおよそカバーしているものと思われ、留鳥としてはコノハズク、アオバズク、アマミヤマシギの3種であった。

表4　夜間鳥類調査結果

調査期日	主な調査地	確認鳥類（個体数）	備考
1991年11月26日	宇江城岳・阿良岳林道	コノハズク(1)アオバズク(1)ヤマシギ(2)	
1992年7月22日	宇江城岳周辺林道	コノハズク(5)キジバト(2)メジロ(2)	
1992年7月25日	宇江城岳・阿良岳林道	メジロ(2)アカショウビン(1)キジバト(1)	
1992年7月28日	宇江城岳・白瀬川上流	確認なし	
1993年3月24日	阿良岳林道	ヤマシギ(2)	
1993年9月10日	宇江城岳・阿良岳林道	キジバト(1)	
1993年9月11日	〃	メジロ(1)	
1994年12月26日	阿良岳林道	ヤマシギ(13)アマミヤマシギ(2)シロハラ(1)ヒヨドリ(1)	
1994年12月27日	儀間川	ゴイサギ(1)カルガモ(1)	
1994年12月27日	阿良岳林道	ヤマシギ(9)アマミヤマシギ(1)	

2．分布や記録的に興味深い鳥類について

1）アマミヤマシギ　*Scolopax mira*

表6に示したように、1994年12月26日と翌12月27日の両日、阿良岳林道における夜間ラインセンサス調査（図3）によって、1から2個体がヤマシギと混在して確認された（写真1）。その出現状況については、表5に示したように、5.5kmの林道夜間ラインセ

ンサスにおける１kmあたりの出現率（N/km）を算定して示した。その結果、アマミヤマシギの出現率は0.36から0.18（平均0.27）となり、ヤマシギより出現率は低かった。

本種は南西諸島の特産種としてこれまで奄美大島・徳之島・沖縄島北部・渡嘉敷島のみに生息することが知られ（Mark，1991）、環境庁（1991）の日本版レットデータブックによると「絶滅危惧種」にランクされている種である。しかし、今度の調査によって久米島で初めて生息確認され、その生息分布域が広がることになる。しかしながら、冬季だけの生息確認であり、久米島に定着し留鳥として生息しているかどうかは不明である。また、表４に示したように夏季の夜間調査では確認することができず、冬季にヤマシギと混在して生息するので、ヤマシギと同様に渡りを行っている可能性も考えられる。したがって、今後調査を継続してして繁殖の有無を確認することやバンディングして渡りの有無を確認する必要がある。

なお、本種は1994年２月に沖縄県指定の天然記念物となり、保護の手がさしのべられることになった。

表５　阿良岳におけるアマミヤマシギの出現状況

調査期日	調査時間	天気	調査距離（km）	個体数（羽）		出現率（N／km）	
				アマミヤマシギ	ヤマシギ	アマミヤマシギ	ヤマシギ
1994/12/26	19：40－20：45	晴	5.5	2	13	0.36	2.36
1994/12/27	19：46－20：50	晴	5.5	1	9	0.18	1.64

２）ムラサキサギ　*Ardea purpurea manilensis*

1993年12月26日に銭田川で若鳥１羽（写真２）が目撃された。本種の県内における分布は、八重山諸島以南に留鳥として生息しているので、久米島にはまれな冬鳥として渡来するものと思われる。なお、繁殖地である八重山諸島以外では、宮古島、沖縄島、渡嘉敷島などにもまれに渡来記録が見られる（沖縄野鳥研究会，1993）。また北海道や本州、四国、九州など本土でもまれな旅鳥及び冬鳥として確認されている（日本鳥学会、1974）。

３）ホシムクドリ　*Sturnus vulgaris*

1993年12月26日に謝名堂にある野球場の草地でムクドリ40羽余りの群れの中に１羽が混じっていた（写真３）。本種は県内各地でまれな迷鳥として渡来し、沖縄島、伊江島、石垣島、南大東島（未発表）などで記録されている。今回の記録は久米島おける初めての記録であろう。

4）タゲリ　*Vanellus vanellus*

1993年12月26日に謝名堂の野球場草地でムナグロやムクドリの群れと一緒に採餌する2個体を目撃した（写真4）。また同日、真謝海岸でも1個体が目撃された。

本種は数少ない冬鳥として、県内各地の水田や草地などに渡来する。

5）アカヒゲ　*Erithacus komadori*　の一種

1994年9月にダルマ山園地公園で♀1個体が目撃されている。本種は琉球列島の固有種で、奄美諸島以北にアカヒゲ（基亜種）*Erithacus komadori komadori* の1亜種、県内では沖縄島及び周辺離島に留鳥として生息するホントウアカヒゲ *E. k. namiyei* と先島諸島にウスアカヒゲ *E. k. Subrufa* の2亜種が生息するとされる（日本鳥学会，1974）。今回確認された種は♀の個体であったので、どの亜種に該当するか同定が困難である。しかしながら、川路ら（1989）によって、奄美諸島に生息する亜種アカヒゲが冬季に渡りをすることが指摘され、沖縄島北部においてもしばしば本亜種の目撃記録がみられる（嵩原，1990）。また、アカヒゲの渡りについては、森岡（1990）はトカラ列島以北のウスアカヒゲとアカヒゲを夏鳥であると推論し、冬季に奄美諸島以南で越冬する可能性を指摘して、さらにウスアカヒゲは屋久島以北で繁殖しているある個体群であろうとする見解もある。

いずれにせよ今回の目撃は秋季における久米島でのはじめての確認例であり、留鳥としての確認ではないと思われるので、川路ら（1989）及び森岡（1990）が指摘したようにアカヒゲの渡りを支持するものと思われる。

6）ヤツガシラ　*Upapa epops saturata*（写真5）

1994年3年17日に具志川村総合グラウンドで4羽、北原で2羽、シンリ浜で2羽、西銘で1羽、儀間で2羽の合計11羽が目撃された。これだけの個体数が確認された例は県内ではおそらく初めての記録であろう。

本種は世界に1属1種の珍鳥とされ、個体数はかなり少ないとされる。県内では春季に琉球列島を通過する際に、各地で1～2個体の観察記録があるまれな旅鳥である。今度の調査では1994年3月に確認され、また前年の1993年3月25日にも島尻の集落内で2羽目撃された。したがって、久米島が本種の恒常的な渡りのルートとなっている可能性がある。

7）カラスバト　*Columba janthina janthina*

白瀬川上流域の宇江城岳や島尻川上流の阿良岳、比屋定の海岸林などの森林地域3箇所で確認された。おそらく山地森林地域を中心に繁殖・生息しているものと思われる。

本種は伊豆諸島や小笠原諸島、琉球列島などの島嶼を中心に生息し、いくつかの亜種にわけられている（日本鳥学会，1974）。

8）オオチドリ　*Charadrias asiaticus veredus*

久米島空港草地でムナグロの群れの中に混じって１羽確認された。県内では沖縄島や与那国島、宮古島、伊江島などでまれに確認されているまれな旅鳥である。

9）サンショウクイ　*Pericrocotus divaricatus divarieutus*

久米島では県内のふつうに生息する留鳥であるリュウキュウサンショウクイ *P. d. tegimae* は確認できなかったが、冬季に渡来してくるものと考えられるサンショウクイが、1994年12月27日に仲地の水田近くで１羽目撃された。

3．久米島における貴重種等の生息状況について

ここで扱う貴重種としては、(1)その地域に固有な種、(2)琉球列島に固有な種、(3)国及び県指定天然記念物、(4)環境庁（1991）によって示された絶滅危惧種や危急種等にランクづけられた保護すべき種をその範囲とした。

調査の結果、表６に示したように、(1)の該当種がなく、(2)の該当種はアカヒゲ、アマミヤマシギの２種であった。また、(3)に該当する種としては、カラスバト、アカヒゲ、コウノトリ、アマミヤマシギの４種が確認された。この中で留鳥はカラスバトとアマミヤマシギの２種であり、それ以外は渡来種である。

(4)のランクづけによる絶滅危惧種としては、前述の天然記念物該当種のコウノトリ、アマミヤマシギに一致し、その他危急種や希少種としてはカラスバト、アカヒゲ、チュウサギ、エリグロアジサシ、ミサゴなど10種であった。したがって、こうした貴重種が生息及び渡来する地域として、久米島の自然環境は重要であり、河川や水田などの水辺環境や森林地域の保全を図る必要があろう。

表６　久米島における貴重種の確認

種　名	特別天然記念物	天然記念物	環境庁編（1991）		
			危惧	危急	希少
コウノトリ	◎	・	◎	・	・
カラスバト	・	◎	・	◎	・
アカヒゲ	・	◎	・	◎	・
アマミヤマシギ	・	◎*	◎	・	・
ミサゴ	・	・	・	◎	・
ハヤブサ	・	・	・	◎	・
コアホウドリ	・	・	・	・	◎
コハクチョウ	・	・	・	・	◎
コアジサシ	・	・	・	・	◎
チュウサギ	・	・	・	・	◎
ベニアジサシ	・	・	・	・	◎
エリグロアジサシ	・	・	・	・	◎

＊は1994年２月に沖縄県指定天然記念物となった。

4．調査地域別の鳥類確認状況

鳥類の確認状況としては一部重複になるが、環境保全や自然観察会等の資料として活用できるように、調査地別に出現した鳥類について、低地部及び山地森林部に分けて概説する。なお、鳥類の出現地や期日等については「久米島の鳥類目録」を参照すること。

1）低地部海岸及び河川地域

(1) 白瀬川河口（図１）

久米島最大の河川で、宇江城岳(326m)を源流部に5.3kmの長さを持つ。河口部は広く、最近赤土の堆積が認められるが、干潮時に干潟が出現する。河岸近くにわずかにヒルギ類の定着も見られる（写真７）。

ここでは海岸線近くに生息するクロサギや冬季に干潟に渡来するダイサギ、アオサギ、チュウサギ、コサギなどのサギ類の他、ムナグロ、イソシギ、キアシシギなどのシギ・チドリ類が確認された。しかしながら、銭田川や儀間川のようにアシ原やヒメガマなどの湿地性植物が少なく、こうした場所に比べ、目撃される種類数は少ないように思える。

(2) 久米島空港周辺（図１）

島の西側半分を取り囲むように発達した広大な離水した礁原が見られ、空港もその上に築かれている。植生は地を這うようなクサトベラ、イボタクサギ、モンパノキの他、ミズガンピ群落などが見られ、またモクビャッコウ、ミルスベリビユなど典型的な海岸植生がみられる。空港は滑走路を除くとチガヤを主体とした草原になっている（写真８）。

ここでは留鳥のシロチドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、セッカ、メジロなどが年中見られる他、冬季にはムナグロ、チュウシャクシギ、ダイサギ、マミジロタヒバリなどの渡り鳥も見られる。ここからはまれな鳥類であるオオチドリも目撃された。

ここで注目すべきことは、本地域ではシロチドリが夏・冬問わず確認できるので、本地域が本種の繁殖地となっている可能性が高い。このことからその繁殖地としての環境保全を図る必要性があり、できるだけ改変をさけ、他の鳥類にとっても風をさけた休息地として利用される海岸植生もそのまま保存していくことが重要であろう。

(3) 仲地水田（図１）

かつて県内では米どころとして知られた証を今に残す水田地域で、唯一の棚田になった水田が見られる（写真９）。

ここでは水辺を利用する留鳥として、クイナ科のバン、サギ類のリュウキュウヨシゴイが目撃され、周辺の農耕地や集落ではセッカ、リュウキュウツバメ、キジバト、イソヒヨドリなどが目撃された。

旅鳥や冬鳥としての渡り鳥では、シギ・チドリ類のコチドリ、タカブシギ、タシギ、クサシギ、ヒバリシギ、アオアシシギ、サギ類ではチュウサギなどが目撃され、カモ類ではオナガガモ（写真６）が目撃された。また、ワシタカ類ではミサゴ、サシバが見られ、まれな冬鳥であるサンショウクイ科のサンショウクイも目撃された。このことから久米島では水辺を利用する渡り鳥が渡来する数少ない場所のひとつになっている。したがって、本地域は鳥類の重要な渡来地であることと同時に、久米島がかつての水田地帯であったことを示す歴史的にも貴重な場所であり、今後ともに保存が望まれる。

(4) 比屋定海岸（図１）

比屋定の集落から北海岸に至る急坂を下ると、農耕地と護岸が構築された海岸線にでる。本地域の海岸線も離水礁原が広がる地域で、空港周辺と同様な海岸低地の植生を持つ環境が見られる。また海岸線沿いにはコンクリート護岸が約１km近く構築されているが、その内側にオオハマボウを主体とする海岸林が残存し、さらにその内側にはサトウキビ畑が広がっている。

ここではセッカ、ウグイス、イソヒヨドリなどの留鳥の他、シロハラ、アオジ、ジョウビタキ、モズ、ミサゴ、サシバ、イソシギなどの渡り鳥が目撃された。リーフの縁では留鳥のクロサギがしばしば目撃され、冬季にはウミウも見られた。

なお、比屋定集落にある太陽岩近くのしげみでは冬季にオジロビタキが目撃され、周辺森林にはシロハラ、アオジが渡来する。

(5) 銭田川河口周辺（図１）

河口部はアシ原になっているが、上流に向うにつれ水面にホテイアオイやパラグラスが一面覆うような景観になる。周辺環境はほとんどがサトウキビを中心とした農耕地である（写真10)。

ここでは水辺を利用する留鳥のバン、カイツブリ、カワセミの他、冬季には冬鳥のオオバン、ダイサギ、アオサギ、コサギ、コガモ、スズガモ、イソシギなどが目撃された。周辺の農耕地やアシの原には他にシロハラ、アオジ、ジョウビタキなど冬鳥が渡来し、セッカ、ウグイスなどの留鳥が生息していた。ここで特筆すべきことは、留鳥のカワセミが確認されたことと、冬鳥（？）のムラサキサギが確認されたことであろう。

なお、隣接する仲里村野球場の草地ではタゲリ、ムクドリ、ホシムクドリ、ムナグロ、ツグミなどの冬鳥が見られた。

(6) 儀間川河口及びその周辺（図１）

河口部に小規模なマングローブが見られ、河床部にはヒメガマやパラスラスなどの

湿地性植物が見られる。周辺には発電所、製糖工場があり、儀間の集落及び農耕地に囲まれている環境である。

ここではカルガモ、チュウサギ、ダイサギ、アオサギ、クサシギ、タシギ、ハクセキレイ、コガモ、ゴイサギ、アマサギ、コサギなどの水辺を利用する渡り鳥を確認することができた。留鳥ではイソヒヨドリ、セッカ、ハシブトガラス、カワセミ、バン、リュウキュウツバメなども生息し、後背地の農耕地などではミフウズラが見られる。冬季には河口近くでウミウが餌を探していた。

本地域で注目すべきことは、冬鳥の渡来が多くみられることである。また、久米島で唯一まとまったマングローブ林がみられることから、その保全に留意することが重要である。そして、そのことが野鳥を含む河川に生息する生物の保護につながるものと思われる。

(7) 真謝海岸（図１）

海岸線の埋立が進行中で、一部の海岸線が内海状に残されている。しかし、今後も埋立は続くであろう（写真11)。

ここでは海岸の干瀬に冬鳥のウミネコ、ダイサギ、アオサギ、タゲリなどが越冬し、コーラルを敷き詰めた埋立地ではトウネン、メダイチドリ、キョウジョシギ、ハマシギなどが羽を休めていた。また水路などにはハクセキレイやキセキレイなども見られる。留鳥としては、クロサギ、イソヒヨドリ、リュウキュウツバメなどが目撃された。

(8) 泊海岸干潟（図１）

かつて、泊海岸と奥武島の間に小規模な干潟がみられたが、現在では埋立がすすみ、干潟は消失している。

一部の干潟が埋立されずに残っていた1991年から1993年の調査では、ダイシャクシギ、ソリハシシギ、アオアシシギ、キョウジョシギ、ムナグロ、ダイゼン、メダイチドリなど砂泥質の干潟を好む鳥類の渡来が確認された。しかし、今日ではその姿はみられず、1994年12月の調査では、キアシシギ、コサギ、イソシギの３種を確認しただけである。したがって、渡来種の減少傾向が認められる。

なお、隣接する奥武島では、海岸沿いのモクマオウ林にマヒワやモズなどが渡来する。

(9) シンリ浜（図１）

空港滑走路の南側に隣接し、沖合いには島の西側を取りまく離水した礁原がベルト状に発達していて、干潮時には無数の干瀬が出現する。海岸線は砂浜になっているため、海水浴場として利用され、リゾートホテルや海浜公園が設置されている。

ここでは海岸干潟に渡り鳥のムナグロとダイゼンや留鳥のシロチドリなどが目撃さ

れ、リーフ近くではクロサギが目撃された。

海岸林としてのモクマオウ林や海浜公園の草地などではイソヒヨドリ、メジロ、ウグイスが見られ、冬季にはシロハラ、ツグミ、アオジが渡来する。また、春先にはヤツガシラが草地で餌をさがす光景がしばしば見られた。

(10) 清水小学校前海岸（図１）

海岸近くに二重のノッチがあるキノコ岩が見られ、また沖合いには島の西側を取り囲むように発達した離水した礁原が延びており、地形的にも興味深い地域である。

ここでは冬季にキノコ岩に休息する40羽から50羽ほどのウミウの群れが見られるほか、潮が引いた海岸干潟では冬鳥のアオサギ、ダイサギ、ムナグロ、キョウジョシギや留鳥のシロチドリ、クロサギなどがみられる。冬季にはまれに海岸近くの農耕地でチゴハヤブサが出現する他、サシバ、チョウゲンボウなどが見られる。留鳥ではセッカ、リュウキュウツバメなどが生息する。

西方に隣接する具志川村総合グラウンドの草地では、冬季にハクセキレイ、ホオジロハクセキレイ、ツグミなどの他、ヤツガシラの群れを目撃することができた。

2）山地森林部丘陵地域

(1) 宇江城岳周辺（図２）

標高326m の宇江城岳の東斜面に広がるイタジイを中心とする常緑広葉樹林地域で、白瀬川の源流部にあたる。この宇江城岳頂上には自衛隊の基地が置かれている。

調査地は白瀬川上流部（源流部）とそこにつながる林道、ダルマ山園地などでおこなった。

ここでは留鳥として、メジロ、ヒヨドリ、キジバト、カラスバト、ハシブトガラス、ウグイスなどが確認され、ダルマ山園地公園では帰化鳥のアミハラを目撃した。また夏季にはサンコウチョウ、アカショウビン、ホトトギスが渡来し、秋季にはアカハラダカやエゾビタキの渡来がみられた。アカハラダカについては、1993年９月12日の早朝定点カウントで1000羽余り記録された。冬季にはここで越冬するシロハラ、アオジなどが目撃された。

夜間調査ではコノハズクとアオバズクが目撃されたが、ヤマシギ類は確認されなかった。

ここで特筆すべきことは、前述したように国指定天然記念物のアカヒゲの一種とカラスバトが確認されたことである。

(2) 阿良岳周辺（図３）

島の南東部儀間から島尻地区にいたる山地地域で標高287m の山である。ここには若

いイタジイやウラジロガシなどを中心とする常緑広葉樹林が広がり、儀間から山地を横切るように阿良林道（全長約6㎞）が走っている。ここでは南側の海岸線から細い沢の2本をセンサスし、また阿良林道から山頂までの林内のセンサスを実地した。さらに、阿良岳林道を車上からロードセンサスし、夜間調査も実施した（写真12)。

ここでは留鳥として、カラスバト、メジロ、ヒヨドリ、キジバト、ハシブトガラス、ウグイスなどが確認された。また夏季には宇江城岳と同様サンコウチョウ、アカショウビンが渡来し、秋期にはアカハラダカやエゾビタキが確認された。冬期にはここで越冬するシロハラ、サシバ、キセキレイなどが生息し、夜間調査では夜行性のヤマシギ、アオバズクなどが目撃された。また隣接する島尻川上流のダム湖では、カルガモ、オナガガモ、コガモも渡来していた。

ここで特筆すべきことは、前述したようにアマミヤマシギを確認したことである。したがって、天然記念物等の貴重種としてはカラスバトとアマミヤマシギの2種が生息している重要な地域であることから、環境保全に留意する必要がある。

5．調査の課題

今度の鳥類調査ではおおよその鳥類相の把握を中心に調査をすすめてきたので、シロチドリやアマミヤマシギなど留鳥の繁殖確認が不十分であった。そのためには繁殖時期に集中した継続的調査をすすめる必要があるものと思われる。

要　約

1．久米島において1991年から1994年にかけて鳥類調査を行い、これまでの調査記録と合わせて14目36科115種（亜種及び帰化鳥含む）の鳥類目録を作成した。その内訳は留鳥20種、渡り鳥94種（夏鳥7種、旅鳥及び冬鳥が83種、迷鳥4種）帰化鳥1種となった。

2．久米島で確認された留鳥は、全体比が約18％（帰化鳥除く）と少なく、シジュウカラ科、サンショウクイ科、キツツキ科などに属する県内では留鳥とされる種を欠き、渡り鳥を主体とした鳥相であった。

3．確認された鳥類の中では、特筆すべきこととして琉球列島の固有種であるアマミヤマシギの生息が初めて確認され、その出現率（N/㎞）は平均0.27であった。また他にはムラサキサギ、ホシムクドリ、オオチドリなどまれな鳥類の渡来も多数確認された。

〈引用文献〉

比嘉展寿・前考浩・城間恒宏・江口克之・知念満・喜納幹雄・平嶋健太郎・古川貴哉・真栄康弘. 1994. 沖縄島周辺における鳥類の島嶼生態学的研究・沖縄島嶼研究(12)11-24.

初島住彦・天野鉄夫. 1974. 久米島の植物. 久米島県立自然公園候補地学術調査報告. p. 11-39. 沖縄県.

池原貞雄, 1974. 久米島の陸上脊椎動物. 久米島県立自然公園候補地学術調査報告. p.89-89. 沖縄県.

久貝勝盛・山本晃. 1981. 宮古諸島の鳥類目録. 沖生教研会誌第14号. p.15-28. 沖縄生物教育研究会.

環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－脊椎動物編, 330pp. 日本野性生物研究センター

KURODA.N. 1925. A contribution to the knowlege of the Avifauna of the Riukiu Islands and the vicinity. Publ. author. Tokyo.

川路則友・樋口広芳. 1989. アカヒゲ *Erithacus komadori* の分布ならびに亜種の問題について. 昭和63年度環境庁委託調査特殊鳥類調査. p.71-88.

森岡弘之. 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科学博物館専報 (23) 151-166.

Mark A.Brazil 1991. THE BIRDS OF JAPAN, CHRISTOPHER HELM,A&C-BLACK.LONDON

新納義馬・新城和治. 1974. 久米島の植生, 久米島県立自然公園候補地学術調査報告. p. 41-70. 沖縄県.

中村和朗. 1980. 久米島の気候. 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革. p.7-10. 文部省「環境科学」特別研究陸域部門.

西島信昇. 1975. 陸水系, 自然保護のためのおきなわの自然. p.64-93. 沖縄県.

日本鳥学会. 1974. 日本産鳥類目録第５版. 120pp. 保育社.

中村和郎・木庭元晴. 1981. 久米島の地形と気候. 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革 (II). p.5-21. 琉球大学島嶼生態系研究会.

岡田弥一郎・木場一夫・仲宗根寛. 1959. II, ＡＶＥＳ鳥網. 沖縄産動物目録. p.5-25. 沖縄生物研究会.

沖縄野鳥研究会. 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 299pp. 沖縄出版.

琉球新報社編. 1983. 奄美・沖縄の鳥類目録, 写真集沖縄の野鳥. 63pp. 琉球新報社

嵩原建二. 1990. 名護市鳥類目録, 名護やんばるの野鳥. 30pp. 名護博物館.

高良鉄夫・黒田長久. 1969. 琉球における未記録種及び稀種. 山階鳥研報 (5)：5, 47-562.

武内和彦. 1980. 久米島の土地利用変化. 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革.

p53-56. 文部省「環境科学」特別研究陸域部門.
与那城義春・久貝勝盛・玉城常雄. 1984. 沖縄の鳥類. 沖縄の生物. p.267-280. 沖縄生物教育研究会.
八重山野鳥の会. 1983. 八重山地方鳥類目録, 10周年記念誌. p.28-38. 八重山野鳥の会.



写真１　アマミヤマシギ
（1994.12.26，阿良林道）



写真２　ムラサキサギ
（1994.12.26，銭田川河口）



写真３　ホシムクドリ
（1994.12.26，仲里村野球場）



写真４　タゲリ
（1994.12.26，仲里村野球場）



写真５　ヤツガシラ
（1994.3.25，島尻）



写真６　オナガガモ
（1994.12.27，仲地水田）

図版１　主な確認鳥類



写真７　白瀬川河口



写真８　仲地水田



写真９　久米島空港周辺

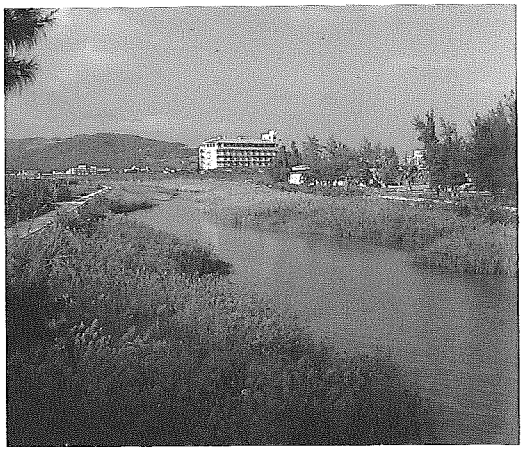


写真10　銭田川河口



写真11　真謝海岸

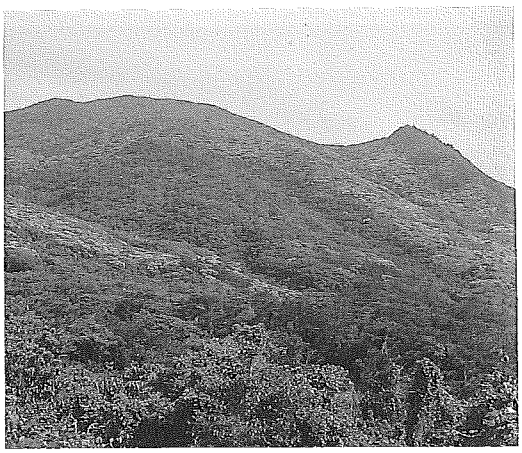


写真12　阿良岳

図版２　主な調査地環境

久米島の鳥類目録（暫定）

Check list of birds in Kume-jima, the Ryukyus.

種　名 species	状　況 status
カイツブリ目　PODICIPEDIFORMES	
カイツブリ科　PODICIPITIDAE	
1．カイツブリ　*Podiceps ruficollis poggei*　(Reichenow)	R
1993/3/25,1.1994/12/26,1.銭田川	
1994/12/26,1.島尻のダム	
ミズナギドリ目　PROCELLARIIFORMES	
アホウドリ科　DIOMEDEIDAE	
2．コアホウドリ　*Diomedea immutabilis*　Rothschild[3]	S
1965/10，1.久米島沖で捕獲.	
ミズナギドリ科　PROCELLARIIDAE	
3．オオミズナギドリ　*Calonectris leucomelas*　(Temminck)	W
1991/8/29.1.トランバーラ近く	
ペリカン目　PELECANIFORMES	
カツオドリ科　SULIDAE	
4．カツオドリ　*Sula leucogaster plotus*　(Forster)[7]	S
ウ科　PHALACROCORACIDAE	
5．ウミウ　*Phalacrocorax filamentosus*　(Temminck & Schlegel)	W
1993/3/18,56.1994/12/26,42.清水小学校前海岸	
1993/3/25.1.奥武島海岸. 1993/3/25.1.比屋定海岸	
コウノトリ目　CICONIIFORMES	
サギ科　ARDEIDAE	
6．リュウキュウヨシゴイ　*Ixobrychus cinnamomeus*　(Gmelin)	R
1991/11/26.1.仲地水田	
7．ゴイサギ　*Nycticorax nycticorax nycticorax*　(Linnaeus)	T／W
1993/3/25,2.銭田川. 1994/12/27,1.儀間川	

8．ササゴイ　*Butorides striatus amurensis*　(Schrenck)　W

9．アカガシラサギ　*Ardeola bacchus*　(Bonaparte)[5]　T

儀間川

10．アマサギ　*Bubulcus ibis coromandus*　(Boddaert)　T／W

1993/3/25,2．大田

11．ダイサギ（チュウダイサギ）*Egretta alba modesta*　(Gray)　W

1993/3/25,2.銭田川．1993/3/17,2.真謝海岸

12．チュウサギ　*Egretta intermedia intermedia*　(Wagler)　W

1991/11/27.(1).仲地

13．コサギ　*Egretta garzetta garzetta*　(Linnaeus)　W

1993/3/25,1.銭田川．

14．クロサギ　*Egretta sacra sacra*　(Gmelin)　R

15．アオサギ　*Ardea cinerea jouyi*　(Clark)　W

1993/3/25,1.1994/12/26.1.銭田川．1994/12/26.1.儀間川

1994/3/17,12.白瀬川河口．

1994/3/17,16.1994/3/18,31.清水小前海岸（一着島周辺）

16．ムラサキサギ　*Ardea purpurea manilensis*　Meyen　W

1994/12/26.1.銭田川

コウノトリ科　CICONIIDAE

17．コウノトリ　*Ciconia ciconia boyciana*　Swinhoe　W／A

1993/12.1994/6.上阿嘉（沖縄タイムス，1994.7.4付朝刊）

ガンカモ目　ANSERIFORMES

ガンカモ科　ANATIDAE

18．コハクチョウ　*Cygnus columbianus jankowskii*　Alpheraky[4]　A

19．マガモ　*Anas platyrhynchos platyrhynchos*　Linnaeus[6]　W

20．カルガモ　*Anas poecilorhyncha zonorhyncha*　Swinhoe　W

1994/12/26,1.儀間川．1994/12/26,6.島尻ダム

21．コガモ　*Anas crecca crecca*　Linnaeus　W

1993/3/25,1.銭田川．1994/12/26,12.空港海岸道路

22．オナガガモ　*Anas acuta acuta*　Linnaeus　W

1994/12/27.4.仲地水田（♂－1．♀－3）

23．キンクロハジロ　*Aythya fuligula*　(Linnaeus)　W

1994/12/26.1.空港近く海岸道路

24. スズカモ *Aythya marila mariloides* (Vigors) W

1991/11/27.1.銭田川

ワシタカ目 FALCONIFORMES

ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

25. ミサゴ *Pandion haliaetus haliaetus* (Linnaeus) W

1991/11/26.1.仲地. 1991/11/26.1.具志川城

26. アカハラダカ *Accipiter soloensis* (Horsfield) T

1993/9/7, ダルマ山園地

27. ツミ *Accipiter gularis gularis* (Temminck & Schlegel) W

1994/12/27.1.山里

28. ノスリ *Buteo buteo japonicus* (Temminck & Schlegel) W

29. サシバ *Butastur indicus* (Gmelin) W／T

1994/12/27.5.比屋定海岸.

ハヤブサ科 FALCONIDAE

30. ハヤブサ *Falco peregrinus japonensis* Gmelin W

1994/12/27,1.仲地

31. チゴハヤブサ *Falco subbuteo subbuteo* Linnaeus A

1993/3/18,1.清水小学校前海岸

32. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus interstinctus* Horsfield W

1993/3/16,1.久米島空港.1993/3/25,1.具志川

ツル目 GRUIFORMES

ミフウズラ科 TURNICIDAE

33. ミフウズラ *Turnix suscitator okinavensis* Phillips R

1994/12/27,3.比嘉

クイナ科 RALLIDAE

34. バン *Gallinula chloropus indica* Blyth R

1994/12/26,3.銭田川

35. オオバン *Fulica atra atra* Linnaeus W

1993/3/25,1.1994/3/17,1.銭田川

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRLLDAE

36. コチドリ *Charadrius dubius curonicus* Gmelin W

1991/8/29,1.泊海岸干潟. 1993/3/25,1.真謝海岸. 1994/3/17,1.仲地

37. シロチドリ *Charadrius alexandrinus nihonensis* R

1993/3/25.(1).シンリ浜. 1993/3/25,1.1994/3/17,24.真謝海岸

1993/3/25,1.比屋定海岸. 1994/12/26,3.1992/7/6.1.久米島空港草地

38. ハシボソシロチドリ *Charadrius alexandrinus alexandrinus* A

Linnaeus(1)

39. メダイチドリ *Charadrius mongolus stegmanni* Portenko W

1993/3/25,2.1994/3/17,28.真謝海岸. 1992/7/25,1.泊海岸

40. オオメダイチドリ *Charadrius leschnaultii* Lesson W

1994/3/17,2.真謝海岸.

41. オオチドリ *Charadrius asiaticus veredus* Gould T

1994/3/16,1.久米島空港海岸.

42. ムナグロ *Pluvia;is dominica fulva* (Gmelin) W

1994/3/16,52.久米島空港海岸.

43. ダイゼン *Pluvialis squatarola* (Linnaeus) W

1993/3/25.1.シンリ浜

44. タゲリ *Vanellus vanellus* (Linnaeus) W

1994/12/27,2.仲里村野球場

シギ科 SCOLOPACIDAE

45. キョウジョシギ *Arenaria interpres interpres* (Linnaeus) T

1991/8/29,1.奥武島海岸. 1994/3/17,17.真謝海岸.

46. ヒバリシギ *Calidris minutilla subminuta* (Middendorff) T

1991/11/27.1.仲地

47. オジロトオネン *Calidris temminckii* (Leisler)(1) T

48. トウネン *Calidris rufcollis* (Pallas) T

1994/12/27,1.1993/3/24,1.真謝海岸.

49.ハマシギ *Calidris alpina sakhalina* (Vieillot) T

1994/12/27,3.1994/3/17,3.真謝海岸.

50. アオアシシギ *Tringa nebularia* (Gunnerus) T

1991/8/29,1.泊海岸干潟.

51. クサシギ　*Tringa ochropus* Linnaeus　W
1994/3/17,1仲地水田.

52. タカブシギ　*Tringa glareola* Linnaeus　T
1994/3/17,1仲地水田. 1993/3/25,1.仲地

53. キアシシギ　*Tringa brevipes* (Vieillot)　T
1991/8/29,1.1994/12/27,10.泊海岸干潟.

54. イソシギ　*Triga hypoleucos* Linnaeus　T
1994/12/27,1.泊海岸干潟.

55. ソリハシシギ　*Xenus cinereus* (Güldenstädt)　T
1991/8/29,1.泊海岸干潟.

56. ダイシャクシギ　*Numenius arquata orientalis* Brehm　T
1993/3/25.1.泊干潟

57. チュウシャクシギ　*Numenius phaeopus variegatus* (Scopoli)　T
1994/12/26.1.空港近く

58.ヤマシギ　*Scolopax rusticola* Linnaeus　W
1994/12/26.13.阿良岳

59. アマミヤマシギ　*Scolopax mira* Hartert　R
1994/12/26.2.阿良岳

60. タシギ　*Gallinago gallinago gallinago* (Linnaeus)　W
1994/3/17,1.具志川村総合グラウンド近く
1993/3/25,1.仲地

カモメ科　LARIDAE

61. ウミネコ　*Larus crassirostris* Vieillot　W
1994/3/17,1. 真謝海岸

62. ベニアジサシ　*Sterna dougallii bangsi* Mathews　S
1991/8/29,1.トンバーラ.

63. エリグロアジサシ　*Sterna sumatrana sumatrana* Raffles　S
1991/8/29,1.阿良浜海岸. 1991/8/29,1.奥武島海岸

64. コアジサシ　*Sterna albifrons sinensis* Gmelin　S
1991/8/29,1.泊海岸干潟海岸

ウミスズメ科　ALCIDAE

65. マダラウミスズメ　*Brachyramphus marmoratus perdix* (Pallas)[1]　W

ハト目　COLUMBIFORMES

ハト科　COLUMBIDAE

66. カラスバト　*Columba janthina janthina*　Temminck　R

1991/2/1.白瀬川上流. 1993/3/25,1.比屋定海岸林. 1992/7/25,1.宇江城岳.
1992/7/25,3.阿良岳

67. リュウキュウキジバト　*Streptopelia orientalis stimpsoni*　(Stejneger)　R
(Latham)

ホトトギス目　CUCULIFORMES

ホトトギス科　CUCULIDAE

68. ホトトギス　*Cuculus poliocephalus poliocephalus*　Latham　T

1992/7/25,1.宇江城岳.

フウロウ目　STRIGIFORMES

フクロウ科　STRIGIDAE

69. コミミズク　*Asio flammeus flammeus*　(Pontoppidan)[1]　W

70. リュウキュウコノハズク　*Otus scops elegans*　(Cassin)　R

1991/11/26.1.アーラ岳林道

71. リュウキュウアオバスク　*Ninox scutulata totogo*　(Momiyama)　R

1991/11/26.1.　阿良岳林道

ブッポウソウ目　CORACIIFORMES

カワセミ科　ALCEDINIDAE

72. リュウキュウアカショウビン　*Halcyon coromanda bangsi*　(Oberholser)　S

1992/7/25,1.阿良岳.1992/7/25,1.宇江城岳

73. カワセミ　*Alcedo atthis*　(Linnnaeus)　R

1993/3/18,1.銭田川

ヤツガシラ科　UPUPIDAE

74. ヤツガシラ　*Upupa epops*　Safurata Lönnbrg　T

1993/3/25,2.島尻. 1994/3/17,4.具志川村総合グラウンド.
1994/3/17,2.シンリ浜. 994/3/17,2.北原農村振興集落センター.
1994/3/17,2.儀間. 1994/3/17,1.西銘.

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

75. ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* Scopoli T

1994/3/17,22.銭田

76. リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica namiyei* (Stejneger) R

セキレイ科 MOTACILIDAE

77. キセキレイ *Motacilla cinerea robusta* (Brehm) W

78. ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* Gloger W

79. ホオジロハクセキレイ *Motacilla alba leucopsis* Gould W

1994/3/18.50.具志川村総合グラウンド. 1994/3/18.2.真謝

80. マミジロタヒバリ *Anthus novaseelandiae sinensis* (Bonaparte) W

1993/3/25.1.1992/7/56.1.久米島空港草地

81. ビンズイ *Anthus hodgsoni hodgsoni* Richmond[1] W

1993/3/18.1.ダルマ山園地

82. ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus* (Pallas)[1][2] T

1994/9/13.1.ダルマ山園地

サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE

83. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus (Raffles)* W

1994/12/27.1.仲地水田

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

84. エゾヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis hensoni* Stejneger[1] A

85. リュウキュウヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis pryeri* Stejneger R

モズ科 LANIIDAE

86. モズ *Lanius bucephalus bucephalus* Temminck & Schlegel W

1994/3/16,1.比屋定海岸. 1993/3/25,1.奥武島

87. アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* Latham T

レンジャク科 BOMBYCILLIDAE

88. ヒレンジャク *Bombycilla japonica* (siebold)[4] W

ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

ツグミ亜科 TURDINAE

89. アカヒゲの一種 *Erithacus* sp. T／W

1994/9/17,1.ダルマ山園地

90. ルリビタキ *Tarsiger cyanurus cyanurus* (Pallas)[1][2] W

91. ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pallas)[2] W

1994/3/16,1.銭田川. 1993/3/25,4.比屋定海岸

92. イソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis (Müller)* R

93. シロハラ *Turdus pallidus* Gmalin W

94. アカハラ *Turdus chrysolaus* Temminek W

1994/3/17,2.仲村渠

95. ツグミ *Turdus naumanni eunomus* Temminck W

1994/3/17,20.シンリ浜

96. ハチジョウツグミ *Turdus naumanni naumanni* Temminck W

1994/3/17,1.シンリ浜

ウグイス亜科 SYLVIINAE

97. リュウキュウウグイス *Cettia diphone riukiuensis* (Kuroda) R

98. セッカ *Cisticola juncidis brunniceps* (Temminck & Schlegel) R

ヒタキ亜科 MUSCICAPINE

99. エゾビタキ *Muscicapa griseisticts* (Swinhoe) T

1993/9/10,1.ダルマ山園地

100. オジロビタキ *Ficedula parva albicilla* (Pallas) W

カササギヒタキ亜科 MONARCHINAE

101. リュウキュウサンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata illex Bangs* S

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

102. リュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis Tristram* R

103. シマメジロ *Zosterops jasponica insularis* Ogawa[2] A

ホオジロ科 EMBERIZIDAE

104. ミヤマホオジロ *Emberiza elegans elegans* Temminck W

1991/11/26.1. ナゴー池

105. アオジ *Emberiza spodocaephala personata* Temminck W

1994/12/27.2.宇江城岳

106. カシラダカ *Emberiza rustica latifascia* Portenko W

1994/3/18,3. 北原

107. クロジ *Emberiza variabilis* Temminck[1] W

アトリ科 FRINGILLIDAE

108. アトリ *Fringilla montifringilla* Linnaeus[6] W

109. マヒワ *Carduelis spinus* (Linnaeus) W

1993/3/25,10.奥武島

110. シメ *Coccothraustes coccothraustes japonicus* Temminck & schlegel[6] W

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

111. スズメ *Passer montanus saturatus* Stejneger R

ムクドリ科 STURNIDAE

112. ムクドリ *Sturnus cineraceus* Temminck W

1994/3/17,42.大原. 1994/12/26,20.仲里村野球場

113. ホシムクドリ *Sturnus vulgaris* W

1994/12/26,1.仲里村野球場

カラス科 CORVIDAE

114. リュウキュウハシブトガラス *Corvus macrorhynchos connectens* R
Stresemann

カエデチョウ科 ESTRILDIDAE

115. アミハラ *Lonchura puntulata* I

1993/9/10,1.ダルマ山園地

凡例：1．種名の扱いと配列は日本鳥学会（1974）及び琉球新報社編（1983）にしたがった。

2．状況はR：留鳥，S：夏鳥，T：旅鳥，W：冬鳥，A：迷鳥，I：帰化種とし、その種別は琉球新報社編（1983）及び沖縄野鳥研究会（1993）にしたがった。

3．引用文献等

(1)池原(1974)，(2)岡田ら(1959)，(3)高良・黒田(1969)，(4)仲吉列雄私信，(5)大城亀信私信，(6)佐藤文保私信，(7)比嘉邦昭私信

久米島の家譜・位牌にみる系譜観
―上江洲家史料を中心にして―

萩尾　俊章

はじめに

これまでに報告されてきた上江洲家文書には様々なものがあり、そのすべてが明らかにされてきたのではない。しかも、それは上江洲家の家譜史料についても同様である。

沖縄県教育委員会編の『八重山諸島を中心としたの古文書調査報告書』(1980) では上江洲家文書が81件130点が一覧表で掲載されている。中には家譜史料の報告はない。家譜に関係するものでは「家記」程度である。

沖縄久米島調査委員会『沖縄久米島　資料篇』(1983) では「美済氏家譜」が翻刻されている。他に、「公孫姓家譜」、「元祖由来記　喜久里記」(巫馬姓家譜)、「和州氏家譜家系図」の4つが紹介されている。

さらに、沖縄県教育委員会編『沖縄の家譜』(1989) で報告されているのは「美済氏家譜」(万暦8～乾隆24) の家譜が1点である。5世智源が康熙9年地頭代となり、以後代々地頭代職を勤めている。8世智常の代の乾隆14年 (1749) には、先祖以来間切中に尽くした功労により「言上写」(座敷階越) と「世齊其美」掛床を賜っていることなどが記載される。

関係者の間では久米島具志川村西銘の上江洲家本家に「家譜」と「家記」があることは知られてはいた。しかしその全貌は十分には明らかにされぬままであった。「家記」については上江洲均氏が紹介している。(上江洲均「久米島上江洲親雲上の『家記』」『沖縄県立博物館紀要』第7号　1981)

本稿では、上江洲家の上江洲智泰・智一氏の御好意により県立博物館に古文書資料を一括して寄託していただいている。その中で、新規にわかった家譜資料を紹介するとともに、これまで報告された家譜資料とその他の史料をもとに、久米島とくに上江洲家を中心とした家譜と位牌にみられる系譜観、家督の相続継承、婚姻や養取などの点を社会史的な視点から考えてみたい。

1　上江洲家の家譜史料

今回、上江洲家の家譜で新たにわかった史料がいくつかあり、これらは『沖縄の家譜』には未収録であることから、その点を中心に記しておきたい。久米島の家譜の概略とその特徴についてはすでに報告があるので、ここでは割愛する。<注1>

「美済氏家譜系図支流」(久米島具志川間切□□村濱川親雲上) は、六世智長上江洲親雲

上（順治17年生：1660）から九世智撤までが記載されている。事績記録の最終は乾隆19年（1754）までの記録である。

「美済氏世系図　濱川親雲上」の家譜は濱川親雲上の記載で、「美済氏家譜系図」（上江洲親雲上）は三冊の合冊で、「美済氏家譜」（六世智長）、「美済氏家譜系図支流」（七世智枝）、「美済氏家譜系図支流」（五世智章）が一綴りでまとめられている。

①「美済氏家譜」<三冊合冊の内の一>

六世智長から始まり九世の智徹までを記す。内容は前記の「美済氏家譜系図支流」（久米島具志川間切□□村濱川親雲上）とほぼ同じである。

②「美済氏家譜系図支流　久米具志川間切濱川親雲上」<三冊合冊の内の二>

七世の智枝濱川親雲上（康熙47年生：1708）からはじまる。智枝は六世上江洲親雲上智意の３男である。智枝の孫智資（乾隆42年生：1777）まで記載され、事績記録は乾隆23年まで記している。

③「美済氏家譜系図支流　濱川親雲上」（三冊合冊の内の三）

支流の五世智章から八世智明（乾隆13年生：1748）までの記録である。家譜記名は７世の智彝までは前出の「美済氏世系図　濱川親雲上」と同じであるが、その後の８世からは本家の８世智常の兄弟部分が紛れてとじられている。これには智章などの事績記録はない。

「美済氏家譜」（写本）は、著者が西平親雲上で、元祖から五世智源上江洲親雲上（崇禎13年生：1640）までの記録である。

これら家譜は虫損がひどく、判読不明な箇所が多い状態である。早急な修理が望まれる。

他に、関連する史料としては、「父母記」は同治九年の記録で、著者は十世地頭上江洲親雲上である。八世智常から十三世智紹までの家譜の抜き書きである。

「家記仕次案文」は著者が十代上江洲親雲上であるが、恩義ある家への報恩の礼を欠かさないように子孫へ書き残した家記の仕次案である。

また、関連する史料として「位牌」（写）があり、元祖から四世までが含まれ、順治六年（1649）から康熙34年（1695）までの記録である。

上江洲均の報告によれば久米島の家譜は乾隆23年（1758）に申請し、翌年成立しているという<注2>。根拠は具志川村字西銘の仲村家の家譜『太史氏家譜』に、「因茲会議編集家譜而蔵於姑米公堂以為後徴于乾隆戊寅之歳七月修由題請－－－－」とあり、最後に「乾隆二十四年歳次巳卯八月望日」と修譜の経緯と月日が記されていること。また『久米具志川間切系図目録帳』という古記録に「右系録乾隆弐拾三年戊寅七月訴相済至翌年ニ嶋より各組立持渡候付」とあることと一致している。これらにより成立年代を特定している。

2　上江洲家家譜の系譜的諸相

上江洲家の家譜を参照しながら、歴代当主の事績、ならびに関係者の系譜的な位地と婚姻関係に着目しながら、記述しておきたい。ここで紹介するのは、本家の家譜に記載された初代智眞から10代の智俊までである。表－１は、主として家譜記載の事項から、歴代当主に関連するものについてまとめたものである。また、図－１は家譜をもとにその系譜関係について、男女及び婚姻関係を符号化した図である。８世智常以降についてはその部分の記載が一部欠落しているために、「美済氏系図」（『美済氏会だより』昭和53年）を参考にして補った。<注3>

１世の西平親雲上智眞は父具志川按司の後胤兼城村の住人豊武宇地原であった。家も豊武宇地原にあって、その場所は後に御用布屋の敷地となった。本人の生没年は不詳で、妻もどのような出自であるか不詳となっている。

２世は西平親雲上智昭で、生没年は不詳で、事績についてもはっきりしない。その子が３世の智隆で、万暦８年（1580）の生まれと記されている。室は眞丹久で、詳しい出自は不明である。智隆は幼少の時に父を亡くし、下人もいなくなる状況であったため、生活が困窮していた。そこで、舅姑の援助を得て、妻方の西銘村へ住居を移した。母は兼城村の外祖父の世話になってたが、勤めのかたわら毎日の朝夕の賄いをおこない、孝養を尽くした人物として伝えられる。智隆は順治６年（1649）に70歳で亡くなっている。

４世は長男の智圃（1613～1664）である。室は太史氏仲地親雲上昌興長女君南風であった。太史氏は元祖が久米島仲城按司後胤太史氏久米仲城親雲上である。仲里間切が本家で、具志川仲地の太史氏はその分家である。君南風は代々太史氏から輩出しているが、婚家先でもその位地に変わりはなかったことがうかがえる。

智圃には２男２女の子どもがあった。出生順に、長男は智章、長女は君南風、次男智源、次女は思戸である。長女は母方の一族にあたる太史氏與那覇親雲上昌包の妻として婚出しており、その関係から君南風の位地についている。母が君南風の職に就いていたために、跡を継いだのか、嫁継ぎなのかは判然としないが、君南風職の継承は留意される必要がある。この長女からは母方の祖父にあたる昌興と夫の昌包の関係は『太史氏家譜』からは不明で、昌包が支流であったのか判断がつかない。次女は同じく太史氏大田親雲上昌暢の妻として嫁出している。

次にここで注目されるのは、四世智圃の跡目を継いでいるのは長男の智章（生年不詳、順治18年没：1661）ではなく、次男の智源（崇禎13年生：1640）という点である。智章は別に家譜があり、家を分け浜川家の祖となっている。「父之命に依り家跡を継ぐ」とあり、父の意志により長男に代わって家を継いだのである。必ずしも長男が優先して家督を継ぐということでなはかったことがうかがえる。

なお、紬の織り方や染織法が伝わったのは智囿の酒匂友寄親雲上景友を介してであり、また妻君南風は木綿の栽培法や布の織り方を伝えている。

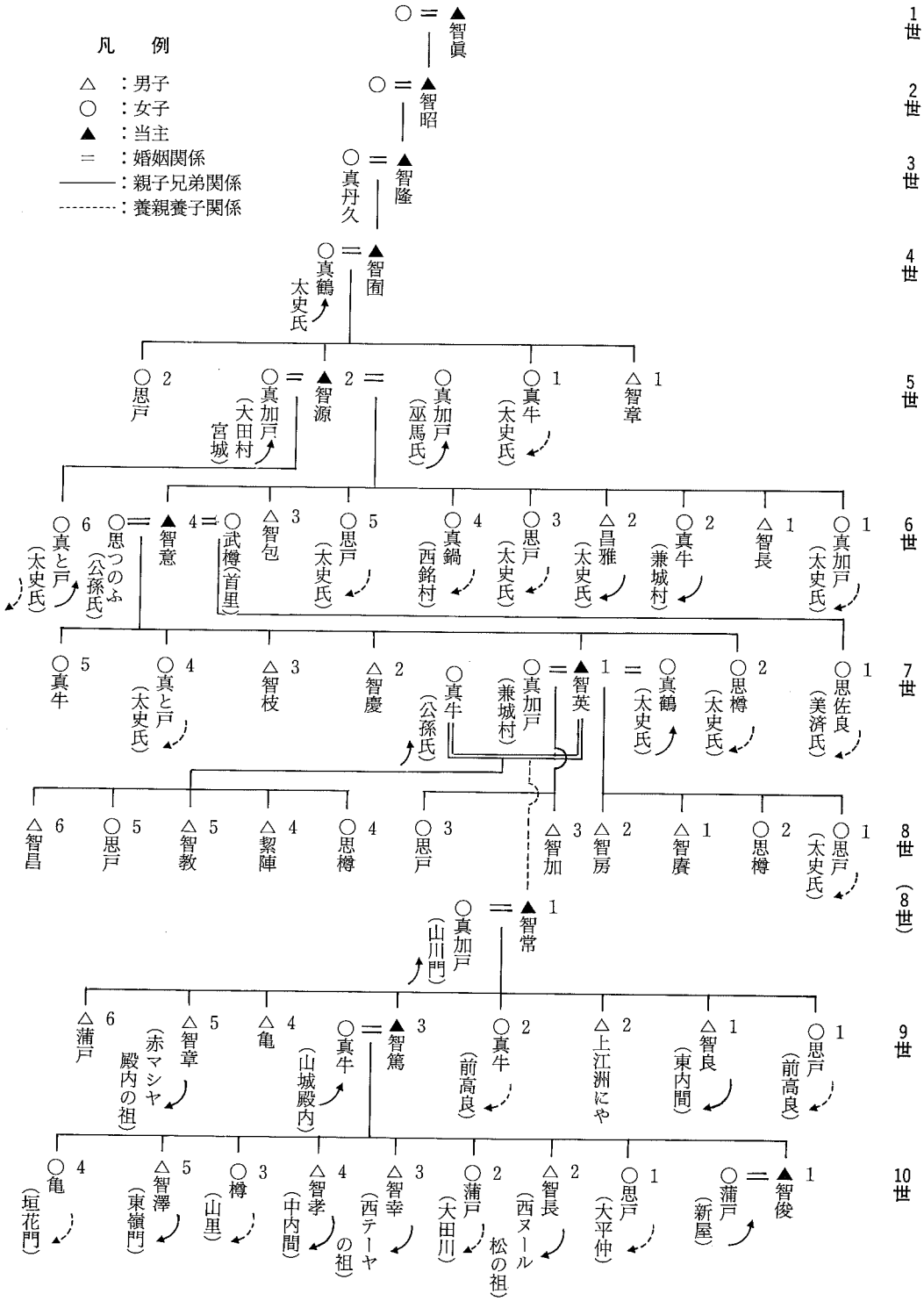
5世次男智源（1640～1709）は、巫馬氏武富親雲上教治の長女真加戸と結婚している。4男6女をもうけている。長女の真加戸は、太史氏大田親雲上昌足に、次女の真牛は兼城村大掟安里仁屋に、三女思戸は太史氏濱川親雲上昌儀に、四女真鍋は西銘村山里親雲上に、五女思戸は太史氏仲村渠親雲上昌属に、六女真と戸は太史氏大首里大屋子與那覇筑登之昌縄に嫁いでいる。家督は父の意志により、四男の智意（康熙15年生：1676）が継いでいる。長男智長（順治17年生：1661）と三男智包は別に分家し、別に家譜を有している。次男の昌雅は太史氏與那覇親雲上昌包に嗣子がないために、養子となっている。

上江洲への改名がなされたのは五世の智源のときで、康熙8年（1669）のことである。また、5世智源が康熙9年地頭代となり、以後代々地頭代職を勤めることになる。1673年には東の山に松や唐竹を植え、その中には茶園をもうけた。さらに、新たに墓を造営し、久米村から高嶺親方が風水の検分に来たのもこの時である。

6世智意(1676～1732)は4男で、仲里間切公孫氏嘉手苅親雲上の長女思つのふを嫁にも

表－1　上江洲家歴代当主関係一覧

世代	名	生没年	妻（出自）	墓　所
1世	西平親雲上智真	生没年不詳	不　詳	不　詳
2世	西平親雲上智昭	〃	〃	〃
3世	首里親雲上智隆	万暦8～順治6 (1580～1649)	真丹久（喜如嘉）	はな崎墓
4世	西平親雲上智囿	万暦41～康熙3 (1613～1664)	君南風（太史氏）	小港墓
5世	上江洲親雲上智源	崇禎13～康熙48 (1640～1709)	真加戸（巫馬氏）	木のさく原墓
6世	上江洲親雲上智意	康熙15～雍正10 (1676～1732)	思つのふ（公孫氏）	〃
7世	上江洲親雲上智英	康熙43～乾隆27 (1704～1762)	真鶴（太史氏）	〃
8世	上江洲親雲上智常	雍正5～嘉慶8 (1727～1803)	真加戸（太史氏）	美里川墓
9世	上江洲親雲上智篤	乾隆28～道光14 (1763～1834)	真牛（仲里間切山城村）	〃
10世	上江洲親雲上智俊	乾隆60～同治12 (1795～1873)	蒲戸（具志川間切大田村）	〃


凡　例
△：男子
○：女子
▲：当主
＝：婚姻関係
——：親子兄弟関係
--------：養親養子関係
1世
2世
3世
4世
5世
6世
7世
8世（8世）
9世
10世
▲智眞
▲智昭
▲智隆
○真丹久
▲智囿
○真鶴（太史氏）
○思戸
○真加戸（大田村宮城）
▲智源
○真加戸（巫馬氏）
○真牛（太史氏）
△智章
○真と戸（太史氏）
○思つのふ（公孫氏）
▲智意
△智包
○思戸（太史氏）
○真鍋（西銘村）
○思戸（太史氏）
△昌雅（太史氏）
○真牛（兼城村）
△智長
○真加戸（太史氏）
○真牛
○真と戸（太史氏）
△智枝
△智慶
○真牛（公孫氏）
○真加戸（兼城村）
▲智英
○真鶴（太史氏）
○思樽（太史氏）
○思佐良（美済氏）
△智昌
○思戸
△智教
△絜陣
○思樽
○思戸
△智加
△智房
△智賡
○思樽
○思戸（太史氏）
▲智常
○真加戸（山川門）
△蒲戸
△智章（赤マシヤ殿内の祖）
△亀
○真牛（山城殿内）
▲智篤
○真牛（前高良）
△上江洲にや
△智良（東内間）
○思戸（前高良）
○亀（垣花門）
△智澤（東嶺門）
○樽（山里）
△智孝（中内間の祖）
△智幸（西テーヤ）
○蒲戸（大田川）
△智長（西ヌール松の祖）
○思戸（大平仲）
○蒲戸（新屋）
▲智俊

図－1　美済氏家譜系図

らっている。3男4女をもうけているが、長女思佐良のみは、首里内の桃原村無系志慶真筑登之親雲上の女子武樽を母としている。長女は美齊氏濱川掟大田仁屋智資の妻となっている。次女思樽は太史氏山里筑登之昌立へ、三女真と戸は太史氏仲村渠掟仁屋昌睦へ嫁している。長男智英は父の跡目を継ぎ、次男の智慶と三男の智枝は各々分家して、家譜も別に仕立てている。

智意は、1726年に地頭代となり、同年自家製のお茶を献上したところ、茶園の名称「東坂山」を頂戴し、その後茶園を永代預かりとなった。家譜中に茶園の針図がある。

7世長男智英（1704～1762）は、太史氏山里親雲上昌喬の長女真鶴をとしている。その間に2男2女があり、長女思戸は太史氏大田掟山里筑登之昌亮の妻となっている。次女思樽については婚姻についての記載はない。長男は智賡、次男は智房である。妻真鶴は27歳で若くして亡くなっており、智英は継室に兼城村平田筑登之親雲上の女子真加戸を得ている。1男1女をもうけているが、その後真加戸とは離別している。さらに継室として仲里間切公孫氏與座親雲上絜賢の次女真牛と結婚している。その間に2女3男がある。

この智英の代には、先祖以来間切中のことに尽力した功績が認められ、座敷の位と掛床「世済其美」を拝領している。

智英の跡を継いだのは、弟の山里親雲上智慶の長男智常である。その事情は該当する部分の家譜が手元にないので詳しくはわからないが、智英の長男智賡は位牌の銘書きによれば36歳の若年で没している。また、後述するように、智英の次男と5男も生家の位牌に祀られているところをみると、いずれも未婚のまま亡くなっている。さらに、4男の絜陣は仲里間切宇江城親雲上絜聡に嗣子がないために養子となっている。このような事情が重なったためであるのかどうか、つまびらかではないが、8世智常（1727～1803）は、本家の伯父を継いだことになる。

さらに、九世智篤（1763～1834）は、3男であるが、長男の智良は祖父の実家にあたる東内間（屋号）を継いでおり、それにかわって智常の跡目を継いでいる。

10世智俊（1795～1873）は、智篤の長男である。室は大田村首里大屋子上江洲筑登之の女子蒲戸である。智俊は親子2代にわたって飢饉時には人々への救済事業をおこなった人でもある。また、現在使用されている美里川墓を造営したのは智俊である。

3　家譜にみる＜家＞の相続継承と婚姻

前節では上江洲家本家の各世代について、その系譜的位地に留意しながら、家督の相続継承、妻の出自、女子の嫁出先など記述した。

そこでは、長男が分家して他出するケースがみられた。また、太史氏との婚姻関係は密接で、双方には婚姻紐結を介した地方役人層の強い結びつきが浮かび上がってくる。

4世の智囿の妻君南風が太史氏出身であることからはじまって、5世智源から7世智英の代にかけては、頻繁に嫁のやり取りがみられる。4世智囿、7世智英、それに8世智常の妻はいずれも太史氏出身である。また、5世から7世にかけて、上江洲家から嫁出している女子について調べてみると、11人中8人までが太史氏の一族に婚出している。8世以降は詳しいデータがないので判断できないが、17世紀から18世紀前半までは、間切の役職者を多々輩出した同じ役人層として、婚姻関係はより密接であったと考えられる。仲里間切の太史氏の支流で、同じ具志川間切の一族は、美済氏の強力なライバルでもあったといわれる反面、一方では同じ社会階層として、婚姻関係を媒介とした親族的な結びつきもあったといえよう。

ところで、さきの長男以外による家督の相続継承については、支流の家譜やその他の久米島の家譜にも散見できる。先に紹介した「美済氏家譜系図支流」（久米島具志川間切□□村濱川親雲上）は、六世智長上江洲親雲上からはじまっている。六世智長上江洲親雲上は上江洲親雲上智源の長男で、母は巫馬氏武富親雲上教治長女真嘉戸の間に生まれている。室は太史氏仲地親雲上昌通次女真蒲戸であった。

長男の教満大田親雲上（康熙18年生：1679）は、巫馬氏4世仲村渠親雲上教宜のところに「依無嗣子為聟猶子」として養子になっている。長男でさえも婿養子として養取されることもあった。この点は『巫馬姓家譜』でも確認することができる。妻は教宜の次女真牛（康熙19年生）であった。長男の6世教理が康熙38年生であることからすれば、20歳近くに婿養子となっている。次男智廉（康熙弐25年生）は20歳で、また三男智副（康熙28年生）は16歳で亡くなっている。そこで、四男智谷仲村渠親雲上（康熙29年生）が跡を継いでいる。

また、「美済氏家譜系図支流」（久米具志川間切濱川親雲上）では、7世の智枝濱川親雲上からはじまる。父は6世上江洲親雲上智意、母仲里間切公孫氏嘉手苅親雲上長女思津奴。童名真山戸で、3男である。室は巫馬氏大田親雲上教満次女思加名（康熙47年生）。8世長男の智秀嘉手苅掟濱川仁屋（雍正13年生：1735）で、美済氏山里親雲上智慶に無嗣子なきために猶子となっている。室は仲里間切太史氏である。

では、他の久米島の家譜についてはどうであろうか。例えば、『太史氏家譜』についてみてみよう。2世昌興の次男昌通（万暦43年生：1615）は長男に代わって、父の跡を継いでいる。「父之命に依り家跡を継ぐ」となっており、長男は別に分家している。

3世昌通の次男昌足（順治2年生：1648）には男子がなかったために、弟の三男昌屬（順治8年生）が5世として跡目を継いでいる。その後、昌屬は男子なきために和州氏仲村渠親雲上景里の長男昌喬（康熙30年生：1691）を婿養子として迎えている。この背景には、景里の妻は昌屬の長女真牛であり、つまるところ昌喬は母の実家に養子として入ったこと

になる。昌喬は君南風を妻にしているが、後に離別している。これに対して、和州氏仲村渠親雲上景里に嗣子がなかったことから、6世昌喬の次男が養子として入る。景著（康熙50年生）と名乗っている。これらの点は『和州氏家譜系図』でも記載は一致している。

このように、家譜から見る限り、18世紀初めまでの記録から長男に代わって次男以下の男子が継ぐ、あるいは場合によっては長男が養取として出るケースもある。相続継承は、長男が優先して、排他的に継承するというような固定したものでなかったことがわかる。

『和州氏家譜系図』は、他とは違った点が特徴としてあげられる。それは元祖が君南風（万暦7年生：1579）であり、女性元祖となっている点である。家譜によれば、父は仲里間切太史氏久米仲城親雲上で、君南風はその長女であった。君南風の母は首里の生まれで、その関係で本人は首里の伯母に養育されていた。そして、和氏の久米具志川親雲上景懐の妻となった。その後、本人は久米島の叔母君南風の跡目を継ぐために、また景懐は具志川間切惣地頭として一緒に久米島へ渡った。2人には、6男子が授かる。しかし、万暦32年（1604）に景懐が久米島に渡海する途上、逆風にあって福建へ流され、景懐は不運にもそこで病没している。そのため、君南風が6人の男子を養育し、元祖となったという。

元祖が女性である点はきわめて特異な例であるが、その後の系譜は父系で継承されており、他と違っているわけではない。いずれにしても、沖縄本島で「イナグガンス（女元祖）」として忌み嫌われている女性元祖は、当地では17世紀初めでは全く意識されてはいなかった。

4　上江洲家の位牌と墓所

(1) 位　牌

沖縄の位牌の形態にはおおよそ3つのタイプが知られている。一本立ち、屏位、繰り込みの3種である[注4]。久米島でもこれらの中で一本立ちと屏位の位牌をよくみることができる。

上江洲家の位牌は屏位型の上下に分かれた位牌立てで、いわゆる短冊型である。

屏位の周囲の縁どりは黒塗りで、上部中央に金泥で宝珠とその両わきには3つ爪の龍が描かれ、下部には瑞雲が施されている。見事な位牌である。位牌は上段に男子が、下段に女子が祀られている。中央に元祖が祀られ、向かって右が偶数世代、左が奇数世代として交互に祖先を配列する仕組みである。

位牌札の配列の仕方は家によっても異なる。仲里村真謝の喜久村家（公孫姓）の位牌も屏位型のものである。短冊形式で、上下に分かれ、上段は男子、下段は女子が祀られいる。中央に、「帰真」と「霊位」の札があり、位牌札は向かって右から順に下位世代におりていく並べ方である。「顕祖座敷官與座親雲上絜賢」から始まり、「八世喜久村絜良」

までが祀られいる。

さて、上江洲家の位牌は、おそらくは久米島でも最も古い位牌の一つにあたると思われるが、この位牌がいつ仕立てられたのかは十分な調査ができず不詳である。平敷令治によれば、この屏位型の位牌は、18世紀のはじめには王家や首里・那覇の王府官人層、久米村の三十六姓の間で普及していたとしている[注5]。このことからすれば、18世紀以降に久米島に入ってきたことになる。

その上江洲家の位牌に記名された牌面について写したものが図－2である。位牌につ

十一世　昭和廿一年丙申旧十月二十日卒享年六三 上江洲智□	十世　昭和廿四己亥八月廿一日卒寿九十 智紀妻童名ウシ
十世　昭和二年丁卯旧七月廿日卒寿七十 上江洲智紀	道光二十九乙酉正月十七日卒寿十六 上江洲親雲上女子蒲戸
乾隆四十年乙未五月六日卒享年三十六 上江洲掟上江洲仁屋童名真苅	三世　康熙三十四乙亥年五月十九日享年二十五 仲村渠親雲上妻 上江洲親雲上智源三女思戸
八世　同治十二年癸酉六月九日卒寿七十九 上江洲親雲上童名松	同治元年壬戌十月十八日卒享年二十二 西銘村上江洲仁屋妻 上江洲親雲上六女真牛
六世　嘉慶八年癸亥十月二十八日死寿七十七 上江洲智常童名思徳	八世　明治二十六年癸巳旧正月六日卒寿八十六 上江洲親雲上妻童名蒲戸
四世　雍正十年壬子二月十六日死寿九十七 上江洲親雲上智意童名樽金	六世　乾隆四十三年戊戌閏六月六日死寿四十五 上江洲親雲上妻真加戸
二世　康熙三年甲辰五月廿九日死 西平親雲上智囿童名思武太	四世　乾隆三十六年辛卯□月二日死享九十四 上江洲親雲上智意妻思つのふ
仝會元祖　順治六乙丑年死寿七拾歳 首里親雲上智隆童名満計	二世　康熙二十八年己巳正月廿三日死寿七十七歳 西平親雲上智囿妻君南風童名真鶴
三世　康熙四十八年乙丑三月廿四日死寿七十 上江洲親雲上智源童名思徳	元祖　崇禎十丁丑年死寿三十五歳 各霊位 首里親雲上妻真丹久
五世　乾隆二十七年壬午五月五日卒寿五十弐 上江洲親雲上智英	三世　康熙二十八年己巳三月十八日死寿四十八歳 上江洲親雲上智源妻真加戸
七世　道光十四年甲午七月廿四日寿七十二 上江洲親雲上童名真苅	五世　乾隆五年　申二月二十二日卒寿二十七 上江洲親雲上智英妻
乾隆三十八年癸巳四月四日卒寿三拾六歳 首里大屋子上江洲筑登之智賡童名思亀	七世　道光三年癸未二月十八日卒寿三十三 上江洲親雲上妻真牛
九世　明治二十五年壬辰旧十二月二十九日卒享年五十五 嘉手苅夫地頭上江洲智綱童名蒲戸	三世　康熙四十七年戊子五月死寿四十六□□□ 上江洲親雲上智源長男智長女子
上江洲親雲上智英五男童名 上江洲仁屋	九世　明治二十六年癸巳旧二月十三日卒享年四十 上江洲智綱童名思戸
十一世　昭和六〇年十一月七日八十四歳卒 上江洲智元	昭和四十六年十二月十日七〇才卒 十一世　上江洲智元妻美登

図－2　上江洲家位牌の銘書（※縦書きを横書に改めた）

いてはその記載形式に関して十分な調査・分析がなされておらず、金城善の調査報告は今回大いに参考となった<注6>。上江洲家の位牌には、元祖智隆から11世智元までが祀られいる。

これから位牌の特徴として指摘できる点を以下記しておきたい。元祖は首里親雲上智隆となっており、家譜のそれとは世代深度が異なっている。家譜では1世智真、2世智昭が記録されているが、位牌ではそれが除かれている。したがって、家譜よりは2世代ずつ世代が少なくなっている。どのような理由によるのか判断できかねるが、『家記』も同様の記載方式である。西銘村の現敷地に居を構えたのは3世の智隆からであることと関連するのか、今後の追跡調査の課題にしたいが、家譜による系譜的な世代深度と<位牌>・<家>における系譜的な世代深度にズレがある点を指摘しておきたい。

上段の男子と下段の女子の札の配列は上下一致していない。本来は対応していたかもしれないが、男女の祀られる祖先の数の違いにより結果的に不整合になっている。

祖先の記名では、すべて俗名で書かれている。つまり、法名や戒名はみられない。また、童名が書かれているものと、そうでないものがある。同じ具志川村山里の山里家(和州氏)の位牌は、やはり屏位型の位牌であるが、祖先の銘記は法名+俗名の形式で書かれている。久米島には寺院はないので、沖縄本島に依頼して記銘したのであろうか。既述の仲里村真謝の喜久村家でも、記銘は俗名であった。山里家の位牌の法名は特異な事例といえ、むしろ俗名で記す方が久米島では一般的であると考えられる。

男子では生家で早世した3人が位牌に祀られてもいる。「乾隆三十八年癸巳四月四日卒寿三拾六歳　首里大屋子上江洲筑登之智□童名思亀」とあるのは、智英の長男智賡である。智賡は36歳で若くして没している。既述のように、智英の跡は甥にあたる智常が継いでいる。また、「乾隆四十年乙未五月六日卒享年三十六　上江洲掟上江洲仁屋童名真苅」とあるのは、家譜から判断すれば、智英の次男智房である。智房もおそらくは未婚のまま早世し、生家で祀られた。さらに、「上江洲親雲上智英五男童名　上江洲仁屋」とある智英の5男智郷が祀られている。智郷は乾隆17年生(1752)であることは家譜からわかるが、没年は不詳である。いずれも、未婚のうちに早世した男子が位牌に祀られている。沖縄本島では、兄弟の位牌を一緒に祀るのを忌む傾向があるが、そのような点は認められない。また、屏位位牌への配列は必ずしも世代順にそったものではなく、厳格な配列でないことがうかがえる。

女子についてはどうであろうか。「康熙四十七年戊子五月死寿四十六□□□　三世　上江洲親雲上智源長男智長女子」とあるのは、智源の長男である智長(支流)の長女思戸である。家譜によれば、思戸は兼城村の西銘目差新城仁屋と結婚しているが、康熙47年(1708)に46歳で亡くなっている。おそらくは離別によって生家へ戻ったかと思われる。

しかし、どのような事情か不明であるが、智長の生家ではなく、本家の位牌に祀られている。他に、「道光二十九乙酉正月十七日卒寿十六　上江洲親雲上女子蒲戸」と「同治元年壬戌十月十八日卒享年二十二　西銘村上江洲仁屋妻　上江洲親雲上六女真牛」とあるのは、具体的に誰の女子にあたるのか特定できないが、いずれも未婚うちに早世したか、あるいは結婚の後に離別し生家で亡くなった女子である。

女子については未婚・既婚をとわず、たとえ結婚後離別した場合でも、生家の位牌には支障なく祀られることがわかる。沖縄本島のある地域では、一部離婚後生家に戻って亡くなった女子の位牌を「イナグガンス」と称して、別位牌に仕立てたり、元の婚家に位牌を戻そうとする観念がある[注7]。しかし、そのような観念はここでは看取されない。

上江洲家にはもう一つ位牌がある。仏壇の本位牌の脇、向かって左に安置されている。位牌は一本立のもので、3枚の札が組み込まれている。中央に「三世　乾隆十年乙丑五月廿二日卒　上江洲親雲上智源後妻」、向かって右に「上江洲（脱字）雲上智英後妻　童名真牛」の札が祀られいる。左の木札は記名はない。いずれも祖先の後妻を祀ったもので、後妻については本位牌に組み込まれなかった。これが当初からそうであったのか、後世になってから分けられたものであるのかは、注意を要するが、位牌祭祀の観念としては先妻と後妻では差別化が存在したといえる。

(2) 墓　所

表－1には歴代当主とその墓所の一覧を示してあり参照してもらいたい。上江洲均がいくつかの論考で、墓についての報告がある[注8]。ここではそれらもふまえて墓に祀られている祖先について家譜をもとに吟味しておきたい。

上江洲家の墓は関係する墓が4基ある。古い順に、はな崎墓、小港墓、けんさく（木のさく）墓、美里川墓である。場所もそれぞれ違い、初期は西銘部落から遠いところにあるが、新しくなると部落に近くなる。第1期のはな崎墓は、自然洞穴を利用した墓室の墓である。第2期の小港墓は堀込み墓の形式で、前面を石積みしている。第3期のけんさく（木のさく）墓は、眉の部分がない亀甲墓の初期的なタイプである。第4期の美里川墓は完全な亀甲墓である。ここでは、墓の変遷が主題ではないので、これ以上は言及しないが、久米島の墓の変遷を時代的にも検証できる一連の墓である。

さて、第1期のはな崎墓には全部で30個の厨子甕がある。『家記』には角厨子に「銘書順治十九年己丑満喜歳七拾大名首里親雲上」とあり、これが三世の智隆である。智隆の没年は順治6年（1649）であるので、この年号は洗骨の年であろう。『家記』にあるように、順治年間は18年までしかないので、誤記の可能性がある。

他に、記名のある丸型荒焼厨子甕が7つある。銘書には「大掟西平にや」「小浜之阿ん

し」「新垣掟親雲上」他がある。「大掟西平にや」は、首里親雲上智隆の孫にあたる智章である。5世智章は4世智囿の長男になる。智章は生年不明であるが、順治18年(1661)に亡くなっている。1男2女の子どもをもうけているが、おそらくは若年の死亡であったと思われる。4世の智囿は第2期の小港墓に葬られているが、智章が亡くなる時点では、小港墓は完成しておらず、このはな崎墓に納められたと考えられる。

他の銘書きの厨子甕、すなわち「小浜之阿んし」「新垣掟親雲上」「浜川大筑」「我那覇之阿もと」などは、上江洲家にとっては系譜的には他系になるものである。上江洲均が指摘するように、この墓は古い寄り合い墓であったと推定される。

以上のように、ここに納められていて明確にわかるのは、智隆と智章の二人だけである。銘書きのない厨子甕が22個あるが、これらは『家記』によれば、小浜関係のものと思われる。したがって、1世の西平親雲上智真と2世西平親雲上智昭の2人については現在のところ、墓所は不詳である。

第2期の小港墓は、4世智囿が病気の時に、その子どもの次男智源が造営した墓である。智囿は康熙3年(1664)に没しているので、1660年代初めにあたる。『家記』によれば、厨子甕は銘書きのあるものが6個、銘書きのないものが8個あった。

家型の厨子甕は割られているが、「康熙三年辰五月廿九日、寿五拾弐、西平親雲上思武太」、ならびに「同念八天己巳正月廿三日、歳七拾七、前君南風」とあり、4世智囿とその妻であることが判明する。もう一つの家型厨子甕には、「康熙弐拾八年己巳正月十八日、歳四十八久根城掟母」とある。これは5世智源の妻真加戸である。康熙28年(1689)に没しているために、夫の智源とは別に、この墓に納められたのであろう。ただ、後述のように、次期のけんさく墓にも智源の厨子甕に妻の記銘があるところをみると、後代に移葬されたことも考えられる。他に、上江洲家と関係のある銘書きのある厨子甕があるが、家譜と対照させても、特定できそうな人物はない。この墓は智囿(1613～1664)一代の墓とされているが、詳細は不明である。

第3期のけんさく(木のさく原)墓は、墓碑によると、1701年(康熙40)か1705年ごろに造営されている。5世智源(1640～1709)の代に建造された墓で、中には銘書きのある厨子甕が9個、銘書きのないものが9個安置されている。

御殿型の厨子甕では、一つの厨子甕に智源とその妻が記銘されている。夫婦が一つの甕に納められた形になっている。「雍正拾壬子年二月十六日、寿五拾七上江洲親雲上」とあるのは、6世の智意(1676～1732)のものである。また、「乾隆三拾六年辛卯十一月二日死去、寿九拾四上江洲親雲上妻思戸」は智意の妻であろう。智意夫婦はそれぞれ別々の厨子甕に納められている。しかし、その子の智英夫婦は同じ甕に合葬されている。ただ、智英(1704～1762)は後妻を娶っているが、その妻真牛は別の厨子甕である。

智英の6男は、9歳で夭逝しており厨子甕を別にしてこの墓に安置されている。「乾隆三拾八年癸巳四月四日死去、寿三拾六首里大屋子上江洲筑登之」とあるのは、判然としないが、死亡年齢36歳からの推察が許されるならば、智英の長男智賡であろうか。他の2つについては不明である。

第4期の美里川墓の造営は道光11年（1831）とされる。けんさく墓が狭くなったので、10世の智俊が築いた墓である。養子である8世智常（1727～1803）は当初、生家の墓に葬られたようであるが、墓の造営後に移葬された。久米村の風水師高嶺里之子親雲上が墓の検分をしたのもこの墓である。8世智常の以降はこの墓を用いている。

以上が歴代の墓とそこに安置されている先祖の概要である。上江洲家の墓は、当初第1期の「寄合墓」からその後の「家墓」へ展開し整備されていった。

5世智源の代には夫婦が一つの墓、もしくは一つの甕に納められるという観念があったことがうかがえる。厨子甕の銘書きから判断する限りは、3世智隆や4世智囿の代は同じ甕に一緒には葬られてはいない。また、後妻の場合は、夫婦とはいえ、同一の甕に合葬されてはいない点が特記される。

おわりに

さて、以上上江洲家の家譜史料やその他の関連資料を参考にしながら、考察してきたことをもとに、要約して結びにかえたい。

① 上江洲家の家譜やその他の久米島の家譜からみる限り、18世紀前半までは長男以外に、次三男が家督を相続継承することが頻繁にあった。「父之命により家跡を継ぐ」というケースは多く、沖縄本島でも指摘されているように、久米島においても長男が必ず家督を相続すると規定されていたわけではなかった。長男に代わって次男以下の男子が継ぐ、あるいは場合によっては長男が養取として出るケースも存在したのである。

② 上江洲家本家と太史氏とは嫁のやりとりによる婚姻を媒介とした結びつきが強かったことが指摘できる。とくに4世から8世までは相互の婚姻関係が顕著にみられ、双方には婚姻紐結を介した奉公人（地方役人）層の強い結びつきが存在していたと考えられる。

③ 『和州氏家譜系図』では君南風の職にある女性を元祖とする例がみられた。

那覇の士族層でも献金によって女性が元祖となったいくつかの例は見受けられるが、系譜観をみる上で貴重な例である。とりわけ近代以降、沖縄本島で「イナグガンス（女元祖）」として忌み嫌われている女性元祖は、当地でも17世紀初めも全く意識されてはいなかった。

④ 君南風の職は基本的には代々太史氏から輩出している。初代の君南風が叔母の跡を

継いでいることからわかるように、原則として叔母・叔母－姪の父系による継承である。ただ、上江洲家の4世智囿の妻君南風真鶴との婚姻により、一時上江洲家に引き継がれている。しかし、その長女真牛は太史氏昌包へ嫁しており、結果的に君南風職は太史氏に戻っており、母－娘の継承もみられ、この場合は嫁継ぎの側面も顕在化している。

⑤ 家譜記載の元祖以来の世代深度の位牌や『家記』それとは世代深度に2世代のズレがあり、異なっている。歴史的な記述資料としての家譜の系譜と、人々のもっている＜位牌＞・＜家＞における系譜観との間に、差異がある点に留意する必要がある。

⑥ 上江洲家の位牌から見る限り、未婚で亡くなった男子、あるいは未婚・既婚をとわず、亡くなった女子は支障なく同一の位牌に祀られており、近代以降沖縄本島で非常に強く意識されるようになった、「チャッチウシクミ（嫡子押し込め）」、「チョーデーカサバイ（兄弟重合）」「イナグガンス（女性元祖）」などの位牌祭祀の禁忌は、認められない。

⑦ 夫婦が一つの厨子甕に合葬されるのは、上江洲家の墓から見る限り18世紀半なってからである。ただ、後妻の場合は、位牌においても別祀されているように、厨子甕においても別に分けられていた。かつては夫婦間において先妻と後妻では、祖先として祀られる段階において取扱いに差異があったことが指摘できる。

最後に、このような機会に文書資料を整理する好運に恵まれ、上江洲家の書跡・文書資料を一括して寄託していただいた上江洲智泰・智一氏に感謝申し上げたい。

脚注

＜1＞上江洲均「久米島の家譜について」『沖縄の家譜－歴史資料調査報告書VI－』沖縄県教育委員会　1989年

＜2＞上掲論文

＜3＞上江洲均「美済氏系図」『美済氏会だより』第1号、昭和53年9月16日

＜4＞平敷令治「沖縄の位牌祭祀」P24-25、沖縄国際大学南島文化研究所編『トートーメーと祖先崇拝　東アジアにおける位牌祭祀の比較』所収　1994年

＜5＞上掲論文、P24

＜6＞金城善「地方の位牌についての一考察－沖縄本島南部糸満市高嶺地域の事例から－」『球陽論叢』　1986年

＜7＞萩尾俊章「位牌祭祀と禁忌－沖縄本島中部における事例研究－」『沖縄民俗研究』第6号、1986年

＜８＞上江洲均「久米島上江洲親雲上の『家記』」『沖縄県立博物館紀要』第７号1981年、「久米島の墓－上江洲家墓について－」『沖縄の暮らしと民具』1982年などを参照。

参考文献

上江洲均「三世首里親雲上智隆について」『美済氏会だより』第２号　1978年12月月９日

上江洲均「『美濟姓家譜』に見る代々の業績」『美済氏会だより』第３号　1979年４月22日

上江洲均「『美濟姓家譜』（本家）に見る代々の業績（下）」『美済氏会だより』第４号　1979年９月20日

上江洲均「久米島－ふるさと発見」『あるく　みる　きく』1984年

沖縄県教育委員会編『八重山諸島を中心としたの古文書調査報告書』1981年

沖縄県教育委員会『沖縄の家譜－歴史資料調査報告書VI－』　1989年

沖縄久米島調査委員会『沖縄久米島　資料篇』　1983年

「上江洲家文書」について

豊見山　和行

はじめに

久米島に残された古文書が本格的に調査されるようになったのは、比較的近年のことに属する。1980年に沖縄県教育委員会が主体となり文化庁の古文書調査の補助事業の一環として久米島の古文書が調査されたのが、全体的調査の第一歩といえよう。その成果は『昭和55年度沖縄県文化財調査報告書第三十五集　八重山諸島を中心とした古文書調査報告書』(1981年、沖縄県教育委員会、以下『古文書調査報告書』と略記)としてあらわされた。さらに、1979年から82年にかけて行われた法政大学沖縄文化研究所による「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」は、いくつかの貴重な古文書を発掘すると同時に史料の翻刻を行い、久米島の基本的な古文書を紹介するなど、注目すべき成果をあげている(沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島　資料篇』1983年、弘文堂)。

以上のように、久米島の古文書が調査対象として注目されるなかにあって、県博物館による久米島調査が1993年から開始された。その結果、これまでの調査では明らかにしえなかった古文書や未発掘の古文書を発掘することができた。小稿は、特に「上江洲家文書」に焦点を絞り、現在までに調査できた古文書の概要と、さらに久米島の社会相を示す裁判記録である「久米島問付返答」(仮題)を紹介するものである。

1．上江洲家文書について

「上江洲家文書」(上江洲智元氏所有)は、現在県博物館に寄託され、整理の途中にある。県博物館による調査以前における「上江洲家文書」の全体的状況は、前掲『古文書調査報告書』の文書目録で概要を伺うことができるものの、その時点で確認された文書点数は81点にすぎなかった。というのは、上江洲均氏によると古文書の多くが虫害や傷みがみられ、また管理上の問題などから外部への閲覧を制限せざるをえない状況にあったという。また、保管されていた家屋(重要文化財指定の本棟とは別棟)の雨漏りなどで1980年の県教委による調査時点より劣化が進行している文書もみられる、という(1994年1月19日、所蔵者の長男である上江洲智一氏を交えての県博での談話)。それらのこともあって、現在博物館への寄託となり、整理が行われることになったのである。

さて、1980年段階においても少ない文書点数にもかかわらず、「上江洲家文書」中の「久米具志川間切西銘村名寄帳」は、琉球の独特の土地制度、すなわち地割制度の起源を解明する上で極めて貴重な史料として注目された(安良城盛昭「天保一二年『久米具志川間切

西銘村名寄帳』の分析（中間報告）」『古文書調査報告書』。山本弘文「近世久米島の土地所有と地代」『沖縄久米島』1982年、弘文堂、同「近世後期の久米島の土地所有」『沖縄久米島の総合的研究』1984年、弘文堂）。ちなみに、上記の名寄帳は島尻克美氏によって翻刻され、利用が容易になっている（前掲『沖縄久米島の総合的研究』所収）。また、東喜望「久米島の近世文書」（『沖縄久米島』1982年、弘文堂）は「上江洲家文書」だけでなく、他家の家文書をも紹介しており、久米島の古文書＝近世文書を概観する上で参考となる。

前述のように「上江洲家文書」の総点数は、旧来81点のみが確認されていたが、今回の県博物館の調査によって、それを上回る点数が確認された。現在、整理済みの史料は、資料編「上江洲家文書」一覧（以下、「文書」一覧と略す）にみるように、241件（331点）を数える。さらに未整理史料がかなり残されており、総点数は現在のところ不明であるが、目算では1,000～1,500点ほどに上るものと予想されている。「上江洲家文書」がこれほど多く残されていたことは、今回の調査ではじめて明らかになった。

一般的に、沖縄は他府県の近世史料と比較すると史料の残存率は極めて低い。しかし、少ないながらも沖縄の地方文書のなかで、このように家文書としてまとまった史料群は稀な部類に属する。そのため、「上江洲家文書」全体を小稿で紹介することは現時点では不可能であり、また、筆者が整理した点数も限られているため、小稿は「上江洲家文書」のなかのほんの一端を紹介するものであることをあらかじめ断っておきたい。

当文書の一部については、すでに上江洲均氏が「久米島上江洲親雲上の『家記』」（『沖縄県立博物館紀要』第7号、1981年）として詳細な解説を付し、全文を翻刻している。「上江洲家文書」を理解する上で、上記の「家記」は興味深い内容を有しており、以下簡単に触れておきたい。

同治11年（1872）9月、前地頭代石垣の上江洲親雲上によって作成された「家記」の項目は次の通りである。

一掛床御写之事、（第一項）
一遺言之事、（第二項）
一仕明御手形之事、（第三項）
一墓所之事、（第四項）
一屋敷之事、（第五項）
一仕明田之事、（第六項）
一家内治方之事、（第七項）
一平良辻山茶敷「之事」、（第八項）
一蔵元日記より抜書　之事、（第九項）

「家記」の詳細な内容は、前掲上江洲均氏の紹介にゆずるが、略記すると次のようにな

る。第一項は、上江洲智英（七世）が首里王府よりその善行を讃えられて褒賞された「世済其美」についての記事である。第二項は、家政全般についての遺言である。第三項・第六項は、元祖以来開発ないし購入によって所持する仕明田を列挙している。第四項は、はな崎墓・小港墓・けんさく墓・美里川墓の四ヶ所の墓所の修補や格護方について、特に風水との兼ね合いで入念に管理することを要請している。第五項は、屋敷の由来について記している。第七項は、上江洲家の下人・下女に対する取り扱い方や家計の倹約など、常日頃留意すべきことを記している。第八項・第九項はともに同家が所持する茶敷（茶山）のことを記している。

前述の「文書」一覧と「家記」をあわせて見ると、「家記」の項目に対応する文書が少なからず残されていることが分かる。例えば、一連の「仕明請地帳」や仕明関係文書があげられる。換言すれば、上江洲家という家が、どのような意識のもとに文書を残していたかということを知る上で、「家記」は貴重な手がかりを与えてくれるのである。もちろん、前述の九項目と直接的に関連しない文書も多数残されており、それら全体の分析を通じてはじめて「上江洲家文書」の正確な位置づけができるのであり、結論めいたことを現時点で示すことはできない。しかし、久米島において代々地頭代を勤めた家柄というだけでなく、家意識や家産観念が全体的に薄弱とされる前近代の琉球社会において、同家の分析は琉球史全体に興味深い事例を提供することは間違いないと言えよう。

つまり、同文書が一個の地頭代のあり方を詳細に把握する上で重要な文書群であること、上江洲家という地頭代家の経営の諸相、家産の形成過程、首里・那覇・久米村などの中央士族等との交流、土地支配の具体相、首里王府との関係、等々の解明が期待されるのである。

2．「久米島問付返答」（仮題）について

この「久米島問付返答」（「文書」一覧では「問付返答（尋問）書」）の概略は、以下の通りである。「文書」一覧に示されているように、作成年代は不明である。年代確定は今後の課題として残されているが、久米島社会の一端を如実に示す事件であることは間違いない。具体的に見ると、本文書は三つの事件が記録されている。

第一の事件は、泊村の馬艦船船頭・金城と久米島の地元民との間で発生した事件、すなわち金城による久米島百姓打擲（暴行）一件である。年貢米運搬時のトラブルであり、年貢米を搬入するさいのあり方を知る上でも興味深い記述が見られる。

第二の事件は、具志川間切の仲村渠村の掟・儀間にやによる「非法」行為一件である。儀間にやは、仲村渠村の百姓を過度に使役（夫遣い）したこと、百姓男牛を恣意的に儀間にやの下人として使役していたことなどが、百姓等によって訴えられたのである。また、

同村の脇地頭である仲村渠親雲上も責任を追求されている。

第三の事件は、同間切仲地村の村役人である掟・目差・文子・耕作当による「非法」行為の一件である。同村は王府への年貢未進（滞納）が多く、百姓全体が困窮しているにもかかわらず、百姓への下知（指導・監督）を疎略にし、かつ「呑酒の企」（酒宴）にうつつを抜かし百姓を一層困窮させた、として指弾されたのである。久米島における百姓の生活状況の一端を伺うことのできる事件である。

本文書の形式は、全く別の事件を処理した18世紀中頃の「問付返答」（拙稿「近世琉球の裁判史料『問付返答』」、『沖縄文化』第28巻１号、1993年）のそれと同一である。そのことは、上江洲家の誰かが王府の裁判記録を何らかの方法で入手し、書き写していたことを物語っている。つまり、地頭代を勤める上江洲家にとって、そのような裁判記録も自らの間切行政の参考に資する上で、必要な帳簿であったと思われる。それらの当否は、「上江洲家文書」全体を分析したときに明確にされよう。

3、「久米島問付返答」本文

表紙欠（仮題、「久米島問付返答」）

[一]

（前欠）

本船より俵投入候ニ付、右石嶺より左候而ハ船打損床等もたまり不申候間、□（静カ）手渡ニ而可被積入由申候ニ付、汝御米漕船ニ気任申候歟与申、則唐竹竿を以頭突割候段、申出候ニ付、問之覚、

馬艦船頭とまり村

金城

一問、汝事、八重山島より御米積入当月十日、具志川間切こん祢崎江致潮掛、逢向風如那覇難乗得候間、助船を出し、仲里間切真謝泊江可引入由申出、則助船を出仲里間切比屋定之浦迄挽参候処、向風相成乗戻、具志川間切かき（まカ）泊江碇を卸、同十二日大風催有之候間、積荷取卸不申候而不相叶故、小船拾七艘差出加勢夫太分相付、両間切さ[はく]り立合、□（御カ）物取卸候最中、仲里間切阿嘉村牛大嶺乗組候船江本船より俵投入候付、大嶺より右通候而ハ船相破床等もたまり不申候間、手渡ニ而可被積入由申候ニ付、汝より御米漕船江気任事を申歟与、唐竹竿を以大嶺頭突割、則倒臥候、耳之上表ニ七寸廻程之大疵相付、身体ニ血を淵無性体ニ相成候、依之さはくり中より船頭召呼何様之儀ニ而百姓打擲仕候哉、不届之訳有之候ハヽ、則さはくり江申聞候ハヽ其差引可仕之処、無其儀無理ニ百姓致打擲候儀、合点不参由申達候処、船頭返答ニ、御物積船ニ而候

得ハ百姓共打擲候共何程之事歟可有之哉□□□へ助置候得共、何ト打擲仕候而も何之大事可有之哉与申、さはくり中申分少茂無領承為罷在由、右之次第段々気随意之働ニ候、其有筋具可申披候、

答、被仰下趣奉得其意候、右牛大嶺打擲仕次第ハ、小船ニ五人完乗組御米卸候付、手遅可有之候間、四人ツヽニ而卸可申由申渡、余船ハ四人完乗ニ而卸候処、右石嶺者五人乗通罷在、其上本船より俵卸候砌、自分より取はつし床打破候処、悪き□者態与投入船打□（破カ）候由、雑言仕候ニ付、当座之任分心短慮差起、不覚打擲仕、今更不調法千万恐入奉存候、

附、右ニ付、さはくり中より被相尋候砌、百姓打擲疵相付置候付而ハ、其断可申上処、無其儀任短慮過言仕置候儀、重慮（畳カ）不調法之至奉存候、

一又問、挽船之者共働方不宜候ハヽ、さはくり中江相達、下知させ可□□処、無其儀百姓□□（無理カ）ニ打擲仕候儀、如何、

答、仰之通挽船之者共不働ニ有之候ハヽ、さはくり中江相達可申処、無其儀無理ニ打擲仕儀、不調法至極奉存候、

一又問、乗船逢逆風助船を出、昼夜共本船江相付加勢仕可居候ニ付而ハ、成程叵有存、百姓等江茂別而□（不）便ニ可□（存）処、無其儀候、逢逆風候諸船早速助船出候儀、御米而已ニ而無之、第一人命御救を以諸浦・諸島江堅被仰渡置候ニ付、段々助船を出相働為申事候、然者右牛大嶺事、別ニ無理之仕方有之候哉、少も不隠可申出候、

答、逢難風助船出、昼夜共本船相付加勢仕居候ニ付而ハ、成程叵有奉存候、百姓等江も別而不便ニ可存処、無其儀短慮差起、無理体ニ打擲仕、今更不調法千万奉存候、別ニ悪心を以打擲為仕筋少も無御座候、当座の任分心、去（右カ）難成怪我仕、何分ニも可申上様無御座、至極恐入奉存候、

以上、

子

六月廿六日

御評定所筆者

添石筑登之親雲上

御物奉行筆者

田場里之子親雲上

具志川間切在番

鉢嶺親雲上

右之通、見届申候、以上、

御物奉行

安里親方

同日

[二]

久米具志川間切仲村渠掟儀間にや、百姓無理ニ召遣段々依怙之働而已有之、百姓疲入及困窮候段、所之者申上候ニ付、問付之覚、

仲村渠掟

儀間にや

一問、仲村渠村之儀、致衰微百姓及困窮ニ候ニ付而ハ、掟役之儀、別而気を付可致下知之処、無其儀却而百姓無理ニ召仕置候之体ニ而ハ、必至与□□□□□差入候由、所□者申出候、其有筋□□□申出候、

答、被仰下候通別ニ、夫遣仕候儀無御座候、聟たら山川旅加勢夫、又ハ村中ニ椀道具入用之時、右山川所持之道具借シ用候賃并蔵元より相渡り候遣紙不足ニ付、自分紙差遣候代、且又私所持之ほと□（きカ）差出、御用布織調させ候賃として、夫弐拾八人召遣置申候、

一又問、夫廿八人之外、無理之仕方無之由申出候処、米五斗、同三斗五合、畳六枚、蔵柱三本、蔵之角廻木四本、無理之仕方有之候処、何様ニ而隠シ□（置カ）候哉、其方仕方一々百姓中申出候、少も不隠白状可仕候、

答、

一米五斗、去年蔵入稲斤□取用ニ百姓上納之内より春調、其内弐斗五升兼城村布屋、弐斗五升ハ浜川せと自分呑用之酒代として相掛申候、

一米壱斗弐升五合、宇江城村女たる江是又自分用之酒代として、たら山川上納米より寄替を以相払、山川江ハ自分ニ而差出辺弁仕置申候、

附、たら山川問届符合、

一畳六枚仕立置候、表莚弐枚八道ニも五枚たり寄共、自分有物より出シ申候、余ハ御支配御用ニ村中畳仕立候ニ付、席（序カ）ニ仕立添、自分用ニ仕置申候、

一松蔵柱三本、同用廻木四本、長三間完、当間切八反帆船作事ニ付、楷木取調候砌、百姓中江申付取添させ、自分蔵材木仕置申候、

一右最前申上候者、夫廿八人召仕候外、少も無理之仕方不仕候□申上置候処、致勘違今迄隠置候処、委細被聞召上候上ハ、難逃候付有筋申上候、此外別ニ無理之仕方少も無御座候、

一又問、右之外少も無理之仕方不致由候処、百姓中より申出候者夫太分無理ニ召遣置候由、委細申出有之候、少も不隠置白直ニ可申出候、若偽候ハヽ責而可承候、

答、在番照屋親雲上水夫買入、又ハ聟たら山川旅加勢夫与名付、去年より当春迄ハ免支之外、百八人召遣置申候、右通無理ニ夫遣仕置候付而ハ、何様之御科歟可被仰付哉与驚入、偽申上置候儀、不調法至極奉存候、

一又問、噯村之百姓不届之儀有之砌者、則大さはくり・在番江可申出候処、無其儀去年百姓男牛村中ニ而竿少々、庭鳥弐つ盗仕候ニ付、自分計ニ而汝下人召成置候儀、如何、

答、右牛事、常々行跡悪敷有之候、所中ニ而細盗仕候ニ付而所之障ニ相成候付、所払可仕由、百姓中申出候処、地頭仲村渠親雲上より右牛事、手切盗仕為申ニ手可有之候間、彼親類江預置、食物無不足喰させ候ハヽ心持相直可申存候間、百姓中相談之上、彼親類故仲村渠掟親雲上女房江預置候処、去年十二月私方江引越召遣置候儀、不調法千万奉存候、

一又問、右之外ニも非法之仕方可有之候、委ク白状可致候、少も隠候ハヽ糺敷責而可承候、

答、右之外ニ者少も無理非法之仕方仕不申候、何分御責ニ逢候共、有筋此通御座候、少も隠置不申候、

以上、

子

六月廿六日　　添石筑登之親雲上
　　田場里之子親雲上
　　鉢嶺親雲上

右之通、見届申候、以上、

御物奉行
　　安里親方

同日

地頭
　　仲村渠親雲上

一問、仲村渠村之儀、百姓疲入及難儀候、地頭職之儀、百姓有付候様ニ万事気を付、□以相談百姓為方宜可相計候処、無其儀候、此程掟より段々百姓江無理之儀申付、百姓相疲シ置候も一切不存体ニ罷在候、其方も掟同意いたし百姓無理ニ召遣置候儀、案中ニ候、且又噯村之儀、百姓男うし与申者、去年竿・庭鳥盗ニ付掟より其方江以相談、人内之支配申付置候、右体之者共者在番江申出僉議之上、其罪科可申付候処、地頭・掟計迄ニ而下人ニ召成置候儀、其次第具可申出候、

答、被仰下候通地頭職之儀、万事気を付百姓有付之様ニ百姓中以相談耕作方相働させ候処、右通掟より百姓へ無理ニ夫遣仕置之儀存不申、漸頃日承付不調法之至奉存候、将又人内ニ召成置候牛事、行跡悪敷有之、所中ニ而段々細盗仕候ニ付而所之障ニ相成候間、所払可仕由、百姓中申出候処、右牛事常々無働ニ在之、飯米及手切居候、働可有之候間堅申付、飯米等作り請候間、彼親類故仲村渠掟親雲上女房江預ケ食物無不足喰させ候ハヽ、心持も宜可罷成候間、其通可仕様村中以相談預

ケ置候、然処仲村渠掟より去年十二月仲泊村江引越召遣置候由承付、急度可差帰由申付候得共、承引不仕候ニ付、当三月呼寄心元預り人江召付置申候、右通ニ而私儀、百姓中江無理之儀少も仕不申候、

[三]

久米具志川間切仲地村之儀、未進物太分にて百姓及難儀候処、掟・目差・文子・耕作当、相合好酒之企而已ニ而、百姓中下知方不宜行跡悪敷、段々出物申付百姓疲入候由、所之者申出候ニ付、問付之覚

仲地村

安里にや

一問、仲地村之儀、未進物太分有之、百姓疲入居候、右ニ付而ハ百姓有付之様ニ出精可加下知候処、無其儀却而掟・目差・文子・耕作当相合、呑酒之企而已にて百姓之下知方致大形、百姓疲シ果させ置候由、所之者申出候、其有筋具ニ可申出候、且又以前ニ段々百姓中相尋承置候間、少も不隠置可申出候、

答、構之夫地頭山里親雲上より承候ハ、仲地村之儀未進米太分にて百姓及難儀之処、村中ニ而酒致商売、且又仲里間切より酒持参、原々ニ而稲苗ニ相替候者有之由承候間、村中又ハ原々走廻り、売酒持候者有之候ハヽ買取候由ニ而、皆共布屋江取籠□□可申聞由有之ニ付、則耕作当召列村中相探候処少も無之候、且又方々より、買寄呑尽置候酒并代米付届仕置候分、左申上候、

一米弐石五斗七升五合、

一酒廿四沸四合、米ニして弐石四斗八升、

〆米

一去戌年、村中浮得竿迦田ニ作り置候米三斗在之、其内五升ハ御在番照屋親雲上村引合御通被成候時遣入、余ハ酒仕立、御在番村引合蚕改・桑改、原々いも御見分、貯米入候時、遣入申候、

一仲地村之儀、未進米有之、貯米より先之貯方□弁入不申、及難儀候間、耕作方之働下知方出精不申候而不叶儀与、構之夫地頭山里親雲上并目差・文子・耕作当、以相談耕作之働方堅申付、田畠大形仕置候者江者科鞭等申付、且又村中ニ而人々種子・いもかつら抜取置候者在之、拷問仕置候者御座候、右通ニ而村中之働方強キ様ニ存申者も可有之候哉、右次第ニ而何そ□留仕候儀無御座候、

一御支配用意として前役より山里・仲地村百姓頭一人ニ付、下大ツ弐合ツヽ申付、致取納置候、仲地村之儀、綿子不足ニ付其代物無之故、百姓中江借渡置候間、貫調させ可受取有之、其内壱斗壱升ハ貫調置候処、耕作当かまた崎原上納大ツ致不足ニ付、

借渡置候、余ハ未貫調不申候、貫調置候分ハ別紙小帳ニ相記置申候、

一又問、村々ニ而拷問仕候儀堅御法度ニ付、何かし相談ニ而相行候哉、拷問仕置候人誰ニ而候哉、

答、かたま崎原よりはんすいも種子・かつら植付、未盛生不仕候処、仲地村かな玉那覇名子女かま戸、去三月比夜半時分右かつら挽取候を原廻かま瀬名波見付申出、且又右かま戸常々村中之庭鳥・野菜盗取、所中ニ相障候間、所払仕候様ニ与、村耕作当・溝□原廻上木当共より申出候ニ付、山里親雲上得差図候処、差引可仕由承、百姓中揃合之場ニ而段々郷間仕候得共請付不申候故、拷問仕申候、依之いもかつら盗取之段ハ白状、庭鳥・野菜ハ盗不申由ニ而受付不申候、然ハ右之段御在番方江申出候ハヽ、□□（却而カ）厄害相成可申与、村所ニ而拷問仕置、不調法之至奉存候、

一又問、汝事、好酒之企にて太分致呑酒置候間、其代米百姓中江申掛、又ハ百姓無理ニ召仕置候半、有筋可申出候、

答、被仰下候通、好酒之企仕太分呑尽置、近比不調法千万奉存候、何そ百姓中江出物申付、且又無理ニ夫遣仕候儀、少も無御座候、

文子

慶留間にや

一問、汝事、仲地掟組合方々より酒買寄、致呑酒置候、其有筋白直可申披候、

答、方々より酒買寄、又ハ代米付届仕置候儀、左ニ申上候、

一酒五里五合以掟・目差・文子・耕作当、相合呑尽置候、

一又問、汝事、此程掟相合度々呑酒仕置候、此外百姓中江出物付置候半、有筋不隠可申披候、

答、仰之通、掟寄合度々呑酒仕置、不調法之至奉存候、百姓中江無理之儀ハ少も仕不申候、

仲地目差

与那覇にや

一問、汝事、仲地掟組合ニ而方々より酒買寄呑酒仕置候、其次第白直ニ可申披候、

答、酒買寄、又ハ酒代相払置候分、左ニ申上候、

一酒四里五合寄合、呑尽分、

一米五斗、酒代、

一又問、汝事、此程掟相合度々致呑酒置候、其代米百姓中江申懸、且又無理ニ夫遣仕候半、有筋不残可申出候、

答、仰之通掟相合、度々致呑酒置候儀不調法之至奉存候、此外百姓中へ無理之儀申付

之儀、少も無御座候、

文子

宮里にや

一問、汝事、仲地掟組合ニ而方々より酒買寄致呑酒置候、其有筋具ニ可申披候、

答、酒買寄、又ハ酒代付届仕候次第、左ニ申上候、

一酒四里八分寄合呑尽分、

一又問、汝事、此程掟相合度々致呑酒置候、此程ニも百姓中出物申付置候半、有筋可申披候、

答、仰之通掟寄合、度々呑酒仕置不調法之至奉存候、百姓中へ無理之儀少も仕不申候、

耕作当

かまた崎原

一問、汝事、掟寄合方々より酒買入致呑酒置候、其次第不隠可申出候、

答、子三月耕作当、中道私両人ニ而酒八合布屋江持参、掟・目差・文子致馳走候処、其分ニ而ハ不足候間、今少買寄可申由ニ被申候得共、辞退仕取申候、此外度々寄合致呑酒候処、数度事ニ而覚不申候、

一又問、汝事、此程掟相合度々致呑酒置候、此外ニも百姓中江無理ニ出物申付置候半、有筋不隠可申出候、

答、仰之通掟寄合、度々呑酒仕置不調法之至奉存候、此外百姓中江無理之儀者仕不申候、

耕作当

□□は中道

かまた崎原

一問、汝事、仲地掟組合度々酒買寄致呑酒置候、其次第不隠可申出候、

答、かまた崎原より酒八合持参ニ而、此程目差・文子より酒給置候間、此酒持参馳走仕度由申候ニ付、同心ニ而布屋江罷出馳走仕置申候、右之外六度寄合呑酒仕候処、酒買所等覚不申候、

一又問、汝事、此ほと掟相合度々致呑酒置候、此外ニも百姓中江出物申付置候半、白平可申出候、

答、仰之通掟相合呑酒仕置候、不調法之至奉存候、百姓中江出物申付之儀ハ少も無御座候、

仲地村構地頭

山里親雲上

一問、仲地村之儀、其方噯村ニ而候処、百姓疲□及難儀候体見及候ハヽ、則々相救候手当

可相計之処、無其儀百姓疲シ果させ置候、且又掟・目差・文子・耕作当共相合、方々より酒買寄致呑酒置候、噯村之事候江者折々其掛引も可仕処、無其儀掟・目差・文子・耕作当共相合、呑酒仕候儀其見聞も可有之候間、有筋可申出候、

答、被仰下候通百姓疲入させ候ニ付而ハ、耕作方出精相働不申ハ不相叶候処、掟・目差・文子・耕作当共江堅致相談、下知方申度置候、村中江も酒売買仕候者ハ買取候由ニ而、皆共布屋江取篭候而、首尾□申出申渡置候、掟事常々好酒［　　］目差・文子・耕作当相合呑酒之段［　］候ニ付而、去年三月堅致差引、百姓中へも掟江酒呑せ申間敷段、申渡置候処、右之次第至私も不調法至極奉存候、

以上、

子

六月廿六日　　添石筑登之親雲上
　　田場里之子親雲上
　　鉢嶺親雲上

右之通、見届申候、以上、

同日　　安里親方
　　仲地掟

一又問、大田村江返弁米拾五石之内、拾三石余相□（払カ）置、右□□ハ未進物之百姓中江致割符、則□□納可仕処、未進之有無不相構、百姓中□納之内より相払、右払人江ハ内々面付相立致抜書預り米之筋ニ相名付、帳面ニ払高ニ有之者江も未進相立、且又未進之方江ハ右預り米を以差足、其残□未進可相立処、無其儀未進米ハ糺付、其侭召残置候儀、抑留之筋ニ相見得候、縦令掠取候企ハ無之候共、帳面ニ相掠シ置候上ハ幾ら遁辞申構候共、可遁謂無之候、右外ニも段々不届之訳有之上ハ、何程偽申構候而も其罪科可難免候間、其有筋白直可申出候、

答、被仰下候通、大田村へ返弁米之儀、未進人数江割符仕致取納筈之処、未進有無も不相構、百姓惣納之内より相払、尤帳面ニも其付届可仕候処、未進之方者惣而其侭召残、未進無之方ニも割掛未進相立、右拾三石余之米帳面ニも其支配無之ニ付而ハ、掠取之筋ニ如在無御座候、帳内無案内ニ有之、段々大粧成間違仕、近比恐多深重奉存候、

右之通問付、道□（理カ）ニこまり掠取候筋相極候処、久米島之儀ハ村中支配ニ付而ハ受取之所□□無之、内證帳を以付届仕来由候故、在番・さはくり中以相談内證帳留取寄致勘定候処、実掠取之筋ニ而無之ゆへ、御問合書ニ相除候也、

久米島の沖縄角力

Okinawa Sumo at Kume Island

前田　真之

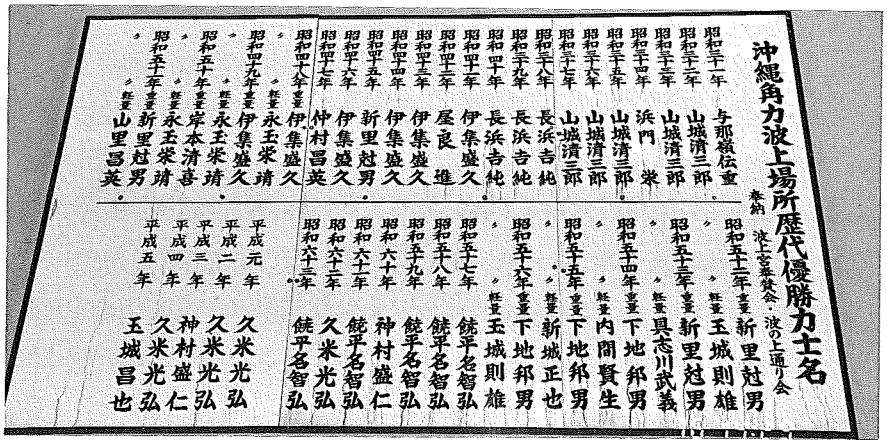
はじめに

1994年5月15日、波上宮横の旭ヵ丘公園で開かれた奉納角力大会の観戦に出かけた。

波上の角力大会は戦前から県内に知れ渡り、県社祭、奥武山招魂祭のときの大会と並び沖縄三大角力の場所と称せられ、多くの選手やファンから親しまれてきた。多くの選手は、この三大大会の中でも、とりわけこの大会を大きな目標として努力を重ねてきたので、この大会をステップにして名選手がこれまでにも多く輩出してきている。

この大会の広場の方から海の方向に向かったとき、左横の方に目をやると沖縄角力波上場所歴代優勝力士名という掲示板が視野に入ってくる。

この歴代優勝力士名は、昭和31年（1956年）の優勝者与那嶺伝重に始まり平成5年（1993年）の優勝者玉城昌也で終わっている。奇しくもこの両者は、ともに久米島の出身であるが、この歴代優勝力士名は図らずも久米島という地域をクローズアップさせることにつながっている。



波上に掲示されている歴代優勝力士名

歴代の優勝者の中から、久米島出身の力士名を挙げてみると以下のとおりとなる。

昭和31年　与那嶺伝重
昭和32年　山城清三郎
昭和33年　山城清三郎
昭和35年　山城清三郎
昭和36年　山城清三郎
昭和37年　山城清三郎
昭和41年　伊集盛久
昭和43年　伊集盛久
昭和44年　伊集盛久
昭和46年　伊集盛久
昭和47年　仲村昌英
昭和48年　伊集盛久
昭和49年　伊集盛久
昭和50年　岸本清喜
昭和51年　山里昌英
昭和57年　饒平名智弘
昭和58年　饒平名智弘
昭和59年　饒平名智弘
昭和61年　饒平名智弘
昭和63年　饒平名智弘
平成５年　玉城昌也

ここに挙げた久米島出身の８人の力士は、のべ21回の優勝を果たし、47回の全優勝者のほぼ半数近くを占めている。

このようながんばりに対し、久米島新聞では〝沖縄角力のメッカ久米島〟（1973年３月25日）あるいは〝角力の本場久米島〟（1973年７月23日）と呼んでいる。

本稿では、〝久米島がなぜ沖縄角力のメッカなどと意識されるほどになってきたのか〟これまでの久米島における沖縄角力のあゆみを、沖縄の歴史と関連させながらたどってみることにする。

１．歴史の中の沖縄角力

沖縄で角力が、いつ頃から行われるようになったのか起源やその歴史を物語る歴史資料は、今のところはっきりしていない。

しかし古老や諸先輩の言い伝えとしてまとめられたものが二つある。

その一つは、伊集盛久氏が、沖縄県角力協会の理事長としてまとめられたものであり、もう一つは大城清功氏が、中学生への角力普及のために執筆した沖縄県中学校体育研究会編「沖縄県版　中学体育実技」(学習研究社)の中の「沖縄県の伝統武道－沖縄角力－(1)歴史」の叙述である。

両者は共に久米島の出身であるが、その叙述はほぼ同じ構成になっている。この叙述は、沖縄角力の歴史的起源に関するこれまでの基本的な理解を示すものとなっているので、大城氏の書いた内容を紹介し、それをもとに検討を進めていくことにする。

「むかしの人々は、野山の石を持ち上げたり、かついだりしてからだを鍛えた。技というより、力を競う時代が14世紀ごろまで続き、やがて大陸との貿易が活発になるにつれて、いろいろな格闘術が伝来してきた。

そのころは琉球王国として安定した時代であったために、人々の暮らしもゆとりが生れ、町や村では祭りが重要な行事として催された。その余興として力くらべが始まり、やがて力の総合的な競技、そして角力へと発展していった。

沖縄角力は、15世紀には現在の形になっており、武家社会をとおして琉球全域へ広まっていった。その後、19世紀初めに角力好きで名高い「尚灝王」の登場により、士族と農民の間での競技も行われるほど盛んになった。……」

この内容をもう一度まとめてみると四点に分けることができる。

①力比べをする中から、やがて大陸との貿易を背景に、いろいろな格闘術が伝来した。

②琉球王国時代に祭事の余興として力比べが始まり、やがてそれが角力へと発展した。

③15世紀に沖縄角力は現在の形となる。

④19世紀の初め、尚灝王の時代に士族と農民の間で盛んになっていった。

大城氏は、このほかにも沖縄タイムスの「沖縄大百科事典」において沖縄角力について書いているが、そこで「沖縄角力の起源や歴史に関する前近代資料は皆無に近く詳細は不明……」と記しているところからすると、上述した4点はあくまでも古老や諸先輩方から伝え聞く話ということになるのであろう。

しかし琉球王国時代に生まれ、発展したとされる角力について、歴史資料と照らしあわせながら、何が明確で、何が不明なのかを確認しておく必要がある。

琉球王国時代の1713年に編集された「琉球国由来記」では、その遊戯門の項で、角力が角觝（スマフ）として紹介されている。そこでは、「中華事始」として六国のときに相撲が生まれたこと、「大和事始」として神代のときに建御雷神（たけみかずちのかみ）と建御名方神（たけみなかたのかみ）の力比べがあり、人代においては、當麻足蹶速（たいまのけはや）と野見宿禰（のみすくね）が力比べをして、野見宿禰が勝ちを収め、これが人代の

相撲の始まりになるとの内容が紹介されている。この内容は「古事記」や「日本書記」に記されており、琉球国由来記でも引用された形になっている。しかし沖縄における角力の起源についての叙述は、「琉球国由来記」には何ひとつ出てきていない。さらに「球陽」の尚灝王世代の項をひもといてみても角力についての叙述は見られない。したがって上述した③の「15世紀に沖縄角力は現在の形となる。」や④の「19世紀の初め、尚灝王の時代に士族と農民の間で盛んになっていった。」が、どこまで正確に歴史を反映しているのかについては、これからの検討課題ということになるであろう。

2．歴史の中の久米島角力

歴史的に見たとき、沖縄角力についてその起源を示す資料が不十分であることを述べてきたが、久米島における角力についてはどうであろうか。

その手掛かりになるのは、やはり「琉球国由来記」(1713年)、両間切の「旧記」「久米具志川間切例帳」(1831年)などに出てくる年中祭祀の項であろう。そこでは角力のようすが年中行事との関わりで述べられていないかどうかである。

上江洲均氏が、「久米島の年中行事」(沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂)の中で、「琉球国由来記」に出てくる久米島の年中行事をまとめているので、それを見ていくことにする。

1月（報告なし）
2月　麦穂祭
3月　三月三日
4月　山留
　　アブシバライ
5月　稲穂祭
6月　稲大祭
　　年アメ
7月　（報告なし）
8月　百度御物参
　　柴差
　　八月十五夜
9月　作物の為御イベ火神御前タカベ
10月　龕廻
　　粟豆初種子
　　稲大種マキ

11月　アラザウリ

12月　向ザウリ

　　鬼餅

ここに紹介された行事の中に、角力は出てこない。上江洲氏は、この年中行事の中に記載されてはいないが当時行われていたもの(正月行事)、記載されてはいるがやがて伝承されなくなったものがあることを指摘し、さらに後に付け加えられていった新しい行事についても触れている。

「これに対し、新しい時代の行事－例えば学校行事や役所の関わる行事、商工会の催す行事といったのが折り込まれ、定着しつつある。**その徴候はすでに明治の頃から見られたことである。久米島各地に行われる角力大会はもち論、五月四日の『ハーリー』(爬竜船競漕)も比較的新しく行われるようになった行事である。**」(太字は、筆者による。)

このあとで六月の行事「シュク祭」についても触れ、角力はシュク祭の行事に代わるものとして明治10年代に行われるようになったのではないかと述べている。

「六月二十六日には、謝名堂の南謝門大会がある。ナンジャは海の神を祀ったところと言われ、仲原善秀氏によれば、角力大会に変ったのは明治十年代のことで、それ以前は女性による「ウスデーク」舞踊が演じられたという。六月二十六日といえば、「稲大祭」の翌日である。これは『仲里旧記』の記事とも合致するところから本来は「シュク祭」の行事であったに違いない。

五月十五日に島のトップを切って真謝の菩薩堂角力、六月二十五日が儀間の白道角力、翌二十六日の南謝門角力、その後八月十五夜前後まで『角力大会』が続く。かくして女性による『ウスデーク』は姿を消すはめとなった。明治の世変りは、この辺にも大きな影響を与えたのである。」(太字は筆者による)

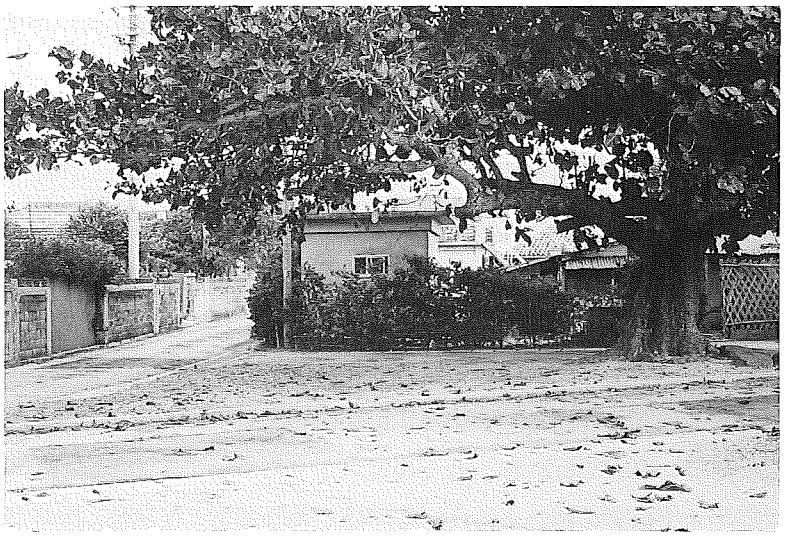
上江洲氏の指摘するところによれば、久米島における角力行事は比較的新しく、謝名堂の角力大会はシュク祭の時に催されるウスデークの代わりに明治10年代から始まってきたということになる。沖縄大学の「郷土14号久米島・仲里村謝名堂調査報告」では、角力はウマチーアシビとして催され、5月は真謝、6月は謝名堂で行われると記している。菩薩堂、白道、南謝門の角力大会のうち、菩薩堂と白道の角力大会がウマチーの余興であるとの理解では一致しているものの、南謝門についてはシュク祭のウスデークに代わるものなのかそれとも稲大祭の余興なのか評価が分かれている。ともあれ角力が、祭と大きな関わりがあるということについては明らかであり、明治の十年代頃から始まったということである。

一方仲原善忠氏の久米島史話によれば「(五月祭の時は、牌屋の前・昔は安谷屋の前の由、六月大祭の時は、当日儀間の白道、翌日、謝名堂のナンザにて、具志川は相撲はないが随

所に闘牛の催し物があるそうである。」と記してあり、真謝の角力が当初は安谷屋の前で行われていたが、やがて牌屋の前に移り、やがて現在の菩薩堂横の広場に移ってきたことが分かる。さらに具志川の西銘や仲地の角力大会が、元闘牛場跡で行われているところをみると、具志川では当初　闘牛大会が行われ、その後に角力大会が行われるようになったことが考えられる。開催場所はこれまでにも変動があり、多いときには12場所近くもあったが、現在の７場所は、これまで紹介してきた真謝菩薩堂全島大会、儀間志良堂（あるいは白道）蔵角力大会、謝名堂角力大会、西銘全島大会、仲地全島大会の五場所に、仲里村まつりと具志川村まつりが加わった形になっている。



真謝の菩薩堂角力が行われる天后宮前の広場



儀間の志良堂（白道）蔵角力大会の場所



謝名堂の南謝門角力大会の場所

3．久米島の沖縄角力

さて次になぜ久米島の沖縄角力が強くなってきたのか、その要因を探ってみることにする。その要因としては、およそ次のことが考えられるのではなかろうか。

1．角力は祭りと関わりのある娯楽として島内では戦前から親しまれ、諸人角力（すにんじま）の伝統があること

2．久米島では開催回数が多く、それをステップにさらに沖縄角力協会久米島支部が全島大会へ選手を派遣していること

3．沖縄角力協会久米島支部の運営する久米島大会での３分制等のルールの採用

4．角力大会における小・中・高校生部門の設置

5．私設角力道場の開設による育成指導

6．支部および地域からの選手推薦等の選手発掘

(1) 諸人角力（すにんじま）の伝統

沖縄大百科事典によると、諸人角力（すにんじま）とは「観衆と審判・力士が一緒になって楽しむ角力で、すべて不文律の内法に基づいて判定する」と紹介されている。

競技規定が初めて成文化されたのは戦後まもない1946年（昭和21年）なので、それ以前の角力は内法に基づいた形で行われ、力士の戦いぶりについて、あるいは行司（審判）の判定について、絶えず観衆の側からの反応も考慮しつつ運営している。

戦前の角力は勝ち抜き制のため、まわりからすると後で試合に出るのが有利なように思

われる。しかし大会に参加する力士の情報は、娯楽の少ない当時　角力の好きな観衆の間では口こみで広がっており、本人がその力にふさわしくない段階で試合に出ることを観衆が許さなかったようである。

(戦前)

久米島においても戦前　諸人角力が盛んであったことは、明治43年生れの宮城幸吉氏の書いた「じまむら」の中にも登場してくる。宮城氏は、闘牛や角力大会などの見物があるときは、その日のために二日分の草刈りをすませていたほど楽しみにしていたそうである。さらに家隣に安里順周という力士が住んでおり、彼が昭和3年の波上大会で優勝したことも記している。

さらに大岳小学校百周年記年誌でも、大岳百年の人物として沖縄角力の力士が紹介されている。

戦前活躍した力士名を挙げると、上江洲智享（山里）、糸数岩堅（鳥島）、橋口勇吉（鳥島）、国吉徳之助（鳥島）、山里昌睦（仲地）、譜久原朝顕（大原）、仲地文英（仲泊）、仲地廣助（西銘）、山里昌作（仲地）、城間清輝（仲村渠）、当原昌仁（山里）、安里次郎（仲村渠）、浜川智弘（上江洲）、仲真良盛（北原）、国吉幸吉（鳥島）、仲村米一（鳥島）、島久雄（西銘）、当間兼通（仲泊）がいる。ここに紹介した力士たちは、具志川村内の選手のみであるが、大正10年頃から昭和16年ころにかけて活躍している。一方仲里村の力士では、吉永安順が嘉手納農林に在籍中の昭和17年ころ本島内の各地の大会で優勝し、さらに戦後も牧志ウガンの大会で二度優勝したほか、首里、糸満、港川の大会でも優勝している。戦後は、沖縄角力協会の会長として組織の強化に力を入れるなど組織人としての活躍も目覚ましい。また昭和3年には、安里順周が波上大会を制している。戦前久米島の力士たちの活躍の場は、主として久米島内の大会であったが、吉永安順、安里順周、上江洲智享の3人は本島大会でも活躍している。その中でも上江洲智享が、1924年10月に県社祭で戦った石川清仁との一戦は、観衆を熱狂させる名勝負で、観衆からの反応により引き分けになったことが記録に残されている。ここにも戦前の諸人角力の良さが表れているようである。

(戦後)

戦後、沖縄角力の大会が再開したのは1948年の年である。長嶺将真氏の「沖縄角力と名人力士伝」によると、1948年にうるま新報主催の沖縄角力選手権大会が牧志ウガンで行われている。

この時に、糸満、知念、コザ、那覇、田井等チームによる団体戦が行われ、糸満チームが優勝を成し遂げているが、そのメンバーの吉永安順、赤嶺昌実、松田福四郎、西銘秀元

の四人はいづれも久米島の出身である。さらにその翌年の同大会に於いても、糸満チームのメンバー全員が久米島出身者で構成されており、優勝旗を久米島に持ち帰っている。またこの大会に於いて具志川村上江洲出身の浜川智弘は審判として参加している。

戦後活躍してきた力士を村別に挙げてみると、仲里村では、吉永安順、松田福四郎、伊集盛久、仲村昌英、饒平名智弘、神谷嘉順、大城清功、山城清三郎、大城学、玉城昌也、大道智らが、具志川村では赤嶺昌実、与那嶺伝重、内間秀一、宇地原清、山里昌栄、安村猛、譜久里学らがいる。

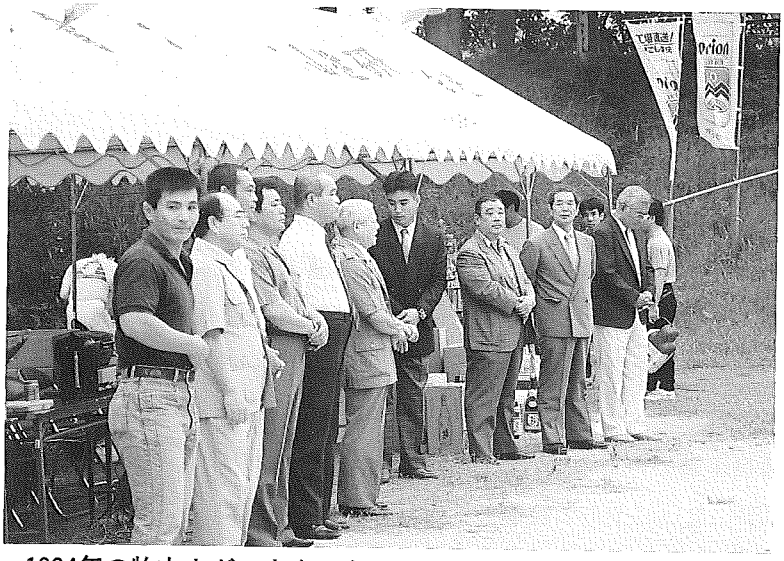
戦後県内の大会に多くの久米島の力士が参加し数多くの優勝を遂げているが、波上大会での山城清三郎の5回優勝、伊集盛久の6回優勝、饒平名智弘の5回優勝など、その名は県下に広く知れ渡った。

久米島の出身者を挙げると
前列左から1番　安村　敏夫
4番　譜久里　学
5番　伊集　盛久
6番　大道　智
後列左から1番　山里　昌栄
2番　饒平名智弘
8番　内間　邦夫
10番　山城　英明



儀間志良堂（白道）蔵大会での角力関係者

一方、吉永安順、伊集盛久、与那嶺伝重の3氏は、沖縄角力協会の役員として、組織の拡充や強化の面でも活躍してきたが、久米島においても支部の組織強化のために多くの方が、運営に加わっている。また大城清功は角力普及のため、中学生向けに角力について執筆するなど、底辺拡大のための功績は大きい。



1994年の牧志ウガン大会に参列する沖縄角力協会の役員。
久米島出身の与那嶺伝重（左から６番目）、大城清功（右端）、
譜久里学（左から４番目）の顔がみえる。

⑵　全島大会への選手派遣

久米島の力士たちが戦前以上に力を発揮し続けてきた背景には、久米島内での多くの場所開催があげられる。この場所開催は変動があり、多いときでは12場所あったりしているが、現在では７場所のようである。しかしこの運営を支えているのは沖縄角力協会久米島支部であり、その活動を抜きにしては考えることができない。

沖縄角力協会は、1977年に設立されたが、その翌年には久米島においても支部が結成されている。支部会則によると事業の運営は、「１．各地域、職場の対抗角力大会、　２．中・高校対抗角力大会、　３．沖縄角力選手権大会　　４．東西対抗角力大会、　５．沖縄角力向上を図るための講習および指導研究、　６．その他本会の目的に必要な事業」の６つで構成されているが、久米島内での場の設定、選手育成、選手派遣など、組織的な取組が成されてきている。

平成元年度の沖縄角力協会久米島支部定期総会での昭和63年度事業実績報告を見ると波之上全島大会で饒平名智弘が、港川まつり全島大会で大城学が、宜野座角力大会で饒平那智弘が、糸満市芸能祭り大会で饒平名智弘が優勝と報告されている。この本島内の大会への参加のため、島外大会派遣費として旅費が組まれており、選手の財政的な側面を支えている。しかし近年は、仲里・具志川両村からの継続的な補助金と並び財政を支える寄付などが減少し、派遣費の捻出が困難となってきている。支部として特に育成に力を注いでいる中学生の大会派遣費に充当すると旅費は不十分で、一般の部の力士の負担する費用が多

くなっている。この現状を、これからどのように克服し、まわりがいかに支援していくのかがこれからの課題となってくるであろう。

(3) 久米島大会での3分制等のルールの採用

久米島内の大会をみていると、試合の方法が沖縄県角力協会の沖縄角力競技規定と少し異なるところがある。競技規定によれば、「試合時間は、正味5分間とする。」となっているが、久米島の大会では、「正味3分」となっている。その原因は、大会が祭などの行事の一環として行われているため、時間の調整が必要となってきているところから生じている。しかしそれは逆にプラスの面も生じさせている。

5分という長丁場の角力の場合、一般的には先にしかけたものが不利になりがちだと言われ、終了間際になってやっと攻撃を仕掛けたりする。しかし3分制は時間が少ないため、早くから攻撃を仕掛けないと有利に展開できない。そのため時間の制約が、逆に久米島の力士の技を積極的でしかもスピーディーなものにしていると支部の関係者は述べている。

このほかにも久米島独特の規則がある。沖縄角力競技規定によると「時間延長で勝負がきまらない時は「わざあり」又はわざを多くかけた方を審判合議の上で決め優勢勝ちとする」「二分間の延長で同条件で勝負が決まらない時は後一回だけ二分延長して、攻勢や試合の態度等で判定し、審判合議の上勝負を決定する。」「勝負判定に疑義があったら、副審は速かに手をあげて申し込み、場内に集まって、主審副審合議の上決定する。」など、主審副審の合議制を取っている。しかし久米島においては合議制を取らず、副審が合議のために場所移動することがない。そのため副審の判定が分かれたときには、主審がその責任のもとに判定を下すことになっており、副審と主審のそれぞれがどのような判定を下したのか観衆の側からはっきり分かるようになっている。そのとき観衆の側から判定に対し、何らかの反応があったときは、ケースバイケースで対応することもあるとのことである。この提案は久米島支部の譜久里学によるが、このような形で運営されている久米島の角力には、戦前の諸人角力の伝統が生かされていて、観衆の果たす役割を高く評価している。戦前の上江洲一石川戦のような展開が、戦後もルールの上では久米島では可能である。

(4) 角力大会における小・中・高生部門の設置

久米島の角力大会をおもしろくさせているものの一つに、一般の部に入って戦った高校生力士の健闘があげられるであろう。

仲村昌英は、高校3年のときに久米島大会で一般を下して優勝をとげているが、山城清三郎も、高校3年のときバスケット大会に参加のおり、全島大会に参加して優勝するなどまわりを驚かせている。与那嶺伝重は、久米島での角力大会見物中、引き出され中学3年

のときから角力をとるなど、角力との関わりは早い。これらの事例に代表されるように、小さい頃から生活の中で角力となじんできた若者たちの中からは、一般に伍して戦うものが現れてきている。

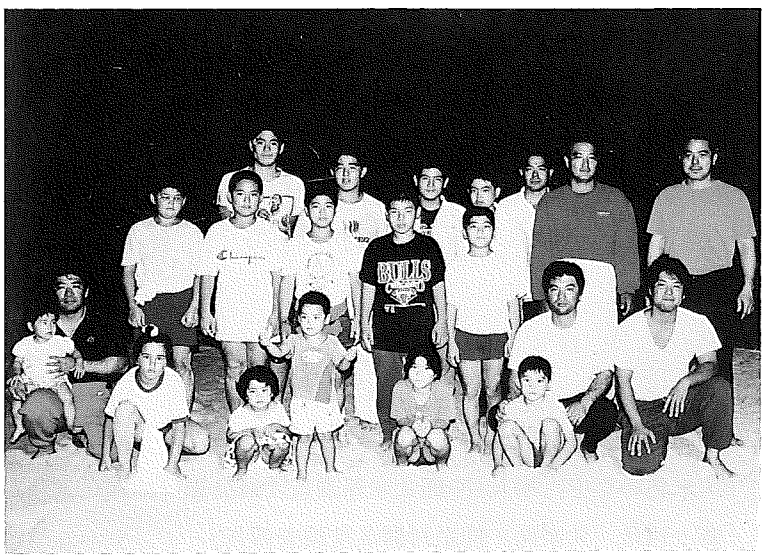
このようなことを背景にして、支部の方では若い層への底辺拡大に力を入れている。現在「仲里村まつり」「具志川村まつり」では、小・中・高の学校別・クラブ別対抗戦が行われているが、そのほかにも中学生の団体を波上奉納角力大会などへ派遣するなど組織的な取組が行われている。

(5) 私設角力道場の開設による育成指導

育成指導という観点からみたとき、誰もがいつでも練習に参加できる場の確保は、欠くべからざるものである。

1983年10月15日の久米島新聞によると、仲里村儀間の大道松雄さんが自宅の庭50坪を開放して沖縄角力の土俵をつくり、地域の青年たちに提供しているとある。世話人は、三男の大道智（現在金武在住）で、毎週月曜日と金曜日の午後7時から9時の二時間練習に打ち込み、全島大会で優勝経験のある饒平名智弘選手等25名が参加している。

その後、仕事の関係で智さんが金武へ移動されたあとは、具志川村西銘の譜久里学さんが、自宅の中庭を利用して、地域の小・中・高校生の指導にあたっていることが、沖縄タイムスの「夢中人」という特集で紹介されている。波上奉納角力大会で活躍している具志川中学の選手は、この道場で力をつけてきている。



譜久里学宅の私設道場で、練習に励むメンバー

(6) 支部および地域からの選手推薦

久米島における角力大会を運営し、さらに全島大会へ力士を派遣するためには、選手の大会参加を待つだけではなく、選手を発掘し育てる積極的な対応が必要になってくる。

支部の方では、高等学校・一般青年会推薦選手という字別の名簿を作成しているが、この選手の掌握は久米島における底辺拡大という課題を遂行するとき重要な役割を持ってくると思われる。今後も引き続き支部からの積極的な対応が必要となってくるであろう。

4．久米島の沖縄角力研究の課題

久米島の沖縄角力を学ぼうとするとき、様々な問題が生じてくる。

その一番の原因は、角力に関する歴史的な資料が、現在のところはないという事である。そのため歴史的な起源については、古老や諸先輩方からの聞き取りが、大きな比重を占めてくることになる。久米島における角力の始まりは、仲原善秀氏の述べているところによれば明治10年ころになるが、祭りと関わりのある行事として行われてきている。

明治期のころの力士については明らかではなく、今後聞き取りを行う必要があろう。一方　大正から昭和にかけて活躍した力士については、大岳小学校百年記念誌や長嶺将真の「沖縄角力と名人力士伝」から、およそのことは理解できる。しかし前者で紹介されている戦前の本島大会での優勝等については、関係者と照会し確認することが必要であろう。

さらにこれから久米島の角力について研究していく上では、久米島支部の貴重な資料を自ら整理し、自分たちが歴史を築いていくのだという自覚と誇りが必要なのではなかろうか。

＊この報告書を作成するにあたり、沖縄角力協会久米島支部のみなさまや久米島出身の多くの方から資料の提供とアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考資料

久米島新聞縮刷版
「琉球国由来記」
「球陽」
「仲里旧記」
「具志川旧記」
「久米具志川間切例帳」
上江洲均「久米島の年中行事」（沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島』弘文堂）
沖縄大学「郷土14号　久米島・仲里村謝名堂調査報告」
具志川村史

仲里村史
仲原善忠「久米島史話」
宮城幸吉「じまむら」
長嶺将真「沖縄角力と名人力士伝」（沖縄タイムス連載1983・10～3・19）
「那覇市史　那覇の民俗」
玉城忠「沖縄スポーツ人国記」（琉球新報社）
大岳小学校百周年記念誌
沖縄角力協会久米島支部内部資料

久米島の建築儀礼と家・屋敷空間についての覚書

赤嶺　政信

1．はじめに

久米島の民家については既にいくつかの論稿が発表されている[1]。それらは民家型式に関する関心からであったり建築学的視点からのものであったりするが、管見の限りでは、断片的な資料報告は別にして、建築儀礼に焦点を絞っての民俗学的視点からの研究は皆無である。本稿は、従来の報告資料と筆者の調査資料を基に、久米島民家の建築儀礼とそれと関連するかと思われる家・屋敷空間の問題（の一部）についての資料整理を行うとともに、そこから抽出される二、三の問題点について若干の検討を加えることを目的とする。

2．　建築儀礼

(1)　材木の確保

久米島は比較的山林に恵まれている島であり、かつてはほとんどの建築木材を島の山から伐り出して利用したものと思われる。大正年間生まれの人々でも、山から樹木を伐り出した経験を有す人が少なくない。そこで関心は、樹木を伐るに際して何らかの儀礼が樹木（の精霊）に対してなされたかという点に向けられるが、複数の話者によればそれはなかったという。ただし、山に入る日の吉凶については気にかけたようで、サンリンソーに相談して山入りの日を決めたとある話者は語っている。また、屋敷内の木を材木として利用する場合には、ミハナ（花米）やお酒を供えてから伐ることがあったという。さらに、木を伐る時期について、乾燥期、具体的には暦の大寒の時期に伐ったという話が聞けた。「木が寝ている時期に合わす」と説明されたが、「木が起きている」時期に伐るのは、技術的に何か問題があるのであろうか。技術的な問題をもう一点付け加えると、伐った木を３年ほどドブその他で水につけてから利用したというのは樹脂を抜くためとされ、そうすれば虫がつきにくく割れることもなかったという。

(2)　敷地ナラシとティーンダティ

大正生まれの話者が、建築を始める前にユタを招き「アラヤシキだから」と言って敷地ナラシをしてもらった、と語っている。また明治38年生まれの話者によると、屋敷ゴシラエの時にカミンチュによる儀礼が行われたというが、詳細は不明である。

ティーンダティはティーヌダティともティンダティともいわれ、いずれも「手斧立て」の意で、家造りの仕事はじめの儀礼である。ティーンダティは、作業開始にあたって完了

までの作業の無事を祈願するものであるが、儀礼の詳細については話者によっていくらか異なった資料が得られた。ある話者によると、屋敷の中心で四角形の四つの角と真中に竹を立て、そこに米、塩、酒を供えて棟梁と大工らが祈願をしたという。竹の周囲に左縄を張ることもあるが、それは近年になって始まった新しい風習だとその話者は語る。棟梁ではなく、サンリンソーなど依頼された専門家が儀礼を主導したという事例もある。また、材木1本を横たえ、その前で塩と線香のそれぞれを3箇所に置いて祈願したという例もあった。久米島以外で地域によっては、ティーンダティに使用する材木に特別な意味を付与することがあるが[2]、筆者が面談した話者は、どの材木でもかまわなかったという。比屋定ではティーンダテの時に、大工が東に向けた親木に定規（金尺）を当て、塩、米を3箇所にまき、「ウコーデー　ウサギラ　サキ　ウサギラ　フンシサビークトゥ　セークヌチャーケンコー　アラチ　タボリ」と唱える、という報告がある[3]。ここでは、親木という用語が気になるところであるが、特に説明はみられない。なお、比屋定では祈願の後に、その親木に3回斧を入れるとされるが、「手斧立て」という名称からして、それは本来的に備わっていた儀礼だと思われる。

ティーンダティの日に、易者が羅針盤を用いて家の向きを決めたという話も聞けた。但し、アナヤー（穴屋）[4]の場合はそれはあまり行われなかったという。「家の向きは部落ごとに違う」とある話者は語っているが、その意味することについては確認できてない[5]。また、家を北に向けるのはよくないが、それは首里城が北向きだから庶民の家はそれが許されなかったらしい、という伝承を伝え聞いている人もいた。家の向きを決める易者は男性で、西銘と真謝にいたことが確認できた。なお、比屋定では、ジョー開きの儀礼にフンシミーを招いた[6]ということからすると、ここでいう易者もフンシミーであったと思われる。

(3) 柱立て

柱を立て始めることを柱立てと称し、吉日を選んだとある話者は語っている。複数の話者によれば、日選びをする以外に柱立ての特別な儀礼はなかったようで、またどの柱から立て始めるという決まりもなかったという。ところがある話者は、理由は不明であるが、他の柱を立て始める前に、吉日を選んでムーヤバーラをイシジ（礎石）の上に立てておいた、と語っている。その話者によれば、ムーヤバーラは真中に立つ柱というから、いわゆる中柱のことと思われる。ムーヤバーラを立てる時の特別の儀礼はなかったというが、ムーヤバーラにはチャーギを用いたとも語っており、中柱に特別の意味が付与されている点に注目しておきたい。なお、ムーヤバーラは、中柱のみを意味するものではないという意見もあった。ある話者は、縁側のある家のことをムーヤヤーといい、ムーヤバーラは縁側の内側に立つすべての柱を指すという。別の話者も、ムーヤバーラは内側に立つ複数の柱で、

それを囲むかたちでフンハジバーラ、さらに一番外側にハジバーラが立つと説明している。

柱立てと中柱の関係については、儀間からの次の報告も注目に値する。「『柱立て』の儀礼は、家の中心すなわち世界の中心を決定することでもある。そこは家のナカバシラの立つべき場所である。儀礼の最中に柱が倒れてはならない。この柱が倒れるということは、家の崩壊を暗示するからである[7]。」この記述より中柱に特別の儀礼的価値が付与されていることが読み取れるが、残念ながら儀礼の詳細についての言及はなされていない。ところで明治38年生まれの兼城出身の話者(神女)によると、柱を立て始める前に、「七名のヤジク」と呼ばれるカミンチュ（ヌール、ウッチ、フェーク、ニーガミ、その他）が柱が立つイシジ（礎石）にミシャク（神酒）をかけ、ウムイを謡う儀礼があったという。40～50年前の具志川中学の校舎建築の際には本人がこの儀礼に参加しているが、謡われるウムイには、カンジャク、クジラジャクという言葉が入っていたという。しかし、神役によるこの儀礼はその後廃れたようで、大正生まれの話者から確認することはできなかった。

(4) 棟上げ

棟上げ儀礼で、棟木にシビリンカという字を書く、棟木に銭を3個打ち込む、塩と米を紙に包んで棟に下げる、供物を供えて棟梁が祈願をすること等が、複数の話者から確認できた。シビリンカは紫微鑾駕のことであるが、紫微鑾駕は中国の偉人の名前であるとか、ある家の棟上げの時に紫微鑾駕という人がその家の前を通りかかったので紫微鑾駕という字を棟に書くようになった、という伝承がある。銭については、「ジングラ（銭倉）という意味ではないか」という話者がいたが、その他は、意味づけを問うてもわからなかった。『沖縄民俗』の報告によると、比屋定では銭（金）を打ち込む時「サビンネーラングトゥ」と唱える。その意味は、錆がついた銭は使えないように、家にサビがついたらその家は滅びてしまうからだという[8]。棟に供える供物としては、筆者の調査ではトーフ、てんぷら、かまぼこ等があげられたが、比屋定ではかつて鶏2羽、エビ2匹、はまぐり2個、豚の頭が供えられたという[9]。また『島尻郡誌』では、棟に米、酒、銭、蟹、蝦、蛤、墨、紙、扇子等を供えるとある[10]。なお祈願の時には、「ヤーヤヨーヨートゥ、ヌチヤチュージュートゥ」と唱えると、ある話者は語っている。また、棟に供える供物は、表側から上げ、裏側に降ろすしきたりだったというが、その意味は不明である。最後に、かつては棟上げの時に、ノロによってウムイが謡われたことが指摘されているが[11]、そのウムイの内容については明らかでない。

(5) 葺き上げ祝い

屋根が葺き上がった段階で、イッチャマツリ(慰祭)というのが行われた。ヤーフチユー

エー（屋根葺き祝い）という用語もあるが、その意味するところは後の祝宴の方に重点があるかと思われる。甍にトーフ、カマボコ、豚肉、カシチ（赤飯）などの馳走を供え、屋根葺きの棟梁（大工の棟梁とは別人）が祈願をする。謝名堂では、この供物のことをイリチャンシームーと呼んだという。祈願が終わると、屋根の上から供物が投げられ、下にいる人々がそれをクバ笠などで受け取り食す。ところである話者によると、甍祭には、火で煮炊きしたものは火事を連想させ縁起が悪いからといって使用せず、饅頭などを用いるというが、この供物投げは現在のセメント造りの家屋建築でもスラブ打ちの時に行われており、火で煮炊きしたもの云々という観念は、饅頭などが容易に手に入るようになってから生まれた可能性も考慮すべきかもしれない。祈願終了後の供物を屋根の裏側にいる人に手渡し、その人が屋根の表側に回ってきてから供物を投げたと語った人がいたが、それに特別な意味があったかどうかは不明である。また投げ残った供物あるいは供物をいれてあった重箱は、必ず屋根の裏側から降ろすことになっていたと複数の話者が指摘しているが、それが何を意味したかは確認できない。この供物投げの意味については、「アクを払う」とか「カリーナムン」という答が得られたが、概してその意味づけは曖昧であるという印象を受けた。

この日の夜の祝宴の時にスミフキ（隅吹き）という儀礼が行われた、と語った話者がいた。宴会の終わる頃、大工の一人が家の四隅に順々に向かい「ニシヌ　ウミヌ　クジラ　サバハ　アールフチュル　スールフチュル」と唱えながら、口に含んだ酒をプーと吹きかけたという。サバは、サメのことだとされる。また、三味線にあわせてヤクバライの歌が謡われたというが、その内容については確認できなかった。「家をたたくマヨケの儀式がかつてあった」ことを伝え聞いている人もいた。さらにその日、棟梁（大工の？屋根葺きの？）に豚の頭をさしあげるしきたりだった、と語る話者もいた。それは棟梁が持ち帰り、その家族によって食されたという。

(6) 落成式

落成式のことをシースビーという。明治38年生まれの話者によると、落成式の時に「上流」家庭では、「七名のヤジク」と呼ばれる神人を招待してウムイを謡ってもらったという。『南島歌謡大成』に「西銘のろくむいのおもろ」が収録されているが、その歌詞の内容からしてこのウムイが落成式に謡われた可能性が高いと思われる(12)。しかし、大正生まれの人々の時代になるとその儀礼はすでに行われなくなっていたようである。大正生まれの話者から確認できたのはチャーヨーマーヨーと呼ばれる以下の儀礼である。小鍋にシルジキーメー（汁かけ飯）あるいはおかゆを入れ、それを家の隅々に手で撒いたり口に含んで吹き出したりする。その合間に「チャーヨーマーヨー　クヌトゥヌチヌ　ユーチヌシンバイ　ヤー

チヌカナバイ　ニシヌウミヌ　クジラサバ　イノーフカ　トゥクヤウチ」と唱える。この儀礼は瓦葺きが一般化するようになってからは廃れたという。ところでこの儀礼は、先述した葺き上げ祝いのスミフキと同一の儀礼と判断されるが、筆者が資料を得た話者のいずれかに記憶違いがあるのかもしれない。

ところで、『久米具志川間切規模帳』（1831）には、家屋建築に関わる次の記載がみられる。

家普請又者葺替之時牛ふた之類殺赤飯神酒相調のろ大神根人申受親類隣所之者共相招神歌かういにや仕候而相祝また三ケ月程間を置日撰仕かや葉しらかき祝与申候而右人数申受祝儀仕其外二年三年之祝与申候而も右通段々造作ケ間敷有之不如意之者共別而及迷惑候様相聞へ不宜候間向後葺申日細工人働人数計軽ク致馳走右之人数申受祝儀仕候儀堅可召留事

この資料を翻刻して紹介した玉木順彦が指摘するように[13]、この条文から①家屋の建築儀礼（落成式の可能性が高いと思われる）に、ノロ、大神、根人等の神職の関与がみられたこと、②その時に神歌が謡われること、③落成後、3ケ月程後の「かや葉しらかき祝」、二年祝、三年祝の儀礼が神人を招待して行われたことがわかる。神人の関与と神歌についての現在の伝承は、先に述べた通りであるが、「かや葉しらかき祝」や二年祝、三年祝については、筆者の調査では確認できなかった。家屋落成後の一定期間後（たとえば1、3、5年目など）に家屋の祝いをくり返し行う事例には八重山の調査でも出会ったことがあるが、その儀礼の意味や地理的分布等の問題については、今後に残された課題であろう。

3．トゥハシリ・ナカジン・中柱

比屋定での屋敷の御願について次のような報告がある。「祈願はまず北の隅から東、南、西、門、トハシラ（家の真正面）という順で行う[14]。」「最初はニーヌファ（北）を拝んでから四隅を拝む。そしてナカジンを拝む[15]。」この記述で、トハシラとナカジンが入れ替わっている点に注意しておきたい。トハシラについてはさらに、フールマブイを籠める際に「祈願者が［フールから一引用者］家の中に戻ってくると、トハシラ（真正面）で家の中の人が名前を三回呼ぶ[16]。」という記述も見られる。そこで、トハシラあるいはナカジンという語彙が指称する空間、およびそれら相互の関係が問題となろう。

まずナカジンについて、儀間では「二番座、すなわちグリージン（仏壇）のあるナカメーの前の庭を＜ナカジン＞と称する」という[17]。このことは、兼城での筆者の調査によっても確認できた。すなわち兼城では、屋敷の御願の時、屋敷の四隅、ウジョー（門）、ナカジン、

トイレの順の拝むが、ナカジンとは、二番座の仏壇に相対する前庭の空間で、そこから仏壇の祖先に対して屋敷の御願をしたことの報告を行うという。

次の問題はトハシラである。兼城で筆者の会った話者は、トゥハシリ（筆者はそのように聴いたのでこの用語を用いる）は、人が出入りする所、すなわち今日の玄関のことであるといい、通常玄関は二番座にあるため、仏壇・トゥハシリ・ナカジンと並ぶかたちになる。トゥハシリに塩を置いておき、葬式から戻ってきた時にこの塩で身体を浄めるという話も聞けた。さらにある神役は、毎月の１日と15日の御嶽へのウタンカー（遥拝）をトゥハシリで行うという。嘉手苅でも、「拝み事」では家の出入口のことをトゥハシリと呼ぶいい、一番座の出入口に対しては「アガリのトゥハシリ」という表現もある。嘉手苅のウフドゥンチという旧家には、一番座の床の間の横に火の神と並んでウトゥーシバンと呼ばれる香炉があるが、そこを管掌している神役によれば、御嶽などへ遥拝（ウトゥーシ）する儀礼においては、ウトゥーシバンの香炉をトゥハシリ（出入口）に出して拝むという。以上のことを小括すると、トゥハシリは家の出入口であり、それ故に外界への遥拝の行われるのに適切な場所ということになろうかと思われる。トゥハシリが家の出入口を指すことは、「西銘のろくむいのおもろ」の中で「とはしりのはかつけ／やはしりのはかつけ／玉簾巻ちやぎりば／桟走戸ちやえーぎりば／からま蚊帳まちやぎりば／まふる蚊帳まふえーぎりば」と謡われている[18]ことからも確認できよう。

ところが、トゥハシリの問題はこれにつきるものではない。最初に引用した比屋定の屋敷の御願についての『沖縄民俗』の報告では、トハシラとナカジンとの「混同」がみられたが、その「混同」が何故生じたかという問題がある。これは単なる聴き取りのミスなどといったものではなく、これから述べるように意味のある「混同」だと考えられる。報告書では「トハシラ（家の真正面）」とあるが、「家の真正面」と注釈されていること、および先に示した兼城の屋敷の御願の事例などからして、ここでいうトハシラは実際はナカジン（家の前庭）のことを指しているものと思われる。沖縄本島地域でも、屋敷の御願の際に、ナカジン拝みと称して前庭から家屋の中に向かって拝む事例が少なくない。したがって問題は、それが報告書では何故トハシラになっているかということである。兼城の話者は、その意味する内容については確認できてないが、「ナカジンはトゥハシリと一緒である」と語っている。また屋敷の御願の時に、ナカジンから仏壇に向かって拝むことについて「ナカジンからトゥハシリに向かって……」とも表現している。前述した嘉手苅のウフドゥンチ家では、ウトゥーシバンの香炉をトゥハシリに出して拝む時には、「トゥハシリ　ヤハシリ　ウナカジン　ウトゥムサビティ……」と唱えるという。トゥハシリとナカジンの語が並列して唱えられていることにここでは注目すべきである。以上資料が限られているため断定は無理であるが、上記の資料だけからでもナカジンとトゥハシリが密接な関係に

あることを予想することは可能であろう。『沖縄民俗』でナカジンとトハシラが「混同」されているのには正当な理由があると考える所以である。なお、上記唱詞で「トゥハシリとナカジンをお伴する」というのであるから、トゥハシリやナカジンが単なる空間名称であるに留まらないことが示唆されていることも見逃すことはできない。想像力をたくましくすれば、トゥハシリやナカジンに何らかの神（霊）格の存在を予想することも可能であろう。[19]

ところで、ナカジンは家の前庭のある特定の空間を指称するものであるが、その語義は何であろうか。結論から言うと、別稿で論じたように、ナカジンは中芯で、中柱の別称だと筆者は考えている。[20]実際、儀間についての報告にも、「ナカジンという言葉は、私達が聞いた範囲では、前庭を指すものとして用いられる他、ヤーの中心、すなわちナカバシラ(中柱）から前方への延長線をも、そのように表現している。」という記述が見られる。[21]久米島でもナカジンは中柱と関係があるのであって、したがって、兼城の屋敷の御願で、ナカジンから仏壇に向かって拝むというのは後世変化したもので、本来は中柱（ナカジン）あるいはそれが立つ場所に対する祈願であった可能性が高い。もし仏壇が祈願対象であれば、線香や供物を仏壇に供えてしかるべきだと思うのであるが、仏壇を拝むと言いつつ実際は線香や供物を供えるのはナカジン（前庭）であることも、そのことと関係していると考えられる。

次に、ナカジンが本来中柱であるとすると、久米島の信仰生活における中柱の問題について検討しなければならない。建築儀礼で中柱が特別視されている若干の事例については、すでにふれた通りである。その他に、子供に新しい着物を着せる時に「中柱の前に立ててチノーヨーク、ヌチヤチューク（着物は弱く、命は強く）」と唱える儀礼のあったことが、比屋定から報告されている。[22]筆者の調査では、兼城で、子供の着物を新調した時に、中柱ではなく床柱に着物をこすって比屋定と同じ唱え言をしたという話が聞けた。この場合の床柱というのは、穴屋の家には床の間はなかったと言われていることからして、本来中柱で行われていたものが、床の間を設置することが一般に普及[23]してから変化した可能性が高いと思われる。

さて中柱であるが、上記以外では、中柱信仰とでも呼べるような資料を筆者の調査で得ることはできなかった。このことが、久米島の中柱信仰についての伝承の実態なのか、それとも調査不足からくる資料の不備なのかは明らかでなく、今後に課題として残さざるを得ない。

ところで、小川徹氏の私信によるご教示によれば、儀間の神人が、家の出入口としての「トバシリ」は人にも祖霊にもこわい所だと話していたという。トゥハシリ＝家の出入口説の証左となる資料であるが、一方では、何故家の出入口としてのトゥハシリが畏怖され

るのか、という問題が提起されている。家の出入口すなわち家屋と外界との境界領域である故なのか、それとも本稿でその可能性を示唆したトゥハシリの別の側面がその背景に存しているのであろうか。残念ながら、ここでは資料不足もあって、この問題についてこれ以上立入って検討することはできない。小川氏のご教示に対しては、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

最後にトゥハシリについて付け加えると、筆者の面談した人々（大正年間生まれ以上）の間では、この用語を知っている人よりも知らない人の方が多かった。知らない人に家の出入口の名称を問うと、ハシルグチとかヤダクチという答が返ってきた。トゥハシリについては、言葉の語源的な側面からのアプローチも必要である。

註

(1) 小川徹「久米島の集落と民家型式」(『沖縄文化』1・2　沖縄文化協会　1961)、山田水城・古川修文「久米島における風環境と民家の建築構法」・武者英二「久米島の民家の空間構成について」(法政大学百周年記念久米島調査委員会編『沖縄久米島の総合的研究』1984、弘文堂)。

(2) たとえば久高島では、「トゥパシリの柱」と呼ばれる柱に使用する材木を横たえそれに対して祈願する。石垣市四箇では中柱を横たえる、という事例がある。

(3) 琉球大学民俗研究クラブ編『沖縄民俗』14、1967、23頁。

(4) 小川徹によると、1960年当時久米島の茅葺の3分の2はアナヤーであったという（小川前掲論文、25頁)。またある話者によると、久米島ではアナヤーのことをディーヌヤーとも言ったという。

(5) 武者英二は久米島のすべての集落の主屋の向きを調べあげ、その向きを8つに分類し集落ごとにその比率を示している（武者前掲論文、456頁)。それによれば、家の向きが集落ごとに異なるということはないが、集落によっては、ある方位の比率が他の集落に較べて高いといったことはある。

(6) 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書、23頁。

(7) 琉球大学民俗研究クラブ編『沖縄民俗』20、1974、17～8頁。

(8) 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書（1967)、24頁。

(9) 同上、24頁。

(10) 島尻郡教育部会『島尻郡誌』、1937、250頁。

(11) 同上、250頁および琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書（1967)、24頁。なお、琉球大学民俗研究クラブ編によると、そのウムイはハナシチガミ（風邪の神）除けのウムイであったという。

(12) 外間守善・玉城政美編『南島歌謡大成』1（1980、角川書店）、414～5頁。

(13) 玉木順彦「久米島・具志川間切に関する民俗資料－『久米具志川間切規模帳』を中心に－」（『沖縄民俗研究』7、沖縄民俗研究会、1987）18頁。なお、本文における条文の引用は、玉木の翻刻に依った。

(14) 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書（1967）、46頁。

(15) 同上、50頁。

(16) 同上、47頁。

(17) 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書（1974）、14頁。

(18) 外間守善・玉城政美編、前掲書、414頁。

(19) 久米島以外の地域で、「トゥハシリの神」の象徴としてトゥハシリに香炉を置き、家祭祀における祭祀対象にしている事例がある。赤嶺政信「トゥハシリ考－沖縄の家の神についての一試論」（『歴史手帖』13－10、1985、名著出版）参照のこと。

(20) 赤嶺、前掲論文。

(21) 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書（1974）、14頁。

(22) 琉球大学民俗研究クラブ編、前掲書（1967）、19頁。

(23) 武者英二の調査によると、久米島の木造民家1,064軒の内、床の間を有するのは52、9%であったという（武者、前掲論文、462頁）。なお、ある話者によると、そのほとんどが島外から来た人たちであったウミンチュの家には必ず床の間があり、そこに香炉を置いて信仰していたという。

久米島の塩について

Salt Making in Kume Island, the Ryukyu Archipelago.

金城　透

はじめに

我々の生活になくてはならない物の一つに塩がある。しかし、その塩も人間の生命維持と深い関係があるにもかかわらず、昔から地味な調味料としての取り扱いであまり意識されていないものであった。現在に於いても塩と人間生活との関わりは深く、以外に知られてはいないが、食品調味料の他に諸々な工業製品を生産する原料としてなくてはならない物となっている。

しかしながら、このように生活に欠かすことのできない塩であるが、那覇市(潟原)、沖縄市（泡瀬)、名護市（屋我地)、今帰仁村（湧川）などで製塩について報告されてはいるが、他地域においての報告は皆無にちかいのが現状だと思われる。

我々の生活に欠かすことのできない塩（塩分）を、先人はどのような方法で入手し、利用したのだろうか。周囲を海に囲まれた我が沖縄では、始め海水を直接使用したか、自然に乾燥してできた塩を使用したと考えられ、後に珊瑚礁や塩田で工夫を重ねることにより上質な塩を手に入れ、食品や貯蔵品等に利用したと思われる。

本稿では、久米島の民俗文化の再認識のために生活必需品の塩について、前半は聞き取りと文献からの調査をもとに、後半では沖縄統計書の塩に関する資料から検討してみることにする。

塩の歴史（沖縄)

わが国には岩塩や天然のかん湖が存在せず、製塩の歴史はもっぱら海水を利用することからはじまった。海水を直接煮詰める土器製塩(藻塩焼き)から塩田を使った揚浜式製塩・入浜式製塩、そして現在ではイオン交換膜法で海水から直接塩を取り出している。

全国各地では弥生時代頃から土器（製塩土器と呼ばれる）を使った製塩が行われているが、現在沖縄では製塩に使用されたと思われる土器の報告はない。そのことから、塩分の補給には長い期間、海水を直接利用し、近代に入って塩という物質を利用したと考えられる。沖縄に製塩が何時の頃伝わり、始められたのかはっきりとした年代は不明であるが、伝承によると、17世紀のはじめ頃に羽地間切に漂着した日本人によって海水を直接煮詰める製塩法が始められたとされている。それ以前は海水を直接料理に使用したか、偶然に得られた自然乾燥塩を利用したものだと考えられる。その後、1694年に薩摩の弓削次郎右衛

門により那覇泉崎（潟原）にて入浜式製塩法が伝授され、後に地方へと伝わって行く。久米島には19世紀の廃藩置県前後に塩田による入浜式製塩法が伝わり、大量生産が可能になったと思われる。

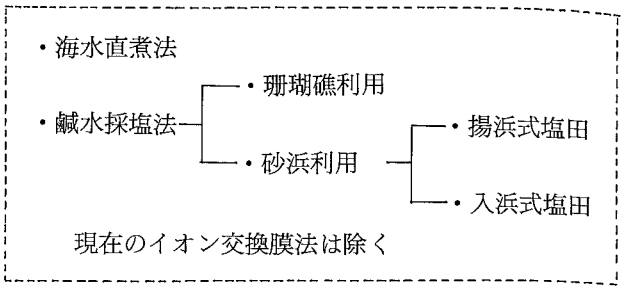


図1　主な製塩法

1．久米島の製塩

久米島での製塩も何時頃から始められたかはっきりとした年代は不明であるが、久米島に於いても最初は海水をそのまま使用していたか、最も古い製塩法である海水直煮法が18世紀頃まで行われていたと考えられる。その後、海水直煮法は燃料の経済的な問題から姿を消し、半天日で得られた塩分の高い潮水（鹹水）を煮詰める方法へと、そしてより多くの塩を獲得するために砂浜を利用した入浜式の方法へと移行していったと思われる。明治に入り山城村（銭田・真我里）や宇根村、真謝村、謝名堂村で本格的な入浜式塩田が営まれるようになる。

真謝部落出身の仲原善秀氏は『久米島の歴史と民俗』の中で、久米島では塩はほとんどが自給であり、個人所有の塩田を持ち、砂浜のなく塩田の作れない場所では珊瑚礁のくぼみを利用した製塩が行われていて、そのまま海水を使用したこともあったと記している。このことから、久米島では大正、昭和初期頃まで珊瑚礁と砂浜を利用した製塩が同時期に行われていたことが窺える。珊瑚礁利用の製塩が何時頃姿を消したのか不明であるが、入浜式の製塩は1965年（昭和40）頃まで行われた。

県内各地の製塩地では、1905年（明治38）に専売制が施行されることにより国の管理化に置かれることとなったが、久米島を含めた本島離島には専売制の施行がなく、復帰前頃まで自由に生産され、販売されている。

銭田で行われていた製塩も、各製塩地と同様に復帰に伴い完全に姿を消すこととなる。

≪伝統的製塩形態≫

今回の調査で、久米島で行われていた塩づくりの方法は、次の４つの製塩形態が確認できた。

①海岸線の安山岩を利用した天日製塩

②珊瑚礁の窪地を利用した半天日製塩

③砂泥地を利用した入浜式製塩

④海水をそのまま煮詰める直煮式製塩

①海岸線に露頭した平たい安山岩に海水を掛けて、天日による自然乾燥で塩を得る方法である。(大潮の時には、自然に海水が掛けられて塩が得られた)入浜式製塩法が取り入れられるまで、この方法は行われていたようである。

②トカラ列島・奄美諸島から琉球諸島にかけて、珊瑚礁の発達したところで行われていた方法であり、珊瑚礁のくぼみに溜まった潮を煮詰めて製塩した。

珊瑚礁を利用した製塩法には二通りの方法がある。珊瑚礁のくぼみに溜まった潮が旱天で蒸発し自然に塩分の濃い潮となる。それを炊いて塩を取る方法と、くぼみに幾度となく潮を人工で注ぎ込み乾燥させ、よりいっそう塩分の高い潮を取る方法とがある。久米島では、前者の自然潮の製塩が行われていたようである。

③17世紀以降に取り入れられた製塩法で、戦後まで続いていた方法である。砂浜に面した場所に塩田をつくり、潮の干満を利用した鹹水採方法で珊瑚礁を利用した製塩法より多量の塩を得ることができる。塩田には揚浜式と入浜式があるが、久米島を含め沖縄各地で行われた製塩はほとんどが入浜式である。砂浜であれば何処でも塩田ができるわけではなく、泥混ざりの平坦な地形(干潟)で行われる。

久米島において、入浜式塩田は廃藩置県前後に開始されたと考えられる。

④最も原始的な製塩方法である。塩は戦後の物資不足のため自給自足で賄った時もあったが、後に燃料が不経済で時間と労力が余計かかることや、銭田の供給で間に合うようになると、この製塩法は姿を消していく。

≪塩づくりの確認場所≫

①銭田から島尻にかけての海岸線(図2－1)

安山岩が広範囲に露頭していて、晴天日に海水掛けが行われた。家族消費分は確保できたとのことである。

②砂泥浜がなく珊瑚礁の発達している海岸線(図2－2)

仲里村の阿嘉、宇江城、比屋定から具志川村までの海岸線(現在の飛行場あたりまで)で珊瑚礁のくぼみを利用していたことがわかったが、残念ながら今回の調査では製塩に使われたとされるくぼみを確認することはできなかった。

③沖縄統計書(明治16～36、表1)の中に久米島の製塩地として黒石濱(仲里間切山城村)、ナカ石濱(仲里間切宇根・真謝村)を見ることができ、明治16年頃には久米島で製塩が行われていたことが窺える。今回の調査では黒石・ナカ石濱を確認する事から始め、聞き取りや地籍図(1970年頃)から4ヶ所の製塩の行われていた場所を確認す

ることができた。

1．宇根・真謝一帯（ナカシ浜）（図２－３）

地籍図からナカ石濱と塩田が確認できた。沖縄統計書（表１）から、以前は多くの塩田があったがしだいに姿を消し始め、復帰前には２ヶ所となる。潟原にあった塩田は、現在その多くが埋立てられてはっきりとした場所の確認はできなかった。

2．銭田（黒石浜）（図２－４）

沖縄統計書（表１）の山城村は現在の銭田・真我里のことである。廃藩置県前後に那覇や近郊の人々が移住してできた村で大正２年に山城から分離している。マガイ底原から銭田川の下流付近で製塩が行われていた。現在はキビ畑となっている。

塩田があつた場所はマガイ底原（大字）で、次の小字で行われていた。

図３－１　シチャナー（下庭）……銭田川の川口から500m入った右手一帯

2　ウィーナー（上庭）……シチャナーの北150m上がった一帯

3　カタバル　（潟原）……銭田川の川口から200m入った左手一帯

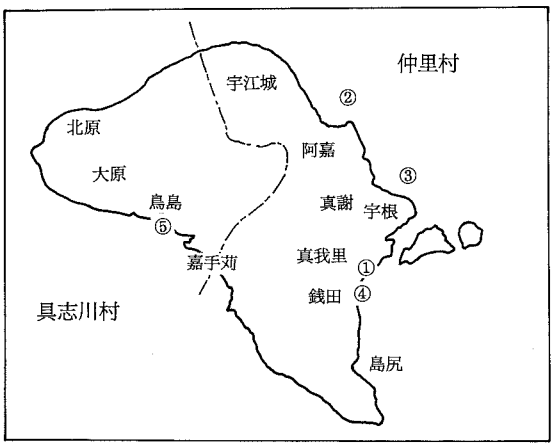


図２

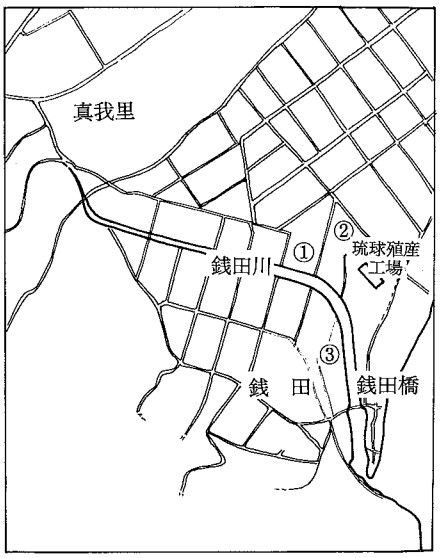


図３

3．謝名堂（潟原）

1709～1723番地にあたるところが塩田であった。現在では埋め立てられて船上げ場となっている。戦後まで製塩が行われていた。

4．鳥島（清水浜）（図２－５）

昭和５年頃に、塩田による製塩が行われたが成功せず２～３年で姿を消した。はっきりとした場所の確認はできなかった。

≪製塩方法≫

ここでは、銭田にて昭和頃まで行われた③の入浜式製塩法について述べてみる。

銭田での製塩は、明治３～４年頃からの移住が始まった頃から行われていたようで、永く製塩の中心地であり、久米島全島に塩を供給していた。銭田の製塩は昭和30年頃まで行われていて、戦後でも約30戸ぐらいが製塩を行っていたと思われる。那覇、泊付近からの技術の導入であり、製塩はその地域とほぼ同じ方法で行われた。

当初の銭田で行われていた製塩は、農業の合間を利用した副業であって、毎月の旧１日・15日のカリスー（小潮）の前後６～８日ぐらいに行われたと思われるが、明治後半からはその形態に変化が見られる。（銭田以外の製塩地では後までこの時期に行われた）明治41年に銭田橋が完成し、昭和６年頃には潮の出入を調整するための水門が造られ、夜のうちに潮を塩田に導き入れ、昼間は潮が塩田に入らないように調整することができるようになり、潮の干満を気にすることなく製塩を行うことができるようになった。

銭田で行われた製塩は那覇・泊付近からの技術の導入であり、製塩はその地域とほぼ同じ方法で行われた。作業は夜のうちに潮を占み込ませた塩田に砂を蒔くことにはじまり、塩分を付着させた後に砂を集めてクミに入れ、その上から海水を注ぎ塩分の高い潮水を得る。その塩分の高い潮水（鹹水）を家に持ち帰り炊いた。

製塩は夏の期間（７月～９月）の晴天日には毎日行われた。冬場は製塩は行われず、製塩期には副業というよりもむしろ専業に近い形を取っている。各塩田は深さ約20cmの溝で区切られていて、潮水を炊くカマも個人所有である。薪は専ら山からの雑木を使用しており、他の地域で見られるアダン等の使用はなく、また昭和の塩炊きでも石炭の使用はなかったとのことである。鍋は平鍋で約180cm×90cmの大きさで深さ約10cmのものが使われた。（丸鍋の使用は見当たらない）製塩道具は、泊等で使用されたものと同じであり、名称もそのまま使われたようである。

専売制の施行がないということは基本的に自由生産・販売である。晴天日には毎日製塩が行われ、塩の炊き上がった翌日には具志川村まで販売に出掛けたとのことである。塩が最も必要とされるのは正月前やスク（アイゴ）を漬ける冬場であるが、銭田では冬場の製塩は行っていない（冬場の製塩を試みた者もあったが成功しなかった）ので、各家庭では一年分の塩を夏のうちに購入した。昭和30年頃から豊見城の与根から岩塩を取り入れ製塩を行う者もあった。

以上が聞き取りや文献等からの調査報告である。

2．沖縄統計書と久米島の塩

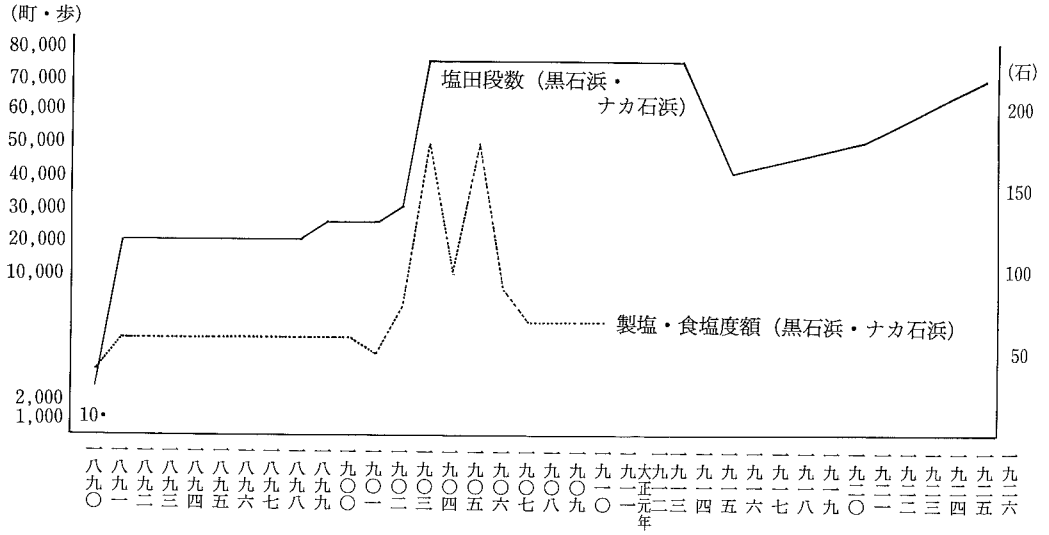
次ぎに沖縄県統計書から久米島の塩について検討してみることとする。

沖縄県統計書とは

1883年（明治16）から1940年（昭和15）までの沖縄の人口・戸籍・産業等についてまとめられたもので、県内製塩地の塩の生産額・塩田面積や生産工数等の推移を知ることのできる資料である。今回はこの統計書から久米島の塩に関する箇所を抜き出し、比較的に細かく記載されている明治の塩の生産について考察してみる。

製塩・食塩産額　（表１、グラフ１）

統計の開始された1882年（明治16）から1891年（明治24）は生産が伸び、1900年（明治33）まで大きな変動がない。明治32年頃、県内では中国から塩を輸入しているが、統計表をみるかぎりでは塩の生産減少はみられず、消費人口の増加もみられないので島内自給で賄えたと思われる。1901年（明治34）に一端は落込むが1903年（明治36）まで急激に伸びて最高に達する。気象に恵まれたか、鉄製平鍋の普及（那覇、泡瀬では明治27頃から丸鍋から平鍋へと移行する）などが考えられる。1902年（明治35）からの生産人数の伸びは、生産量の増加を示している。1904年（明治37）には何らかの原因により半分以下に落込む。この年と翌年には久米島への台風の接近は一個もなく、塩田段数・竈数の減少もみられないので、生産量の減少は需要との関係で生産をおさえたのか、雨天時の日数が影響していると考えられる。1905年（明治38）には急激な伸びを示し、1903年（明治36）とほぼ同じ生産量にもどるが、翌年にはまた急激に落込む。この年には久米島に大被害をもたらした



グラフ１　製塩・食塩産額と塩田段数の推移

表1　久米島の塩調査（統計）

沖縄県統計書より

（塩田ノ段数営業人及工数、食塩、製塩及價額、土地より作成）

	浜名	所属地	塩田段別	営業人・戸数	工数			竈数	製塩・食塩産額
					男	女	総数		
			（町　歩）						（石）
1882（明治16）	黒石港	久米島	？	？	？	？	？		13,225
1890（明治23）	黒石濱	久米島仲里間切	0,2605	27	23	4	27		40,000
	ナカ石濱	〃	0,0215	8	5	3	8		3,000
1891（明治24）	黒石濱	久米島仲里間切	2,0517	38	29	9	38		52,000
	ナカ石濱	〃	0,1300	12	3	9	12		3,000
1892（明治25）	黒石濱	久米島仲里間切	2,0517	50	38	12	50		52,200
	ナカ石濱	〃	0,1300	12	3	9	12		2,800
＊1893（明治26）	黒石濱	久米島仲里間切	2,0517	35	45	18	63		55,080
	ナカ石濱	〃	0,1300	3	3	9	12		3,500
＊1894（明治27）	黒石濱	仲里間切山城村	2,0517	23	44	18	62		56,000
	ナカシ濱	仲里間切宇根村	1300	9	4	8	12		4,000
1895（明治28）	黒石濱	仲里間切山城村	2,0517	23	40	18	58		57,000
	ナカシ濱	仲里間切宇根村	1300	9	4	8	12		4,000
1896（明治29）	黒石濱	仲里間切山城村	2,0517	23	45	16	61		57,000
	ナカシ濱	仲里間切宇根村	1300	10	3	9	12		3,000
1897（明治30）	黒石濱								55,000
1898（明治31）	黒石濱	山城・宇根村	2,1817	36	49	28	77		50,000
＊1900（明治33）	黒石濱		2,1	24	46	18	64	29	52,000
	ナカシ濱		0,3	34	7	30	37	34	10,000
1901（明治34）	黒石濱	仲里間切山城村	2,0	24	26	18	44	29	29,000
	ナカシ濱	仲里間切眞謝村	0,2	22	4	18	22	22	13,000
	ナカシ濱	仲里間切宇根村	0,1	12	3	12	15	12	7,000
＊1902（明治35）	黒石濱	仲里間切山城村	0,5	24	26	18	44	24	53,760
	ナカシ濱	仲里間切眞謝村	0,4	123	27	96	123	123	33,050
	濱崎		0,3	32	12	20	32	32	9,600
＊1903（明治36）	黒石濱	眞謝村・宇根村	3,4825	24	26	18	44	24	94,190
	濱崎	謝名堂村	1,2225	32	12	20	32	32	33,170
	ナカシ濱	比嘉村・山城村	2,7705	123	27	96	123	123	74,810
＊1904（明治37）		仲里間切	7,4822					179	103,000
1905（明治38）		仲里間切	7,4822					179	185,000
1906（明治39）		仲里間切	7,4822					179	90,000
1907（明治40）		仲里間切	7,4822					26	67,000
1910（明治43）		仲里間切	7,4822					26	70,000
1911（明治44）		仲里村	7,4822						
1912（明治45）		仲里村	7,4311						

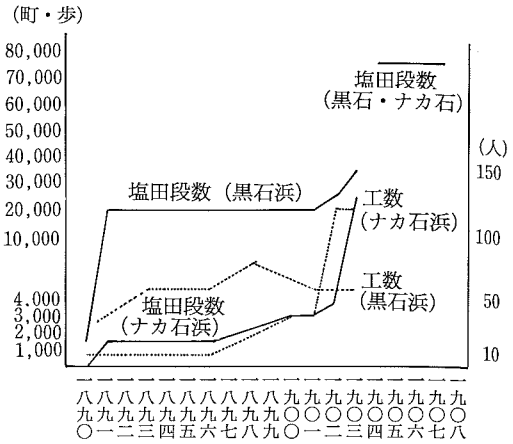
沖縄統計書の記述どおりに記載したが、幾つかの不明・疑問が見受けられる。（ナカシ濱の所属地が、1902年までは宇根・真謝となっているが次年度には比嘉・山城となっているなど）

＊が不明、疑問に思われる年である。

十月台風があり、生産量に影響を与えたと思われる。津波を伴った台風後には塩田もかなりの被害うけたと思われ、塩田段数は変わりないが1907年（明治40）には竈数が落込んだことを含めて生産量にかなり影響したと考えられる。

塩田段数　（表１、グラフ２）

生産量の関係から見ると、1891年(明治24)まで急激に伸びることによって生産量も増加している。翌年から、ほぼ同じ面積で生産量も1897年（明治30）まで大きな変動はない。1898～1901年（明治34）まで緩やかに上昇しているが、1903年（明治36）には急激に増加し明治期の最高面積に達する。1913年まで変動がなく何らかの原因で急激に落込むが、その後緩やかに伸びていく。十月台風後は塩田もかなりの被害を受けたと思われるが、1910年（明治43）まで面積の変動がない。

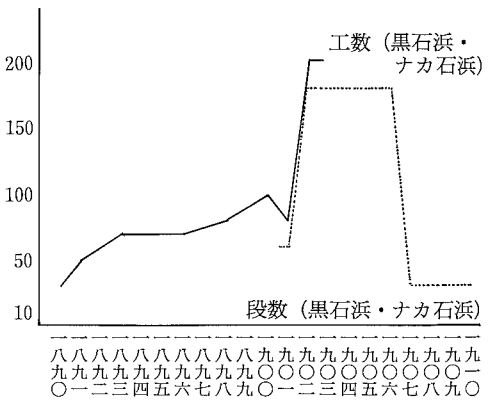


グラフ２

面積と生産量からみると、ナカシ濱は工数が多い割りには面積がかなり狭く、生産量が低い。自給的な小規模塩田だと考えられる。

工数・竈数　（表１、グラフ３）

工数・竈数の増減も気象状況と同じく生産量に大きな影響を与えるものだと思われる。工数も1890年（明治23）から1900年（明治33）まで緩やかに増加していき、1901年(明治34)に減少し、翌年には約２倍に達する。ナカシ濱は急激に増加、黒石濱は変動なし。1902年（明治35）年からの生産工数の伸びは、生産量の増加を示している。このグラフから工数の増減は直接に生産量に影響することがわかる。濱別にみると1902年（明治35）頃、工数が黒石濱では少し落ち込むが、ナカシ濱は逆に伸びを示している。1904年（明治37）から工数の記録の記載がなく、1904年の生産量の落込みと工数が関係を知ることができない。



グラフ３

竈数は1900年(明治33)からの記載で、工数とおなじく1902年(明治35)に急激に増加し、その後変動がないが、1907年(明治40)に急激に落込み生産量に影響をあたえる。大正期の

竈数は記載されていない。生産量が急激に落ちた1904年(明治37)でも竈数は変わらないので、直接生産量に影響は与えていないと思われる。大正期の竈数は記載されていない。

おわりに

かって久米島に於いても盛んに製塩が行われていた時期があり、塩田が数多く見受けられた。しかし、現在では土地改良などの埋立に伴い塩田も姿を消し、その場所すらも分らなくなり、製塩についての報告も皆無に近い状況となっている。

生活必需品である塩を、久米島ではどの様な方法で入手し、利用していったのか。今回の調査では、製塩の行われていた場所の確認と製作方法についての調査を目的として出発した。ところが、塩に関する資料の確認が少なくて、十分な調査をすることができなかった。多くの調査課題を残すこ結果となり残念でならない。今後の補充調査を待ちたい。

調査にあたって御教示くださった備瀬真孝、吉永安順、吉永洋、山城幸久の各氏および資料を提供してくださった仲里村教育委員会の山城勇人氏、建設課の幸地猛氏、日本たばこ産業株式会社の真境名一男、坂元昭洋の両氏、県立博物館の瀬名波任、渡邊尚子氏そして『沖縄県統計書』を閲覧させて頂きました県立図書館の史料編集室の方々に感謝申し上げたい。

参考文献

・『久米島の歴史と民俗』　著者・仲原善秀、編集・上江洲均　1990
・『久米島の地名と民俗』　仲村昌尚　1992
・『仲里村史』　仲里村役場　昭和50
・『具志川村史』　具志川村史編集委員会　昭和51
・『塩のはなし』　半田昌之　1986
・『塩の話』　日本ソーダ工業会　1977
・『塩のしおり』　日本たばこ産業株式会社　塩専売事業本部　1991
・『お塩なんでもQ＆A』　日本たばこ産業株式会社　塩専売事業本部　1993
・企画展『塩』屋我地マースを見直す　名護博物館　1991
・「那覇の民俗、生業」　『那覇市史』　那覇市企画部市史編集室　昭和54
・『久米島具志川中学校創立10周年記念誌』　久米島中学校
・『沖縄久米島の総合的研究』　法政大学百周年記念久米島調査委員会編　昭和59
・『日本地名大辞典』沖縄県編　角川書店　昭和61年
・『沖縄大百科事典』　沖縄タイムス社　1983
・『沖縄県統計書』　沖縄県立図書館
・明治期の台風　気象台より

民俗社会の基盤 ―字山里を中心にして―

仲村　昌尚

1．山里の位置と自然

山里は、久米島具志川村の14字中の１部落である。具志川村役場より県道173号を北へおよそ２キロメートルに位置し、殆どの民家は県道の東側に建てられている。大岳や宇江城の連山の西側の麓に、南北に細長く形成された部落である。部落の東から北東にかけて森林が多く、森林の中には処々に畑が開かれ、山間の小さな谷間にはユビダ（深田）が湧き水を利用して開かれている。部落の西側から南西にかけて殆ど水田地帯で、更に部落の南側、字上江洲との間もすべて水田が開かれていた。全体的に見ると、西方に緩い傾斜をもった地に部落が形成され、南から南西、さらに西方へと半円を描く形で水田地帯に囲まれた部落で、東方の森を腰当てにしているといえよう。

しかし、これらの水田地帯は1970年代から農地整備が行われ、畑に変化し、地形も著しく変貌して、1970年代以前の面影は残っていない。

2．部落の変遷

山里部落は北側を「ヤンザトゥ」（山里の方言）、南側を「タンナハ」（玉那覇の方言）と呼んでいる。「検地帳には、具志川・中地・西目・おほた・兼城・山城・上・玉那覇の８村を計へ、元文帳に上・玉那覇２村を廃し、山里・上江洲・仲村渠の３村を新立してある。」（東恩納寛惇著南島風土記）にある。

具志川村史によれば、「1669年（寛文９年）当時の具志川間切は仲村渠、具志川、武富、与那覇、玉那覇、西平、垣花、新垣、兼城、久根城、浜川、我那覇、真仲地、山城の14カ所で構成されていたようだが、翌寛文10年にこれらの村の統廃合が行われ、与那覇村は仲地村と改称、武富村と玉那覇村を合併して山里村とし、西平村は上江洲村に改称、垣花村と新垣村を合併して西銘村となり、久根城、浜川、我那覇は兼城村に合併、真仲地は廃村となった。翌寛文11年に兼城村の一部を移して大田村を新設して、これによって間切内は９ヶ村の構成となった」と記されている。

検地帳は1610年に島津氏による琉球の検地実施の際のものであろう。元文帳はおそらく1737年頃のもので、検地よりおよそ127年後に「山里」の名称が表れる。

具志川村史では、寛文10年に武富村と玉那覇村を合併して「山里村」が出来たことが　記録されている。寛文10年（西暦1670）で、検地より69年後である。

つまり、山里は今から324年前に名付けられた名称である。この頃の山里は現在の字仲地

の北東部分のダキドゥンシマ（武富）地域も含まれていたが、ダキドゥンシマは明治38年(1905）に仲地村に合併した。

現在の山里の戸数は45で、人口190人である。山里部落は大正から昭和期にかけて人口の減少がみられ、戸数にも十数軒の変動が見られる。

3．山里の集落構成

小川徹氏は、沖縄久米島「沖縄久米島調査委員会編」の中に、「琉球国高究帳」からみた近世初頭における久米島村落の動行と題し優れた論を記載しておられる。

それによれば、「久米島のおよそ20余の村々のうち、畠方の高が田方の高より多い例(玉那覇村）しかない」。「具志川間切玉那覇村は田方八石、畠方二十一石余の少額に止まる」。と述べておられる。これは高究帳をもとに久米島における村々の石高を分析して村高を表にして考察したものである。小川氏が示された表によれば、石高が50石以下の村は玉那覇村・おほた・志らとう・平良・宮平の５村である。又、小川氏は村高のうち田方石高が50石以下というのは、戸数、人口とも大きくなかったことは確かであろうといわれる。右に挙げた５村で玉那覇村は現在の字山里である。「おほた」は字大田のことであろう。「志らたう」はマキヨ名で、現在の字儀間の一部である。平良と宮平は仲里村役場の北方の登武那覇岳の麓に在った村で、現在は廃村になっている。

「琉球国高究帳」の作成時期について諸説があるようだが、山本弘文氏は寛永年間、つまり1635年頃と考えておられるようである。

玉那覇村が武富村と合併して山里村となる35年前ということになる。ところで前述した玉那覇村について、20余の村々のうち、畠方の高が田方の高より多いという例が示されたが、これは開田できる地形的条件と人口（労働人口）に大きく関わるものと思う。開田は豊富な水と関わるもので、仲地やヤンザトゥ(山里の方言)は割りかし大きな川(ウッカー)に恵まれ、川の流れに沿って、又は川下の低地に開田の条件が整っているが、タンナハ(玉那覇村）はそういう条件が満たされていなかった。方々の湧水地を求めて僅かに開田していたものと思われる。

1630年代の玉那覇村の人口がどのくらいであったかということは知る術もないが、現在の集落形態から推測の糸口をこころみてみようと思う。

山里の屋敷構成（集落地図Ｉ参照）を見るとヤンザトゥ側は塊村型で、玉那覇側は不井然型である。ヤンザトゥは東西に三本の道を開き、中央を南北に二本の道が開かれていた。道の間の屋敷は２～３の民家が建てられた。

地図Ｉの記号Ａは古い時代の宿道で、記号Ｂは県道173号線である。タンナハは東西に４本の道路が開かれ西寄りに南北に一本の道が通るが曲線を描く。屋敷の数と現在の戸数は

一致しない。山里には18の姓名があって、それを以下に示すと、仲村(元仲村渠)、中村(元仲村渠) 9、山城2、山里6、吉本1、新里5、本永2、与那5、玉那覇1、大城1、上江洲4、福里1、安里2、宇地原1、当原1、盛吉1、田原1、大田3であった(昭和20年代)。

(1) 仲村(仲村渠)

アガリヤマ
- 次男(ナカヌウッカー) 妻は字仲地出身
- 長男(アガリヤマ) 妻は字仲地出身
- 三男(ヤングヮー) 妻は字西銘出身

(2) 仲村(仲村渠)

イリヌウッカー
- 本家は字仲地。祖父の妻は山里出身

(3) 仲村

ウフミチ
- 次男(山里殿内婿入)
- 長男(ウフミチ) 妻は字仲地出身
- 三男(ナカヨシ)

(4) 山里

トンチ
- 三男(トンチを継ぐ)
- 次男(独身)
- 長男(字西銘のミーヤの養子となり上江洲姓を名乗る)
- 四男(ユシダ) 妻は仲地出身

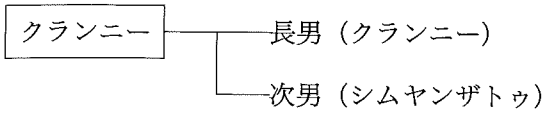
(5) 山里

メーラーシチ
- 字仲地の屋号「ムラ」より三代前に移り住んだ。
- (カミスーター)

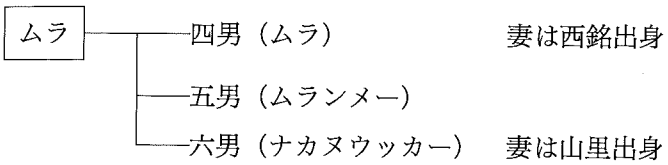
上記の「カミスーター」と呼ぶ屋号は人名からきたものである。カミスーという人は(1)で記した「アガリヤマ」からの分家で、この方の娘が仲地のイチングヮーという家に嫁ぎ夫の死後子供達とともに実家に戻って住んでいる。「カミスーター」の屋号は本来「ヤングヮー」であり仲村渠姓であるが、現在は娘の夫方の山里姓となっている。

「メララーシチ」の曾祖父は字仲地の屋号「ムラ」より分家し、最初はウッカー（吉本家）の後方に住んでいたが後に「メララーシチ」に移った。

⑹ 新里



元祖は字兼城で三代前に兄弟二人で山里に移り住んだ。

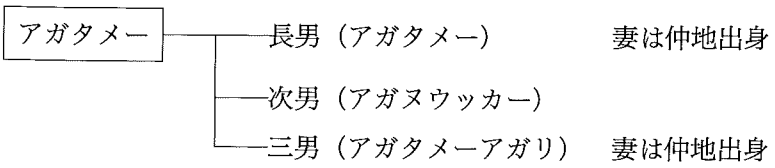


⑺ 大田

この「大田」は字仲地の屋号「ウィーヌジョウ」からの分家である。四男は若い頃南米に単身で移住し、年老いて戻って来た。五男は南洋へ移住し、その後戻って来たが再び西表へ移住したが再び戻って来た。アガタメー（吉本の本家）の前方に畑地を借りて住宅を構えて住んでいたが現在は宜野座村に移住している。六男は南洋で戦死したので妻は子供達を連れて三重県に移り、半年ほど経って、実家のある山里のナカヌウッカーに戻って来た。

一年ほどはメーラーシチの屋敷内（メーヌヤーグヮーという）に住んでいた。山里部落はタンナハ村に（1～3）の班があり、ヤンザトゥは（4・5）の班があり、大田（六男）の住宅を建てた時、4・5班の皆さんが出夫して家を建てた。完成の後大田の家では、手伝って戴いた4・5班の方々に労働で恩返しをした。これを山里では「イーマールー」と言った。ユイマールの事である。

⑻ 吉本



⑼ 山里

ナカヤンザトゥ

⑽ 中村

- イチヌハタ
  - ナカヌヤー
  - アガタイリ
  - メーレヤー
    - メーレヤー
    - クラッチャ
    - メーレヤーイリ
    - ムラヌメーメー
  - ウフナガ
  - アガンメー

⑾ 大城

- ヤマグチ　　仲地より分家

⑿ 上江洲

- アガリー
  - （アガリー）
  - （カージョー）
  - （フクトミ）
  - （カッチビ）

⒀ 本永

- イチアガリ
  - （イチアガリ）　本家は字仲地
  - （カイバヌクシ）

⒁ 田原

- カーヌウィー　　左記の与那家の四男

⒂ 与那

- クシアミクーター
  - 長男（クシアミクーター）
    - （クシアミクーター）
    - （タカエス）
  - 次男（ニバルーター）
  - 三男（ユナヤマウッツーター）
  - 四男（カーヌ上）
  - 五男　　若い頃那覇へ

(16) **当原**

トーバル　　玉那覇村の古い家系と言われる

(17) **盛吉**

モリヨシ

(18) **玉那覇**

ウフナカメー　　沖縄本島より移住

(19) **宇地原**

タンリ
- (タンリ)
- (タンナハガー)

(20) **新里**

工場　　仲里村阿嘉の出身

(21) **仲村**

フクシナガヤ

(22) **安里**

アミクーター
- (アミクーター)
- (イリアミクーター)

(23) **安里**

カーヌハタ　　元祖は沖縄本島

(24) **福里**

シリー　　玉那覇姓の元祖

(25) **仲村**

アグニヤシチ

以上、山里部落における姓と屋号を挙げたが、ねらいは各家庭の先祖を辿ることによって古い時代、出来得れば慶長検地の頃の玉那覇村の規模を推測するところにあった。しかし、殆どの家庭で四代前頃から明らかに出来ないのが現状である。山里部落内における仲村姓と中村姓は元々は仲村渠姓をもつもので、太氏と呼ぶ一族であるという。(1)で示した仲村は筆者の実家であるが、集落の一番東に位置し、森林に接していることから「東山」と言い、方言でアガリヤマと言う。更に訛って、アガヤマと呼ぶ人もいる。筆者の父と祖父・曾祖父までは仏壇の位牌に明確に名前が記載されているが、それより古くなると、大田親雲上・仲村渠親雲上等としかなく、こういう先祖が元来この「東山」に屋敷を構えて住んでいたのかは明らかでない。祖父は長男で、次男は「ナカヌウッカー」(屋敷番号6)へ屋敷をつくり分家している。三男は「ヤングゥー」(16)へ分家している。これは明治の始めから中頃である。以下括弧内の番号は屋敷番号を示す。イリヤマ(3)とチヂ(8)は山城姓を持ち、隣接する仲地部落よりこの地に移り住んだ。アグニヤシチ(9)はアガリヤマ(2)からの分家と言う。少なくとも4代以前の事と思われる。先祖の位牌はアガリヤマの仏壇に祀られているがそのいきさつについては明かではない。アグニヤシチ（粟国屋敷）の屋号が何故に「粟国」なのかも明かではない。昔、粟国の人が住んで居たのではないかという話もあるが定かでない。屋敷番号の(1)に屋敷があって住人が居たと伝えられているが、どういう人であったか知る由もない。ナーカンザトゥ(4)はトゥンチ(10)からの分家に当たると言われるが何代前か明らかでない。トゥンチは代々久米島を統轄した君南風（チンベー）が出自した家系で、ヂトゥデー（地頭代）を勤めた家柄である。山里村（ヤンザトゥムラ）の宗家ではないかと思われる。ナーカンザトゥには喉に魚のトゲがひっかかったとき、この皿に水を入れて飲むと直ぐに取れるという不思議な白磁皿が保管されている。ユシダ(21)はトゥンチ(10)）の分家である。メーラーシチ(11)は、156～157ページで述べたように、隣接する字仲地の屋号ムラからの分家である。ムラから分家した山里代は頭初は(66)に居を構え、その後メーラーシチに移ったと言う。しからば、その以前のメーラーシチには誰が住んで居たかとなれば、これも不明である。ナカヨシ(12)はウフミチ(17)からの分家である。ナカヨシと言う屋号は昭和20年後半ごろに仲村氏が家建てしてから名命されたもので、この屋敷には以前仲地出身の安里という人が住んでいたので「アサトゥーター」と呼んでいた。ナカヨシの本家であるウフミチの屋敷も昔は誰が住んでいたのか判然しない。字仲地の屋号イリハンガー（西浜川）の女性が仲里村儀間のハンザミ（福島家）に嫁いだが、妊娠したまま離婚し、ウフミチに居を構えた。クランニー(14)、シムヤンザトゥ(15)は字兼城のミーヤ（新里家）よりの分家で、兄・弟二人が同時に移り住んだ。この地は山林であったところで、ここに地等しをして、弟は(15)へ、兄は(14)へ居を構えた。現在は更にその山を整地して新居を構えているが、この地点に米蔵があったと思う。

クランニー（蔵根）の屋号はこの米蔵に因むものと思われる。頭初に移り住んだ新里家三代前の祖父も米蔵について知っていなかったということなので、それはまだ古い時代の事でしょう。

イリヌウッカー(7)の先祖は仲地のサク（屋号）からの分家で、アガリヤマ(9)より娘をもらいこの地に居を構えた。

アガリヌウッカー(5)とアガリアガタメー(22)は吉本姓を名乗り、本家はアガタメー(19)である。吉本姓は先祖が首里奉公を勤めていて、熱心な働きぶりが評価され、王府の役人から授けられたものだと言う。それ以前はどういう姓を名乗っていたかについては、今後、より詳しい調査で明らかになると思う。アガヌウッカーの屋敷には大和人（ヤマトゥンチュ）が住んでいたとも言われる。斜め後方(67)はセイゾウバ（製造場）という地名が残っている。一説には線香を作っていたと言われ、あと一説ではムムガー（山ももの木の皮）を取り集めたという。ムムガーの用途は紬の染料である。いずれにせよ、いつ頃、どのような人が製造場で仕事をしていたのかは明らかでない。

ムラ(18)とムラヌメー(35)については157ページで述べておいたが、ムラヌメーに住んでいた大田氏が東となり(14)に移って生活していたころ、ムラヌメーには字西銘の出身の吉川と言う方がアガリヌウッカーの女性を娶って住んでいたが、この人も後に(23)の場所に屋敷を造って住んでいた。その後ムラヌメーの家は字仲地の仲地氏が玉那覇村のナカヌヤー(53)より嫁を娶り、この地に住んだ。以後この屋敷は仲地氏の所有となった。屋敷番号(26)は沖縄本島出身の具志という男が、アガタメー(19)の女性を妻にして住んで居たがその後はメーラヤーより分家した中村と言う方が住むようになった。この中村氏も戦後長崎に移住し、しばらく空屋敷になっていたが昭和30年代の初めごろ製茶工場が字民によって建てられたが、経営不振で間もなく倒産。その後土地建物は仲地氏が買い取った。(46)の中村氏が借用して住居にし商店を経営していたが、中村氏が(46)新築移転したため閉店された。

屋敷番号(20)はかなり広い屋敷である。昔はどういう人が住んでいたのか不明である。屋敷の東半分に上江洲という方が住居を構え西半分はヤンザトゥの会場（今は公民館という）があった。会場は玉那覇村の場合は(64)の場所にあったが、戦前において現在の公民館敷地へ移設され、ヤンザトゥの会場は閉鎖した。会場は共同体の集会場であり、共同体の掟を話し合ったり、行事を行う場所であった。この小さな山里部落にヤンザトゥとタンナハに別々に集会場が造られていた理由は明らかでない。閉鎖されたヤンザトゥの会場はその後盛吉という方が住居にしていたが盛吉も後に(62)へ新築して移転した。盛吉が移転すると、そこに仲地より福里という方が家族とともに移り住んだが、やがてこの人たちも西銘へ移った。東部分に住んでいた上江洲氏は(61)へ移転した。チヂヌメー(68)はチヂ(8)の分家であるが、昭和20年代半ばに仲泊へ移転した

以上は字山里におけるヤンザトゥ側の屋敷構成と定住・移転の状況を述べてきたが、この集団はヤンザトゥガー（山里井泉）を共用し、日常の生活にはこの井戸の水を槽に入れ棒でかつぎ自宅へ運んでいた。その後殆どの家庭で井戸を掘り、自宅の井戸水を使用するようになったが、自宅の井戸をもたなかった家庭では依然としてこの共同井戸の水を使用していた。自宅に井戸があっても、お正月の初水（若水）はこの共同井戸の水を使用するのが普通であった。井戸水を常に清く新鮮さを保つために一定の期間をおいて共同でこれまでの水はくみ出して井戸をきれいにした。これを「カー・サレーイン」と言った。

次に焦点となるタンナハ（玉那覇村）の屋敷構成も地図Ⅰを一見するだけで大体知り得るが、各々の家庭（民家）がどのようなかかわりをもっているかは、前述した親族図では説明不十分になるので、更に少々の手を加えておくことにする。

シリー(39)の姓は現在福里姓を名乗っている。この家は元祖は玉那覇姓を名乗っているが、いつの時代か浦添方面から来た男子がウフナカ(35)の女を嫁にしてシリーに住んでいたが代々男児に恵まれず、シリーで生まれた娘の所に他から男が養子として入り家を継いできたと伝えられている。現在玉那覇姓を名乗っているのはウフナカメー(36)であるが、この家の元祖は沖縄本島であると言う。元は知念という姓であった。二代前のウフナカメーの祖父もシリーの養子として玉那覇姓を授かったので、以来知念姓は消えたという。シリーの屋敷の南の角に一坪ほどの庭地が造られているが、この池は聖地として崇敬されている池だが、何故に崇敬されているのかその理由は明かでない。更に母屋の中には神棚があるが、その神棚についても、何も言い伝えもなく説明出来る状況ではないという。シリーの東側の林の中に独特な形をした蘇鉄が植えられている。この場所を「イビ」と呼び旧暦正月九日に子供の健康祈願祭が部落民によって行われる。具志川間切旧記や仲里間切旧記によれば、この蘇鉄の下に登武那覇城主笠末若茶良の臍を埋めたと伝えている。旧記は、笠末若茶良は伊敷索（チナハ）城の城主の妾の子どもで、妾は粟国の出身であったが正妻の嫉妬が強く、城から追い出され、玉那覇村で笠末若茶良を生んだということを伝えている。生まれた家がシリーという説とアグニヤシチではないかという二説があるが、今のところそれを明らかにすることは困難である。蘇鉄は「チンブトゥク」又は「マヤーブトゥク」と呼ばれるもので普通の蘇鉄と形が違うため重宝がられているものである。この蘇鉄に関わる伝承については、いずれの機会に報告したい。

ウフナカ(35)は部落時代（久米島に武装した按司の出現、尚巴志の三山統一の前後あたり、つまり、1429年ごろ）の名残りある屋敷である。敷内に火の神が祀られている。これが「玉那覇ひや家火の神」である。「ひや」は根人、その家の男主人である。部落時代の宗本家（草分）の家である。ひや家の建物は60代以上の人たちの記憶に残っている。大きなヌチヂヤーであったという。家の中には色々な神衣裳が保管されていたという。根所（本家）の娘は

根神となって、諸々の祭祀にたずさわるので、この神衣裳も彼女たちが祭祀の時に身に付けたものであったであろう。毎年旧暦５月15日の稲穂祭りと６月25日に行う稲大祭りの時、神女達が揃って、玉那覇のひや火の神前で祭祀が行われている。ウフナカも代々男児にはあまり恵まれなかったのか男系の子孫は断絶している。或る時期、妻が病死し男一人手で子どもを育てるのに苦労したので、一人の娘はシリーにもらわれて育った。その娘は成長すると他から男を養子として迎え結婚してシリーの家を継ぐということになったようである。従って、ウフナカは女系は延々と子孫を残していったことになる。与那姓を名乗るのは、本家がクシアミクーター（ユナーター）ともいう(38)である。ニバルーター(33)・ヤマウッツター(44)の三家である。田原姓を名乗るカーヌウィー(28)も与那家の分家であるが、字仲地の田原家へ養子となり田原姓をもつようになった。ところで、前に述べたウフナカの姓は「天久」であったとの伝えがある。ウフナカには、与那家へ嫁いだ女、安里家カーヌハタ(40)にも嫁いだ女がいたようで、前述したようにウフナカは女方の子孫は現在もいるのである。おそらくこれらの家系から、祭祀に関わる神女も出自していたであろう。与那家の更に以前の元祖はスーター(52)だと伝えられている。当原姓を名乗るのはこの一軒にすぎない。この姓を名乗っている理由や、与那家の大元であるということは、今後の調査研究を深めることによって明らかにされよう。

カーヌハタ(40)は曾祖父の代に沖縄本島から移住してきたと言われる。玉那覇村のムラガー（村の共同井戸）が直く前にあるのでカーヌハタという屋号になったのであろう。アミクーター(41)も安里姓を名乗るが、隣の安里（カーヌハタ）とは元祖はつながりがないと言う。イリアミクーター(45)はアミクーターの分家である。仲里村史によれば玉那覇の安里と呼ばれる人と比屋定村の上間という人と二人は沖縄本島で造船技術を学び、儀間浜で八反帆船を造ったと記している。安里と言う人物はアミクーターの先祖ではないかと考えられるが、今後の研究課題にしたい。

(60)のイチヌハタは現在大村姓を名乗るが、本来は仲村渠である。玉那覇村に住んで居る中村姓を名乗るものはイチヌハタを宗家とする。アガヌメー(56)・ナカヌヤー(53)・アガタイリ(50)・メーレヤー(47)・ウフナガ(55)等である。

クラッチャ(29)は更にメーレヤー(47)からの分家である。(46)の中村は(26)に住んでいたが最近新築して移転したことは前にも述べた通りであるが、この中村の本家は字仲地のマティランメー（イリトゥンチともいう）である。

公民館(34)は、クラッチャ(29)の元屋敷であったが、公民館（もとはクヮイバと言った）に選定され、クラッチャは現在地に移転した。時期は昭和初期頃の事である。前にクランニーの屋号について、米蔵と関係するものであろうと述べたが、クラッチャも蔵下と漢字が宛てられると思われる。現公民館の近くに米蔵があったことであろう。ただし、蔵下と漢字

を宛てると「グヮッチャ」と発音される可能性もある。公民館のすぐ東に「タンナハグヮッチャ」と呼ばれる拝所がある。漢字を宛てると玉那覇蔵下となる。字仲地にはナカチングヮッチャやユナハングヮッチャがあり、上江洲や西銘等にもウィージングヮッチャ、ニシンラグヮッチ、トーマングヮッチャ、ミングヮッチャ、アラカチグヮッチャ、イシディングヮッチャ等と呼ばれる所がある。クランニーと呼ばれる屋号は西銘にもあり、嘉手苅部落へ行くと、ウフドゥンチグラ、ダキチグラがあり、クラヒーと呼ばれる場所もある。仲里村字宇江城にクラッチャという所があり、同村比屋定にはシンラグヮッチャ、ハーグヮッチャがあり、同村儀間には白道グラ、そしてその側にはクラヌメー、クラヌスバ等と屋号もある。このようにして、判然と「クラ」という呼び方もあれば「グヮッチャ」という呼び方も残っているのであるが、本来米蔵の事と考えてよいのではないかと思う。クラッチャとか、クランニーと呼ばれる民家以外の場所では旧暦五月の稲穂祭りや六月の稲大祭りの時に神女達が揃って祭事が行われているのに共通点が見られる。

米蔵は字仲地に一例として「タクウェーグラ」と呼ばれる所がある。

日照りや不作で食糧難になることは、しばしばあったであろう。飢餓に備えて米を保存していくという共同体の知恵であっただろうし、そこには厳しい掟もあったであろう。

さて公民館は(64)に瓦葺きで建てられていたが、現在の公民館敷地へ移転したのであるが、その後この地に山里から嫁を娶った高江洲氏が字仲地より分家して住んで居たが高江洲家はその後宇鳥島へ移っている。そしてこの屋敷にはクシアミクーター（ユナーター）の長男が、本家を弟に継がせてここに分家して住むようになった。屋号もタカエスからユナーターと移り変わった。

アガリー(59)は上江洲姓を名乗り本家である。分家筋はカーゾー(61)・カッチビ(42)・フクトミ(58)である。この上江洲姓を名乗る一族は名乗頭が「智」であり、字西銘の上江洲家（美済氏）の一門であるが、いつ頃から玉那覇に分家してきたのかについては調査が進むにつれて明らかにされよう。

モリヨシ(62)は字西銘の屋号チズカより分家した。37ページで述べた盛吉氏と同じ人である。ヤマグチ(63)は大城姓を名乗る。山里部落で大城を名乗るのはこの一軒である。この大城は字仲地のウフグシク（屋号）からの分家である。ウフグシクの男性が玉那覇村から嫁を娶ってこの地に住居を構えた。

タンリ(54)は、元は(32)に住んでいたようである。後に(54)へ移転したと伝えられている。宇地原姓を名乗るが、ここも字山里では一軒しかない。タンナハガー(30)はタンリの女性が分家して住んでいた。この女性には二人の娘がいたが、他家へ嫁ぎ、タンリの女性も世を去るとそこは空家になってしまった。後にタンリ(54)の次男がここへ分家してきた。マッシマメー(65)は現在大岳小学校の体育館が建てられている所である。ここには戦前、(20)で説明し

た上江洲氏と、アガリー(59)からの分家である上江洲氏の両家の住宅があった。前者は商店を経営していた。後者の上江洲氏は後に字西銘のカニジョー（屋号）に移り住んだ。ムラヤマ(37)は字仲地のムラ（屋号）の男性が玉那覇村のアミクーター(41)の娘を娶ってこの地に屋敷を構え移り住んだ。　以上は玉那覇の集落構成を述べてきた。字山里の民家の構成状態を大まかにとらえることが出来たと思う。山里の現状をもう少し述べておこう。ヤンザトゥ側では１・８・６８・22・20・11・19・21・３・25・24の11ヶ所は空屋敷になっている。これらの民家は、子供達が沖縄本島に出て仕事をしているため移転している場合や、子供が生まれなかった夫婦が世を去って後継ぎがなく絶えた等の理由がある。これらの屋敷は縁故関係にある者によって管理されている。玉那覇側では、29・32・35・36・40・62・52・50・54・57の10ヶ所である。この空家もヤンザトゥ側と同じで、長男以下次・三男等も若い頃に沖縄本島や日本本土に住んでいる。これら山里にある空家には最近の若い青年夫婦が借用して生活している所も有り、前に述べた通り山里では人口の減少や戸数の減少が目立つが、これは特に昭和30年前後から著しく変化している。　字山里を全体的に見ると、ヤンザトゥ側はトゥンチ(10)やナカヤンザトゥ(4)ヌーラーシチ(11)アガタメー(19)等がかなり古い時期からあったと推測され、その後に仲村や山城の姓を持つ者、その後に更に新里、大田姓を持つ者達の移住によって集落の拡大をみたものと思われる。久米具志川間切例帳に、「五月稲の穂祭の時、米四升四合八勺、神酒壱こかい分、但、山里のひや火の神の前。」「六月稲の大祭の時、米八升九合六勺、神酒弐こかい分、但、山里のひや火の神の前。」という記録がある。

「ひや」と呼ばれる人は村落の草分けの家の男主人を指すのであるが、ヤンザトゥ側ではどの家に当たるのか不明である。同じく具志川間切例帳に、「五月稲の穂祭の時、米四升四合八勺、神酒壱こかい分、但、玉那覇のひや火の神の前。」「六月稲の大祭の時、八升九合六勺、神酒弐こかい分、但、玉那覇のひや火の神の前。」と記されている。ここでいう玉那覇のひや火の神は、地図Ｉの屋敷番号(35)のウフナカに在る。前に玉那覇姓を持つものの本家はシリーだと述べたが、玉那覇のひや家の姓は「天久」（あめく）だと伝えられていることから、シリーとどう関わるかは今後の研究課題である。

ところで、玉那覇のひや家の姓が「天久」だったとすると、屋敷番号(41)の屋号アミクーターとの関わりが出て来はせぬかと思うのである。筆者は以前、アミクーターの「アミク」は雨乞い祈願に関する地名ではないかと考えていたが、玉那覇のひや家の姓が天久だったということを調査の中で知り、この屋敷もひや家と関わりのある所ではないかと考えている。現在の住み人は安里姓を名乗るが安里氏と玉那覇のひや家とが関係ないとすれば、安里家の先祖がこの場所に家建てをした以前に玉那覇ひやと関わりのある者が住んで居たとも考えられるのである。

さて、玉那覇側ではトーバル(52)はかなり古い家系だと思う。シリー(39)やクシアミクーター(38)などと関係のある家系が玉那覇村では古いと考えられる。シリー(39)、ウフナカ(35)、クシアミクーター(38)、或いはアミクーター(41)、トーバル(52)等が古く、そこへ中村姓を名乗る太氏一族や上江洲姓を名乗る美済氏等が家建てをし、後に本永（太氏）や大城という人たちが移り住み集落の拡大を見たものと考えられるのである。

従って、以上述べてきたことから、ヤンザトゥ側にしても、玉那覇側にしても古い時代には5～10軒ほどの小さなムラであっただろうと推測されるのである。時代的位置付けは困難であるが、琉球国高究帳が作成された1635年頃、今から360年前の玉那覇村の規模は多くても十軒内外のムラであったのではないかと考える。

以上、久米島具志川村字山里の民俗基盤としての部落構成を述べてきたが、親族図等を具体的に図示することは紙面の都合で割愛した。他の機会に報告したい。

5．婚姻関係について

山里部落は仲地部落に接し、南に300メートル程の距離を隔てて西銘部落があって、この相方の部落との婚姻が頻繁に行われている。その他の部落出身との婚姻は僅か1～2例にすぎない。特に仲地との関係は深く、父系方からも母系方からも親戚関係にあるという複雑な様相があり、一言で申せば「ムルウェーカ」（みんな親戚）であると言える。

養子縁組みも目立つことが特徴で、しかも、長男が養子となって他家へ移り、次男や三男が実家を継ぐというケースもみられる。

長男がそのまま本家を継ぐ場合、よほど財産の多い裕福な家柄でない限り、次男以下は財産の分割はされず、本家の屋敷内の前方や後方に掘り建て小屋を作って住み、実家の労働に奉仕して生活を営むケースもあったが昭和初期頃から、南洋や南米へ移民する者や出稼ぎに出る者もいた。

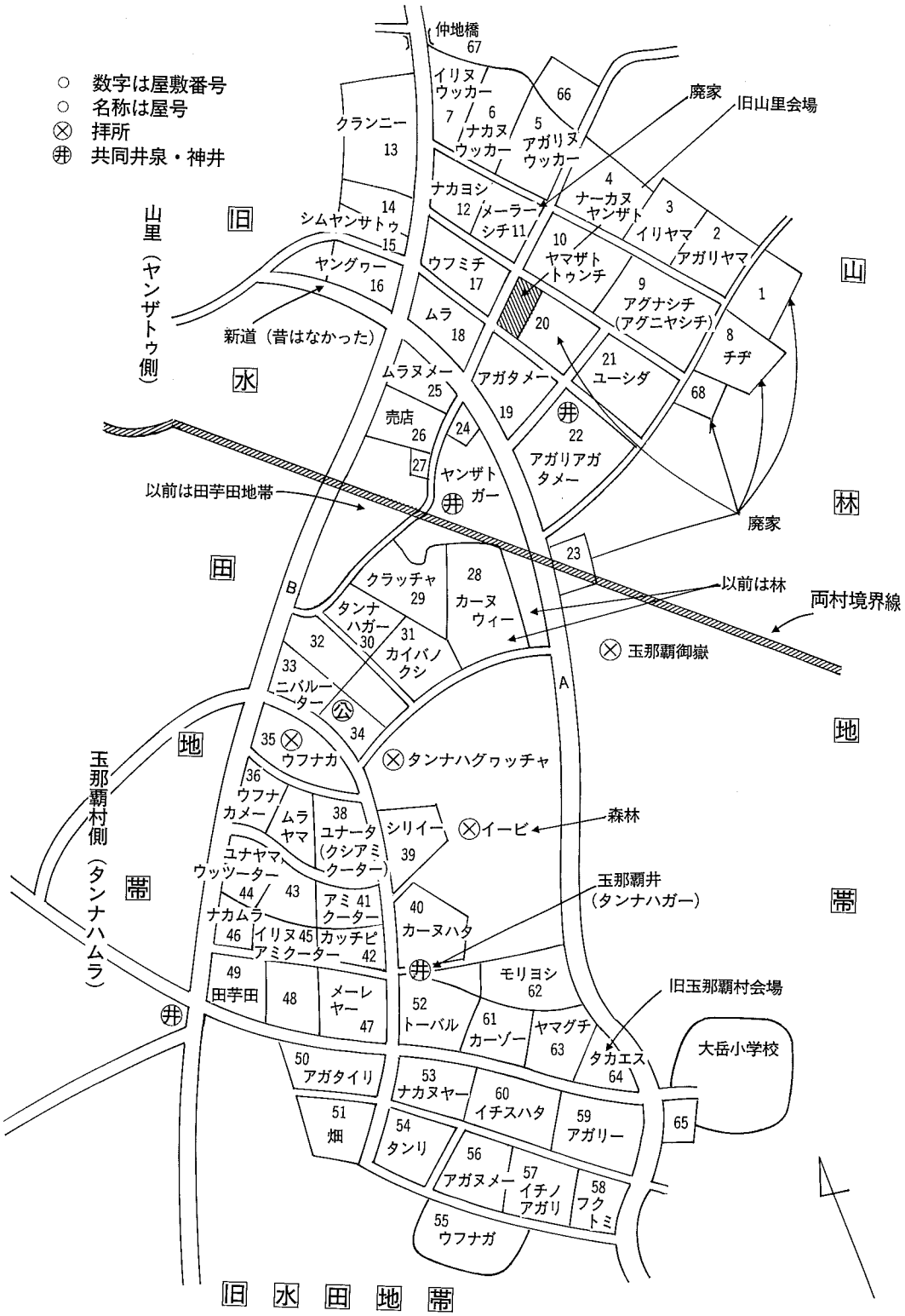
ほとんど明治生まれに該当するが、婚姻は家長（父親）の意志に基づいて決定されるのが普通であった。明治生まれの方々が殆ど世を去り、調査は不十分であるが、大正から昭和生まれの方々の話によると、結婚式当日若い青年達によって嫁入り行列の妨害が、式の度毎にあったという。これは他字との出来事であり、部落内における結婚に対しては無かった。つまり、自分の部落出身の女性が他部落の男性の所へ嫁ぐのに限るのである。妨害の理由は、自分の部落内の女性が他部落の男性に取られることに対する嫉妬心から行われた事だと言う。

結婚式は仏前結婚であった。結婚式の行列は花嫁を先頭にトゥシンチュに伴われ、後方にケームチャーが続き、更に後方に友人、親戚の者達が続いた。トゥシンチュは「年の人」で人徳の厚い人、名誉ある人等特別に目立つ存在の人物から選ばれた。トゥシンチュは男

女各一人が選ばれたが、今日で言えば仲人役の事に当たるであろう。ケームチャーは「ケーを持つ人」である。「ケー」は花嫁道具を入れた木製の箱である。ケームチヤーを務めた人は「ムヤー」であった。「ムヤー」とは、子供が幼児の頃子守をしてくれた人のことである。以前は子供が生まれてくると、どの家庭でも「ムヤー」を求めるならわしがあった。結婚する当事者を「ニービチンチュ」と言い、ニービチンチュにはウットングヮから結婚式当日かその日までに品物がプレゼントされた。「ウットゥングヮ」というのは結婚当事者に守られた人のことである。

さて、この結婚式の行列の妨害については行列に対し危害を加えるということではなく、道路に丸太を横倒しにしたり、石を転がして置いたり、道の両サイドに棒を立て縄を張って置くといった類の妨害であったという。

以上で山里部落の調査報告を終えることにしますが、本報告は調査不十分なため、あくまでも中間報告とします。生業に関する事や年中行事や人生儀礼、生活に関わる衣食住等諸々の分野については調査途中の段階にあり親族図等も含め十分調査された段階で改めて報告の機会をもちたいと思う。



久米島具志川村字山里集落地図Ⅰ

久米島の風葬墓人骨

土肥　直美

はじめに

沖縄の風葬墓については、墓の形態や厨子甕の形態、銘書の分析などを中心にこれまでにも多くの調査・研究がなされている（名嘉真，1978：上江洲，1980，1989：長沢，1989，etc.）。しかしながら、墓の主人公である被葬者自身に焦点を当てて調査した例は少ない。人骨は聞き方によっては非常に多くの情報を提供してくれるものである。今回、久米島総合調査の中で久米島の風葬墓を訪ねる機会が与えられたので、不十分ではあるが、人骨の側から見た墓について少し紹介してみたい。

久米島の代表的な風葬墓としてはヤジャーガマ、ヤッチノガマといった大規模なものが知られている。また、島尻地区の石墓や比屋定および北原地区の壁龕墓も有名である。日程の関係で、実際に人骨調査が出来たのは北原地区の風葬墓だけであるが、見たところ、いずれの墓においても人骨の風化は急速に進行しているように思われた。これらの墓については今後総合的な調査が行われることを望みたい。

北原風葬墓の調査

今回我々が調査した地点には6基の墓が認められた。墓は久米島空港に隣接するくるま海老養殖場に面した崖の中腹（ナカベーヤ崖葬墓地帯）に造られており、眼下には広々とした海原が一望できる。また、北東の方角には具志川城の遠景が望まれる。墓の形態は、ほとんど自然の岩陰を利用し前面を石積みで囲ったと思われるもの3基（A群）と、崖壁を矩形に彫り込んで前面に石を積んだもの3基（B群）の2群に分けられる（写真）。しかし、両群とも崖の中腹に造られているという立地条件からすれば、名嘉真（1978）の壁龕墓に分類されるものであろう。また、現在ははっきりしないものの墓道らしきものが認められ、それぞれの群は一つの墓道を共有していたようである。

調査の便宜上、A群を1号墓～3号墓、B群を4号墓～6号墓とした。日程の関係で、人骨の調査が出来たのはこのうちの1号墓だけである。6基の墓は現在ではすべて無縁になっており、被葬者像などの詳細は不明である。

1．A群の墓

墓の広さは、最も規模の大きかったものでおよそ幅5m×奥行き2.5m×高さ1.5m位である。内部にはボージャーを主体とする厨子甕がぎっしりと納められており、人骨の保存

状態は比較的良好であった。

1）1号墓

1号墓には37個のボージャー厨子を確認することが出来たが、破損した甕もあるので、全体としてはおそらく39個程度が納められているものと思われる。6基の墓のうち、唯一この墓にだけは「具志川城主の乳母だった人が葬られている」という被葬者についての伝承らしきものが残されている。しかしながら、もちろんこの墓には複数の人が葬られているので、乳母個人の墓ではない。また、この乳母に連なる一族の墓であったとしても、厨子甕から見た年代観とはかなりの開きがあるようである。では、この墓に葬られている人たちは一体どのような人たちだったのだろうか？

〔人骨の状況〕

人骨は体部骨を奥に入れ、頭蓋骨をその上に載せるようにして厨子甕の中に納められている。一つの甕に1体だけが納められたもの、2体が納められたもの、3体が納められたもの、4体が納められたものがあり、一見ランダムに納められているように見える。しかしながら、人骨をさらに詳細に調査したところ、これらにはかなりの規則性があるように見受けられた。すなわち、単体で納骨されている場合には特に性別は決まっていないが、2体の場合、女性と子どもの組み合わせ一例のほかは、ほとんどが成人男女の組み合わせであった。また、3体以上の場合は成人男女に子どもや若年の個体が加わっていた。全ての甕について詳細な調査を行ったわけではないので、もちろん例外はあるかも知れないが、実際に確認できたものについては上記のパターンが多かった。

〔被葬者の構成〕

次に、この墓に葬られている人たちについて、もう少し詳しく見てみることにする。まず、何人くらいの人たちがこの墓に葬られているのかを知る必要がある。そこで、被葬者の数を推定するために、甕の中に納められている頭蓋骨の数を調査した。一つの甕には1～4体分が納められていたが、破損がひどく、識別が困難なものについては1体以上あるいは2体以上のように記録した。その結果、表1に示すように、少なくとも71体という被葬者数が得られた。

表1　1号墓の被葬者数

甕1個当たりの頭骨数	甕の数	個体数
1体分	6	6体
1体分以上	7	7体以上
2体分	11	22体
2体分以上	4	8体以上
3体分	7	21体
3体分以上	1	3体以上
4体分	1	4体
計	37	71体以上

71人というとかなりの人数のように思える。しかし、実際にはこれらの人たちは同時期に亡くなったわけではないので、集団の規模はそれ程大きなものではない。當眞嗣一氏に

よれば甕の年代は18世紀を主体としているということであるので、この墓の使用された期間を100～150年と見積もると、およそ４～６世代の人たちが葬られていることになる。６世代と仮定して単純に計算すると１世代当たりの人数は11～12人、４世代と仮定しても17人程度である。

〔被葬者の形質〕

人骨の調査は今回だけでは十分に行うことが出来なかったので、形質の詳細についてはさらに調査を行った上で別の機会に報告することにしたい。現時点までの観察ではかなりの形質的変異が認められ、頭型は長頭から短頭まで、顔面の特徴も非常に面長なものから丸顔のものまで存在し、多様な印象を受ける。家族関係を反映する遺伝性の強い形質などは、今のところ見出していない。しかし、四肢骨には骨折の治癒痕の認められるものがあるなど、当時の人々の生活を示していて興味深かった。

以上のように、１号墓に葬られている人たちはそれ程大きな集団ではないが、形質的にはさまざまな特徴を持った人たちのようである。また、骨折の状況などから考えると、かなり厳しい労働を行っていたのではないだろうか。それにしても、大変几帳面な埋葬習俗を持った人たちである。

２）２号墓と３号墓

１号墓から東側に少し離れたところに２号墓と３号墓が並んで位置している。規模は１号墓に比べると小さく、幅約2.5m、奥行き約２m、高さ約1.8m程度である。１号墓と同様にほとんど自然に出来た岩陰を利用し、部分的に手が加えられたものと思われる。２号墓には35個、３号墓には16個の厨子甕が納められていた。甕の形態は１号墓と同様にボージャーが主体である。

３）その他

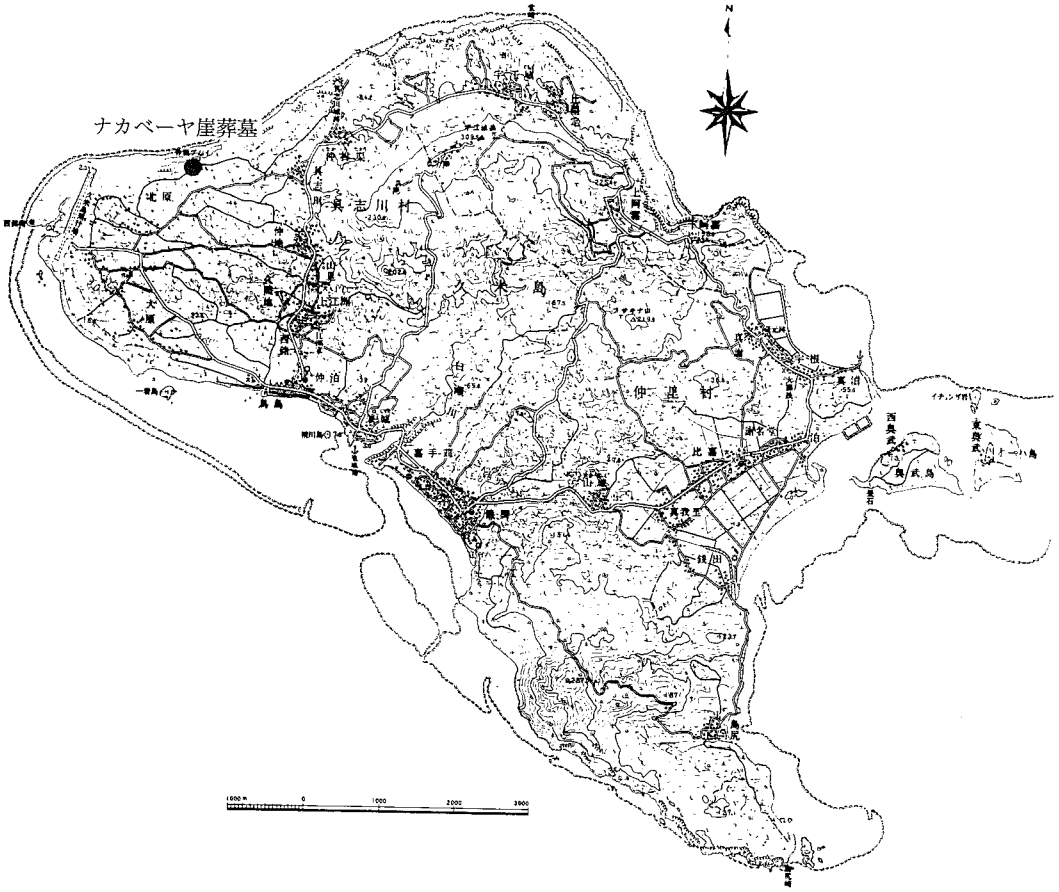
このほか、１号墓と２号墓の間の小さな岩の窪みにボージャー厨子が１個ひっそりと置かれており、これには成年と熟年の女性の骨が納められていた(写真)。二人の女性は墓に入れてもらえなかったのだろうか、民俗学的に興味深い事例だと思われる。

２．Ｂ群の墓

Ｂ群の墓の規模はＡ群のものとそれ程変わらない。しかし、墓室内の状況はＡ群のそれとはかなり違っていた。例えば５号墓の墓室中央部には石を並べた仕切りが設けられており、両方の壁際のほぼ対称な位置に、一段高く石の死床のようなものが造られている。そして、それぞれの区画には５～６個ずつの厨子甕が置かれていた。また、４号墓の墓室左手奥には木棺あるいは木厨子の一部と思われる木材片が折り重なるように散在していて、その間には人骨が見える。表面から観察したところでは、人骨の各部分は解剖学的な位置

関係を正確に保ってはいない。名嘉真宜勝氏によれば、この木片は2次葬のための木厨子であった可能性が強いということである。しかし、棺が崩壊していく過程で人骨の位置関係が乱れたということは十分に考えられることであり、この墓室内で一次葬が行われた可能性も捨てきれないのではないかと思う。

いずれにしても、A群の墓室内がほとんど厨子甕で満たされていて一次葬の痕跡が認められないのに対して、B群の方には明らかに一次葬のためのスペースあるいは痕跡らしきものが存在している点で2群の状況は異なっている。



久米島位置図

3．人骨から見た北原地区の風葬墓

日程の関係で十分な調査が出来なかったのは残念であるが、それでも、特に葬・墓制に関連するいくつかの情報を得ることが出来たのは収穫であった。

まず、１号墓については、一つの甕に成人男女がペアで納骨されているパターンが最も多かった。この男女の関係が夫婦であるか、兄妹（姉弟）であるか、親子であるか、あるいは他人であるかは大きな問題である。沖縄各地の墓を調査していて、ほとんど常識のように考えられていることが実は良く分かっていないということが時々ある。夫婦の骨が同じ甕に納骨されるようになった時期もその例である。もちろんこの男女の関係については今後科学的に検証されるべきである。しかし、一般に夫婦は同じ甕に入れると言われていることから考えると、この男女の関係は夫婦と考えて大過ないのではないだろうか。１号墓の例は沖縄における葬・墓制を解明するための好事例になるものと思われる。

ところで、子供の骨の扱いに関しても曖昧な点が多い。一般的に子供は本墓には入れないと言われている。確かに風葬墓で子供の骨を見ることは少ない。しかし、実際に人骨の調査をしてみると、小児あるいは幼児、希には新生児と思われる骨を見かけることもある。１号墓では、３体以上が一つの甕に納められている場合、成人男女の組み合わせに子どもや若年が加わるパターンがほとんどであった。子供は仮墓に入れておいて両親が死んだ時に一緒に本墓に入れるということを良く耳にする。１号墓の例も、幼くして死亡した子どもを両親と一緒に納骨したのだろうか。また、歯牙の萌出状態から推定される子どもの年齢がほとんど５～７才に集中していた点も興味深い。

次に、墓の所有形態について人骨の側からの情報を整理してみたい。１号墓の被葬者数は少なくとも71人であった。そこで、単純に計算すると、１号墓に葬られている集団の規模は１世代当たり11～17人程度ということになる。しかし、この数字には子供が含まれているので、大人の数はもう少し少なかったはずで、せいぜい５～６組の同世代の夫婦が葬られているということになってしまう。

長沢（1989）が久米島島尻地方で行った墓の調査によれば、18世紀の島尻地方では墓の所有主体は集落であり、いわゆる村墓が主流であったという。したがって、この時期の久米島では村墓が一般的であったと思われる。１号墓が村墓だったとすると５～６組の夫婦という被葬者数は少な過ぎるように思われるが、Ａ・Ｂ各群あるいは両群の墓を一つの集落が利用したということも考えられる。また、集団の規模から考えると、島尻の石墓と同様に模合墓への移行過程を示している可能性もある。その場合、それぞれの墓の使用された年代が問題である。最近では、人骨の遺伝学的調査によって、被葬者の親族構造の推定が試みられるようになってきている。しかし、これらを確かめるためには、考古学・民俗学・人類学の総合的な調査が必要である。これらは今後の課題としたい。今回の例は葬・墓制に関する具体的な情報を多く提供している点で貴重な事例と思われる。

おわりに

時間の関係で今回は人骨調査をすることが出来なかったが、ヤジャーガマやヤッチノガマにも膨大な数の人骨が残されており、葬・墓制に関する計り知れない情報が眠っている。しかし、いずれの墓も人骨の状態はあまり良いとは言えない。風化がかなり進んでおり、このままでは久米島の貴重な文化遺産が失われる可能性が強い。近い将来における総合的な調査を心から願っている。

謝辞

小稿を終えるに当たり、久米島の風葬墓調査の機会を与えた下さった沖縄県立博物館の皆さまに謝意を表します。

特に、調査に同行していただき、ご指導とご教示をいただいた當眞嗣一氏と久手堅稔氏、足場の悪い調査地で特別有能な助手を努めて下さった上に、本稿中の挿図まで引き受けて下さった比嘉元子氏に心から感謝いたします。今回の風葬墓調査はこれらの方々のご助力なしには実現しなかったものである。

また、墓の所見について貴重なコメントをいただいた読谷村立歴史民俗資料館の名嘉真宜勝氏、調査へのご助力をいただいた久米島の皆さまに感謝いたします。

参考文献

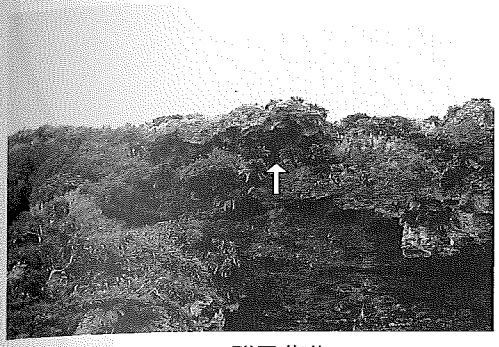
伊波　普猷，1973，南島古代の葬制．「おなり神の島」１巻，平凡社．

名嘉真宜勝，1978，南島の墓制―形態と外観からその特殊性をみる．「えとのす」，第10号，143-147．

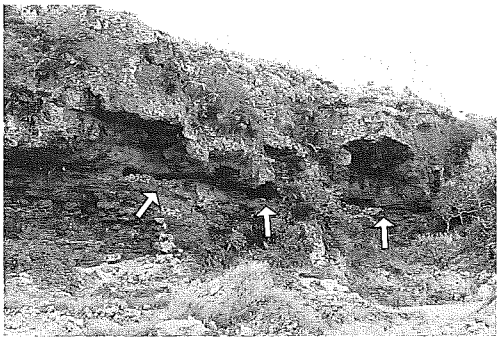
長沢　利明，1989，墓と編年―沖縄久米島島尻の事例から―．季刊人類学20(1)，156-215．

上江洲　均，1989，厨子甕について．沖縄県地域史協議会編，シンポジウム「南島の墓」沖縄の葬制・墓制．

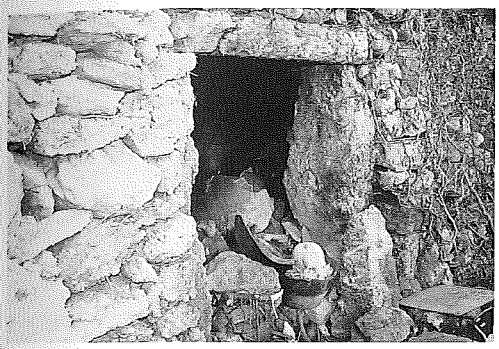
1980，沖縄の厨子甕．「国分直一博士古稀記念論集――日本民族文化とその周辺――(歴史・民族編)」新日本教育図書出版．



1．A群風葬墓



2．B群風葬墓



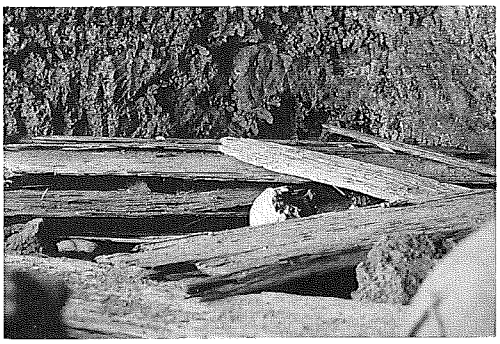
3．1号墓



4．5号墓



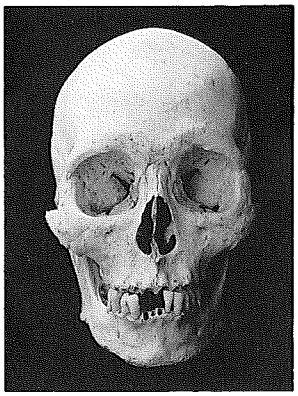
5．1号墓内部



6．4号墓内部

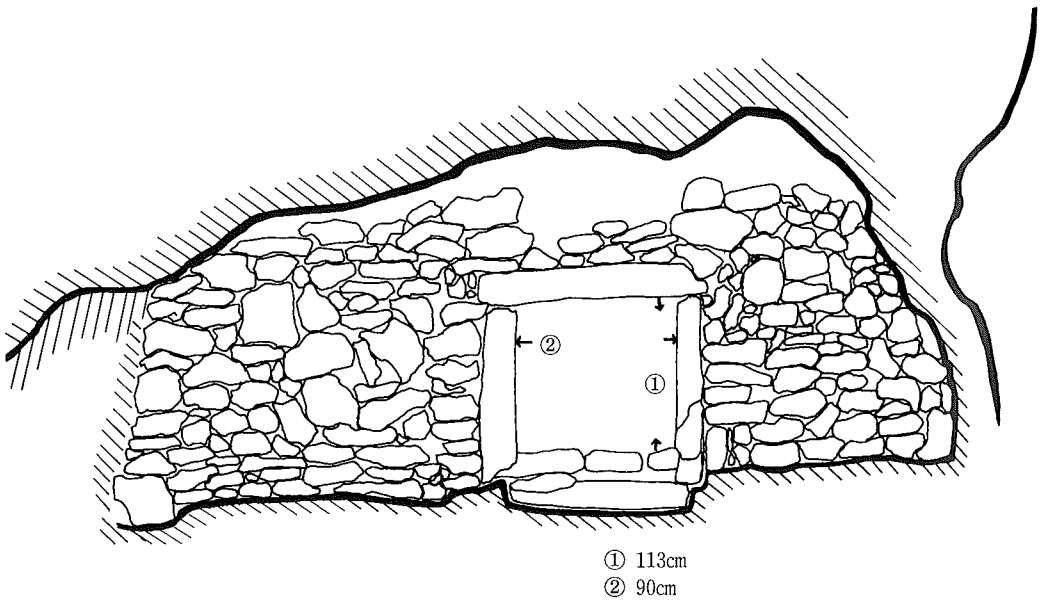


7．女性2人が葬られていた墓室外の厨子甕

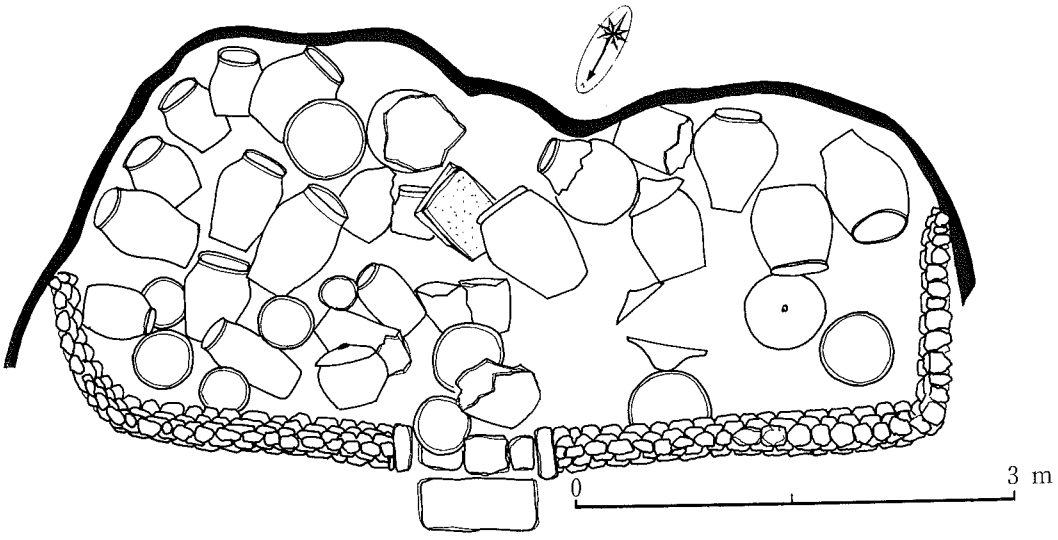


8．1号墓人骨

図版Ⅰ



ナカベーヤ崖葬墓（立面見取図）



ナカベーヤ崖葬墓平面図

図2

久米島後期貝塚の立地状況

久手堅　稔

久米島は沖縄本島那覇市のほぼ西約100キロメートルに浮かぶ面積58平方キロの島である。周囲は珊瑚礁がよく発達していて特に島の東部と南部沖合はリーフが取り巻いていてその中にある礁湖（ラグーン）は、貝塚時代のいにしえから島の人々に豊かな幸を与え続けてきた。

久米島の地形を見ると島の北部を占める標高326メートルの頂上をもつ宇江城山系と南部には標高287メートルを頂上とするアーラ山系が鎮座していていずれも小河川が発達していて複雑な山ひだを形成している。こうした山岳地域も古代より食料を得るための場所であったと想定できる。

久米島において貝塚の立地状況を見た場合きわめて偏った分布を示している事に気がつく。島の西部には大原貝塚群に代表されるように多くの貝塚が分布しているが東部においては、謝名堂、真謝、泊、銭田貝塚等数カ所の貝塚が確認されているにすぎない。

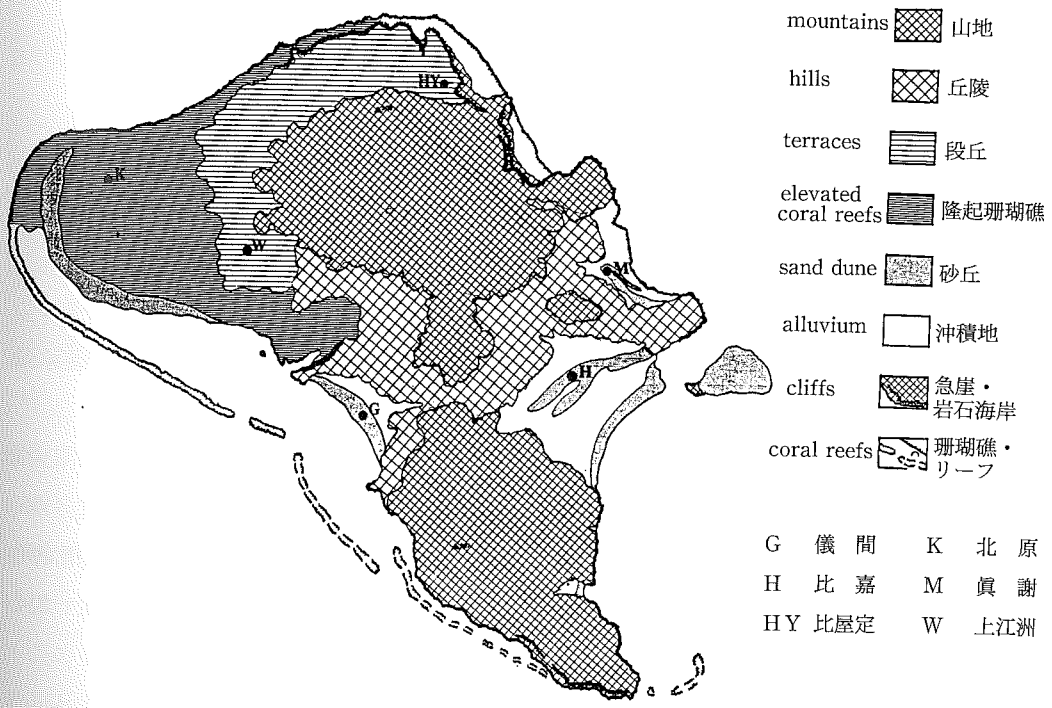


図1　久米島の地形図（法政大学『沖縄久米島』より）

久米島の貝塚分布表

久米島西部

阿里貝塚

仲泊貝塚

ウルル貝塚（3地点）

清水貝塚　（2地点）

大原貝塚群（7地点）

大原第3貝塚

北原貝塚　（3地点）

下地原貝塚

下地原遺跡

下地原洞窟遺跡

ヤージャー貝塚

ハンタバル遺跡

バケーマシ遺跡

ミッチン原遺物散布地

クイングァグスク遺物散布地

長作原遺物散布地

久米島東部

銭田貝塚

謝名堂貝塚（2地点）

泊貝塚

真謝貝塚



発掘及び表面調査での時期的区分

前期相当時期

1．大原貝塚(指定地区)、2．長作原遺物散布地、3．大原第3貝塚、4．ハンタバル遺跡、5．ウルル貝塚A地点、6．阿里貝塚(客土による持ち込みなのか不明)、7．北原第2貝塚（1993年度発掘により確認)、8．謝名堂第2貝塚

中期相当時期

9．下地原遺跡、10．ミッチン原遺物散布地、11．大原第3貝塚、12．大原貝塚（指定地区西接地、発掘により確認1980年沖縄県教育委員会『大原』)、13．大田辻遺跡、14．クイングァグスク遺物散布地

後期相当時期

15．下地原貝塚、16．バケーマシ遺跡、17．ヤージャガマ遺跡B地点、18．北原第1、20．第2、21．第3貝塚、22．大原第2貝塚A地点、24．B地点（発掘により確認1992年具志川村教育委員会）、25．C地点、26．D地点、27．E地点、28．F地点、29．大原東貝塚、30．清水西貝塚、31．清水貝塚（発掘により確認1989年具志川村教育委員会『清水貝塚』、32．仲泊貝塚、33．ウルル貝塚B、34．C地点、35．阿里貝塚（前期との複合の可能性あり）、40．アーラ遺物散布地

網掛けは島の東部に位置する遺跡

以上40地点から貝塚時代の遺物が採集される。

ところで久米島の現地図を眺めてみると遺跡の分布のあり方にきわめて特徴が現れている。島の東部は希薄な分布状況を呈しているが西部においてはきわめて高密度に分布する。このことは当時の久米島においてどの様な事例にちなむのか考察を行う。



久米島では後期貝塚はほとんど砂丘地に立地しているが、その中で立地条件として特殊と思われる貝塚は下地原貝塚がマージにあり、北原第3貝塚は隆起珊瑚礁の礁原に僅かに吹きたまった砂地にある。仲泊貝塚(比較的広大な貝塚）は砂嘴の上にあったと想定され砂州で区切られた入り江を挟んでウルル貝塚や清水貝塚があるがいずれも貝塚後期の貝塚であるが、ただ同時期にこの3貝塚が立地していたのか不確定である。東部の謝名堂貝塚は仲泊貝塚を中心とする貝塚の立地状況と下記の条件が類似する。

まず、砂地上にあること、傍らに小河川が流れていること、背後地がなだらかな丘陵地になっていること、前面にイノー（礁湖）が広がっていること等である。

このような条件を有するところが貝塚後期においては好まれた場所であったと推定できる。ところで島の東部においてはこの条件を満たす地形がきわめて少ない。現在の地形をみると遺跡があっても良さそうな箇所がある。たとえば、嘉手苅、儀間集落のある砂地地

帯島尻集落、トクジム旧集落跡、伝アーラ集落跡、東・西オー島などである。

現在の嘉手苅と儀間集落は貝塚時代から以降にできたのであり、新しい集落が砂嘴上に形成されたものであろう。現在の祭祀形態からすると嘉手苅や儀間集落の草分けは2から3の血族集団が山手の方から随時移住してきてできたものであった。おそらくそれ以前はまだ陸地化が進んでいなかったのかも知れない。現に近世になっても集落の背後地は湿地地帯であったのだがそれを干拓する事により新田を開き陸地化していったと推定できる。したがって嘉手苅、儀間集落ののる砂嘴は貝塚時代よりは新しすぎると推定できる。

トクジムや島尻集落の砂丘地も嘉手苅、儀間集落の当時の状況を考えた場合似たような状況にあったのではなかろうか。また、東・西オー島は用水に難点があったのではなかろうかと推定できる。その中では伝アーラ集落跡は立地条件としては前者に比較して最も恵まれた条件を備えていて表面調査でも土器の小破片が僅かに採集できる。しかし小破片すぎるため時期については不明である。また近年に2度ほど台風の高潮のため砂丘地が冠水してしまう状況であった。



このように久米島の貝塚後期の立地状況を見た場合砂丘地では現在での海抜5m以上にあるのが普通である。こうして貝塚のみを追いかけた場合、前述したように砂地、前面に礁湖をもち、用水が近くで得られる、背後地がなだらかな地形であるという事が必要条件であるといえる。ところが久米島においては貝塚と住居跡との関連がとらえられているのは1971年に発掘された北原第1貝塚のみである。図2と図3でもわかるとおり仲泊貝塚や謝名堂貝塚を中心にした地域では当時の地形から推定した場合水際に立地することになる。自然災害とくに台風時による高潮等を考慮した場合は住居は貝塚域から離れたところに立地すべきではないのか。あるいは銭田貝塚や北原第3貝塚は海抜5m以下に立地していて(両貝塚ともくびれ平底が主に採取される)特に北原第3貝塚は少々の台風の高潮でたびたび冠水する場所である。このような場所に立地する貝塚区域と住居区域との関連性などどう考えればよいか今後の課題となろう。

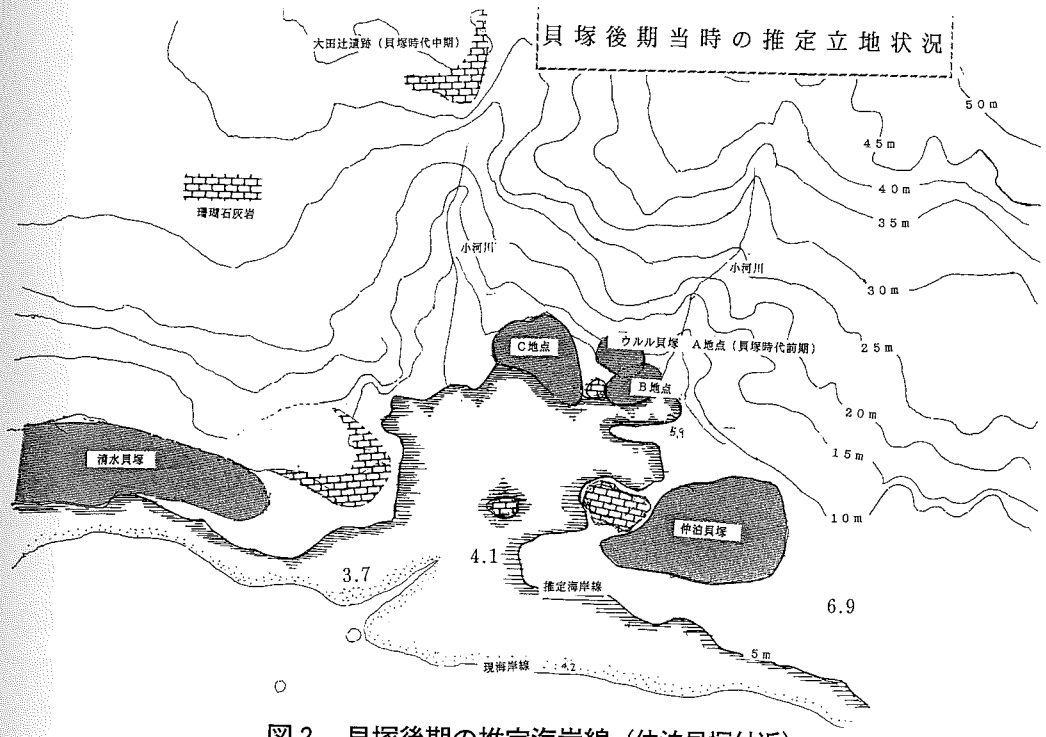


図２　貝塚後期の推定海岸線（仲泊貝塚付近）

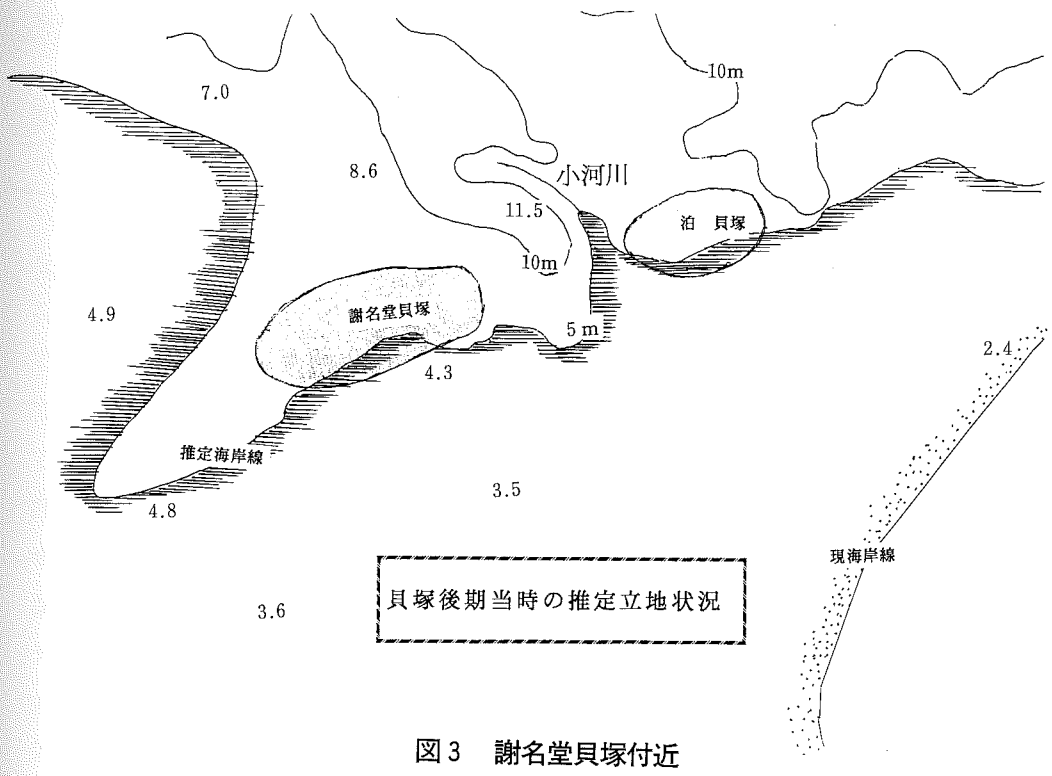


図３　謝名堂貝塚付近

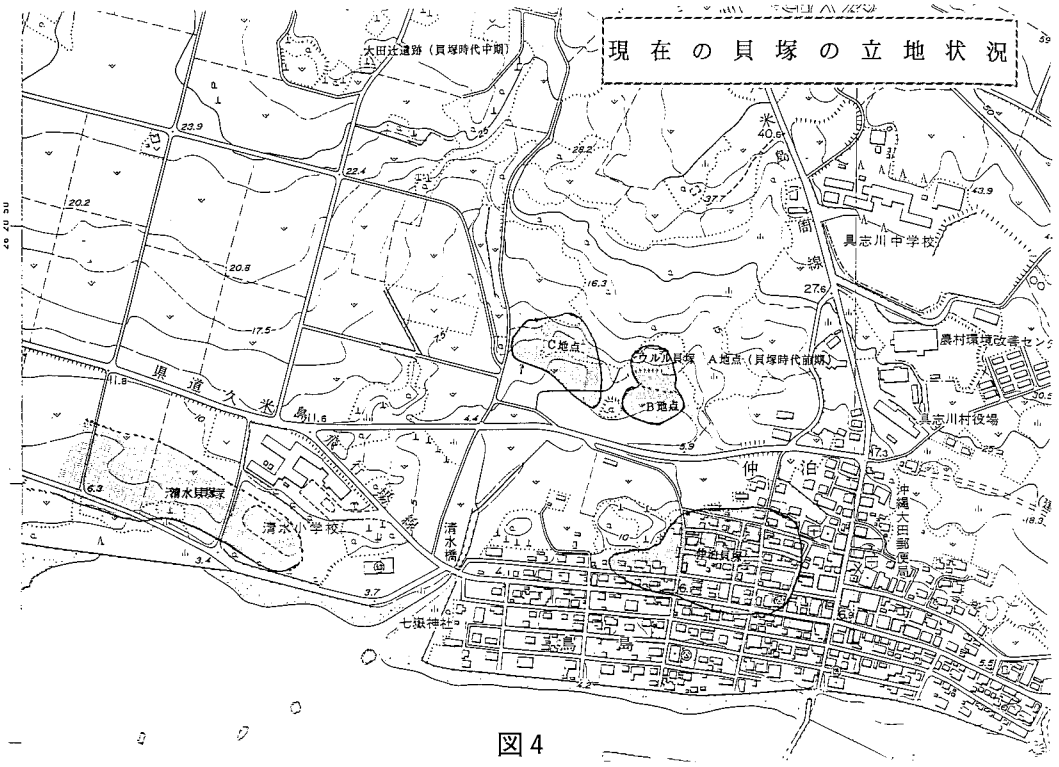

現在の貝塚の立地状況
大田辻遺跡（貝塚時代中期）
具志川中学校
農村環境改善セン
C地点
ウルル貝塚
A地点（貝塚時代前期）
B地点
具志川村役場
県道久米島
清水貝塚
清水小学校
清水橋
仲泊
沖縄大田郵便局
仲泊貝塚
七嶽神社
鳥島

図4

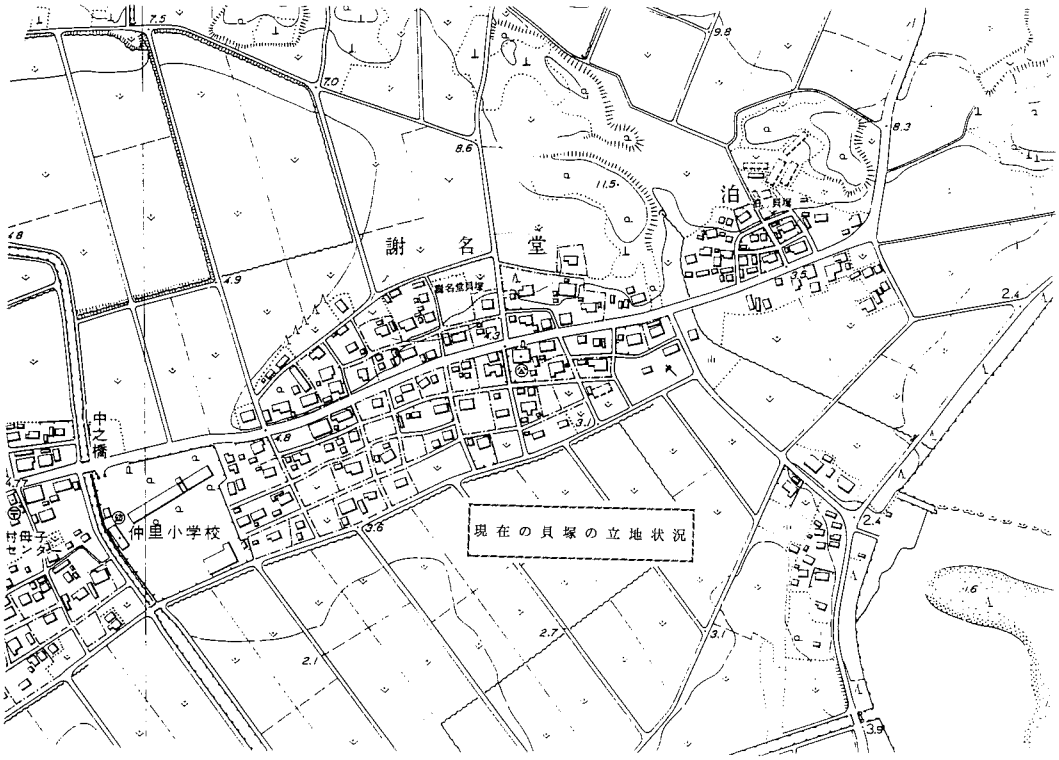

謝名堂
謝名堂貝塚
泊
貝塚
中之橋
仲里小学校
現在の貝塚の立地状況

図5

久米島の国・県指定史跡のグスク
―縄張りを中心に―

當眞　嗣一

1．はじめに

久米島のグスクについてはこれまで多くの人によって取りあげられてきた。たとえば、新城徳祐氏はその著『沖縄の城跡』のなかで7箇所のグスクの由来について文献や伝承などを引用しつつ述べているし[①]、また、沖縄県教育庁文化課では、久米島全域にわたって分布調査を行い13箇所のグスクを確認して分布図を作成するとともに考古遺物の出土状況やグスクの概要について報告している[②]。近年、法政大学沖縄文化研究所が実施した久米島調査のなかで、仲村昌尚氏によってグスクが取り上げられている。そのなかで氏は、久米仲里旧記や久米具志川間切旧記等の久米島の古文書を網羅して13箇所のグスクの特徴等について論評し、自説を展開している[③]。

今回の久米島総合調査では、これまで実施されてきた上記の調査成果を踏まえつつできるだけ多くのグスクを踏査し縄張り図を作成することによってグスク研究の基本資料の蓄積を図ることにした。幸いにも、久手堅稔氏を中心とする地元の方々の協力を得ながら限られた日数のなかでどうにか所期の目的を果すことができた。

グスクの縄張り把握を行うことでグスクの防御遺構を史料化し、地域史と在地構造を究明することを目的とする縄張り研究[④]の進展は、今回のようなグスクの調査の積み重ねによって進展していくものと考えている。

グスクの調査法には古文書や古記録などの文献調査、考古学的な発掘調査、地表面観察を主として行う縄張り調査、聞き取りを主とする民俗調査などいろいろな方法がある。ところが、これまでのグスク調査をみると、そのほとんどが文献調査と民俗調査によるものであった。考古学的な発掘調査は、多額な費用とある程度の長い調査日数を要することもあって気軽に実施できないのが難点である。その点、縄張り調査の場合には地表面観察を通してグスクの縄張り把握ができることから調査が容易に行えるという利点がある。とくに今回のように、調査期間が短く予算上の制約が多いときには、考古学的な発掘調査を実施することは不可能に近く、地表面観察を主とする縄張り調査が有効となる。発掘調査によらなくとも地表面に現れている遺構群を把握することでそれを図面化（縄張り図）し、グスクの機能や特徴、さらにはその性格や築城主体等についても明らかにすることができ、グスクを研究するうえで究めて有効な調査方法がグスクの縄張り調査である。今回実施した久米島でのグスク調査の大きな特徴はこの縄張り調査を主体にして実施したことである。

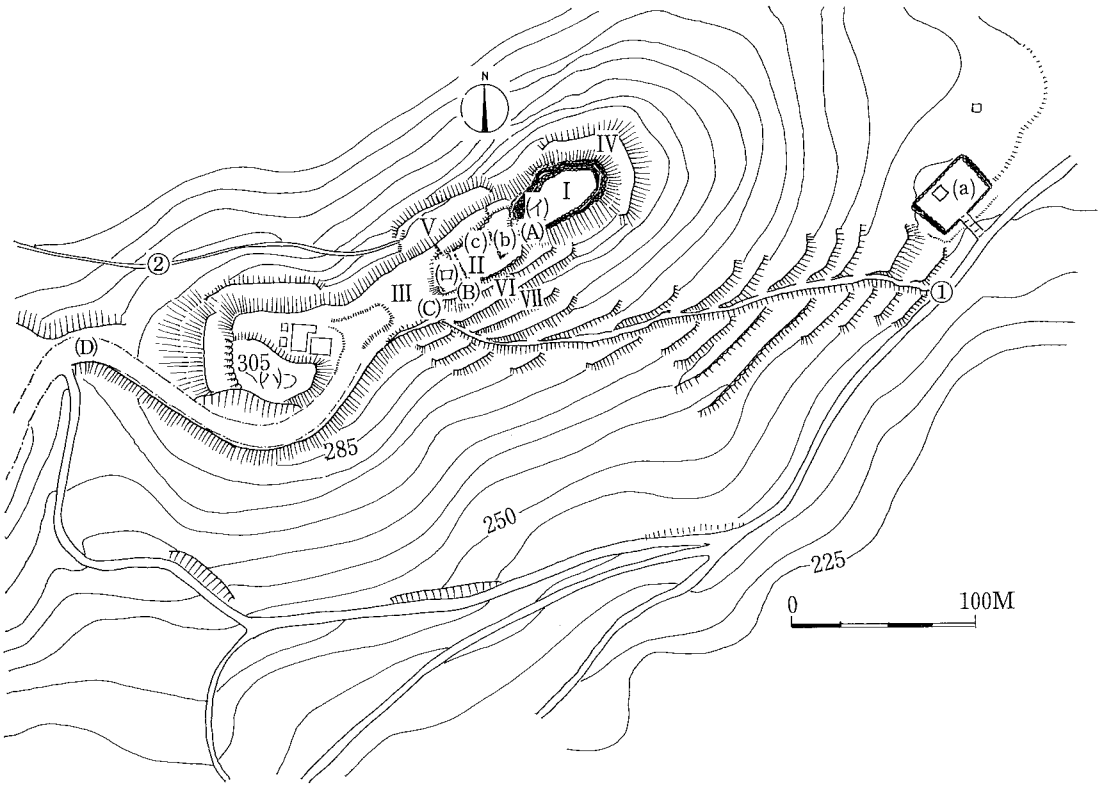
ブッシュをかき分けてグスクに入り、地表面に現れた遺構を把握しながら縄張り図を作成していくことはなかなか大変な作業である。とくに、ハブの多いことで有名な久米島ではハブの動きが鈍る冬の到来を待って調査を開始しなければならず、調査時期の設定に大きな制約を受けることになった。また、今回の調査についていえば、予算上の都合もあり、2ケ年にまたがる継続事業とはいえ実質は6日間という短い調査日程しかとることができなかった。このような厳しい状況にかかわらず、3つのグスクについて縄張り図が作成できたのは地元の研究者がグスク踏査に共に行動し応援していただいたおかげである。ここに記して感謝申しあげる次第である。

2．各グスクと縄張りの特徴

では各グスクの概要と縄張りの特徴について見ていくことにしよう。

宇江城城[5]（第1図、図版1～3）

現在の宇江城集落の東に聳える宇江城岳の標高310mの山頂に主郭を置き、その下に多くの腰曲輪群を配置する比較的大きなグスクである。このグスクは、久米島に所在するグス



第1図　宇江城城縄張図



図版１　宇江城城の遠景（東より）



図版２　宇江城城（Ｉの曲輪・物見跡といわれる石塁）



図版３　宇江城城の腰曲輪

クの中でも最も標高の高い位置に立地するグスクで、城内からの視界はよく、島の大部分が俯瞰できるばかりでなく、海上に慶良間諸島をはじめとして渡名喜、粟国の島々を望み、また、天候のいい日には遙か彼方に沖縄本島を眺望することのできるまことに気宇壮大なグスクである。

方音は「ウィグシク」という。かつて中城グスクと称されていたが、寛文７年（1667）以降、仲里グスクと呼ばれるようになり、その後、また宇江城グスクと改称され今日にいたっている[6]。『久米具志川間切旧記』によれば、伊敷索按司の長男久米仲城按司が築いた城だとされている。彼は、もと本中城という場所に築城計画をたてていたところ、オトチコバラという神女の神託による誘いを受けて、現在の地に改めて城地を変更したという。また、実際の城普請の指揮はムクチタルガニという人が行い、ティーヤントールという石工たちによって城が完成したという。つまり、城の選地はオトチコバラという神女、城普請がムクチタルガニ、石工がティーヤントールだったということである。

築城の年代について具体的には記されてない。落城については、中山王尚真による国家統一の過程で滅ぼされたとされている。

グスクは、略東西方向に走る尾根部を長軸にして、東側の先端部にⅠの曲輪、その西側の一段下がったところにⅡの曲輪を配置し、さらに下ってⅢの曲輪を置いて梯郭式になっている。山腹や城道の脇には多くの腰曲輪群が造られていて主郭部の防御ラインとして重要な役割を担っている。古老の話によると、Ⅲの曲輪の低くなったところには大手の城門

が東向きに開き、西には搦手が開いていたという。これらの城門遺構も今次大戦前までよく残っていたというが戦争によって一部破壊され、さらにその後、米軍基地建設等によって旧地形が損なわれてしまったとのことである。[7]

城壁は久米島特有の安山岩を板状の平割りにして高く積みあげてあるが、特にⅠの曲輪の部分は破壊されずに良く残っている。残った城壁の平面形態をよく見ると、コーナに突出部があり小規模ながら馬面の構造がとられていることがわかる。Ⅱの曲輪の東側よりには正殿の基壇が西面し、その前は平場となって前庭部をなしている。各曲輪では黒色土の遺物包含層が確認され、グスク系土器や１４～１５世紀に属する貿易陶磁器の破片が多量に出土する。

現在、Ⅲの曲輪には自衛隊の通信施設があり、史跡整備の妨げになっている。[8]

(縄張りの特徴)

遺構の特徴を縄張り図によってみていくことにする。

このグスクで驚かされるのは、主郭部を取り巻く腰曲輪群が無数につくられていることであろう。また、山麓の方から城内へ通じる大手道の脇に雛壇状にたくさんの小曲輪が造られ、侵入者に対して神経質なまでに警戒していることも大きな特徴点の一つである。

曲輪Ⅰは標高310m を測り、城内で最も高い位置にある。縁辺部には平割りの安山岩が高く積み上げられているが、なかでも東端部の方は石垣の幅も厚く、しっかりしていて物見台の跡という伝承がある。[9]また、西端部は一段高くなった岩山で櫓台(イ)になっている。(イ)からはⅡの曲輪が監視できるばかりでなく、曲輪Ⅰの虎口(A)も完全に掌握でき巧みである。同様なことは曲輪Ⅱの西端(ロ)でもいえる。

曲輪Ⅱには、高さ70cmの基壇(b)が西面し、その前には前庭部に相当する平場がみられる。基壇を伴う正殿と御庭という配置の形態は、首里城の正殿と御庭がその典型的な例であるがその他にも中城城や勝連城、今帰仁城、あるいは規模の小さい別のグスク等でも認められる。後述する具志川城の場合もまたそのような基壇を有す例である。

さて、この基壇の前には略方形になった石積み(c)がある。井戸という伝承もあるが[10]現状ではこのような高いところに水があるとは考えられず疑問が残る。ただ、正殿の屋根から落ちる雨水を溜める溜井の可能性もあり、発掘調査等を実施して遺構の性格を知る必要があろう。

地元の古老たちは曲輪Ⅱのことを「ナカグーイ」と呼んでいる。[11]したがってこの曲輪の名称については、今後ナカグーイ曲輪と呼ぶことにし後世に長くその名称を残して置く必要があると考える。

曲輪Ⅲは、自衛隊基地として使用され最近まで立入り禁止区域になっていたが、今では自由に出入りができるようになっている。曲輪Ⅲの西端は標高305m を測る小高い丘で頂上

部を中心に約50㎡ほどの平場が形成されている。この上に立つと、曲輪ⅠやⅡから死角となる西側の峰々を見通すことができ、周辺を観察するのに恰好な場所である。そのことから(ハ)は、物見の機能をもつ櫓台と考えてよい。また、(ハ)の直下には、西からの寄せ手に対して迎撃できるように削平地が作られている。この削平地の西端は、ちょうど尾根がくびれる位置にあって幅4 mしかない(D)。したがって、宇江城の城はこの尾根のくびれた位置に堀切を設けることによって完全に城の独立性を保ことができる。おそらく(D)の部分には尾根続きを遮断するための堀切が掘られていたのではなかっただろうか。今後、発掘調査等を行い堀切の有無について調べてみる必要があろう。

島の古老はグスク内の門、つまり虎口のことをジョンタと呼んでいる[12]。曲輪Ⅲのジョンタは東南東に向いて開いている(C)。このジョンタを出ると城外への連絡路となる城道(①)が山腹を縫いながら東に向かって伸び山麓へと続いている。山麓には城下集落としての城村が広がっていたようであるが、大正15年を最後に廃村になった。現在でも数箇所の屋敷跡と井戸等が残りその面影をわずかにとどめている。

大手道の入口脇には観音堂(a)がある。この観音堂は、『久米仲里旧記』によると当初、真謝にあったのがこの地に移されたといわれている[13]。観音堂の敷地を子細に観察すると、山の斜面を削平し周辺に石垣を張り巡らすなど堂々とした敷地空間になっており、観音堂の敷地にしてはあまりにりっぱに普請されているように見受けられる。おそらく、観音堂移転の前に別の用途として使われていたのではなかろうか。つまり、はじめから観音堂の敷地だったのではなく、当初は按司などが日常生活をおくる居住空間として使われていたのが、後世になって観音堂が移転してきたのではないかということである。宇江城との関連でいえば、山の上にある宇江城を山城とし、下方の観音堂の敷地を居館と考えれば、山城と居館のセット関係を有す城として把えることは十分可能である。大手道の取りつき方や、グスクと観音堂敷地との位置関係および城下集落のありよう等総合的にみると平地に居館、山上に城というセット立地が宇江城城の初期の形態だったのではなかろうか。

①の反対側、つまり北側斜面の連絡通路②は山腹を蛇行しながら字具志川方面に向かって伸びている。現在では通る人もなく雑木林に被われたままになっているが、かつて、「グシクグミ」の際に仲村渠や具志川方面から登っていく神道（チンベー道ともいっている）として最近まで具志川の神女たちによって利用されていたという。

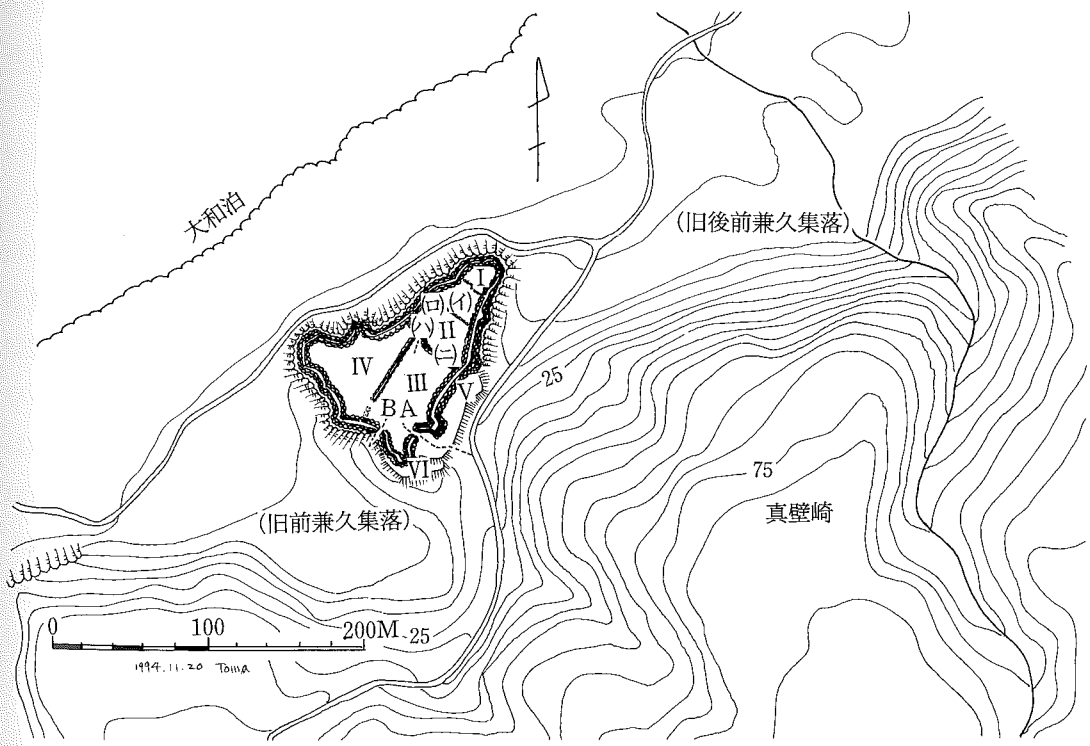
曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの虎口は、いずれも坂虎口となり東よりの崖縁側に取りついている。曲輪Ⅲの虎口(c)は、大手の城門（ジョンタ）で、幅2 m、奥行き約2.5m、高さ約2 mの石門が戦後まで残っていたというが、米軍基地の建設で破壊され現在では見られない。

虎口を出ると大手道が山麓に向かって伸びており、虎口のすぐ下に細長い腰曲輪（Ⅵ）が等高線に沿う形で取りついている。この曲輪からは、大手道を上ってくる攻城軍に対し

ての迎撃が可能であり、虎口の防御を意識して造られた曲輪であることがわかる。この種の機能を有する曲輪が大手道の脇には無数に造られている。なお、曲輪VIの奥側で碇石が発見された。地表面に転がっていたのを樹木の伐採によって発見されたもので、遺構の一部として再利用されているものではないようであり、何のためにここに持ち込まれたのかよくわからない。重量が約170kgもする重い石で、宇江城が機能していたころグスクに関連して運ばれてきた可能性は高く今後の研究がまたれるところである。この種の碇石は、「蒙古碇石」と呼ばれ、福岡県や佐賀県唐津市等では重要文化財として保護の手が加えられているものである。博多湾を中心に山口県や佐賀県、長崎県の沿岸地域で発見されており、時代は宋代から元代に属するものだと考えられている[14]。

具志川城[15]（第２図、図版４～８）

この城は、久米島の北西海岸にあり、環中国海に突出する琉球石灰岩の独立丘に営まれたグスクである。具志川城という名称のついた城跡は、この他に糸満市字喜屋武と沖縄中部の具志川市字具志川にも所在する。いずれも、海に突出する石灰岩独立丘に占地しているという共通点を有している。糸満市の具志川城と久米島の具志川城との間には後述するように伝承の上で関連があるとされている。



第２図　具志川城縄張図



図版４　具志川城全景（南より）



図版５　具志川城全景（西より）

『久米具志川間切旧記』のなかの具志川城の由来として次のように記されている。

「具志川城之儀以前は御嶽ニ而候処仲地村之住人仲地にやと申者楮剝用に彼所ニ参り見付帰宅之所真たふつ按司は南の方青名崎と申所ニ而城立御企有之石垣を積懸候最中右仲地御前江参り此所は狭殊ニ地形悪敷候北之方山有之候南北西は嶮岨にて東は少しひきて内広長にて地形能有之城立ニ而無双と申上候付則彼仲地御召烈御見分被成候処申出之通御悦喜無限御普請ニ而御移為被成由相伝有之候年来は久遠ニ而不相知候[16]……」。

これによれば、仲地にやという人の選地により、真たふつという按司が築いたとされているが、その年来については不明だという。その後、真たふつ按司の嫡子真金声按司の代になると、伊敷索按司の二男真仁古樽按司に乗っ取られたという。そのとき、城を乗っ取られた真金声按司は沖縄本島南部に逃れてきて城を築き、故名をそのままとって具志川城と名付けたと伝えられている。

城の滅亡については、中山王の尚真が進める中央集権化政策によって16世紀の初期に中山軍に滅ぼされ、それ以降は廃城となったとされている。先の『久米具志川間切旧記』には「首里軍具志川城を攻め取る事」として要旨次のように記されている。すなわち、「首里軍が久米島を攻めたとき、中城城（現・宇江城城跡）で合戦がはじまった。その時、父君のいしきなは按司は、自分の息子であるまたふつ按司へ警戒を怠るなという早や馬を出させた。その報せを聞いたまたふつ按司は、城の守備を厳重にすると同時に自らは中城支援のために軍を進めた。ところが、名城原[17]というところまできた時に中城城主の家来に出会い、もはや中城城が首里軍の手に落ち城内も火の海と化し按司も城を出て行方がわからなくなっているということである。そのことを聞いたまたふつ按司は、急ぎ具志川城へ引き返し首里軍の攻撃に備えて城の守りを固めていたら、３日後、首里軍が押し寄せてきて具志川城から４～５町離れた東南二方に陣を張って戦の準備をした。ところが、具志川城は堅固な城でなかなか落ちない、攻めあぐねていたところへ、具志川按司の乳父よなふしのひゃという人物が寝返り首里軍へ通じてしまった。よなふしのひゃが言うには、この城には水場がなく外の方から水路で引いてくるという。したがって、水路を断ち切ってしまえば落城するだろうとのことである。これを聞いた大将は大いに喜び彼にたくさんの褒美を下賜し、早速実行することにした。かくして、難攻不落の具志川城もよなふしのひゃという人の裏切りによって難無く滅びてしまった」というのである。家来の寝返りによって落城した話はよくあることであるが[18]、それにしても講談を聞いているようでなかなか面白い。このようにして、具志川間切旧記には久米島のグスク由来や城主たちのことが語られていて、グスク研究を進めていく上で貴重な史料になっている。

城郭は、やや三角形状を呈して、北、東、西の三方が断崖となっている。北側は環中国



図版６　具志川城の石垣（東より）



図版７　具志川城（大手の虎口）

海に突出し、南の方は内陸の方に接続する。城外からの景観は台形状になった大きな石灰岩の岩山のように見える。虎口は、南側のやや緩斜面にとりついている。天険要害の地に築かれたこの城は、四つの曲輪群で構成されているが、それぞれの曲輪は互いに低い石積みによって区画されている。城壁をなす石垣は、琉球石灰岩と珊瑚石灰岩および安山岩が利用されていて、積み方は野面積みを主体とするが、城門にあたる虎口部分と城内を区画する石積み部分でわずかに切石積みをみることができる。

考古学的な発掘調査はまだ実施されたことはないが、城内からは、14～15世紀に属する貿易陶磁器が採集されることから築城時期の比定と海外貿易が行われていたことを知ることができる[19]。城の北西側城下には、「大和泊」と呼ばれる港を控えている[20]。

(縄張りの特徴)

周辺は天然の断崖によって囲まれていて、その断崖に沿って石塁が巡っている。石塁の高さは、北側と西側の鋭くきり立つ断崖面で低く、東側と南側の比較的緩い崖面では高く積み上げられている。寄せ手の侵入はもっぱらこの緩い崖面をもつ東側と南側に集中すると考えられるので、防御の重点がこの内陸部に置かれているは当然のことであり、石塁を厚くし、しかも高く積み上げられているのも納得がいく。石塁の規模は高さに比例して高ければ高いほど幅も厚く、がっちりしているが、低いところでは石垣の幅も細くかつ粗末な石積みになっている。

この具志川城も城としてはまさに天然の要害の地に立地し、難攻不落の城に見えるのだが、城内に水場を取り込んでいないことが城の運命を決定づけることになった。具志川間切旧記のなかにみえる城攻めの伝承もその辺の事情を伝えているのであろう。

さて、この城の北端曲輪Ⅰは城内で最も高い位置にあり、物見があった場所とされている。その南には曲輪Ⅱがあり、北側に基壇が認められる(イ)。発掘調査をしてないのではっきりしたことはいえないが、基壇の上にはりっぱな殿舎が建っていたのであろう。基壇の北に隣接して半円形の石塁(ロ)が認められるが、どういう施設があったか定かでない。基壇の前は広くなっており、前庭部の機能があったものと思われる。この曲輪Ⅱには、虎口が2箇所あり、1つはやや北より(ハ)、他は中央部近く(ニ)に開いている。虎口に取りついている石垣は直線ではなく、とくに、虎口(ハ)ではその脇に折りをつけ側面攻撃ができるように工夫されている。その点、虎口(ニ)は無防備であり、後世に改修された可能性が強い。曲輪Ⅱの南には高さ約1m、幅2mの石垣で仕切られた曲輪ⅢとⅣがある。曲輪Ⅲには、南側に城門Aと南南西側に城門Bがそれぞれ開いている。城門Aは南面し坂虎口となっている。城門に向かって右側の城壁は、南に向かって大きく突出していて、横矢を効かすように工夫されている。また、城門Bも城壁を大きく湾入させ合横矢になっている。

比嘉景常氏が昭和12年に地元の人たちと一緒に描いた具志川城平面図には[21]、喜名英晃老



図版８　具志川城（IIIの曲輪とIVの曲輪を仕切る石垣）

（大屋子職といっている）からの聞き取りで北端の突き出したところに大和への拝所真玉森、IIIの曲輪に首里への御通し金比屋武と園比屋武、IVの曲輪の西南隅に中国への拝所崎間森があることを記し、実際の位置についても真玉森を除き図面上にきちんとプロットをしている。曲輪IVには馬場と記している（第３図）。

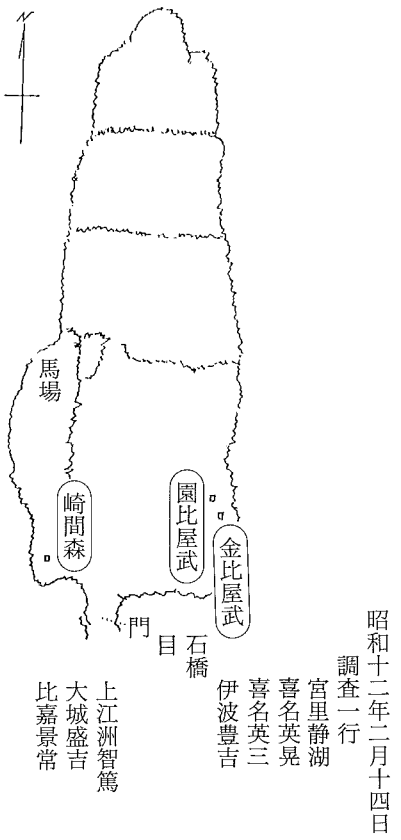
城門Ａに向かう右側には、城門に殺到する攻城軍を迎撃するための小さい曲輪Ｖが取りつき、また、左側の一段低くなったところには、城門ＡとＢに侵入して来る敵兵に対して側面攻撃できるような小曲輪VIを設けてある。曲輪Ｖ・VIともに石垣ではなく切岸になっている。

この城の弱点は、すぐ東に真壁崎と呼ばれる高い山が隣接していることであった。この山は標高84.2m を測り、山の頂上からは城内がまるみえとなる。伝承によると、城内には真壁崎という所から水路でもって水を引いていたようであり、水路を断ち切られたことで落城したことになっている。やはり、城の攻防の鍵は真壁崎にあったようである。

この城には、２つの城下集落が付属していたようである。城の南西に前兼久、北東に後前兼久である。前兼久の集落の前面（北側）には、大和泊や唐泊と呼ばれる港があり、具志川城と関連の強い港だったと思われる。『おもろさうし』巻十一の二七には、海外貿易によって栄えた具志川城の様子が次のように歌われている。[12]

一、ぐしかわの、まだまうちはげらへて、
　　よくげらへて、
　　まさりおわる、せたかご
又　かなふくの、まだまうちはげらへて、
又　たうのふね、ぜにこがねもちよせるぐすく
　　よくげらへて
又　やまとふね、ぜにこがねもちよせるぐすく

城内や今は農耕地になっている城下集落から多量の貿易陶磁器が採集されることは、前述したとおりである。これらの貿易陶磁器の出土によっても、海外貿易で栄えていた具志川城の様子を知ることができる。



第3図　比嘉景常氏作成の具志川城平面図

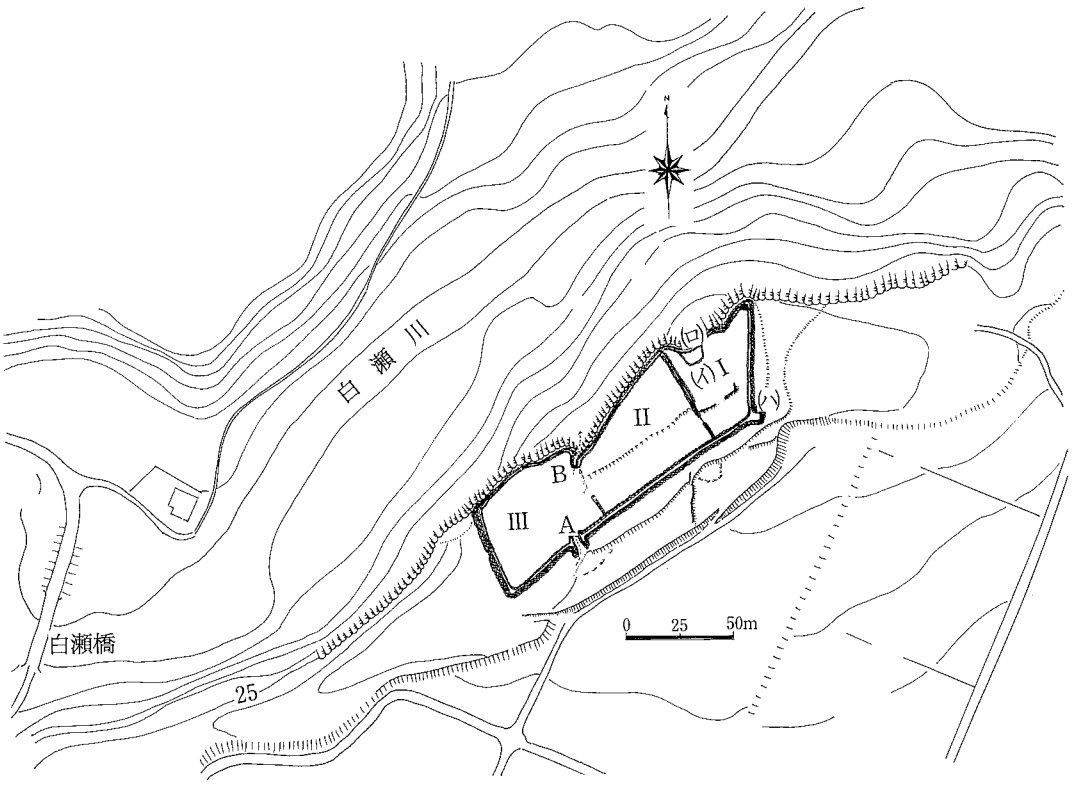
〈□内は城内の御嶽〉

伊敷索城㉓（第４図、図版９～13）

この城は、具志川村字嘉手苅北北西約700m のところにあるグスクである。宇江城岳に源を発し東北東から西南西に流れる白瀬川に沿う石灰岩の微高地に作られている。川に面するところは切り立つ断崖となり、その反対側にあたる東から南側にかけての面は緩やかな傾斜面となって平野部へと続く。断崖の縁辺には低い石積み、緩やかな面は幅が厚くしかも高く積み上げられた石積みになっている。また、内陸部に続く面には、数段の削平地を作り寄せ手が石垣に取りつくのを警戒している。

伝承によると、歴代の伊敷索一族が居城する城だとされている。城の創建者伊敷索按司は、もともと沖縄本島から渡って来た人であったとされ、この地に本城となる城を構え、長男を宇江城城、二男を具志川城、三男は登武那覇城の城主に配し、大勢力を張っていたというが、真偽のほどは定かでない。

廃城のことについては、久米島における他のグスク同様、尚真王の進める中央集権化政策の一環として各按司が滅ぼされるなか、やがて中山王の枠組みに組み込まれていって、ついに廃城になったと言われている。



第４図　伊敷索城縄張図

(縄張りの特徴)

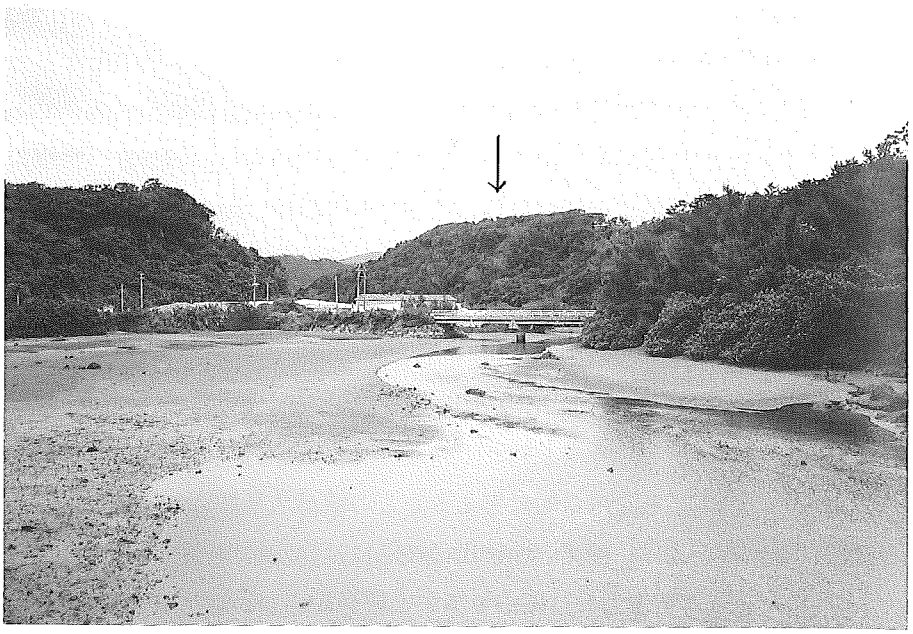
このグスクは、川という自然障害を防御に利用するとともに、最も弱点となる台地続きの面には高い石垣と数段の削平地を付属させることで防御効果を高めたグスクである。久米島のグスクの多くが、比較的高い山の頂上部かもしくは独立丘の切り立つ断崖の上に築かれているのに比べこのグスクの場合には地形的にも平坦地の延長線上に立地している。つまり、グスク立地上防御効果の脆弱な地形に占地しているのである。では、何故そういう場所にあえてグスクをつくらなければならなかったのか、伊敷索城の機能や性格を考える鍵はその辺にあるように思われる。

伊敷索城南壁側の障害となる白瀬川河口部には唐船池(トウシングムイ)と呼ばれる深みがあり、近くには兼城泊という港を控えている。また、城内からは多量の貿易陶磁器が採集されている。以上のことを総合的に考えるとこの城が久米島における海洋貿易の拠点だった可能性はきわめて高い。事実、曲輪IIIの北隅には、白瀬川の川べりから荷上げ可能な場所も取りついている(B)。唐船池に停泊していた貿易船からハシケに移された貿易品は、白瀬川を数百メートルさかのぼりこの(B)から城内に運び込まれたのではなかっただろうか。

伊敷索城は、前述のように白瀬川に沿う形で北東から南西を長軸にして立地している。北東側に位置する曲輪Iは、幅2～3m、高さ1m前後の石積みによって曲輪IIと区画されたほぼ台形状の曲輪である。この曲輪のほぼ中央には基壇状に平坦に造成された(イ)が認められる。この基壇状の遺構は、前面部との比高が約80cmを測り南南西に面している。表面の左右両脇に野面の石積みがわずかに残っている。おそらく平らな面の中央にはこの城で最も重要な基壇建物が建っていたことであろう。曲輪Iの虎口が基壇状遺構(イ)に向かってすぐ左(南側)に開いている。

また、この基壇状遺構の北東側、つまり城の北側城壁に接するところに略方形状の石積み遺構(ロ)が取りついている。現在は中央に香炉が置かれ拝所として信仰されているようである。しかし、しっかりした石組みで櫓台のように造成されているところを見るとはじめから拝所だったか疑問が残る。遺構の上面はほぼ平坦となり人頭大の石灰岩塊を蜜に詰め込んで台状にきちんと造成されていることからすると櫓台であり、その上に望楼が建っていた可能性は十分考えられる。事実、この位置に立てば白瀬川とその河口部が見下ろせるばかりでなく、北に広がる平野部が一望のもとに見通せるようになっている。また、石積みの上には礎石を思わすような板状の粗粒砂岩が数枚確認される。望楼の礎石などに使用されたものではなかっただろうか。

曲輪IIは曲輪Iの南西側に隣接した曲輪である。この曲輪は長軸に沿う形で比高差40～50cm程の段差がついていて二段によって構成されている。さらにその隣には曲輪IIIがある。曲輪IIとIIIとの区切りは明確でないが、よく観察すると北と南の城壁からわずかに仕切り



図版 9　伊敷索城（白瀬川の河口から望む）



図版10　伊敷索城（東に展開する平場と切岸）
※切岸は後世の改変をうけている

石垣の根石らしいものが中央部に向かって伸びていることが確認できる。この曲輪内にどのような建物が建っていたか考古学的な発掘調査が必要であろう。

曲輪IIIの西南西側の石垣は高さ５～６ｍ、幅５ｍを測り伊敷索城の城壁の中で最もしっかりしている。ここの城壁が高いのは、比較的高い峰に接続しているからであり、この高い峰から寄せ手が侵入して来るのを警戒してのことである。南東側に大手の虎口Ａが開いている。虎口の両脇には石垣が崩落したともつかない状態で石灰岩塊がわりと広い範囲に盛られている。石の状況を注意深く観察すると、虎口をガードする形で両脇が高い石垣になっていて、合横矢が効く仕掛けになっていることが理解される。虎口の前方はやや斜めになり前面に広がる削平地につながる。したがって、攻城軍がこの大手道を通って虎口に入って行くには、城壁側に左脇腹を晒すような恰好をとらなければならず、そこにも築城者の防御上の意図がうかがえる。

ところで、前述したようにこの城の最も弱点となる部分は東から南にかけての平野部につづく面であるが、この部分には城壁に沿って幅25～30ｍの削平地を設けてある。削平地の周辺平地との比高差は約３ｍあり、切岸をつくることによって十分城壁となり得る高さになっている。削平地は１ｍ前後の切岸によって数段に分かれていてけして平坦ではない。また、ところどころに根石の跡があることから、削平地部分はかつて複雑な構造をとっていたことが想定される。これらの腰曲輪群を城壁石垣の外側周辺に置いたのは、平坦部(内陸部)の方から押し寄せて来る敵兵が直接石垣に取りつくのを防ぐためであった。つまり、平坦部続きの弱点をカバーするために設けられたのがこれらの削平地だったのである。石塁の高さが３～４ｍもあるので城内から城の外を見ることも守ることもできない。だから攻城軍に対する防戦の場は石塁の上かあるいはこの削平地に限られることになる。そのような意味でこの削平地群は城にとって非常に重要な意味をもつ城域ということになる。

曲輪Ｉ南東隅の城壁には外に張り出した櫓台(ハ)が認められる。この櫓台は、城壁上からの側射をねらったものでもあるが、その他に、両端に伸びた石垣が見通せることから城兵たちへの指揮を取ったり、あるいは東側と南側の削平地の動向をうかがいながら敵兵の動向を監視する場所でもあったのであろう。この位置に櫓台を設置した築城者の意図は平地に続く面への備えを重視していたからであり、ここに城の機能を十分熟知した優れた築城主体者の存在が浮かび上がってくる。この種の城づくりはやはり戦いを経験したものでなければできないことであろうし、城つくりを専門とする集団か、城つくりの経験をつんだ人たちがいて、彼らの指導によってグスク普請が行われていたのではなかったかと筆者は考えている。



図版11　伊敷索城の石塁（Ⅰの曲輪の東側）



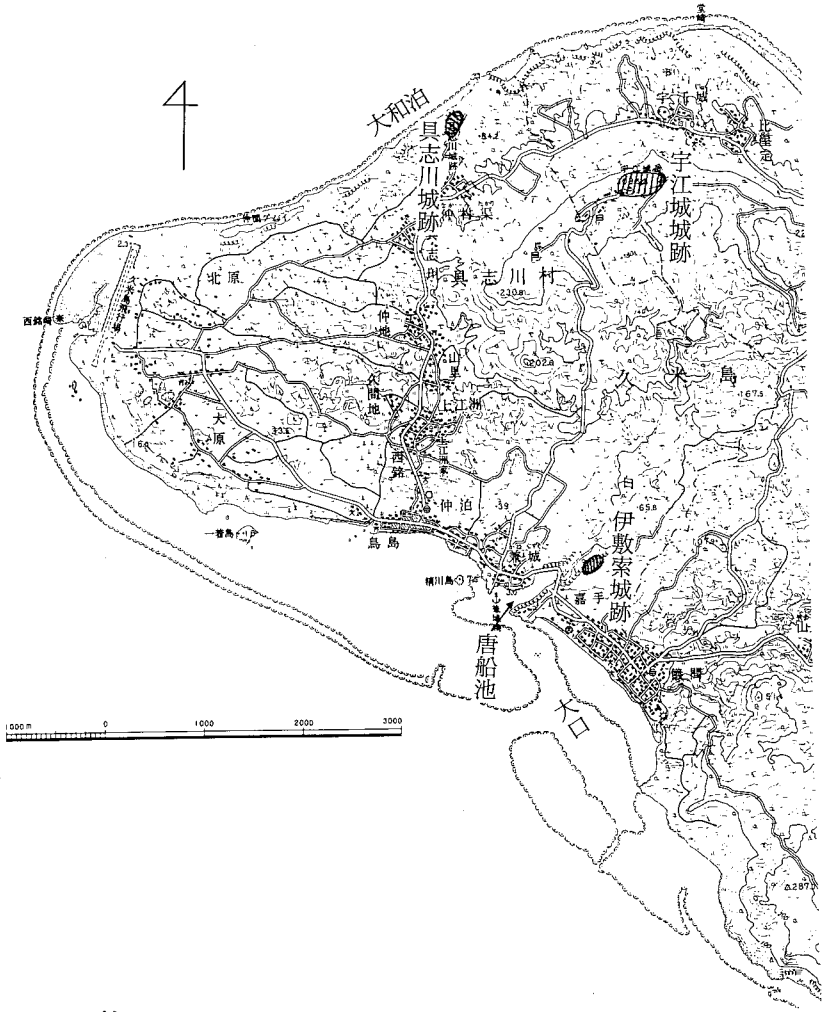
図版12　伊敷索城の大手虎口（城内より）

3．結びにかえて

以上、久米島の国指定史跡具志川城跡と県指定史跡宇江城城跡および伊敷索城跡の縄張りを示しながらその特徴について具体的に検討してきた。次に城のもつ構造的特徴から各城の築城目的を考えてまとめにかえたいと思う。

宇江城城の場合は、具志川城と伊敷索城と立地の上で際立った違いをみせている。すなわち、後二者の城が、海外貿易が有利に展開できる海岸べりに立地しているのに対し宇江城城は、島の内陸部にあってしかも島全域を掌握できる島内随一の高所に立地していることである。このような立地の違いは、城の性格を考える上できわめて重要であり、城が占地する特徴を細かく分析することによってその城の築城目的を明らかにすることができる場合もある（第５図　宇江城城・具志川城・伊敷索城の配置図)。

さて、宇江城城の東側の山麓には城下集落としての城村があった。この古島からは宇江



第５図　宇江城城・具志川城・伊敷索城の配置図

城城を仰ぎみる位置にあり、宇江城城の虎口へと通じる道も伸びている。また、城の北側山裾には堂・仲里・嘉手川の古島も展開している。宇江城城はこれらの各集落とセットになっており、城と村が密着し村を基盤に城が存在しているようである。それればかりでなく城の北側山腹を縫って伸びる城道②は具志川古島を中心とする久米島北西部の各古島にも通じていたようである。さらにまた、久米島の西に点在する古島等にも本中城や富祖古城等を介在して通じている。このように久米島の東西南北に点在する古島群は、この宇江城を中心に強い階級性でもって結ばれているように見える。言い換えれば、同時代の村の遺跡の多くが宇江城城を中心に強い求心性によって成り立っているということである。以上のことから考えると、宇江城は久米島という地域単位の拠点的なグスクであり、主として領民支配のために築かれた城として理解することができる。そのことは、次に述べる城の構造上の特徴からも看守される。

その一つは310mのピークを取り込んで築かれた主郭部をしっかりした石塁によって固め、石塁の要所には外側に張り出した櫓台を設けるなどの工夫がなされていること。次に、主郭部を中心にその周辺の斜面や山腹にも削平地を設けることによって攻城軍の侵入に備えていることである。各曲輪には腰曲輪と付属曲輪を付属することで防御を強化し、各方面からの敵に備えられた構えは久米島における他のグスクの追随を許さない構造になっている。とくに、大手道の守備は完璧で蛇行する道に横矢が効くように各コーナーの随所に削平地を置いている。この城はまさに拠点的な城としての風格をいかんなく発揮していると考えられるのである。



図版13　伊敷索城から出土した貿易陶磁器

その他に、曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの各曲輪から14～15世紀に属する貿易陶磁器が多量に採集されることや比較的厚い包含層が堆積している事実もこの城が拠点的な城であったことを立証している。

その点、具志川城や伊敷索城の場合は、在地の按司がその居城として築城したと考えるよりも、貿易の利権を重要視した集団や按司が自ら行う海外貿易の拠点として築いた城であった可能性は高い。だからこそ城の立地としてはけしていい条件とはいえない不便な地形にもかかわらず敢えて海岸に近い地を選んで城建てをおこなったのである。

具志川城の場合は石灰岩の切り立つ断崖の上に立地し防御性の強い城ではあるが、外洋に面していて海風が吹き荒れる海岸べりであることから領民支配の拠点には不向きな城である。しかし、近くには大和泊や唐泊と称される外洋船が近づくことのできる海岸があり、貿易船が航行する海上を掌握する構えで築かれていることは誰もが理解できることであろう。

伊敷索城は、前述したとおり白瀬川という自然障害を防御に利用している面と同時に、ウフグチ（大口[20]）と呼ばれる堡礁の大きな切れ目から入って来る貿易船を掌握する構えで築城されている。そのことは白瀬川の河口部に貿易船が停泊可能な唐船池（トゥシングムイ）があることからも理解できよう。

以上３つのグスクは、出土する貿易陶磁器の年代観から築城時期が14～15世紀であり、ほぼ同時期のグスクとして捉えることが可能である。このように、グスクの縄張りをとおして構造上特徴を細かく分析することによって、城のもつ性格や機能を明らかにし、当時のグスクネットワークの実体を浮き彫りにすることも不可能ではないのである。

註

① 新城徳祐『沖縄の城跡』　㈱緑と生活社　1982年３月。

② 沖縄県教育委員会『グスク－沖縄本島及び周辺離島－』　1983年３月。

③ 仲村昌尚「久米島のグスクについて」『沖縄久米島（沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究報告書）　沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1982年10月。

④ 拙稿　「グスクの縄張りについて(上)」『博物館紀要』№19　沖縄県立博物館　1993年３月。

⑤ 1974年１月28日に県の史跡として指定された。

⑥ 仲原善秀「久米島の歴史」『沖縄久米島（沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究報告書)』　沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1982年10月。

⑦ 前掲　註⑥

⑧ 仲里村『宇江城城跡公園整備基本構想調査報告書』　仲里村　1994年３月。

⑨　前掲　註③

⑩　前掲　註⑥

⑪　仲里村宇江城の平田ウサさん（明治22年生）の伝承。

⑫　前掲　註⑪

⑬　前掲　註⑥

⑭　鏡山猛「九州に伝来した宋代文物拾遺」『考古論集』　松崎寿和先生退官記念事業会編　1977年３月。

松岡　史「碇石の研究」『松浦党研究』　松浦党研究会　1987年。

⑮　1975年12月10日に国の史跡として指定された。

⑯　『沖縄久米島　資料篇』　沖縄久米島調査委員会編　弘文堂　1983年10月。

⑰　仲村昌尚『久米島の按司物語』　暁書房　1994年８月。

⑱　今帰仁城が滅びるときにも城主攀安知の腹心本部太腹の裏切りがあったという伝承がある。

⑲　グスクから出土する貿易陶磁器の様相は、14世紀の中葉から後半で急増し、15世紀頃でピークとなり15世紀から16世紀で減少する。

⑳　前掲　註⑥

㉑　比嘉景常『久米島紀行』（又吉真三氏がガリ板刷りにしたもの）。

㉒　前掲　註⑯

㉓　1961年６月15日に県の史跡として指定された。

謝辞

本稿を終えるに当たり、久米島調査に協力していただいた「久米島の自然と歴史に親しむ会」の上江洲正源氏、久手堅稔氏、佐久田勇氏、山城勇人氏の皆さんに謝意を表します。

とくに、久手堅稔氏と山城勇人氏には何回となくグスクに同行していただいた。両氏のご助力がなければ短期間に縄張図を描くことはできなかったであろう。ここに記して深謝申しあげます。

久米島の染織資料概観

柳　悦州・與那嶺　一子

はじめに

この報告は平成４年３月、平成５年６月、８月に行った久米島関係染織資料調査(注１)の結果に、若干の考察を加えたものである。

久米島関係染織資料は三つに分けることができる。まず、①久米島で製作された染織資料、②他の地域で製作され久米島に入ってきた染織資料、③久米島の染織に関する文献及び図案等である。(資料編参照)

調査は久米島の旧家に伝わる②の衣裳類の記録収集がほとんどで、①の島外に出た資料については、沖縄県立博物館（以下、県博とする）が収蔵する久米島関係染織資料を追加するだけで、他所まで調査することができなかった。③については、上江洲家文書、吉浜家文書の中に近年の資料ではあるが、『絣り織物設計方法書取帳』や『組合関係資料』などが見られた。ここでは、記録調査した資料と文献を元に、久米島における①と②の資料について報告する。

(1)　古文献からみる久米島の染織

沖縄の染織史において、久米島は大きな意味をもつ地域である。実物資料を通しての考察を行う前に、古い文献から分かる久米島の染織史について確認したい。詳細については、これまでに報告された資料があるので、ここでは概略だけを述べることにする（文献１、２、３、４)。

久米島の上江洲家の家譜（文献５）によると、1619年（尚寧31年）に、越前の宗味普基なる人物が久米島に養蚕の技術を伝えたことと、1632年（尚豊12年）に、友寄景友が久米島に八丈島織を伝えたことが、久米島に関する記述として出てくる。この他に、これ以前に堂之比屋なる人物が中国から養蚕を伝えたとの伝承もある。

さらに、崇禎年間に上江洲家四世智囿の妻が木綿の栽培法を儀間真常から教授され久米島に伝えたことや、1761年（乾隆26年）上江洲家八世の代に桑木の植え付けを奨励したことなどの記述が見られ養蚕及び紬織物が久米島にとっていかに重要なものであったかが理解できる。

(2)　貢布について

久米島において、紬織物の貢布制度がいつごろから敷かれたかは定かではない。

紬の賦課額は耕地の石高から定められ、両間切に分配された。まず、具志川間切では15歳より69歳まで、仲里間切では15歳から70歳までの男女の人口を基に、紬の原料である真綿が賦課され、次に、具志川間切では15歳から40歳まで、仲里間切では15歳から45歳までの女を正女とし、その数を基に、真綿を紡績し、絣を結び、染めて織るまでの賦課額が定められた。

貢布は「御用布」または「御用紬」と呼ばれ、御内原御用紬、大和御用紬の二種類があった。御用布手形が島に到着すると、これを写し取り、在番が両間切の地頭代ならびに御用布当に割りふる。貢布は間切内の各村の正女によって布屋（村屋）にて織られることになるが、正女は染め終わった糸をもらいうけ、織り始めの四、五寸を在番、地頭代、御用布当に検査させてから織った。また、織り終わると絵形＜御絵図＞と引き当て、長さや幅、模様等が検査された（文献７、８）。

大和御用の紬は「琉球紬」として珍重されてきた。1792年に松平斎宣が献上したのが、薩摩を経由して本土に渡った初めだと言われている（文献３）。『紬関係書類』の「御用布染物入目并ニ諸例」（資料６）によると貢布として織られた紬には、江戸茶、黒地、白地、煤竹、黄色、花色、鼠色、赤茶、浅黄、柿色、阿まんだ、黄がら茶などの地色があり、模様には、かすり紬、中かそり、御殿嶋紬、嶋紬、藍雲かそり、紺嶋などがあったことが分かる。

(3) 近代化と産業化

久米島における紬織物は、廃藩置県以後、換金商品として産業化が図られる。

1903年（明治36年）の地祖改正によって旧慣による租税制度が解かれ、1907年（明治40年）に、義務教育を終えた女子のために仲里、具志川両村組合立の女子工業徒弟学校が字儀間に設置される（文献１・３）。地機から高機へ、手結いから絵図へと量産化への技術転換が行われたのはこの時期である（文献３）。明治41年の『織物設計の法』（資料４）は、女子工業徒弟学校で使われたものである。

この頃から、沖縄県内でも養蚕業が盛んになり、大正５年、紬織物の品質向上のため、久米島紬織物同業組合が設立され、紬生産高は大正13年頃に最盛期を迎える。

戦後、昭和45年に久米島紬事業協同組合が設立され、現在に至っているが、養蚕の衰退など、原材料確保や後継者の育成、需要の低下による用途の拡大など、伝統産業を持つ地域が抱える問題点が見られ、解決へ向けての模索が行われている。

１．久米島産織物の資料調査報告

本章では、まず本調査で調査した資料について、各々の概要を示した。次に織物の文様

について特に着目し、久米島織物模様の変容について考察を行った。

(1) 調査資料

本章をまとめるにあたり使用した資料は下記のとおりである。(詳細は資料編参照)

資料１：県博所蔵「御絵図」
資料２：県博所蔵「黄色地経緯総絣裂」
資料３：上江洲家所蔵「久米島紬裂帖」
資料４：上江洲家所蔵『絣リ織物設計方法書取帳』明治41年
資料５：県博所蔵『紬見本帳』大正13年
資料６：吉濱家所蔵『紬関係書類』

(2) 調査資料の概要

資料１の『御絵図』は、琉球王朝時代後期に首里王府で作成されたものである。御絵図は王族及び上流士族用あるいは本土用着物の発注書に添付された絵図で、久米島及び宮古・八重山諸島に向けて発注されたものである。御絵図は、仕上がりを指示するために原寸大で和紙に彩色されていた(写真１、文献８)。

資料２は、県博所蔵の『黄色地経緯総絣裂』であり、資料１の御絵図による指示に基づいて久米島で織られたものである（写真２)。

資料３は、上江洲家所蔵の久米島紬裂帖の一部である。製作年代について明確な資料は存在しないが、劣化の程度・模様等から琉球王朝後期から明治時代前期に織られた布地であろうと推定される(写真３)。

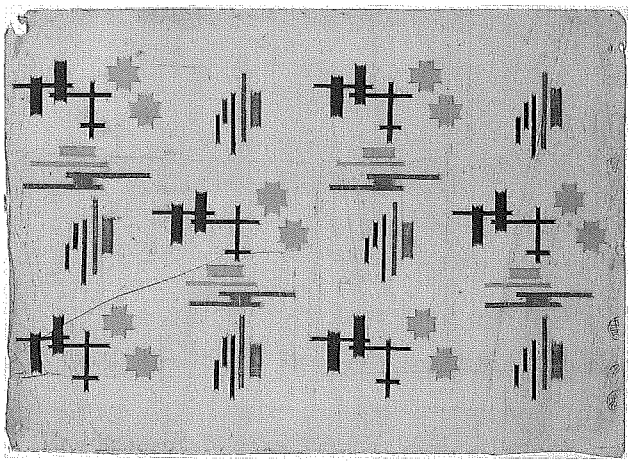


写真１　御絵図

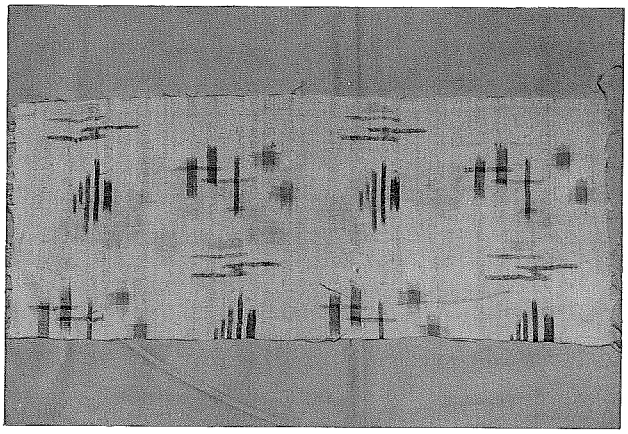


写真２　黄色地経緯総絣裂

資料４は、「明治41年５月　絣り織物設計方法書取帳　女子工業徒弟学校研究生　某」と表紙に記されている。この資料では、絣織物について以下に記すような詳細な解説が加えられており、当時の女子工業徒弟学校の教育内容を窺い知ることができるものである。写真４には、資料４の中で織物意匠図として記されている部分を示した。『絣り織物設計方法書取帳』は概説部分と絣織物設計部分に大別されている。

概説部分は以下に示すように、織物に必要な基礎知識を解説している。

①経糸一算（よみ）は筬目では40羽（経糸本数80本）であると定義され、綜絖製作の際の算の数と総羽数の関係について解説されている。

②現在でも木綿英国番手として使用されている木綿糸番手と一綛の重量の関係について解説。

③整経長及び羽数と経糸使用量の関係

④緯糸打ち込みと緯糸必要量

⑤久米島真綿紬糸の太さ（匁付）の定義

⑥紬糸の綛長さと整経長に対する必要綛数の関係

絣織物設計部分では、各々のデザインに対して詳細に解説されている。

①経絣模様単位本数の解説

②模様名称と用途の解説

③経糸の整経長と本数

④緯糸絣部分の整経長と本数

⑤緯絵絣作成行程。絵図台に記糸（種糸）を必要長さかけ、意匠紙をもとに記糸に記しを付けた後、その糸を巻きとる。すでに整経してある緯糸絣部分と記糸を合わせて絣くくりを行うといった行程が記されている。

⑥経糸必要綛数

⑦緯糸必要綛数

資料５は、『大正13年10月　紬見本帳　久米島紬織物同業組合』と表紙に記されている。63点の久米島紬裂が貼り込まれており、各々に番号と製作者の住所氏名が記されているものである。

資料６は、種々の織物関係書類を綴ったものである。主なものは、「球陽抜粋」として久米島紬の起源等を記した写本、大正年間の久米島紬織物同業組合の諸書類、久米島の染色方法等である。久米島の染色については、染色例として13種の染色法についての概略説明が記されている。さらに、煤竹色、茶色、黒、黄色、香色アマンダ染、赤色、藍色の７色については詳細な解説が記されている。この染色例については文献９に詳しく述べられているので参照されたい。

(3) 考察

資料１～５について、近代久米島織物模様の変容について考察する。

写真１、２には、琉球王朝時代に御絵図の指示によって久米島で織られ、首里王府に収められた布についての特徴が表されている。御絵図に描かれている模様は、６割程度が経緯絣である。単純な絣単位の組み合わせで構成された経緯絣が多く描かれており、複数の絣単位を組み合わせたような複雑な絣模様は少ない(文献10)。写真２に見られるように久米島に要求された織物は、素材が練絹で色地のものが多かったことが県博所蔵資料などから推定できる。御絵図が描かれた期間は、ほぼ1789から1844年であると言われている（文献８)。資料１、２などは、久米島にはほとんど現存しない。貢布としてきびしい管理のもとに織られたものであることを考えれば当然であろう。

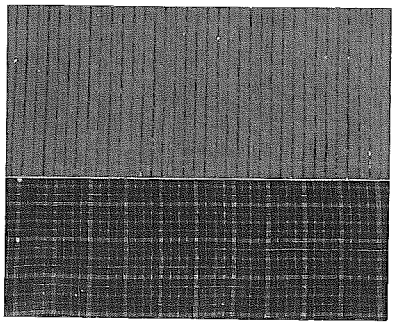


写真３　久米島絣裂帖

写真３は真綿紬を素材に、格子模様と単純な緯絣によって構成された着物の裂地である。染色は久米島織物の特徴である泥染めによる茶色や灰色等が使われている。写真３と同様に資料３の他の裂地も、渋い色合いの格子柄や細縞を基本に、半数あまりには矩形の単純な絣が構成されているだけである。資料３は上江洲家伝来のものであり、この紬織物が織られた当時に上江洲家（久米島地頭代）で実際に着用されていたものであることが推測できる。

明治36年に貢布制度が廃止され、久米島での織物生産は一時下火になるが、女子工業徒弟学校が明治40年に設立される頃から、織物生産は活気づいていく。資料４は明治41年５月の日付があることから、同校創設２年目の教育内容ということになる。資料は概説部分と織物設計部分から成っている。

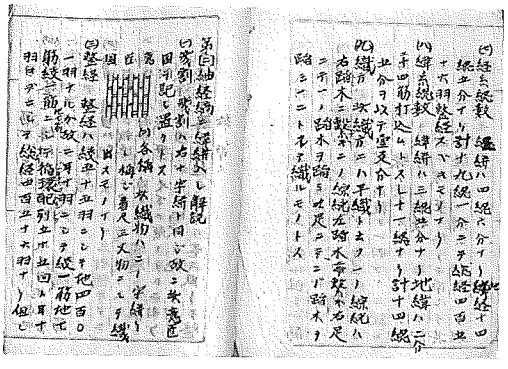


写真４　『絣り織物設計方法書取帳』

前半の概説部分では、伝統的な経糸本数の単位である算（よみ）に関する記述をはじめ、織物製作に必要な諸知識が実例を多く取り入れながら説明されている。後半部分では、写真４に示されるような小柄の緯絣あるいは経緯絣での織物設計について解説がなされてい

る。資料には実際に使われたであろう意匠紙が含まれており、実質的な教育がなされていたことが分かる。写真４に示したように資料４では、十字絣のような単純な絣を基本に模様が構成されており、石垣島喜舎場家の『御用布繪形之見本』に見られる絣柄（文献11）と共通するものも見出すことができる。即ち、貢布としての義務から解放された年代ではあるが、貢布の影響を強く残しているものであることが分かる。

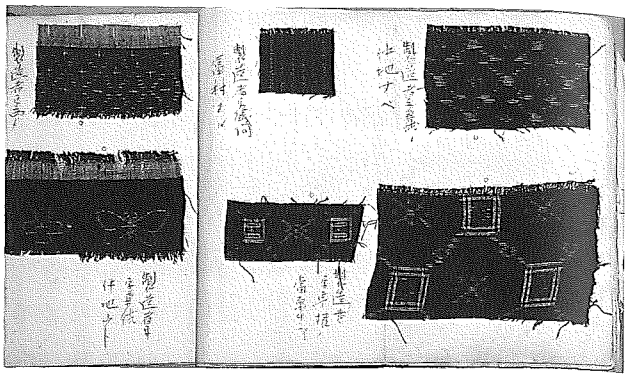


写真５　『絣見本帖』

資料６によれば、大正５年から12年にかけて久米島紬の生産高は飛躍的に増大している。大正５年の生産反数は9,130反であったが、年々増大し大正12年には約4.6倍の4,212反に達しており、久米島紬生産の最も盛んな時期であった。写真５は資料５に示した大正13年の久米島紬見本帳の一部である。63点の裂地のうち56点のものは写真５に示したような絵絣による経緯絣である。資料４に含まれるている単純な絣模様（写真４）は６点、写真３に近似した柄は皆無であり、黄色と藍地の太い格子柄が１点だけであった。染色は前述の太い格子以外はすべてテカチとグールによる泥染めの焦茶地であった。資料５に見られる絣柄の構成は、資料４の絣模様と比較するとかなり異なっており、現代織られている久米島紬織物の模様構成により近い。即ち、亀甲文様や井桁模様等の連続絣文様が大半を占めている。

資料１から５は久米島の織物について、時代別にその模様の変容を端的に表しているといえる。資料１、２、３は琉球王朝文化を反映するものである。そのうち資料１、２は王朝文化を直接伝えるものである。資料３は同時代における久米島地頭の衣裳を伝えるものであり、沖縄文化の特徴を表したものといえる。資料４では、租税としての貢布から解放されて、換金商品としての久米島紬の発生期のものである。資料５は、第一次世界大戦後の好景気に伴った久米島紬の絶頂期のもであが、その後は衰退し第二次世界大戦を経て現在に至っている。資料４、５の時代には沖縄には寄留商人も多く存在し販路を本土にも求めていたことから、絣模様は沖縄独特のものというよりは消費地である本土の嗜好の影響をも受けたものとなっていることが考えられる。

今回の調査資料では、久米島紬として漠然と考えられている久米島の織物には、３つの時代、４つの模様形態があり、それぞれに独特の特徴があることを明らかにした。今回調査し得なかった久米島織物資料は多い。さらに調査を進め、様々な状況の中で久米島の人々

の衣装文化や織物文化がどのように変化してきたのかを検討する必要がある。

3．神衣裳調査の報告

古琉球における神女（ノロ）の制度は、尚真王代（1477年～1526年）に組織化され、久米島の君南風は、最高位の神女である聞得大君の配下の三人のあむしられの内、真壁大あむしられに属した三十三君の一人で、久米島の各部落の神女を統括する。

現在久米島には君南風はじめ数人の神女がおり、今でも五月の初穂祭(シツマ)、六月の稲大祭（ウマチー）には、御拝所（根所）での祈禱と神遊びが行われ、その際には古い衣裳が着用される(文献１)。今回、六月ウマチーの際に、７人の神女が着用または、保管していた衣裳の実測調査を行うことができた。

(1) 調査箇所及び調査資料

①山里家(君南風／字山里)：上衣３領／裙３領
②仲村家(字上江洲)　　：上衣３領
③安里家(字山里)　　：上衣２領／胴衣３領／裙１領／神サージ１枚／風呂敷１枚／袋１枚
④屋慶名家(字宇江城)　：上衣２領／胴衣１領／帯１本
⑤平田家(字真謝)　　：上衣２領／胴衣３領／裙２領／神サージ３枚
⑥栄野元家(字宇根)　　：上衣３領／胴衣４領／裙１領／神サージ２枚
⑦長浜家(字儀間)　　：上衣３領／胴衣１領／裙１領／神サージ１枚／風呂敷１枚

(2) 資料の概要

これらの神女に関連する資料のほとんどは、神女が島外に住まいを移した場合でも、神女を継承した家に保管されており、５月と６月の祭祀以外には櫃から外に出されることはない。櫃に保管されている染織資料には、神衣裳とそれを包んでいたと思われる風呂敷、頭に巻く神サージがあった。これらの資料は、長い年月を経過していることなどもあり、布が弱っている上に虫喰いなどが加わり風化しつつある状態であった。中には調査不可能な資料も数点みられた。

衣裳には、胴衣（ドゥジン)、裙（カカム)、上衣（ジョウイ）の３種類あるが、君南風や仲村家には胴衣が残されていない。ウマチーの際に君南風と真謝のイガミの着装時に立ち会ったが､和装あるいは洋装の上から裙を巻き上衣を纏っており､胴衣は着用されなかった。このことから、胴衣の着装が近年において省略されたのではないかと思われる。裙は６枚から19枚の布を剝いで仕立てられており、長いものは裾周りが1,203cmに及んでいた。

上衣・胴衣はそれぞれ単衣の琉縫いであった。

上衣の素材は、中国産の地紋の入った綸子や絽織布、生絹（未精錬の布）または真綿紬の平織布、苧麻の平織布等で、そのほとんどが白、茶、水色、紺などであった。更紗布を仕立てた上衣（仲村家蔵）と刺繍布を胸と肩に縫いつけた上衣（屋慶名家蔵）以外、ほとんど加飾されておらず無文か紬の格子縞であった。

裙には紺地木綿、白地苧麻、芭蕉、緯錦が素材として用いられ、絣や格子あるいは染めの加飾は見当たらなかった。

また、風呂敷は藍のみによる型染で、戦前ではあるが近年に沖縄本島で染めたられたものと思われる。

神サージには白地木綿、紬の格子縞が確認されたが、今回の調査以前に外国産と思われるの絹の緯浮織も確認されている。(文献12)

このように、神女の衣裳は王府からの拝領品であるためか、中国産の素材が多く、久米島の代表産物である真綿紬による絣の衣裳が全く見られなかった。また、苧麻、芭蕉、生絹の衣裳は久米島産の染織か沖縄本島産かどうかは今の所判断が難しい。

4．久米島外からの染織実物資料の報告

久米島の外から渡ってきた染織資料には、次の(1)沖縄本島産の染織資料、(2)中国産の染織資料(3)その他の地域の3種類が考えられる。

これらの資料が久米島に渡った経緯には、王府からの拝領品か、直接購入かの2例が考えられる。久米島は常に中国へ向けての航路の面で重要な役割を担っていることなどや、前述の堂之比屋の伝承もあることから、直接購入された可能性も大きいのではないか。

島の他から渡ってきた資料が、島の紬織物にどのように影響したか、また、沖縄の染織にどのように関わったか、その点を解明するのは、今の段階では調査の不足もあり言及できないが、どのような資料が確認されたか報告したい。

(1) 沖縄本島産の資料概要

神女の衣裳を包む藍型の風呂敷が2枚確認されたが、いずれも戦前のものではあるが近年の染めである。安里家蔵の風呂敷は明治44年に仕立てたとの箱書があった。

今回は調査できなかったが、喜久村家には乾隆22年（1757年）の銘入紅型幕があり、文献12によると、この幕は王府よりの拝領の品で、筒描きによる波と型紙を使った鶴が染められており、現存する紅型の資料として最も古い資料である。

また、時代は特定できないが、上江洲家所蔵資料には型紙による紅型の衣裳が見られる。

王朝時代から明治期にかけて紅型を染める紺屋が首里・那覇を中心として存在していた

ことから、これらの資料が久米島で染められたとは考え難く、沖縄本島で染められて久米島に渡った資料と判断した。また、型紙があることから久米島旧家では直接紺屋に注文していたことがわかる。

(2) 中国産の資料概要

久米島の仲里間切の地頭代を務めた喜久村家、具志川間切の地頭代上江洲家、具志川間切仲地村の濱川家には、中国産の龍文の緯錦帯あるいは繻子地に牡丹唐草文の帯が残されている。喜久村家の帯3本は6代絜聡の時に使用したものと言われ(文献13)、濱川家の帯は尚敬王代に拝領したとの由来があり、上江洲家所蔵の帯もそれに近い年代に使用されたものと思われる。

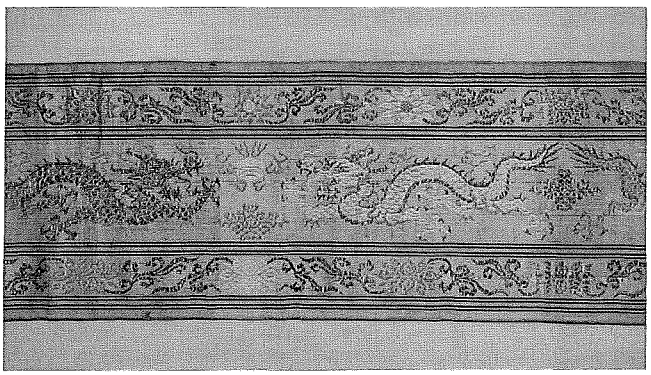


写真6　帯

神衣裳には紋綸子、紗綾、緯錦などの素材が見られる。神女は曲玉と櫃を王府から拝領することから、これらの衣裳も同様だと考えられる。屋慶名家蔵の資料に綾地上衣の胸と肩の部分に刺繍の補子が縫いつけられた衣裳があり、補子の文様や形には違いが見られるが、王家の女性の大礼服「アシヤゲコムネ」(文献15)と類似しており、興味深いものがある。神サージの一部や上江洲家資料の中に緯浮織による布があり、中国南部やタイ・ラオス北部に見られる浮織布に類似する点が見られる。

(3) その他

喜久村家所蔵の6代絜聡が使用したと言われる陣羽織は、金糸による綴れで模様が織り出されており、金糸を使った染織資料は沖縄ではほとんど見られず、陣羽織の形態が日本本土の形に近いことから、日本本土産の資料ではないかと思われる。

県博には久米島からのものとされる型染裂が2点所蔵されている。その1点は伊敷策按司家衣裳裂との伝承があり、その由来から尚圓王代(1470年～1476年)の裂であると言われ、沖縄で染められた初期の紅型説(文献15)と日本本土の型染説(文献17)がある。もう1点は神女衣裳との伝承がある。この資料は型紙を使った間接転写の染なのか、木版による直接転写のものなのかよく分からない。両型染資料は、いづれの場合にしても紅型と深く関わるものとして面白い資料である。

製作年代は明らかではないが、更紗布による神衣裳も確認された。

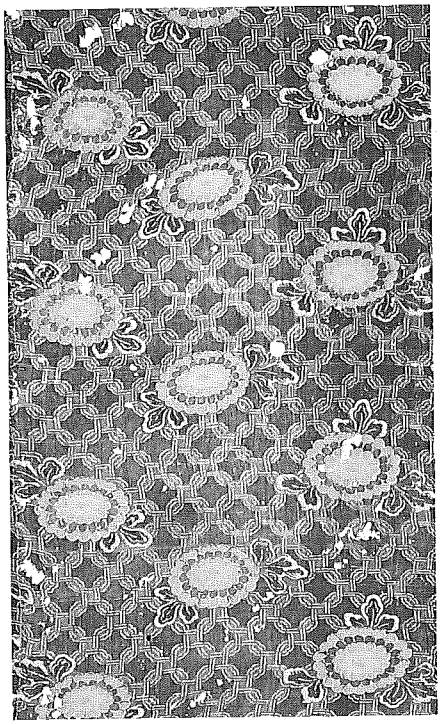


写真７　型染裂

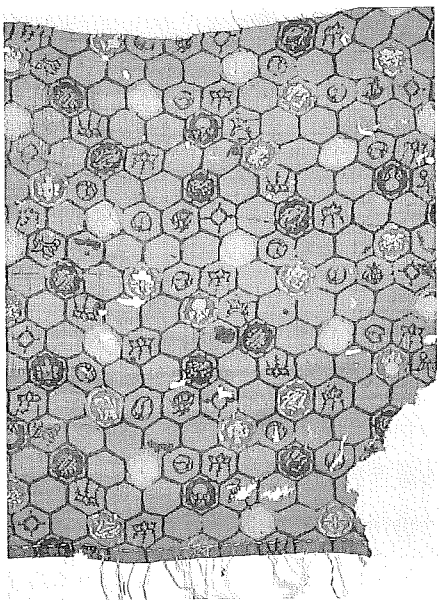


写真８　型染裂

５．まとめ

今回の実地調査では久米島の織物として、琉球王朝時代から第２次世界大戦以前までの神衣裳としての織物、貢納布、換金織物としての久米島紬および織物関係資料を調査した。

神衣裳では、中国から渡来した織物をはじめ、久米島産の織物では苧麻、芭蕉、練絹、真綿紬と様々な素材を利用している。染色された織物は少ないことが特徴であった。

これらの衣裳がどのような場所でどのように着装されるかについては、既に着用されず、それを明確にできない資料もあり、今後の調査課題である。

久米島における近代織物については、時代背景と共に久米島紬と称される織物は変容してきていることを資料から説明した。

（注１）

平成５年３月	染織資料所在基礎調査　於：久米島（與那嶺）
平成５年10月	上江洲家染織資料調査　於：県立博物館（柳、片岡、與那嶺）
平成６年６月	喜久村家、山里家、濱川家調査　於：久米島（柳、津波古、與那嶺）
平成６年８月	六月ウマチーにおける神衣裳調査（県文化課と共同）　於：久米島（柳、津波古、與那嶺、祝嶺、藤村、宮城）
平成６年９月	久米島関係資料調査　於：県立博物館（柳、與那嶺）

（文献１）『久米島具志川村史』具志川村役場　1976，4月31日

（文献２）『仲里村史』仲里村役場　1975，3月31日

(文献３）仲原善秀「久米島紬について」『染織と生活№４』染織と生活社　1974，２月
(文献４）田中俊雄・田中玲子「沖縄織物の研究」紫紅社,1976，P 82-85
(文献５）「七　美済姓家譜」『沖縄久米島資料篇』弘文堂,昭和58年，P 323
(文献６）「久米具志川間切公事帳」『沖縄県資料』沖縄県,1991，P 402-406，P 412
(文献７）「沖縄県旧慣租税制度」『沖縄県史第21巻　資料編』琉球政府,1968，P 259-261（文献８）田中俊雄「沖縄の御絵図帳」『民芸』日本民芸館,1983,1月号，P 4-6.
(文献９）田中俊雄・田中玲子「沖縄織物の研究」紫紅社,1976，P 108-112.
(文献10）柳　悦州「沖縄の織物の特徴―御絵図と日本民芸館所蔵沖縄織物との比較―」『沖縄県立芸術大学紀要』1994,第2号，P 123-124.
(文献11）柳　悦州「『御用布繪形之見本』と『御絵図』における絣の分類と比較」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』1993,第6号，P 26-27.
(文献12）渡口文子・植木ちか子「久米島の神女君南風とその衣裳について」『沖縄民俗研究　第３号』沖縄民俗研究会1981，３月
(文献13）渡名喜明「久米島喜久村家所蔵の紅型幕」『沖縄県立博物館紀要　第６号』沖縄県立博物館1980，P 1-12
(文献14）辻合・橋本・渡口・田坂「琉球の服装について」『帝国学園紀要６号』1980，
(文献15）鎌倉芳太郎『琉球文化の遺宝』岩波書店,1982，P 346
(文献16）鎌倉芳太郎「古琉球型紙の研究」『古琉球型紙』京都書院,1964，P 12
(文献17）岡村吉右衛門「紅型の書（その２）」『衣生活１月号』衣生活研究会，1963，P 30

上江洲家の書軸

池宮　正治

筆者は過去に上江洲家所蔵の書軸の一部を調査したことがある。故当間恵喜氏が修復を終えて県博物館の一室で最終の点検をしている時で、その際ついでに調査させてもらった。その結果は、昭和57（1982）年度の沖縄県教育委員会の文化財調査報告書第44集「扁額・聯等遺品調査報告書」に翻字して紹介したので、重複を避ける意味で、書軸の文面の紹介等は上の報告書を参考にしていただくことにして、ここでは繰り返さない。

その際その報告書で、筆者はその印象を「上江洲家の書軸は、詩人や歌人の書幅が一幅ずつとは言え、人数が多くしかもここにしかない唯一の自筆資料という点で、(中略)戦災を蒙った沖縄の現状からすれば、まさにミニ冷泉家と言ってよい」と述べたことがある。何も直ちに藤原定家の流れを引く冷泉家に匹敵する内容とは思ってはいない。質と量からみて、到底冷泉家のそれと太刀打ちできるものではないことは明らかである。だが、どうしてもこの比喩を使いたかったのは、やはり沖縄の詩人歌人の直筆の多さである。例えば宜湾朝保が編集した『沖縄集』には、いわゆる沖縄三十六歌仙と、『沖縄集二編』の109人の著名な歌人がいても、その自筆の歌資料となると、その中心人物である宜湾朝保以外はそれほど多く伝わっていない。というより多くの歌人はまったくと言っていいほどその自筆の資料を伝えていないのである。従って、これを、まるでタイムカプセルのように伝えているという意味で、規模ははなはだおぼつかないとは思いつつも、冷泉家を連想して賛嘆した次第である。

上江洲家の書軸は、大体四つに分けられるかと思われる。一は、同治８（1869）年に仲里間切総地頭で、後の三司官富川盛奎が久米島へ渡海したさい、当時上江洲親雲上が茶園を開きお茶の製造に成功したとして、これを首里那覇の貴紳に進上して詩歌を請うたことによる。『美済姓家譜』によると、茶園の経営そのものは、乾隆年間の初頭から行われているが、お茶の製造に成功したのは同治３年のことで、これを久米島の総地頭に献上したところ、首里城に転達されて、王府から産業として広めるようにという書付と国分たばこが上江洲親雲上に下賜されている。この度の茶はこれを受けたもので、盛奎はさっそくこれを歌の師匠である三司官宜湾朝保に告げ、その周旋で多くの詩歌を得たのである。

今回調査したものでこれに関するものは、①鄭元偉の七言絶句、②魏掌政の七言絶句二編と文、③蔡徳昌詩文、④蔡呈禎詩文、⑤蔡大鼎詩文（二軸）、⑥氏名不詳の詩文（ただし序のみあって七律三編を欠いている）、和歌では、⑦上里盛恕の和歌三首ならびに前詞、⑧護得久朝置の和歌二首、⑨豊村朝勅の和歌二首、⑩普天間助蔵の和歌三首ならびに詞書、

⑪宜野湾朝宏の和歌二首、⑫大宜味朝直の和歌一首、⑬宜湾朝保和歌一首、である。また『美済姓家譜』にはこの顚末が詳しく書かれており、詩歌を寄せた人の名が次のように出ている。

朝置護得久按司
朝保宜野湾親方
助蔵普天間親雲上
盛升村山里之子親雲上
盛恕上里親雲上
朝宏宜野湾里之子親雲上
憲詮仲尾次筑登之
東国興津波古親方
蔡徳昌湖城里之子親雲上
蔡大鼎伊計親雲上
蔡呈禎翁長里之子親雲上
魏掌政親雲上
盛奎富川親方

ここの仲尾次憲詮のものは見当たらないが、『沖縄集二編』に九首歌が取られている歌人であって、それ故⑥の無名氏はこの人ではなさそうである。また村山盛升の作品(『沖縄集二編』に十五首)もおそらく和歌と思われるが、残念ながら現存していない。それに、ここにはないが、上江洲家には、⑭鄭元偉の年代不詳の七絶もあって、この詩句に「新茗」とあることから、この際のもののように推し量られる。それに⑮向篤忠川平(後に伊江)朝重の漢詩も、若干の疑問はあるが、「茗葉」等の例からこの時のものと推測されるし、⑯僧と思われる良台の「万の事、さはらず拘らず、煩なき身と承り云々」の、禅問答のような和文も、文中に「よき茶などのみ」とあり、これにつながると思われる。

久米島は、中国との航海のさいに、往復ともに風持ちをするところである。家譜や評定所書文書や冊封使録にもそのことは見えるが、冊封使の航海のさいにも参考にした程順則の『指南広義』にもそのことが見える。久米島はしたがって、古来対中国航海の要衝であった。乗組員はしばしば上陸して、土地の名家であった上江洲家を訪ね、交流を深めている。1800年に来琉した冊封使①李鼎元の五絶、同じく②李鼎元書「仙霞嶺旧作」七絶、その従客の③禅僧寄塵の五字連句(二軸で連句)が残っている。他に、福州で有名な④謝曦の七絶、⑤閩中の林斉詔の五字対句、⑥同じく林斉詔の五字対句、⑦林士博の七字連句(二軸)、⑦福州の蔣錫年の七字連句、⑧同じく蔣錫年の七字連句、⑨鶴年書26字などがある。多くは冊封使が渡来したときに入手したものであろう。冊封使が来琉すると、全琉の上下がつ

てをたどってこぞってその書を求めたので、その際に上江洲家に残ったともとれる。あるいはまた久米島に上陸して求めに応じたのかもしれないが、その場合の序や前書、年月日がないので、これを確実に裏付けるものはない。⑨の鶴年は、冊封使一行が福州から出発して、琉球に到着、冊封の諸行事を済ませて帰国するまでを、20景にまとめた、あの美しい見事な『奉使琉球図』の作者朱鶴年であろう。1994年の10月、筆者が曲阜に行ったさい、当地のホテルで行われた古典の書画の売り立ての際に示された「中国書画名人精品拍売会作者小伝」には、

朱鶴年は1760年に生まれ、1834年没す。江蘇省泰州の人で、字は野雲、幼いころから書画が巧みで、9才で寺の僧のために小さな山水画を書いた。これを見た州の長官は、まさに画家として名を残す人であると賛嘆した。しかし壮年になっても親を養えないほど貧困だったので、銭8百を腰に巻いて徒歩で北上、北京を目指した。途中絵を売りながら食いつないで都へ入り、以後懸命に勉強して山水で知られるようになった。朱鼎之、朱本時とともに三朱と称せられる（筆者翻案）。

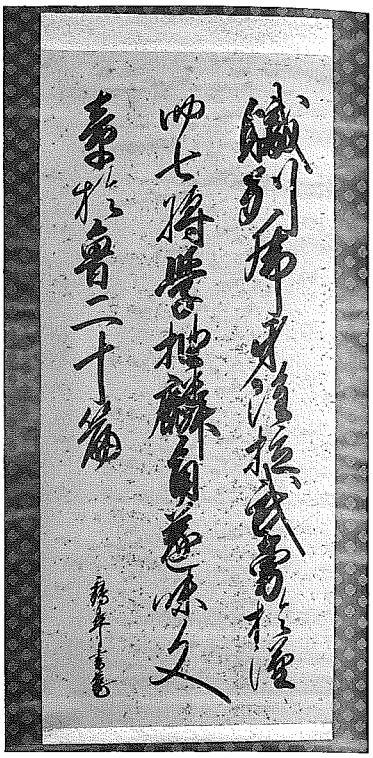
とあった。あの、冊封使の琉球往来を詳細に描いて資料的な価値も高い『奉使琉球図』は、じつは何時の冊封使のものか分かっていない。上の「小伝」にも琉球渡来の件はないが、もし上の朱鶴年と同一人とすれば、1800年李鼎元来琉の時ではないかと思われる。京にはいってまもなく、いまだ無名の時に、冊封使一行に誘われるままに来琉してあの傑作を生んだのではないか。「鶴年書筆」とだけ署名して、関傍印も落款もないのは、こうした場合の画家に良く見られるもので、『奉使琉球図』の時代を確定する有力な証拠の一つとなりそうである。

三つめには琉球の使者の往来による接触で、①唐栄つまり久米村の梁維陞(1788～1837)は、中国へ使いする途次、道光16（1836）年9月15日から27日まで滞在したことがある。②駱紹業は中国より帰国する時に立ち寄っている。「庚子仲冬」とはあるがいつの頃か特定できない。1780年が古いということであれば、1840（道光20）年ごろか。また上江洲家には、窮民救済の善行を表彰して、尚敬王が乾隆14（1749）年「世済其美」の扁額を下賜している(現存)。そのために上江洲家をとぶらう者は、その扁額に敬意を表して筆を揮わざるを得ない。③王丕烈国場親方は道光28（1848）年漢文の讃を、④阮宣詔神村親方は咸豊2（1852）年に、⑤林世爵松本親雲上は同治7（1868）年に、それぞれ漢文の讃を寄せている。また⑥富島朝直は同治10年歌文による讃を寄せている。

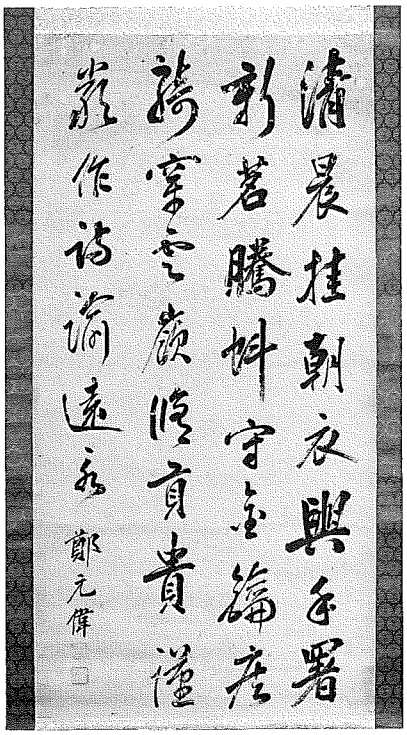
四つめをその他とした。こうした家に良く見られるものに教訓・家訓がある。①三司官伊江朝睦が嘉慶8（1803）年に書いた「日新様（島津忠良）伊呂波歌」があり、②筆者と筆写年代がともに不明の「一門和睦伝」もこの類である。また③「古語に、成立のかたきを天に昇るがごとしといへり云々」の一幅もこれである。④民話の渡嘉敷ペークーのモデ

ルといわれる葉縄烈渡嘉敷兼副（1750～1844）のかぞえ91歳のときに書いたという「松竹梅」の書幅もある。「松竹梅」の各大字の下にそれぞれ「有歓声」「不改色」「遂年盛」とあり、その下にそれぞれ和歌が書かれているが、劣化して所々判読できないところがある。⑤⑥護得久朝常の和歌書軸（二軸）はともに上江洲家の繁栄を祝福したもので、これはとりあえずここに分類しておく。

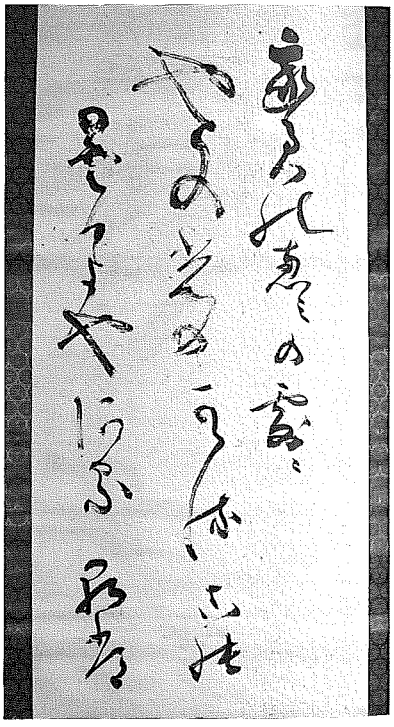
上江洲家の書軸はほぼ以上のとおりで、これでほぼ全体像を摑むことが出来るであろう。しかし上江洲家所蔵の資料には、いまだ表装していない、保存の劣悪なものも相当に残されている。今後はこれらの裏打ち表装も急がれよう。



朱鶴年書

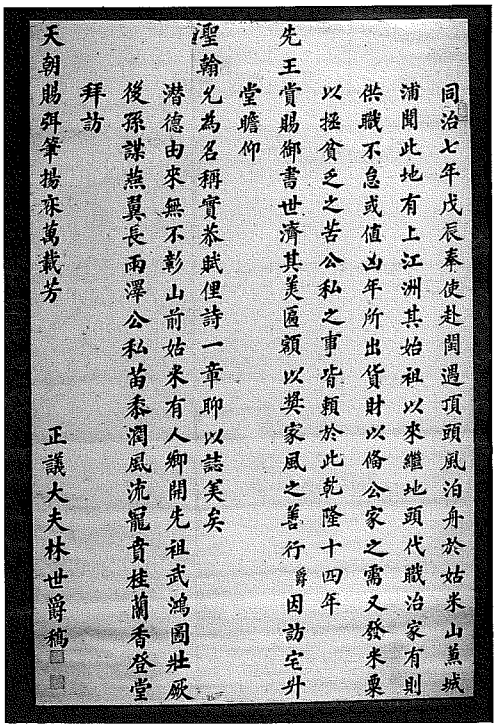


鄭元偉書



我君の恵みの露にかゝるこの
やどの光の曇るよやある朝常

護得久朝常和歌書



林世爵（松本親雲上）書

久米島の絵画と漆器

津波古　聡

はじめに

久米島は、周囲約53km、人口１万弱のそれほど大きくない島に王府時代の遺産である書画や漆器、陶器などの美術工芸品（以下、資料と記す）が残されている。これら資料は、主に1756年に尚穆王冊封のため琉球に向かった全魁・周煌一行の御冠船が久米島沖にて遭難し、これを救助した功績により下賜されたものである。現在でもかつて地頭職にあった旧家などに保管されている。

同島に現存する資料は、地頭代の役職であった家やノロ関係の家に保管されており、資料を分類すると古文書・染織・漆器・陶器・書画類に分けられる。その他工芸の特産としては唯一紬があり、久米島紬として知られている。また壺屋焼やその他中国辺りの焼物なども島内で見られるが、ここでは主に絵画と漆器について報告したい。

今回の調査は資料の確認とその調書作成を主におこなった。資料は、各機関がおこなった調査報告書を参照し、あらたに確認できた資料について時間のゆるす限り調書をとった。

調査地は、具志川村と仲里村の代表的な旧家を中心とした。なかでも屋慶名家、栄野本家、平田家などのようにノロ関係資料を収蔵しているところは、資料の性格からウマチー（稲穂儀礼）の時以外、公開しない習わしがあるため期間が限定されたものもある。このためノロ関係の衣裳及び漆器については、時期的に「ウマチー」の終了後翌日までという制限があったため県文化課が実施している平成６年度県内所在染織品調査と平行して行った。

１．絵　画

久米島の絵画は、上江洲家と喜久村家に集中してあり、すでに法政大学や県文化課の絵画遺品調査で報告されている。また、濱川家にある人物像（僧侶）についても法政大学において調査済みである。そこで上江洲家と喜久村家の絵画の概要とその他比嘉景常著『久米島紀行』に登場した殷元良の作品を報告してみたい。

(1)　上江洲家の絵画

上江洲家の絵画は平成４年２月にその大方の資料が県立博物館に寄託されている。これら絵画資料には伝自了筆「寿老人」や華国などの他に異国船、進貢船を描いたもの、年画と呼ばれる中国風の絵画が所蔵されている。年画は関帝王や寿老人または神話故事などを

題材としためでたい図柄や図柄を文字の形にそって表現されたものである。中国・台湾などでは正月（春節）その他の行事などの飾りつけてとして用いられた。この手の資料は、八重山の久場島清喜が写した下絵（八重山博物館蔵）にも見え、比較的多く琉球に入ったことが伺える。極彩色の大衆のための絵で、筆致は優れているとは言えないものの絵画の用途及び行祭事との関連について研究するためには重要なものである。久米島でどのように使用したかは不明だがおそらく中国や台湾と同様に行祭事等に用いたと思われる。

異国船の絵は余り見かけない題材で、画面の上部に馬艦船が見えることから港は那覇港であろう。那覇港に停泊している外国船からはボートが降ろされ、望遠鏡をのぞくもの、そこら辺を探索する人物が見える。異国船は蒸気船で、黄赤青の三色旗をなびかせた黒船である。琉球王国の終わり頃外国船が盛んに琉球を訪れており、『球陽』などにも数多く記録されている。このような外国船は、屏風等にも見えるが、本資料は船の様子など比較的くわしく描かれている。

⑵　喜久村家の絵画

1756年、尚穆王冊封のため琉球に向かった全魁・周煌一行の御冠船が久米島仲里の真謝沖合いで台風と遭遇し、座礁するが久米島の住民が冊封使一行を救助。さらに詔勅なども運び出し、保管したことへの感謝のしるしとして周煌の「福」の書と孫億筆「花鳥図」が下賜された。その資料が現在も同家に残され、「福」は扁額に仕立て直されている。「花鳥図」は現存、県指定文化財となっている。作者の孫億は山口宗季など琉球の絵師に影響を与えた福州の絵師で知られている。他に「片目地頭代絜聡肖像画」があり、先の二資料の由来が賛に記録されている。ただ、この作品は保存状態が悪く、早急に修理を施す必要があると思われる。なお、「福」の書については、上江洲家にもあり、後年に模写したものと思われる。

⑶　その他

久米島に現存する絵画については上記の両家が代表的な資料を保存しており、詳細な報告がなされているのであえて概要のみ記したが、近年県立博物館に寄託され、現在個人が所蔵している殷元良の作品について記してみたい。

殷元良の高僧人物の作品が久米島にあると知りえたのは比嘉景常著「久米島紀行」であった。昭和12年、比嘉が一中の入学試験の監督員のため久米島に渡った時の紀行文である。ガリ刷りのようなこの紀行文は同年琉球新報に連載されている。

比嘉は試験の採点も終わった２月13日に上江洲知元氏の親類にあたる屋号内間前宅（与世盛家）へいく。そこで「琉球首里中山殷元良」の署名のある高僧人物の一幅の絵に遭遇

し、感嘆している。さてこの作品はその後ハワイに渡り、一時県立博物館に寄託されていた。袈裟姿の僧が左手に鈴を持ち、天上より来迎する高僧を描いたものである。おそらく普化僧の来迎を描いた図であろう。この作品の落款は「球陽中山首里殷元良　殷元良印(白文)　廷器氏（朱文)」であった。落款のみで見れば比嘉が見た高僧人物と異なることになる。しかし、比嘉が見聞した殷元良の作品はハワイに渡った作品あり、署名は比嘉の記憶違いと思われる。これと同じ構図のものがもう１点あるが、残念ながら実物ではなく、モノクロ写真で確認された。この写真は県立博物館にあり、アルバムに貼られた写真の状態から見て師範学校の郷土資料室にあったものと推測される。この高僧人物の絵は上部に月□叟と言う人物の賛があり、署名は「殷元良　方印　方印」のみである。状態はかなり悪いらしく所々図が消えている。片方が写真ということもあるが僧の表情表現に若干の違いはあるもののさほど大きな相違は見られない。したがって、同名の作品は２点あったことになるが人物の作品が少ない殷元良の作品を研究する上で貴重なものと言える。　なお、殷元良の作品が与世盛家にあった経緯は、記録がなく不明である。

2．漆　器

久米島の漆器では、山里氏所蔵の君南風の丸櫃がよく知られている。黒漆双鳥菊点斜格子沈金丸櫃（大）と緑漆鳳凰雲点斜格子沈金丸櫃（小）の外櫃と内櫃の二つからなる。君南風は、1500年、八重山のオヤケアカハチの乱を平定した際に、その陣頭にたち、王府軍を勝利に導いたと言われ、その功により久米島の神女の最高位に置かれた。丸櫃はこのとき尚真王から拝領した「ちよのまくび玉」を容れたものといわれる。沈金の作例では最古のものといわれ、琉球漆器を研究する上で貴重な漆器である。そのほか衣裳を保管していたと言われる御衣櫃がある。蓋甲全面なく、わずかに蓋鬘の一部（蝶番の部分）が残されている。漆面の状態が悪いため文様の全体は把握できないが所々残っている文様の断片から牡丹唐草と思われる。

今回調査したなかで屋慶名家、平田家、栄野本家などが保管していた丸櫃の調査の機会を得たのでここで報告しておきたい。この三家は漆器とともに衣裳類も所蔵している。なかでも屋慶名家と栄野本家の丸櫃の加飾技法は沈金の丸櫃で栄野本家は緑漆であったが、屋慶名家の丸櫃は状態が悪く漆色までは特定できなかった。平田家の丸櫃は曲物、生漆のみで加飾はなかった。

(1)　屋慶名家の丸櫃

宇江城の屋慶名家は、祠に衣裳とともに丸櫃を保管しているが、全体的に風化しており、外は黒漆のようだが特定はできない。蓋が四片に割れ、本体は約２cm幅で縦割れがあり、

合口の立上り部分は破損している。内は朱漆で瓦磚粉下地、布着せ、曲物で本体の胴部に点斜格子文で窓絵らしき図柄が見えるが、状態が悪いため文様については不明である。蓋甲は文様らしきものは確認できなかった。しかし蓋鬘の文様は比較的はっきりしていて牡丹唐草と思われる。手掛金具が左右に2個あり、内には曲玉やビーズ玉、古銭などが数多く収納されていた。なお、同家には神扇が保存されていたが紙どうし密着しており、広げることができなかった。その他絹製の大袖衣などの衣裳も保管している。

屋慶名家は堂之比屋の家系と言われている。堂之比屋（生没年不詳）は養蚕の技術を中国から久米島へ伝え、また比屋定集落の東端にウティダ石（太陽石）を建て、天体観測したとの伝説がある。

(2) 栄野本家の丸櫃

宇根の栄野本家の丸櫃は、緑漆に沈金の加飾が施されている。加飾などはしっかり残されており、点斜格子文の地に太湖石と花卉の窓絵が沈金であらわされている。窓絵は本体の2面にあり、その間に瑞雲を配置、蓋甲には牡丹唐草文を表している。銅製の手掛金具が取り付けられているが、その反対側は金具が付いたまま破損し、その破片が本体の内にあった。内は朱漆塗りで、下地の布が見える。瓦磚粉、布着下地の曲物であるが、本体の一部、合口の立上り、蓋鬘、蓋甲の一部が破損し、本体の一部はテープで補強してある。内には曲玉とビーズの首飾りがあった。この丸櫃もノロ衣裳とともにあった。

屋慶名家・栄野本家の丸櫃はノロの諸用具のひとつであり、首里王府からの拝領品の可能性があるが、記録がなく不明である。

久米島のノロ関係の諸用具は、稲穂儀礼のウマチー期間以外は公開していないところが多く、今回の調査もこのウマチーの期間でしか実施できなかった。この期間はまた、衣裳や諸道具の陰干しも兼ねているようだ。しかしながら漆器もさることながら衣裳類も風化・退色等が激しく、早急になんらかの保存手段を取らなければならないが、自然に朽ちはて破片類となり、また粉が吹き出し端切れになったにせよ断片を保管しているのはなぜかたのもしく思えてならない。

(3) その他の漆器

丸櫃に見られるように漆器の多くは、ノロ関係のひとつとして現存するが、具志川村の上江洲家には、やはり祭祀用の容器として食籠や茶托、盆などがある。なかでも黒漆の2段の食籠及び食籠台は九角をしている。食籠台は4個ありいずれも加飾はなく黒漆のみである。通常、食籠は丸か八角をしているが造りにくい九角にした理由は不明である。その他、朱漆山水楼閣人物箔絵盆、朱漆巴紋牡丹沈金茶托（蓋付き）などがある。

上江洲家の漆器は、その大方が加飾なしのものでいわゆる食器として用いられたようで、数があり、当然なかには行事などの来客用として出されたものも含まれていると思われる。その他、「馬の角」で知られるで濱川家は、陶器・染織などが一般公開されていたが、漆器は明治以降の盆や東道盆などが所蔵されていた。

4．おわりに

久米島に伝わる衣裳や曲玉それを納める丸櫃などは、神女に関係するもので、君南風を中心に各村に伝わっている。このような資料が島の行祭事、今回は「ウマチー」という祭事のわずかな時間であったが衣裳や曲玉、丸櫃さらには神扇まで所蔵していることが確認できた。しかしながらこのような資料の収蔵している関係者は、高齢であり、今後も各家で管理が可能かどうか大きな課題として残されている。幸いにも久米島に博物館建築が計画されており、各家の資料と博物館の関係をどう扱っていくのか議論が必要であろう。

今回の調査で漆器の調査は限定された期間とひとつの分野でなく、他の分野も同時に実施したため十分とは言えない。また、美術工芸の調査は、物にあたる調査の仕方で大方行われるが、今回の調査で聞き取りの必要性を痛感させられた。特に君南風などノロの用具については、その容器の歴史のみ語られ、祭祀のなかでの扱い方・使い方などが課題として残された。また、調査は当地の行祭事を十分に尊重し、留意しなければならないことはいうまでもない。

参考文献

(1) 琉球漆工芸　荒川浩和・徳川義宣著
　P 82　87――第二章製作年代の推定し得る現存作品
　　第二節初期・第二沈金・密陀絵
　P 210　第四章　琉球漆工芸の問題点
　　第一節琉球沈金の問題点
　　第二項久米島伝来の沈金小櫃
(2) 沖縄美術全集　第２巻　漆芸・第４巻　絵画　沖縄タイムス社 1989
(3) 県内絵画遺品調査報告書　沖縄県教育委員会　1977
(4) 久米島総合調査　法政大学
(5) 久米島紀行　比嘉景常著　s 12年
(6) 中国伝統年画図録　川瀬健一編　東洋思想研究所　1993
(7) 沖縄文化の遺宝　鎌倉芳太郎著　岩波書店　1982



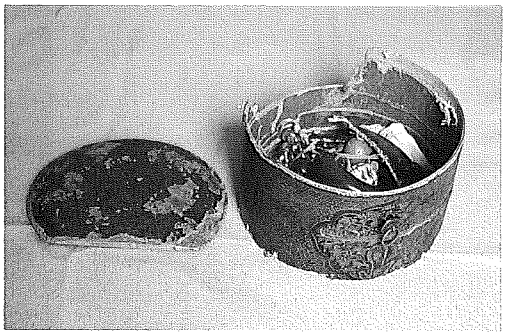
普化来迎図

モノクロプリント
作者：殷元良（座間味用昌、1718～1769）
法量（写真の大きさ）：タテ・14.1　ヨコ・6.7



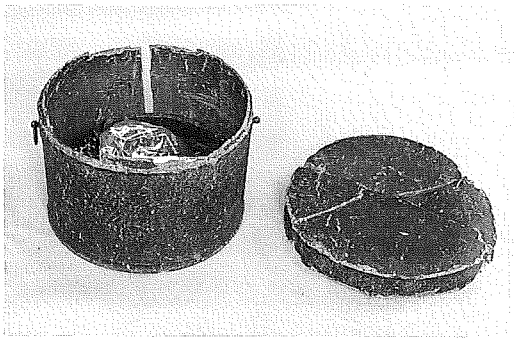
普化来迎図

紙本墨画
作者：殷元良（座間味用昌、1718～1769）
法量：タテ・89.0　ヨコ・38.4
落款印章：「琉球中山首里殷元良」
「殷元良印」白文方印(タテ，ヨコともとに2.4)
「廷器氏」朱文方印（タテ，ヨコともに2.4)



緑漆窓絵瑞雲点斜格子沈金丸櫃（栄野本家）

法量：本体・高さ10.0　　径・18.2
蓄　・高さ測定不可　径・17.0
※法量は現状のまま測定



沈金丸櫃（屋慶名家）

法量：本体・高さ12.1　　径・18.0
蓄　・高さ3.0　　径・19.0
※法量は現状のまま測定

久米島の陶磁器

瑞慶山　昇

はじめに

久米島では現在、具志川村と仲里村の両村合同による、久米島博物館建設委員会がつくられ、博物館建設の準備作業が進められており、両村で資料の調査収集が行われている。今回の調査は平成六年一月から三回、久米島博物館建設委員会の協力を得て同委員会収集資料や、陶磁器類を多く所有している上江洲家、具志川村仲地で私設の資料館を公開している濱川家、その他陶磁器類を所有している旧家で、資料の所在調査や聞き取りを行った。

久米島でも沖縄の各地に見られるように、産地も時代もさまざまな陶磁器類が混在している。ただ、久米島の特異性を考えるならば、久米島の地理的位置が、琉球の冊封・進貢外交時代（あるいはそれ以前の按司時代からかもしれない）から、唐船の航路に位置し、中継寄港地として海上交通の重要な役割を果たしたことである。また、「球陽」によると幕末における異国船来航が17回もあり、沖縄の他地域に比べ圧倒的に多い。久米島に寄港した船舶の、飲料水や食糧の調達に伴い、人と物資の交流があったことは歴史の中で明らかである。その当時の舶載品が、久米島に現在でも残存している可能性も十分考えられ、今回の調査では県内の他の地域とは異なった側面が、陶磁器をとおして見られるのではないかと期待しつつ調査を実施した。

調査の結果は南蛮甕、陶器、磁器別に述べることにする。なお、ここでは特徴的な資料を取り上げ、その他の資料に関しては、資料編において記載することにする。

南蛮甕

地元の方に話しを聞くと、その昔、蔵元跡には南蛮瓶が多数見られたとのことである。おそらく、東南アジア方面から貿易用の容器として、蒸留酒等をつめて持ち込まれた舶載甕であったであろう。現在でも旧家に、壷屋焼の荒焼甕に混ざりシャム南蛮やルソン南蛮、支那南蛮類が現存していることが確認された。久米島博物館建設委員会所蔵の、大型のルソン南蛮二点とシャム南蛮二点も、仲里村の旧家から寄贈されたものである。特にルソン南蛮（写真１）は、かなり大型で胴部に比べ底部が極端に小さく、不安定な器型をしている。その他にも口経が大きめに作られ、線彫りで唐草模様が施された耳付きの甕がある。残念ながら口縁部の一部が破損しているが、器型はルソン南蛮に類似し、胴部に比べ底部が小さくアンバランスな造りである。この甕は他の南蛮甕と比較すると、六つの耳の形状や付け方、唐草の文様等に特徴があり、他の南蛮甕との違いは生産地の違いなのか、また

は時代の差異なのか。濱川家にも保存状態の良いシャム南蛮が四点あり、その内三点は大型である。また、小振りではあるが形の良い褐色のルソン南蛮一点と小型の支那南蛮壷を一点収蔵している。この支那南蛮に一回り大きな同系のものが、仲里村真謝の沖野家でも、一点確認することができた。

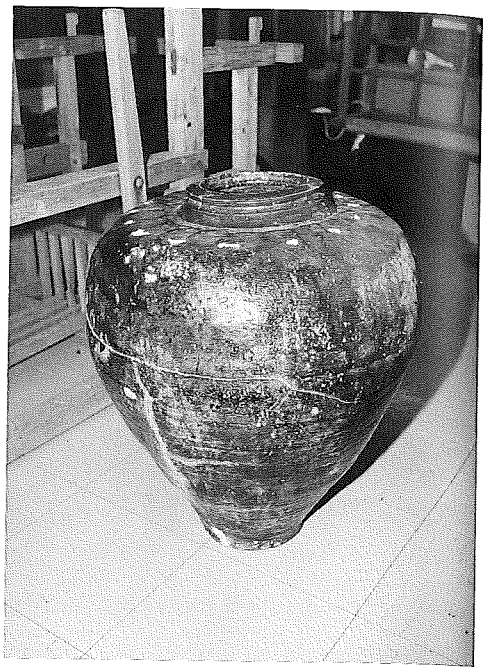


写真1

陶　器

陶器類は圧倒的に荒焼甕が多く見られた。荒焼甕は上焼の小型の食器類に比べ、破損することが少なかったためか、または生活環境の変化にもかかわらず、貯蔵容器や水甕として近年まで使用され、残される機会に恵まれたのか、いずれにせよ現在でもかなりの家庭に、荒焼甕類を見ることができる。また、甕類は貴重なものであったと考えられる。その理由は、久米島博物館建設委員会で収集された縄目文水瓶が一点あるが、焼成時に口縁部が楕円に変形し器型も一方に大きく傾き不安定である。このようないわゆる焼き損じた甕を、わざわざ久米島まで運び使用したと言うことは、当時、甕類は貴重なものでたとえ変形したものでも、商品価値があり使用されたことを物語っている。

今回の調査で、陶磁器類を最も多く確認できたのは上江洲家であった。荒焼の陶器類も味噌甕をはじめ、唐草模様の貼付加飾花鉢や荒焼徳利等数十点に及ぶ。また、シュロ縄で巧みに巻かれた味噌甕転用の茶壷六点など、お茶の貯蔵容器に使用された甕がみられ、戦後まで行われた、久米島でのお茶の栽培をしのばせるものも見られた。具志川村の民家所有の荒焼の甕は、加飾が見られず胴部全面にたたきの跡が見られ、腰部には釉の流れが見られる。大型の堂々とした甕で、口縁部の大きな形状から、水甕と見られるが泡盛の諸味用に使用されたものかもしれない。この甕は器形からみて薩摩焼の可能性もある。

沖縄の上焼では、濱川家収蔵の資料の中に、二点の灰釉碗（写真2）がある。そのうち一点は高台から口縁にかけて直線的であり、立ち上がりも急で釉薬が不透明の灰釉をフィーガキイによって施されている。この特徴から湧田焼と考えられる。もう一点もほぼ同じ器型であるが、わずかに口縁部が外反していることから、後期湧田焼かもしくは壷屋焼初期の可能性もある。また、濱川家には大正のはじめころから、壺屋で生産され主に本土に出荷された通称古典焼（エジプト模様とも言う）が二点あり、うち一点は裏に「琉球」の文

字が印刻されている。加飾方法は文様の周りを彫り込み、図柄を浮き立たせる技法を使用し、全体に飴釉が掛けられ、口縁部に緑釉が施されている。仲里村の沖野家の所有している黒釉の抱瓶（写真３）は、泡盛を入れる上部口の形状などから壺屋初期のものであると思われる。薄く軽く作られており、優れた陶工の作と考えられる。具志川村の山里家では鬼面耳付三島手花生を所有しており、これはかなり古い時代の作と思われる。

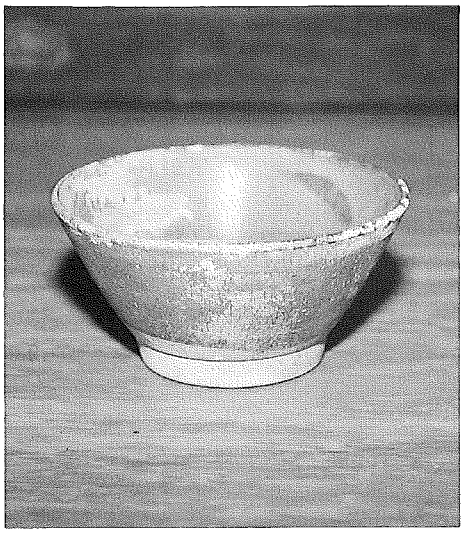


写真２

また、薩摩焼と思われる黒釉や飴釉が施された油壷、酒茶家などが上江洲家で油壷五点、酒茶家二点が確認された。仲里村の与座家でも、飴釉油壷一点を所有している。口縁部が破損しているが、高台裏に墨書きがあり周玄の文字が読み取れる。与座家の家譜によると代々周の文字が使われていることから、与座家一門のその器の所有者の名が、書かれたものであろう。年代まで特定することは出来なかった。

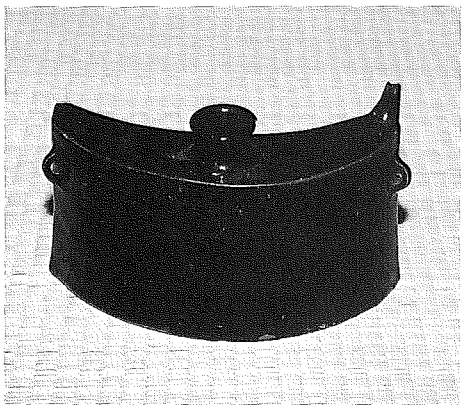


写真３

磁　器

大正あたりから、沖縄で店を構えはじめた本土の陶磁器商人たちによって、大量に持ち込まれた本土製の磁器製品は、安くて丈夫なことから当時庶民の間で重宝され、沖縄の家庭の食器類に大きな変化をもたらし、それまで壺屋を中心につくられてきた沖縄製の食器にも大きな影響をあたえた。濱川家にある磁器製の染付碗も、当時スンカンマカイと呼ばれた代表的な本土製の碗で、昭和初期ごろには沖縄製のアラマカイに代わり、沖縄全土で使用されたものである。その他にも染付や白磁、青磁など色も形もさまざまな火取等が、久米島博物館建設委員会や上江洲家、与座家などで見られた。また、上江洲家では木箱等（写真４、箱書「中皿家」有り）に数点セットで納められた、中国の染付皿や九州の天目碗等が六箱ある。古いものでは、中国製と思われる染付徳利を、具志川村の山里家で所蔵している。

おわりに

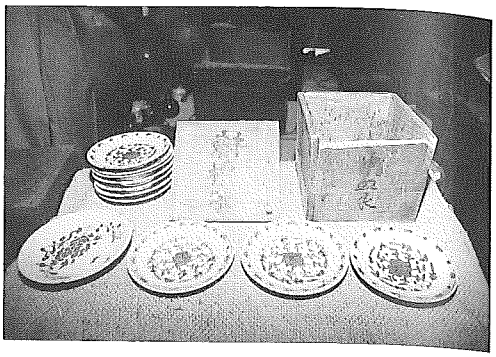


写真4

陶磁器は他の工芸品と違い、日常生活の中で使われている場合が多く、破損や劣化の際捨てられてしまう確率が高い。地元の方の話しによると、大切に代々伝えられて来た陶磁器を、戦後の物のない時代に、しかたなく食器として使用し、壊れ捨ててしまったものも、数多くあったとのことである。そのような理由から、残存する資料には限りがあり、また、幸いにも破損せず残されたものでも、骨董的価値から本島の骨董愛好家等が久米島の各家庭から、甕、壷等を買い集めていったとのことで、島外に流出したものも多いと考えられる。現在県立博物館に所蔵されている赤絵魚文皿も、久米島からいく人かの手を経て、収集されたと伝えられている。沖縄で魚文の図柄はよく使われるが、その中において赤絵魚文皿は傑作のひとつであり、久米島に優品が存在していたことをしのばせる。このような状況にもかかわらず、荒焼甕類が現在でもなお、多くの家庭に残っているということは、骨董品的な意味における保管ではなく、かつて日常生活の中で大切に使われてきた器物への愛着から、生活の中ではすでに不要となった今でも、捨てるに捨てられず持ち続けているのであろう。資料の種類においては、他の地域との違いが明確に現れるものは、残念ながらそれほど見いだせなかった。ただ、現在もなお民家に存在する南蛮甕等は、かつて貿易国琉球の玄関であった、当時の久米島を彷彿とさせるものであった。

今回のわずかな調査で、久米島の陶磁器が把握できたわけではない。過去に行われた久米島に関する調査と比較し、特に目新しい資料の発見等もなかった。結果として、資料の所在確認と時間の経過における比較という形になった。資料の所在確認調査を進める中で懸念されたことは、時間の経過に伴う貴重な資料の劣化や紛失等が感じられたことである。現在、久米島博物館建設委員会の資料収集担当職員による、資料の収集が行われており、その数もかなりの量になりつつある。今後も収集に努力していただき、貴重な資料の適切な保存がなされることを期待したい。

参考文献

知念勇・池田栄史・江藤和幸「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」　沖縄県立博物館紀要　第14号

津波古聡「壷屋と古典焼」沖縄県立博物館紀要　第18号

宮城篤正「線彫染付魚丈皿のことなど」沖縄県立博物館紀要　第７号

宮城篤正「久米島の絵画・陶磁器」沖縄久米島　沖縄久米島調査委員会編

東貴望　「近世期の久米島と唐船」沖縄久米島の総合的研究　法政大学百周年記念

安岡昭男「幕末異国船の久米島来航」久米島調査委員会編

大城精徳「陶芸」沖縄美術全集　１　沖縄タイムス社

「県内漆器・陶器遺品調査報告書」沖縄県文化財調査報告書　第26集　沖縄県教育委員会

重要文化財上江洲家住宅の建築と風水

屋部　憲右

1．はじめに

平成５年１月から２か年の工期で行われた上江洲家住宅の保存修理事業に伴う調査成果の概要を新聞紙上（『琉球新報』９月22･23日号）に掲載したが、その報告文を基本にして、その後の知見も加え補正した。

2．建築と修理の歴史的経過

当家は、旧具志川城主の末裔といわれ、親雲上を称し代々具志川間切の地頭代を勤めた旧家である。また、綿糸や紬の製法を普及させるとともに、貧民の救助、国王への献納など多数の善行でも知られている。

敷地は周囲を立派な石塀で囲んで「石垣殿内」とも呼ばれ、主屋を中心として、西南方にメーヌヤー（倉）、東方に殿内グヮー[(1)]（宝物庫）、西方に豚舎兼便所が建つ。そのほか井戸、ヒンプン（屏風塀）も残り、かつては南東方に上便所も存在しており、屋敷構え全体がよく保存されて、沖縄における大型民家の代表的な姿を伝えている。

主屋は東側に居室部のウフヤと西側に台所部のトングヮからなり、トングヮの西面北端にハンドゥヤー（流し場）を突出させている。屋根は棟違いに寄棟造、本瓦葺を掛造とし、四方にアマハジ（土庇）をめぐらしているが、もとはウフヤの西傍にトングヮがそれぞれ独立して建つ分棟型の茅葺であり、アマハジは付いていなかった。

内部は上屋の表に一、二、三番座の３室、背後に２室の裏座を配し、下屋を縁とするが、三番座と一番裏座は下屋を取り込んでいる。トングヮでは、ウフヤとの接続部一間通りの西に喰い違いに４間を取り、その西北を台所土間にしている。

古文書によれば主屋は、乾隆19年(1754)、第７代智英の時代に前身の建物より拡張して建築されたという。その後19世紀の半ばに、小屋組を取り外して桁より上部材を取り替え、化粧垂木と化粧隅木を引き込み鼻先を切って軒の出を縮小するとともに、化粧軒から一段下げてアマハジを新設するなど大修理を行った。明治24年、小屋束を切り縮めて屋根勾配を半減し屋根を茅葺から本瓦葺に改めた。明治36年には首里の家屋を購入してその古材でトングヮを改築してウフヤに合体させた。

戦後では、ハンドゥヤーをコンクリート造の風呂場に、台所土間をコンクリート打ちにして煉瓦カマドにしたのちに全面床張りに改造した。また、ウフヤのジール（地炉）は撤去され、トングヮには天井を張り、内壁を合板で張り重ねるとともに、濡縁が新設されて

いた。今回の半解体修理ではウフヤとトングヮを接合した明治36年時の姿に復旧整備した。

3．建築の形式および特徴

ウフヤの床組は大引、足固めにまだ部分的に足固貫が使われており、軸組を固めている貫は、柱を差し通すだけでなく蟻掛に組み、本土では見られない優れた台風対策をとっている。また、土庇柱に根付き自然木を使うのも沖縄独特で、足元の腐朽防止に有効である。

下屋の軒は大面取の化粧角垂木を一段下げてまばらに掛け、四隅では反り上げて社寺風につくり、土庇屋根はその軒下に落してめぐらしている。土庇屋根はトングヮのように、母屋と一体に垂木を掛け下屋には垂木下に天井を張るのが普通なので、段差の付いた土庇屋根と大屋根の隅軒反り上げは、ほかの民家では見られない大きな特徴である。

ところが、今回の半解体調査でこのアマハジが当初は存在せず、後設であったことが明らかとなり、土庇柱が東面のみ雨落葛石の外側に建っているのもそれによる形跡であろう。このように当初はアマハジが付設されていなかったことは、従来沖縄民家のアマハジが定型化されたものといわれていただけに、重要な発見である。さらに建築史的に言えば、アマハジは古くは存在せず、段差屋根の付加を経て大屋根と一体化して葺き下してくる、今日見る一般的なアマハジが成立したと考えられる。

間取りは、前後に表座と裏座に分け、さらに3縦割りにして東より一番座、二番座、三番座とし、一番座にトコ、二番座に仏壇を造り付ける沖縄民家の類型である。しかし、トコは北面の中央か東寄りには出さず、北西隅において出床とし、二番座は仏壇と同幅にして仏間状にとり、三番座とはその境に柱を抜いて続き部屋にしている。また、一番座だけは広幅の小壁板を張り、帯戸もセンダン板を用いて上等加工にし格差を付けている。各座敷への昇降は南縁を介するが、手水石を東庭においているので、上客は東縁から一番座に入ったものと思われる。

三番座と一番裏座は下屋を取り込んで部屋を拡大する初期の形式をとどめ、とくに一番裏座のみ内法長押と東帯戸に水銀鍍金の飾金具を付け、石鉢状地炉を据えて客用寝間にあてている。地炉はそのほかに二番裏座、三番座、トングヮにも設けてそれぞれ使い分けていたようである。このように地炉を多用しているのもほかに知られていない。そのうち二番裏座の地炉は出産用であり、その回りの際柱のみほかのチャーギ柱に対してフクギとスギを用いているのは、赤子の幸福と生長を願ってのことであろうか。　細部では、トコを押板風に九寸高に上げ、表座の矩折縁を落縁とし、三番座および二番裏座と縁境に帯戸と腰付障子を二重にたて、天井竿縁をすべて南北に渡すとともに、大面取角柱・床板や縁板・各貫・トコの落掛・天井の猿頬竿縁の太い木割、ならびに桁の断面正角使いにそれぞれ古制をみることができる。

また、仏壇の天井をアーチ状につくり、縁先に無目敷居を挿入して蔀の移動を防ぎ、外壁板は中間のシイ材に対して柱両際を狭いスギ板で割付け、二、三番座境には帯戸を4枚引違いたてとし、その上部の釣束下に渦文彫の肘木形を据えるなどが異例である。

メーヌヤーは外観を普通の平屋にみせるが、下屋を取り込んで上階とし、下階は弥生式的な一枚板扉を両開き、使用人の寝間にも使い、下屋を取り込んだ南室は周壁で塞がれているので、隠し部屋であったかも知れない。また、三方の下屋を土間にして馬や山羊を飼い、倉と家畜舎を兼ねるのは、ほかの諸島では見られず、その形態とあわせて久米島特有といえるであろう。

修理に伴う発掘調査により、当初は分棟型で、トングヮはアナヤ（掘立屋）であり、ウフヤの正面通りのみ貝殻砂で埋土しており、前身建物はすべてアナヤが2度分残っていることが検出された。この貝殻砂は貝殻破片の混入した砂を敷詰めて土間を固めるのであり、本土では貝殻地業として関東地域で散見されているが、沖縄では初めての発見であるという[(2)]。

また、主屋の南東方に上便所の溜枡遺構も確認され、その北側の便穴下部に自然岩の傾斜を利用しているのが注目される。上便所については宮良殿内など石垣島で内塀で囲った一郭にその遺構が知られている。

4．屋敷・家屋に見える風水

屋敷は北方の大岳、北東方の富祖古岳を背景に、緩やかな傾斜地に立地し、南方に海を望む。このような地形を“背山得水”と呼んで理想の風水とされている。さらに敷地内は、北端の幅5尺を棚状に造成してフクギを並植している。この北端の腰掛状は安心して寄りかっかている状態を意味してクサティ（腰当）と呼ばれている。また、主屋を東寄りに配し、東庭が狭くて高く、西庭は広くて低いので敷地内の排水は南西方（メーヌヤーの西）に導水している。この「東高西低」・「西広東狭」の敷地も好風水に適合する。大岳、富祖古岳、棚状が風水の祖山、宗山、主山に対応する。　主屋の南西方にメーヌヤが東面しており、相対する東方にはもと上便所を設けていた。重文の中村家住宅（北中城村）や銘苅家住宅（伊是名島）では、この東方位置にアサギ（離れ座敷）を配して西面させている。南庭には中門付のL型ヒンプンをたて、その南石塀は折り曲げて引込ませた切通しの正門を開けている。この主屋を主体とする品字形の建物配置を風水図に重ねると、主屋が穴(生気の最も集中する処)、南庭が明堂（穴の前の左右の砂に囲まれた広平な地)、メーヌヤーや上便所あるいはアサギが東西の護龍(砂山)、中門口が護神にそれぞれ対応し「四神相応」の風水地を示しているのであろう。

主屋の心臓部である仏壇は、正門、ヒンプン中門の軸線上に置いているが、わずか東に

寄せて正中心を避けている。この類例はほかに宮良殿内が知られている。仏壇前の床下とその前庭には自然岩があって、10代智俊が『家記』でこれを先祖より風水になる石と伝えているので、この自然岩の位置こそ穴と明堂の地点であり、龍脈につながっているのであろう。

ヒンプンを切通して中門にしているのは、日常は竹垣で塞いで、上客の来訪や冠婚葬祭のみ通すといわれているが、それだけでなく、風水に必須の水を求める龍道にあたっているからであろう。また、L型にしているのは、前庭（明堂）に生気をためるのに左砂が上便所では弱いので、それを補護するためではなかろうか。このように考えると、ヒンプンは従来言われていた目隠しや殺気の照り返しだけでなく、前砂の役目も持っていたものと思われる。

墓地、家屋と並んで重要視される井戸は、昭和5年に吉相にあたるウフヤの申(南西方)に掘っている。また、アガリティーダ（昇る太陽）崇拝の思想に裏打ちされて、神聖な東方に殿内グヮ、不浄な西方に豚舎兼便所をおいている。中国の風水書にも、この東優位・西劣位の発想を描いているという。

石塀は四隅を丸面で折り曲げ、そのうち南塀は中央で外膨らみにして両隅部ですぼませているのは、風水池にみられる五行の金が表わす円弧形をおもわせるので、風水の「玉滞水」を簡略化しているものと思われる。類似の石塀を崇元寺正面塀（那覇市）にもみることができ、気の漏洩を防ぐ満福の相といわれている。

また、東・西石塀は道路境界には築かず、東塀が約12m、西塀を約6m内寄りに囲い、道路との間をフクギの小林とし、小さく屈曲した東道から南隣接地の大きく円弧した南道に沿って、その外端を用水路が流れている。このように東・西石塀の外側を抱護林にするのはほかに知られておらず、恐らく風水の青龍砂・白虎砂であり、用水路が河川であろう。

なお、もとは南塀の私道を挟んだ南側にも一列のフクギで抱護されていたようであるが、今日ではすべて取り除かれている。そして段落した南隣接地ももとは中央部がノロの拝所であり、その東・西両端に使用人の住居を建てて当家の前輪であったといわれているところによると[3]、クサティでいう南方の分家が北方の本家の抱護を受けるというよりは、逆に南隣接地が北方の当家を補持していたといえるかも知れない。

さらに、鬼門にあたる東北隅の石塀を直角に折り曲げず切り欠いて大きく回し、四隅の外頂石（ケーシイシ）を突起状にしているのは、いずれも魔除けと思われる。このケーシイシはグスクや蔵元、亀甲墓にもみることができ、中城城三の丸に残っているのが最古(15世紀初頭)とされているので[4]、グスクからの影響であろう。ただ、西塀のみ緩く波面させ、天端を階段状に南へ一段落しているのは、敷地内の生気をゆっくり南方へ送り出しているという[5]。

それでは主屋の位置はどのように定めたのであろうか。中国では「君子南面す」といって主屋を南向きとするが、真南でなく約15度西方へ向ける。そして石塀の北西隅と南東隅を結んだ対角線（子午線）と、南北を4対6の比分線との交点が、ウフヤの上屋前面と西側面の交点に合致する。ヒンプンは南塀と上屋前面の3分の1地点にたて、その中門を正門と仏壇の軸線に揃えている。また、門口より9段目で南縁を昇り、13段目で最上段の位牌台に達する。上り口や位牌台への段数は奇数が吉相とされている。

家屋内部も、屋敷と相似で求心的な平面の仏壇を主体にして、南・東優位に対し北・西劣位とするのは一般に知られているが、これは陰陽道の陽と陰に対応する。また、表座は開放にして明るいが、裏座を板壁で閉じて暗くしているのは〈背風向陽〉であり、平面をほぼ正方形とし、側回りの下屋柱は角柱であるが、内部の上屋柱を面取角柱とするのは、中国の〈天円地方説〉によるのではなかろうか。

さらに、祖霊の象徴である仏壇を中心に、寝間・出産場の二番裏座は北にあって10干12支の壬癸・子が生命の萌芽・妊みを、二番座の南は丙丁・午が伸長・誕生を表わしており、中国古代の四合院方式に発する宗廟建築の後室・前堂の流れをくむものであろう。したがって、仏壇（祖霊）を中心として裏座（再生）、表座（繁盛）を軸とする万物の輪廻思想が包含されていると思えてならない。

そして、天井も二番座を最高に張って序列を設けているが、仏壇の天井だけは先述のようにアーチ状にしているのは、亀甲墓の天井を模したのであろうか。天井竿縁を床差に渡しているのは、まだ竿縁の「冲＝殺気」の観念が入っていなかったであろう。

仏壇回りの高さと門の位置、幅は、1.44尺を8等分し、各区分ごとに吉凶の文字をあてて占う、唐尺の吉相寸法を用いるといわれている。すなわち、唐尺では壇框高3尺は財、同框より鴨居内法高4.2尺は吉、位牌台高6寸および供物台高7.5寸は官にあたり、その台板先端を結んだ勾配は45度（矩勾配）である。そのほかに位牌台・供物台幅6.3寸も義であり、家屋の入口である無目の内法高5.8尺も財である。

正門幅7.03尺、ヒンプン中門幅5.7尺は吉にあたり、門高も正門の前高5.16尺が官、後高4.88尺が義であり、ヒンプン中門の前高5.84尺が財、後高5.05尺が官のそれぞれ吉相である。

屋敷周囲は、フクギの抱護林はもちろんであるが、ウフヤの南東方と南西方に来客を誘導するかのように曲折して植え込められたヒメツゲ、正門と脇門の傍らに袖塀のように刈り込められたフクギ、東庭に添えた東塀際のツバキや手水石際のナンテンも、風水に基づいて植えられたのであろう。ちなみにヒメツゲは中国産で殿内にだけ植えられ、フクギは福を招き、ナンテンは難を転ずる吉祥木とされている。

そのほか先述の『家記』によると、東西のフクギ林を含めて艮（鬼門）坤（裏鬼門）方

位にそれぞれ2個づつ現存する自然大石、約200m 巽の1本マツ、ならびに南隣接地を取り込んだ四周道の四隅にかかっていた石橋も重要な風水であった。これらの大石は穴や明堂の風水石とともに祖宗山に通底し、1本マツは地脈の欠陥を補うという風水塔の「案山」に見立てているかも知れない。

このように屋敷・家屋とも風水の影響を強く受けて、生気が充満するように〈層々相抱〉していることが確認できるとともに、建築の解明も風水の視点からより進展するであろう。

注

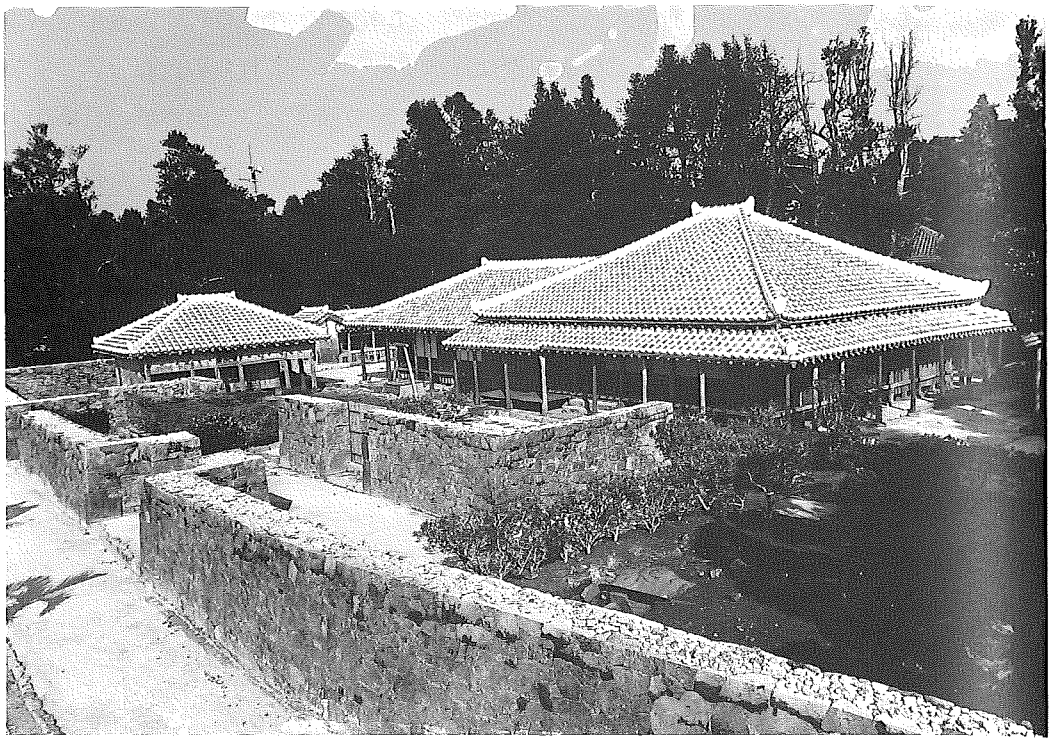
(1) 乾隆20年（1755）に掛床を保管する建物として瓦葺新築の許可を得ている。しかし、大正頃に観音堂に改築され、さらに近年に造替し一新されたのが現建物である。

(2) 当眞嗣一氏（沖縄県立博物館）の御教示による。

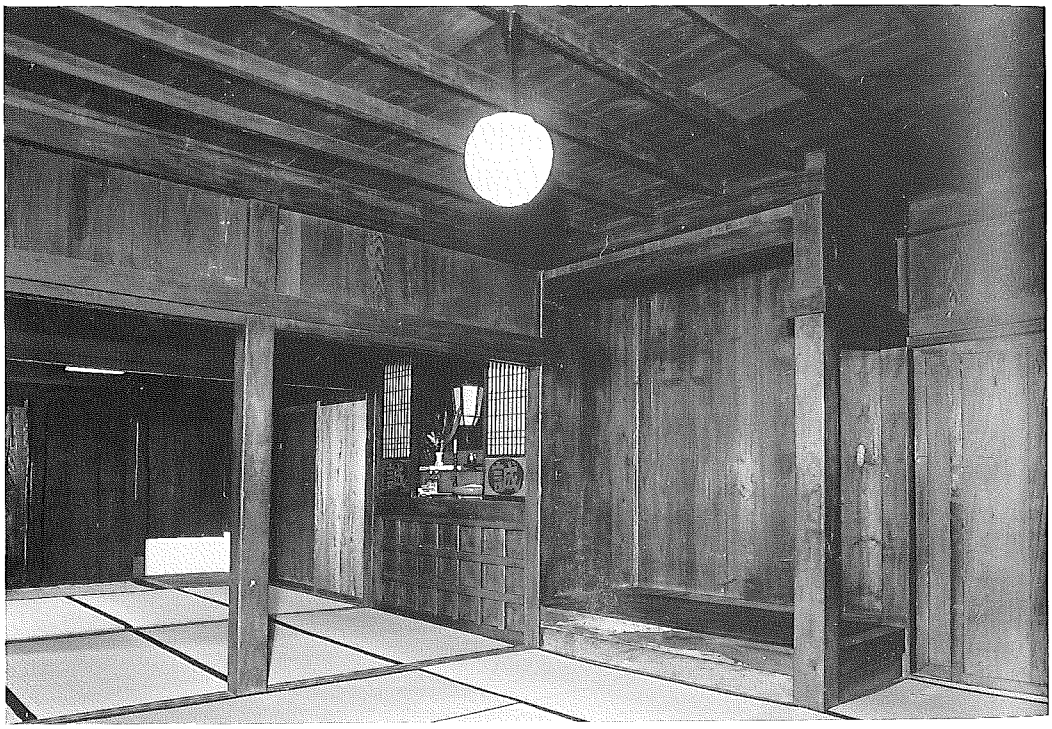
(3) 喜久永米正氏（具志川村文化財審議委員長）からの聞き取りによる。

(4) 当眞嗣一、グスクの石積（『沖縄県教育委員会文化課記要』）

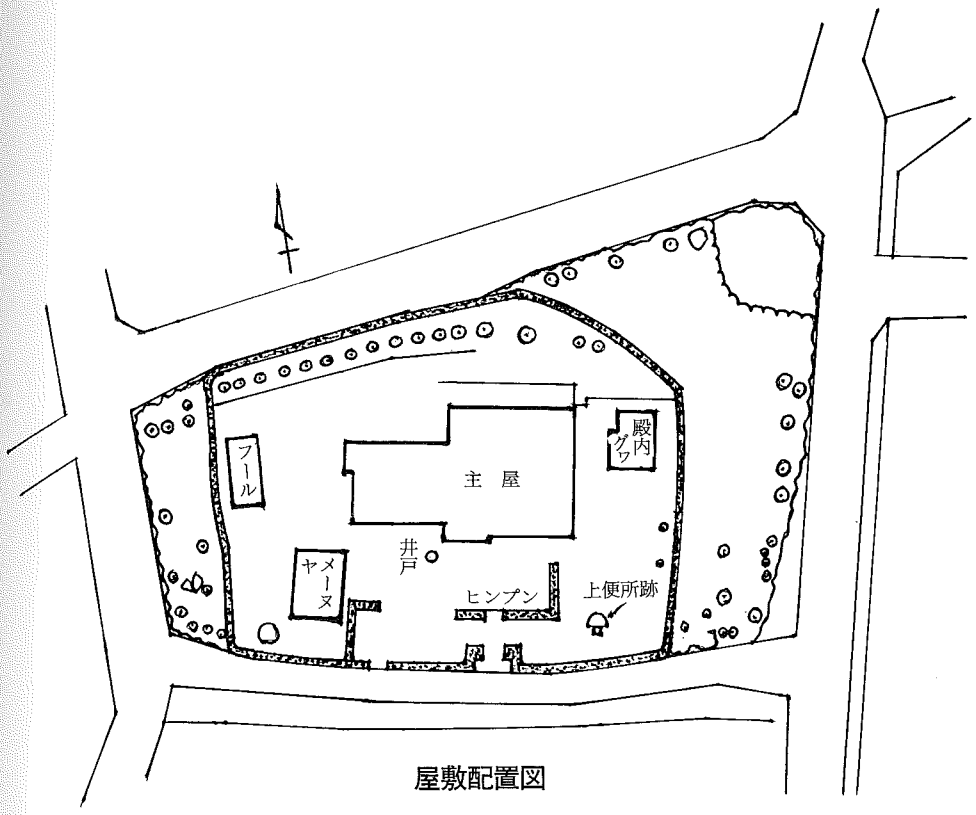
(5) 渡邊欣雄教授（東京都立大学）の御教示による。



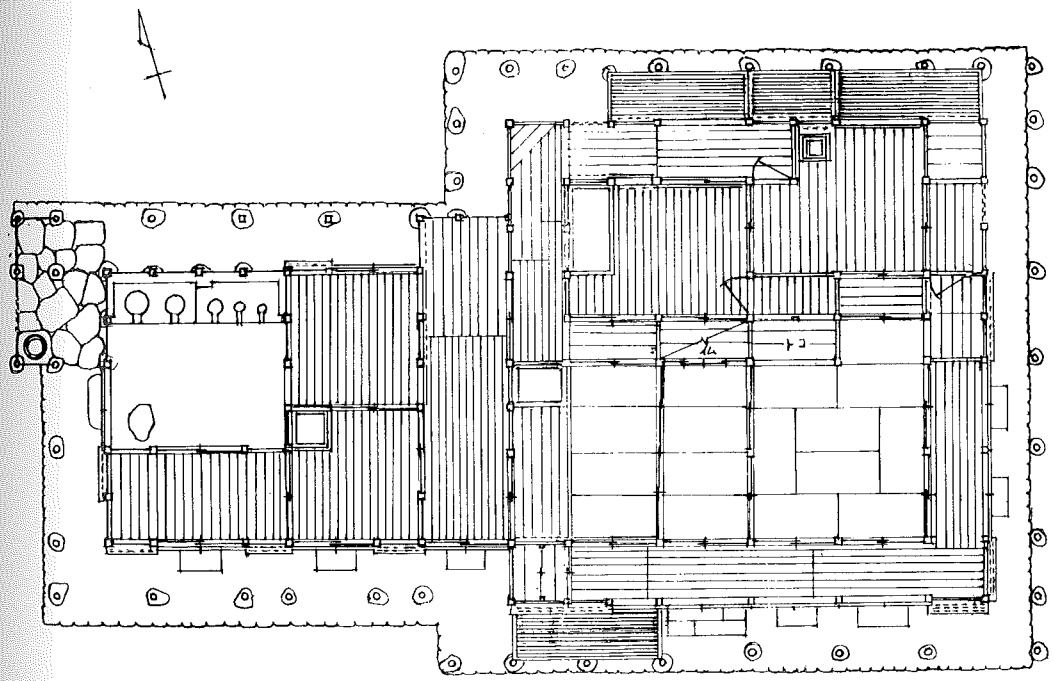
上江洲家屋敷（南東より見る）



上江洲家住宅主屋内部（表座北西面）



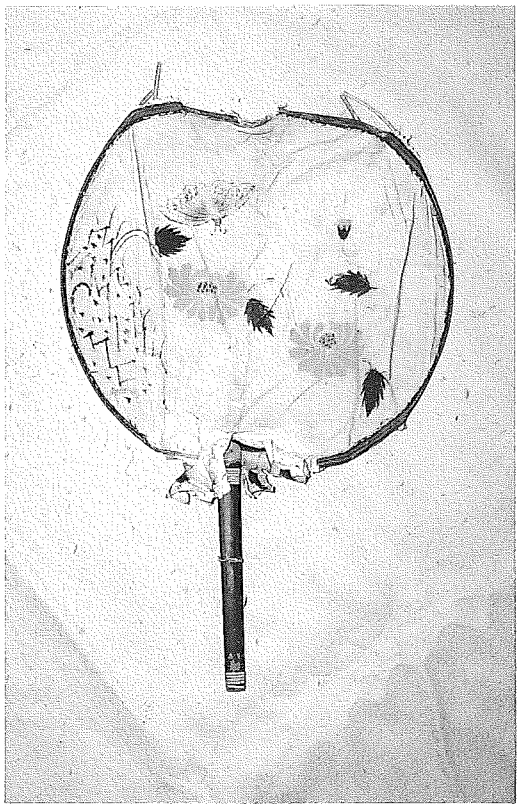
屋敷配置図



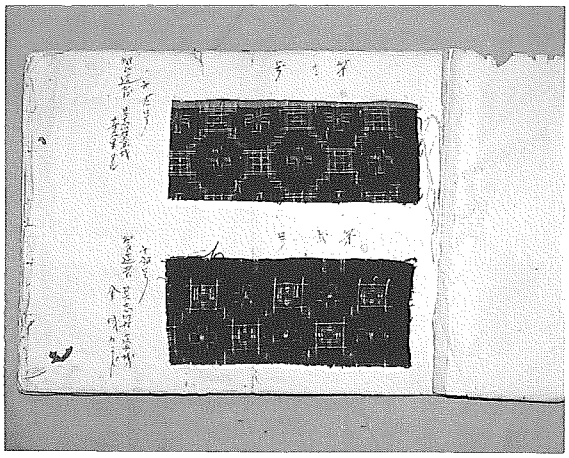
主屋平面図



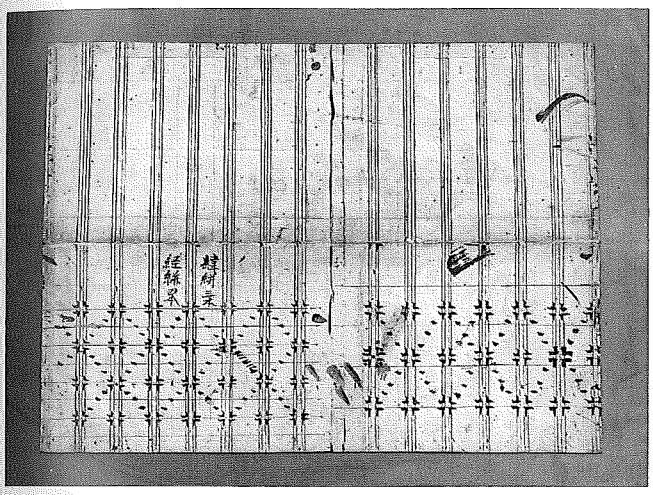
曲玉（山里家蔵）



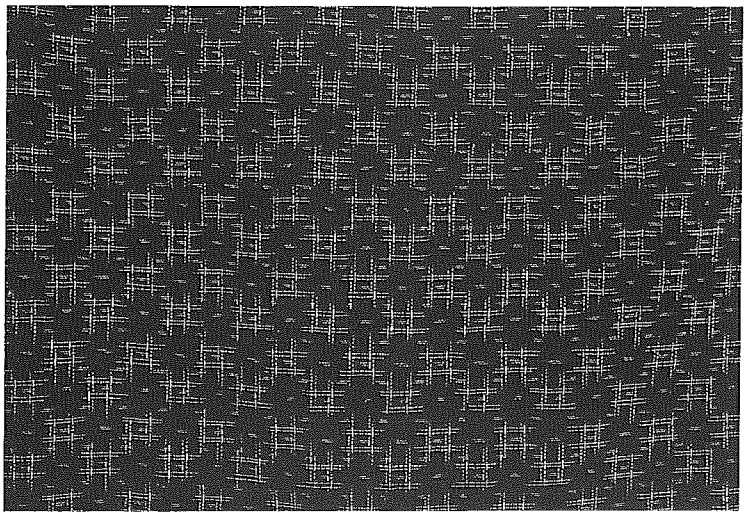
団扇（栄野元家蔵）



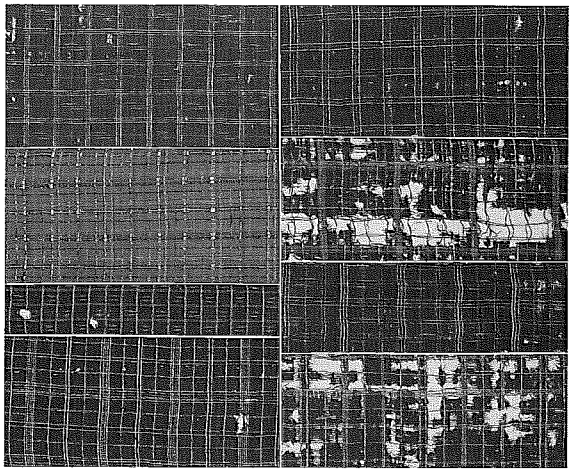
紬見本帳（沖縄県立博物館蔵）



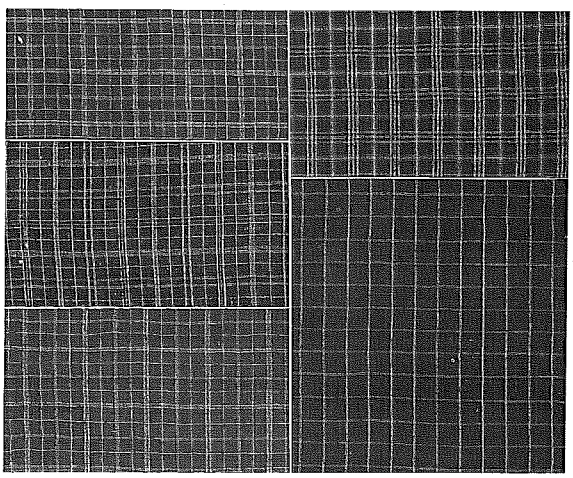
久米島紬絣模様図案（上江洲家蔵）



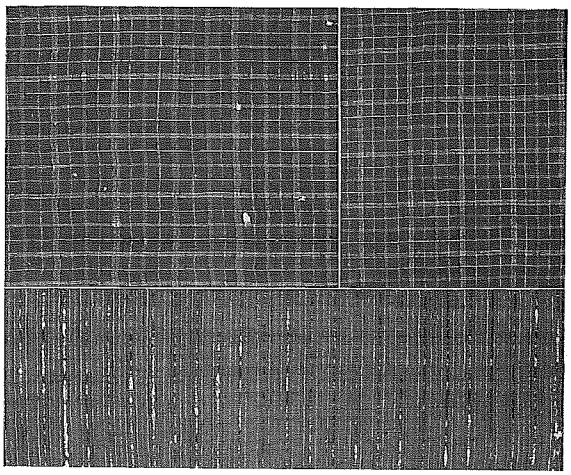
絹焦茶地経緯絣上衣（久米島博物館建設委員会蔵）



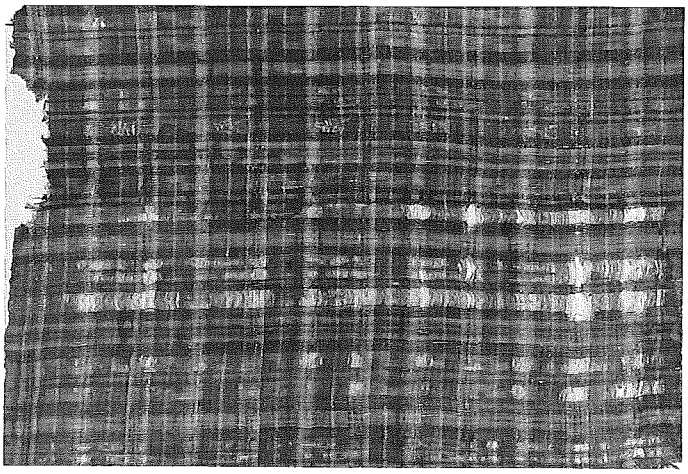
久米島紬裂帖（沖縄県立博物館蔵）



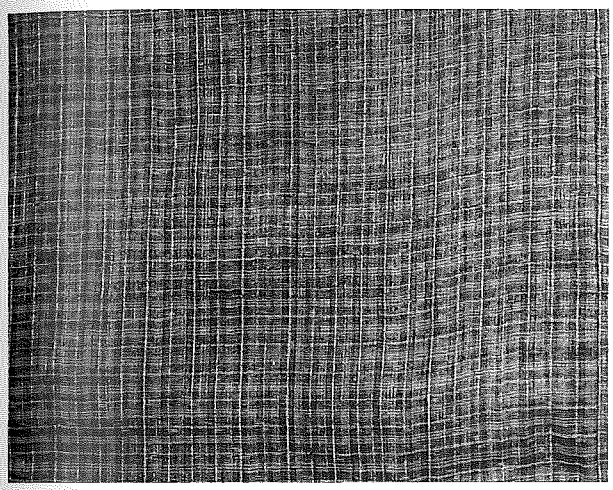
久米島紬裂帖（沖縄県立博物館蔵）



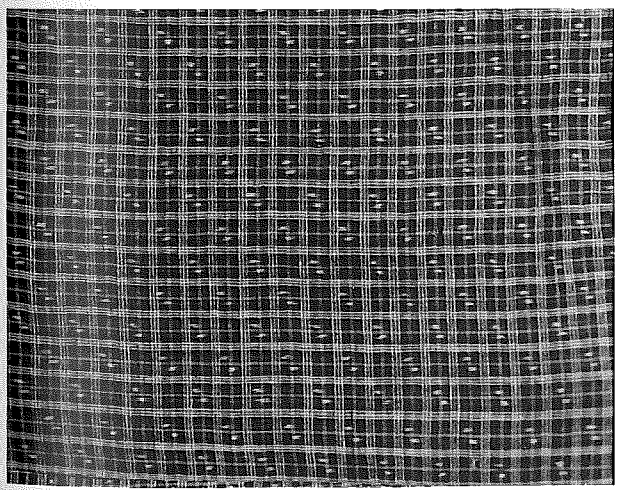
久米島紬裂帖（沖縄県立博物館蔵）



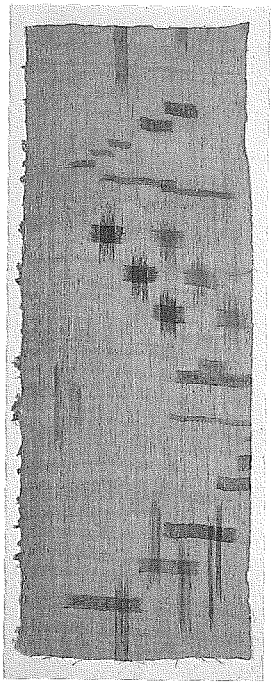
久米島紬裂(格子)（沖縄県立博物館蔵）



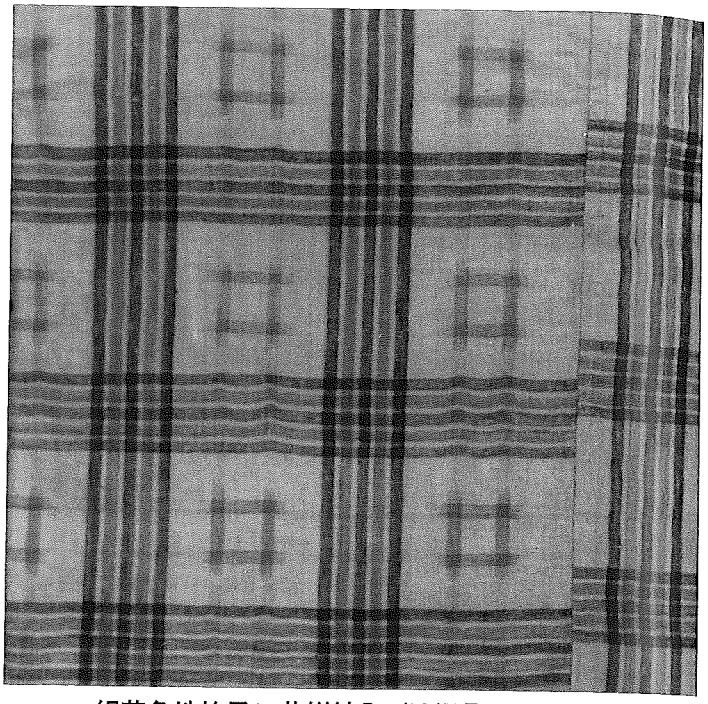
絹灰色地格子に絣上衣（沖縄県立博物館蔵）



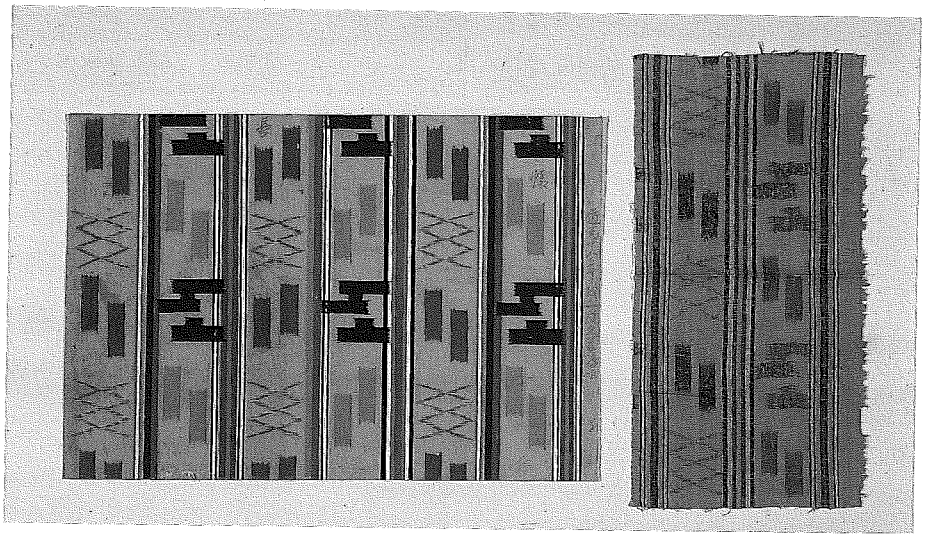
絹焦茶地格子に絣上衣（沖縄県立博物館蔵）



久米島紬裂
（沖縄県立博物館蔵）



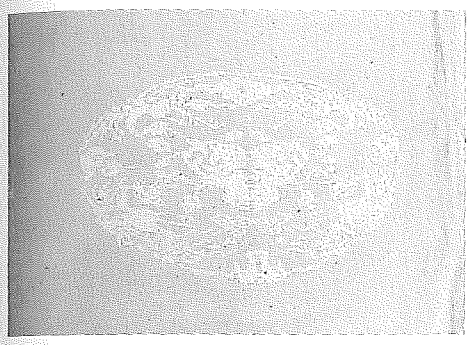
絹黄色地格子に井絣綿入（沖縄県立博物館蔵）



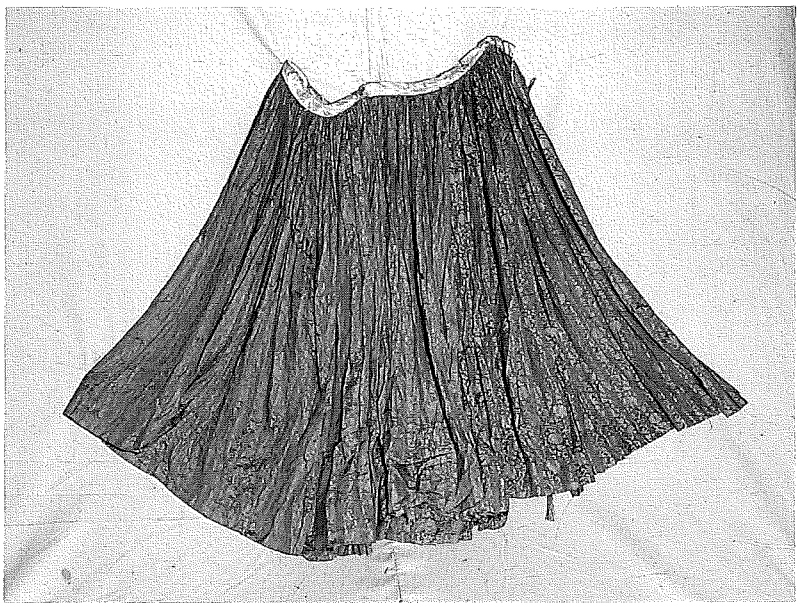
御絵図（沖縄県立博物館蔵）左
久米島紬裂（経縞に絣）（沖縄県立博物館蔵）右



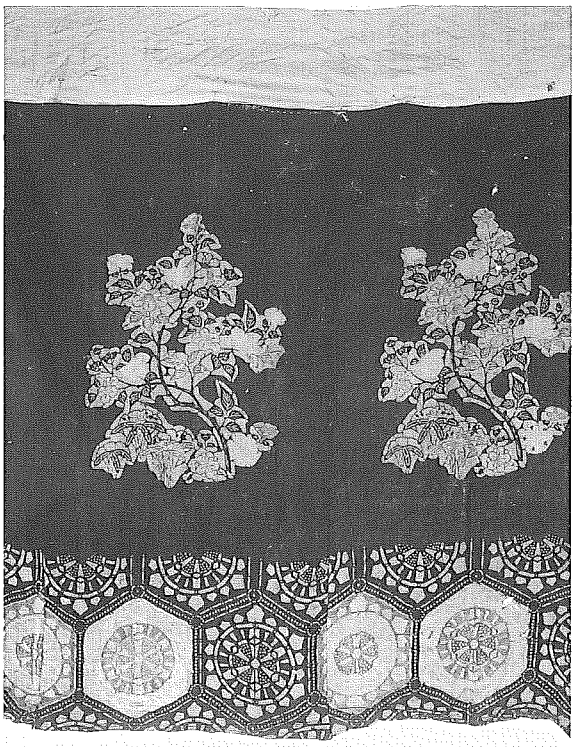
絹薄茶地上衣（山里家蔵）



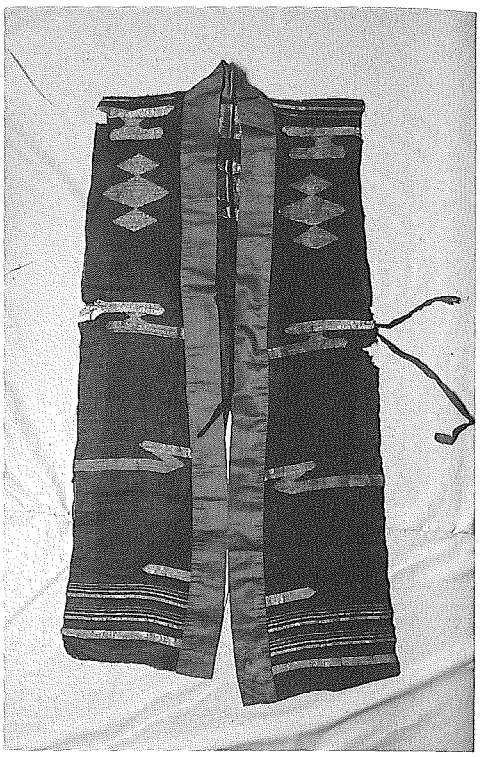
同右部分



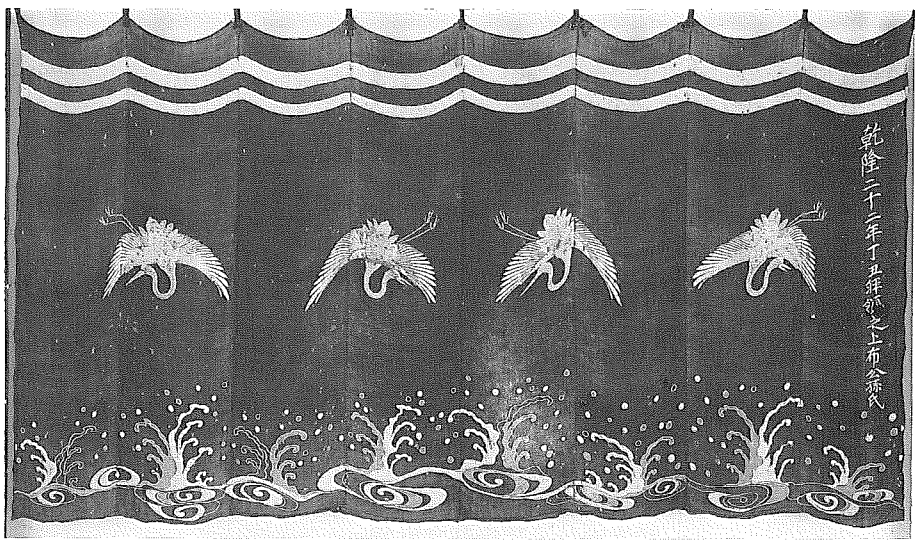
絹浅地牡丹菊唐草文様裙（山里家蔵）



苧麻紺地花文様幕＜部分＞（喜久村家蔵）



絹浅葱地陣羽織（喜久村家蔵）



苧麻紺地波に鶴文様幕＜銘入＞（喜久村家蔵）



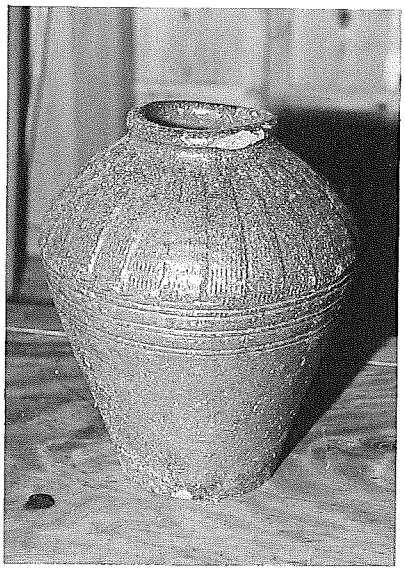
緑漆鳳凰雲点斜格子沈金丸櫃
（山里家蔵）



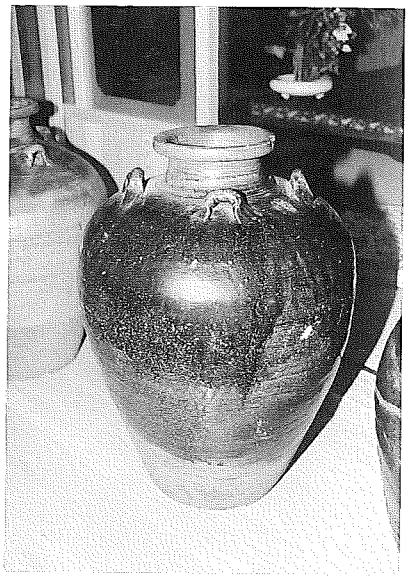
沈金御衣櫃（山里家蔵）



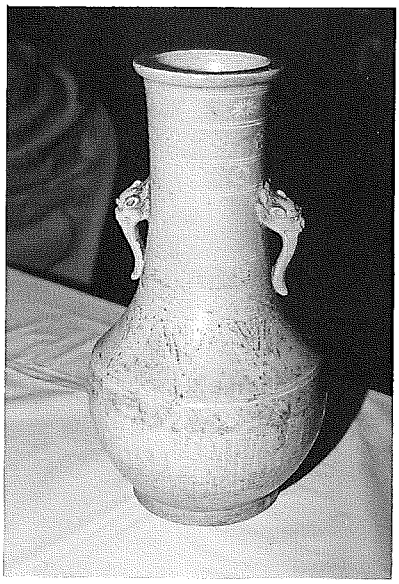
支那南蛮甕（沖野家蔵）



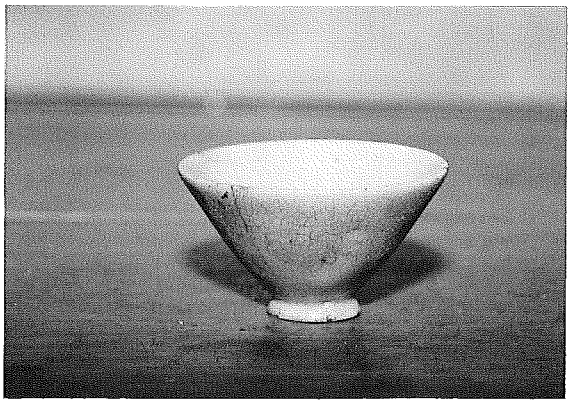
支那南蛮甕（濱川家蔵）



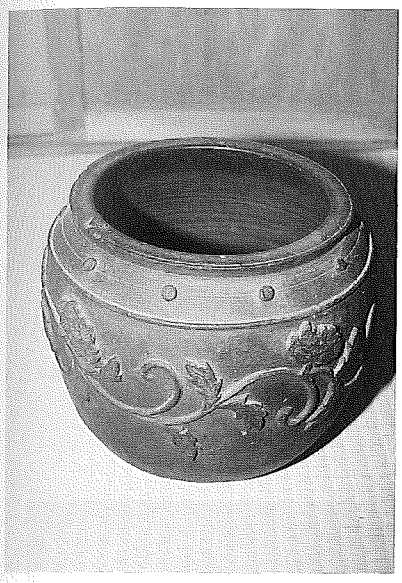
シャム南蛮甕（濱川家蔵）



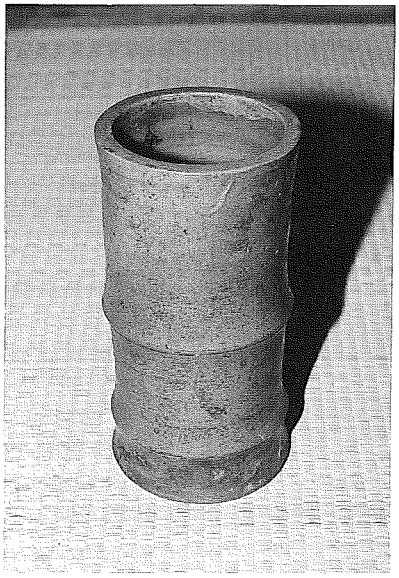
鬼面耳付三島手花生
（山里桂樹・多喜家蔵）



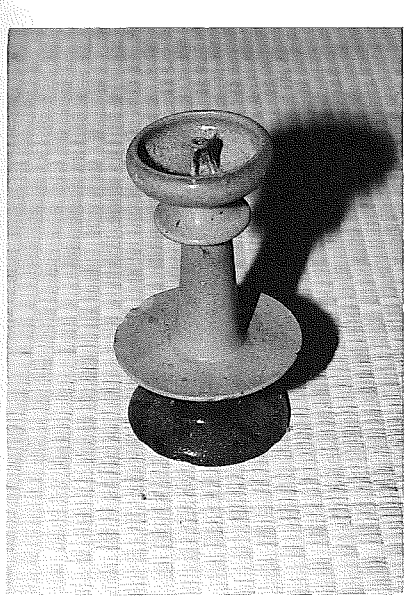
染付盃（与座家蔵）



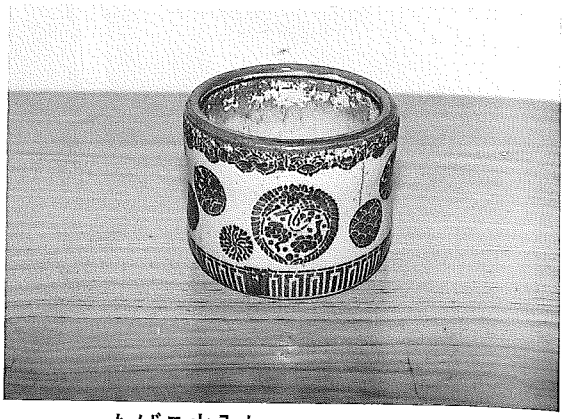
荒焼火鉢（与座家蔵）



筒型花生（沖野家蔵）



灯明台（沖野家蔵）



たばこ火入れ
（久米島博物館建設委員会蔵）



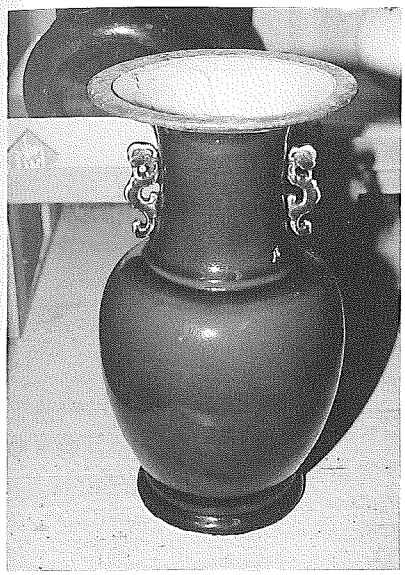
荒焼徳利
（久米島博物館建設委員会蔵）



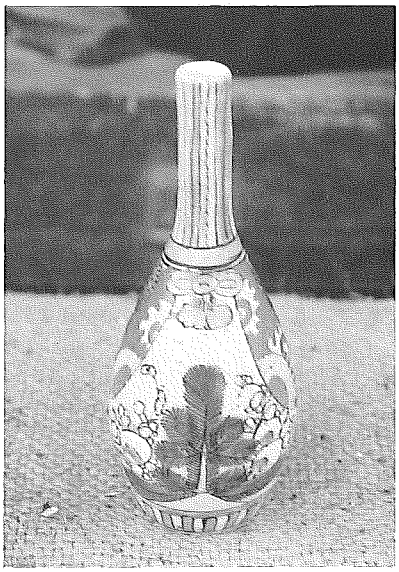
南蛮甕
（久米島博物館建設委員会蔵）



アンダガーミ
（久米島博物館建設委員会蔵）



ルリ釉耳付花生（上江洲家蔵）



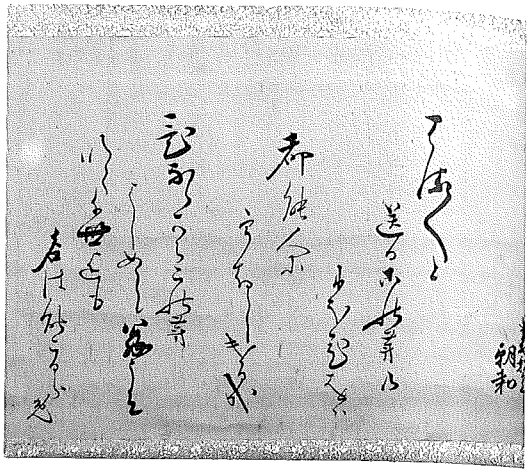
赤絵徳利（上江洲家蔵）



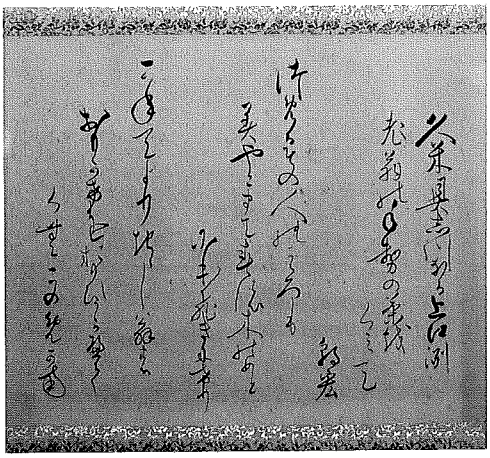
貼付唐草牡丹文花鉢（上江洲家蔵）



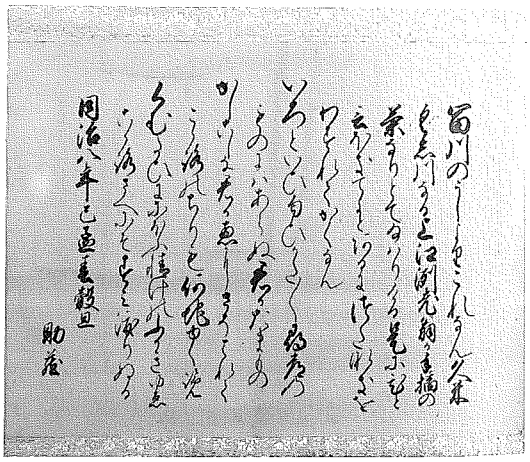
荒焼甕（上江洲家蔵）



紙本墨書・和歌二首／豊村朝勅筆
（上江洲家蔵）



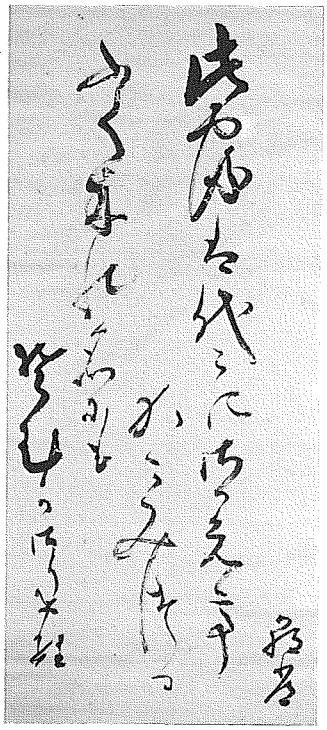
紙本墨書・和歌二首／宜野湾朝宏筆
（上江洲家蔵）



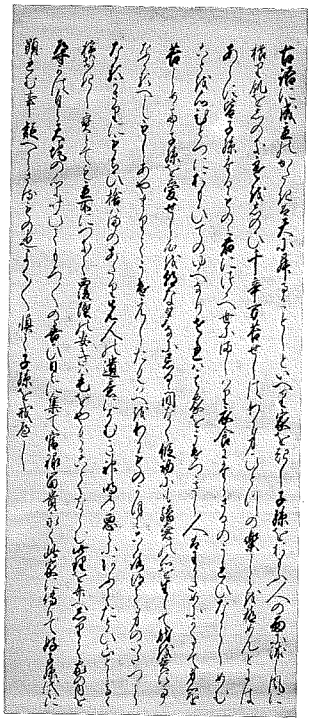
紙本墨書・和歌三首／普天間助蔵筆
（上江洲家蔵）



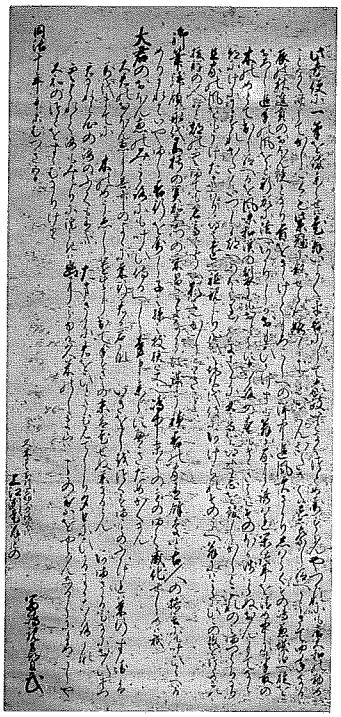
紙本墨書・和歌二首／護得久朝置筆
（上江洲家蔵）



紙本墨書・和歌一首／護得久朝常筆
（上江洲家蔵）



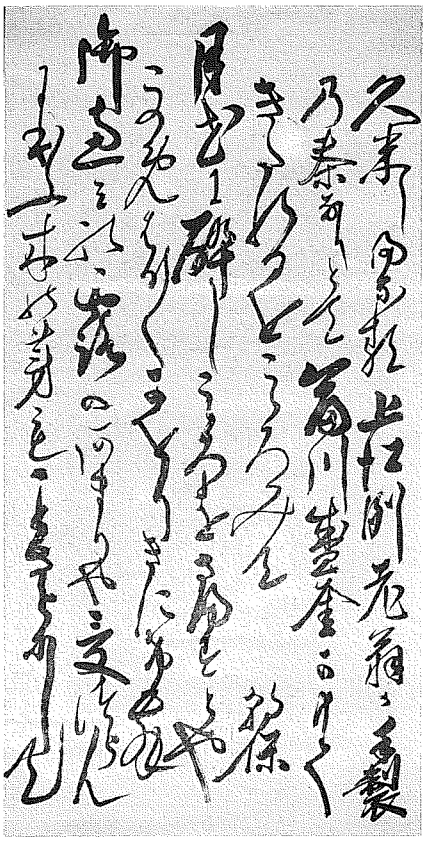
紙本墨書・子孫教訓書
（上江洲家蔵）



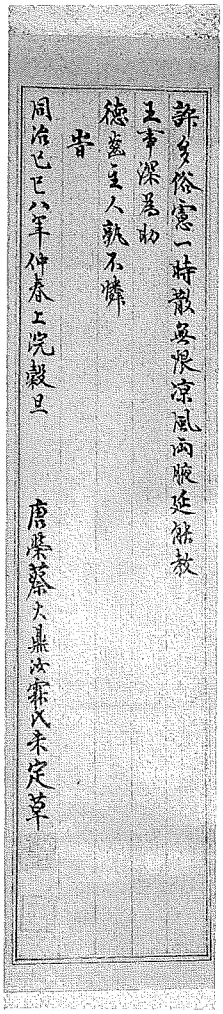
紙本墨書・和歌七首／富島朝直筆
（上江洲家蔵）



紙本墨書・和歌「松竹梅」／渡嘉敷兼副筆
（上江洲家蔵）



紙本墨書・和歌二首／宜湾朝保筆
（上江洲家蔵）



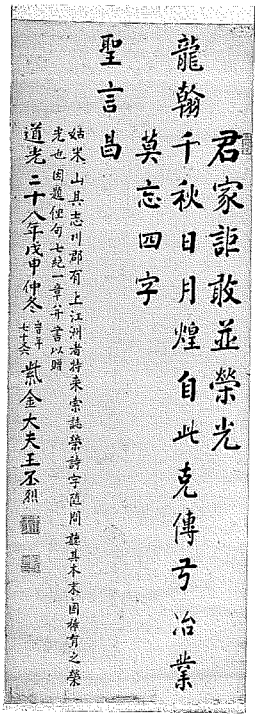
許多俗憲一時散無限涼風兩腋延能教
王事深為助
德蓋主人孰不憐
皆
同治己巳八年仲春上浣穀旦
唐榮蔡大鼎汝霖氏未定草

紙本墨書・蔡德昌書
（上江洲家蔵）

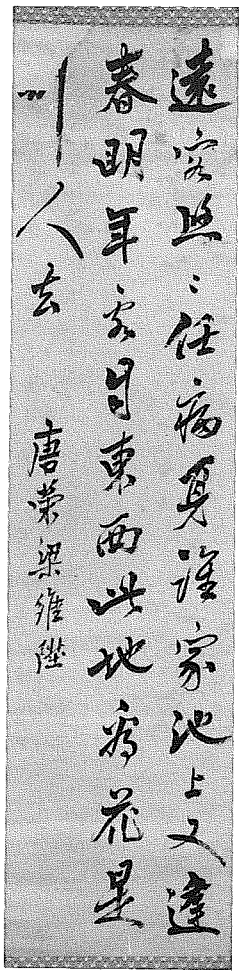


余今寓直 國學協同諸公辦理公務時有 先公大人携帶香茶其惠喫曰此係姑
米島之產 前地頭代上江洲親室上製成寄贈者也宜為之題詞為一傾之下作
覺不減於 中朝極品之風味也因忘固陋聊賦七律里語奉備 雅鑒乞賜
哂政詩曰
聖恩流及米山邊和產龍茅細嚼先淪出淫甌蒙嶺種烹米寶鼎藝林泉
紗窗沸出竹爐湯千片同緘設枕堂蝸島精華雅品第鳩阮草木為尋常舌根已覺天然味鼻觀先
通絕妙香似勝古人錢趙高作歌佗賦生料陽 採擷新芽極品茶產即封獻西鄉家松風入鼎紅以
火檜雨沾瓶綠泛花豈但濃甘粉霜液翻教雀味勝霜華枯腸枝遊久千先厚待爰秦來之
誇 善天汲取消泉清石鼎偏宜活水烹六腑終教睡神公半甌未得暮熱生雖無品入
君謨譜定有漿消禹甌醒鶴嶺仙翁如意製五兩美片永傳名 景文蔡德昌稿併書

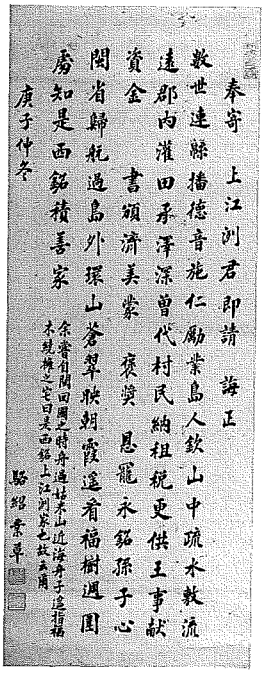
紙本墨書・蔡大鼎書（上江洲家蔵）



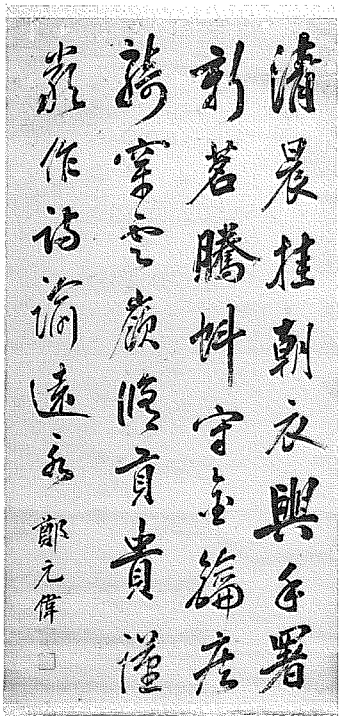
紙本墨書・七言絶句／国馬親方筆
（上江洲蔵家）



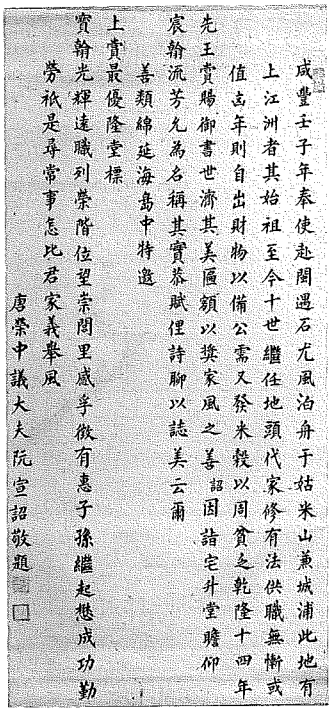
紙本墨書・梁維陞書／梁維陞筆
（上江洲家蔵）



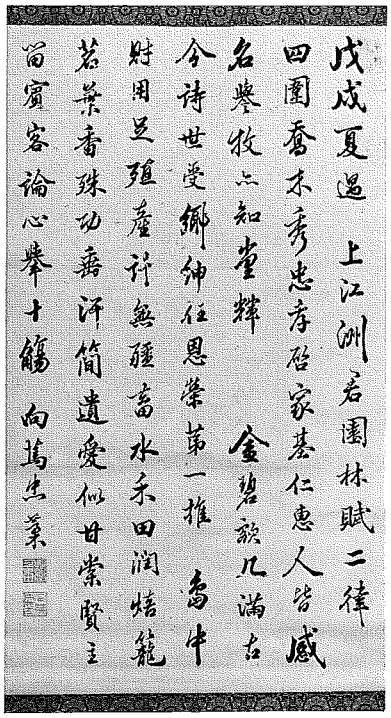
紙本墨書・七言排律／駱紹業筆
（上江洲家蔵）



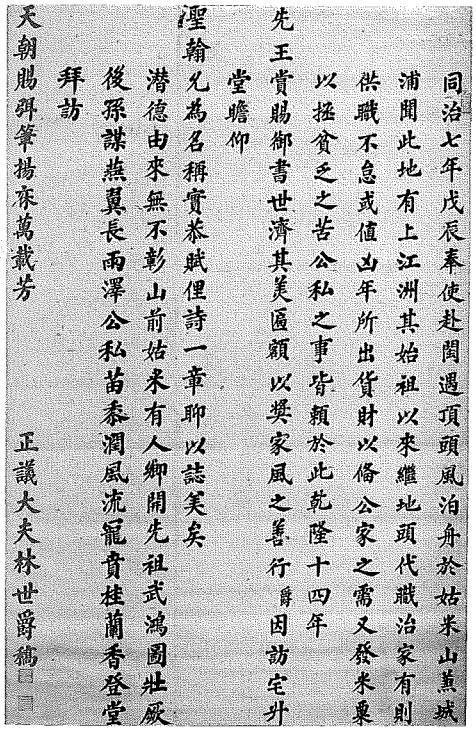
紙本墨書・漢詩／湖城長烈筆
（上江洲家蔵）



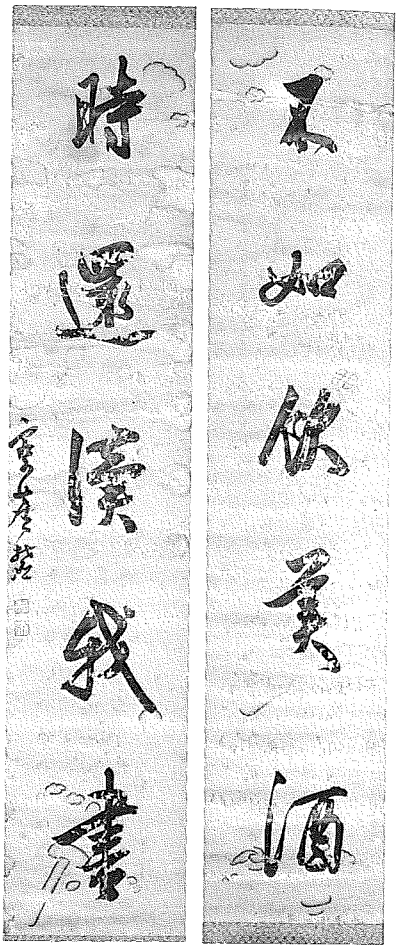
紙本墨書・七言律詩／神村親方筆
（上江洲家蔵）



紙本墨書・五言律詩／向篤忠筆
（上江洲家蔵）



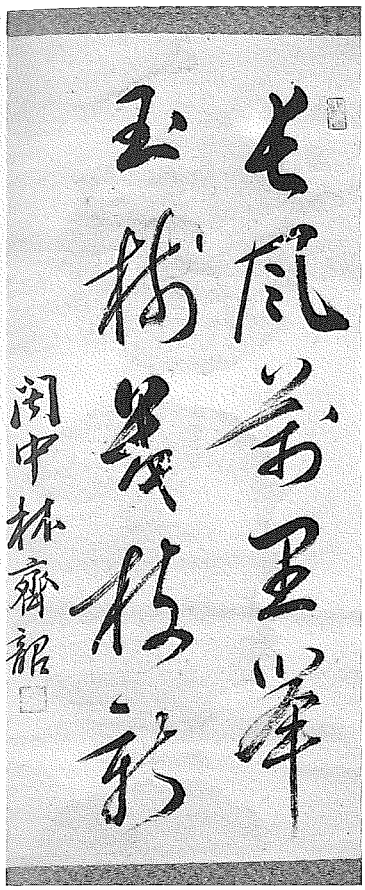
紙本墨書・七言絶句／松本親雲上筆
（上江洲家蔵）



紙本墨書・五言対句(右)／寄塵筆
紙本墨書・五言対句(左)／寄塵筆
(上江洲家蔵)



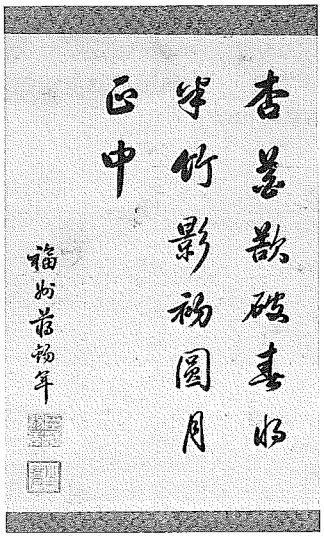
紙本墨書・七言対句(右)／林士傳筆
紙本墨書・七言対句(左)／林士傳筆
(上江洲家蔵)



紙本墨書・五言対句／林斎韶筆
（上江洲家蔵）



紙本墨書・七言絶句／李鼎元筆



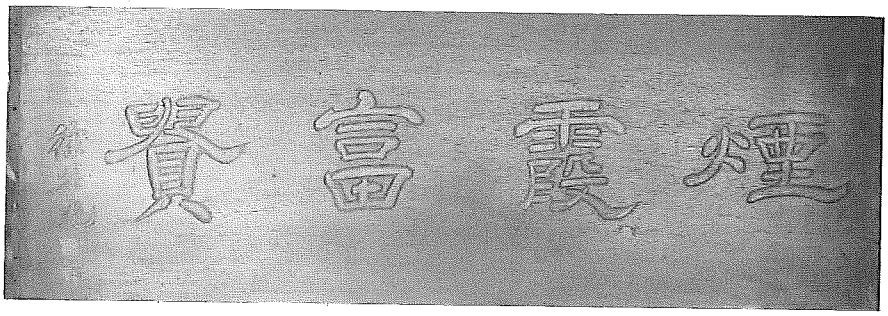
紙本墨書・七言対句／蔣錫年筆
（上江洲家蔵）



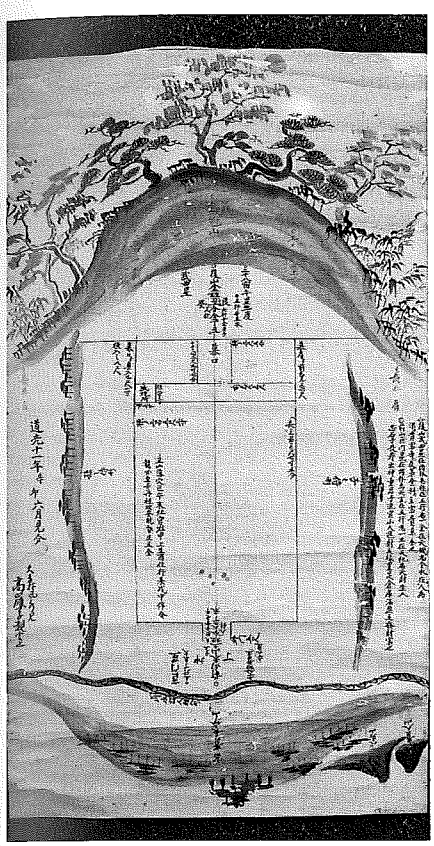
拓本・「世済其美」（上江洲家蔵）



掛床・「福」／全魁筆（喜久村家蔵）



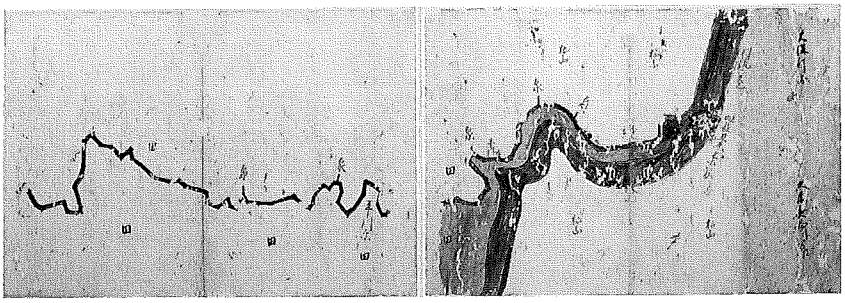
扁額「煙霞富貴」／徐葆光（上江洲家蔵）



紙本淡彩・上江洲家美里川墓之図
（上江洲家蔵）



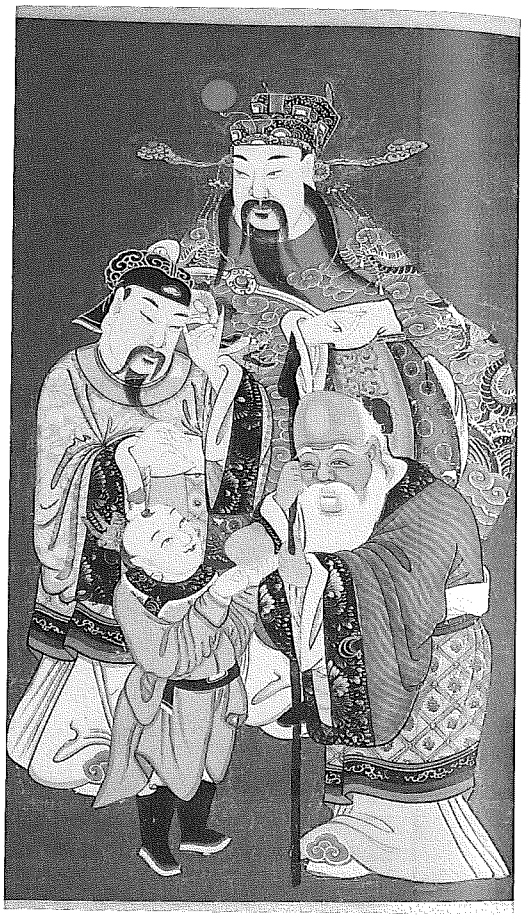
紙本淡彩・山水図／馮泉筆
（上江洲家蔵）



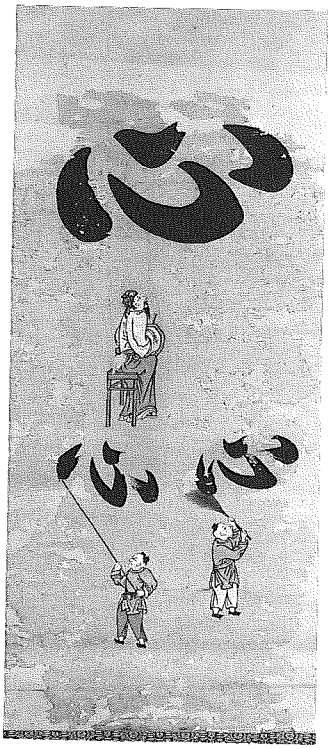
紙本淡彩・久米島水路図（上江洲家蔵）



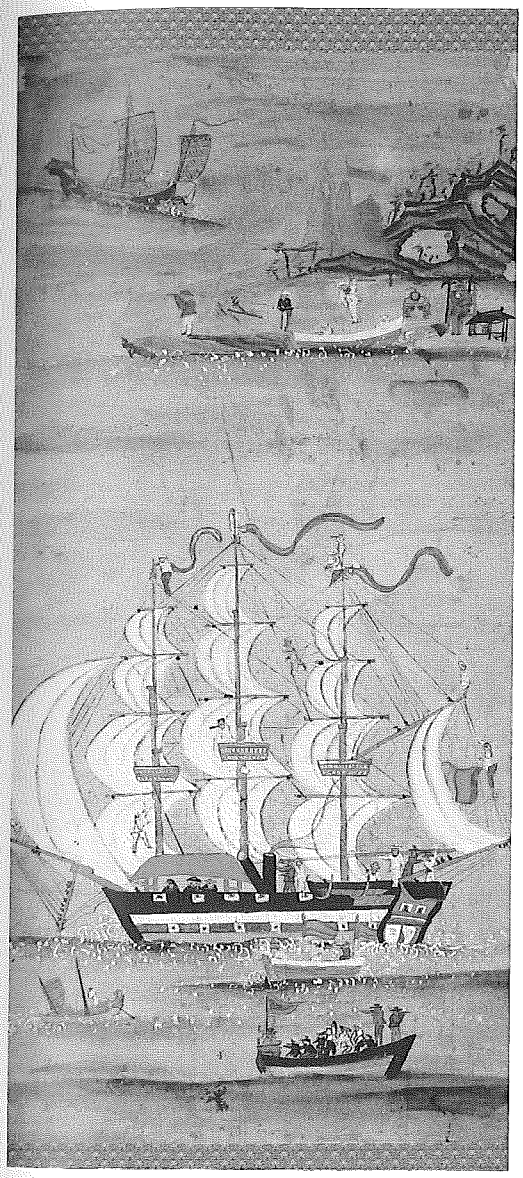
紙本著色・子母勉学の図
（上江洲家蔵）



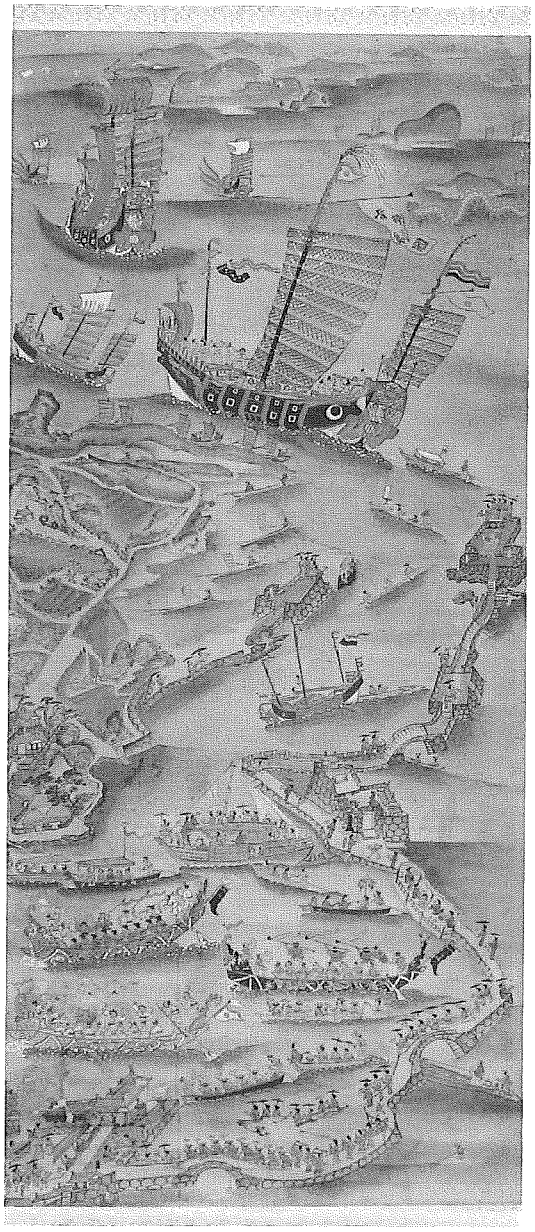
紙本著色・福禄寿（上江洲家蔵）



紙本著色・「心」字入図
（上江洲家蔵）



紙本著色・西洋船の図（上江洲家蔵）



紙本著色・進貢船の図（上江洲家蔵）



絹本淡彩・寿老人／伝自了（上江洲家蔵）



紙本墨画・蓮の図／長嶺華国筆
（上江洲家蔵）



絹本著色・花鳥図／孫億筆（喜久村家蔵）



紙本著色・片目地頭代潔聡肖像画
（喜久村家蔵）

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一三	久米島紬裂（経縞に絣）＊	一枚	縦三二・〇　横一六・五			①紬②平織③経縞に絣／黄色地④久米島への御絵図と同柄／王家旧蔵品
一四	久米島紬裂（経緯絣）	一枚	縦一五・〇　横三九・〇			①紬②平織③経緯絣④御絵図に同柄あり
一五	久米島紬裂（経緯絣）＊	一枚	縦四六・〇　横一六・〇			①紬②平織③経緯絣④御絵図に同柄あり
一六	久米島紬裂（格子）＊	一枚	縦二七・六　横三七・〇		中破	①紬②平織③格子縞
一七	久米島紬裂帖＊	一冊	縦二七・二　緯三二・二　二〇面			①紬②平織③経縞・格子・絣④裂六一枚
一九	紬見本帳＊	一冊	縦三一・二　横二三・五　頁二七	一九二四年		①紬②平織③絣・縞④久米島紬織物同業組合発行／見本裂と製作者名が記されている
二〇	御絵図（経緯絣）	一枚	縦二七・六　緯三九・三			①紙本着色④絣模様の図案／銘）子二月久米嶋
二一	御絵図（経緯絣）	一枚	縦二七・八　緯三七・八	一八四〇年		①紙本着色④絣模様の図案／銘）道光二十三年卯二月久米嶋江御通
二二	御絵図（経縞に絣）＊	一枚	縦二六・四　緯三八・七	一八三八年		①紙本着色④絣模様の図案／銘）道光十八年戊二年久米嶋江
二三	型染裂（菊花鎖繋文胴衣裂）	一幅	縦五四・六　横三〇・二			①平絹②平織③型染④伝伊敷索按司家衣裳の裂との伝承あり
二四	型染裂（亀甲文）	一幅	縦三四・〇　横二七・五			①平絹②平織③型染④神女衣裳裂との伝承あり

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
三二	アンダガーミ	一口	高二四・五　径一七・六			四耳
三三	アンダガーミ	一口	高一八・五　径一四・〇			四耳
三四	アンダガーミ	一口	高二四・五　径一六・七			四耳
三五	荒焼甕	一口	高四二・〇　径三三・一			

【染　織】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	絹焦茶地経緯絣上衣＊	一領	丈一二一・〇　裄五八・〇	一八九〇年		①紬②平織③経緯絣④田原家（仲里村儀間）旧蔵

沖縄県立博物館（那覇市首里）

【染　織】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	経縞久米縞紬袷上衣	一領	丈一三六・〇　裄六三・〇			①紬②平織③経縞
二	絹焦茶地格子に絣上衣＊	一領	丈一二七・五　裄六三・〇		中破	①紬②平織③格子に絣（手縞）／泥染④仕立直し
三	絹灰色地格子に絣上衣＊	一領	丈一二九・〇　裄六八・五		中破	①紬②平織③格子に絣（手縞）／ユウナ染
四	絹黄色地格子に井絣綿入＊	一領	丈八三・二　裄六三・八			①紬②平織③経緯絣／格子・井絣④王家旧蔵品・仕立直し
五	絹焦茶地経縞絣久米島紬袷上衣	一領	丈一二〇・〇　裄六〇・〇			①紬②平織③経縞に絣・ヌチグム
六	絹焦茶地経縞絣久米島紬袷上衣	一領	丈一三〇・〇　裄五八・四			①紬②平織③経縞に絣・ビーマ・トゥイグワー
七	絹焦茶地総絣久米島紬袷上衣	一領	丈九五・〇　裄五六・六			①紬②平織③絣・バンジョー・トゥイグワー・タダヌー
八	絹焦茶地総絣久米島紬袷上衣	一領	丈一〇八・四　裄六三・〇			①紬②平織③絣・ビックー
九	久米島紬絣羽織	一領	丈六〇・〇　裄六一・〇			①紬②平織③絣
一〇	久米島紬絣羽織	一領	丈九八・〇　裄六六・〇	一九三七年		①紬②平織③格子・グバン
一一	久米島紬絣着物	一領	丈九四・五　裄五八・〇		中破	①紬②平織
一二	久米島紬格子着物	一領	丈一〇三・五　裄六七・五			①紬②平織③格子

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
五	たばこ火入れ	一口	高八・四　口径一〇・八			
六	たばこ火入れ	一口	高八・五　口径一〇・三			
七	ミジクブサー	一口	高一四・三口径三〇・五			
八	たばこ火入れ	一口	高九・〇　口径一一・三			
九	たばこ火入れ	一口	高八・〇　口径一〇・五			
一〇	菊花型たばこ火入れ	一口	高八・〇　口径一一・〇			
一一	陶器制湯たんぽ	一口	高一三・三　長二八・五			
一二	たばこ火入れ	一口	高八・一　口径一一・三			
一三	飴釉おちょこ	一口	高四・五　口径八・〇			
一四	アンダガーミ	一口	高二七・〇　径二一・二		四耳	
一五	アンダガーミ	一口	高二六・五　径一五・六		四耳	
一六	アンダガーミ	一口	高一六・〇　径二〇・六		四耳	
一七	アンダガーミ	一口	高二六・五　径一九・六		四耳	
一八	シャム南蛮甕	一口	高六一・〇　径四二・九		四耳	
一九	シャム南蛮甕	一口	高五八・〇　径四三・二		四耳	
二〇	荒焼甕	一口	高五五・〇　径四七・五			
二一	荒焼甕	一口	高五八・〇　径三九・七		小破	四耳・耳の一部破損
二二	荒焼甕	一口	高四六・五　径二六・八			二耳
二三	南蛮甕	一口	高四三・五　径三三・七		小破	六耳・口の部分一部破損
二四	荒焼甕	一口	高五〇・〇　径三七・三			口の部分大きく楕円状に変形
二五	ルソン南蛮	一口	高六四・〇　径五二・三		中破	胴に大きなひび割れ有り
二六	ルソン南蛮	一口	高六四・〇　径五一・八		中破	胴に大きなひび割れ有り
二七	荒焼き	一口	高四五・〇　径二八・一			
二八	荒焼甕	一口	高四〇・〇　径二四・六			四耳で一部破損
二九	荒焼甕	一口	高四五・〇　径二九・〇			胴の一部セメントで修復跡有り
三〇	御殿型厨子甕	一口	高八二・〇　経三九・〇			
三一	アンダガーミ	一口	高二三・〇　径一七・一			四耳

沖野周昴（仲里村字真謝）
【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	筒型花生	一口	高二五・八　口経一二・八			
二	黒釉抱甕	一口	高一一・〇　径一六・二 口経三・三			
三	支那南蛮甕	一口	高四八・五　径三三・四			
四	荒焼甕	一口	高三四・〇　径六・〇五			四耳・耳全て欠損
五	灯明台	一基	高一五・三　径八・〇八 口経六・三			
六	角瓶	一口	高九・五　径一四・三 口経一・八			
七	皿	一口	高六・〇　口経一五・五			
八	皿	一枚	高五・七　口経二六・〇			
九	花差し	二口	高一五・五　径八・一四 口経七・八			二個セット
一〇	香炉	一口	高　径一〇・四			
一一	壺	一口	高　径三五・三			
一二	荒焼甕	一口	高　径六五・五			四耳・耳破損

久米島博物館建設委員会（仲里村／具志川村）
【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	茶壷	一口	高八・〇　径一六・八			口の部分を錫で補修有り
二	荒焼徳利	一口	高二一・〇　径一五・二			口の部分を錫で補修有り
三	荒焼徳利	一口	高二〇・〇　径一四・八			口の部分破損有り
四	荒焼徳利	一口	高一九・五　径一三・三		小破	

仲村栄治（仲里村字宇根）

【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	練土手角甕	一口	高五・八　縦六・四　横一一・三			
二	飴釉流竹筒型花生	一口	高二九・三　径一三・八			
三	喜名焼壷	一口	高三五・五　径一〇・〇			

仲原善周（仲里村字真謝）

【漆　器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	朱漆藤文箔絵鞍	一点	前輪／高二三・〇　幅三四・五　後輪／高二〇・〇　幅四一・五　総長三五・〇			
二	朱漆飯櫃	一合	高一二・〇　径二二・五			
三	朱漆湯桶	一口	高一四・五　径一三・五			

【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	飴釉竹筒型花生	一口	高二九・八　径一五・二			
一	三彩からから	一口	高一四・六　径六・一			

本永昌松（具志川村字仲地）

【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	荒焼甕	一口	高七二・〇　径四六・七			

与座周一（仲里村字真謝）

【漆　器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	春慶塗紅葉松葉漆絵茶箱	一合	高さ一二・二 縦一一・三　横一九・八			
二	春慶塗堆錦花唐草鞍	一点	前輪／高さ二三・五 幅三三・八 後輪／高さ一八・三 幅四〇・五			

【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
三七	人形水差し	一口	高七・〇　口径四・八			重ね焼きの跡有り
二	皿	一枚	高五・七　口径八・六			
三	緑釉	一	高八・二　口径八・八		中破	取って破損・蓋なし
四	碗	一口	高六・七　口径一一・三			蓋付き
五	たる型容器	一口	高一五・六　径一四・五			蓋付き
六	急須	一口	高一一・〇　径一〇・五 口径六・八		中破	取って破損・蓋付き
七	急須	一口	高一一・〇　口径五・四		中破	取って破損・蓋付き
九	荒焼火鉢	一口	高二六・〇　径三〇・七			
一〇	火鉢	一口	高二七・五　径三三・九			
一一	飴釉小壺	一口	高一六・五　径一五・五		小破	口の部分破損
一二	荒焼甕	一口	高三五・〇　径二六・六		小破	口の部分破損
一三	おちょこ	一口	高三・六　口径六・四 径二六・一			

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一〇	チュウカ	一	高一六・五　径一八・一		中破	取手・口の部分破損・蓋なし
一一	シャム南蛮甕	一	高五九・〇　径四一・四			四耳
一二	シャム南蛮甕	一	高六三・〇　径四一・三			四耳
一三	シャム南蛮甕	一	高六一・〇　径四〇・九			
一四	古典焼	一	高二〇・〇　径一六・七			四耳
一五	ルソン南蛮甕	一	高三四・〇　径三四・二			四耳
一六	灰釉碗	一	高六・〇　口経一二・二			
一七	灰釉碗	一	高六・五　口経一三・〇			
一八	鉢	一	高一〇・八　口経二三・一			
一九	アンダガーミ	一	高二四・〇　径一七・三			四耳
二〇	からから	一	高六・五　口経一三・〇		小破	注ぎ口欠損
二一	ちゅうか	一	高六・五　径九・〇四		小破	
二二	赤絵碗	一	高六・〇　口経一二・五			
二三	碗	一	高六・三　口経一四・二		小破	縁の一部破損
二四	荒焼徳利	一	高三一・五　径二四・一		小破	口の部分破損
二五	荒焼徳利	一	高三〇・五　径一四・〇		小破	口の部分破損
二六	荒焼徳利	一	高三二・〇　口経一九・〇		小破	口の部分破損
二七	荒焼甕	一	高四四・〇　径二八・四			三耳
二八	アンダガーミ	一	高二九・五　径二一・二			四耳
二九	アンダガーミ	一	高二一・〇　径一六・〇			四耳

【染　織】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	賞状	一枚	B4版	一九〇七年		「紬一等」吉永カメ授与／島尻群教育品展覧会発行：斉藤用之助／明治四〇年
二	紬見本帳	一冊	B5版	一九〇七年		濱川カメ（S五八年没）が書き留めた紬のノート

【その他】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	金網製角台	一台	高二・〇縦一八・八 横一八・八			金網にビーズ玉花模様の足付角皿状、文書一枚
二	竹製蓋物	一合	計測不可		大破	
三	急須	一合	高二〇・六　径一五・八			
四	べっ甲製匙	一点	高一二・〇			
五	べっ甲製匙	一点	高一〇・二			
六	べっ甲製匙	一点	高九・〇			
七	耳付盃	一口	高三・三　径五・六			
八	蓋物	一合	高五・二　径一四・六			
九	茶せん	一点	長一〇・六			
一〇	べっ甲製盃	一口	高二・七　径四・五			
一一	仏壇戸板	一枚	縦五七・〇　横一六・〇			

濱川昌世（具志川村字仲地）

【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	茶壷	一	高一七・〇　径一三・三			
二	アンダガーミ	一	高一二・五　径一〇・二			蓋付き
三	からから	一	高一三・五　径一四・一			
四	徳利	一	高二五・五　径一四・八			
五	嘉瓶	一	高二八・〇　径一一・二			
六	古典焼	一	高二二・〇　径一二・三			四耳
七	飴釉コバルト筒形花生	一	高二六・五　口経一一・六			
八	支那南蛮壷	一	高三一・〇　径二六・五		小破	口の部分わずかに破損有り
九	シャム南蛮甕	一	高四九・〇　径三七・五			

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
四八	絹浅地緞子袷胴衣	一領	丈七五・二　裄七一・二		大破	①平絹②綾織地に綾紋③瑞雲に鶴④（裏）絹薄茶地紗綾：菱繋に草花文
四九	苧麻絹薄茶地格子胴衣	一領	丈七二・三　裄六九・三		小破	①地苧麻縞絹②平織（格子）
五〇	苧麻薄茶地格子胴衣	一領	丈七六・〇　裄六九・〇		小破	①苧麻②平織（格子）
五一	絹芭蕉深浅地胴衣	一領	丈八七・五　裄八〇・〇		中破	①経絹緯芭蕉②平織③藍の後染
五二	絹緑地紗綾胴衣	一領	丈八五・四　裄七四・六			①平絹②平織地に綾紋③牡丹唐草の丸
五三	絹芭蕉浅地胴衣	一領	丈八〇・九　裄七一・三		小破	①経平絹緯芭蕉②平織③藍の後染
五四	絹苧麻浅地格子上衣	一領	丈一四七・一　裄八〇・〇		中破	①経平絹緯苧麻②平織（格子）③地色は後染
五五	絹苧麻経縞上衣	一領	丈一三九・〇　裄七六・三		大破	①経平絹緯苧麻②平織（経縞）
五六	苧麻浅地上衣	一領	丈一四四・七　裄八五・六		小破	①苧麻②平織
五七	苧麻浅地流水に千鳥文様上衣	一領	丈一三九・六　裄八〇・六		中破	①苧麻②平織③型染（片面染）
五八	芭蕉紺地経縞上衣	一領	丈一三九・〇　裄七四・〇		大破	①芭蕉②平織（経縞）
五九	苧麻白地経縞上衣	一領	丈一三七・〇　裄六九・〇		中破	①苧麻②平織（経縞）
六〇	絹芭蕉浅地上衣	一領	丈一二二・七　裄七一・〇		大破	①経平絹緯芭蕉②平織③藍の後染
六一	苧麻浅地上衣	一領	丈一二三・二　裄六四・五		中破	①苧麻②平織
六二	絹芭蕉経縞上衣	一領	丈一四五・七　裄八一・三		中破	①経平絹緯芭蕉②平織（経縞）③縞は藍染
六三	木綿白地足袋	一足	幅一〇・〇　長二二・五 高一三・〇		中破	①木綿②平織
六四	黄冠（ハチマチ）	一個	高一二・三　径二〇・〇		中破	①絹②平地綾文③菊・紗綾形④櫃あり
六五	黄冠（ハチマチ）	一個	高一〇・一　径二一・四		中破	①絹②繻子地平文（綸子）③牡丹唐草④櫃あり
六六	緑冠（ハチマチ）	一個	高一一・九　径一九・七		小破	①絹②平地綾文③紗綾形
六七	赤冠（ハチマチ）	一個	高一二・五　径二〇・五		中破	①絹②縮緬
六八	型紙	一枚	縦二〇・八　横四六・〇		中破	①紙③染地型／桜芒文
六九	型紙	一枚	縦二六・〇　横四二・〇		大破	①紙③染地型／梅唐草文
七〇	久米島紬絣模様図案	18枚	縦二八・八　横三八・〇			①紙③久米島紬絣模様④島尻女子工業徒弟学校染色実習で使用されたものか？

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
二二	苧麻浅地格子上衣	一領	丈一三二・五　裄七三・〇		中破	①苧麻②平織（格子）
二三	絹浅地綾織胴衣	一領	丈七五・八　裄七三・四		小破	①平絹②平織③藍の後染
二四	芭蕉格子胴衣	一領	丈七八・五　裄三一・〇		中破	①芭蕉②平織（格子）
二五	絹浅地綾織ハカマ	一領	丈七五・八　胴九二・〇		小破	①平絹②平織地に綾紋③ザクロの花と実／藍の後④下着
二六	絹金茶地上衣	一領	丈一三五・六　裄九〇・〇		中破	①平絹②平織
二七	絹つなぎあわせ覆	一点	縦八四・〇　横八〇・〇		大破	①表）平絹の裂16種類つなぎあわせ　裏）苧麻
二八	木綿絹青地仕立帯	一点	幅一四・三　長一一三・〇		中破	①経木綿緯絹②平織③藍染
二九	木綿黒地帯	一点	幅一七・〇　長四四一・〇		中破	①木綿②平織③藍染・墨
三〇	苧麻白地ハカマ	一領	丈七七・〇　胴一二三・〇		中破	①苧麻②平織
三一	苧麻紺地上衣（黒朝衣）	一領	丈一三二・〇　裄七二・五		大破	①苧麻②平織③藍染④男性の礼服
三二	芭蕉深浅地ハカマ	一領	丈七三・〇　胴八二・〇		中破	①芭蕉②平織③藍の後染④紐は苧麻
三三	絹浅地緞子帯	一点	幅一五・五　長一三八・八		小破	①平絹②綾織地に綾紋③菊唐草
三四	四流旗（苧麻白地）	一枚	縦七二・三　横三九・〇			①苧麻②平織③手描染
三五	四流旗（苧麻白地）	一枚	縦七二・〇　横三八・五			①苧麻②平織③手描染
三六	四流旗（苧麻白地）	一枚	縦七二・四　横三八・五			①苧麻②平織③手描染
三七	四流旗（苧麻白地）	一枚	縦七二・七　横三八・五			①苧麻②平織③手描染
三八	四流旗（苧麻白地）	一枚	縦七三・五　横三八・五			①苧麻②平織③手描染
三九	苧麻白地菊鉄線花文様藍型風呂敷	一枚	縦一四九・七横一一九・八			①苧麻②平織③藍型染
四〇	木綿白地ハカマ	一領	丈八三・〇　胴九六・〇			①木綿②平織
四一	木綿白地ハカマ	一領	丈八六・五　胴九八・〇			①木綿②平織
四二	木綿白地ハカマ	一領	丈八二・五　胴九六・〇			①木綿②平織
四三	芭蕉格子ハカマ	一領	丈七六・〇　胴六八・八		小破	①芭蕉②平織（格子）
四四	絹芭蕉胴衣	一領	丈七八・八　裄六九・三		中破	①経絹緯芭蕉②平織
四五	絹芭蕉ハカマ	一領	丈八〇・〇　胴七一・〇		中破	①経絹緯芭蕉②平織
四六	絹薄茶地格子胴衣	一領	丈八七・五　裄七二・〇		中破	①平絹②平織（格子）③縞は藍染
四七	絹薄茶地格子ハカマ	一領	丈八二・五　胴五八・〇		大破	①平絹②平織（格子）③縞は藍染

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	久米島紬裂地帖	一冊	縦二七・二　横三二・二		中破	①紬②平織③経縞・格子・格子に絣／五九裂④一八面／繋ぎがとれてバラバラになっている
二	絹芭蕉浅地ハカマ	一領	丈七七・八　胴七七・〇		中破	①平絹②平織③藍の後染④下着
三	木綿白地ハカマ	一領	丈六一・〇　胴一〇一・〇		小破	①木綿②平織③下着
四	絹白地胴衣	一領	丈七七・四　胴七〇・六		小破	①平絹②平織
五	芭蕉紺地上衣（黒朝衣）	一領	計測不可能		大破	①芭蕉②平織③藍染④男性の礼服
六	苧麻浅地上衣	一領	丈一一三・〇　裄六四・〇		小破	①苧麻②平織③藍の後染
七	芭蕉胴衣	一領	丈八一・〇　裄六三・〇		大破	①芭蕉②平織
八	苧麻浅地波桐の丸文様幕	一枚	縦一七三・〇　横一九七・〇		中破	①苧麻②平織③型染／波・桐の丸／藍のつけ染め
九	苧麻浅地上衣	一領	丈一三五・〇　裄七二・〇		中破	①苧麻②平織③藍の後染
一〇	苧麻浅地上衣	一領	丈一三三・〇　裄六九・〇		中破	①苧麻②平織③藍の後染
一一	木綿浅地波千鳥文様袷上衣	一領	丈一三八・六　裄八〇・〇		小破	①木綿②平織③型染（細模様）／表）千鳥・松葉小花・波／裏）雲小花散らし文様
一二	苧麻白地幕	一枚	縦九四・〇　横八〇八・〇		小破	①経苧麻緯芭蕉②平織④弔事用
一三	苧麻白地幕	一枚	縦九五・〇　横八〇〇・〇		小破	①苧麻②平織④弔事用
一四	苧麻白地幕	一枚	縦一一〇・〇横三三四・八		中破	①苧麻②平織③裾に綾織の絹布（雲に鳳□文）
一五	絹青地綾織帯	一点	幅一七・八　長四五五・〇		小破	①平絹②平織地に綾紋③雲・唐草・瓢箪・団扇・剣・花・花瓶
一六	絹黄色地緯錦帯	一点	幅一五・六　長四三二・〇		小破	①平絹②繻子地に緯錦③四爪龍・花・市松・紗綾形・鱗文
一七	絹黄色地孔雀文縫取織裂	一点	幅四〇・三　長三九三・〇		小破	①紬②平織に縫取織③5種類の文様パターンあり（花・四つ足の動物孔雀・縞等）④帯をほどいたものか・地機織か？
一八	苧麻緑地裂	一点	幅三六・八　長一八六・八		小破	①苧麻②平織③黄色で先染し
一九	芭蕉緑地裂	一点	幅三六・六　長三六五・〇		小破	①芭蕉②平織③黄色で先染し
二〇	絹茶地裂	一点	幅三六・四　長二九四・〇			①紬②平織
二一	絹茶地裂	一点	幅一八・〇　長四九五・〇			①紬②平織

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
八〇	染付湯飲	一口	高六・一　径九・二			
八一	染付湯飲	一口	高五・九　径九・二			
八二	染付湯飲	一口	高六・〇　径九・二			
八三	染付湯飲	一口	高五・八　径九・〇			
八四	染付湯飲	一口	高五・七　径九・〇			
八五	そば猪口	一口	高五・五　径六・〇			
八六	湯飲	一口	高五・五　径九・五			
八七	赤絵小鉢	一口	高四・八　径一一・六			
八八	盃	一口	高五・七　径七・〇			
八九	盃	一口	高一・五　径三・二			
九〇	緑釉盃	一口	高二・六　径四・五			
九一	蓋	一合	径一四・0			
九二	赤絵小鉢	二口	高一七・六　径一・八			
九三	紫泥徳利	一口	高七・二　径八・四			
九四	鮫肌釉小壷	一口	高八・四　径二・五			
九五	鮫肌釉小壷	一口	高八・〇　径二・五			
九六	染付碗	一口	高八・〇　径一四・八			見込部分に「寿」の文字
九七	赤絵小壷	一口	高五・五　径二・二			
九八	染付八角鉢	一口	高六・七　径一五・四			
九九	盃	四口	高一・五　径三・二		小破	一点は口縁部一部欠
一〇一	ルリ釉花生	二口	高一七・〇　径五・四		小破	底部一部欠
一〇二	灯明	二台	高四・五　径五・八			蓋付き
一〇三	茶壷	一口	高／二四・八　径／一四・四			
一〇四	茶家	一口	高／一〇・六 （蓋共）径／七・五			

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
五四	徳利	一口	高一六・〇　径三・〇			
五五	巴紋湯飲(一)	一口	高六・〇　径九・六			
五六	巴紋湯飲(二)	一口	高六・〇　径九・六			
五七	染付鉢	一口	高七・五　径二五・〇			
五八	ルリ釉耳付花生	一口	高三七・六　径一九・八			
五九	三島手丁字風炉	一重	高二〇・一			最頂部の蓋は無し
六〇	風呂敷型手鉢	一口	高一四・二			
六一	赤絵小皿	五枚	高一・四　径七・四			
六二	黄釉小皿	一枚	高一・二　径八・〇			
六三	赤絵小皿	一枚	高二・〇　径八・二			
六四	赤絵盃	四口	高三・五　径六・一			
六五	赤絵盃	一口	高三・一　径六・一			
六六	盃	三口	高二・八　径四・五			
六七	飛鉋天目型碗	四口	高一・三　径七・〇			
六八	染付皿	一〇	高三・三　径一四・〇			箱入り（箱書「中皿家」）
六九	赤絵皿	一枚	高三・二　径一五・四			箱入り・上記の染付皿の資料ともに入る
七〇	竹葉染付皿	六枚	高三・二　径一六・〇			染付はプリント・箱あり
七一	赤絵角皿	一五	高二・二　縦一五・六　横一一・〇			箱入り（箱書「丼之家」）格子の染付皿も含む
七二	小皿	一枚	高三・八　径一〇・二			胴部に三角状の突起がつく
七三	染付皿	一枚	高三・〇　径一五・六			高台裏に「大盛」の文字あり
七四	染付皿	一枚	高三・〇　径一六・〇			高台裏に「美皿」の文字あり
七五	染付皿	一枚	高三・二　径一五・二			高台裏に「寿」の文字あり
七六	染付皿	一枚	高二・八　径一五・四			高台裏に「大和」の文字あり
七七	梅文染付盃	29	高二・八　径五・五			
七八	飴釉小壷	一口	高五・五　径三・〇			
七九	染付湯飲	一口	高六・一　径九・五			

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
二七	甕	一口	高九〇・〇　径二七・〇			
二八	甕	一口	高四八・八　径一二・八			
二九	甕	一口	高四四・六　径一二・五			
三〇	甕	一口	高六六・八　径一六・四			蓋付き・縄巻
三一	甕	一口	高六八・二　径一七・〇			縄巻
三二	甕	一口	高六八・〇　径一七・〇			木蓋付き・縄巻
三三	甕	一口	高八六・〇　径二三・〇			
三四	甕	一口	高六七・〇　径一六・四			木蓋付き・縄巻
三五	甕	一口	高五一・六　径一二・八			木蓋付き
三六	甕	一口	高六五・六　径一八・〇			縄巻
三七	貼付唐草牡丹文花鉢	一口	高三二・八　径五七・〇			ヒビ割れあり接着してある
三八	甕	一口	高五九・〇　径二九・〇			古我知焼水甕風
三九	茶壷	一口	高二九・四　径八・四			蓋付き
四〇	小壷	一口	高一一・六　径四・〇			
四一	紫泥酒注	一口	高一〇・〇			取手無し
四二	からから	一口	高八・三　径三・〇			
四三	黒釉小壷	一口	高一七・六　径七・二			
四四	茶家	一口	高八・〇			
四五	小壷	一口	高五・五　径二・九			
四六	線彫唐草文蓋物	一合	高七・七　径八・〇			
四七	染付花文皿	一枚	高五・五　径一六・四			
四八	青磁香炉	一口	高七・七　径八・八			
四九	飴釉香炉	一口	高五・六　径一二・〇			
五〇	飴釉壷	一口	高一七・六　径七・三		小破	口縁部欠損
五一	黒釉壷	一口	高二一・四　径		中破	木蓋付き・口縁部半分欠損
五二	徳利（一）	一口	高一四・二　径三・五			徳利（一）と徳利（二）は対である
五三	徳利（二）	一口	高一四・四　径三・五			徳利（一）と徳利（二）は対である

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
三	壺	一口	高四六・〇 径一三・〇			
四	甕	一口	高六六・〇 径一六・〇 蓋・高(一・五)			
五	甕	一口	高四二・〇 径一八・八			
六	甕	一口	高四四・〇 径一三・四			
七	壺	一口	高三〇・六 径一六・〇 蓋・高(三・八)			
八	甕	一口	高六六・〇 径一六・〇 蓋・高二・六			
九	甕	一口	高五一・〇 径一六・〇			蓋付き
一〇	甕	一口	高四五・〇 径一一・六			
一一	甕	一口	高二七・二 径一三・〇			
一二	甕	一口	高四〇・四 径一二・〇			
一三	壺	一口	高三七・〇 径一三・〇			
一四	壺	一口	高三四・六 径一六・二			蓋付き
一五	甕	一口	高四三・六 径一一・八			
一六	甕	一口	高三九・四 径一一・八			
一七	甕	一口	高四四・四 径一三・二			
一八	甕	一口	高四五・八 径一三・八			
一九	甕	一口	高五七・〇 径一四・〇			
二〇	甕	一口	高六〇・〇 径一七・八			
二一	甕	一口	高五一・〇 径一六・六			
二二	甕	一口	高六五・八 径一四・〇			
二三	甕	一口	高六七・四 径一六・〇			
二四	甕	一口	高五二・八 径一七・〇			
二五	甕	一口	高六三・〇 径一九・〇			
二六	甕	一口	高九〇・四 径二六・〇			

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一八	朱漆盃	二合	高二・八　径七・二			
一九	九角食篭台	三	高一〇・四　径三七・〇			
二〇	朱漆山水楼閣人物箔絵盆	二枚	高二・五　径二九・〇			
二一	朱漆牡丹巴紋沈金茶托	二枚	高七・五　径一四・二			
二二	朱漆牡丹巴紋沈金盆	二枚	高三・五　径一一・四			
二三	四方盆	一枚	高二・七　縦一六・六 横一六・六			底に「石垣」の線刻あり。
二四	四方盆	一枚	高四・一　縦二〇・六 横二〇・四			
二五	春慶塗葡箔絵椀	三口	高二・七　径四・五			
二六	春慶葡萄箔絵食篭台	一	高五・六　径八・七			
二七	春慶葡萄粟鼠	三	高六・三　径一〇・二			
二八	葡萄粟鼠箔絵蓋物	九	径九・〇			
二九	蓋付椀	二口	高六・五　径一一・〇			
三〇	黒塗小鉢	一口	高四・五　径一一・八			
三一	黒塗小鉢	一口	高三・七　径一一・二			
三二	黒塗小鉢	一口	高三・五　径一〇・二			
三三	黒塗小鉢	一口	高二・六　径一〇・〇			
三四	黒塗小鉢	一口	高二・五　径九・三			
三五	葡萄箔絵椀	二口	高七・五　径一三・〇			
三六	葡萄箔絵椀	二口	高五・四　径一二・〇			
三七	黒塗盆	八枚	高三・二　径一九・二			

【陶磁器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	甕	一口	高六四・〇　径一九・〇			
二	甕	一口	高四四・〇　径一二・八			

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
四五	扁額「煙霞富貴」＊	一枚	縦三九・九　横一一三・五	一七一九年	中破	①木製　②徐葆光（尚敬王の冊封使・一七一九年に来琉球）④平成五年に発見
四六	掛床「世濟其美」	一枚	縦一二四・八　横三四・八	一七四九年		①木製

【漆　器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	朱漆茶托	四枚	高二・五　径一一・二			天目とセット
二	春慶塗箱	三合	高六・〇　縦一八・〇　横二一・二			箱入り／箱書「石垣」横一八・〇
三	潤塗重箱	一合	高二五・〇　縦二二・六　横三三・八			予備の蓋一枚付
四	松文角盆	一枚	高一・五　縦一七・六　横三三・八			
五	松文角盆	一枚	高一・五　縦一九・八　横三五・六			
六	朱塗角盆	一枚	高一・五　縦二一・六　横四〇・〇			
七	朱塗角盆	一枚	高一・五　縦二三・二　横四一・五			
八	春慶塗皿	四枚	高三・〇　径一四・〇			
九	春慶塗椀	四枚	高六・〇　径三・八			
一〇	春慶塗椀	四枚	高八・〇　径一三・六			
一一	黒塗椀	三四	計測不可		大破	
一二	黒塗皿	四枚	計測不可		大破	
一三	黒塗湯飲み	一合	計測不可		大破	
一四	春慶塗盆	一枚	高四・七　径三二・四			
一五	黒漆九角食篭	一重	高三五・六　径三四・六			二段の食篭
一六	黒漆九角食篭台	一	高一一・二　径二〇・六			
一七	茶托	二枚	高七・三　径一二・〇			

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
二四	紙本墨書・蔡大鼎書（左）＊	一幅	縦七七・九　横一八・〇	一八六九年		①掛幅装②伊計親雲上（蔡大鼎・一八二六～？）③白文方印「蔡大鼎印」朱文方印「汝霖」
二五	紙本墨書・蔡呈書	一幅	縦七七・九　横一八・〇	一八六九年		①掛幅装②蔡呈（生没年不詳）③印判読不可
二六	紙本墨書・七言律詩三首	一幅	縦七八・〇　横一七・八	一八六六年		①掛幅装②不詳
二七	紙本墨書・漢詩文	一幅	縦一〇五・八　横四五・八			①掛幅装②鶴年
二八	紙本墨書・古硯銘	一幅	縦一〇九・九　横五七・四			①掛幅装②不詳
二九	拓本・「世済其美」＊	一幅	縦一三五・四　横三八・九			①掛幅装②不詳
三〇	紙本墨書・和歌「松竹梅」＊	一幅	縦九三・六　横三六・五	一八四〇年		①掛幅装（楮紙）②渡嘉敷兼副（葉絹烈・一七五〇～一八四四）
三一	紙本墨書・和歌二首＊	一幅	縦一二一・〇　横六一・〇	一八六九年		①掛幅装（唐紙）②宜湾朝保（向有恒・一八二三～一八七六）
三二	紙本墨書・和歌一首＊	一幅	縦一二三・五　横五五・三			①掛幅装（唐紙）②護得久朝常（向文蔚・一八五〇～一九一〇）
三三	紙本墨書・和歌一首	一幅	縦一二三・一　横五五・三			①掛幅装（唐紙）②護得久朝常（向文蔚・一八五〇～一九一〇）
三四	紙本墨書・和歌七首＊	一幅	縦一一五・五　横五四・一	一八七一年		①掛幅装（唐紙）②富島親方朝直
三五	紙本墨書・和歌三首	一幅	縦二一・六　横六〇・四	一八六九年		①掛幅装（唐紙）②上里親雲上盛恕
三六	紙本墨書・和歌二首＊	一幅	縦三六・五　横四八・九	一八六九年		①掛幅装（楮紙）②豊村親雲上朝勅
三七	紙本墨書・和歌二首＊	一幅	縦三一・四　横四二・〇			①掛幅装（唐紙）②宜野湾里之子親雲上朝宏
三八	紙本墨書・和歌三首＊	一幅	縦三二・五　横四四・五	一九六九年		①掛幅装（楮紙）②普天間親雲上助蔵
三九	紙本墨書・いろは教訓書	一幅	縦九六・〇　横三六・九	一八〇三年		①掛幅装（唐紙）②伊江朝睦（尚天迪）③関防印「雪淵堂」白文丸印「球陽」朱文方印「向天迪印」
四〇	紙本墨書・一門和族傳	一幅	縦九七・三　横四一・〇			①掛幅装（唐紙）②不詳
四一	紙本墨書・子孫教訓書＊	一幅	縦九七・三　横四一・〇			①掛幅装（唐紙）②不詳
四二	紙本墨書・和歌二首＊	一幅	縦一二二・一　横二七・二			①掛幅装（唐紙）②護得久朝置（向起龍・一八二七～一九〇八）
四三	紙本墨書・和歌一首＊	一幅	縦一七・八　横一八・〇			①掛幅装②大宜味里之子親雲上朝直
四四	紙本墨書・和歌十一首	一巻	縦三二・三　横一六八・五	一八六九年		①巻子装②富川親方盛奎（一八三二～一八九〇年）

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
九	紙本墨書・七言絶句＊	一幅	縦一二八・八　横八三・〇	一八六八年		①掛幅装②松本親雲上（林世爵・一八〇八～？）③関防印「？徳堂」白文方印「林世爵印」朱文方「？品」
一〇	紙本墨書・七言排律＊	一幅	縦七七・九　横二九・八	一八四〇年		①掛幅装（唐紙）②駱紹業③関防印「利濟為懐」朱文方印「駱紹業印」朱文方印「子勤」
一一	紙本墨書・梁維陞書＊	一幅	縦一二三・三　横三一・三	一八三六年		①掛幅装②梁維陞（一七八八～一八三七年）③関防印「？鏡堂」朱文丸印「梁維陞」朱文方印「漢？」
一二	紙本墨書・「久米島上江洲家の求めにより詩を賦す」	一幅	縦一一七・八　横二七・五			①掛幅装②津波古政正（東国興・一八一六～一八七七年）③関防印「山水方滋」朱文方印「回首・」朱文方印「愚山」
一三	紙本墨書・「上江洲家の茶に寄す」	一幅	縦一一九・九　横二七・四	一八六九年		①掛幅装②楚南親雲上（魏掌政・一八二六～？）③白文方印「魏掌政印」朱文方印「世傑」
一四	紙本墨書・五言対句	一幅	縦六一・五　横二七・〇			①掛幅装（唐紙）②林斎韶（中国福州・生没年不詳）③関防印「慈湖西畔密南」朱文方印「朗及」
一五	紙本墨書・五言対句＊	一幅	縦六一・四　横二七・一			①掛幅装（唐紙）②林斎韶（中国福州・生没年不詳）③関防印「慈湖西畔密南」朱文方印「朗及」
一六	紙本墨書・五言対句（右）＊	一幅	縦一二一・六　横二五・六	一八〇〇年		①掛幅装②寄塵（李鼎元の従客）③関防印「？」
一七	紙本墨書・五言対句（左）＊	一幅	縦一二二・二　横二五・七	一八〇〇年		①掛幅装②寄塵（李鼎元の従客）③白文方印「寄塵」朱文方印「八九山人」
一八	紙本墨書・七言対句（右）＊	一幅	縦一二二・八　横二六・四			①掛幅装（唐紙）②林士傳（生没年不詳）
一九	紙本墨書・七言対句（左）＊	一幅	縦一二三・〇　横二六・五			①掛幅装（唐紙）②林士傳（生没年不詳）③白文方印「効虎頭擬」白文方印「龍馬生涯」
二〇	紙本墨書・七言対句＊	一幅	縦四四・八　横三〇・六			①掛幅装（唐紙）②蔣錫年（中国福州・生没年不詳）②白文方印「臣蔣錫年」朱文方印「少笄」
二一	紙本墨書・七言対句	一幅	縦四五・〇　横三〇・七			①掛幅装（唐紙）②蔣錫年（中国福州・生没年不詳）③白文方印「臣蔣錫年」朱文方印「少笄」
二二	紙本墨書・蔡徳昌書＊	一幅	縦七七・九　横一七・七			①掛幅装②蔡徳昌③白文丸印「蔡徳昌」朱文方印「？」
二三	紙本墨書・蔡大鼎書（右）＊	一幅	縦七八・一　横一七・八	一八六九年		①掛幅装②伊計親雲上（蔡大鼎・一八二六～？）③関防印「？思堂」

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
九	紙本著色・周王呂尚を訪う図	一幅	縦一〇九・七　横六二・〇			①掛幅装
一〇	紙本著色・福禄寿＊	一幅	縦一〇九・二　横六五・〇			①掛幅装
一一	紙本著色・進貢船の図＊	一幅	縦一三六・七　横六二・一			①掛幅装
一二	紙本淡彩・上江洲家美里川墓之図	一幅	縦四五・五　横三九・〇	一八三一年		①掛幅装②高嶺親雲上
一三	紙本淡彩・上江洲家美里川墓之図＊	一幅	縦七一・〇　横三九・八	一八三二年		①掛幅装②高嶺親雲上④朱書あり
一四	紙本淡彩・久米島水路図＊	一冊	縦二六・六　横三八・六			①折本／五面

【書跡】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	紙本墨書・福	一幅	縦三六・四　横三六・四			①額装
二	紙本墨書・七言絶句＊	一幅	縦一一三・一　横四九・三	一八〇〇年		①掛幅装（唐紙）②李鼎元（冊封使）③関防印「瑞不負平生」白文方印「李鼎元印」朱文方印「墨莊」
三	紙本墨書・五言絶句＊	一幅	縦一一七・四　横三六・二	一八〇〇年		①掛幅装（唐紙）②李鼎元（冊封使）③関防印「瑞不負平生」白文方印「李鼎元印」朱文方印「墨莊」
四	紙本墨書・七言絶句	一幅	縦一四〇・七　横三八・一	不詳		①掛幅装②謝曦③関防印「夢筆」白文方印「謝曦之印」朱文方印「發川」
五	紙本墨書・漢詩＊	一幅	縦一二四・三　横六一・九	一九世紀		①掛幅装（唐紙）②湖城長烈（鄭元偉・一七九二～？）③関防印「通徳堂」白文方印「鄭元偉」朱文方印「善橋」
六	紙本墨書・七言律詩＊	一幅	縦一二五・一　横五八・八	一八五二年		①掛幅装（唐紙）②神村親方（阮宣詔・一八一一年～一八八五年）③関防印「雅懐堂」白文方印「阮宣詔印」朱文方印「勤阮」
七	紙本墨書・五言律詩＊	一幅	縦一〇一・一　横五八・八	一八三八年		①掛幅装（唐紙）②向篤忠③関防印「半揚琴書」白文方印「朝重」朱文方印「向篤忠印」
八	紙本墨書・七言絶句＊	一幅	縦一三五・六　横四七・〇	一八四八年		①掛幅装（唐紙）②国馬親方（王不烈・一七七三～一八五九年）③関防印「三槐堂」白文方印「王氏」朱文方印「不烈印」

安里　マサ（具志川村字山里）

【染　織】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	苧麻茶地上衣	一領	丈一二七・〇　裄七一・〇		中破	①苧麻②平織④神衣裳
二	苧麻白地上衣	一領	丈一二九・〇　裄九三・二		中破	①苧麻②平織④神衣裳
三	芭蕉紺地胴衣	一領	丈六四・〇　裄？		大破	①芭蕉②平織③藍染④神衣裳
四	芭蕉紺地胴衣	一領	丈五二・〇　裄六六・〇		中破	①芭蕉②平織③藍染④神衣裳
五	絹芭蕉茶地胴衣	一領	丈七七・〇　裄？		大破	①経絹緯芭蕉②平織④神衣裳
六	苧麻白地裙	一領	丈八三・〇　胴八七・〇 裾五二二・〇		小破	①苧麻②平織④神衣裳
七	絹茶地緯浮織巾	一枚	幅四三・〇　長一六六・〇		中破	①絹②平地に浮織④神衣裳・頭に結ぶカミサージ
八	木綿紺地松竹梅紅型風呂敷	一枚	縦七二・五　横七五・五	明治四四年		①木綿②平織③紅型染／松・竹・梅④神衣裳を西銘殿内に持参する時に包むものとして使用
九	苧麻茶色地紗織袋	一枚				①苧麻②紗織④神衣裳と一緒にあった

上江洲　智泰（具志川村字西銘）

【絵　画】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	紙本著色・寿老人＊	一幅	縦八八・〇　横四四・三	一七世紀		①掛幅装②伝城間清豊（自了・一六一四～一六四四）
二	紙本著色・女人の図	一幅	縦九九・八　横五二・四			①額装④紙布に描写
三	紙本著色・西洋船の図＊	一幅	縦一一一・三　横五三・二			①掛幅装
四	紙本著色・子母勉学の図＊	一幅	縦九三・一　横四六・八			①掛幅装
五	紙本著色・「心」字入図＊	一幅	縦一〇一・九　横四三・四			①掛幅装
六	紙本著色・童女耳掻の図	一幅	縦一一四・四　横四七・八			①掛幅装
七	紙本淡彩・山水図＊	一幅	縦一一七・八　横四五・二			①掛幅装②馮泉③白文方印「？馮」朱文方印「？
八	紙本墨画・蓮の図＊	一幅	縦一三六・五　横六二・〇	戊子		①掛幅装②長嶺宗恭（華国・一八五二～一九三二③朱文方印「？」朱文方印「華國」

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
二	染付牡丹唐草文徳利	二口	高二七・六　径五・一 底径八・〇			口縁部錫で被せる・底面に「福」の文字

【染織】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	木綿紺地裙	一領	丈九九・八　胴一三八・〇 裾九〇二・一		小破	①木綿②平織③藍後染め④君南風の神衣裳
二	絹浅地牡丹菊唐草文様裙＊	一領	丈八五・〇　胴一〇六・〇 裾一、二〇三・〇		小破	①絹②繻子地に緯錦③牡丹・菊・唐草④君南風の神衣裳
三	苧麻白地裙	一領	丈八五・〇　胴八〇・〇 裾三八五・〇		小破	①苧麻②平織④君南風の神衣裳
四	絹薄茶地上衣＊	一領	裄七六・〇		中破	①絹②平織に綾③背中に龍の丸紋が4つある④君風の神衣裳
五	絹浅地絽織上衣	一領	丈一三〇・〇　裄七六・〇		中破	①絹②絽織③藍後染め④君南風の神衣裳
六	苧麻白地上衣	一領	丈一二七・〇　裄六八・五		中破	①苧麻②平織④君南風の神衣裳

【その他】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	曲玉＊	一連	総長八五・五　玉数八二	一五世紀	小破	君南風の曲玉／紐は新しく取り替えたもの

中村梨美子（具志川村字上江洲）

【染織】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	絹芭蕉紺地上衣	一領	丈一二五・〇　裄七五・五		小破	①経絹緯芭蕉②平織③藍後染め④イージャミの神衣裳・ウマチーに着用
二	木綿朱色地花鳥昆虫文様更紗上衣	一領	丈一一〇・〇　裄八二・〇		小破	①木綿②綾織③花・鳥・昆虫更紗染④イージャミの神衣裳・ウマチーに着用
三	芭蕉茶地上衣	一領	丈？　裄六六・五		中破	①芭蕉②平織④イージャミの神衣裳

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
四	絹黄色地緯錦帯	一点	幅一五・八　長四四五・〇	一七五九年	小破	①絹②繻子地に緯錦③蓮唐草・四爪龍・瑞雲・菊唐草
五	苧麻紺地波に鶴文様幕（銘入）＊	一張	幅三七〇〇　高一九〇〇	一七五九年		今回の調査では未確認／①苧麻②平織③型染・筒描き／鶴・波
六	苧麻紺地波に鶴文様幕（銘入）	一張	幅三七〇〇　高一九〇〇			今回の調査では未確認／①苧麻②平織③型染・筒描き／鶴・波④近年に染め直したものか？
七	苧麻紺地波に鶴文様幕	一張	幅三一九・四　高一三五		大破	県立博物館へ寄託／①苧麻②平織③筒描き／鶴・波④葬儀用幕として使用
八	苧麻紺地花文様幕＊	一張	幅二四二　高一三五		中破	県立博物館へ寄託／①苧麻②平織③型染／椿・雪持笹・亀甲模様

山里桂樹・多喜（具志川村字山里）

【書　跡】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	「普濟」	一点	縦三七・五　横七七・〇			扁額

【漆　器】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	沈金御衣櫃＊	一合	高二一・六縦二五・二 横三六・六 蓋残片：幅三・四横三六・六	一五世紀	大破	丸櫃と同種の図柄か？／神衣裳を収める
二	黒漆双鳥菊花七宝繋沈金丸櫃	一合	高二三・七径二四・九	一五世紀		千代の真首玉（曲玉）入れ／（緑漆の外櫃）
三	緑漆鳳凰雲点斜格子沈金丸櫃＊	一合	高一六・〇径二〇・一	一五世紀		千代の真首玉（曲玉）入れ／（黒漆の内櫃）

【陶磁器】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	鬼面耳付三島手花生	一口	高三五・〇　径一一・〇			

【染　織】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	絹茶地牡丹唐草文帯	一点	幅一六・五　長四三二・五		小破	①絹②繻子地に緯錦（紋綸子）③牡丹・唐草
二	絹薄茶地綾織胴衣	一領	丈七〇・〇　裄？		大破	①絹②平地に紋綾④神衣裳
三	絹紺地袷上衣	一領	丈一二四・三　裄七八・四		小破	①絹②平織④藍染／神衣裳
四	絹薄茶地綾織上衣	一領	丈一五二・五　裄八三・〇		中破	①絹②綾織④胸と肩に刺繍の補子あり／神衣裳

喜久村絜弘（仲里村字宇根）

【絵　画】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	絹本著色・花鳥図＊	一幅	縦九〇・五　横四五・六	一七世紀		①掛幅装②孫億／県指定有形文化財
二	紙本著色・片目地頭代潔聡肖像画＊	一幅	縦一三〇・二　横七二・六	一七五九		①掛幅装②不詳
三	紙本墨画・岩に蘭	一幅	縦一二九・〇　横三四・三	不詳	小破	①掛幅装②詔堂

【書　跡】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	紙本墨書・福	一幅	縦八二・〇　横八二・〇	一七五六年		①掛幅装②全魁③白文方印「穆斎全魁之章」④本紙は菱形の赤紙
二	掛床「福」＊	一点	縦二三・三　横六一・二	一七五六年		①木製（コクタン　黒漆地文字金箔）／3枚繋ぎの板②全魁③朱文方印「穆斎全魁之章」

【染　織】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	絹浅葱地陣羽織＊	一領	幅四五・〇　丈八七・〇	一七五九年	小破	①絹②平織に縫取織④金糸が使用されている片目地頭代が着用したとの伝承あり
二	絹黄色地緯錦帯	一点	幅一六・〇　長四二二・四	一七五九年		①絹②繻子地に緯錦③紗綾形・四爪龍・菊唐草・瑞雲／帯端の模様が地頭代肖像画の帯端と同じ
三	絹茶色地綸子帯	一点	幅一五・八　長四一〇・〇	一七五九年		①絹②繻子地に緯平紋③牡丹唐草

【染　織】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	苧麻水色地胴衣	一領	丈六六・〇　裄六八・〇			①苧麻②平織④藍染／比嘉ノロの神衣裳
二	苧麻水色地胴衣	一領	丈八五・〇　裄五四・〇			①苧麻②平織④藍染／比嘉ノロの神衣裳
三	絹茶地胴衣	一領	丈七五・〇　裄五九・一		小破	①平絹②平織（羽二重）④比嘉ノロの神衣裳
四	芭蕉茶地裙	一領	丈八九・〇　胴九五・〇			①芭蕉②平織④比嘉ノロの神衣裳・ウマチーに使用・現在は飾るのみ
五	絹薄茶地格子巾	一枚	幅三六・五　長五五・〇			①平絹②平織③格子縞④比嘉ノロの神衣裳（カミサージ）
六	絹灰色地格子巾	一枚	幅三七・〇　長一七〇・〇		小破	①細②平織③格子縞④比嘉ノロの神衣裳（カミサージ）

【金　工】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	簪（ジーファ）	一点	長二五・一			比嘉ノロの附属品
二	簪（ジーファ）	一点	長二二・一			比嘉ノロの附属品
三	簪（ジーファ）	一点	長一九・一			比嘉ノロの附属品

【民　具】

番号	資料名	法量	年代	保存	備考
一	団　扇＊	一点	長四二・五　団扇の長径二七・五　短径二六・〇			顔料で手描き／菊・蝶・山・草／比嘉ノロの附属品

屋慶名松助（仲里村字宇江城）

【漆　器】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	沈金丸櫃	一合	高一二・一　径一八・〇			曲玉・ビーズ玉・古銭（多数）収納

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
四	木綿紺地桜文様胴衣	一領	丈六七・〇　裄六三・一			①苧麻②平織③藍型染／桜④真謝のミンダシガミの神衣裳・ユウカミの時に使用
五	麻紺地牡丹唐草文様藍型風呂敷	一枚	縦九三・〇　横一〇二・一			①マニラ麻②平織③藍筒描き／牡丹④真謝のミンダシガミの神衣裳を包むもの
六	木綿紺地裙	一領	丈八五・六　胴七八・〇 裾一八五・二			①木綿②平織④藍染／真謝のミンダシガミの神衣裳・ユウカミの時に着用／重いので裙を半分に裁断し、仕立て直しをした
七	絹薄茶地格子巾	一枚	幅三五・〇　長二一六・一			①紬②平織③格子縞④真謝のミンダシガミの神衣裳・ユウカミの時に着用

【その他】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	首飾り	一連	長五七・〇			二重に整えられている

宇江原総賢（仲里村字儀間）

【漆　器】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	黒漆杯台（酒台）	一基	総高一七・六 杯受高七・八／径一三・八 盆高九・九／径一八・二			

【陶磁器】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	赤絵菊花文対瓶	一口	高二四・四　径二一・四			

栄野元康順（仲里村字宇根）

【漆　器】

番号	資料名	法量	法量	年代	保存	備考
一	緑漆窓絵瑞雲点斜格子沈金丸櫃	一合	高約一〇・〇　径一八・二			曲玉・ビーズを収納／比嘉ノロの附属品

平田政次郎（仲里村字真謝）

【漆　器】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	丸櫃	一合	高一一・〇　径一四・〇		中破	加飾なし／曲物／水色の玉（一個）、久米島紬裂あり

【染　織】

番号	資料名	数量	法量	年代	保存	備考
一	絹黄色地格子上衣	一領	丈一三〇・〇　裄七七・〇		小破	①紬②平織③格子縞④神衣裳・アサカミの時に着用／久米島産か
二	絹緑地綾織上衣	一領	丈一三一・〇　裄八一・五		小破	①平絹②平織地に綾織紋③紗綾形・花④神衣裳・ユウカミの時に着用
三	絹芭蕉紺地胴衣	一領	丈六五・〇　裄六五・五		中破	①経絹緯芭蕉②平織④神衣裳・子供用
四	苧麻紺地袷胴衣	一領	丈六三・〇　裄六七・五		中破	①表苧麻裏木綿②平織④神衣裳・子供用
五	芭蕉茶地胴衣	一領	丈五八・〇		大破	①芭蕉②平織④神衣裳・子供用／計測不可能
六	芭蕉茶地裙	一領	丈　四・〇　裾四五×一九		小破	①芭蕉②平織④神衣裳・アサカミの時に着用
七	木綿白地裙	一領	丈七七・〇　裾四三×一二		小破	①木綿②平織④神衣裳・ユウカミの時に着用
八	木綿白地巾	一枚	幅二九・五　長六九・一			①木綿②平織④神衣裳・カミサージ
九	絹赤茶格子縞巾	一枚	幅四三・〇　長九二・一		大破	①紬②平織③格子縞④神衣裳・カミサージ

長浜　春子（仲里村字儀間）

【染　織】

番号	資料名	法量	年代	保存	備考
一	絹浅地綾織上衣	一領	丈一二八・〇　裄八六・二			①平絹②平織地に綾織紋③紗綾形・花④真謝のミンダシガミの神衣裳
二	苧麻深浅地上衣	一領	丈一二六・〇　裄七四・〇			①苧麻②平織④藍染／真謝のミンダシガミの神衣裳・ユウカミの時に着用
三	苧麻紺地格子上衣	一領	丈一二〇・〇　裄六四・〇			①苧麻②平織③格子縞④真謝のミンダシガミの神衣裳・アサカミの時に着用

美術工芸資料目録

凡例

一　目録は所有者別に示し、絵画・書跡・漆器・陶磁器・染織・その他の分野で配列した。各分野について、資料名・数量・法量・年代・保存状況・備考の順で示した。

一　目録は、久米島及び沖縄県立博物館で実測した資料に、文献等から抜きだした資料を加えた。

一　保存状況は劣化に準じて、大破・中破・小破と記した。空欄は保存状況が比較的良好のものである。

一　絵画・書跡の備考は、①品質形状　②作者　③印影　④その他の順に記した。染織の備考は、①素材　②織技法　③加飾方法　または文様　④用途及びその他を記した。

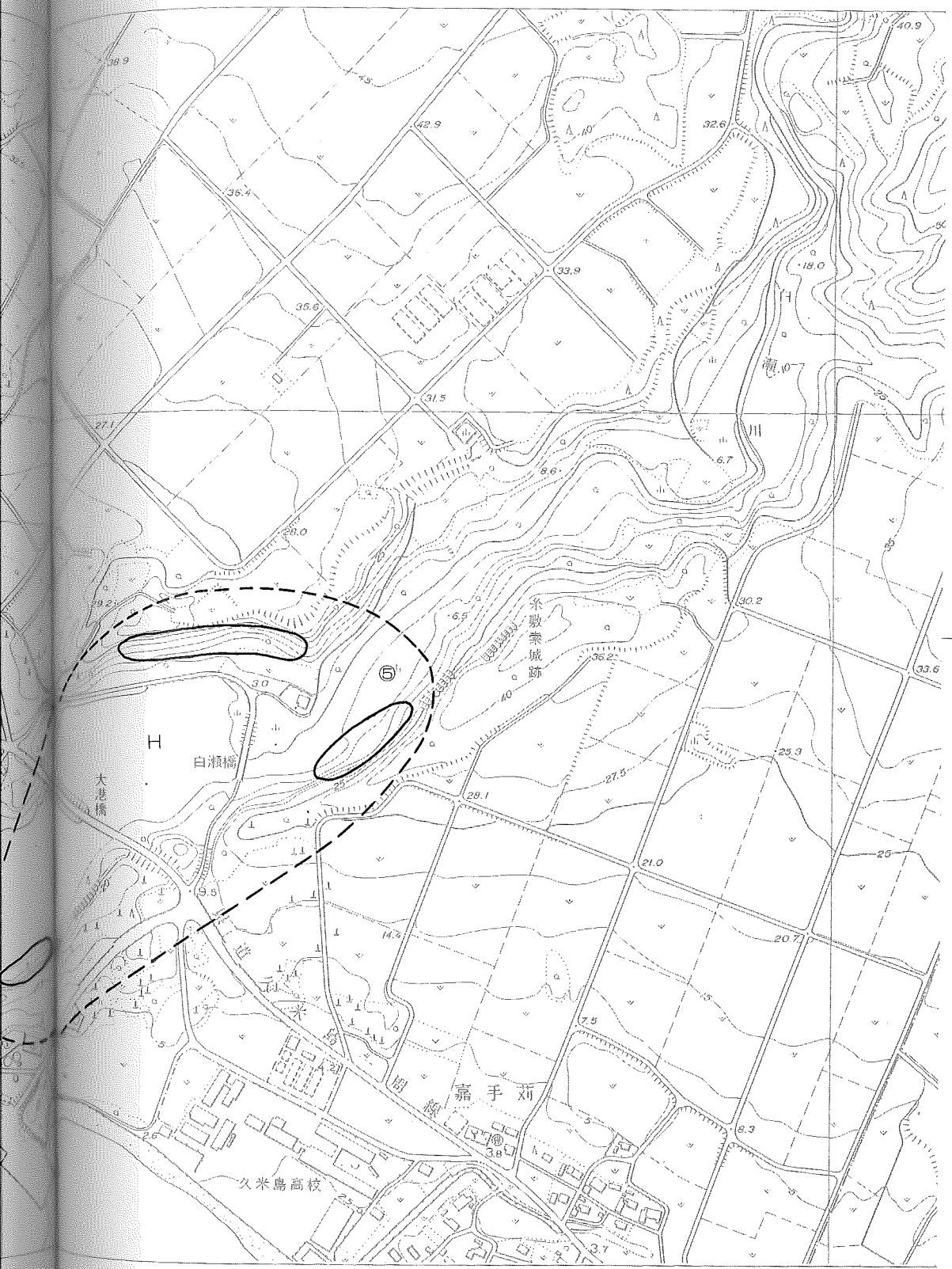
一　法量の単位はセンチメートルである。

一　資料の調査は、久米島総合調査の委嘱調査員とともに、以下の各氏の協力を得て行った。

柳　悦州（県立芸術大学助教授　久米島総合調査委嘱調査員）
津波古　聰（海洋博覧会記念公園管理財団首里城管理センター首里管理センター調査展示係長　久米島総合調査委嘱調査員）
祝嶺　恭子（県立芸術大学教授）
片岡　淳（琉球大学助教授）
藤村　玲子（染織研究家）
宮城　里子（染織研究家）

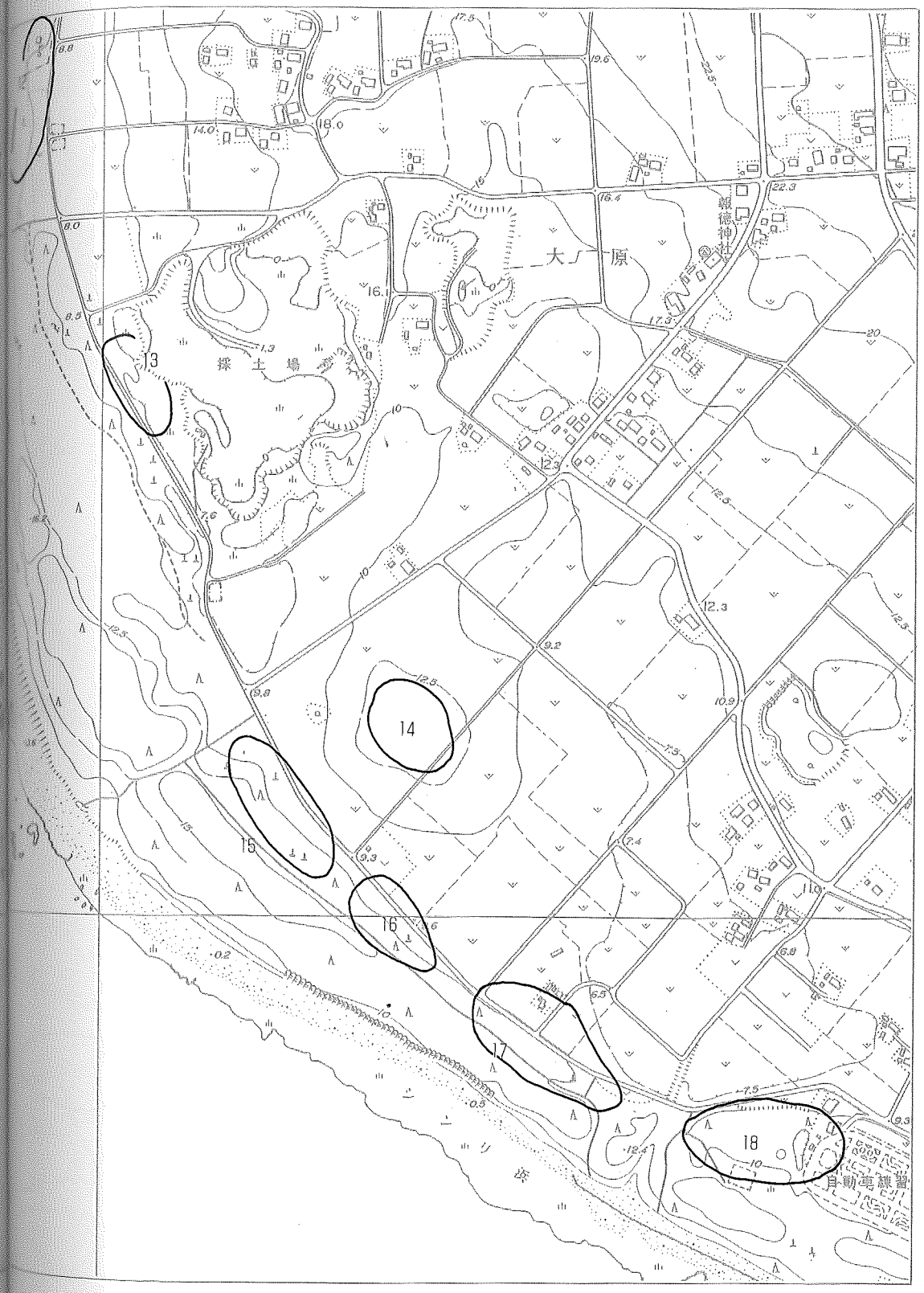
一　目録中＊印のついた資料は、写真を掲載したものである。

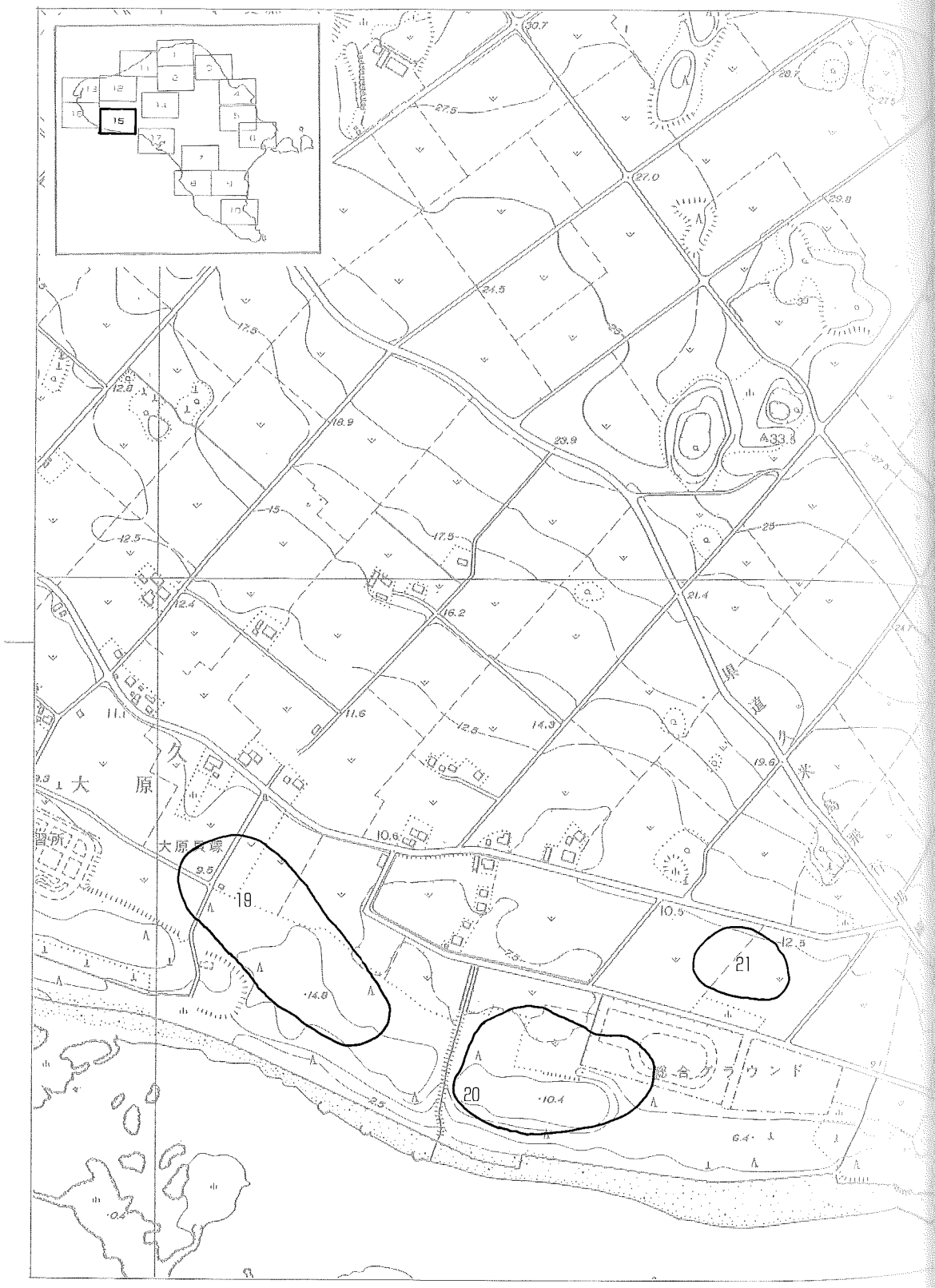

30
26
大
田
港
老人福祉センター
兼
城
精
川
島
兼　城　港
花咲
花咲港



白瀬橋
大港橋
糸敷索城跡
嘉手苅
久米島高校


0.2
0.5
0.2
0.1
0.2
0.4
0.2

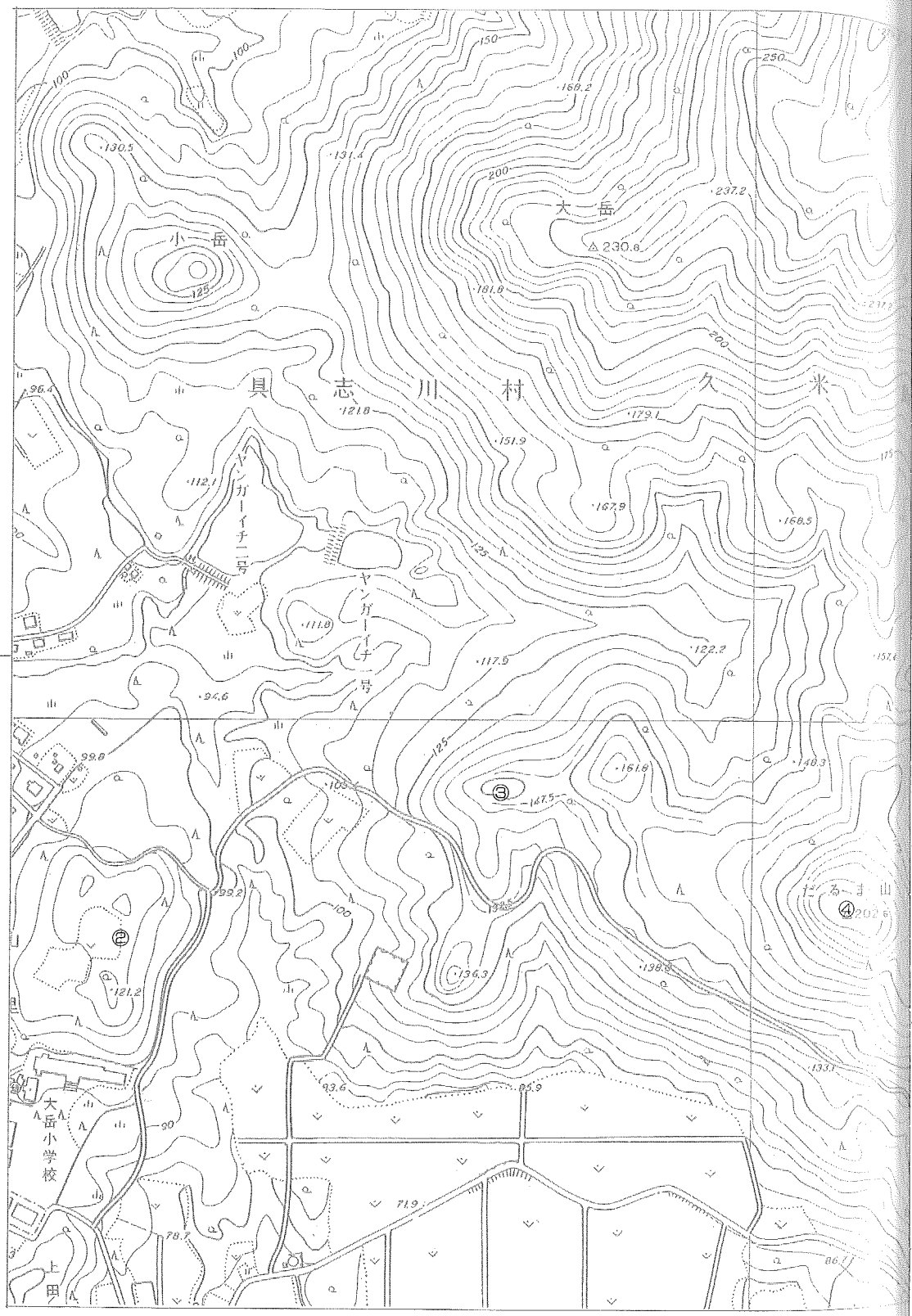

大ノ一原
報徳神社
採土場
13
14
15
16
17
18
自動車練習



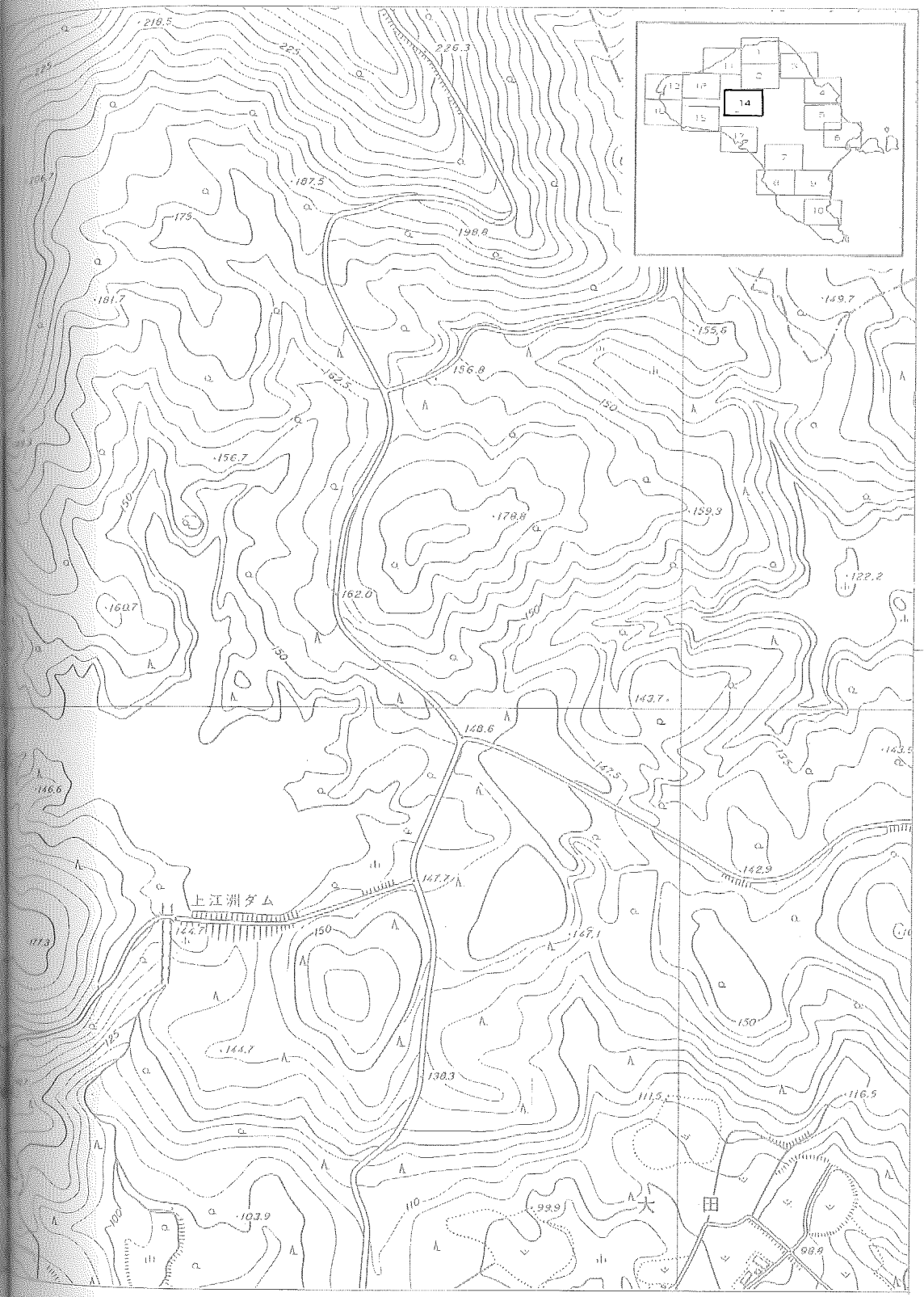
大原
大原貝塚
総合グラウンド
19
20
21

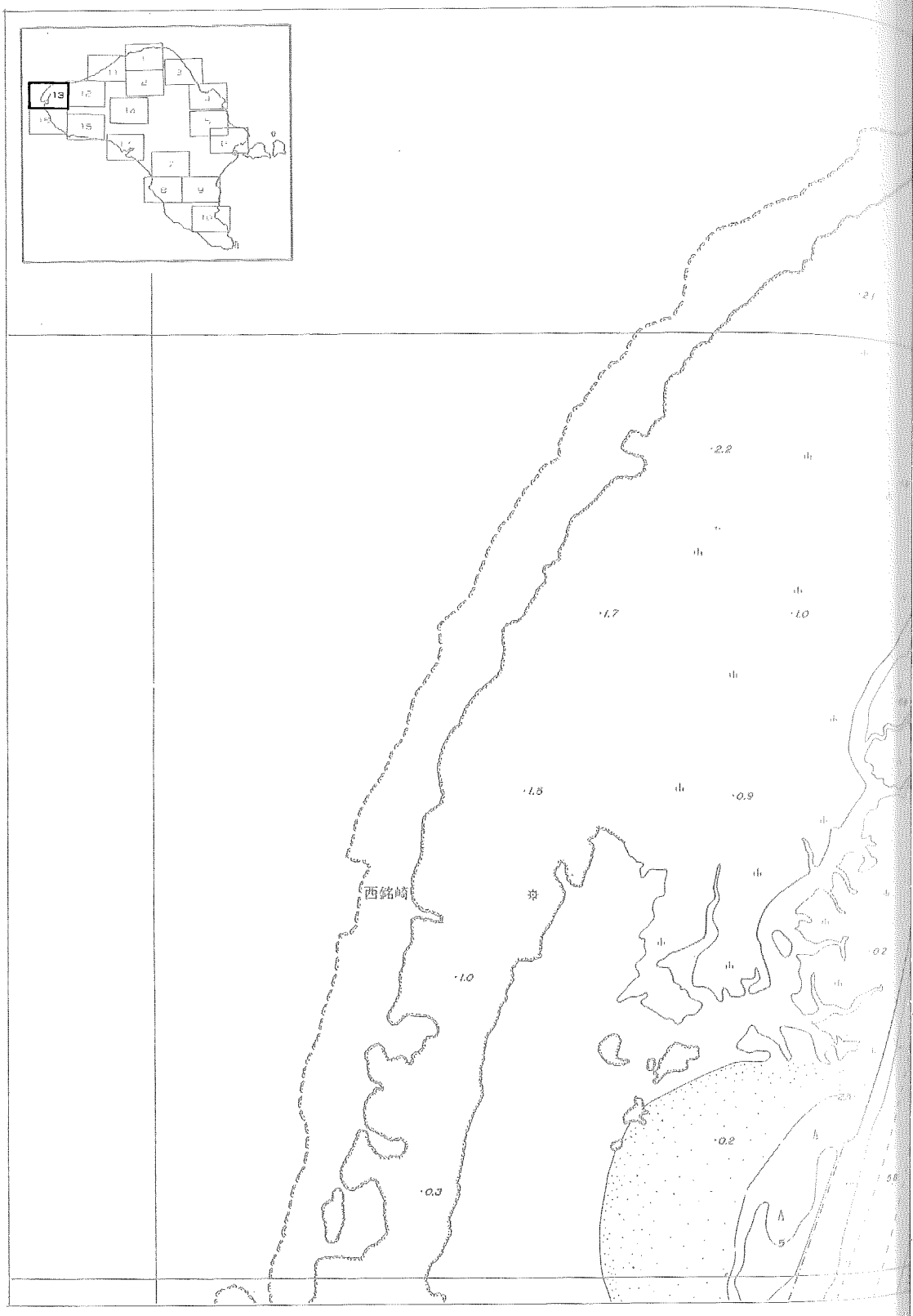


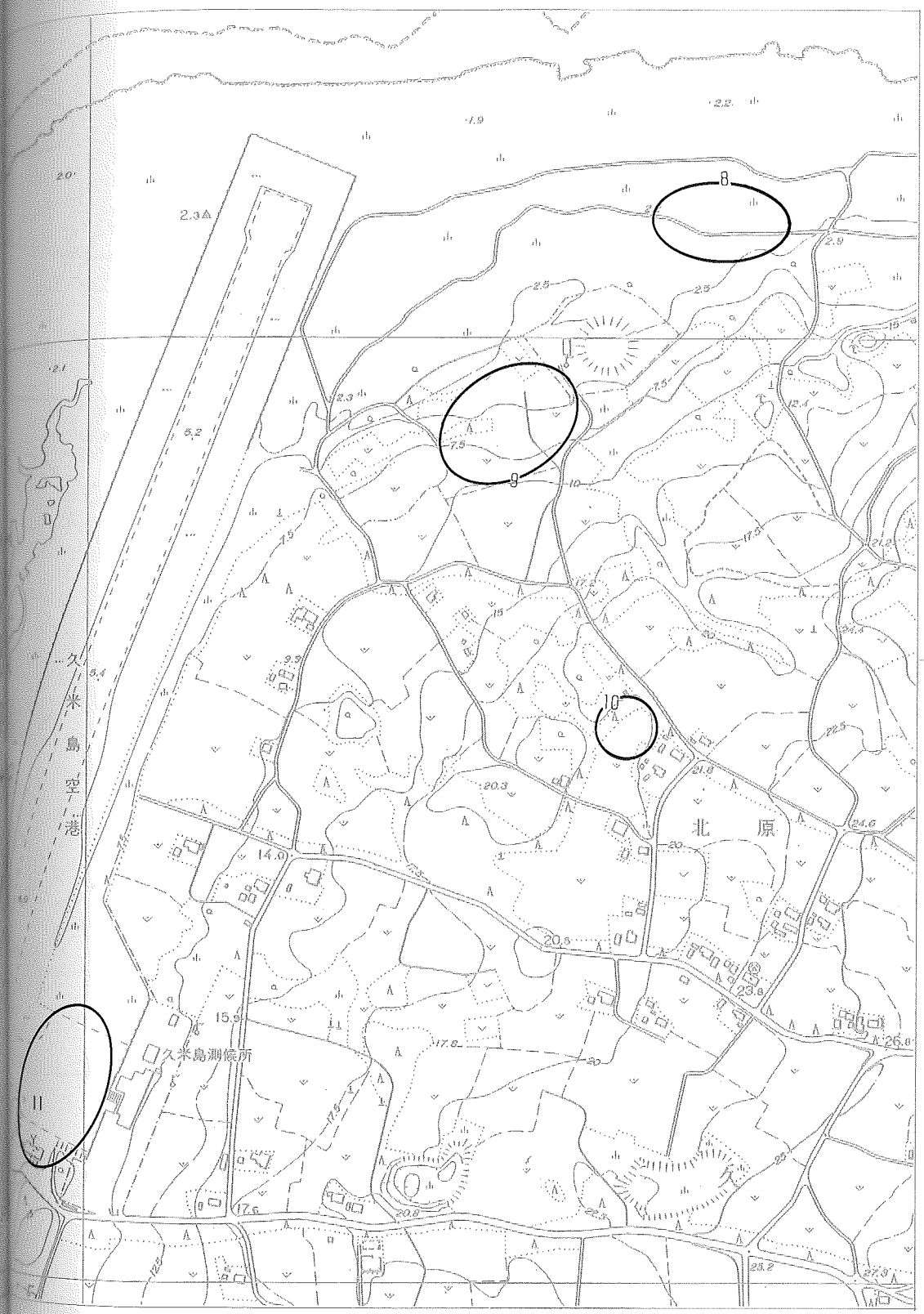
久間地
28
27
22
23
24
25
県道久米島
清水貝塚
清水小学校
清水橋

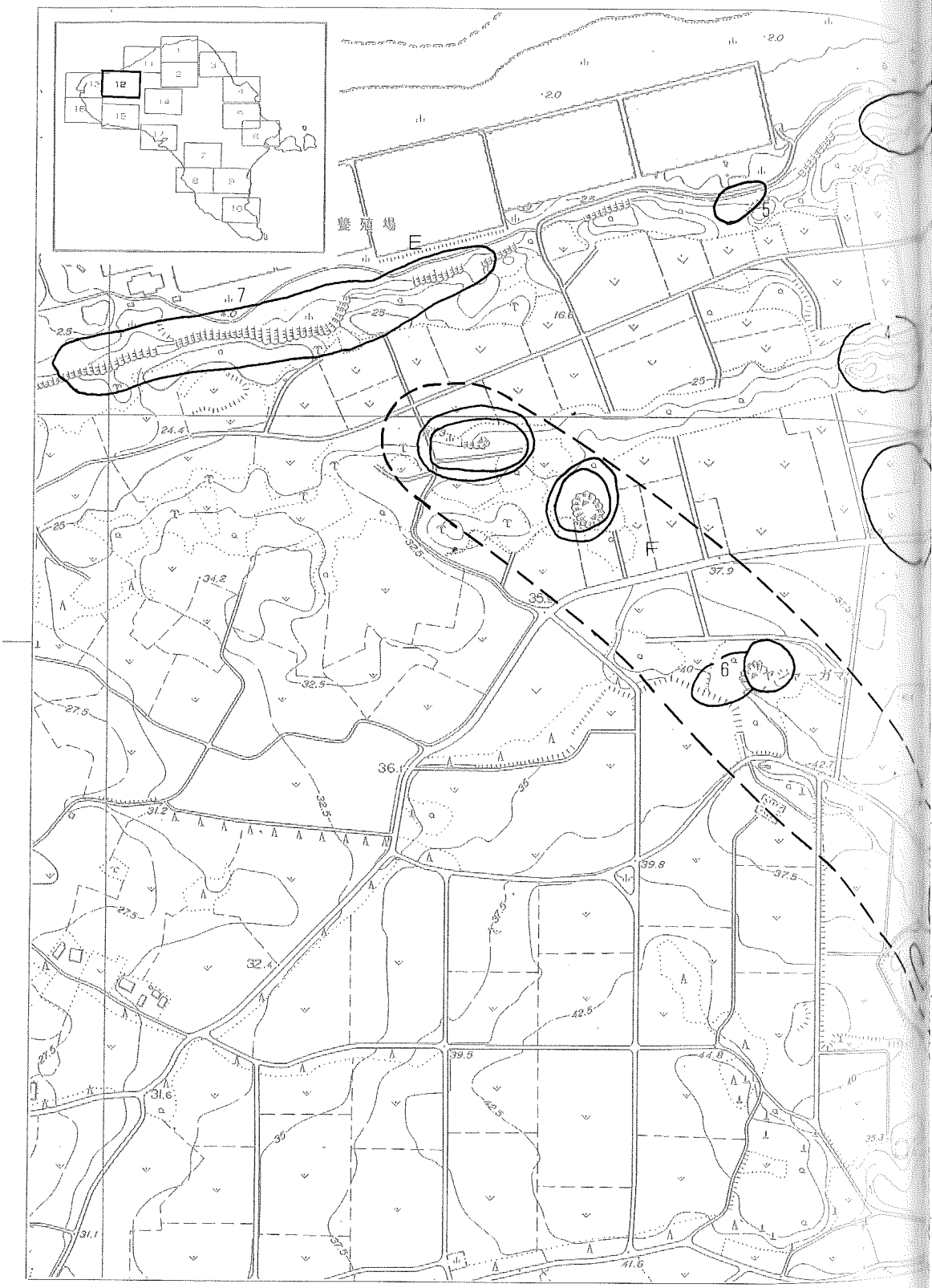


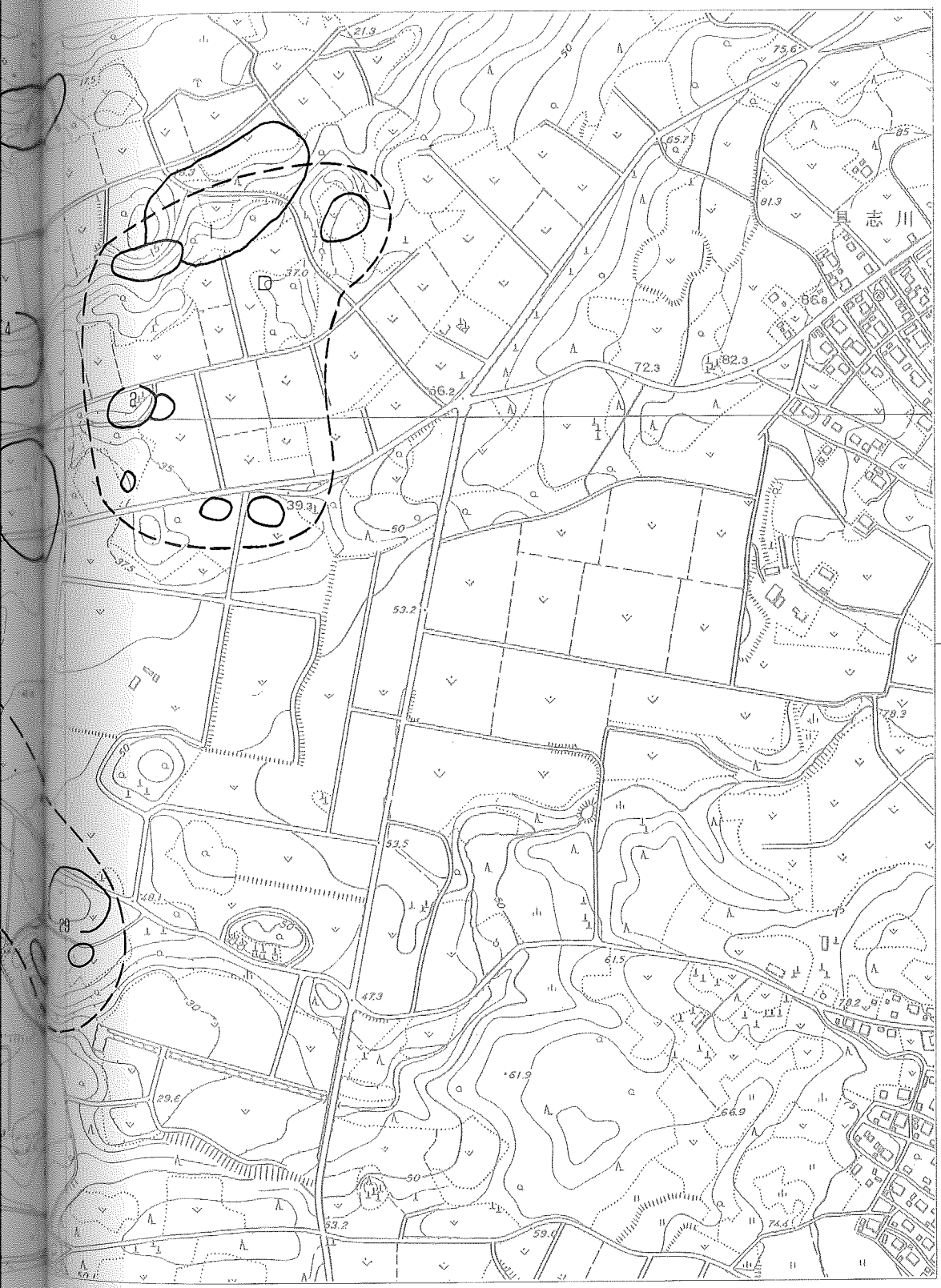
小岳
大岳
△230.8
具志川村久米
ヤンガーイチ二号
ヤンガーイチ一号
大岳小学校
上田

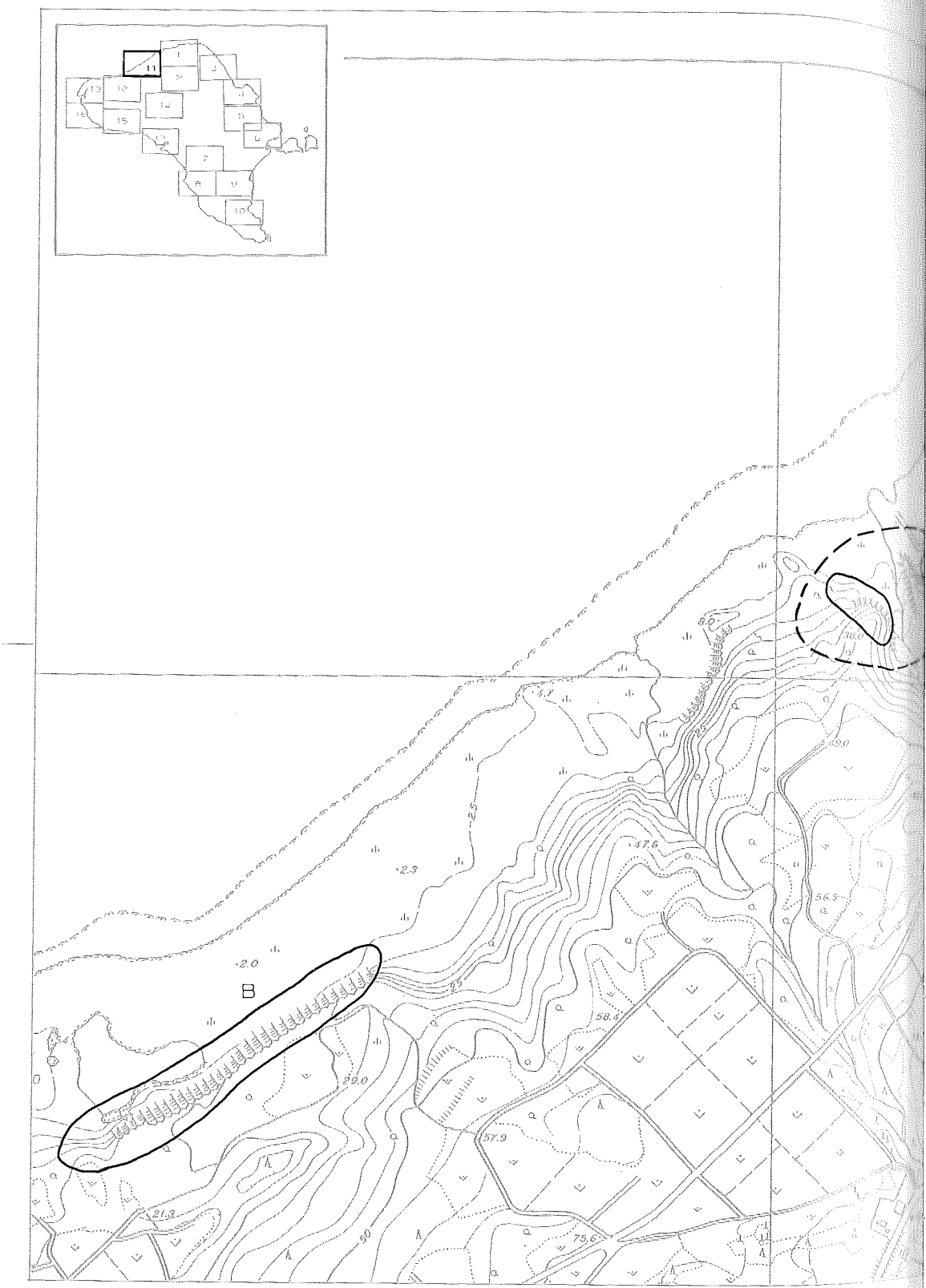

上江洲ダム
大田
14

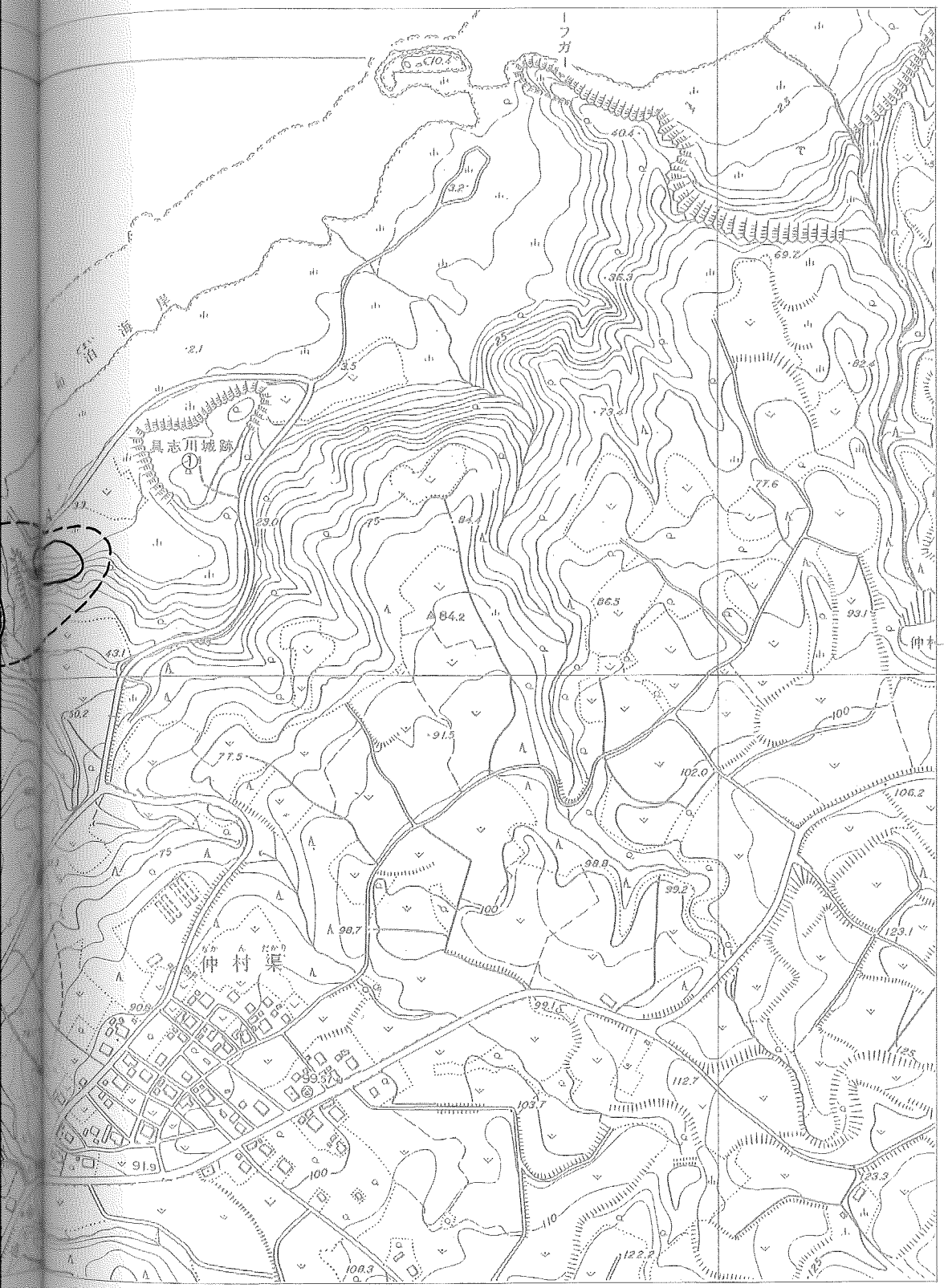

13
西銘崎
2.2
1.7
1.0
1.8
0.9
1.0
0.2
0.3


8
9
10
11
久米島空港
北原
久米島測候所

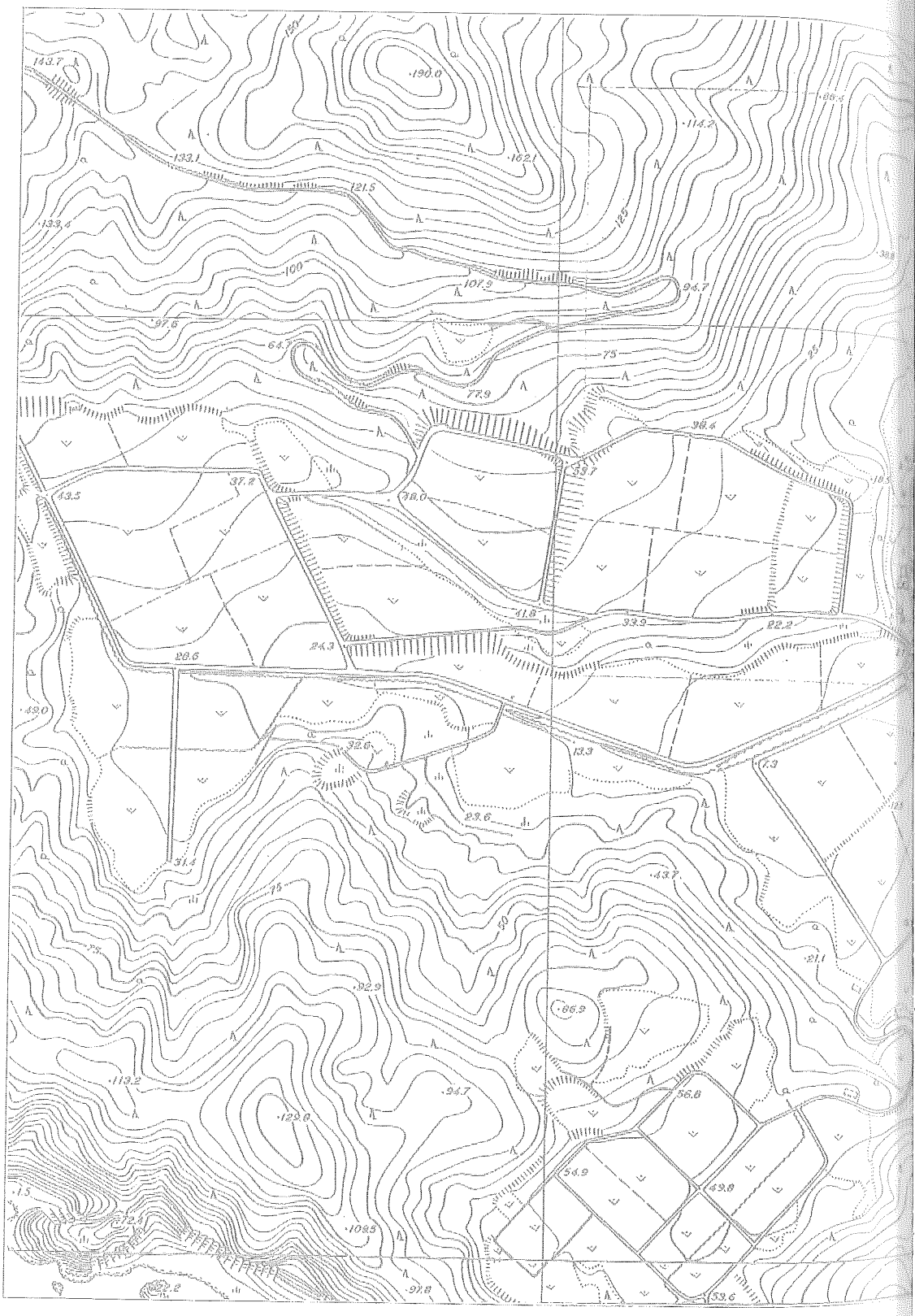

養殖場
E
F
5
6
7

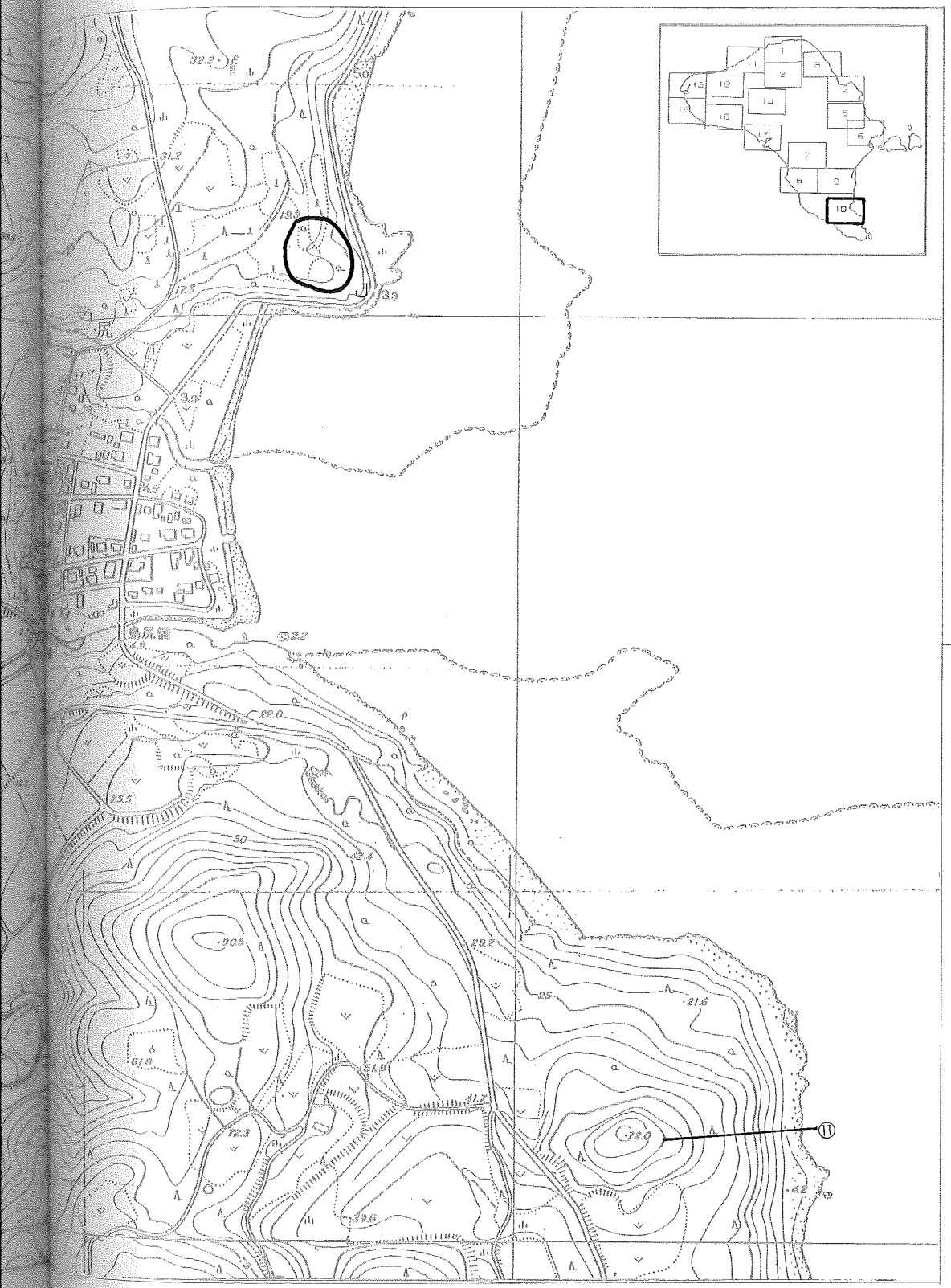

具志川

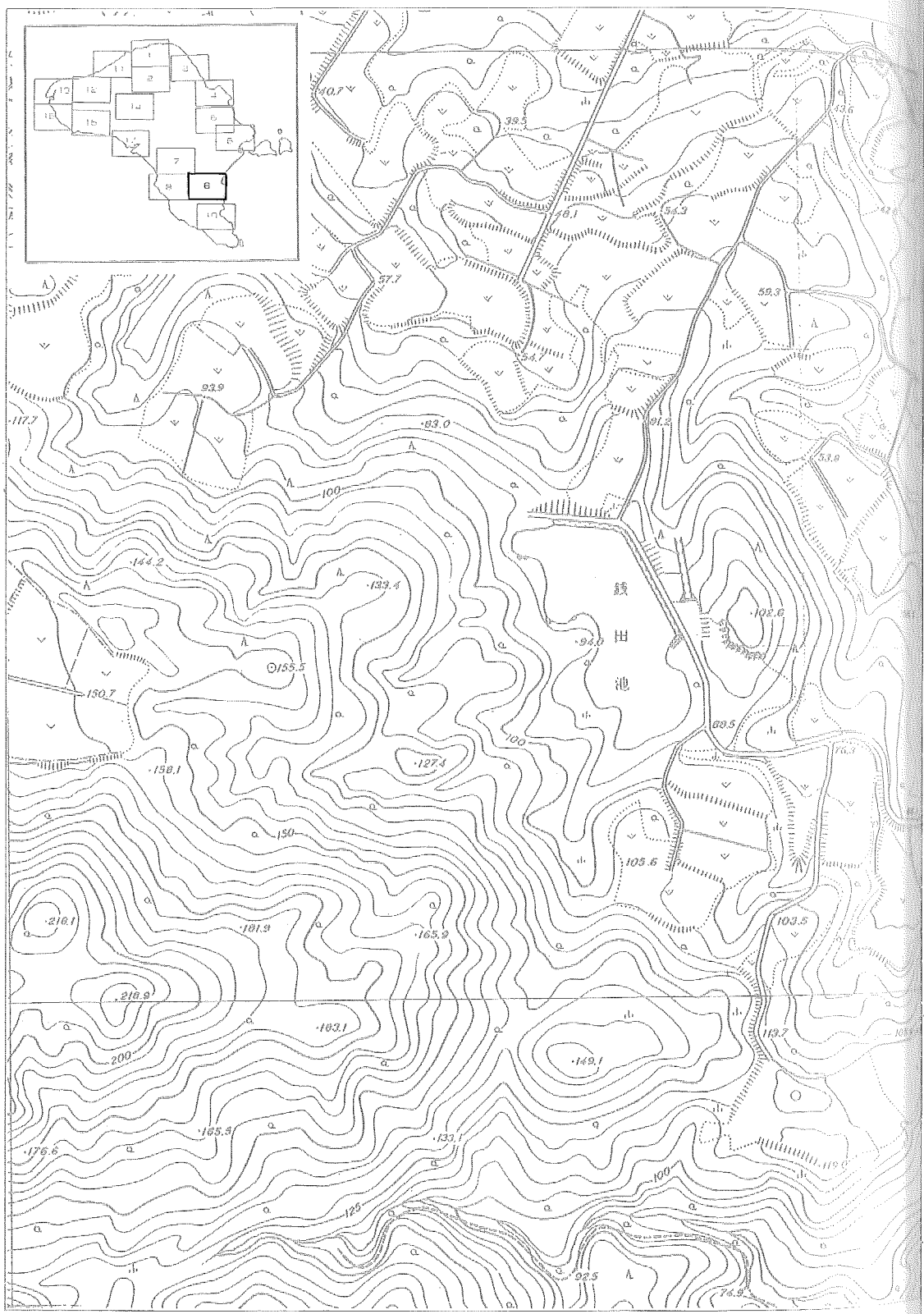

B
2.0
2.3
2.5
4.7
47.6
56.5
58.4
29.0
57.9
21.3
75.6
50
38.0
49.0



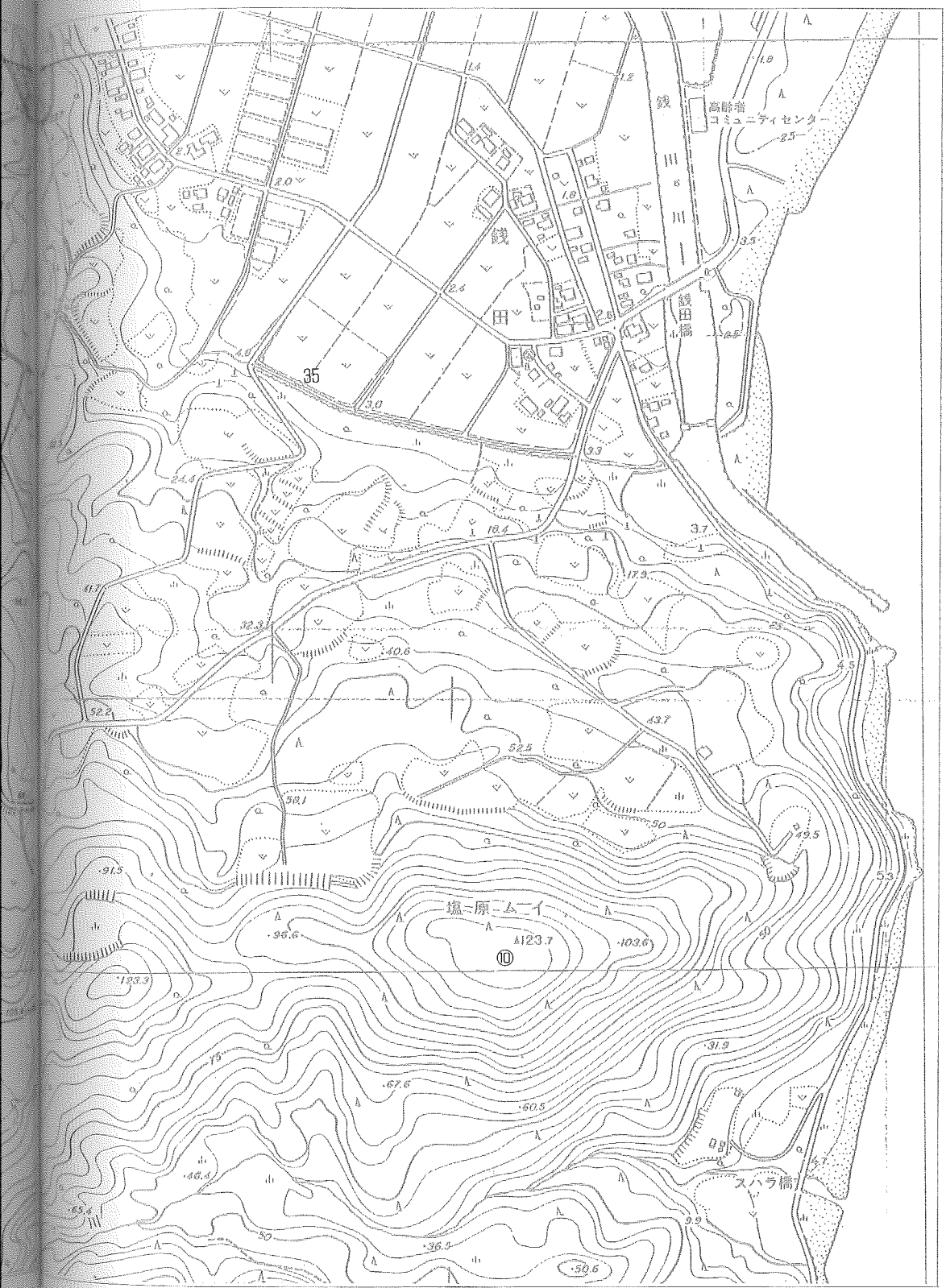
フガー
沼海岸
具志川城跡
仲村渠



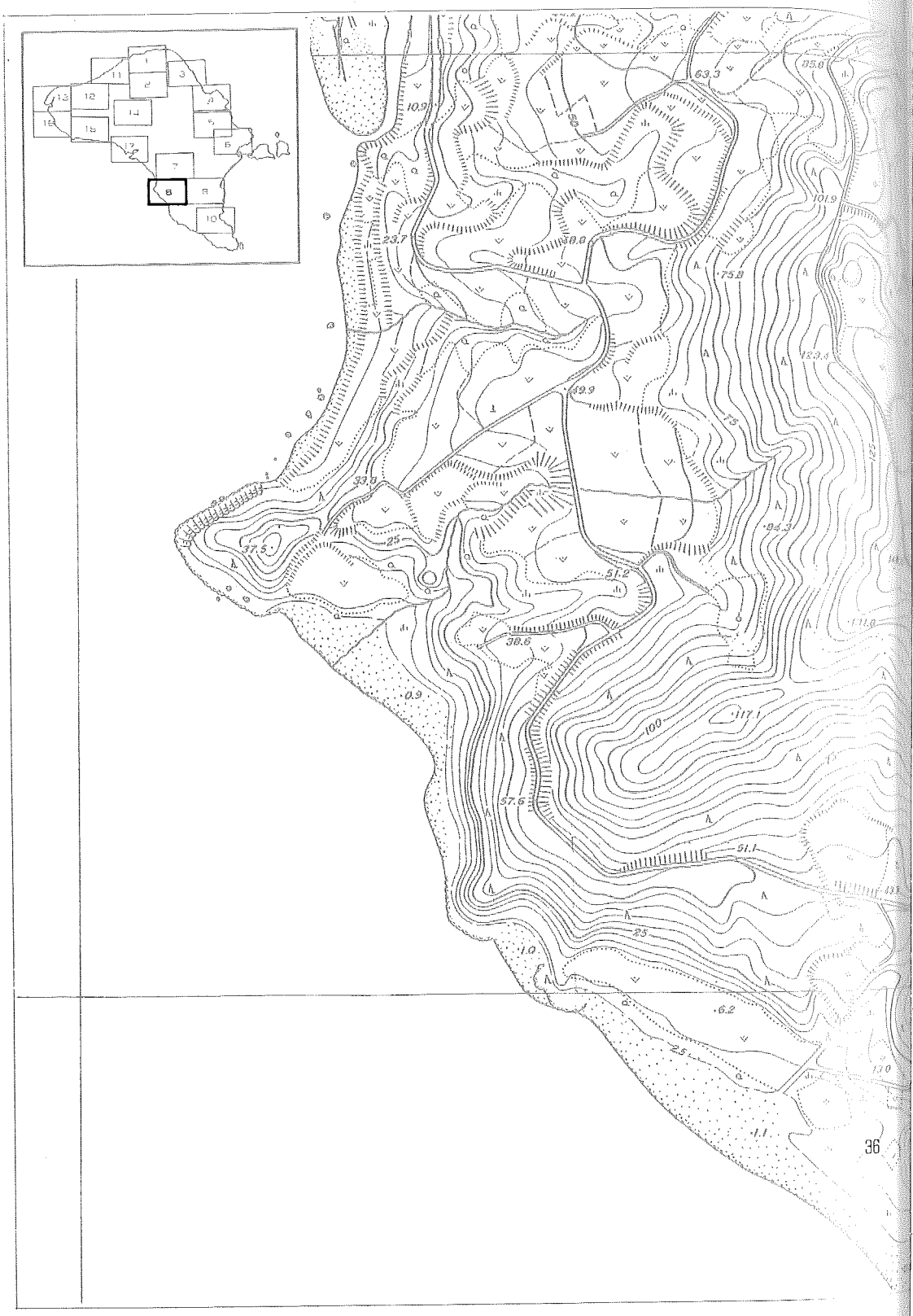

⑪



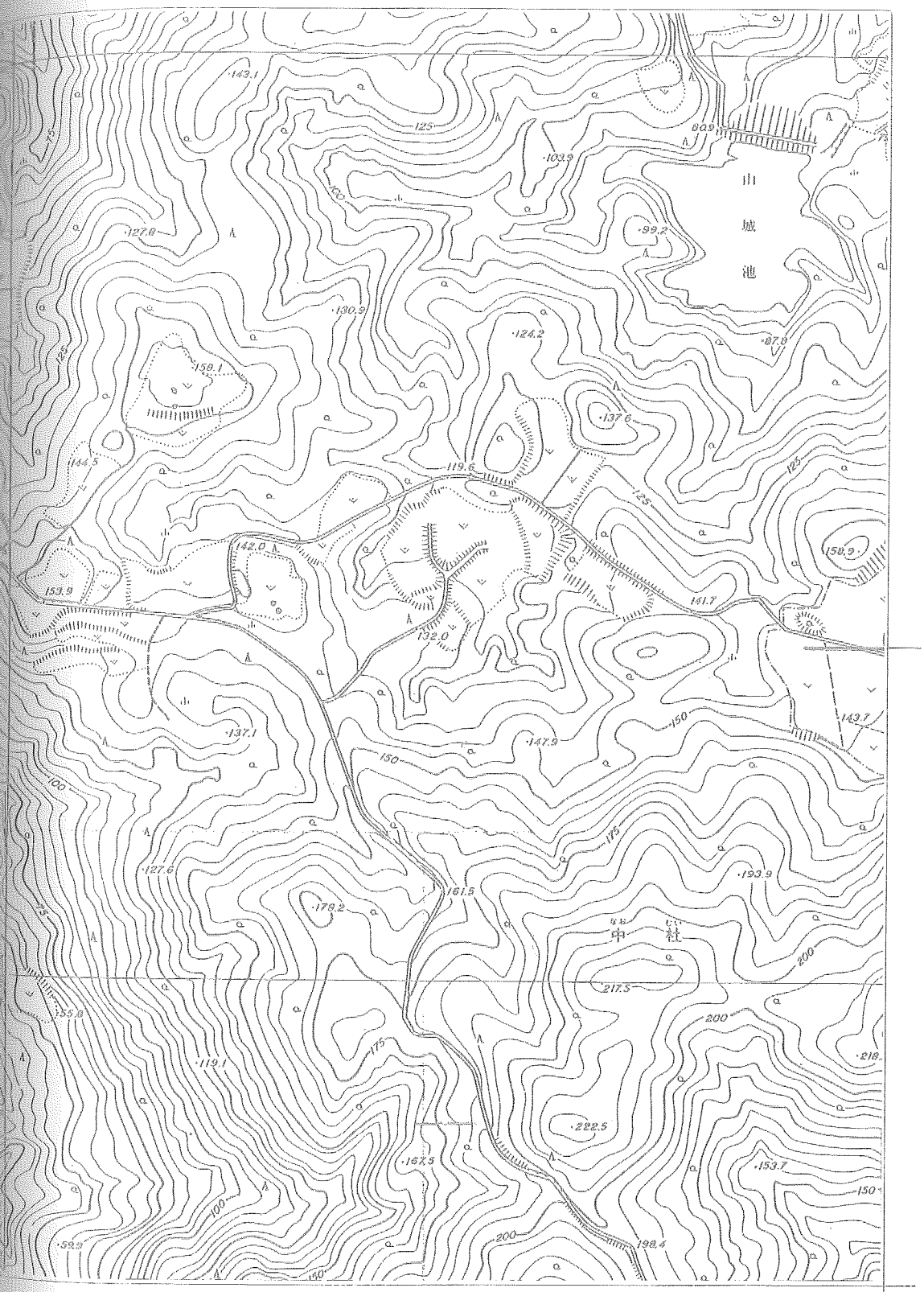
鉄
田
池

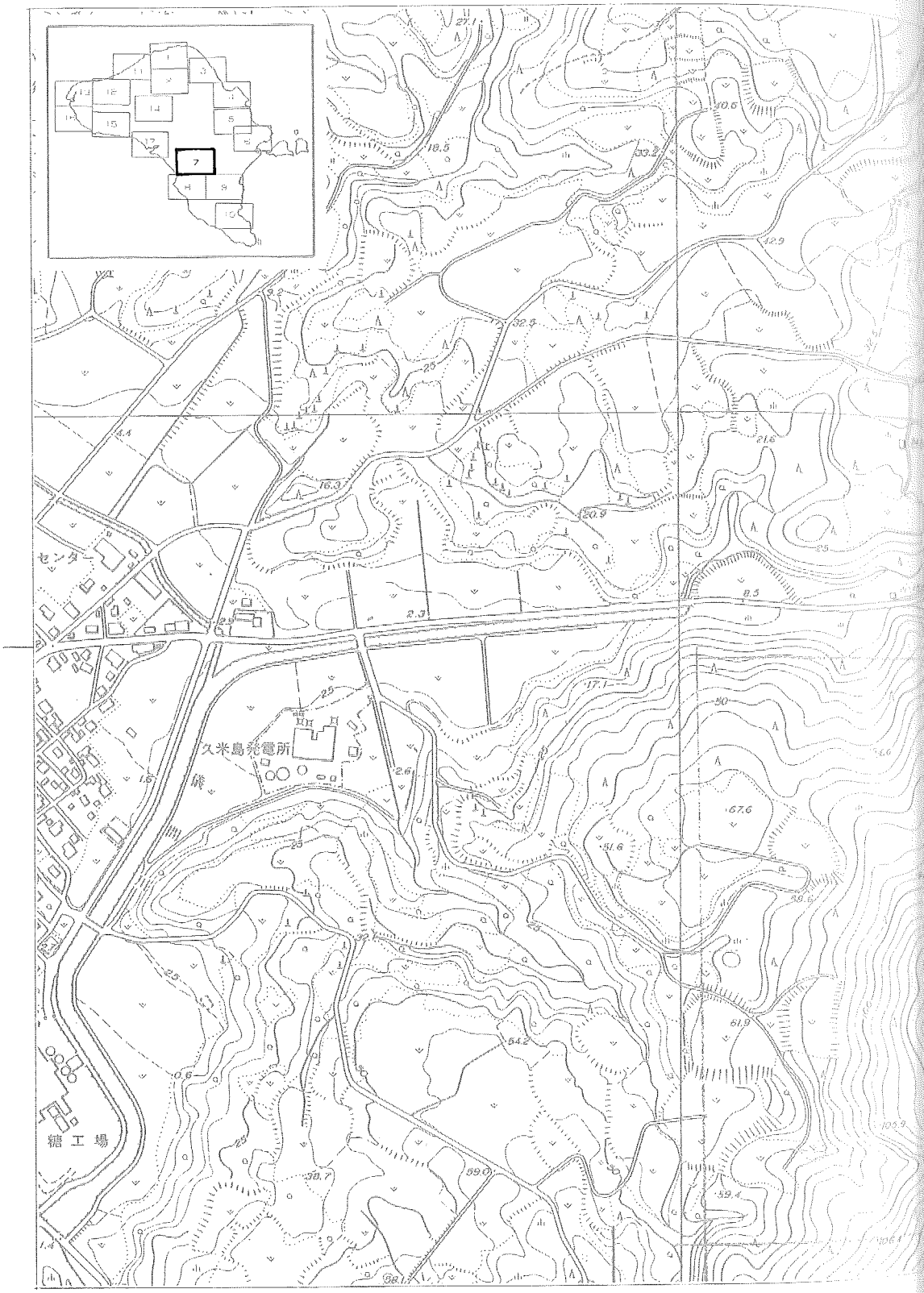


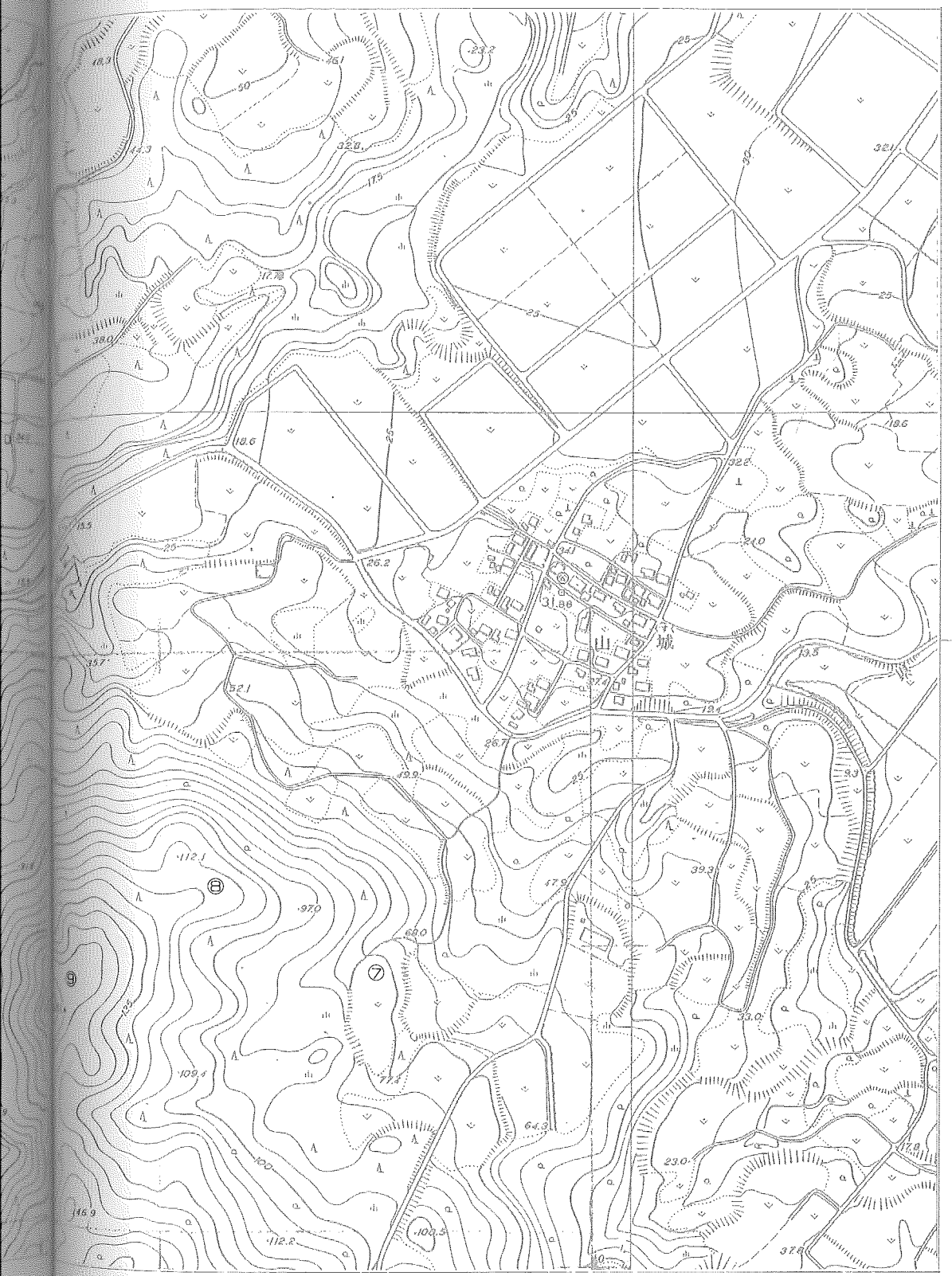
高齢者
コミュニティセンター
銭
田
銭田橋
35
塩原ムーイ
123.7
⑩
スハラ橋

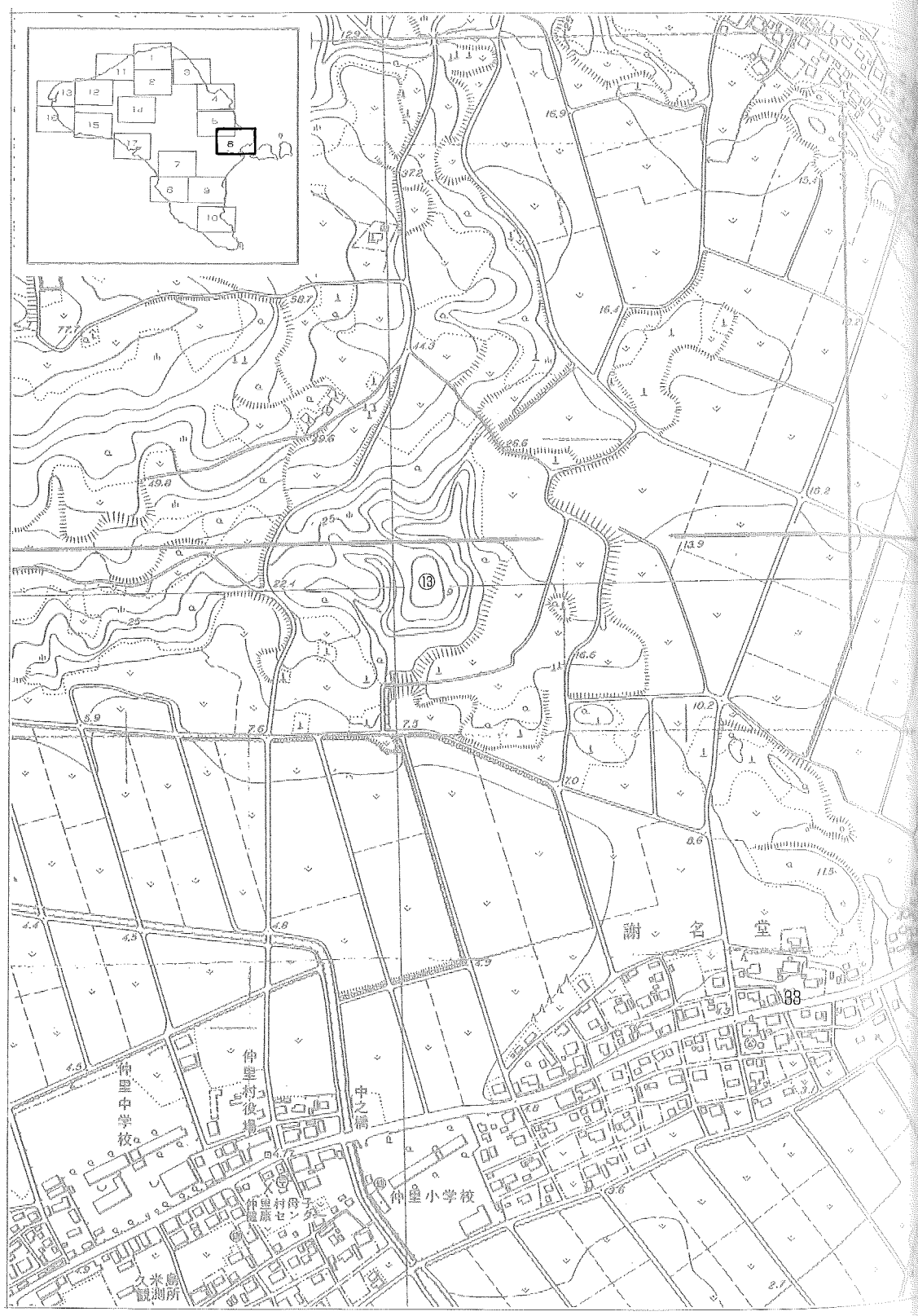


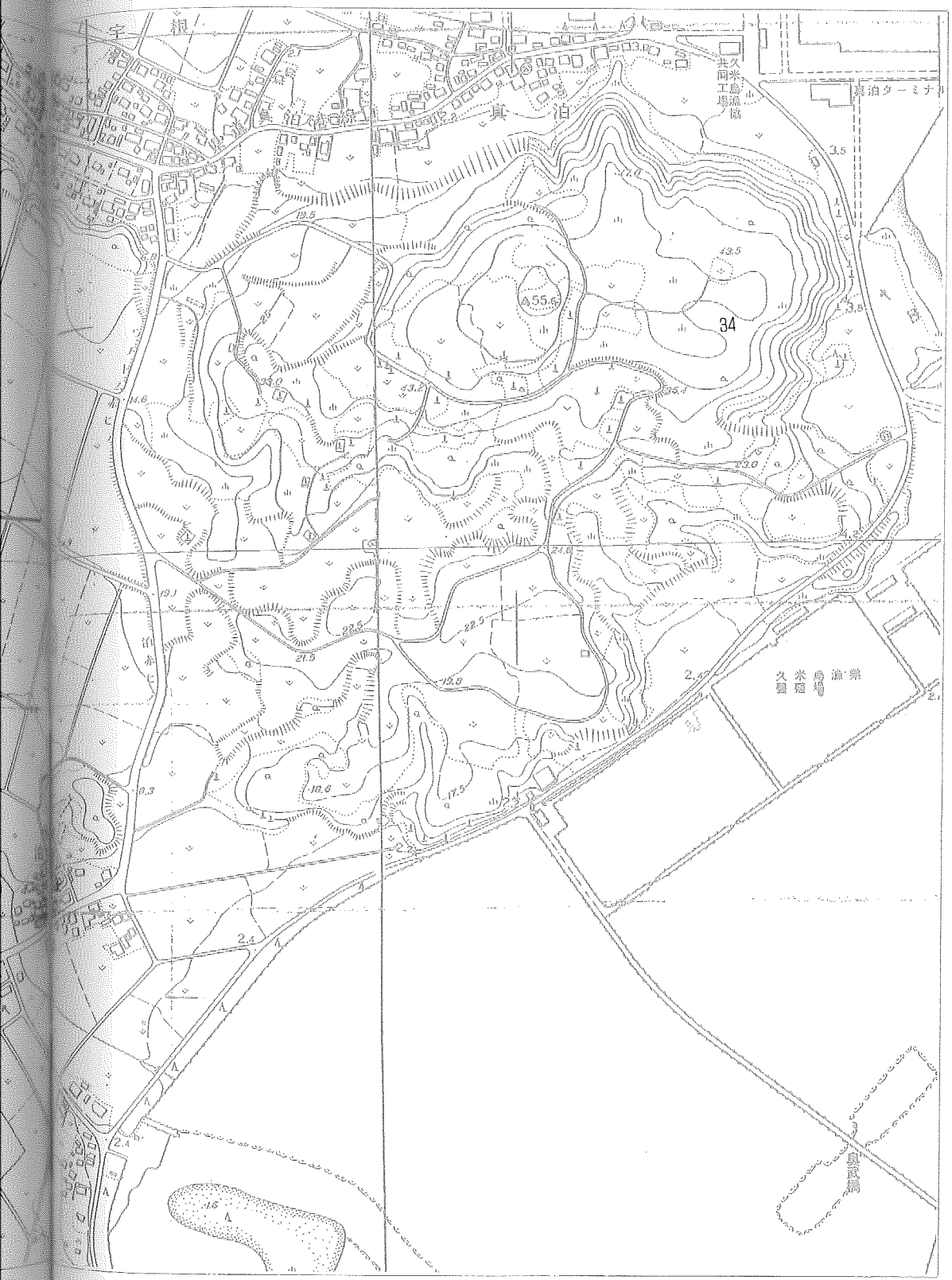
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
10.9
63.3
23.7
75.8
101.9
49.9
33.8
37.5
25
51.2
38.6
0.9
100
117.1
57.6
51.1
25
1.0
6.2
2.5
1.1
36

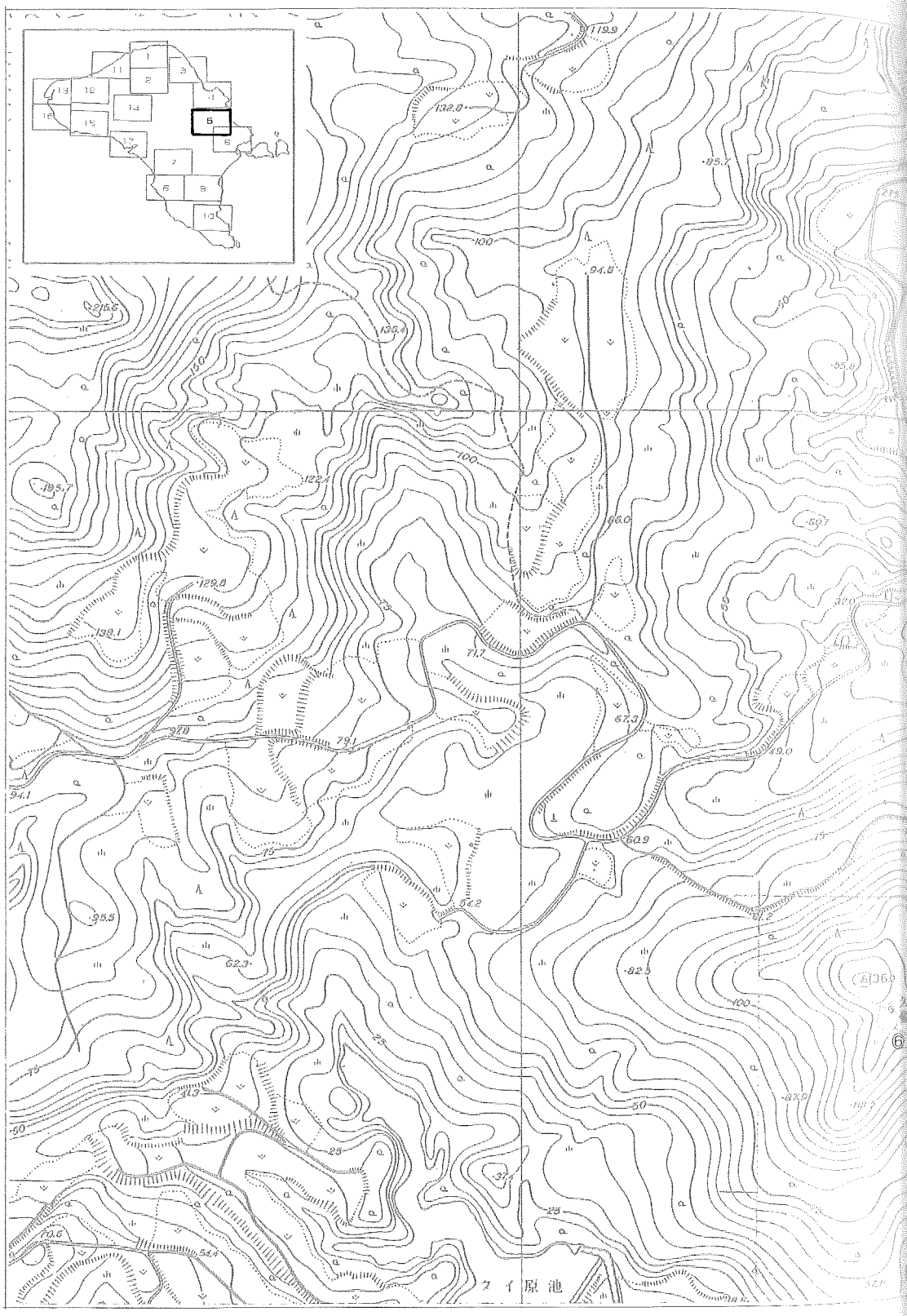

山
城
池
中
社
143.1
125
103.9
80.9
127.8
99.2
130.9
124.2
87.8
158.1
137.6
144.5
119.6
142.0
153.9
141.7
132.0
158.9
137.1
147.9
143.7
150
100
175
127.6
193.9
161.5
178.2
200
217.5
155.8
119.1
222.5
167.5
153.7
59.9
198.4

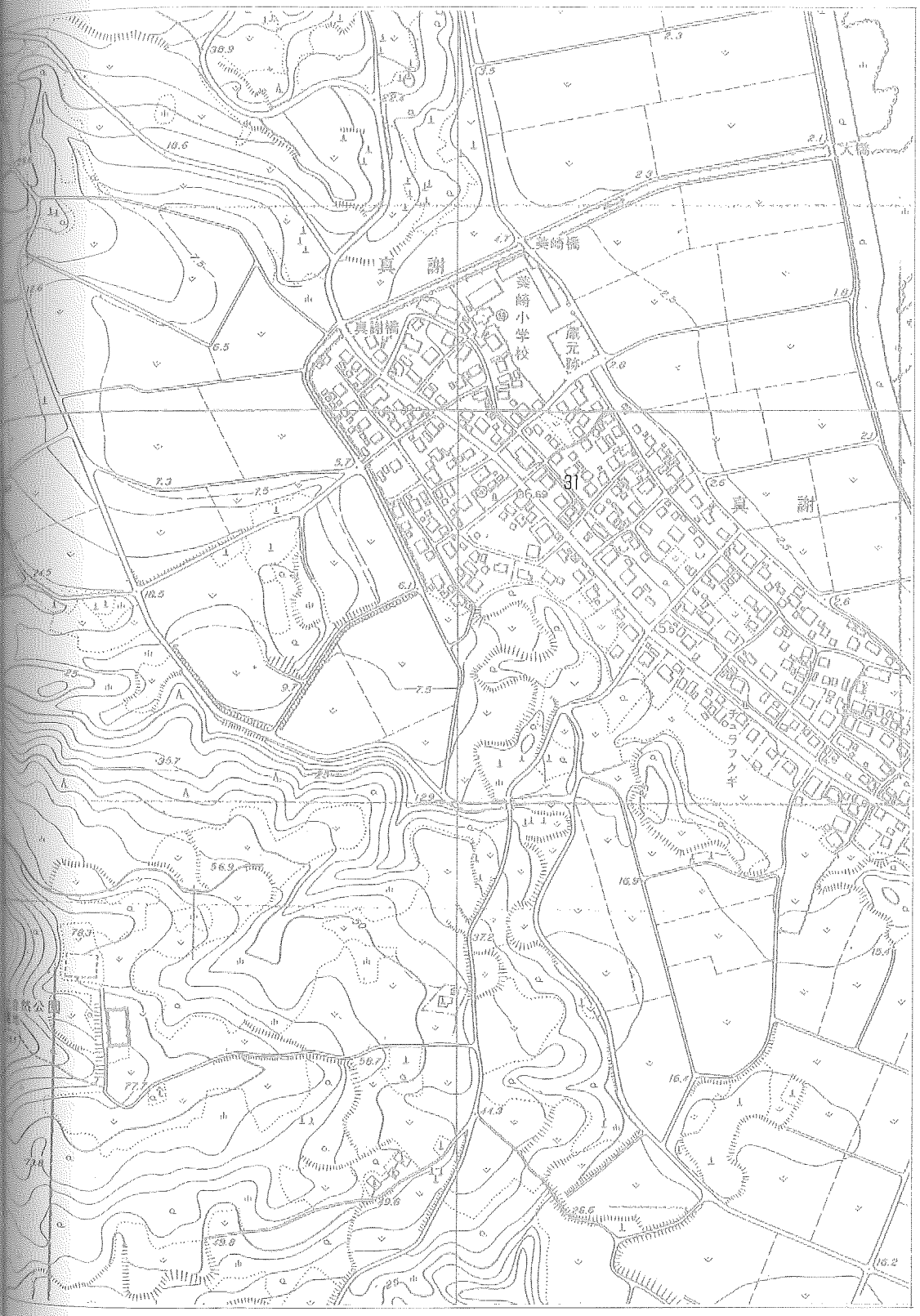

センター
久米島発電所
糖工場

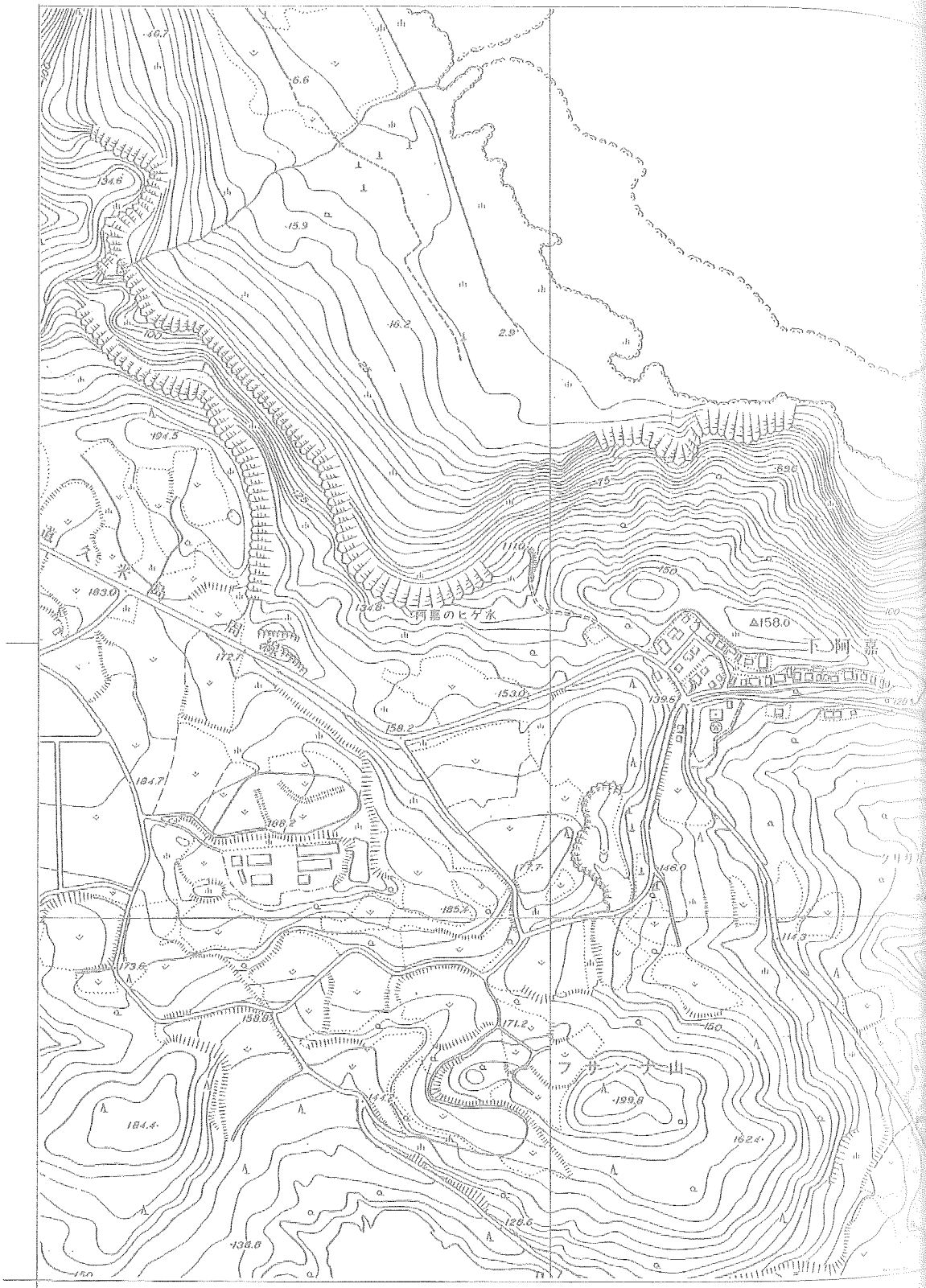

城
⑧
⑦


謝名堂
伸里中学校
伸里村役場
中之浦
伸里小学校
久米島観測所

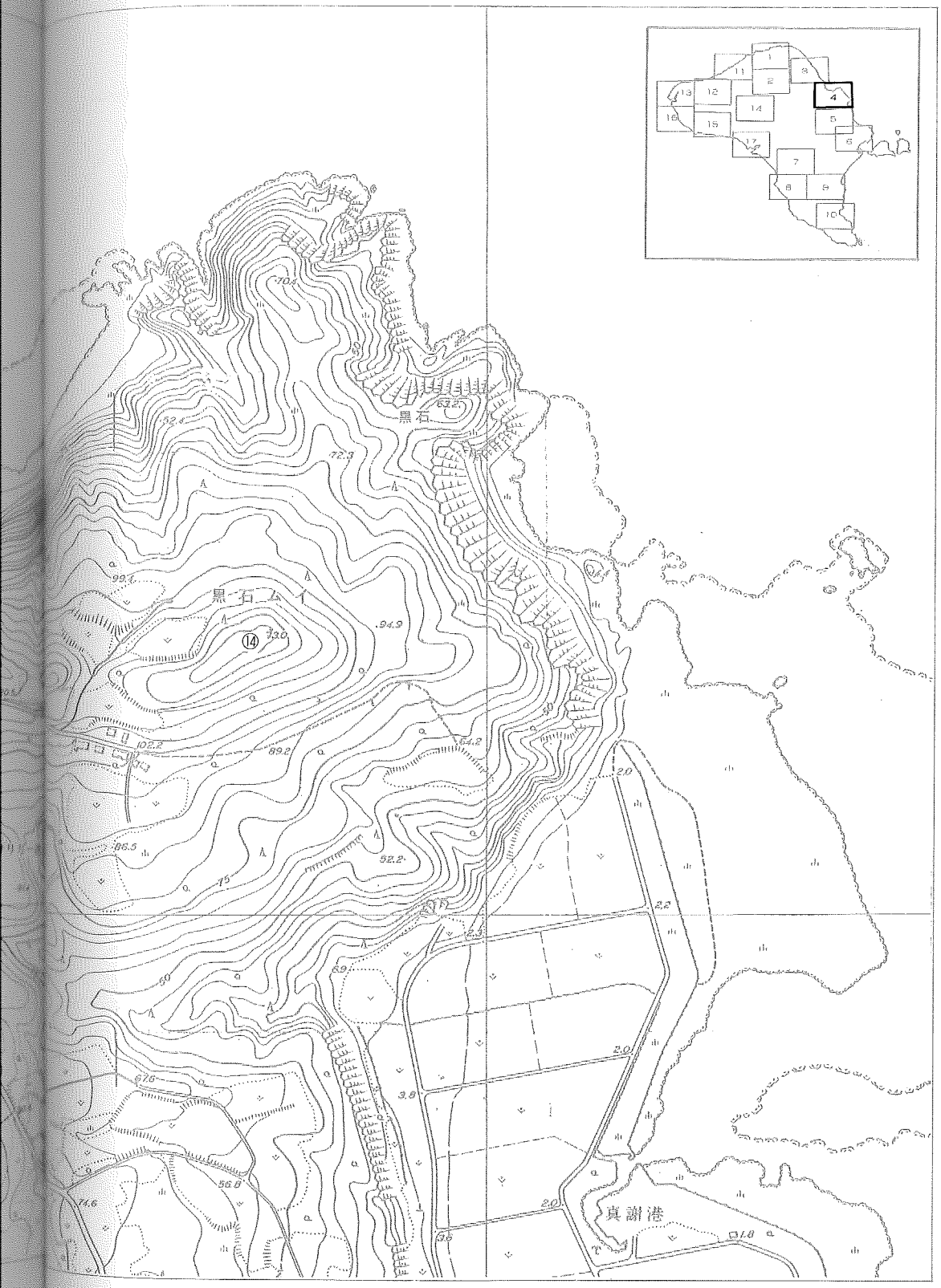

宇
根
真
泊
久米島漁協
共同工場
真泊ターミナ
34
久米島漁業
種殖場
奥武橋

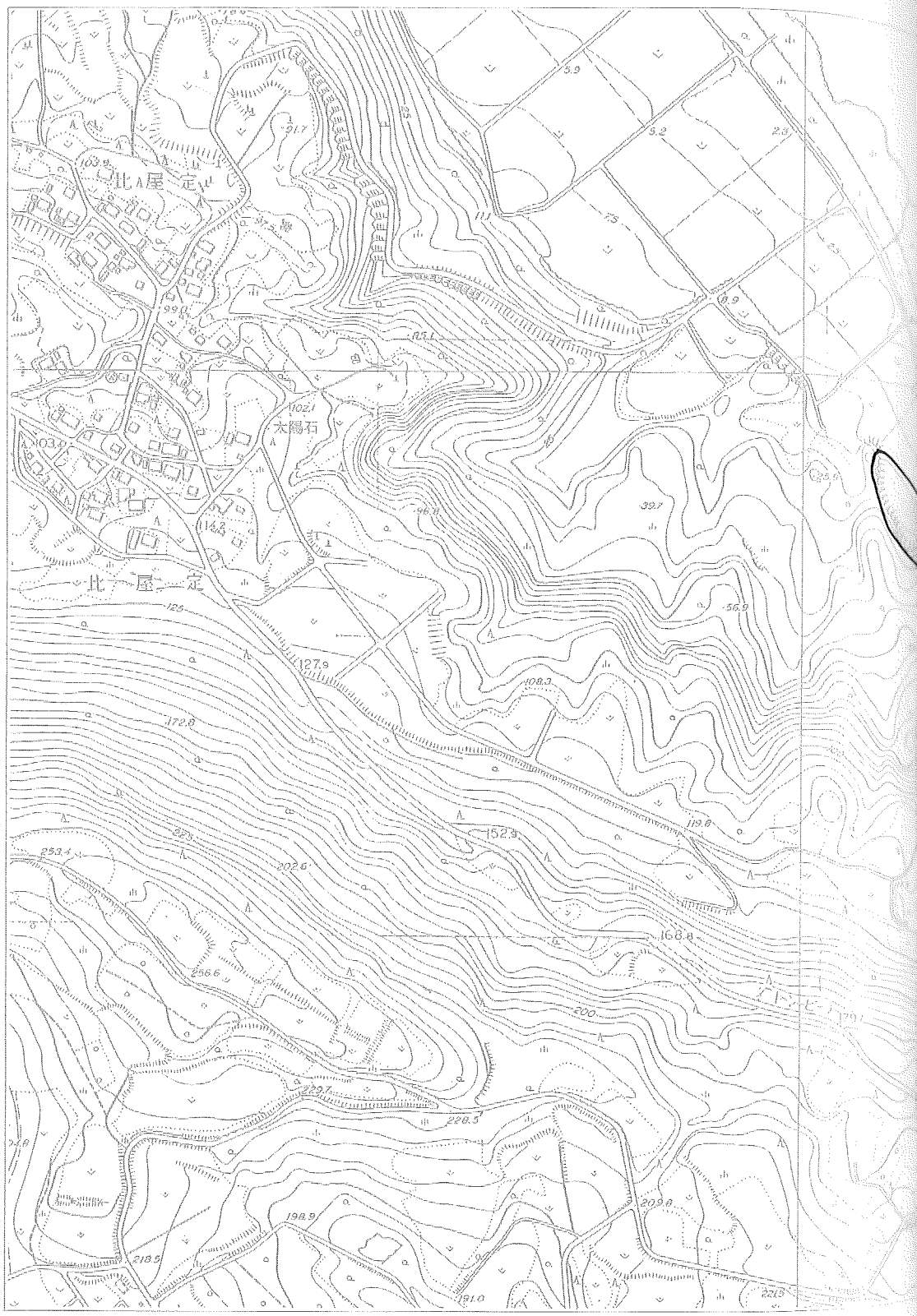

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
ヲイ原池

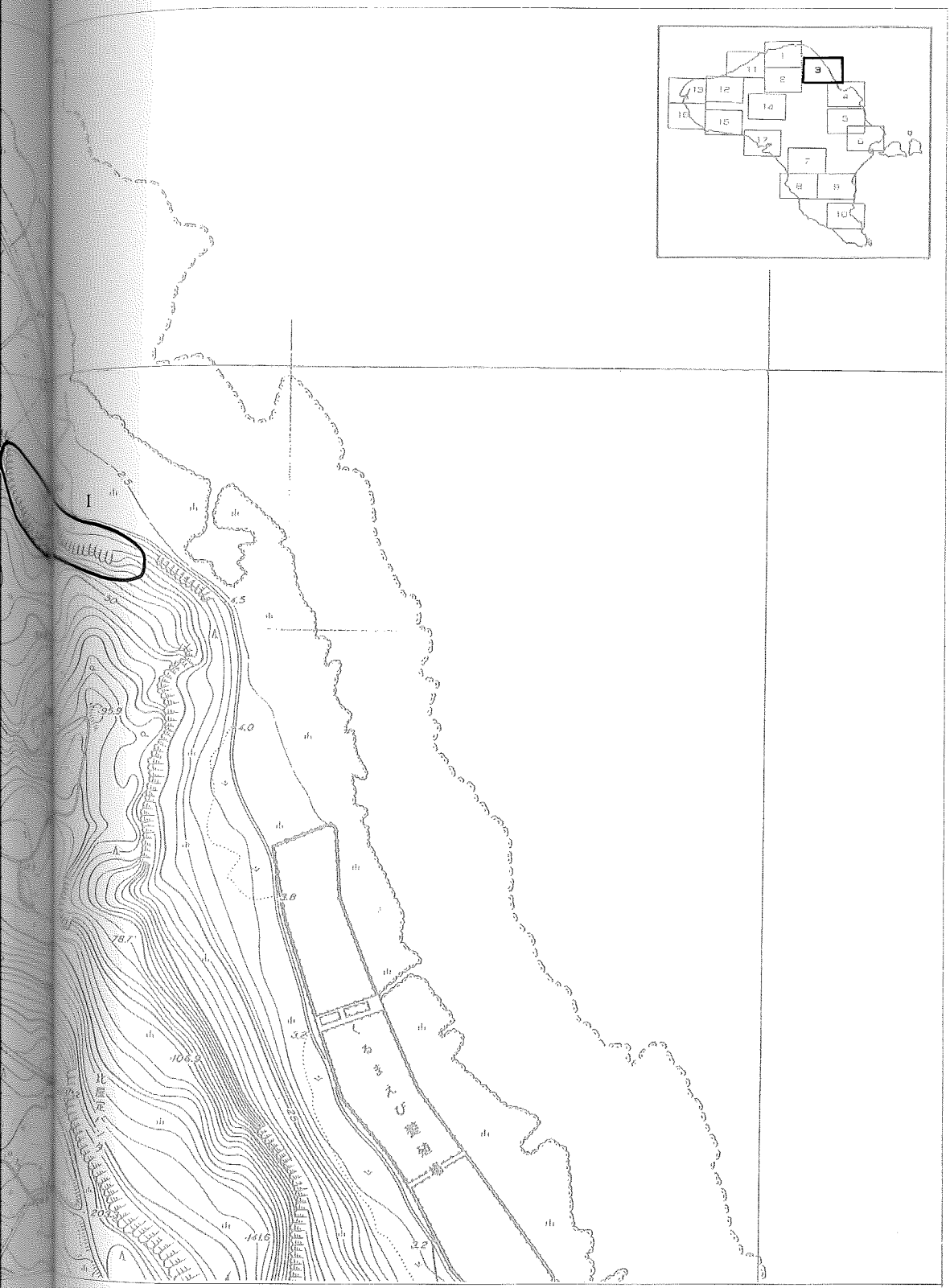

真謝
美崎橋
真謝橋
美崎小学校
廠元跡
31
真謝
大橋
チュラフクギ



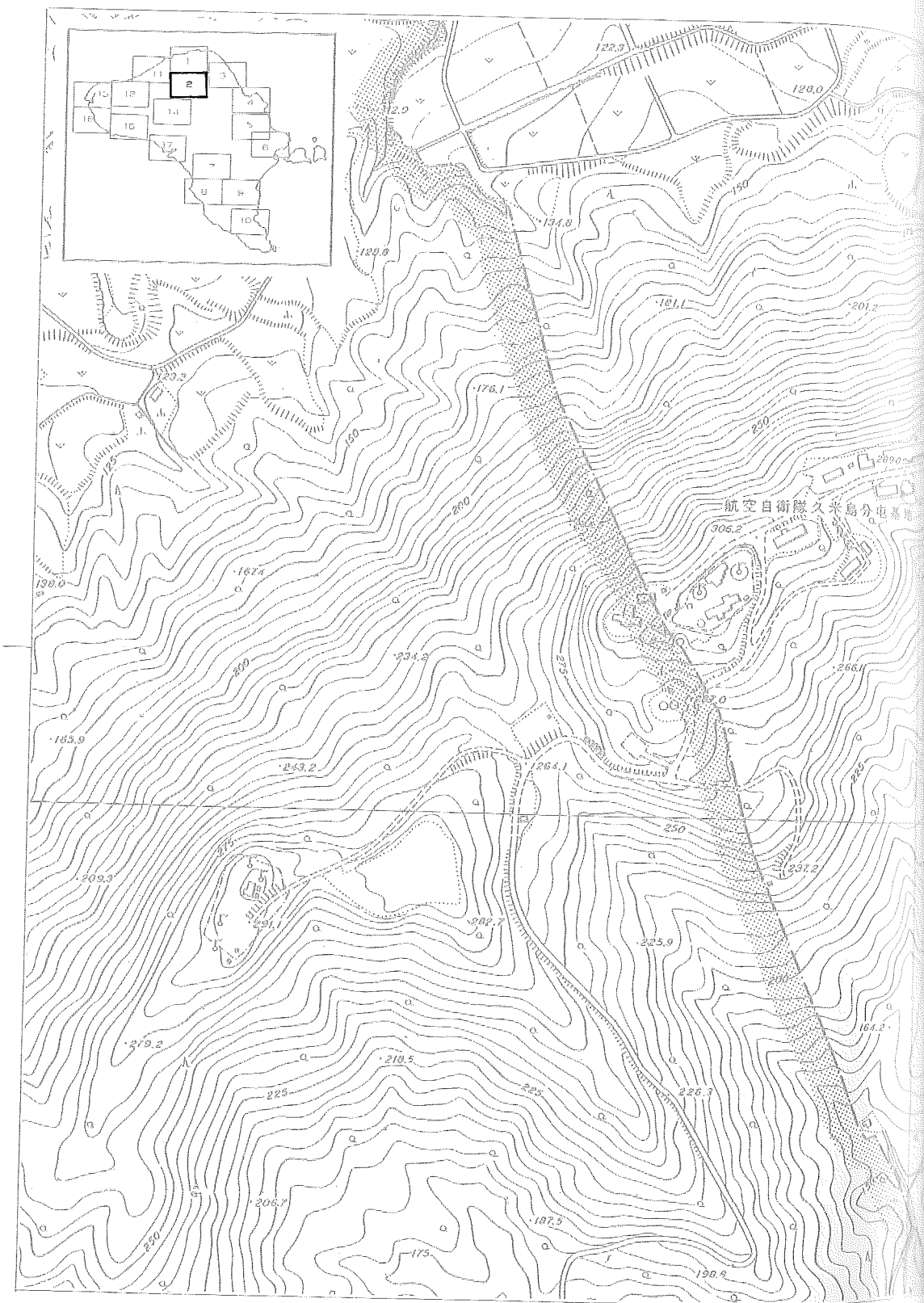
阿嘉のヒゲ水
下阿嘉
フサンナ山

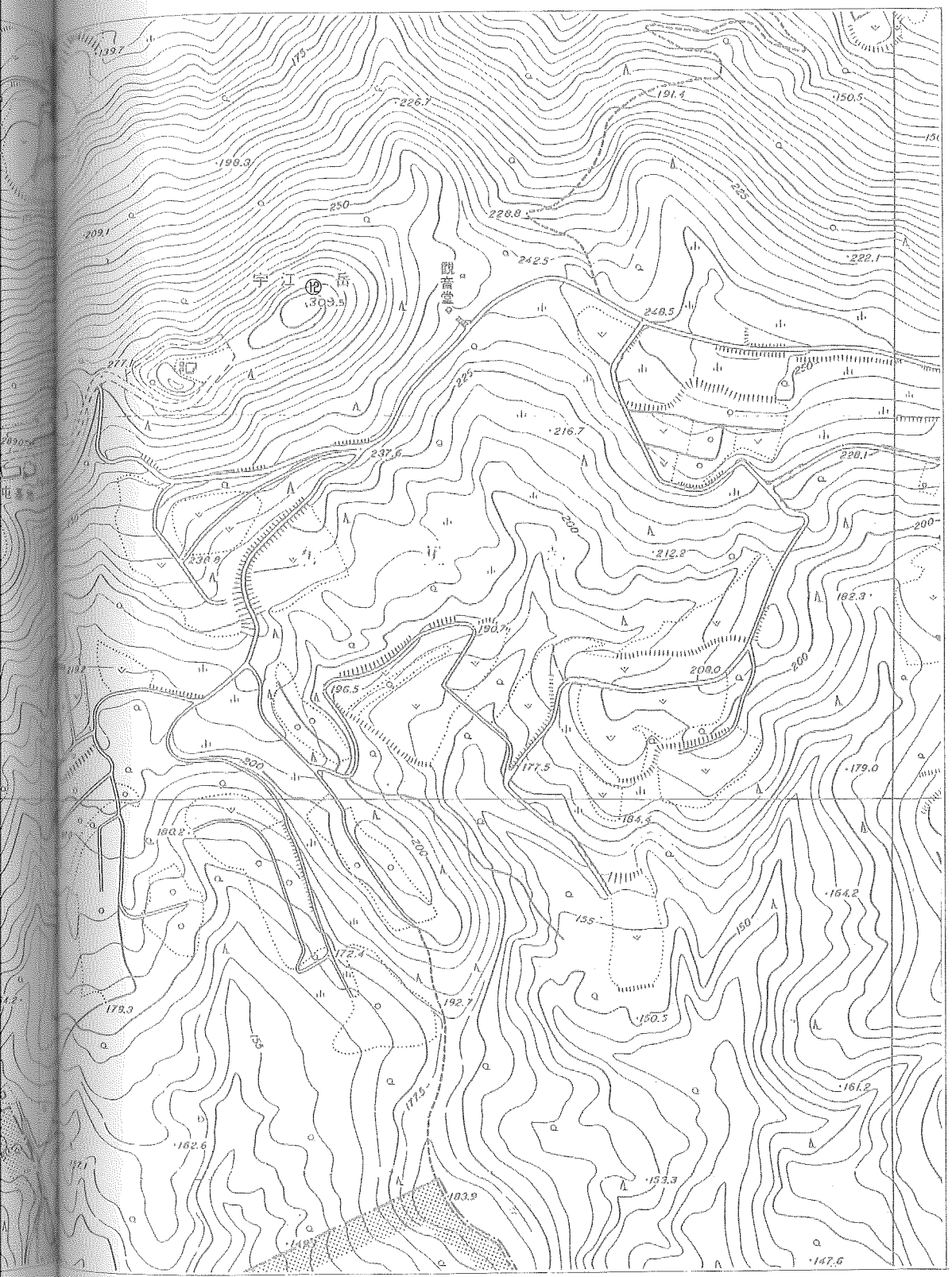

黒石
黒石山
⑭
真謝港

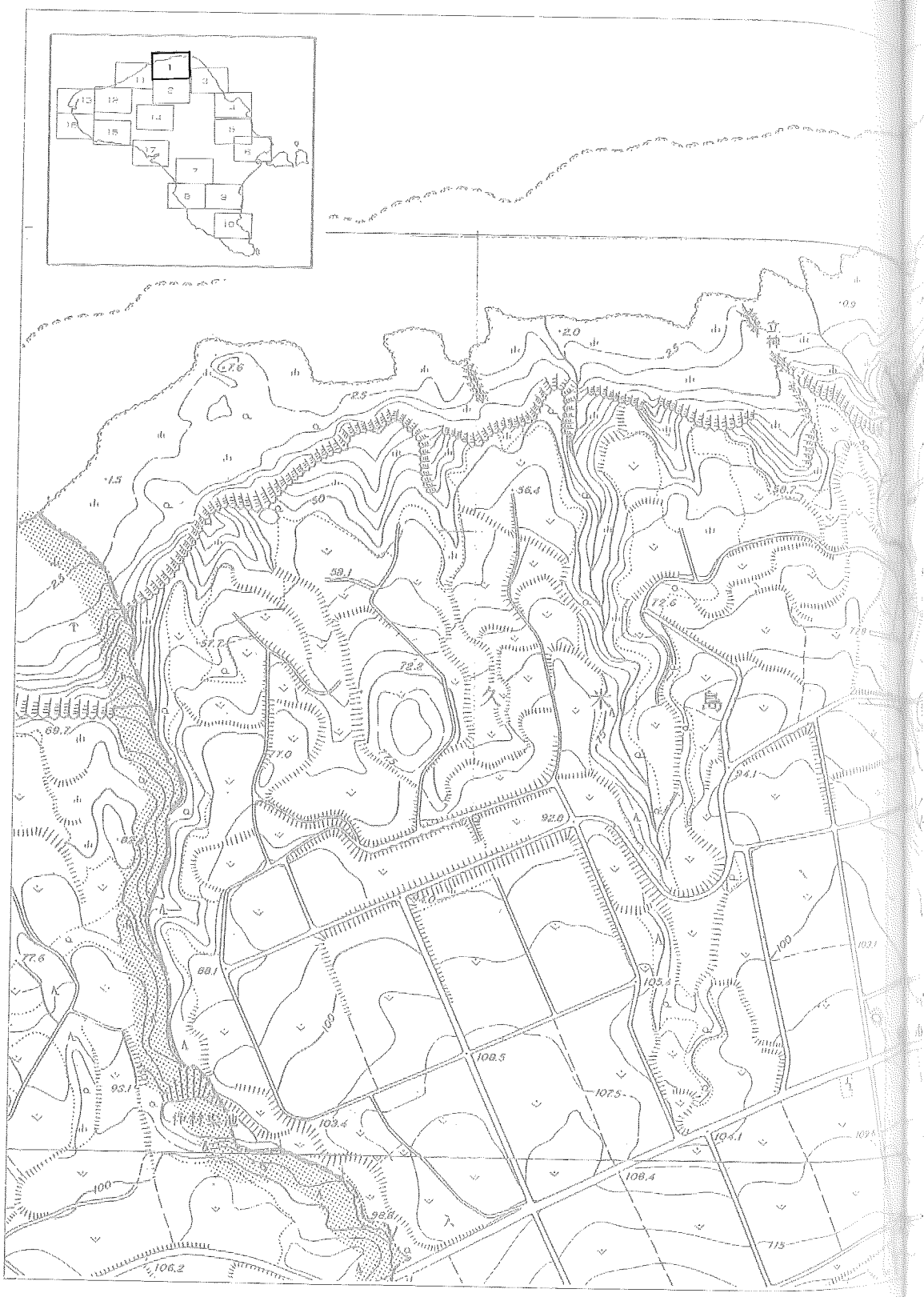

北屋定
太陽石
北屋定



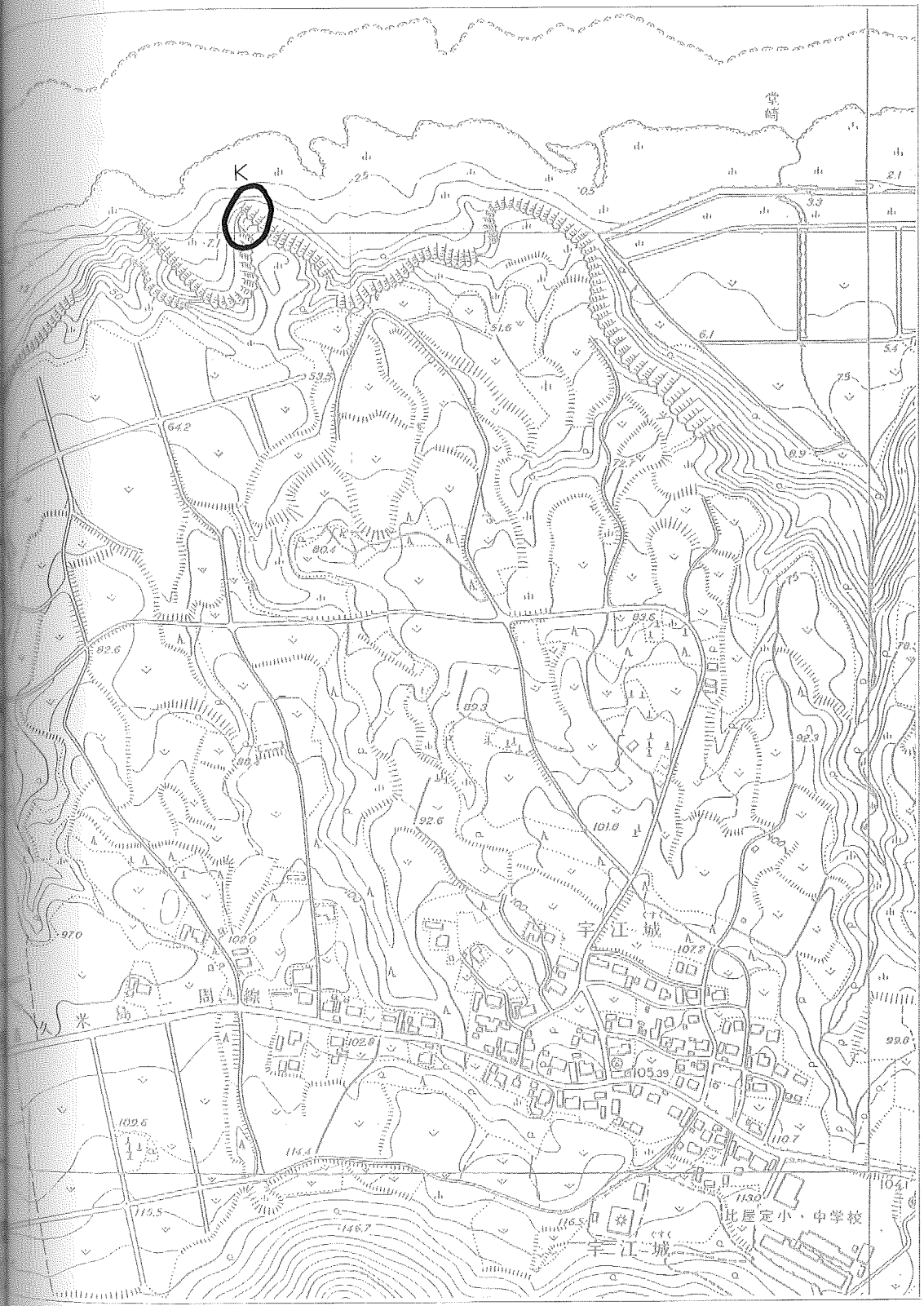
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
17
I
2.5
4.5
4.0
3.8
3.2
95.9
78.7
106.9
141.6


航空自衛隊久米島分屯基地


宇江岳
⑫
309.5
観音堂
139.7
175
226.7
191.4
150.5
198.3
250
225
228.8
209.1
242.5
222.1
248.5
277.1
225
250
216.7
237.6
228.1
200
212.2
200
238.8
182.3
190.7
208.0
200
196.5
200
177.5
179.0
184.4
180.2
200
164.2
155
150
172.4
192.7
179.3
150.5
155
161.2
177.5
162.6
153.3
183.9
147.6



久米島遺跡分布地図



番号	遺跡名称	概要
31	真謝貝塚	貝塚後期　住宅地造成のため遺跡の範囲をとらえることが困難なほど撹乱されている
32	謝名堂貝塚	貝塚後期・前期　前期タイプの土器は試掘を試みるが明確な包含層を確認するには至らない
33	銭田貝塚	貝塚後期　くびれ平底底部を持つ土器が主流
34	アーラ遺物散布地	貝塚後期？　微細な土器片が表採されるが時期の判断が困難
⑥	登武那覇グスク	グスク　石塁が残るグスク内外から土器や輸入陶磁器が採取される
⑦	クニグスク	グスク　大正から昭和初期まで石塁が残っていたという。輸入陶磁器が表採される
⑧	メンダグスク	グスク　安山岩による石塁と土塁で囲われている。石塁の一部は昭和の初期に近くの山城池築堤の用材になる
⑨	山玉グスク	グスク　一部に安山岩の石積みが確認される
⑩	塩原グスク	グスク　山頂部を大小の安山岩で二重の石囲が巡らされている
⑪	与那嶺グスク	グスク　海岸に突出した円錐型の丘の頂上部を安山岩で不明瞭ながら二重の石囲いがある

番号	遺跡名称	概要
36	アーラ遺物散布地	貝塚後期？　微細な土器片が表採されるが時期の判断が困難
⑥	登武那覇グスク	グスク　石塁が残るグスク内外から土器や輸入陶磁器が採取される
⑦	クニグスク	グスク　大正から昭和初期まで石塁が残っていたという。輸入陶磁器が表採される
⑧	メンダグスク	グスク　安山岩による石塁と土塁で囲われている。石塁の一部は昭和の初期に近くの山城池築堤の用材になる
⑨	山玉グスク	グスク　一部に安山岩の石積みが確認される
⑩	塩原グスク	グスク　山頂部を大小の安山岩で二重の石囲が巡らされている
⑪	与那嶺グスク	グスク　海岸に突出した円錐型の丘の頂上部を安山岩で不明瞭ながら二重の石囲いがある
⑫	宇江城グスク	グスク　県指定史跡、海抜310mの山頂を主廓として進入路を多数の防御施設を持つ。主郭部より大量の輸入陶磁器が採取される
⑬	ウーリ御嶽	グスク　近代のため池に一部水没していて全体像がつかみにくい。石積みは確認できないが切岸が要所に施されている
⑭	黒石森グスク	グスク　舌状に延びた丘陵地を石塁、土塁、切岸で区画されている
A	具志川グスク西崖葬墓地帯	海食崖に開いたいくつかの小洞窟に遺骨が残る
B	仲間グムイ上崖葬墓地帯	〃
C	シナグムイ崖葬墓地帯	〃
D	グスクヌチ崖葬墓地帯	崖や鍾乳洞に遺骨が残る、崖にある遺骨は現代の人たちのルーツにあたる
E	ナカベーヤ崖葬墓地帯	墓前にテラスを設け祭祀が行えるような施設を持つ墓陵もある
F	ヤージヤーガマ	全長500mの鍾乳洞中３ヶ所の開口部におびただしい遺骨があったのだが、僅か一部が残るのみである
G	ヤッチヌガマ	大きな鍾乳洞の開口部がオーバーハングした箇所遺骨が残る。現在でも一部の遺骨は祭祀の対象になっている
H	伊敷索グスクの崖中腹	崖の途中に開いた小洞窟群に遺骨が多数安置されている
I	堂ノ比屋	伝承　堂の比屋という人物の墓を中心として、彫り込み式の墓陵が点在する。墓面は半分ほど石積みになる
J	ナバル墓群	安山岩の岩盤上に方形のに珊瑚礁で積まれた墓陵が群立してあったが、新築されたため減少している
K	アンマーグスク	屹立する岩になっているが、ブロック状の摂理の岩肌は遠くから石垣のように見える。

番号	遺跡名称	概要
22	清水西貝塚	貝塚後期　清水小学校と総合グランドの中間点にある。ほ場整備地内にあるが採砂で大部分が破壊されている
23	清水貝塚	貝塚後期　清水小学校グランドと西接する畑地に分布する。グランド側は造成のため壊滅した。その時かなりの遺物が廃残土とともに捨てられたという。西方の畑地地域は発掘済み
24	久米島仲泊貝塚	貝塚後期　集落地域にある。試掘が試みられている２枚の文化層があることが確認されている
25	ウルル貝塚	貝塚前期・後期　貝塚は３地点に区分される後期系土器も２タイプあり分布箇所も前期地域を挟んでいる
26	小港遺跡	多和田真淳氏により発見されているが未確認
27	大田辻遺跡	貝塚中期　海抜30m付近にある。大量の石器類が採取されている。中心部はほ場整備で破壊を受けている
28	ヤッチヌガマ遺跡	貝塚後期？グスク？　鍾乳洞内より小破片の土器が採取されるが時期の判断が困難である
29	ミッチン遺物散布地	貝塚中期　舌状に延びた台地上にある小破片の土器と石器が採取される。一部採石のため掘削されているが断面からは明確な包含層は確認できない
30	阿里遺物散布地	貝塚前期・後期　建築工事のため撹乱され包含層の確認ができない
①	具志川城跡	グスク　国指定史跡　グスクの両脇に古集落跡が伝えられる（輸入陶磁器が採取される）。
②	大城チジ	グスク？　緩やかな丘陵の頂上部（4000坪余）を一重の列石が巡らされている
③	本中グスク	グスク　現在の宇江城グスクを築く前にここにグスクを造りかけたとの伝説がある石垣は戦後採石のため持ち出されている
④	フーク嶽	グスク？　海抜202mの独立丘陵の頂上平坦地（500坪ほど）を一重の石垣が巡らされている
⑤	伊敷索城跡	グスク　県指定史跡　珊瑚石灰岩を石材にし野面積みの石垣が残る
31	真謝貝塚	貝塚後期　住宅地造成のため遺跡の範囲をとらえることが困難なほど撹乱されている
32	泊貝塚	
33	謝名堂貝塚	貝塚後期・前期　前期タイプの土器は試掘を試みるが明確な包含層を確認するには至らない
34	スナミの丘遺物散布地	グスクから近世　少量ながら畑地より輸入陶磁器が表面採取される
35	銭田貝塚	貝塚後期　くびれ平底底部を持つ土器が主流。

久米島遺跡分布一覧表

※番号は分布地図の番号と一致する。

番号	遺跡名称	概要
1	下地原遺跡	貝塚中期　珊瑚石灰岩の台地上と台地の崖下から遺物が採取される。石器類が豊富に採取される
2	下地原洞窟遺跡	更新世人骨、グスク時代の土器・炭化米・銛・鉄斧が出土。保存状況は良好
3	バケーマシ遺跡	貝塚後期　平地のマージ地帯にある特異な尖底を持つ土器が主流。口縁部に有文が僅かに採取される
4	ハンタバル遺跡	貝塚前期　下地原遺跡と同じ稜線上にあり台地と台地下方から前期の土器片と石器が採取されるが少量である
5	下地原貝塚	貝塚後期　砂混じりマージ上にある。くびれ平底が主流
6	ヤージヤーガマ遺跡	貝塚後期　発掘済みグスク時代の複合主洞の４つの開口部から土器片など遺物が採取される
7	ナカベーヤ遺物散布地	貝塚前期　珊瑚石灰岩台地下、吹き溜まりの砂地から土器、石器が僅かに採取される
8	北原第３貝塚	貝塚後期　珊瑚礁原の吹き溜まりの砂地にある。くびれ平底が主流。海抜２m余の低地にある
9	長作原遺物散布地	貝塚前期　なだらかな砂丘地で前期、後期の複合であると思える平底、有文土器片貝類が僅かに採取される
10	クイングァグスク遺物散布地	貝塚中期　マージ地帯にある小片の土器と石器が採取される。石器は石斧類が少なく敲打器が多い
11	北原第１貝塚	貝塚後期　発掘済み
12	北原第２貝塚	貝塚後期
13	大原第２貝塚Ｅ地点	貝塚後期か採石のためほとんど壊滅状態ペンダント状の石器、土器の小破片が採取された
14	大原第３貝塚	貝塚前・中・後期の複合　なだらかな円錐状の石灰岩丘綾の頂上にあったがほ場整備のため壊滅状態
15	大原第２貝塚Ｄ地点	貝塚後期　リゾートホテルに北接してあり、夜光貝たまりが数カ所に確認される。ホテル造成のため表土層がはぎ取られた状態である
16	大原第２貝塚Ｃ地点	貝塚後期　Ｄ地点と接しているが僅かに無遺物地帯を挟む
17	大原第２貝塚Ｂ地点	貝塚後期　発掘調査済み
18	大原第２貝塚Ａ地点	貝塚後期　以前の採砂のためかなり壊滅を受けていると思われる
19	大原貝塚（県指定史跡）	貝塚時代前期・中期主流の貝塚、指定区に西接する箇所は発掘済み
20	大原東貝塚	貝塚前期･後期　県指定地域から小河川跡を挟んであった。採砂のため壊滅状態
21	総合グランド北貝塚	貝塚後期　総合グランドに西接しほ場整備地内にある

十八	（真宗布教師渡米につき諸間切諸島への通達）	一	四	二三・五×一五・五	芭蕉紙	〃	明治九年頃ヵ。日本より渡米する者が居るので、惣横目、横目にも厳重申渡し、帰依しないよう高奉行から通達
十九	十一月仲里間切具志川間切漂着の唐人御届書写	一	二八	二五・五×一八・〇	〃	〃	両間切在番から唐船漂着について御鎖側御取次衆への報告文写し。大破
二〇	瓦家上中葺並白壁塗例	一	七	二〇・〇×一九・〇	藁紙	〃	上葺は瓦一六〇枚、中葺は二二〇枚（一坪例）で、上餅打、中餅打について記す
二一	萬算用帳	一	不明	一六・六×一四・六	楮紙	切紙	道光十三年。表紙に「久米具志川間切脇文子西銘村、上江洲仁屋」とある。「起先之事」「萬買入之事」などがある。大破
二二	萬要記	一	八一	二六・二×一九・八	〃	袋綴	綴代に「乾隆三拾年乙酉五月　於首里宿写之」とある。写本。大破
二三	不審書	一	五	二六・七×二〇・〇	楮紙	袋綴	表紙に「乾隆六拾丙辰年孟夏吉旦写之」とあり。問答形式で記され答えは朱書する。写本。大破
二四	球陽書礼　全	一	一三	二六・九×二〇・三	〃	〃	表紙に「乾隆四十三年戊戌閏六月十一日写之」とあり。写本。大破
二五	（書　礼）	一	七五	二五・一×二〇・一	藁紙	〃	書状の礼式を書いたもの。表欠。写本。大破
二六	（書状案文）	一	七	二六・五×二〇・〇	楮紙	〃	表欠。大破
二七	（大星由良之介書簡）	一	六	二七・八×二四六・〇	〃	続紙	写し。大破
二八	日撰吉凶口	一	二六	二〇・三×一三・三	〃	切紙	占書、吉凶を記したもの。大破
二九	御日常の事	一	一二		〃	袋綴	写し。
三〇	（養生書）	一	四〇	二三・三×一八・〇	芭蕉紙	〃	写本。大破
三一	大医元順疱瘡療法方秋伝書	一	二二	二四・〇×一八・五	〃	〃	嘉慶二十年五月
三二	渡嘉敷親雲上疱瘡伝	一	四五	二三・〇×十七・三	〃	〃	道光十九年九月。大破
三三	和解陰隲訓	一	七	二六・八×二〇・〇	楮紙	〃	中国の「陰隲訓」の和解。道徳書
三四	（教訓書）	一	二三	二六・八×二〇・三	〃	〃	綴紐なし。
三五	初登山手習教訓書	一	三	二六・二×一九・五	〃	〃	写し。大破

五	久米具志川仲里両間切中田畠取立帳	一	不明	二〇・〇×一五・〇	楮紙	切紙	嘉慶十年仲秋 久米両間切について、公儀上納、地頭作得、里主所、おえか地を村毎の耕地面積と貢租額を記述。大破
六	年貢諸納帳　但御蔵高	一	三四	一三・三×二〇・〇	〃	〃	田方代の上納、荒地出来、浮明出来、牛馬出来、畠方代の上納、宮古島上納、八重山島上納などについて記す。残欠
七	高三斗六升六合六勺六歳仕明請地帳	一	五	二四・二×一九・二	藁紙	袋綴	同治十三年 高所より久米具志川間切西銘の夫地頭嘉手苅親雲上宛
八	同治十四年上国ニ付人々用物受取払帳	一	一七	一二・〇×三三・〇	芭蕉紙	横半折	物品の積入、受取、受払に関する与世永尓也のメモ。
九	地租名寄帳	一	四三	二六・五×九・五	洋紙	切紙	明治三六年頃カ 字名、番地、段別、地価、地租を田、畑、山林、原野の別に記入す。
十	御財制	一	六四	二六・七×一九・七	楮紙	袋綴	表題欠落。綴紐なし。御財制一（夫銭・請地夫分・諸細工并職人上納・宮古島上納八重山島上納等）、御財制二（出物・御礼式・御祈願・御願物等）、例外之御入目（御即位・冠船御渡米・官生上京等）に分れる。
十一	王代記	一	一七	十三・五×三九・〇	楮紙	横半折	尚穆王、冊封使渡来までの記事。大破
十二	中山要案網論　序	一	八	二六・六×二〇・〇	〃	袋綴	乾隆六〇年の写本。書簡の法、書札の礼法等を封建的道徳観で記述。大破
十三	（王府規模）	一	五五	二六・五×一九・五	〃	〃	享保十二年の頃ヵ。綴紐なし。表紙・巻末欠落、途中脱落。大破。各地の長さ・広さ、首里と各間切の距離、各島の石高、王府機構の職掌等を記す
十四	（覚・手形集）	一	不明	十三・二×一九・五	〃	切紙	写し。大破
十五	口上控	一	四三	二三・〇×一七・五	芭蕉紙	袋綴	写し。大破
十六	（覚控）	一	二二	二四・〇×一八・七	〃	〃	朱書による加除訂正あり
十七	（口上覚控）	一	三〇	二七・〇×二〇・〇	楮紙	〃	右同。大破

16	宅法二十四山分金法	高嶺浜川上江□親□	袋	一	二八	二四・七×一六・八		

P一〇まではサイズ（紙の）が違う。和紙使用。
P一一～一二は洋紙にペン字。後に書かれた模様。
宅地に関する本（風水の本）。墨書き。

写

山里家文書（再録）

番号	名称	員数	紙数	法量縦×横cm	料紙	形状	備考
一	和州氏家譜系図正統	一	三〇	二六・二×一九・八	楮紙	袋綴	久米具志川間切夫地頭仲村渠親雲上。系図・家譜とも七世まで。裏打ちあり
二	君南風野始相伝記	一	二三	二四・三×一九・三	藁紙	〃	乾隆八年 裏打ちあり

与世永家文書（再録）

番号	名称	員数	紙数	法量縦×横cm	料紙	形状	備考
一	地頭所諸地取立帳	一	一六	二四・〇×一八・五	芭蕉紙	袋綴	康熙三十年七月 久米具志川間切の惣地頭・脇地頭・夫地頭所の取立帳。按司作得・公儀上納・地頭作得・百姓仕得・里主所等を田方・畠方に分けて村ごとに記す。
二	久米具志川間切諸村田方取立帳	一	三五	二三・八×一八・二	〃	〃	久米具志川間切の上江洲・西銘・山里・仲村渠・仲地・大田・嘉手苅・兼城・具志川の各村について記述。
三	久米具志川間切嘉手苅村上江洲村高并上納差分帳	一	八	二四・〇×一八・四	芭蕉紙	袋綴	嘉手苅村と上江洲村の両村に大屋子地・掟地・百姓地等の石高・上納高について記述
四	久米具志川間切諸村畠方取納帳	一	一一	二四・〇×一八・五	〃	〃	上江洲・西目・山里・仲村渠・仲地・大田・嘉手苅・兼城・具志川の各村の畠方を記述

番号	書名	編著者	装丁	冊数	丁数	法量	著者・版元	時代・年代	刊・写	備考
1	聖諭廣訓全	毛姓盛都	袋	一		二六×一九		同治貳年癸亥	写	劣化が激しく丁数不明
2	御膳本草	上江洲親雲上	袋	一				道光二八年（一八四八）戊申	写	劣化が激しく丁数不明 表紙に破れ有り、とじ紐がとれている。
3	絣り織物設計法方書最表	女子工業徒弟学校研究生輿世盛ウシ	袋	一	三〇	二四・五×一六・七		明治四一年五月	写	
4	麻衣相法	全士課翁	袋	一	一四四	二三・五×一四・三			刊	達磨相師相訣秘伝
5	八掛目録史定集巻之十大尾			一	一二四	二二×一五・七	中野九右衛門・錢屋庄兵衛	元禄一五年	刊	易関係の書
6	墓法選擇記分金法	風水見高嶺親雲上	袋	一	四七	二四・五×一五	吉濱荘	□豊元年	刊	風水見高嶺親雲上の抜書。墓に関する風水書。
7	（羅盤図）			一	一	四九・〇×五二・〇			刊	土地に関する宿曜星の占いの羅盤図
8	童蒙頌知　巻壱冊		袋	一	二〇	二七・三×一九・五	内間	光緒七年	写	大清光緒七年辛己七月吉日の表記あり（表紙） 風水見高嶺親雲上の抜書。墓に関する風水書。
9	宅墓二十四山分金	吉濱□□	袋	一	二五	二三・六×一五・六			写	
10	玉匣記萬年暦	□陽許真君	袋	一	九七	二〇・二×一三・三			刊	「新増補□□萬寶玉匣記全書」 高王白衣観音經、はしり書きが各1点はさまっている球陽坂・染具例（鎌倉芳太郎記録より）（陳情書品評会順位）
11	紬関係書類		袋	一	一三〇	二四・五×一七・〇		大正一五年か	刊	
12	鹿児島国國産　大島紬見本		折	一	二	二一・七×八・六				五・五cm×七・五cmの見本ハギレが第一号～第一五号まで口印で（第一号はない）、値段の記入はない。
13	大□□□　結城紬見本	□紬組合	袋	一	一二	二四・八×一七・〇		大正一四年	写	紬のハギレが貼られており、その値段が記入されている。
14	斷易大全		袋	一	一六一	一四・六×八・七	上海廣益書局印行		刊	
15	服制		袋	一	三八	二七・〇×一九・八			写	風水見高嶺親雲上の抜書。墓に関する風水書。

242	久米島全図（他）	その他	一	袋	五五・〇×七七・〇	写	（裏）七月十日　御茶　壱箇 ①、久米島全図（鳥島、上江洲村、新阿嘉あり）②、上江洲村字チキドン原（大正八年九月、上江洲智紀）③、西銘村字手久川全図（大正八年）④、上江洲村字南開ノ一部　⑤、西銘邑字熊志田　⑥、大田村字加佐瀬原（第一五号）⑦、大田村字加佐瀬原（第一一号）⑧、山里村字玉那覇原全図（大正八年）⑨、西村字熊志田（明治三六年）⑩、西銘村字大屋之壱部一一、西銘村字熊志田原（明治三六年、第二号）一2、屋敷総坪数六百三拾八壱合（上江洲家の屋敷図と思われる）　邑
243	地籍図	その他	五	袋	一八・〇×一三・五	写	①、上江洲村字山口原（第三号）②、大田村字川畑原（トヤノ原）③、上江洲字富祖久原（カンザーマ？）（第一号）④大田村字清水原（第一号と一ノ原）⑤大田村字瀬口原（第一一号）
244	天文考		一	袋	二四	写	干芋の作様・貯方などについて在番から具志川間切に雍正一〇年に出された文書が収録されている。
245	萬聞書		一	折・袋	二三	写	
246	大清道光拾年庚寅六月吉日	西銘村高良之三男　仲村渠にや	一	袋	五	仲村渠にや	道光一〇年
247	文躰本意損益之不審書	上江洲智源（写）	一	袋	約二三	上江洲智源（写）	乾隆二八年（一七六三）
248	（天気見様書）	不明	一	折袋	四	十一・八×二五・三	刊
							寛延三年（一七五〇）平常孝より当山親雲上殿へ　文言心得之趣 一、躰用　一、筋之躰用　一、言葉之躰用　一、筋之連続・言葉之連続 一、言葉之働・筋働　一、花實　一、 前江事分ケ後ニ事分ケ 一、文躰応ジ言葉之事…… 断片だと思われる。他の整理した文書の一部であろう。

226	萬抜書 親雲上	久米島上江洲		袋	一	一				写	表紙一枚
227	表題なし			袋	一	三	二六×一八・三		久米島上江洲親雲上	写	久米島の在番を一人減　もともと一人であった在番を去二一年（乾隆か）年に二人としまたまた、一人減にしたい願。両間切さはくり中→両番→両惣地頭。案文かあるいは扣か。
228	（例長ヵ）			その他	一	四	一四・八×五三・五			写	後に〈卯七月十日　御物奉行　評定所〉あり　「御欠略ニ付諸間切諸嶋申渡候條々」「諸雑物入之條々」倹約令ヵ
229	（案文集ヵ）			袋	一	三一丁・白紙一丁	二六・七×二〇・三			写	錯簡・落丁アリ
230	表題なし			袋	一	三	二三・六×一六・四			写	御改倹者が久米島滞在中の対応の仕方。具志川間切四分・仲里間切六分御模り通り具志川より仲里へ。
231	表題なし			その他	一	一三	二六・〇×一九・〇			写	琉反物（久米島紬カ）の薩摩上納について
232	表題なし	上江洲親雲上		その他	一	三	二六・九×一九・三		上江洲親雲上	写	あし川原・はけたけ原・小名〇〇んまし原ちよやえ事田方三ヵ所は、子孫々正統嫡々へ相談すること。
233	久米具志川間切平良辻上江洲親雲上御頂ヶ	石垣□前上江洲親雲上		その他	一	八				写	針図帳（竿入帳）□土手石
234	中国年号帳			袋	一	四	一七×一二				南宋乾道～咸豊までの年号一覧帳
235	問答書				一	二	二四×一九・五				稽古用問答
236	表題なし			袋	一					写	上世文書用語（ルビ付）某
237	表題なし			袋	一					写	致了簡夫々生道耳取行各家跡致補佐度与之心遣可有之義～三丁
238	表題なし			袋	一		二三×一七			写	漢書、書翰案文等　□生文書　芭蕉紙
239	損益争論他2件			袋	一					写	他一、半山茶製法仕様聞書　二、勤書
240	（里程図）			その他	一		二八・二×三五・〇			写	那覇を中心とし、泊、首里、浦添ほか島尻、国頭、離島の里程を示す。
241	名刺〔木製〕			その他	二		一五・四×四・〇				〈表〉冨盛殿内　久米具志川間切　御取次衆　盛永筑登之　〈裏〉七月日　御茶壱箇　〈表〉西平殿内　久米具志川間切　御取次衆　盛永筑之

213	表題なし		袋	一					平後各書、記について書いてある。中に「念気五鏡之事」「能格之事」ある。裏表紙に「能格書／西銘邑石垣以下不明」
214	（忠臣身替）（八重瀬）		袋	一	二九	二四・〇×一七・〇		写	芭蕉紙、残欠　表紙らしいものに「仲西真加良／同治八年八月且／掟差／西銘村上江洲ノ内間仁屋」とある
215	表題なし		袋	一	一〇	二七・三×二〇・〇		写	同治八年、上江洲翁が茶を富川盛・宜湾朝保ら当時の文人詩人らに贈返礼として得た詩文等をまとめたもの。
216	（馬見様之事）	沖縄県学務課	袋	一	二三	二五・五×二一・〇		写	秘伝書。「元禄六年癸酉七月十日禰寝孫左衛門尉清雄」とある。
217	沖縄対話		袋	一	五一			活字	
218	表題なし		袋	一	七	二五・七×一九・〇		刊	法帖か。陰刻石摺版　「咸豊」と所有者らしい人の文字あり。
219	久米嶋三島論		袋	一	約二〇	二五・〇×一七・〇	筆者　山里某	写	表紙に「同治二年癸亥仲夏吉旦／久米嶋三島論／西銘村垣花ノ／山里」とある。
220	伊呂波	盛永某	袋	一	一三	二〇・〇×一二・二		写	イロハの古用。　表紙に「咸豊九年己未中春中旬／伊呂波／盛永誌」とある。
221	表題なし		袋	一	一〇	二五・四×一九・三		写	※人々朝夕可見和哥　※四六首の教訓和歌集
222	表題なし		袋	一	約三〇	二六・七×一九・〇		写	※琉歌集（節名を記す）
223	表題なし	雲洞僧正	その他	一		三〇・四×二三一・五	盛永にや	写	※「春始嘉儀先祝・・・」
224	孝女傳		袋	一	一八	二七・三×二〇・四		写	
225	安仁屋親雲上　聞書写 弐さつ之内	讃良権左衛門	袋	一	四五丁（白紙一丁）	二五・五×二〇・三	（安仁屋親雲上）	写	右私存知之趣太底書記申候私　事大和にても世間向不案ニ　御座候得表界向之儀しかと不存　候条大和人ハ拘置受元之衆も毎度　大和江被上候衆ハ物笑ニ而可有御座　与存候得共千里之馬之骨ヲ求　來候得ハ□国之馬集候由古傳ニ　記候様ニヶ様成ニ御本つき被成候而　重而大和切者之江委細御期被成　候ハ義言を可被聞召候以以　申十月六日（讃？）良権衛門錯簡アリ、朱書アリ

204	205	206	207	208	209	210	211	212
地祖改正談	地理初歩	小學讀本巻四	小學讀本巻二	（御悴者定）	（勤星帳）	（問付返答尋問書）	等　評定所筆者添石筑 登之親雲上　御物奉行 筆者田場里之子親雲上 具志川間切在番鉢嶺親 雲上　御物奉行安里親 方師三字経童子訓	伊勢兵部異見状
大城朝詮纂者・仲吉朝助校閲	師範学校編纂	師範学校編輯（田中誉義簾編輯、那河編通高校正）	師範学校編輯	不明	不明	不明	池田東籬主人閲	
その他	袋	袋	袋	袋	袋	袋	袋	
一	一	一	一	一	一	一	一	一
頁数二五〇	一三	三七	三四	四	五	二九（内二八枚墨付）	不能	五
二〇・〇×一四・四	二二・四×一四・七	二二・三×一四・八	二二・三×一四・八	二四・九×一八・六	二七・一×一九・一	二三・六×一八・二	二二・七×一六・〇	二六・五×二〇・〇
	山中市兵衛	山中市兵衛	山中市兵衛	不明	不明	不明	皇都双額堂	
明治二八年一〇月	明治七年八月改正	明治一二年五月		雍正二年正月十八日	欠	不明（子年）	天保一三年	寛永一六年六月二日
活字	刊	刊	刊	写	写	写	刊	写
※表紙欠　※「沖縄県諭達第一号」（明治二一年五月二二日）の別刷			※表紙欠	「中城御殿（五〇人）、思子部（二五人づつ）、按司部（一一人づつ）、三司官座敷（一一人づつ）、三司官座敷（二〇人づつ）、三司官座敷（一一人づつ）、親方部（一〇人づつ）、申口（七人づつ）、・・・、今帰仁あふりやい按司（六人）、伊平屋あむかなし（二人づつ）、二かや田あむ（二人づつ）、君南風（二人）」までの規あり、御物奉行より久米具志川間切両惣地頭衆宛	上江洲親方雲上智□の勤星帳か？乾隆七年から同二四年までの勤星あり	馬艦船頭金城による打擲の一件　久米具志川間切仲村渠掟の儀間にやにる百姓への無理な召遣い非法一件　上記仲村渠と同意し百姓召遣い非法件　同間切仲地村未進物太分に付、仲地掟への下知方・行跡に付糾明一	「三字経抄」「三字経抄」	

189	冨川親方あて（書簡）	久米具志川間切前二頭代 上江洲親雲上	その他 堅紙	一								冨川殿内　□□取次衆　あて	
190	書簡案文集（例文集）		袋	一	十四（後一丁は別物）	二三×十三・五						書簡例文には罫が入っている。仮とじ（コヨリ）	写
191	當用案二　巻七冊		袋	一	二五（表紙含）	二五・八×一九・四						書簡案文集（例文集）（薩摩への書簡）表紙裏に「用紙二拾五枚」とあり、一丁欠落か。朱書アリ	写
192	（書簡）			一	一	一六・五×三〇・三						断片（書簡）	写
193	手紙	上江洲親雲上	その他	一	一	二七・二×二八・〇	上江洲親雲上	不明				前地頭代の上江洲親雲上から宮古島の塩川與人（大浦與人）に対して、手拭と扇子をもらったことへのお礼状。	刊
194	手紙	上江洲親雲上	巻	一	一	一五・九×三八・二	上江洲親雲上					上江洲親雲上の妻が歯が抜け落ちる夢をみて、非常に心配になって、その吉凶について詳細な判断を西福寺あてに出した手紙。	刊
195	手紙	阿や	巻・折	一	一	一二・七×約二八・〇	阿や					いらぶ一本と素めん三斤を首里大屋子にたくしてあるので受け取るようとの内容。阿やから□宛の手紙	刊
196	手紙	大田里之子親雲上	巻	一	二	一七・一×四一・六／一七・一×七・七	大田里之子親雲上					在番職にあった大田里之子親雲上が在職のお礼とお茶一包を上江洲親雲に送った書状。一〇月二五日付	刊
197	（琉球集）		袋	一	二七	二三・〇×一六・〇						かぎやで風節から東細節まで。	写
198	（組踊集）		袋	一	二〇							執心鐘入りと忠臣身替。	写
199	小学句読	陳選	袋	二	一～三巻四一丁六巻四三丁	二五・五×一八・〇						有文閣	近世
200	画本実語教		袋	一	三六	二三・五×一五・五						浪華書林	文化九年
201	拾玉智恵海		袋	一	?	二三・〇×一五・五						菱屋勘兵衛	近世
202	拾玉続智恵海		袋	一	?	二二・五×一六・〇						菱屋勘兵衛	近世
203	表題なし		袋	一	一六	二七・四×二〇・一						上江洲智紀	明治二二年七月

189		
190	書簡例文には罫が入っている。仮とじ（コヨリ）	写
191	書簡案文集（例文集）（薩摩への書簡）表紙裏に「用紙二拾五枚」とあり、一丁欠落か。朱書アリ	写
192	断片（書簡）	写
193	前地頭代の上江洲親雲上から宮古島の塩川與人（大浦與人）に対して、手拭と扇子をもらったことへのお礼状。	刊
194	上江洲親雲上の妻が歯が抜け落ちる夢をみて、非常に心配になって、その吉凶について詳細な判断を西福寺あてに出した手紙。	刊
195	いらぶ一本と素めん三斤を首里大屋子にたくしてあるので受け取るようとの内容。阿やから□宛の手紙	刊
196	在番職にあった大田里之子親雲上が在職のお礼とお茶一包を上江洲親雲に送った書状。一〇月二五日付	刊
197	かぎやで風節から東細節まで。	写
198	執心鐘入りと忠臣身替。	写
199		活
200	「成化癸巳五月」（序）	刊
201	生活の知恵ハウツーもの。	刊
202	生活の知恵ハウツーもの。	刊
203	※口説・琉歌集　口説（登一、下一、花一、異見一、孝行一）　琉歌（かぎやで風、くてい節、仲順節、瓦屋節、伊野波節、本田名節、浮嶋節尺節、立雲節、干瀬節、子持ち節、さん山節）	写

188	187	186	185	184	183	182	181
（書礼法伝授）ナ	口上覚	覚	覚・口上覚・言上写	覚	覚（勤書）	覚	口上覚
不明	①在番地 ②山里親雲上、嘉手苅親雲上、地頭代上江洲親雲上　③目差、掟、大さばくり、頭中	高所・御物奉行	覚：具志川間切地頭代嘉手苅親雲上　口上覚：検者佐渡山里之子親雲上他	具志川間切地頭代　上江洲親雲上	上江洲親雲上	大掟上江洲にや　地頭代上江洲親雲上　首里大屋子仲村渠筑登之	江洲にや他　②鉢嶺親雲上
袋							
一	一	一	一	一	一	一	一
九	九	九	三	九	一〇	六	五
二三・八×二一・〇	二五×一九		二六・八×十九・五	二七×二〇・三	二七×二〇・五	二五×一七・五	二五×一〇・五
					上江洲親雲上		
乾隆二四年三月	戌閏四月～六月	亥九月	亥七月、子八月二六日	巳？九月九日	康熙四〇年代？	丑三月一日	乾隆七年、八年
写	写	写	写	写	写	写	写
上江洲親雲上宛	①口上覚→戌閏四月□当島に医師が居ない。病人が出た時には首里那覇でいかざるを得ない。異国人漂着の際、病人が出た時、さしさわりがある。他 ②口上覚→戌五月諸事御用向の件 ③口上覚→戌四月在番の任期と人数の件　④冠船渡来にさいしての対応	乾隆七、八年御手形写より写し取る耕作当の儀、加治細工、舛取役の年貢運漕船作事及び船乗方の儀、上納綿子の儀。	①覚→地頭代の持村定め　②口上覚→地頭代地所を上江洲村に定めるこへの願　③言上写　地頭代持村決定二件とも地頭代地所の定めを願のこと（目差・掟・頭・地頭代検者・在番）	功労（勲功）　①曽祖父西平親雲上　②祖父上江洲親雲上　③父上江洲雲上　具志川間切地頭代上江洲親雲上　渡久山里之子親雲上　注：康熙年間？	内容は「勤書」	間書→朱書　①御仕分布調方の儀他　②牛・馬・豚・羊の売払の件　一書（地頭）	の儀　②乾隆八年上納積船の儀　年「乾隆七年…」は朱書

173	人室三十三年回御焼香之時御焼香人□□人数取立帳		袋	一	八	三四・〇×一二・〇		年忌の時の焼香人ひかえ
174	覚（上江洲大文子引付表）	上江洲脇文子	巻・折	二	二	一三・三×三七・五	上江洲脇文子	不明（申六月十九日）	刊	①引付表に対して②請取があるが、虫損・破・汚等がひどくひらけない状態にある。
175	覚（公務日誌書）		巻・折	一	一	一二・〇×約四二・〇		不明	刊	①四月におこなわれる御用布調達と取納の日程 ②同月におこなわれた御用莚取納日程 ③五月におこなわれた「君まものみつ□［かい］カ」の日程 ④同月の稲穂祭の日程 ⑤同月の乗船、出帆の日程 以上がしたたられている。書いた日付は虫損のために判読困難であるが、残欠からすると□四月十四日とみられる。
176	覚（公務日誌書）		巻・袋	一	一	一二・五×約二四・〇			刊	①五月八日君まものみつかい事 ②同一二日稲穂祭 ③同一三日乗船④同一五出帆 四月二九日付 以上のことが記されている。※覚書きは一冊にまとめて、綴られていたと思われる。右端にコヨリの穴がみえる。
177	覚（公務日誌書）		巻・折・袋	一	一	一一・七×約二七・〇			刊	①冬植之芋かつら植付方差引之事 ②堤井修甫日頃之事 ③御用布勝負之事 ※右端にコヨリの穴アリ
178	覚（御在番代合願書その他）		その他	一	一	二三・八×三〇・四			刊	①在番代合願書 ②年貢米・綿子の調方差図 ③平日や折目の時の検約締方 ④焼酎同上の事
179	覚（惣下知人役職願い）	在番筆者：亀谷筑親雲上・田地方：花城□親雲上・在番：大田里子親雲上	その他	一	一	二六・四×三三・一	同上	不明（亥年五月）	刊	西銘村前上江洲親雲上を惣下知人にしたい旨の在番筆者、田地方、在番が連名で出した願文。
180	覚（惣下知役申付覚書）	西平親方	折	一	一	一六・七×五六・〇	西平親方	巳年	刊	前地頭代上江洲親雲上を惣下知役に申付た時の覚え書。
	①具志川間切大掟									口上覚二五件 ①乾隆七年材木定納

157	久米島具志川間切口上覚	前地頭代上江洲親雲上	袋	一	三八						子年			具志川間切より王府への嘆願口上覚年貢の件。
158	口上覚				七						酉年			年貢関係口上覚　芭蕉紙　下知役御渡海
159	口上覚		袋	一	八	二六×二〇								上江洲親雲上惣下知人伝令の件　蘭草の件
160	口上覚		袋	一	二	二六×二〇								蘇木追加の件
161	覚（御用布綿小莚増代）			一	一八	二六×二〇								
162	覚（仕置書）写			一	六									
163	口上覚、口上書翰等		袋	六		二三×一六							写	
164	口上覚集		袋	一		二七×九							写	
165	覚		その他	一	一	二八・七×二八・〇	盛永筑登之	光緒元年一一月二四日					写	亡父上江洲親雲上三年忌　嫡子当歳三十八大田掟盛永筑登之　光緒元乙亥年十一月二十四日
166	口上覚		袋	一	七	二五・四×一九・二							写	芭蕉紙。戌九月～亥正月～戌四月～丑七月まで。仲里親雲上、西平親雲仲里按司ほか。
167	覚		袋	一	一一								写	芭蕉紙　康熙拾年辛亥十月朔日～雍正六年戊申まで上江洲親雲上・山城親雲上ほか　冊数：三冊合冊のうち一冊
168	雍正四年丙午蔵元日記表写取申候	地頭代上江洲親雲上	袋	一	八	二三・二×一七・〇		咸豊二年壬子四月					写	芭蕉紙「口上覚」の写。康熙三拾四年、風水見のため久米村高嶺親方が渡海する記事がみえる。冊数：三冊合冊のうち一冊
169	口上覚		袋	一	六	二四・〇×一八・四							写	芭蕉紙
170	覚		袋	一	八									芭蕉紙　ヒモ切れ
171	伊江親雲上宛書状（控）	上江洲智紀	折	一	一	二六・二×二七・七							写	一一月九日付
172	口上覚	上江洲親雲上	袋	一	六	二六・五×一九・五	上江洲親雲上	不明（甲年）						墓敷証文
	午年七月廿四日上江洲親雲上二十五年回御同													

141	（疱瘡伝）	不明	袋	一	一二（数丁欠）	一三・五×一九・九	不明	不明	写		「本書泊村醫者金城筑親雲上宅ニ有ル」と記載あり。後半分欠落
142	大醫元順疱瘡傳書		袋	一	七	二六・九×二〇・〇			刊		「疱瘡伝書」の1部
143	疱瘡人禁止好物		巻	一	一	二六・三×不明			写		在番、検者、さばくり中あての口上覚
144	口上覚		袋	一	二〇	一九×二五		嘉慶　年	写		久米島九ヶ村の地方役人より報告
145	口上覚	仲里間切大掟新城筑登之ほか七名	袋	一	五	二六・二×二〇・〇	仲里間切大掟新城筑登之ほか七名	卯年八月	写		地方支配の再編に関する文書。仲里間切の内嘉手苅村を具志川間切に所せしめ、山城村は仲里間切に繰替ることを命じられた。その件について府への訴訟
146	表題なし		袋	一	五三	二三・四×一七・三			写		證文、覚、口上覚　蔵元控文書の写カ
147	口上覚		袋	一	一二	二三・一×一六・九	前上江洲親雲上	道光一四年六月	写		錯簡・落丁アリ
148	口上覚（麻氏田名親雲上真幸の跡目）		袋	一	六	二四・六×一七・七			写		□七月廿七日付　西平親雲上の書付け有り
149	（口上覚綴）			一	十一丁　裏表紙（白）一丁	二五・八×十八・四			写		麻氏田名親雲上真幸の跡目事件　後半部分欠落しているか、綴りは完結している。
150	口上覚		その他	一	二〇／二丁白紙	二四・八×十八			写		在番源河親雲上～在番慶佐次親雲上
151	案文（前欠）		その他	一	四	二六・四×二〇・〇			写		具志川間切人口減少により、各間切諸島より寄百姓願書　他
152	口上覚		その他	一	五	二三・五×一六・八			写		科試案文　宮古島船、唐漂着の時願
153	覚		その他	一	四	二四・三×一六・二		乾隆六〇年七月	写		前地頭代西銘村當歳上江洲親雲上への褒賞書
154	覚		その他	一	三七	二五・三×一八・五		戌一〇月六日～	写		日用分（銭）出分（銭）上納方は莚類上納の事について
155	会所壁書控	西銘村盛永	袋	一	一五			咸豊一〇年（一八六〇			大和御用の綿子について（摩文仁親雲上・他より久米両間切在番人）
156	定役願書被仰付候御書付（写）		袋	一	二七			辰年			会所（村学校）の校則　完全本

129	短冊	朝保（二） 朝宏（二） 盛（一） 朝範（一）									ちこそすれ　盛升」「治れる代の御風…て一通ふ君かな　朝保」「朝□ぬしの一春の霞とひきつれてき舟路な□らむ　朝宏」「上江洲君の福茶を祝いて福木ふくの木や石に囲てよゝに積ま□ゆさ銭も金　恒有」「くめやくめ久米に渡らは又いかこの□をさしもかはさん　朝宏」てて
130	田舎荘子		袋	三	中二四　下二一付	二三・六×一六・〇	出雲寺和泉	享保一二年	写	上巻を欠く	※七五調の教訓以呂波和歌後半は「返哥題」として、おなじく伊呂波ではじまる七五調和歌。
131	洒論以呂波哥		袋	一	五	二五・七×一六・八			写		※琉歌いろは歌　※前半は教訓いろは琉歌　後半は「毛樹徳喜舎場親方元御作」の教訓いろは琉歌
132	伊呂波歌		袋	一	二三	二六・八×一九・八		咸豊九年二月	写		※四二首の教訓和歌集　※四二首目の下句以下欠。（一丁ほど欠）参照KC－一
133	人々朝夕可見和哥	盛永筑登之	袋	一	七	二五・一×一七・二			写		内容目録は、「疱瘡之根源」にはじまり、「疱瘡発散内　之弁」まで、二〇項目に分けて治療法を解説している表紙裏に墨丸印あり。
134	疱瘡傳上巻	渡嘉敷親雲上	袋	一	三〇	二七×一九・五		亥年八月	写		「麻疹前保養」ほか六項目にわたり、診断・治療・食事について解説
135	麻疹傳	諸見里親雲上	袋	一		二二×一七	諸見里親雲上	道光一五年	写		疱瘡流行時における対策、食事療法について箇条書に記述
136	疱瘡養生秘書	上江洲仁屋	袋	一	一〇	一三・五×二〇	上江洲仁屋		写		芭蕉紙
137	（漢方薬処方書）		袋	一	六						
138	衛生便覧	その他	袋	一	九	二五×一八	篤肇緒	道光一三（一八三三）発巳四月吉日	写		衛生便覧　□房行門　飲食門　免労門の部に分かれる　女性の産育に関しての情報（禁忌等）が多い　裏紙に朱書きで　道光拾四年甲午九月吉日
139	養生書		袋	一	不明	一七・五×一三・五		不明	写		二七六例の病気の養生方が記されている）
140	仮題（好生要伝）	渡嘉敷直起	袋	一	不明	二四・〇×一九・五	渡嘉敷直起	不明	写		表題はないが、好生要伝である。妊娠から出産、出産後の養生方がくわしく記されている

	121	122	123	124	125	126	127	128
願文	願文	御事分ヶ文・願文	未二月十八日上江洲親雲上　妻死去ニ而諸入め御取払帳	同治拾弐年癸酉六月九日　前上江洲親雲上死去ニ付祭り物書留帳	大正四年旧九月拾九日先祖御祭ニ付送物取立帳	漢詩（古酒讃）	漢語大和故事　四、五巻	扣歌壱冊
		上江洲親雲上	山里親雲上			久志助忠、喜舎場朝賢、渡嘉敷通睦、護得久朝常		盛永
折	折	折	その他	袋	袋	その他掛軸	その他	袋
一	一	一	一	一	一	一	二	一
一	一	四	四	七	六	一	四巻約三〇、中五巻約二九	一三
二六・四×三七・七	二六・四×三七・七	二六・八×五七・〇	三五×一〇	二九・〇×一二・〇	三三・五×一二・五	一六四・〇×三三・〇	二二・五×一六	二三・八×十七・四
			山里親雲上				上村平衛門（洛陽二通堺町西入丁）他三名	
光緒十一年	光緒十一年	同治五年	不明（未年）	同治一二年	大正四年	明治二四年	元禄四辛未（一六九一）年　刊　後印？	咸豊九年
写原本	写原本	写原本	刊	刊	刊		刊	写
御観音御寶前　火神之御前　御霊前	御観音御寶前　火神之御前　御霊前	御事分ヶ文二二丁　願文二二丁	茶毘帳落丁あり	茶毘帳　前上江洲親雲上が死去した時に米・小麦・餅米などを供出したと、その分量と合計		一〇〇年物の古酒を贈られたことに対して、上江洲智綱に対して、四名が各々古酒讃の漢詩を寄せたもの。絹本、掛物。（二枚）	全五巻中一、二、三巻欠　漢語大和故事第四巻、第五巻の計二冊　両本ともに毛士元の筆あり　「漢語大和故事四巻」　解ハ申ニ似テ穴掘／□ノ穴カラ天ヲノゾク／金言耳ニ逆フ／御前追従等一二項目　「漢語大和故事五巻」　紙□／木綿并布子／水禍／西瓜／聖人に夢ナシ／夢ヲ占ウ等六五項目の内容　巻五の終に以下の文有　洛陽ニ条通堺町四〇入丁上平左衛門　元禄四辛未歳孟□吉辰　□江府□木橋青物丁　万屋清兵衛平野屋　長右衛門　摂□大坂心斉橋筋上人町　□金屋庄兵衛坂	都都逸形式のうたをあつめたもの。表紙に「咸豊九年己未仲春吉旦／歌壱冊／盛永記」とある。 「此の国をわかれてゆかは嬉しきか思ふ心は淋しからん　朝範」「遥な米のこのめをにてくえば□もわかゆくこゝ

106	祭文		その他	一	一	二六・八×不明		同治八年	写	原本	亡叔母當歳弐拾八寅御生性　牛
107	亡父周年忌・・・		その他	一	一	一三・三×三九・二	盛永筑登之	光緒元年乙亥十一月	写	原本	亡父周年忌同治拾三年甲戌九月十九日二弔上置申候
108	祭文扣格護之事		その他	五				光緒一一年九月一一日	写	原本	（表紙・朱書）亡父十三年忌御弔之祭文之地案
109	祭文		その他	五				光緒一一年			亡父拾三年忌御吊之祭　嘉手苅親雲上　ヒモ付　状態悪くあけられず
110	御願文		その他	三			上江洌智紀・上江洌智元	大正丙辰・昭和五年	写	原本	御願文一、二一昭和五年庚午年閏五月吉日　願人　上江洌智元　御願文三正丙辰　月廿九日　願人　上江洌智紀　黄色紙　※仏壇の引き出しからのもの
111	焼香日記		その他	一	八	二七・一×二〇・〇		道光三年	写	原本	道光三年癸未二月一八日、上江洌親雲上（二六世）死去に付の焼香日記祭物が揚げられる。
112	御事分文		その他	一	七	二七・五×一九・五		同治一〇年九月	写	原本	（付属）一、御事分ヵ文　二、「維」光緒一三年三月一二日　嘉手苅夫地頭上江洌智綱
113	願文	願人夫地頭上江洌智綱	折	一	一	二七・五×三六・五		光緒十一年	写	原本	光緒一一年乙酉四月一二日
114	願文	夫地頭　嘉手苅親雲上	折	一	一	二七・五×三八・〇		光緒十三年	写	原本	光緒一三年丁亥二月三日
115	御願文	願人大田掟盛永筑登之	折	一	一	二六・二×三五・〇		光緒三年	写	原本	二つに破れる　濃緑色紙
116	奉祈		折	一	一	二七・二×三五・八		咸豊二年	写	原本	咸豊二年壬子七月一五日
117	祈願文	夫地頭　嘉手苅親雲上	折	一	一	二七・〇×不明			写	原本	途中で2つに破れる。光緒一三年丁亥五月一〇日
118	御案内文	前地頭代上江洌親雲上	折	一	一	二七・四×二一・五			写	原本	芭蕉紙　庚午年三月十六日　清明祭のもの
119	御願文（一括）		折	二六					写	原本	光緒一〇年～明治三八年
120	願文	願人夫地頭上江洌親雲上	折	二	二	二七・四×三八・〇		光緒十一年	写	原本	光緒一一年乙酉四月一二日御霊前と御観音御寶前

94	（墓修甫細工夫取立帳）（仮題）		袋	一	六			咸豊九年		刊		り開ける状態にない。咸豊九年六月二二日～一一月五日まで上江洲家の墓である、はな崎、小湊原、けんさく原の三ヶ所の墓を修復した時の細工夫取立帳。
95	祈願文（病気快復）	上江洲親雲上	その他	一	一	二四・六×一七・〇		同治拾年（明治四年、一八七一）	上江洲親雲上	刊		火神御前と観音御宝前に対して男子上江洲盛永の病気快気を祈願した時のもの。時よたに盛永の当年運気判断をさせたことが記されている。
96	（「百（番）くじ」の断片）二			一	二	①二五・五×二七 ②二五・五×三五						
97	家内安全ふだ		その他一枚物	一		三二・三×六・五						宗教関係ふだ　□：キリーク梵字のあり（阿観音の種子）入佛千手観世音尊秘／諸難錯除／息災延命祈所　法華宗より写す※同系の航海安全のふだ有
98	海上安全ふだ		その他一枚物	一		三二・三×六・五						（宗教関係）分類：仏教／信仰儀礼密教　□の梵字　奉終十一面観世音□海上安全順風相送祈所　同系の安内安全のふだ有
99	延命□経		その他一枚物	一		一六・五×三一・八						宗教関係　分類：仏教？　延命□經観世音　南無佛　與佛有因　與佛縁佛法僧縁　常楽我浄　朝念観世音念念徒心□　念念桴離心　たて（以上全文）
100	御祭文		その他	二	二	三八・五×二六・六	上江洲目差盛永筑登之	同治八年九月一三日		写原本		七年忌、一三年忌の祭文（恩戸・蒲戸）
101	御祭文		その他	一	一	二八・五×二六	盛永筑登之	光緒元年		写原本		光緒元年乙亥年十一月二十四日　亡父上江洲親雲上の三年忌の祭文　嫡当歳三十八大田掟　盛永筑登之
102	御案内文		その他	一	一	二七・〇×二九・二	嘉手苅親雲上	光緒七年一一月六日		写原本		父上江洲親雲上の七年忌　嫡子当歳四拾四夫地頭　嘉手苅親雲上
103	祭文		その他	一	一	二六・七×二四・五	蒲戸	同治八年		写原本		亡叔母牛の七年忌の祭文。同治八巳年九月十□日
104	御祭文		その他	一	一	二五・三×二九・〇	上江洲親雲上	同治八年九月一三日		写原本		亡父上江洲親雲上三三年忌　茶しぶ紙　男子當歳七拾五前地頭代　上江洲親雲上
105	祭文		その他	一	一	二八・五×二二・二	上江洲仁屋	光緒元年一一月二四日		写原本		亡叔母真牛一三年忌　当蔵一六　上江洲仁屋

79	個人運性判断書		その他	二	二	二六・三×三八・〇			刊	①女子かまの運性判断　②女子牛・女子かまと・男子樽　運性判断
80	吉凶判断書		その他	一	一	二六・五×三八・〇			刊	美里川墓所の辺で人の鳴声が聞えたことに対する家人の吉凶判断
81	吉凶判断書		その他	一	一	二六・四×三八・五			刊	昨日晩の出火の吉凶と家族員の一年間の運性判断
82	吉凶判断書		その他	一	一	二六・二×三七・七			刊	①男子松の病気の吉凶判断　②山里吉田屋敷の吉凶判断
83	吉凶運気判断書		その他	一	一	二六・二×三六・七			刊	①妖怪火に付吉凶判断　②家人の運気判断
84	吉凶判断書		その他	一	一	二六・六×三八・〇			刊	北谷間切野国村六五番地の大久廻山を均すことについての吉凶判断。
85	吉凶判断書		その他	一	一	二六・一×三八・一			刊	屋敷内で不審な物音がしたことについての吉凶判断。
86	吉凶判断書		その他	一	一	二六・四×三八・一			刊	屋敷内の不審な物音についての吉凶判断。
87	吉凶判断書		その他	一	一	二六・八×三八・五		己酉年	刊	夫地頭・嘉手苅親雲上宅の隣所で火玉が出たと人々がいったので、家中運気吉凶判断させた。後半は判断結果が記載されている。
88	吉凶判断書		その他	三	三	二四・四×三二・四		己未年八月二三日	刊	本家吉凶判断。①観音御鑑②梅花心易理による判断。後半に判断結果の載あり。
89	吉凶判断書		その他	二	二	二四・二×三一・四		（一九一六年）大正丙辰正月二四日		家中の一年間の運性吉凶判断。後半に判断結果の記載あり。
90	吉凶判断書		その他	二	二	二三・九×三二・一		大正九年三月二四日	刊	霊火の出現による家中の吉凶を梅花心易理による判断。後半に判断結果記載あり。
91	吉凶判断書		その他	一	一	二七・〇×三七・九		酉年卯月巳卯日	刊	家中の吉凶判断　末尾に「酉三月一一日大田ニテ御存知」とある。
92	吉凶判断書		その他		一	二六・一×三七・五		酉年卯月巳卯日	刊	真中から線がひかれ、二つの事についての判断が記されている。①自分一年間の災変に関する吉凶判断　②嗣子を誰れにすべきかの占判断
93	吉凶判断書					一五・九×不明				一年間の運性や那覇行きなどについての吉凶判断が一巻にしてつづられているが、虫喰がひどい上に、くっついてお

67	仮題（吉凶占い）	嘉手苅親雲上	その他	二	二	二八・一×三九・〇	嘉手苅親雲上	不明	刊
68	仮題（吉凶占い）	嘉手苅親雲上	折	一	一	二六・八×三八・五	嘉手苅親雲上	不明	刊
69	仮題（吉凶占い）	不明	折	一	一	二六・二×三九・〇	不明	不明	刊
70	仮題（吉凶占い）	不明	折	一	一	二六・五×三八・〇	不明	不明	刊
71	仮題（美里川墓仕立占書）群その他	仲里里之子親雲上（四点）・高志武筑親雲上（一点）・長浜親雲上？（一点）	その他	一	一〇				刊
72	卦易判断書群		その他	四	四	約二六・五×約三二・〇			刊
73	卦易判断書群		その他	五	五	約二六・〇×約三二・〇			刊
74	吉凶占書	吉濱にや、その他	巻・その他	六	六	一八・〇×不明	吉濱にや	不明	刊
75	運性判断書	前嘉手苅親雲上	その他	六	一	二六・五×三九・〇			
76	家人吉凶判断書		その他	一	一	二六・五×三七・五			
77	吉凶判断書		その他	四	四	二六・四×三七・四			
78	初運性判断書	前嘉手苅親雲上　その他三	その他	四	四	二六・三×三八・四	前嘉手苅親雲上		

67	①財産を数度にわたり損をしたことの理由と今後の吉凶占い。②家中人のその年の運気吉凶占い。（初ウンチ）
68	母親のその年の運気吉凶占い
69	病気の母親の運気吉凶判断
70	己月申辰月に前嘉手苅親雲上の病気の母親の運気吉凶判断
71	美里川墓仕立占書五点高志武筑親雲上（一点）・仲里里之子親雲上（四点）である。同治一一年の『家記』の「美里川墓之事」に墓普請一件ニ付、高志武筑親雲上并仲里里之子親雲上占書別紙五通格護有之候。とあるのがそれである。また、同『家記』の「二　墓所之事」に附。本行墓三所修甫一件ニ付長浜親雲上占書別紙壱通格護有之候。が「是者はな崎小けんさく三ヶ所墓修甫一件之占書也」（朱書）にあたる。
72	①男子出生判断　②養子の家督相続判断　③墓地仕立場所の判断　④妻
73	①墓仕立と移骨の吉凶判断　②墓仕立と移墓と近隣の不幸続出について
74	病気が好転しないために、その原因についての吉凶判断。
75	子孫の運気判断
76	家内ニ不審成者有之候付家宅人ノ総運占吉凶
77	門外での犬がたち鳴したことに対する吉凶判断犬と小鳥の鳴声　馬の所への侵入
78	一年間の家族員の運性判断

53	増訂小學體註竣雪解		その他	一		二五×一五・三		清刊	刊	版心「聚錦堂」 小学集註の註釈書 表紙・封面欠				
54	御教条（残欠）		袋	一		二七×二〇		雍正一〇年	写					
55	選擇記		その他	一	六二（中白紙七）	二六×一八	上江洲智循		写	分類→易学、暦書、占ト、日取、民間知識。表紙に書紙（山里村島文子村□仁屋の書）を使用。				
56	選擇記		その他	一	五三 以下欠	二二・五×一四			写	分類→易学、暦書、占ト、日取、風水、民間知識 玉匣記系の写本か？ 表紙欠、裏表紙欠 同系列本 他2冊有（AK－八）				
57	（易書）		その他	一	三二（表紙裏紙複数文書仕立）	二七・五×二〇	上江洲智〇（西銘〇不明）	光緒一二（一八八六）年六月仕立	写	分類→易学、暦書、占ト、日取、民間知識、風水 表紙は複数文書をあわせ（仕立）で使用。 中表紙 光緒十年六月仕立 西銘村□□□□江洲智□カード□K－九の易書と同系				
58	玉匣記通書廣集二巻	清・王相	その他	一		二二・八×一三・三		康熙二三年（一六八四）王相自序刊	刊	封面「玉匣記通書／廣集 寶仁堂蔵板」 封面上欄「選擇必需」同書刊本は、石垣市立八重山博物館で一本、琉大図書館官良殿内文庫で一本、奄美で一本、計三本確認される。				
59	大清咸豊四年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×一四		清咸豊四年（一八五四）	刊	咸豊四年（一八五四）の暦				
60	大清咸豊四年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×一四・二		清咸豊五年（一八五五）	刊	咸豊五年（一八五五）の暦				
61	大清同治四年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×一四・三		清同治四年（一八六五）	刊	同治四年（一八六五）の暦				
62	大清同治七年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×十四・二		清同治七年（一八六八）	刊	同治七年（一八六八）の暦				
63	大清同治八年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×十四・二		清同治八年（一八六九）	刊	同治八年（一八六九）の暦				
64	大清同治九年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×十四・二		清同治九年（一八七〇）	刊	同治九年（一八七〇）の暦				
65	大清同治十一年選日通書	首里王府	その他	一		二五・五×十四・二		清同治十一年（一八七二）	刊	同治十一年（一八七二）の暦				
66	仮題（家中吉凶占い）	不明	その他	一	一	二七・八×三九・〇	不明	不明	刊	隣所に火（ヒーダマのことか？）が出たと人々がいったので、非常に驚て、家中の運気・吉凶を占ったもの。				

43	（久米志川間切田畠取納帳并諸地頭作得帳）	取納奉行村山里之子親雲上か？	袋	一	四五	一六・七×一六・五		写	乾隆三〇年八月
44	（諸地上納配分帳）	不明		一	二四	一六・七×一九・八	不明	写	
45	先年銘々江借渡米元取立帳	上江洲智記	袋	一	五二（墨付四六）	一三・三×三八・一	上江洲智記	写	明治三〇年七月一七日
46	先年銘々江借渡米利	上江洲智記	袋	一	三八（墨付三五）	一三・二×三八	上江洲智記	写	明治三〇年七月一七日
47	唐茶製法伝授書	西平親方	袋	一	一三	一四・五×二七		写	雍正一〇年頃
48	諸毛作之仕様留		袋	一		二六×二〇			
49	上納米本立帳			一	一〇	二四×一八			嘉慶一九年
50	農業全書（天明再版）	山里仁屋（写者）	その他	八		二・五×一六	瑞錦堂		
51	農業書		袋	一	一三	一七・五×一三・〇	金城筑親雲上（著者？）	写	不明
52	（四書）大學章句一句 宗朱熹、後藤世鈞（芝山）點		その他	一〇		二六・五×一八・一			

全体は、三つの部分から構成される。第一は、表題欠ながら、「御高上納」もの。第二は、「久米具志川間切（上江洲村、西銘村、山里村、仲村渠村、嘉手苅村、大田村、具志川村、兼城村）畠方取納帳」とのタイトルあり、第三は、「久米具志川間切諸地頭作得帳」とあり（康熙三〇年七月）。　第三は、「かや」高での表示あり

按司掛上納、惣御地頭所上納、仲地里主所上納、諸おゑか地上納、百姓持ち上納、惣御地頭御遣未米等の項に分けて記載されている。

上江洲村・大田村等の者へ借付けた米の取立て帳である。　西の平川の当間山戸の場合、未申の元米が五斗起でその利米（申酉乙年分の利未納）が弐斗五升起。

上江洲村・大田村・山里村の者からの取立帳。ただし、人名を記しながら米の数量の未記入部分あり　トジヒモが解け、バラけている。

唐茶の栽培法についての農業技術書。松羅茶・武茶夷などの銘柄が見える。

全何巻かは不明（七冊有）　以下の巻有（三、七、十巻欠）　巻一（農事総論）ただし十一巻以下は不明　巻二（五穀之類）　巻三（菜之　類）※三巻は表紙あり　巻四　巻五（山野菜之類ナハ種）　巻六（三草之類）　巻九　巻十一　□画一九×一三・五

封面「後藤先生點／學習館図書全十冊／佐土原藩蔵版」　和刻本

33	（仕明）	不明	一	三三	二三・一×一三・五	不明	康熙一九年～	写
34	（仕明）	著・嘉手苅	袋 一	五（内墨付四）		嘉手苅親雲上	（年欠）一一月	写
35	田方原々まし数取立帳 □	親雲上				上		
36	戌年上江洲親雲上仕御手形表田方取立帳	不明（上江親雲上力？）	袋 一	三	二六・六×一九・六	不明	道光拾八年戌	写
37	（仕明田願出張）	不明	袋 一	三	二七・一×一九・一	上江洲親雲上か？	年欠（卯十月廿七日）とあり	写
38	仕明請地帳	高所（玉城方等四人）より濱川親雲上宛	袋 一	三	二三・七×二〇・二	高所	光緒元年十月	写原本
39	仕明請地帳	所（玉城方等四人）より濱川	袋 一	三	二五×二〇・一	高所	光緒元年	写原本
40	仕明請地帳	高所（崎濱方等四人）より濱川にや宛	袋 一	三	二三・四×一九・四	高所	同治十三年十一月	写原本
41	仕明地銘々江叶懸取帳 諸上納之品々払記	上江洲智記	袋 一	一七（墨付七丁）	一三・三×三七・九	上江洲智記	明治二六年八月	写
42	御用布綿子莚代上一件 扣	不明	袋 一	二〇（墨付一七）	二六・四×二〇・四	不明	道光弐拾八年十月	写

33	仕明田畠の件、琉球総高（一二万石余）の件、石盛の件、途中より渡唐の件等が挿入されている。年代は康熙一九年、同二八年等の表記あり。
34	記載形式は次のごとし、「御手形表はけたけ原小名かんじまし原仕明人」 上江洲親雲上／仕明手形壱さつ／但　御手形表あし川原小名はけたけ原 仕明人脇文字／　仕明手形壱さつ／ 但七まし　外荒地　・・・・・・。
35	田の面積と石盛りを記す、西銘村と上江洲村の分あり。
36	絵図二点を含む、一つは「西銘村山口原沢」、他は「同村譜西　た原沢」とあり。
37	田方の仕明地高壱升六合六勺七才を西銘村前の濱川親雲上に許可したも本の「法司之印」あり　せりきやく原竿迦より成下田拾弐歩四升の内、仕明人は大田目差平田にや。
38	西銘村のふそくの前原竿迦より成、下田弐歩、六合六勺七才、仕明人大田目差平田にやの土地を仕明地として西銘村の濱川にやに許可したもの「法司之印」あり。
39	せりきやく原竿迦より成□（下ヵ）田拾弐歩四升の内、仕明人大田めさし平田にや、田方弐升三合三勺三才を仕明地として西銘村高良の濱川にやに許可したもの「法司之印」あり。
40	中上江洲の仲村渠智／かんきやまら叶米壱石弐斗五升の内、米五斗起／右の納／未年・午年・申年の分を記し、外金弐円と豚壱疋による支払い等あり他に上江洲智久等あり
41	久米島からの年貢未進等に付、御用綿子莚代上げを要請

24	御日雨向に御廻り記之	首里大屋子之・濱川筑登之・地頭代山里親雲上	袋	一	九	二六・五×二〇・〇	や・濱川筑登之・山里親雲上	乾隆四年	
25	久米具志川間切西銘村名寄帳		袋	一	一四二	二三・五×二〇・二		天保一二年一二月作成	
26	御支配御竿入帳票帛成田方取立帳	久米具志川間切在番	袋	一	四	二五・〇×一八・四		申　八月	
27	耕農検地之次第		袋	一	一八	二五・五×一九・一			
28	久米具志川間切所遺賦帳	久米具志川間切在番与世山親方	袋	一	一一	二四・七×一九・二		乾隆三四年巳丑七月	
29	雑記上	白朝堯		一	一四	二四×一六・八	白朝堯	子　四月	
30	仕明手形扣	著・盛永筑登之	袋	二	（上）八丁（墨七丁）、（下）十丁（墨付十丁）	（上）二三・二×一六・六、（下）二七×二〇	盛永筑登之	（上）同治一二年、（下）（　）年欠	写
31	（（仮）仕明手形案文）	不明	袋	一	九（墨付七丁）	二三・七×一六・六	不明		写
32	（仕明田手形案文）	不明	袋	一	五	二三・八×一六・六		不明	写

有之由申出候、此旨□様御□成奉頼候以上　乾隆四巳未三月　久米具志川御大掟上江洲にや　首里大屋子　濱川筑登之　地頭代　山里親雲上

この種の名寄帳としては現存する唯一のもの。各葉に割印あり。綴じ紐なくバラの状態。

仲村渠・具志川・仲地・山里・上江洲・西銘・大田・兼城・嘉手苅など各ムラの竿入帳。芭蕉紙。

耕農検地之次第・塩浜検地之次第・高居之次第・畠方試竿之次第・高作之法に分れている。

表紙に虫損あり。奥書に「右所遺賦帳之儀御原紙表写取させ申候以上」とあり、日付は寅五月とあり、大蔵濱川にや、首里大屋子上江洲筑登之地頭代山里親雲上、ならびに在番松田親雲上の記名がある。

①四民（農・工・商・士）について　他心得書か

判型の異なる冊子（二冊）が合冊にされている。（上）は、西銘村、上江洲村、仲地村、太田村、兼城村における土地（田のみか）の原名と等級（上・中・下等）、石盛、仕明人を記す。（下）は、中トビラに「仕明田御手形扣」とあり、ほぼ、（上）と同内容。「手形」の有無を付札で貼付す。朱筆による追筆多し。

いくつかの帳簿から西銘村、上江洲村等の仕明に関する部分を写して一冊としたもの、年代は、「嘉慶八年・・・御手形壱冊表」「乾隆八年・・・御手形壱冊」とあり。

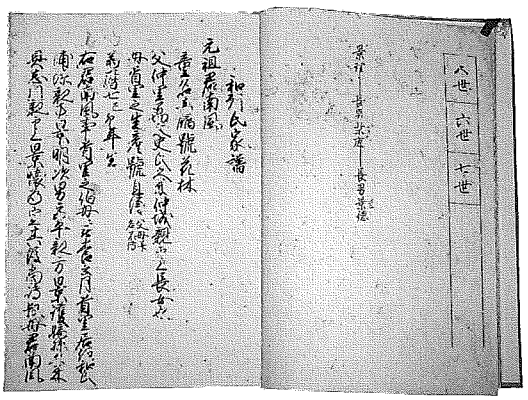
TK－二文書の下書きか？内容は上に同じ。

13	王代記并唐年号	その他	一	一二	一七・五×一三		上江洲親雲上（西銘村）	咸豊六年（一八五六）丙辰四月写	写	王代記　王の名、王位についた年など基本情報を抜き書き唐年号は年号列挙し年間数記述。 虫損多し。
14	四本堂家礼	袋	一							版心に「指南廣義」「雪堂彙輯」と全丁に刻されている　毎年葉八行行二〇じ小字双行　有界　四周単辺　匡郭一八・八×一一・四cm断句あり　「指南廣義」写本？は、県内では、県立図書館東恩納文庫で確認されているが、刊本は、初出と思われる。尚、県外では、国立公文書館、内閣文庫のなかに同版と思われる刊本がある。
15	指南廣義一巻	琉球　程順則　その他	一		二四・五×一五・一			康熙四七年（一七〇八）序刊（注）時代、年代の根拠は、序文による。	刊	
16	御物奉行令達（写）	袋	一					王府時代		御物奉行より諸間切両惣地頭へ下した令達集の写　芭蕉紙
17	模合約定書	袋	一	五				光緒一二年		芭蕉紙
18	公事帳（写）	袋	一							芭蕉紙
19	（御検者下知書）	袋	一	一二				乾隆一四年		検者与世山親方より在番あての下知。島役人の勤務年数変更の件口上言上（国王の裁可）あり。
20	（惣下知人辞令書）	折	一	一	三八×二六・五			亥		前地頭代上江洲親雲上を間地惣下知人に伝令する書状。
21	服制	その他	一	五一	二七×二〇		上江洲親雲上（西銘村）	雍正六年（一七二八）戊甲	写	服制（本家方之服制）冠婚葬祭を中心にきまり事・唐船対応の部分も多い。雍正六年戊申一二月二一日の日付評定所よりの通達。
22	山林真秘	その他	一	二三	一九・三×一三・五				写	表紙墨書「山林眞秘」　朱による句点あり　現存する「山林真秘」は琉大図書館宮良殿内文庫蔵本一本（写本のみ）、上江洲家文書の同書が確認されたことにより、二本となった。内容について検討する必要あり。
23	康熙五拾弐癸己年日表写取申候	地頭代上江洲親雲上　（蔡温）			二三・五×一七・四			咸豊二年壬子四月	写	芭蕉紙　「雍正四年丙午日記表」の朱書が七丁目にある　冊数：三冊合冊の内一冊 末尾：右書当島ニ唱来候寒さ数委細書付を以首尾可申上旨被仰付、奉得其意老人共相尋候処、節々気卦大方如斯

久米具志川御大掟　上江洲にや・

上江洲に

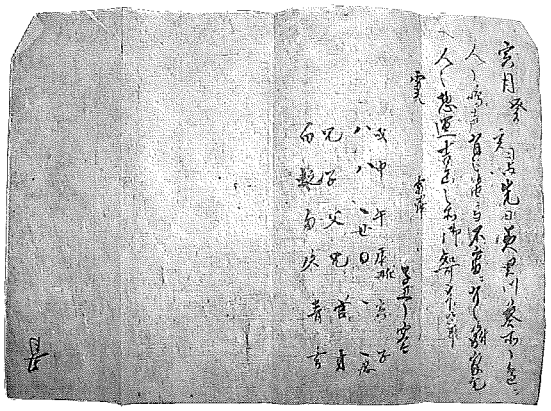
番号	書名	編著者	装丁	冊数	丁数	法量	著者・版元	時代・年代	刊・写	備考
1	美済氏家譜		袋	一	一二五	二九・一×二二・九		万暦八年～乾隆二四年	写・原本	系祖西平親雲上智眞から十世智英までを記す。家譜中には東城山の茶園の針図が含まれている。
2	家記（父母記）	前地頭代石垣之上江洲親雲上	袋	一	六四	二六・三×二〇・〇		同治一一年九月申吉旦		屋敷之事、墓所之事、仕明田之事など八つの項目で、家記家中の事を書き記したもの。
3	元祖以来善行記		袋	一	二七	二六・九×二〇・〇		道光元年極月の書写	写原本	※乾隆一九年二月吉日　上江洲親雲上、山里親雲上、濱川親雲上による
4	美済氏家譜系図支流	久米島具志川間切□□村　濱川親雲上	袋	一	二一	二六・五×二〇・〇		順治一七年～乾隆九年	写原本	①「沖縄の家譜」に未収録　②六世智長（上江洲親雲上）～九世智徹の記録　③朱入り
5	美済氏家譜系（図）	上江洲親雲上	列	一	二三	二六・五×二〇・〇		順治一七年～乾隆一三年	写原本	次の三冊合本　①美済氏家譜（六世智長）　②美済氏家譜系図支流七世智格）　③美済氏家譜（系）図支流（五世）
6	美済氏世系図（家譜）	濱川親雲上	袋	一	一六			～乾隆一七年	写原本	①五世智章～八世智鎗
7	父母記	十世前地頭上江洲親雲上	袋	一	八（墨付のみ）	二五×一七		同治九年	写原本	①八世智常より十三世智紹まで家譜抜書き
8	美済氏家譜（写）	西平親雲上	その他	一	二九				写	①元祖～五世智源（上江洲親雲上）
9	家記仕次案文	十代上江洲雲上		一	一	四〇×二五		同治三年	写原本	恩義ある家へ報恩の礼を欠かさないように子孫へ書き残した家記の仕次。
10	世済其美」由緒書	上江洲親雲上	袋	一	八			乾隆一四年	写原本	掛床「世済其美」拝領のいきさつと談義等の説明書。
11	盛永にや家譜仕次控位牌（写）		袋　その他	一　二	四	二二×一五・五　二七・五×一九・五、〇・四×二八・〇		明治二〇年	写	芭蕉紙　盛永にやの履歴書　位牌：元祖～四世まで　順治六年～康熙三四年
12	琉球国中山御世鑑抜		袋	一	二五	一九・三×一三・三		乾隆五〇？年一二月	写	内に「君南風之始相伝記」とある。表紙に「乾隆五拾　申十二月／君南風由来記並御双紙抜書／琉球中山御世鑑抜書」とある。



和州氏家譜系図正統
（山里家　№１）



伊呂波歌（上江洲家　No.131）



吉凶判断書（上江洲家　No.79）



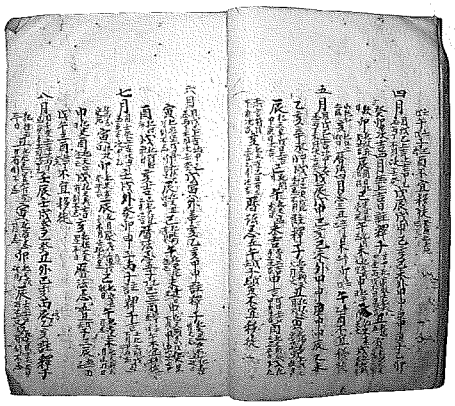
墓法選擇記分金法
（吉濱家　No.6）



御膳本草（吉濱家　No.2）



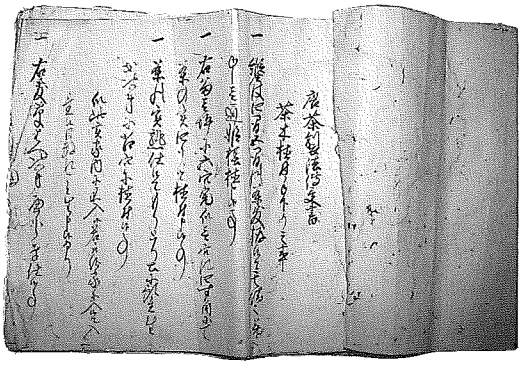
玉匣記（上江洲家　No.57）



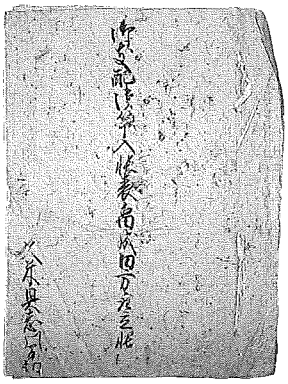
選擇記（上江洲家　No.54）



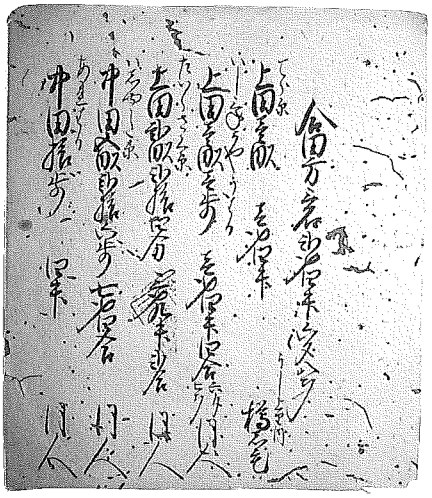
御祭文（上江洲家　No.99）



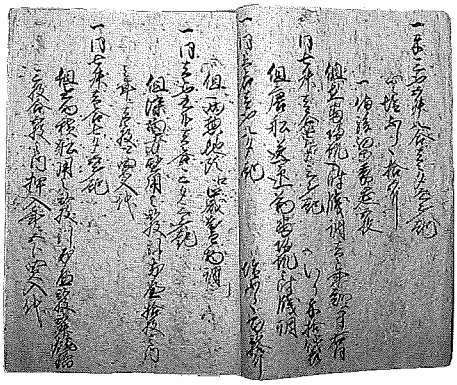
唐茶製法伝授書
（上江洲家　No.46）



御支配御竿入帳表畠成田
方取立帳（上江洲家　No.26）



久米具志川間切西銘
村名寄帳（上江洲家　No.25）



久米具志川間切所遺賦帳
（上江洲家　No.28）



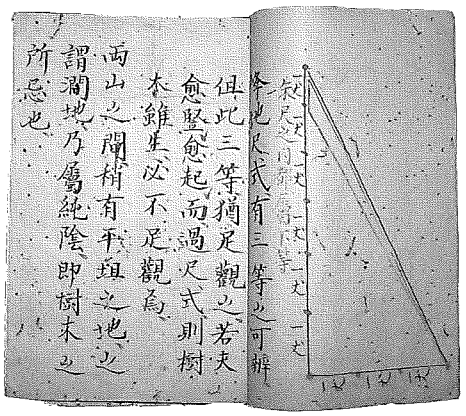
耕農検地之次第
（上江洲家　No.27）



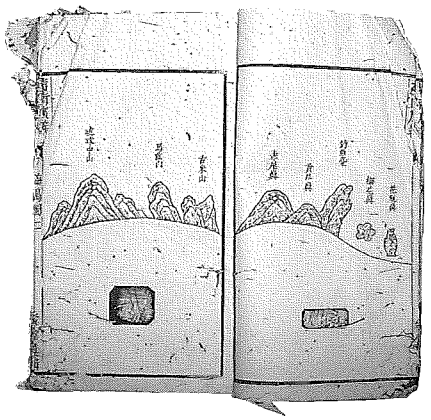
美済氏家譜系図支流
（上江洲家　No.４）



元祖以来善行記
（上江洲家　No.３）



山林真秘（上江洲家　No.22）



指南広義（上江洲家　No.15）

久米島文書資料目録

凡例

一　文書目録は所有者別に示した。各文書について、名称・編著者・装丁・冊数・丁数・法量・著者版元・時代年代・刊写で示し、備考には内容や特記事項を記した。

一　山里家文書と与世永家文書については、沖縄県教育委員会『八重山諸島を中心とした古文書調査報告書』（昭和五五年度）から再録した。

一　文書名称は原則として表題を採用することにしたが、表紙が欠落したり、表題がないものについては、内容を勘酌して、適宜補足した上で、（　）付けにした。

一　劣化が著しく、取扱いや測定不能の資料については「法量」や「丁数」など空欄としたものがある。

一　丁数は前表紙・後表紙ともに含めた数を示した。

一　法量の単位はセンチメートルである。

一　判読不能の文字は□で示した。

一　表題及び備考の引用文中の古体・略体文字はなるべく正字に、変体仮名は現行仮名に改めた。

一　久米島の前近代史料を中心として、過去の調査で未確認の史料をなるべく掲載するように努めたが、重要と思われるものについては近代の文書も掲載した。

一　上江洲家文書については、虫損や劣化、断簡のためまだまだ整理の半分にも至っていない。したがって、ここに掲載された目録は中間報告であることを、お断りしておきたい。全体の目録については、整理が済み次第、本編とは別にまとめる予定である。

一　カード化された内容については、「桐」のデータベースに入力し、保管されている。一　文書のカード化は県立博物館においておこない、久米島総合調査の委嘱調査員とともに、以下の各氏の協力を得ておこなった。

池宮正治（琉球大学教授、久米島総合調査委嘱調査員）
豊見山和行（琉球大学助教授、久米島総合調査委嘱調査員）
玉木順彦（北谷町公文書館）
栄野川敦（琉球大学附属図書館）
真栄平房昭（神戸女学院大学助教授）
島尻克美（那覇市文化局歴史資料室）
嘉手苅千鶴子（沖縄国際大学教授）
粟国恭子（浦添市立図書館沖縄学研究室）
糸数兼治（沖縄県立博物館館長）
大城将保（沖縄県立博物館学芸課長）
萩尾俊章（沖縄県立博物館学芸員）

一　資料目録の編集は萩尾俊章が担当した。情報カードの整理・入力作業にあたっては、新城さやか・宮平真由美（県立博物館臨時職員）の補助を得た。

久米島総合調査報告書・論文編・資料編

発　行　1995年3月30日
編集発行　沖縄県立博物館
〒903 那覇市首里大中町1-1
TEL (098) 884-2243
FAX (098) 886-4353
印　刷　文進印刷株式会社